

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十七冊

三条黒島遺跡
川西北七条Ⅰ遺跡

1997. 9

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第27冊

三条黒島遺跡・川西北七条 I 遺跡

正 誤 表

頁

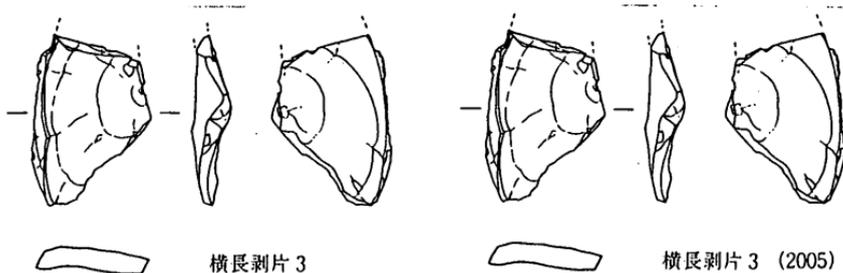
行

誤

正

77～78

第55図



100

1

旧出土石器一覧表

出土旧石器一覧表

126

21

頭著な

頭著な

128

1

出上している。

出土している。

135

19

級密な

緻密な

163

26

第44段階

第4段階

四国横断自動車道建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告

第二十七冊

三条黒島遺跡
川西北七条Ⅰ遺跡

1997. 9

香 川 県 教 育 委 員 会
財団法人香川県埋蔵文化財調査センター
日 本 道 路 公 団



三条黒島遺跡 旧石器接合資料

序 文

四国横断自動車道は、高松～善通寺間が平成4年5月に開通しました。これにより、瀬戸大橋と香川県的高速道路が直結することになり、香川県は本格的な高速交通の時代を迎えております。

香川県教育委員会では、四国横断自動車道（高松～善通寺間）の建設に伴い、昭和63年度から財団法人香川県埋蔵文化財調査センターに委託して、用地内の埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。3年6ヶ月の期間を要して28遺跡の発掘調査を実施し、平成3年9月に発掘調査を終了いたしました。また、平成3年度からは同センターにおきまして発掘調査の出土文化財の整理業務を順次行っているところであり、平成4年度からは調査報告書の刊行をいたしております。

このたび、「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第二十七冊」として刊行いたしますのは、丸亀市三条町に所在する三条黒島遺跡と同市川西町北に所在する川西北・七条Ⅰ遺跡についてであります。三条黒島遺跡の調査では、旧石器時代の石器製作跡をはじめとして、弥生時代から中世にいたるまでの用水路や、江戸時代から明治時代にかけての庄屋敷跡などが検出されております。また、川西北・七条Ⅰ遺跡の調査では、縄文時代から中世にかけての河川跡などが検出されております。

本報告書が、本県の歴史研究の資料として広く活用されるとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土文化財の整理・報告にいたるまでの間、日本道路公団及び関係機関並びに地元関係各位には多大の御協力と御指導をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともよろしく御支援賜りますようお願い申し上げます。

平成9年9月

香川県教育委員会

教育長 金 森 越 哉

例 言

1. 本報告書は、四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第27冊で、香川県丸亀市三条町961-1番地ほかで実施した三条黒島遺跡（さんじょうくるしまいせき）と同川西町北2027番地ほかで実施した川西北七条I遺跡（かわにしきたしちじょういちいせき）の発掘調査報告を収録した。
2. 発掘調査は、日本道路公団から委託された香川県教育委員会が調査主体となり、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。
3. 発掘調査は、三条黒島遺跡が昭和63年6月15日から同年11月26日まで、川西北七条I遺跡が昭和63年12月13日から平成元年3月27日までの期間で実施した。上記二遺跡の発掘調査の担当者は以下のとおりである。

大谷伸一、森下英治

4. 調査の実施にあたっては、下記の関係諸機関の協力を得た。記して謝意を表したい。

（順不同、敬称略）

香川県土木部横断道対策室、善通寺土木事務所横断道対策室、丸亀市土木部高速自動車道担当、四国横断自動車道建設丸亀市郡家地区対策協議会、各地元自治会、丸亀市教育委員会、今治市教育委員会、羽曳野市教育委員会、三田市教育委員会、京都文化博物館、香川県自然科学館

5. 本報告書の作成は、香川県教育委員会の指導のもとに財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが実施した。
6. 本報告書の執筆、編集は森下英治が担当した。
7. 本報告書で用いる方位の北は、国土座標第IV系の北であり、標高はT.P.を基準としている。また、遺構は下記の略号により表示している。

S B 掘立柱建物遺構 S D 溝状遺構 S K 土坑 S A 柵列・礎石列遺構
S P 柱穴 S X 不明遺構

8. 遺物実測図のうち、土器の断面表記はその種別に基づき、下記のとおり統一した。

白抜き・・弥生土器、土師器、土師質土器、磁器 黒塗り・・須恵器・瓦質土器 網目・・陶器

9. 三条黒島遺跡の遺物番号は旧石器とそれ以外のものを区別し、また重複を避けるため下記のように振り分けた。

1～ 200……出土位置が明確な旧石器（取り上げ番号を踏襲したために、一部欠番がある）

201～ 591……旧石器以外の遺物

1001～1007……本体工事に伴う立会調査で出土した旧石器

2001～2008……出土位置が推定できる旧石器（石器ブロック認識前に取り上げた石器）

3001・3002……石器ブロック以外から出土した旧石器

10. 本遺跡の報告にあたっては、下記の機関等に鑑定・分析などを依頼・委託し、その成果を第5章に掲載した。

土壌中火山灰抽出分析 (株) 京都フィッシュントラック

石器石材蛍光X線分析 (有) 遺物分析研究所

出土牛馬骨鑑定 鹿児島大学医学部 西中川 駿・日高祥信

花粉分析及び種子等同定 (株) パリノ・サーヴェイ

11. 脚注は、第5章を除きすべて巻末にまとめた。

12. 発掘調査および報告書の作成にあたって、下記の方々のご教示を得た。記して感謝を表したい。(順不同、敬称略)

稲田孝司, 氏家敏之, 絹川一徳, 朽津信明, 久留嶋通義, 笹川龍一, 佐藤良二, 鈴木忠司, 竹広文明, 多田 仁, 田中賢人, 辻葩 学, 中井秀樹, 直井武久, 原 芳伸, 藤村啓修, 藤澤良祐, 藤野次史, 松沢亜生, 松藤和人, 宮内忠敬, 山口卓也, 山田隆一, 山下秀樹, 藁科哲男

本文目次

巻頭図版

序 文

例 言

第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査と整理の体制と経過	5
第2章 遺跡の立地と環境	7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	11
第3章 三条黒島遺跡の調査	23
第1節 調査の概要と調査の方法	23
第2節 基本土層	26
第3節 旧石器時代	30
第4節 弥生時代～古墳時代	107
第5節 古代～中世	120
第6節 近世（ⅠⅡ区）	130
第7節 近世（Ⅳ区）	137
第4章 川西北七条Ⅰ遺跡の調査	203
第1節 調査の概要と調査の方法	203
第2節 基本土層	209
第3節 縄文時代以前	212
第4節 弥生時代以降	234
第5章 自然科学的調査	266
第1節 土壌中火山灰抽出分析	266
第2節 四国横断自動車道関連遺跡出土のサヌカイト製遺物の石材産地分析	281
第3節 香川県川西北七条Ⅰ遺跡出土の牛骨及び馬骨	292
第4節 川西北・七条Ⅰ遺跡周辺の古植生	301
第6章 考 察	313

挿 図 目 次

第1図	調査地位置図	1	第27図	接合資料5分布図	49
第2図	四国横断自動車道埋蔵文化財 包蔵地(高松～善通寺)	2	第28図	接合資料6～10分布図	49
第3図	香川県地質概要図	8	第29図	石材別器種組成比較グラフ	51
第4図	郡家～龍川地区柱状土層図	10	第30図	石器実測図(1)	53
第5図	丸亀平野の旧石器時代遺跡分布図	12	第31図	石器実測図(2)	54
第6図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	18	第32図	石器実測図(3)	56
第7図	三条黒島遺跡位置図	24	第33図	完形剥片長幅グラフ	57
第8図	調査地区割図	25	第34図	剥片剥離角分布グラフ	58
第9図	全体遺構分布図	27	第35図	刃縁角分布グラフ(底面保有剥片)	58
第10図	土層概要図	29	第36図	刃縁角分布グラフ (底面をもたない剥片)	58
第11図	旧石器調査トレンチ設定図	31	第37図	石理角分布グラフ(判明分のみ)	59
第12図	石器ブロック内土層断面取得位置図	32	第38図	剥片剥離角度数分布グラフ	59
第13図	石器ブロック内土層断面図	33	第39図	背面剥離方向分類図	60
第14図	石器ブロック周辺トレンチ位置及び 土層形成概要図	35	第40図	完形剥片の打面幅/最大幅比 分布グラフ	61
第15図	Aトレンチ断面図	37	第41図	剥片1類の石理角分布グラフ	62
第16図	B・Cトレンチ断面図	38	第42図	剥片2類の石理角分布グラフ	62
第17図	石器全点及び礫石類分布図	39	第43図	石器実測図(4)－剥片1類－	63
第18図	礫2・3出土状況実測図	40	第44図	石器実測図(5)－剥片1類－	64
第19図	石器垂直分布グラフ	41	第45図	石器実測図(6)－剥片2類－	65
第20図	出土石器重量別比率グラフ	42	第46図	石器実測図(7)－剥片2類－	66
第21図	器種別石器分布図	43	第47図	石器実測図(8)－剥片4類－	67
第22図	重量別分布及び接合関係図	45	第48図	石器実測図(9)－剥片5類－	68
第23図	接合資料1分布図	47	第49図	石器実測図(10)－剥片3・5類ほか－	69
第24図	接合資料2分布図	47	第50図	接合資料1+2実測図	71
第25図	接合資料3分布図	48	第51図	接合資料1+2剥離面説明図	72
第26図	接合資料4分布図	48	第52図	接合資料1(素材剥片)剥離概念図	73

第53図	接合資料1における打点の移動	75	第83図	I II区水路変遷図	119
第54図	接合資料1剥片剥離作業工程図	76	第84図	SK-01出土遺物実測図	120
第55図	接合資料1実測図	77	第85図	SB-01及び周辺遺構実測図	121
第56図	接合資料2実測図	82	第86図	SD-11～13実測図	123
第57図	接合資料2における打点の移動	83	第87図	SD-14土層断面図	124
第58図	接合資料2剥片剥離作業工程図	83	第88図	SD-14平面図	124
第59図	接合資料3実測図	85	第89図	SD-14出土遺物実測図	125
第60図	接合資料3における打点の移動	87	第90図	3A層出土遺物実測図	127
第61図	接合資料3剥片剥離作業工程図	87	第91図	3B層出土遺物実測図	128
第62図	接合資料4実測図	89	第92図	3C層出土遺物実測図	129
第63図	接合資料4における打点の移動	90	第93図	包含層出土石器実測図	129
第64図	接合資料4剥片剥離作業工程図	90	第94図	SK-05出土遺物実測図	130
第65図	接合資料5実測図	93	第95図	I II区近世遺構平面図	131
第66図	接合資料5剥片剥離作業工程図	94	第96図	SK-05・07・08実測図	131
第67図	接合資料5における打点の移動	94	第97図	SD-15出土遺物実測図(1)	132
第68図	接合資料6実測図	95	第98図	SD-15出土遺物実測図(2)	133
第69図	接合資料6における打点の移動	96	第99図	SD-15出土遺物実測図(3)	134
第70図	接合資料7実測図	97	第100図	SD-15出土遺物実測図(4)	135
第71図	接合資料8実測図	98	第101図	1・2層出土遺物実測図	136
第72図	接合資料9実測図	99	第102図	金比羅一山規則書	138
第73図	SD-01出土遺物実測図(1)	107	第103図	智証大師八百五十年忌御法会之記事	139
第74図	SD-01～SD-08平面図	108	第104図	久留島家家系図	140
第75図	a～cライン土層断面図	109	第105図	天保5年打ちこわし諸役人固一件	142
第76図	d・eライン土層断面図	111	第106図	久留島家関係碑文分布図	143
第77図	f～iライン土層断面図	112	第107図	日本博覧図	144
第78図	SD-01出土遺物実測図(2)	112	第108図	IV区土層断面図	148
第79図	SD-04出土遺物実測図	114	第109図	第1・2段階所属遺構平面図	149
第80図	SD-09・10平面図	115	第110図	第1段階遺構断面図	151
第81図	SD-09・10断面図	116	第111図	第1段階所属遺構出土遺物実測図	153
第82図	SD-09・10出土遺物実測図	117	第112図	第2段階所属遺構出土遺物実測図(1)	154

第113図	第2段階所属遺構出土遺物実測図(2)	156	第143図	類型別自然面付着度比較	223
第114図	SX-07実測図	158	第144図	Ⅲb類の厚／幅比	224
第115図	SA-01・SD-19実測図	159	第145図	南群出土石器実測図(1)	226
第116図	第3段階所属遺構出土遺物実測図	160	第146図	南群出土石器実測図(2)	227
第117図	第4段階所属遺構出土遺物実測図(1)	161	第147図	出土位置不明石器実測図	229
第118図	第4段階所属遺構出土遺物実測図(2)	162	第148図	接合資料実測図	230
第119図	第4段階所属遺構平面図	165	第149図	接合資料59剥離痕説明図	231
第120図	第5段階所属遺構出土遺物実測図(1)	167	第150図	SK-02実測図	234
第121図	第5段階所属遺構出土遺物実測図(2)	168	第151図	SK-02出土遺物実測図	234
第122図	第5段階所属遺構出土遺物実測図(3)	169	第152図	SK-03～07実測図	235
第123図	Ⅳ区出土鉄器実測図	170	第153図	SD-01実測図	236
第124図	Ⅳ区検出遺構と絵図の照合	172	第154図	SD-02平面図	237
第125図	三条黒島遺跡遺構変遷図	175	第155図	SD-02断面図	238
第126図	調査地位置図(1/5,000)	204	第156図	SD-02出土遺物実測図	239
第127図	調査区割図	205	第157図	SD-03北半出土牛馬骨分布図	240
第128図	全体遺構分布図	207	第158図	SD-03南半実測図	241
第129図	土層断面実測図(1)	210	第159図	SD-03出土遺物実測図	241
第130図	土層断面実測図(2)	211	第160図	SD-04・05断面図	242
第131図	石器出土分布図	212	第161図	SD-04・05出土遺物実測図	243
第132図	北群石器出土状況	213	第162図	SD-07断面図	243
第133図	南群石器出土状況	214	第163図	SR-01断面図(1)	245
第134図	石器分布域土層断面図	215	第164図	SR-01断面図(2)	247
第135図	北群出土石器実測図(1)	217	第165図	SR-01(2区部分断面図)	249
第136図	北群出土石器実測図(2)	219	第166図	SR-01遺物出土状況	250
第137図	北群出土石器実測図(3)	220	第167図	SR-01出土遺物実測図	251
第138図	北群出土石器実測図(4)	221	第168図	SR-01・SX-01出土遺物実測図	252
第139図	北群出土石器実測図(5)	222	第169図	SR-01出土木製品実測図(1)	253
第140図	剥片剥離角分布図	222	第170図	SR-01出土木製品実測図(2)	254
第141図	剥片長幅比グラフ	222	第171図	SR-01出土木製品実測図(3)	255
第142図	類型別背面構成比較	223	第172図	包含層出土遺物実測図	256

第173図	川西北七条 I 遺跡遺構変遷図	259	第195図	西村遺跡出土遺物および出土位置図	335
第174図	三条黒島遺跡A地点試料採取地点 土層模式柱状図および分析結果	270			
第175図	三条黒島遺跡B地点試料採取地点 土層模式柱状図および分析結果	272			
第176図	三条黒島遺跡C地点試料採取地点 土層模式柱状図および分析結果	274			
第177図	三条番ノ原遺跡D地点試料採取 地点土層模式柱状図および分析結果	276			
第178図	三条黒島遺跡検鏡用試料顕微鏡写真	278			
第179図	土壤中火山灰(火山ガラス) 抽出分析処理順序	279			
第180図	サヌカイト及びサヌカイト様 岩石の原産地	286			
第181図	写真図版 I ウシ	299			
第182図	写真図版 II ウマ	300			
第183図	試料採取地点の土層断面	302			
第184図	主要花粉化石群集	305			
第185図	花粉化石図版	309			
第186図	種実遺体図版	310			
第187図	三条黒島遺跡における石器 主要分布域と外榔域出土の石器	315			
第188図	他遺跡の石器ブロック	316			
第189図	石器組成グラフ	319			
第190図	与島西方遺跡石器組成	320			
第191図	五色台産サヌカイトの石材 消費模式図	324			
第192図	石材消費各階梯の具体相	325			
第193図	剥片剥離技術類型2の類例	329			
第194図	中間東井坪遺跡・西村遺跡出土遺物	334			

表 目 次

第1表	四国横断自動車道建設に伴う 発掘調査の概要(1) ……………	3	第26表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(10) ……	186
第2表	四国横断自動車道建設に伴う 発掘調査の概要(2) ……………	4	第27表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(11) ……	187
第3表	発掘調査工程表 ……………	5	第28表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(12) ……	188
第4表	整理作業工程表 ……………	6	第29表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(13) ……	189
第5表	丸亀平野丘陵性旧石器時代遺跡一覧表	14	第30表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(14) ……	190
第6表	丸亀平野低地性旧石器時代遺跡一覧表	16	第31表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(15) ……	191
第7表	周辺遺跡一覧表 ……………	19	第32表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(16) ……	192
第8表	三条黒島遺跡遺構番号新旧対照表 ……	26	第33表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(17) ……	193
第9表	礫石類一覧表 ……………	40	第34表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(18) ……	194
第10表	石器組成一覧表 ……………	50	第35表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(19) ……	195
第11表	石材別石器組成一覧表 ……………	51	第36表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(20) ……	196
第12表	剥片総括表 ……………	60	第37表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(21) ……	197
第13表	接合資料数量表 (接合資料1と接合資料2の接合を除く)	70	第38表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(22) ……	198
第14表	出土旧石器一覧表(1) ……………	101	第39表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(23) ……	199
第15表	出土旧石器一覧表(2) ……………	103	第40表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(24) ……	200
第16表	出土旧石器一覧表(3) ……………	105	第41表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(25) ……	201
第17表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(1) ……	177	第42表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(26) ……	202
第18表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(2) ……	178	第43表	川西北七条 I 遺跡遺構番号新旧対照表	203
第19表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(3) ……	179	第44表	川西北七条 I 遺跡出土石器一覧表 ……	233
第20表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(4) ……	180	第45表	川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表(1)	261
第21表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(5) ……	181	第46表	川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表(2)	262
第22表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(6) ……	182	第47表	川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表(3)	263
第23表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(7) ……	183	第48表	川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表(4)	264
第24表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(8) ……	184	第49表	川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表(5)	265
第25表	三条黒島遺跡出土遺物観察表(9) ……	185	第50表	土壌中火山灰抽出分析試料 採取地点一覧表 ……………	266
			第51表	三条黒島遺跡A地点火山ガラス 濃縮層準とその特徴 ……………	271

第52表	三条黒島遺跡B地点火山ガラス 濃縮層準とその特徴 ……	273
第53表	三条黒島遺跡C地点火山ガラス 濃縮層準とその特徴 ……	275
第54表	三条番ノ原遺跡D地点火山ガラス 濃縮層準とその特徴 ……	277
第55表	各サヌカイトの原産地における 原石群の元素比の平均値と標準 偏差値(1) ……	287
第56表	各サヌカイトの原産地における 原石群の元素比の平均値と標準 偏差値(2) ……	288
第57表	岩屋原産地からのサヌカイト原石 66個の分類結果 ……	289
第58表	和泉・岸和田原産地からのサヌ カイト原石72個の分類結果 ……	289
第59表	和歌山市梅原原産地からのサヌ カイト原石21個の分類結果 ……	289
第60表	四国横断自動車道関連遺跡出土 サヌカイト製遺物の元素比分析結果 ……	290
第61表	四国横断自動車道関連遺跡出土 サヌカイト製遺物の原産地推定結果	291
第62表	川西北七条 I 遺跡出土牛骨の計測値 ……	297
第63表	川西北七条 I 遺跡出土馬骨の計測値 ……	298
第64表	花粉分析試料の一覧 ……	301
第65表	種実遺体同定結果 ……	303
第66表	花粉分析結果 ……	304
第67表	石器組成の比較 ……	318

図 版 目 次

(三条黒島遺跡)

- | | | |
|------|---------------------------|----------------------------|
| 図版 1 | 調査前全景 (西より) | 角錐状石器 (103) |
| | 調査地遠景 (東より) | 角錐状石器・有加工痕剥片 |
| 図版 2 | I II区完掘状況 | 図版15 石核 (153) |
| | 旧石器ブロック完掘状況 | 石核 (1001) |
| 図版 3 | 旧石器ブロック調査状況 (西より) | 図版16 接合資料1+接合資料2の接合状態 |
| | 旧石器ブロック検出箇所土層断面 | 図版17 接合資料1接合状態 |
| 図版 4 | 石器出土状況 (6層) | 図版18 接合資料1第1段階 |
| | 石器出土状況 (7層) | 図版19 接合資料1第1段階削器 (112) 剥取 |
| 図版 5 | 角錐状石器出土状況 | 図版20 接合資料1第2段階 |
| | 石核等出土状況 | 横長剥片(2004)剥取 |
| | 削器出土状況 | 図版21 接合資料1第2段階打面調整 |
| 図版 6 | I II区SD-01・03・04・05 (北より) | (14+99・85) |
| | SD-01断面 (南より) | 図版22 接合資料1第2段階 |
| 図版 7 | SD-01・SD-02分岐部分 | 横長剥片 |
| | SD-01・02 (東より) | (2003+157・2005・1007+100)剥取 |
| 図版 8 | III区SD-09・10 (東より) | 図版23 接合資料1打面調整(54)・石核(168) |
| | I II区中世遺構と礫層面 (南より) | 剥片 (86+150) |
| 図版 9 | I II区SB-01 (西より) | 有加工痕剥片(1002) |
| | I II区SK-02 (西より) | 図版24 接合資料2接合状態 |
| 図版10 | I II区SD-11~13 (北より) | 図版25 接合資料3接合状態 |
| | I II区SK-06~08 (西より) | 図版26 接合資料3構成剥片 |
| 図版11 | IV区第1~第3段階遺構検出状況 | 図版27 接合資料4接合状態 |
| 図版12 | IV区遺構検出状況 | 図版28 接合資料5接合状態 |
| | SX-07 (西東より) | 接合資料7接合状態 |
| | SD-19 (東より) | 図版29 接合資料6接合状態 |
| 図版13 | 出土旧石器 (全点) | 図版30 接合資料8接合状態 |
| | 主要製品 | 図版31 弥生~古墳時代溝出土遺物 |
| 図版14 | 角錐状石器 (156) | 図版32 I II区SK-01出土遺物 |

- 図版33 IV区SD-14出土遺物 1区③SR-01流路A(東より)
- 図版34 I II区SD-15出土遺物 図版54 1区②SX-01(北より)
- 図版35 IV区第1・2・3段階陶磁器 1区③SR-01杭材出土状況
- 図版36 IV区第1・2・3段階陶磁器 図版55 SR-01出土杭材ほぞ穴部分
- 図版37 IV区第4・5段階陶磁器 SR-01出土棒材先端部分
- 図版38 IV区第4・5段階陶磁器 図版56 北群出土石器(1)
- 図版39 IV区第4・5段階陶磁器 図版57 北群出土石器(2)
- 図版40 IV区第4・5段階陶磁器 図版58 北群出土石器(3)
- 図版41 IV区第4・5段階陶磁器 図版59 北群出土石器(4)
- 図版42 IV区出土鉄器 図版60 北群出土石器(5)
- (川西北七条 I 遺跡)** 図版61 北群出土石器(6)
- 図版43 調査地空中写真 図版62 南群出土石器(1)
- 図版44 調査地遠景(西より) 図版63 南群出土石器(2)
- 2区①全景 図版64 南群出土石器(3)
- 図版45 1区②全景 図版65 その他の石器
- 3区全景 図版66 南群出土石器(接合資料)
- 図版46 北群石器出土状況(北より) 図版67 SD-02出土遺物(1)
- 北群石器出土箇所土層断面 図版68 SD-02出土遺物(2)
- 図版47 北群石核出土状況 包含層出土遺物
- 南群石器出土箇所土層断面 図版69 SD-03出土遺物(1)
- 図版48 2区②SR-01・SD-01合流部(南より) 図版70 SD-03出土遺物(2)
- 2区②SD-01馬頭蓋骨出土状況(北より) 図版71 SD-04・05出土遺物
- 図版49 2区②SD-01土層断面 図版72 SR-01出土遺物(1)
- 2区①SD-02土層断面 図版73 SR-01出土遺物(2)
- 図版50 1区①SR-01完掘状況(東より) 図版74 SR-01出土遺物(3)
- SD-01杭断面 SX-01出土遺物
- 図版51 3区SD-04・05(南より) 図版75 SR-01出土遺物(4)
- 2区②SD-03(東より) 図版76 SR-01出土遺物(5)
- 図版52 SD-03獣骨出土状況 図版77 SR-01出土遺物(6)
- 図版53 1区③SR-01完掘状況(北より) 図版78 SR-01出土遺物(7)

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

四国横断自動車道高松～善通寺間の建設は、同善通寺～豊浜間に引き続き、昭和57年1月8日に整備計画が決定され、昭和59年11月30日に建設大臣から日本道路公団総裁に対して施工命令が下された。

香川県教育委員会では、この間路線内の埋蔵文化財包蔵地の確認を目的に分布調査事業を実施し、これをもとに調査対象面積を39万㎡余りと判断した。また、路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の取り扱いについては、日本道路公団と文化庁の協議により基本的には記録保存で対応することが決定した。

香川県教育委員会では、これを受けて香川県の担当課である土木部横断道対策室及び日本道路公団高松建設局高松工事事務所と昭和62年度から調査体制等について協議を開始した。協議の結果、昭和63年度当初から2ヶ年の予定で本調査を実施すること、整理報告は発掘調査の終了後に実施すること等が決定した。これを受けて県教育委員会では調査体制の充実を図ることを目的に、昭和62年11月に財団法人香川県埋蔵文化財調査センターを設置するとともに、専門職員の増員等の措置を実施した。また、これと並行して、路線内の埋蔵文化財包蔵地の具体的な内容を把握するため、日本道路公団高松建設局と協議の上、予備調査を実施することとなり、昭和63年3月に県教育委員会が用地買収の進んでいる丸亀市郡家地区を対象として実施した。

予備調査の結果、郡家地区で集落跡を中心とする6遺跡の内容を把握し、同地区の本調査面積を85,150㎡に確定した。

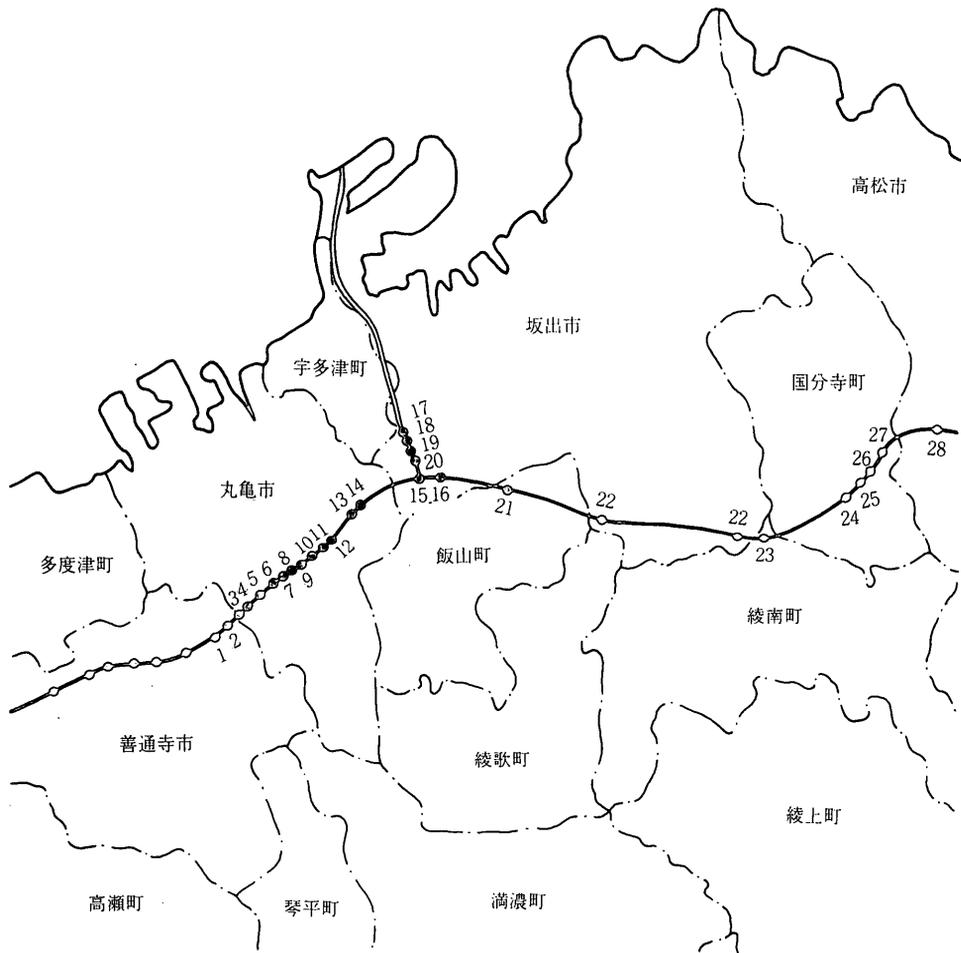
昭和63年度からの本調査は、香川県教育委員会が日本道路公団高松建設局から委託を受け、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当として実施した。昭和63



第1図 調査地位置図

年4月18日から三条番ノ原遺跡，郡家原遺跡，郡家一里屋遺跡の調査を，6月15日から三条黒島遺跡ほか2遺跡の調査を実施した。今回報告する三条黒島遺跡は，郡家地区6遺跡の西辺部に位置し，調査対象面積は7,677㎡である。また，川西北七条I遺跡は昭和63年11月に行われた川西地区予備調査の結果に基づき，本調査が確定した4,034㎡について12月13日から調査を実施した。発掘調査は，両遺跡とも掘削工事を別途発注する工事請負方式で実施した。

なお，三条黒島遺跡の調査対象地の一部に，絵図等の文献史料との対比が可能な江戸時代から明治末期にかけての庄屋敷跡が含まれていた。調査にあたっては，その歴史的意義と，埋蔵文化財としての意義を勘案し，屋敷に伴う遺構の配置およびその変遷を明らかにすることを主たる目的として，必要な範囲内で実施した。



第2図 四国横断自動車道埋蔵文化財包蔵地 (高松～善通寺)

No.	遺跡名	所在地	面積(m ²)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	調査報告書
1	龍川五条遺跡	普通寺市原田町	12,300 10,200	元.6.26~2.3.31 2.4.9~2.12.5	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・弥生時代墓・自然河川	弥生土器・土師器・須恵器・石器・木器	I 第26冊 (1996) II 未刊
2	龍川四条遺跡	普通寺市原田町 木徳町	20,200 1,700 300	元.7.1~2.3.31 2.5.28~2.10.24 3.4.4~3.6.18	古代掘立柱建物跡・墓・溝状遺構・自然河川	縄文土器・土師器・須恵器・和鏡・磁器・瓦器	第15冊 (1995)
3	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	12,041 1,300	63.4.18~元.2.10 元.4.10~2.3.31	竪穴住居跡・自然河川・溝状遺構	弥生土器ほか	第11冊 (1992)
4	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	7,677	63.6.15~63.11.26	旧石器ブロック・溝状遺構・建物跡	旧石器・弥生土器・陶磁器	第27冊 (1997)
5	郡家原遺跡	丸亀市三条町 郡家町	17,099 2,600	63.4.18~元.3.31	竪穴住居跡・掘立柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・緑釉陶器・斎串ほか	第13冊 (1993)
6	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	14,067 6,450	63.4.18~元.3.31 元.4.10~2.3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	有舌尖頭器・弥生土器・須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器	第12冊 (1993)
7	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	11,175	63.6.15~元.3.22	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	須恵器・斎串ほか	第17冊 (1995)
8	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	12,741	63.6.15~元.2.17	掘立柱建物跡・溝状遺構・火葬墓	ナイフ形石器・弥生土器・須恵器・近世陶磁器	第24冊 (1996)
9	川西北原遺跡	丸亀市川西町北	3,033	63.12.12~元.3.25	掘立柱建物跡・溝状遺構		未刊
10	川西北七条 I 遺跡	丸亀市川西町北	4,034	63.12.13~元.3.27	溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	第27冊 (1996)
11	川西北七条 II 遺跡	丸亀市川西町北	4,760	元.2.2~元.3.31	掘立柱建物跡・溝状遺構	土師器	第22冊 (1996)
12	川西北鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町北	12,208	元.4.10~元.8.11	中世掘立柱建物跡・溝・自然河川	土師器・須恵器・近世陶磁器	第22冊 (1996)
13	鍛野東二瓦隣遺跡	丸亀市鍛野町	3,366	63.12.13~元.3.27	掘立柱建物跡・溝状遺構・自然河川	土師器・須恵器	第20冊 (1996)
14	鍛野東分山崎南遺跡	丸亀市鍛野町	300	2.3.1~2.3.31		埴輪	未刊

第1表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(1)

No	遺跡名	所在地	面積(㎡)	調査期間	主たる遺構	主たる遺物	調査報告書
15	川津東山田遺跡	坂出市川津町 綾歌郡飯山町	28,100 500	2.8.2～3.3.20 3.9.2～3.9.4	弥生～中世掘立柱建物跡・堅穴住居跡・溝状遺構	弥生土器・土師器・須恵器・墨書土器	未刊
16	川津川西遺跡	坂出市川津町	5,400	2.5.10～3.1.17	古墳時代堅穴住居・溝状遺構・古代～中世掘立柱建物跡	縄文土器・土師器・須恵器・耳環・土馬・墨書土器	未刊
17	川津中塚遺跡	坂出市川津町	15,290 5,700	2.5.10～3.2.28 3.4.4～3.9.13	弥生堅穴住居跡・溝状遺構・土坑・古代～中世掘立柱建物跡・土坑墓	弥生土器・耳環・土師器・須恵器・鉄小刀	第14冊(1994)
18	川津下桶遺跡	坂出市川津町	9,650 200	2.5.10～3.1.31 3.4.4～3.9.13	弥生時代水田・井堰・溝状遺構・自然河川	縄文土器・石器・弥生土器・木製品	第21冊(1996)
19	川津二代取遺跡	坂出市川津町	10,400	2.5.10～3.3.8	弥生時代溝状遺構・自然河川・中世掘立柱建物跡・溝状遺構	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品	第16冊(1995)
20	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	35,160 1,350	2.4.12～3.3.28 3.7.18～3.9.27	弥生時代堅穴住居跡・建物跡 古墳時代堅穴住居跡・溝・水田	弥生土器・石器・土師器・須恵器・木製品	I 第26冊(1996) II 未刊
21	飯山一本松遺跡	綾歌郡飯山町	2,200	元.4.17～元.5.16		弥生土器・須恵器・土師器	未刊
22	府中地区	坂出市府中町	3,000	2.10.30～2.12.26	時代不詳 柱穴・土坑		未刊
23	綾南奥下池南窯跡	綾歌郡綾南町	2,900	元.5.22～元.7.24	須恵器窯跡	須恵器	第19冊(1996)
24	国分寺下日名代遺跡	綾歌郡国分寺町	11,350	元.8.19～2.2.28	弥生時代溝状遺構・水田跡・動物足跡	弥生土器・土師器・須恵器	未刊
25	国分寺楠井遺跡	綾歌郡国分寺町	4,400	2.4.11～2.10.2	円墳・中世土師器窯・掘立柱建物跡	須恵器・耳環・土師器・瓦質土器	第18冊(1995)
26	国分寺六ツ目古墳	綾歌郡国分寺町	900	元.9.1～元.12.28	前方跡円墳(主体部3墓)	古式土師器・近世陶磁器	未刊
27	国分寺六ツ目遺跡	綾歌郡国分寺町	5,600	元.10.1～2.2.28	中近世掘立柱建物跡	石器・弥生土器・近世陶磁器	未刊
28	中間西井坪遺跡	高松市中間町	11,600 8,680 1,270	元.8.19～2.3.25 2.5.10～3.3.25 3.4.5～3.7.18	旧石器ブロック・埴輪焼成土坑・古墳(3墓) 堅穴住居跡・掘立柱建物跡・溝・土坑	旧石器・弥生土器・埴輪・須恵器・土師器・陶棺	I 第25冊(1996) II 未刊 III 未刊

第2表 四国横断自動車道建設に伴う発掘調査の概要(2)

第2節 調査と整理の体制と経過

(1) 調査体制

昭和63年度の調査体制は下記のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長 廣瀬 和孝
 課長補佐 高木 尚
 副主幹 野網朝二郎 (6.1～)
 総務係長 宮谷昌之 (~5.31)
 係長 宮内憲生 (6.1～)
 埋蔵文化財係長 大山真充

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長 田丸 秀明
 次長 小原 克己
 総務 主査 加藤 正司
 主査 山地 修 (6.1～)
 主事 三宅 浩司
 参事 見勢 護
 調査 文化専門員 真鍋 昌宏
 技師 大谷 伸一
 技師 森下 英治

遺跡名	内容	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
三条黒島遺跡	調査準備 仮設関係	-----						-----			
	I II区	-----	-----	-----	-----	-----					
	旧石器				-----	-----					
	III区					-----	-----				
	IV区			-----		-----					
川西北七条 I 遺跡	予備調査						-----				
	I区①							-----	-----		
	I区②								-----	-----	
	I区③									-----	-----
	II区①							-----	-----		
	II区②								-----	-----	
	III区										-----

第3表 発掘調査工程表

(2) 整理体制

整理業務は、平成8年4月1日から同年12月31日までの期間で実施した。平成8年度の整理体制は下記のとおりである。

香川県教育委員会事務局文化行政課

課長 藤原 章夫
 課長補佐 高木 一義
 総務係長 山崎 隆
 主査 星加 宏明
 主事 打越 和美
 文化財副主幹 渡部 明夫
 文化財顧問 木下 晴一
 技師 塩崎 誠司

財団法人香川県埋蔵文化財調査センター

所長 大森 忠彦
 次長 小野 善範
 文化財顧問 廣瀬 常雄
 総務係長 前田 和也
 主査 西村 厚 (~6.1)
 主幹 西川 大
 主事 佐々木隆司 (6.1~)
 調査 文化財顧問 森下 英治

なお、整理作業には次の整理員、整理補助員、整理作業員が従事した。

整理員 戸川 昌代

整理補助員 小畑三千代, 若山 淳子

整理作業員 稲木 裕美, 佐々木博子, 嶋田 由紀, 森川 理恵

遺跡名	内容	4	5	6	7	8	9	10	11	12
三条黒島遺跡	接合・復元	-----								
	実測		-----							
	原稿執筆				-----	-----	-----			
	レイアウト					-----				
	トレース					-----				
	写真撮影				-----					
	編集							-----	-----	
川西北七条I遺跡	接合・復元						-----			
	実測							-----	-----	
	原稿執筆									-----
	レイアウト								-----	
	トレース									-----
	写真撮影							-----		
	編集									-----

第4表 整理作業工程表

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

三条黒島遺跡、川西北七条Ⅰ遺跡は行政区分上の香川県丸亀市に所在し、地理的区分の上では四国地方北東部の瀬戸内海に面した讃岐平野に立地する。讃岐平野は中央部の丸亀平野、東の高松平野、西の三豊平野に区分される。三条黒島遺跡は丸亀平野の中心部に位置しており、標高約21mの平坦地である。川西北七条Ⅰ遺跡は平野東部を北流する土器川西岸、標高19mの平坦地に位置している。調査前はいずれも水田として利用されていた。

丸亀平野を含む広義の讃岐平野は、讃岐山脈を源とし、瀬戸内海へ流入する河川によって形成された扇状地を主体とする平野である。ここでは、山地と平野に分けて地形・地質の概要を記す。

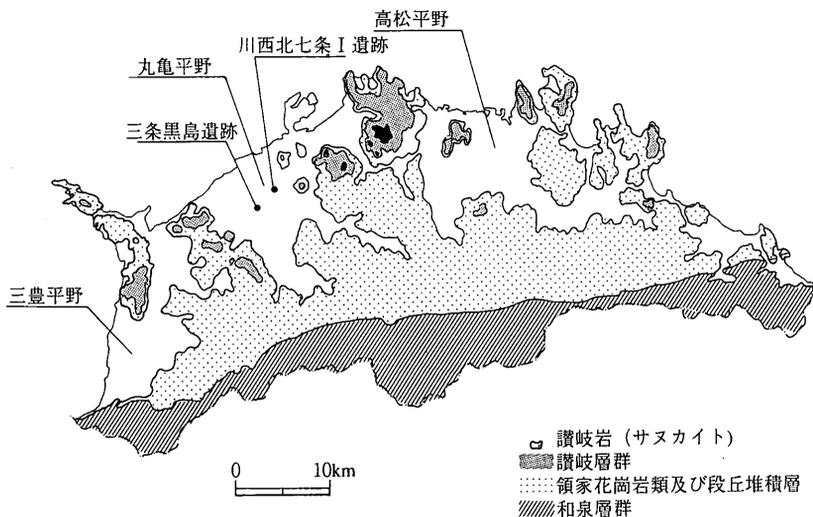
(1) 山地 (第3図)

四国の地質は東西に走行する中央構造線によって、北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯に区分される。香川県域は西南日本内帯に所属し、地帯区分上の領家帯として分類されている⁽¹⁾。

中央構造線の北に位置し徳島県との県境となる讃岐山脈は、標高1,000m前後の東西に長い山地帯である。地質的には中生代白亜紀に形成された領家花崗岩類を基盤とする。南側の中央構造線沿いには、領家花崗岩類を不整合に被覆する和泉層群が認められる。

また、讃岐平野中には台地状あるいは円錐状の独立低丘陵が群立する。これらは新生代新第三紀中新世の中期(1,400~1,100万年前)の火山活動によって形成された火山岩類であり、「讃岐層群」と総称されている。讃岐層群は著しく風化した領家花崗岩類の上部を不整合に覆っており、部分的には風化度の違いや削剥の痕跡が見られる。これによって、領家花崗岩の上部が風化・削剥した後に、讃岐層群や瀬戸内海湖成層が形成されたと考えられている⁽²⁾。

石器素材として使用されるサヌカイト(讃岐岩)は讃岐層群の一部で、県内においては五色台、金山、城山の3カ所において産出する。そのうち五色台はもっとも広範囲に分布



第3図 香川県地質概要図

しており、一連の山塊である蓮光寺山山頂付近などにも広がる⁽³⁾。サヌカイトを産出する地域の讃岐層群はいくつかの層に分離することが可能であるが、五色台におけるサヌカイトは最後の溶岩流によって形成されたとされている⁽⁴⁾。概ね標高400m以上の地域に分布する。ただし金山や城山においては、五色台ほどの明確な溶岩流の区分ができるものではなく、細かくみると複雑な様相を呈すとともに、山裾部の転石が多く認められる。

(2) 平野 (第3・4図)

讃岐平野は、愛媛県の道後平野や道前平野などとともに瀬戸内海へ流入する河川によって形成された扇状地を主体とする平野である。表層には黄色系粘土層や砂礫層の広がりが見とめられ、これらは完新世のもの更新世のものがある⁽⁵⁾。

平野を構成する地質は、領家花崗岩類の上面を覆う「第二瀬戸内累層群」、段丘堆積物、沖積層に区分される。第二瀬戸内累層群は鮮新世後期～更新世中期に堆積した砂礫層（扇状地成層）であり、香川県域では三豊層群と呼ばれている。この地層には絶滅種であるメタセコイアの花化石が含まれることを特徴とする。ボーリングデータによると、三豊層群は平野部の地下にもぐり、瀬戸内海の海底下にも広く分布することが知られている。

平野の周辺部には砂礫層からなる河成段丘層が形成されている。これらは高位、中位、低位の各段丘に区分されるが、関東平野の段丘形成年代に一致するかどうかの具体的な証拠はない。

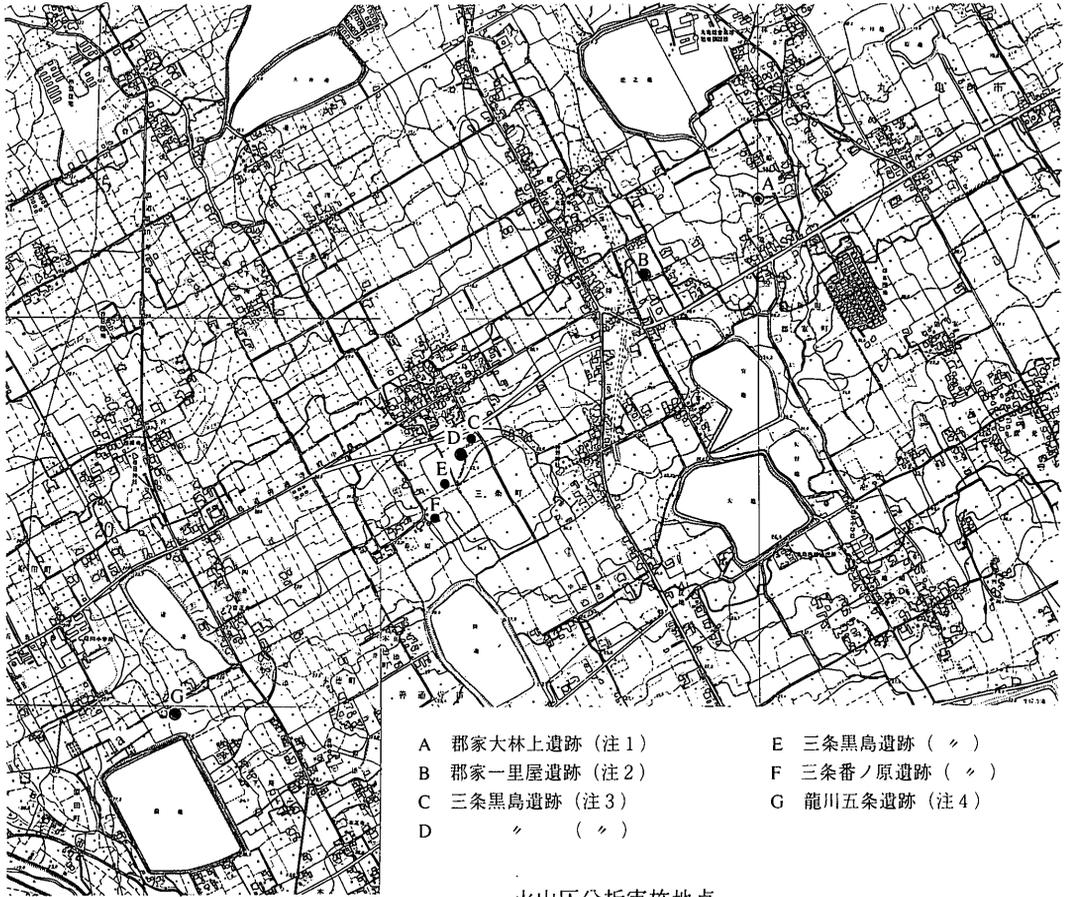
更新世末期から完新世にかけて、平野は盛んな扇状地堆積が行われた。今回報告する2遺跡をはじめとして、丸亀平野を横断するような調査が行われた四国横断自動車道に伴う発掘調査では、黄色系粘土層の下部に基底となる礫層が各所で確認された。この礫層は調査地によって礫の状況が異なることが多いが、礫層が確認される面は概ね現在の地形に応じて、高い箇所に分布している。同時に実施された火山灰分析の概要を第4図に示している。これによると、B地点とC地点との間で礫層の確認面に6m前後の大きな段差がある。段丘ともいえるこの落ち込みは、実際にはA地点周辺で再び礫層の上がりが見られ、またD地点以西においても、部分的に礫層の起伏が観察できることから、扇状地内の中州の痕跡と見られている⁽⁶⁾。礫層の上面は粘土やシルトの堆積層が覆っている。A・B・G地点では堆積層中にAT（始良Tn火山灰）の純層が検出されており、礫層の形成はBP22,000以前である。また、郡家大林上遺跡ではAT層の下部で検出された泥炭層からBP30,000の放射性炭素年代が測定されているので、それ以前にも遡る。この礫層を、基底礫層と仮称する。

基底礫層を覆う堆積層は部分的に黒色（褐色）系のバンドが確認される。層厚は10～30cmで、その部分にプラントオパールが多く含まれる傾向がある。B・G地点ではATを挟んで上下2層存在し、そのあり方が共通することから、同時期に形成された可能性があるが、堆積層をトレンチで確認した郡家大林上遺跡などでは層中に礫層や有機物層を含む旧流路が確認されており、黒色系バンドはそれら旧流路に個別に所属する可能性もある。

堆積層中にはK-Ah層を純層として確認できる箇所はなく、部分的な旧流路堆積層中にピーク層として確認できるにとどまっている。これはK-Ah降灰時期（BP6,300）までには、盛んな堆積作用がすでに終了し、それまでに堆積した粘土・シルト層を基本的には開析して、部分的で小規模な旧流路が走行していたことを示している。

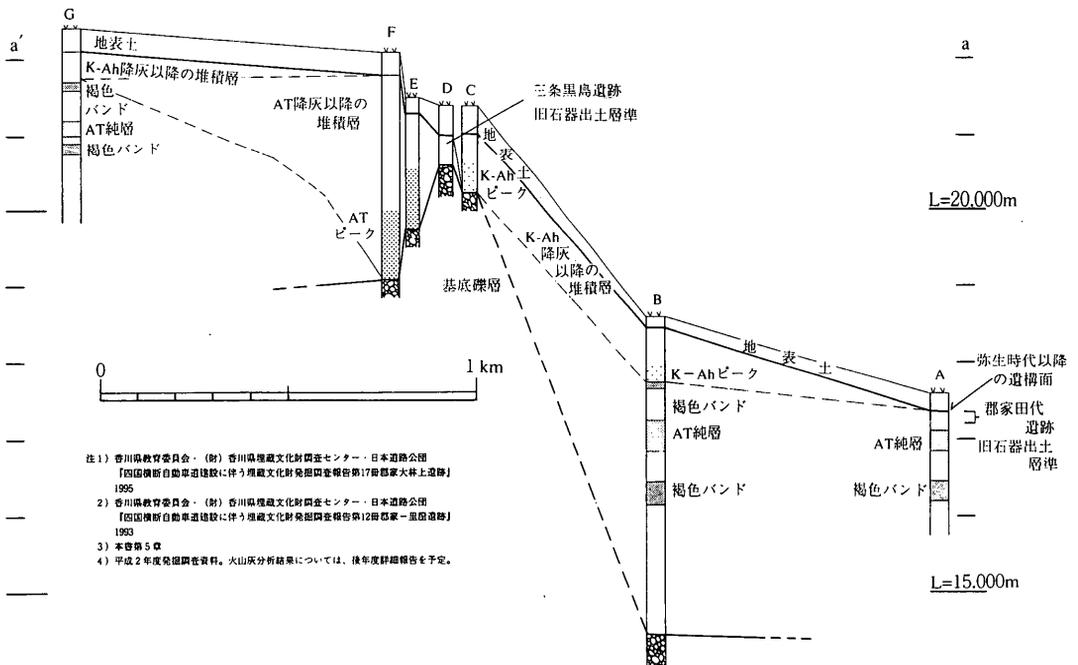
このように、更新世末期までに形成された基底礫層の上面を覆う堆積はBP22,000からBP6,300までに終了し、その段階での微高地には後世まで集落跡が展開し、低地部においては幾度も流路を変えながらも、基本的には広い意味の低地帯内を繰り返し開析して河川が走行する状況が、現在もなお継続しているものと考えられる。

三条黒島遺跡の西半部で確認した旧石器包含層は基底礫層上部を覆う薄いシルト質の堆積層であり、北に向かって傾斜堆積する。調査区北半は扇状地成礫層自体が傾斜しているために、後の開析の剥削を受けやすい箇所であった。このように、調査区西側の微高地と北側の低地という地形区分は、旧石器時代にすでに形成されており、その後弥生時代前期



- A 郡家大林上遺跡 (注1) E 三条黒鳥遺跡 (〃)
- B 郡家一里屋遺跡 (注2) F 三条番ノ原遺跡 (〃)
- C 三条黒鳥遺跡 (注3) G 龍川五条遺跡 (注4)
- D 〃 (〃)

火山灰分析実施地点



- 注1) 香川県教育委員会・(財)香川県歴史文化財調査センター・日本道路公団
「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第17号郡家大林上遺跡」
1995
- 2) 香川県教育委員会・(財)香川県歴史文化財調査センター・日本道路公団
「四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第12号郡家一里屋遺跡」
1993
- 3) 本書第5章
- 4) 平成2年度発掘調査資料。火山灰分析結果については、後年度詳細報告を予定。

第4図 郡家～龍川地区柱状土層図

以降において水路を設定する際にも、その地形を利用した掘削がなされている。

現在のように平坦化が完了するのは水路が埋没した奈良時代以降であり、地割りを伴った大規模な土地画整備がその背景として考えられる。第4図B地点など、奈良時代以降も平坦化はなされず更新世末期の低地地形を留めている箇所では現況微起伏が抽出される。

川西北七条I遺跡については、第4章で詳しく触れるが、土器川西岸の比較的等高線の変化が激しい地区に立地し、土地条件図では「氾濫平野」に分類されている。しかし、遺跡に近接する川西北鍛冶屋遺跡では、表土下30cmほどの黄色粘土層より旧石器が原位置を留めて出土しており、地形形成の環境は三条黒島遺跡周辺と変わるところはない。等高線の変化は平坦化の度合いを示しているものと思われる。

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器時代の遺跡 (第5図)

香川県内の旧石器時代の遺跡は、これまで主として島嶼部および丘陵地で確認されてきた。また、サヌカイト石材を産出する石材原産地遺跡は国分台遺跡をはじめとして、先の讃岐岩分布域に知られている。これに対して、平野部においては表面採集資料や2次堆積土層中に当該期の遺物が包含されるものがこれまで何ヶ所かで知られるのみであった。しかし、三条黒島遺跡を端緒として平野部の基盤層の形成はこれまで考えられてきた縄文時代後期ごろというものではなく、AT層を比較的浅い層位で確認できる古い形成時期を考える必要が出てきた。したがって、これまで断片的に知られていた単独出土資料についても、きわめて近い箇所に良好な旧石器時代遺跡が存在する可能性が高くなった。

丸亀平野内の遺跡分布は、平野中の小丘陵頂部を中心に分布する丘陵性のものと、平坦地において分布する低地性のものがある。島嶼部の諸遺跡については瀬戸大橋建設に伴う発掘調査報告において詳細が説明されている⁽⁷⁾ので、ここでは詳説しない。

a. 石材原産地周辺の遺跡

サヌカイト原産地は坂出市と国分寺町にまたがる五色台、坂出市と飯山町にまたがる城山、坂出市金山が知られている。サヌカイトの岩盤は五色台・城山では概ね標高400m付近に存在している。金山では標高280mの山頂付近に存在する。石材原産地のうち、岩盤



第5図 丸亀平野の旧石器時代遺跡分布図

が存在する箇所の周辺で多量の石器を伴う遺跡は、これまで五色台南側の現在陸上自衛隊演習場となっている国分台遺跡以外にはあまり知られていない。国分台遺跡では広範囲にわたってナイフ形石器、尖頭器、両面加工石器などが採取されており、大型の盤状剥片石核も多数分布する⁽⁸⁾。盤状素材獲得段階の資料を残す点で、平野部や島嶼部の石器群とは異なることが指摘されている⁽⁹⁾。

城山については山頂付近で若干の採集資料が知られているが、国分台と比較すると出土量は極めて少ない⁽¹⁰⁾。

金山も同様に五色台周辺ほどの多数の資料は知られていない。ただし金山周辺には多数の板状剥片の集積地が存在する。これらは明確な製品を伴うものではなく、時期決定が困難であるが、蛍光X線分析によると縄文・弥生時代の石器素材はこの金山の石材が使用されていることが多く⁽¹¹⁾、板状素材の集積は主として旧石器時代以後に形成された可能性が高い。

原産地の周辺には自然の転石が分布するとともに、旧石器時代の遺物散布が各所で見られる。これまでに紹介された遺跡は五色台の南麓の蓮光寺山遺跡、金山南麓の金山奥池遺跡がある。これらは、国分台遺跡とは立地的に異なっており、転石利用の可能性を含めて、今後検討されるべき遺跡である。

b. 平野部丘陵性の遺跡（第5表）

平野中に群立する低丘陵には、標高200m以下の小規模な独立丘陵が多くみられる。これらの山頂や尾根筋には旧石器遺跡が所在することが多い。出土石器の数量は島嶼部の各遺跡には及ばないが、平野内における立地の多様性を考える上で重要である。

国分寺平野を望む丘陵部には、兔子山・端岡山・蓮光寺山の各遺跡が立地する。このうち蓮光寺山遺跡は山頂部にサヌカイト原産地を控えており、原産地遺跡の性格が強い。ただし、山裾において数カ所の石器分布が知られており、これらは個別の遺跡を形成していた可能性がある。山裾では縦長剥片剥離技術関係資料が多く採集され、翼状剥片や翼状剥片石核が含まれるが、採集品の中にナイフ形石器は少ない。

兔子山遺跡は盆地南部の標高100mの丘陵頂部を中心に立地する遺跡で、鉄塔建設に伴って発掘調査が行われている。ナイフ形石器、角錐状石器、翼状剥片、横長剥片石核などが出土している。ナイフ形石器は国府型を基調とするが、形状の整わないものが多い。翼状剥片は大形のものが出土している。

綾川下流域に広がる綾北平野には、標高35mの丘陵尾根頂部に立地する雄山遺跡が知られる。分布調査や発掘調査によって瀬戸内技法関係資料の出土が確認されている。出土石器は国府型ナイフ形石器や翼状剥片が多数を占める。いわゆる国府期を主体とする石器群であろう。三稜尖頭器も確認されてる。

讃岐富士と称される飯野山から備讃瀬戸島嶼部に連なる円錐形丘陵の周辺には平野を望む尾根筋に旧石器の遺跡が散在する。このうち、田尾茶臼山遺跡5トレンチ、川津東山田Ⅱ遺跡、吉岡神社遺跡では細身で稜上加工を施す角錐状石器が出土している。これらには瀬戸内技法関係資料は伴わない。田尾茶臼山遺跡の5トレンチの北方230mに位置する3トレンチでは横長剥片素材の薄手のナイフ形石器が出土している。翼状剥片は長さ5cm未満の小形で、ほかの剥片も小形のものが多。

城山南麓の割古池遺跡では二側縁加工のナイフ形石器が出土している。

番号	遺跡名	所在地	標高(m)	立地	出土状況	内容	注
1	兎子山遺跡	国分寺町日名代	100	丘陵頂部	風化土壌中	ナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片石核・有舌尖頭器	12
2	端岡山遺跡	国分寺町端岡	88	丘陵頂部	表面採集	ナイフ形石器・翼状剥片・横長剥片石核	
3	蓮光寺山遺跡	国分寺町国分	35~60	丘陵斜面	表面採集	翼状剥片・横長剥片石核・縦長剥片・縦長剥片石核・両面加工石器	13
4	青海遺跡	坂出市青海	50	丘陵斜面	表面採集	尖頭器	
5	雄山遺跡	坂出市高屋	40	尾根頂部	風化土壌中	ナイフ形石器・翼状剥片	13
6	福ノ宮遺跡	坂出市西庄	50	丘陵斜面	表面採集	ナイフ形石器	
7	笠山遺跡	坂出市福江町	50	丘陵斜面	風化土壌中		
8	田尾茶臼山遺跡	坂出市八幡町	40	丘陵斜面	風化土壌中	ナイフ形石器・角錐状石器・翼状剥片・横長剥片石核	14
9	吉岡神社遺跡	丸亀市土器町	28	尾根頂部	風化土壌中	角錐状石器	15
10	川津東山田遺跡	坂出市川津町	50	丘陵斜面	風化土壌中	ナイフ形石器・角錐状石器	
11	飯野山西麓遺跡	丸亀市飯野町	100	丘陵斜面	表面採集	翼状剥片	16
12	割古池遺跡	飯山町東坂元	50	丘陵裾部	表面採集	ナイフ形石器	16

第5表 丸亀平野丘陵性旧石器時代遺跡一覧表

c. 平野部低地性の遺跡（第6表）

これまで、平野の低地部では旧石器時代を目的とした調査はほとんど行われていない。しかし、大規模調査やため池周辺の表面採集により、少なからず低地部の遺跡は知られていた。大規模調査においては、遺構面精査中や包含層中から出土するものが多く、これまで、二次堆積遺物として取り扱ったものが多い。これは、丸亀平野の黄色粘土層が縄文海進以降の沖積作用によって形成された土層との認識が定着していたためであり、したがって黄色粘土層以下の探索はさほど行われていなかった。それらの遺物を観察すると、必ずしも風化磨滅が進んでいるものばかりとは限らない。周辺にブロックが埋没している可能性が強いものも多い。ここでは、それらを総括し平野低地部から旧石器が出土・採集されている遺跡を概観する。

発掘調査が進む丸亀平野において確認された事例が多い。金倉川西岸の金蔵寺下所遺跡ではナイフ形石器2点と、削器に転用された翼状剥片石核2点が出土している。金倉川と土器川に挟まれた扇状地では、四国横断自動車道建設に伴う発掘調査が行われたほとんどの遺跡で旧石器が出土している。このうち三条番ノ原遺跡では縦長剥片剥離技術関係の一括資料が出土している。郡家田代遺跡では石器ブロック2箇所が検出され、国府型ナイフ形石器、翼状剥片など100点弱の石器が出土した。また、川西北鍛冶屋遺跡では接合資料を伴う散漫な石器ブロックが検出され、小形のナイフ形石器を含む10点ほどの石器が出土した。郡家田代遺跡に隣接する郡家大林上遺跡ではナイフ形石器、翼状剥片、石核が出土しており、一部は黄色粘土層中から出土していることから、周辺に石器ブロックが埋没している可能性が高い。その西に位置する郡家一里屋遺跡では有舌尖頭器が、またその西の郡家原遺跡では細身肉厚な両面加工の尖頭器が出土している。

以上は標高10m以上の地点から出土しているが、標高10m以下においても、散在的に遺物の出土が知られる。大東川岸の川津二代取遺跡では横長剥片を素材とする大形のナイフ形石器が出土している。またそれに近接する川津元結木遺跡では白色風化サヌカイト製横長剥片素材のナイフ形石器が出土している。また、標高5mの鎌田池の水際で尖頭器が採集されている。

綾川上流の羽床盆地では広範に下位・中位段丘面が遺存する。西村遺跡ではその下位段丘面に立地しており、中世などの遺構に混入してナイフ形石器・角錐状石器が出土している。

大東川沿いの段丘面に立地する大窪池遺跡では翼状剥片が採集されている。

以上は一部を除いて、弥生時代以降の遺構や上部の包含層中から出土しているものが多く、必ずしも十分な発掘資料ではないが、付近に石器ブロックが存在する可能性を示唆し、また丘陵部とは異なった立地で出土している点で重要である。

番号	遺跡名	所在地	標高(m)	出土状況	内 容	注
13	鎌田池遺跡	坂出市小山町	5	表採	尖頭器	
14	川津元結木遺跡	坂出市川津町	6	中世溝に混入	ナイフ形石器	17
15	川津二代取遺跡	坂出市川津町	9	弥生溝に混入	ナイフ形石器	18
16	川西北鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町	14	散漫ブロック2	ナイフ形石器・石核・接合資料	19
17	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	16	ブロック2	ナイフ形石器・翼状剥片・石核・接合資料	20
18	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	17	黄色粘土層ほか	ナイフ形石器・翼状剥片・石核	21
19	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	19	後世遺構混入	(有舌尖頭器)	22
20	郡家原遺跡	丸亀市郡家町	20	後世遺構混入	尖頭器・(有舌尖頭器)	23
21	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	21	ブロック1	角錐状石器・削器・石核・接合資料	
22	三条番ノ原遺跡	丸亀市三条町	22	土坑1	縦長剥片・縦長剥片石核・削器	24
23	大窪池遺跡	飯山町下法軍寺	42	表採	ナイフ形石器	16
24	西村遺跡	綾南町陶	40	後世遺構混入	ナイフ形石器・角錐状石器・翼状剥片	25
25	金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町	20	後世土層に混入	ナイフ形石器・翼状剥片石核・削器	26

第6表 丸亀平野低地性旧石器時代遺跡一覧表

丘陵部の遺跡は、主に標高が30~50mの丘陵尾根筋などに分布した。立地的には備讃瀬戸島嶼部の諸遺跡と変わるところはない。しかし、石器の出土量は、原産地に近い蓮光寺山遺跡などを除くと総じて少ない。これは眼下に広がる平野が保有する経済基盤に差があることに加えて、島嶼部は石材産地を間近に控え、かつ瀬戸内海東西水系の分水嶺に相当する地理的な要所であることに起因するものと思われる。

平野内の低地性の遺跡では、丸亀平野の標高15~22mの地点で石器ブロックが1~2箇所の小規模な遺跡が存在した。これらは現在発掘調査が行われた地区においてのみ分布が知られるが、元来かなり広範囲にこのような小規模遺跡が広がっているものと予測される。また、大束川流域には標高10m以下の遺跡が点在しており、現在の瀬戸内海面下においても低地性の遺跡が展開した可能性を示唆している。

(2) 縄文時代以降の遺跡 (第6図)

a. 縄文時代

丸亀平野においては、後期中葉以降の遺跡が主にみられる。善通寺市永井遺跡、旧練兵場遺跡群、丸亀市平池南遺跡で磨消縄文系の土器が出土している。永井は晩期前葉まで継続する。永井周辺には乾遺跡で自然河川が、また中村遺跡では大型の石棒が出土しており、晩期前葉以降でかなり広範囲に遺跡が広がっている。

晩期後半の凸帯文段階の遺跡は、島嶼部の海浜では大浦浜・ガンド浜が知られる。また、大東川下流域の下川津・川津下樋・川津元結木・川津川西、同河川上流域の行末、金倉川流域の龍川四条・平池南などの諸遺跡については、近隣に弥生時代前期集落が存在する点において、水稻農耕への傾斜が認められる。

b. 弥生時代

弥生時代前期段階の遺跡は、凸帯文期の遺跡と同様に河川流域に多いが、それ以外に台地や丘陵における集落の始まりがみられる。郡家田代遺跡や三条黒島遺跡などでは、溝を掘削して用水路を設置している。また、綾歌町次見遺跡は、前期の前半段階を主体とした遺跡である。これらは短命に終わる遺跡が多く、この時期の盛んな選地活動や田地の開墾を物語る。

前期中葉以降は河川流域を中心として展開し、ときに環濠をとまなう集落も形成される。中の池遺跡、五条遺跡は拠点的な集落と考えられ、近年の調査によってそれぞれの遺跡の周辺に小規模な集落が付随している様子が明らかになってきた。

中期段階の集落跡の様相は建築形態や立地の点で多様である。矢ノ塚遺跡、西碑殿遺跡では掘立柱建物を主体とする集落が確認されている。また、月信遺跡・北原遺跡・飯野山西麓遺跡などでは山塊中腹の平野に眺望がきく斜面地に立地する広義の高地性集落である。これらは中期後半を主体として、後期初頭を下るものはない。これに対して、旧練兵場遺跡群や川津一ノ又遺跡では竪穴住居を主体とし、古墳時代初頭まで集落が継続している。

青銅器は善通寺市大麻山周辺で多数出土している。また平野部においても少量が出土している。坂出市明神原、善通寺市我拝師山では外縁付紐式銅鐸が出土している。後者の流水文鐸は大阪府茨木市東奈良遺跡出土鑄型で製作されたもので、神戸市桜ヶ丘銅鐸との同范関係が知られている。



第6図 周辺遺跡分布図 (1/50,000)

番号	遺跡名	所在地	時代	主な遺構
1	三条黒島遺跡	丸亀市三条町	旧石器～近代	石器ブロック・溝・屋敷跡
2	川西北七条Ⅰ遺跡	丸亀市川西町北	縄文～近世	自然河川・溝
3	永井遺跡	善通寺市下吉田町、中村町	縄文	自然河川
4	旧練兵場遺跡群	善通寺市仙遊町	縄文～中世	包含層・竪穴住居・溝・土器棺
5	平池南遺跡	丸亀市金倉町	縄文～弥生	自然河川・土坑・土器棺
6	中村遺跡	善通寺市中村町本村	縄文	包含層
7	下川津遺跡	坂出市川津町	縄文～中世	集落跡・自然河川
8	川津下樋遺跡	坂出市川津町	縄文～弥生	自然河川
9	川津川西遺跡	坂出市川津町	縄文	自然河川
10	行末遺跡	綾歌町栗熊東行末	縄文	包含層
11	龍川四条遺跡	善通寺市木徳町	縄文	自然河川
12	郡家田代遺跡	丸亀市郡家町	旧石器～近代	溝・火葬墓
13	次見遺跡	綾歌町富熊字次見字宮の前	弥生	包含層
14	中ノ池遺跡	丸亀市金倉町中の池	弥生	環濠・土坑
15	五条遺跡	善通寺市原田町五条	弥生	環濠・柱穴・土坑
16	龍川五条遺跡	善通寺市原田町・木徳町	弥生	環濠・周溝墓・木棺墓・住居跡
17	北原遺跡	善通寺市善通寺町	弥生	竪穴住居
18	飯野山西麓遺跡	丸亀市飯野町	弥生	包含層
19	川津一ノ又遺跡	坂出市川津町	弥生	竪穴住居・掘立柱建物・溝・土坑
20	我拝師山遺跡	善通寺市吉原町吉原曼荼羅寺	弥生	銅鐻・銅剣
21	瓦谷遺跡	善通寺市善通寺町瓦谷	弥生	銅鐻
22	稲木遺跡	善通寺市稲木町	弥生～古代	竪穴住居・掘立柱建物・溝
23	吉岡神社古墳	丸亀市飯野町東分吉岡	古墳	前方後円墳
24	川津茶臼山古墳	坂出市川津町小山、蓮尺南	古墳	前方後円墳
25	田尾茶臼山古墳	坂出市八幡町4丁目・宇多津町向山	古墳	前方後円墳
26	陣の丸1号墳	綾歌町富熊奥川内	古墳	前方後円墳
27	陣の丸2号墳	綾歌町富熊奥川内	古墳	前方後円墳
28	快天山古墳	綾歌町栗熊東若狭	古墳	前方後円墳
29	野田院古墳	善通寺市善通寺町野田	古墳	前方後円墳(積石塚)
30	丸山1号墳	善通寺市大麻町字岡	古墳	前方後円墳(積石塚)
31	爺ヶ松古墳	坂出市西庄町八十場	古墳	前方後円墳(積石塚)
32	大麻山経塚古墳	善通寺市大麻町中土居	古墳	前方後円墳(積石塚)
33	大麻山椀貸塚古墳	善通寺市大麻町中土居	古墳	前方後円墳(積石塚)
34	磨臼山古墳	善通寺市生野町山南	古墳	前方後円墳
35	北向八幡神社古墳	善通寺市善通寺町伏見	古墳	前方後円墳
36	菊塚古墳	善通寺市善通寺町地下	古墳	前方後円墳
37	瓦谷1号墳	善通寺市善通寺町	古墳	横穴式石室
38	宵龍古墳	善通寺市吉原町吉原曼荼羅寺	古墳	円墳
39	生野鎌子塚古墳	善通寺市生野町	古墳	円墳
40	青ノ山古墳群	丸亀市土器町青ノ山・綾歌郡宇多津町青ノ山	古墳	方墳・円墳
41	王墓山古墳	善通寺市善通寺町大谷	古墳	前方後円墳
42	郡家一里屋遺跡	丸亀市郡家町	古墳～近世	竪穴住居・掘立柱建物・自然河川
43	仲村廃寺遺跡	善通寺市仙遊町	古墳	竪穴住居
44	吉野下秀石遺跡	仲多度郡満濃町吉野	古墳	竪穴住居
45	仲村廃寺跡	善通寺市仙遊町	古代	礎石・土壇状遺構
46	善通寺跡	善通寺市善通寺町	古代	礎石・築地塀
47	田村廃寺跡	丸亀市田村町	古代	塔礎石
48	宝幢寺跡	丸亀市郡家町地頭	古代	塔礎石・土壇
49	弘安寺跡	仲多度郡満濃町四条東村	古代	塔礎石
50	法敷寺跡	綾歌郡飯山町下法軍寺	古代	塔礎石
51	城山城跡	坂出市府中町・西庄町	古代	石垣・城門・水門
52	金蔵寺下所遺跡	善通寺市金蔵寺町	古代	掘立柱建物・溝
53	郡家原遺跡	丸亀市郡家町	弥生～近世	掘立柱建物・溝
54	生野本町遺跡	善通寺市生野町	古代	掘立柱建物・溝
55	櫛梨城跡	善通寺市櫛梨町・琴平町下櫛梨	中世	壕跡・曲輪
56	西長尾城跡	仲多度郡満濃町長尾・綾歌郡綾歌町岡田	中世	壕跡・曲輪
57	聖通寺城跡	坂出市坂出町・綾歌郡宇多津町坂下	中世	曲輪
58	大堀城跡	仲多度郡満濃町吉野八幡大堀	中世	土塁・壕跡
59	川西北鍛冶屋遺跡	丸亀市川西町北	近世	掘立柱建物・土坑
60	郡家大林上遺跡	丸亀市郡家町	近世	掘立柱建物・土坑
61	丸亀城跡	丸亀市一番丁	近世	石垣・天守閣

第7表 周辺遺跡一覧表

扁平紐式銅鐸は綾南町内間、大麻山で出土している。武器形祭器は大麻山瓦谷で中細・中広、平形の一括埋納がしられるほか、平形銅剣を複数出土した遺跡の多くは丘陵地に立地する。平野部においては、旧練兵場遺跡群や稲木遺跡などで銅鏃、小銅鐸、舶載鏡片が出土し、平池南遺跡では鋤先が出土している。今後資料の増加は必至であろうが、現在のところ弘田川、金倉川流域にまとまる傾向があり、土器川流域では中流域の満濃町周辺に限られている。

弥生時代の墓制については近年の発掘調査で明らかになってきた。龍川五条遺跡で前期の可能性のある周溝墓や木棺墓が出土しており、平池南遺跡では中期の土器棺墓群や後期の周溝墓が確認された。旧練兵場遺跡群では後期を主体とした土器棺墓や箱式石棺墓などがみられる。これらは集落に近接した低地部に、多様ないくつかの形態を共有して造墓する傾向がみられる。古墳時代初頭までその特徴は継続する。

c. 古墳時代

丸亀平野では22基の前方後円墳が知られる。100mクラスの前方向後円墳は綾歌町快天山古墳だけで、多くは30～50mの小規模墳である。小地域単位でそれぞれ前方後円墳の系列が認められる。

土器川・大東川下流域では全長51mで南北方向の竪穴式石室をもち、畿内系の供献土器を出土した吉岡神社古墳、仿製三角縁神獸鏡を出土した川津茶臼山古墳、全長76.5mで石棺と推定される田尾茶臼山古墳がある。いずれも盛土墳で、前方部がバチ形に開く墳丘形状である。田尾茶臼山古墳では埴輪が採集されている。

土器川・大東川上流域は横山山塊の尾根筋に、ともに積石塚の全長36mの横山経塚1・2号墳が存在する。1号墳小竪穴式石室から五獣鏡が出土している。近接する山塊の尾根筋には陣の丸1・2号墳が存在する。間に方墳を挟んで対峙する盛土墳で、1号墳は埴輪の出土が知られる。羽床盆地と土器川流域との地峡を睨む丘陵末端部には、3基の割竹形石棺を埋葬し、全長100mの規模を持つ快天山古墳が築かれる。

金倉川・弘田川下流の多度津地域は、白方地区丘陵上に黒藤山古墳と御盥山古墳の系列がある。黒藤山では葺石は認められるが、埴輪は出土しておらず、墳丘周辺には土器片が散在する。御盥山では朝顔型円筒埴輪の出土が知られる。

金倉川・弘田川上流の善通寺地域では丘陵の高所地に積石塚前方後円墳が築かれる。標高400m以上の野田院古墳は前方部を盛土、後円部を積み石とした特異な形態で、丸山1

号・坂出市爺ヶ松古墳に類例があり、ほぼ同じ時期の築造と考え得る。主丘と付属的な前方部を造り分けている点で興味深い。積石塚は峠や水系を睨む高所地に点在している。野田院古墳は高瀬町との境となる麻坂峠・大日峠を望む高所地に、大窪経塚古墳は三野町との境となる鳥坂峠を望む高所地に、また丸山1・2号墳、大麻山経塚古墳、大麻山椀貸塚古墳は金倉川水系を望む高所地に立地している。

これに対して、平野部に近接する低丘陵上には盛土墳が分布する。全長約50mの磨臼山古墳は割竹形石棺を埋葬主体とし、円筒埴輪の出土が知られる。北向八幡社古墳、菊塚古墳は比高差20m以下で埴輪が出土せず、特に前者は前方部の発達が著しい。

5世紀代には大型円墳が出現し多度津地区の盛土山古墳、善通寺地区の青龍古墳、生野鐘子塚古墳などがある。

横穴式石室墳はおおむね4群に分けられる。土器川下流域の青ノ山グループは山頂の方墳である1号墳を盟主とし、周辺に20基以上のまとまりがある。また土器川中流域の満濃グループは広範囲に横穴式石室墳が点在する。弘田側上流域の善通寺グループは後期初頭の王墓山古墳にはじまり、周辺の丘陵尾根部には、数多くの中小墳が存在し、金倉川に面する尾根筋にもおよぶ。弘田川下流域の白方グループは大型墳が点在する。金倉川下流域にはみるべき古墳はないが、地域的には弘田川流域に包括されるべきものであろう。

古墳時代の集落跡は、那家一里屋遺跡、旧練兵場遺跡群内の仲村廃寺遺跡、稲木遺跡、満濃町吉野下秀石遺跡で6世紀後半～7世紀の集落が確認されている。これらは7世紀中葉以降、竈付竪穴住居を主体とするものから掘立柱建物を主体とするものへ変化する。

d. 古代

現在、丸亀平野には条里制の残存と考えられるN-30°-Eの方面地割りが広範囲に認められる。これは旧多度郡、那珂郡、鷯足郡を包括して広範囲に認められ、三条、四条などの地名が現在も使用されている。現状地割から条里制を復元した考察が知られているが、今後発掘調査資料を踏まえた検討が必要である。

古代寺院は多度郡で仲村廃寺・善通寺跡、那珂郡で田村廃寺・宝幢寺跡・弘安寺跡、鷯足郡で法勲寺跡が知られる。これらは、周辺の田地地割の状況から伽藍のおおよその方向を推測することができる。多くが上記の方格地割と異なる方向を持つものに対して、善通寺跡のみ地割に一致している。概して畿内系古瓦が多い。古代山城は城山で神籠石系の朝鮮式山城が知られている。

集落跡は稲木遺跡・金蔵寺下所遺跡・郡家原遺跡・郡家一里屋遺跡などで検出されている。いずれの集落においても、遅くとも8世紀までには方格地割に合致する建物配置を採用している。なお、生野本町遺跡では7世紀段階の方格地割に合致する大形建物の廃絶後、8世紀前葉段階で小区画溝を伴う田地開発が行われたことを示す資料が提示されており、今後の調査が期待される。

郡家田代遺跡では奈良期の火葬墓が調査された。善通寺周辺の丘陵部では多くの火葬墓の出土が知られており、佐伯直（宿禰）との関係が考察されている。

e. 中世

山城跡として櫛梨城跡・西長尾城跡・聖通寺城跡が、平地の居館跡として大堀城跡が知られる。集落跡は平野部の調査によって中小規模のものが多く知られる。

f. 近世

丸亀城跡は海浜部の独立丘陵に造られた平山城である。生駒、山崎、京極と城主が変動している。現在の縄張りは京極期のもので、史跡整備に伴う発掘調査により、京極以前の石垣などが確認されている。丸亀藩の領地は概ね5～6万石で、那珂郡・鶴足郡を境に県の西側を主に支配した。ただし、多度津藩領1万石を後に分知している。三条黒島遺跡が所属する三条村は当時の木徳村に所属し、高松藩の領地に含まれている。また、川西北七条I遺跡が所在する土器村も同様に高松藩である。

集落跡は川西北鍛冶屋遺跡・郡家大林上遺跡・郡家一里屋遺跡などで母屋・納屋と推定される小規模な建物群が検出されている。郡家原遺跡では小規模な建物に付随して、倉庫跡と推定される建物が検出されている。これらは掘立柱建物に始まり、18世紀後半から19世紀前半までに礎石建物に変化する状況が確認される。

第3章 三条黒島遺跡の調査

第1節 調査の概要と調査の方法

今回の三条黒島遺跡の発掘調査においては、旧石器時代から明治時代までの遺構・遺物を検出した。

旧石器時代の遺構は接合資料を含む石器ブロック1カ所を検出した。

弥生時代から古代においては農業用水路と推定される溝群を検出した。

中世では建物跡等の遺構を若干確認した。

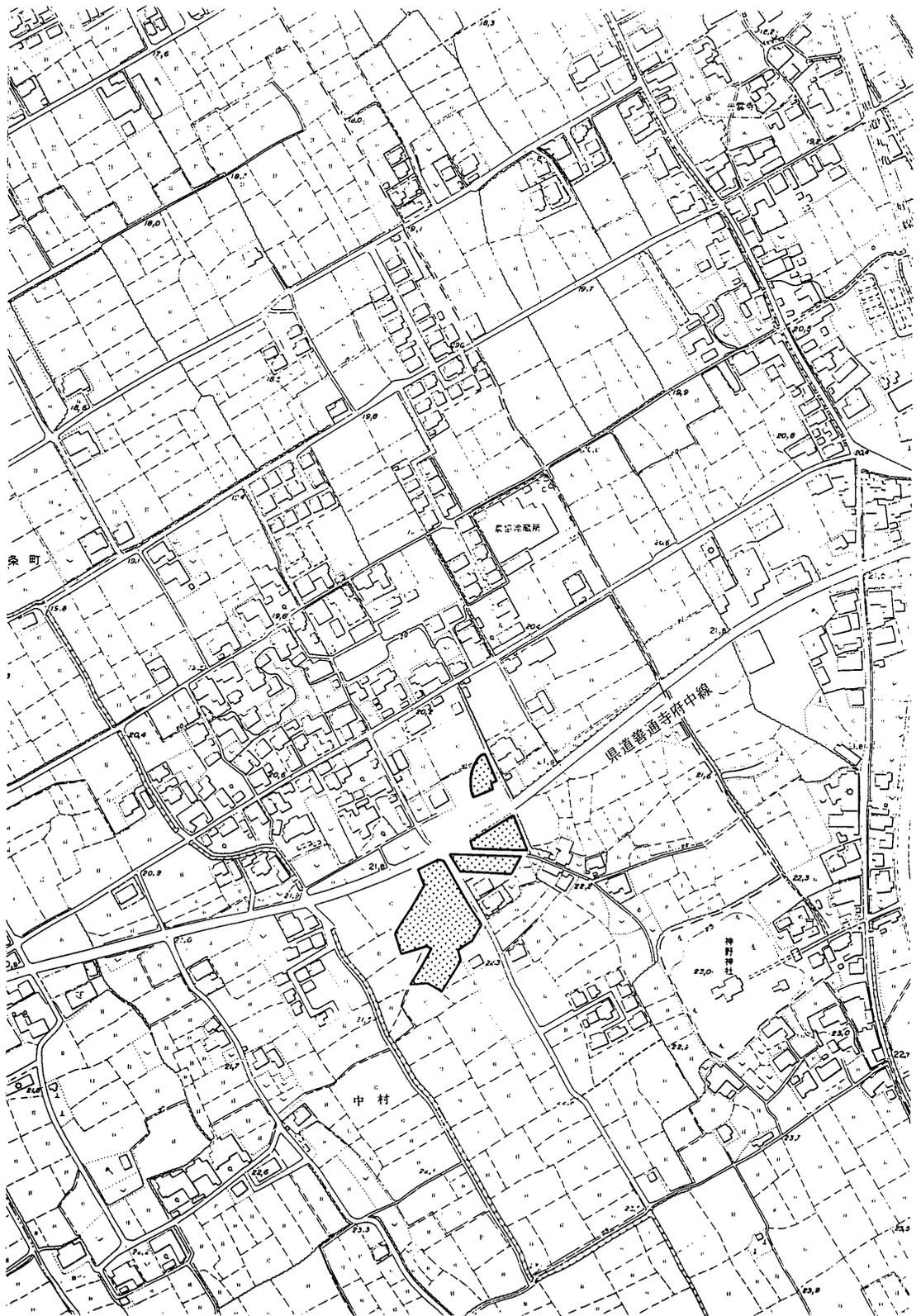
江戸時代以降については明治末期まで存続する庄屋の屋敷跡を検出した。

出土した遺物は28リットル入りコンテナで52箱に相当する。

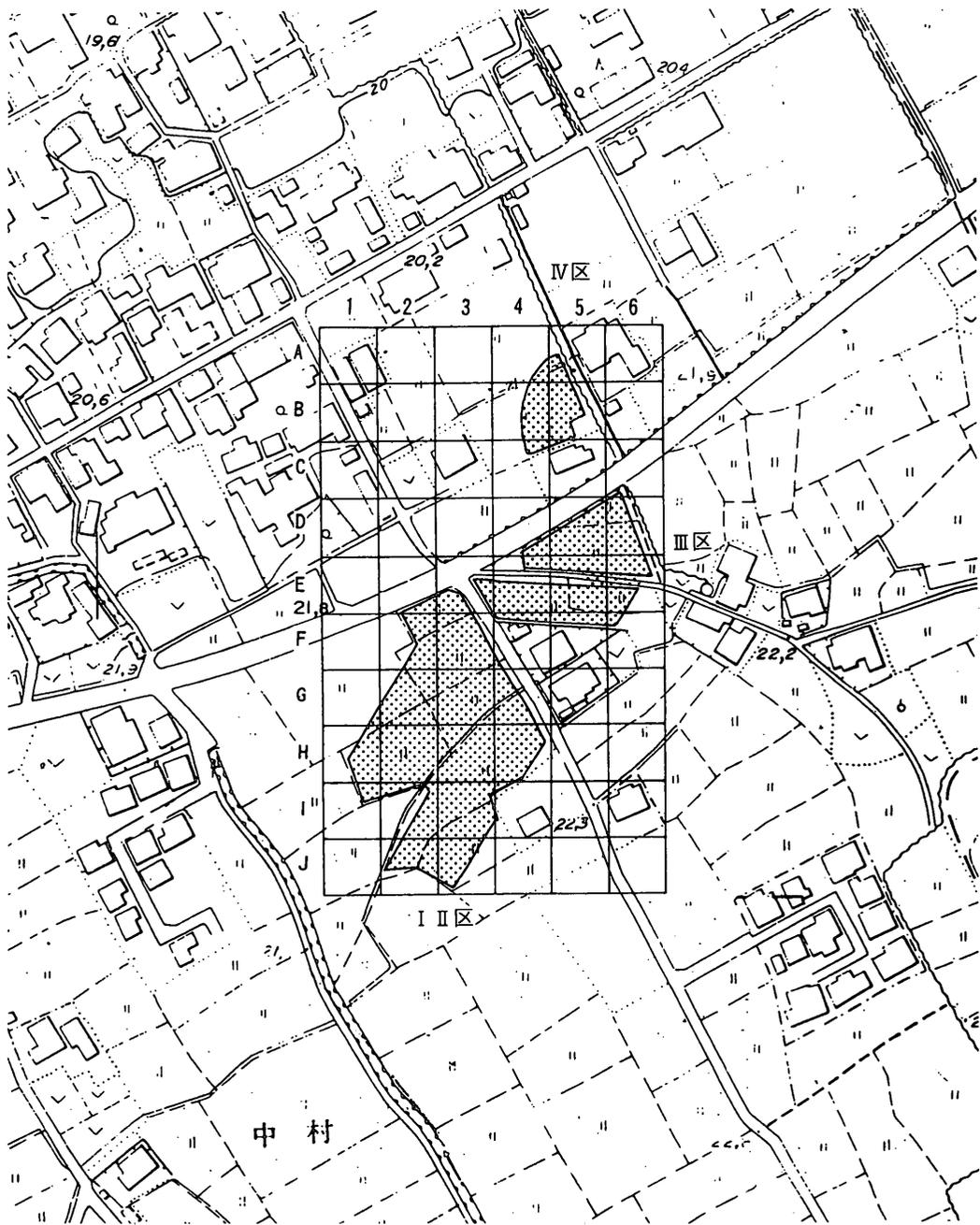
調査にあたっては、まずⅠ～Ⅳ区の大調査区を設定し、さらにこれに併用して国土座標第Ⅳ系に基づいた20mメッシュのグリッドを設定した(第8図)。調査記録は航空測量による1/50の全体平面図を基本とし、各遺構の図面は1/20・1/10で作成した。土層断面図は原則としてグリッドに沿って畦を残し、適宜作成した。なお、Ⅰ区とⅡ区は当初仮設道に基づいて区分していたが、調査区割上明確な区分ができなかったことにより、一括してⅠⅡ区と呼称する。

発掘調査時の遺構番号と、本報告の遺構番号は異なっている。新旧遺構番号対照表を第表に示している。

なお、ⅠⅡ区で検出した旧石器時代の石器ブロックには発掘調査時に現有水路が存在した。水路下部にも石器包含層が遺存している可能性が考えられたため、本体工事に伴って一部の立会調査を行い、7点の石片および2点の礫の出土を確認した。これらは本調査時の記録にあわせて取り上げており、本報告では一括して報告している。本調査終了後に作成した概報の調査区形状と、本報告の調査区形状が異なるのはそのためである。



第7図 三条黒島遺跡位置図



第8図 調査地区割図

新番号	旧番号
SD-01	SD-14・02
SD-02	SD-16
SD-03	SD-27
SD-04	SD-26
SD-05	SD-28
SD-06	SD-01
SD-07	SD-03
SD-08	SD-29
SD-09	SD-110
SD-10	SD-101
SD-11	SD-36
SD-12	SD-37
SD-13	SD-35
SD-14	SD-99
SD-15	コンクリートアゼ下の溝
SD-16	SD-48
SD-17	SX-59・SD-58
SD-18	SD-47
SD-19	SD-50
SD-20	SD-68
SD-21	SD-69

新番号	旧番号
SK-01	SK-19
SK-02	SK-18
SK-03	SK-33
SK-04	SK-31
SK-05	SK-08
SK-06	SK-11
SK-07	SK-10
SK-08	SK-09
SK-09	SK-49
SK-10	SK-46
SB-01	SB-07
SX-01	SX-53
SX-02	SX-60
SX-03	SX-64
SX-04	SX-52
SX-05	SX-44
SX-06	SX-61
SX-07	SX-66
SX-08	SX-41
SX-09	SX-42

第8表 三条黒島遺跡遺構番号新旧対照表

第2節 基本土層

調査対象地内はすべて水田として利用されていた。耕作土（1層）を除去すると、層厚3～5cmの橙色系粘土の床土（2層）が広がる。

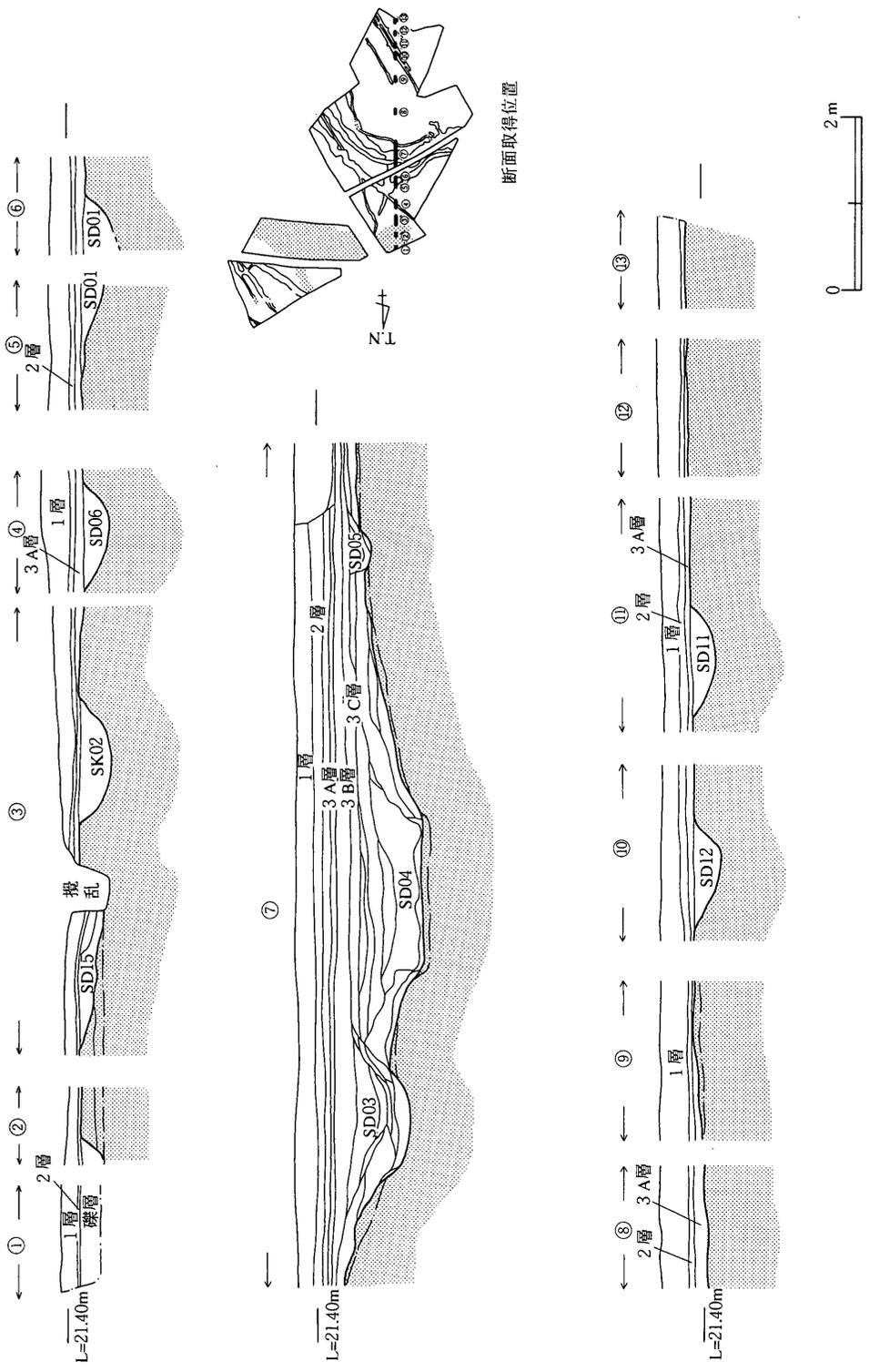
床土の下位には灰色系のシルト（3A層）が存在する。大部分ではこの下位に黄色系シルト層の弥生時代以降の基盤層が確認されるが、流路の上面などでは古墳時代～奈良時代の褐色系包含層（3B・3C層）が堆積している。

黄色系シルト層は弥生時代以後の遺構の基盤層となっており、上面で溝や土坑の掘り形が確認できる。基盤層は上面遺構の調査終了後にトレンチ調査で堆積状況を確認した。詳細は次節に譲る。

なお、Ⅲ区を中心に東から西に向けて礫層が認められた。この礫層はトレンチ調査等の結果から、弥生時代以降の基盤層を切り込んで堆積している。また礫層上面では遺構が全く確認できないことから、新しい時期の土石流等の痕跡と考えられる。



第9図 全体遺構分布図



第10図 土層概要図

第3節 旧石器時代

(1) トレンチの設定と土層堆積状況

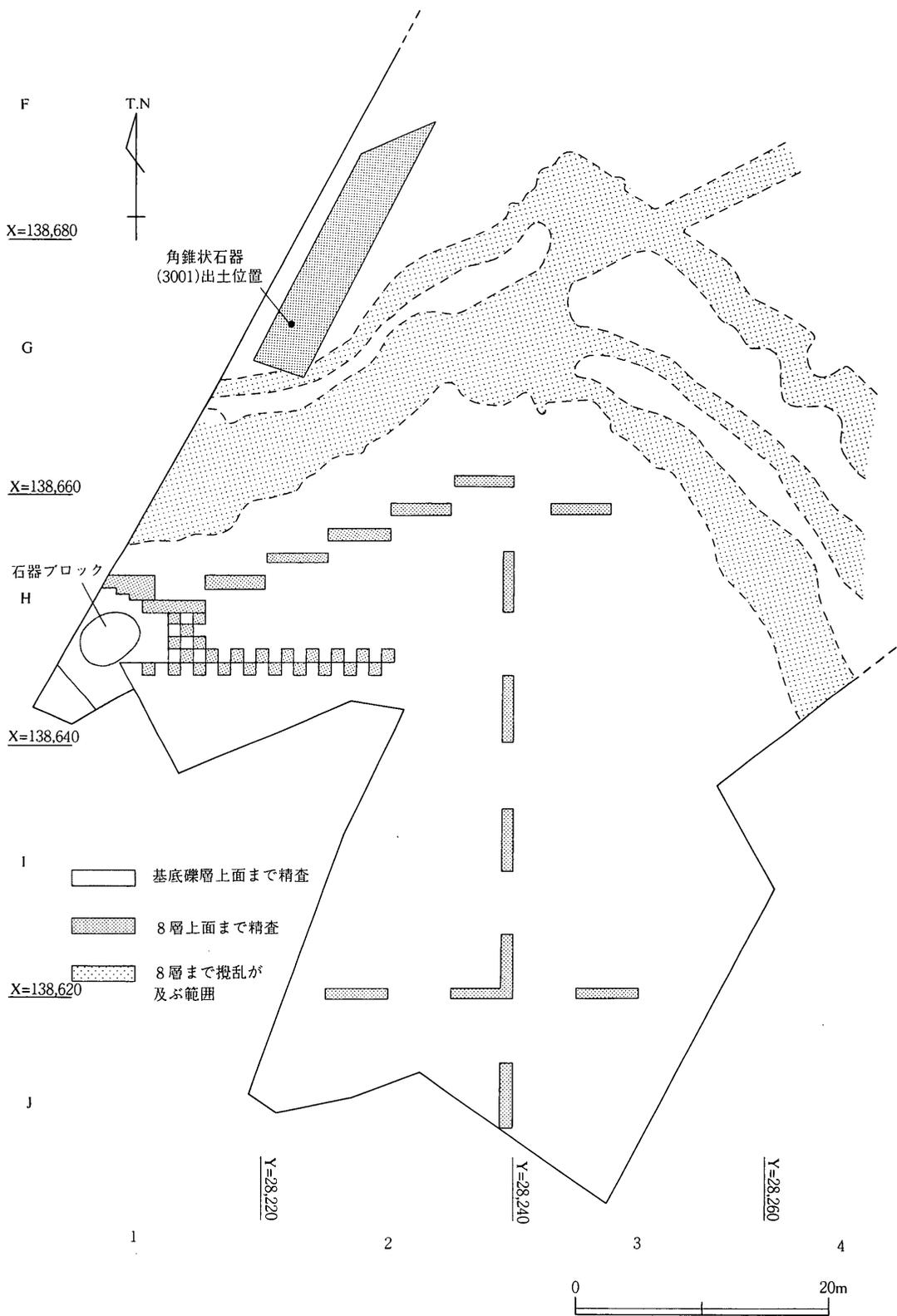
旧石器ブロックはI II区の南西にあたるH-1区で検出した。ブロックは直径6 mほどの範囲に広がる。調査区内の各所で下層確認を行ったが、G-2区で風化が顕著な角錐状石器を1点検出ただけで、それ以上の遺跡の広がりには確認できなかった。また、人力による下層確認トレンチ調査の後、旧地形と遺跡景観復元を目的として重機によるトレンチ掘削、および土層断面の記録・分析資料の採取を行った。分析資料は土壌中火山灰抽出分析に使用した。

a. トレンチの設定 (第11図)

旧石器遺構の存在は、遺跡調査着手から1月半が経過した8月25日に翼状剥片を含む7点のサヌカイト剥片が出土したことによりはじめて確認された。従来から丸亀平野の基盤となる黄色粘土層中に縄文時代以前の遺物が含まれていることが知られており、地質学的な成果においても丸亀平野の基盤層が完新世の旧石器川の氾濫によって形成された土層であることが推定されていたことから、当初は2次的な堆積による旧石器の包含であると判断された。しかし出土した剥片の風化度が、備讃瀬戸島嶼部で出土する原位置を留めた石器類と比較して特に磨耗しているわけでもなく、また1ヶ所において集中的に出土することから、以後出土位置を記録しながら弥生時代の遺構面を形成する第6層(灰黄色粘土層)の掘り下げを行った。

1週間後さらに30点ほどの石器類が出土し、1ヶ所への集中度がきわめて高いことから、原位置を留めた旧石器時代の石器ブロックであることがここで確認された。この時点で調査区内のほかの箇所におけるブロックの存在が想定されたため、I II区を中心に幅1 m、長さ5 mの確認トレンチを15箇所、幅5 m、長さ約25 mのトレンチを1箇所設定し、旧石器段階の基盤層と推定された第8層上面まで人力で精査して石器の分布状態を確認した。

その結果、G-2区で角錐状石器が1点確認されたものの、その周囲に石器の広がりには認められず、また15箇所の細長いトレンチにおいては1点の剥片も出土しなかった。これにより、旧石器調査はH-1区の約60㎡に限定して行うこととなった。



第11図 旧石器調査トレンチ設定図

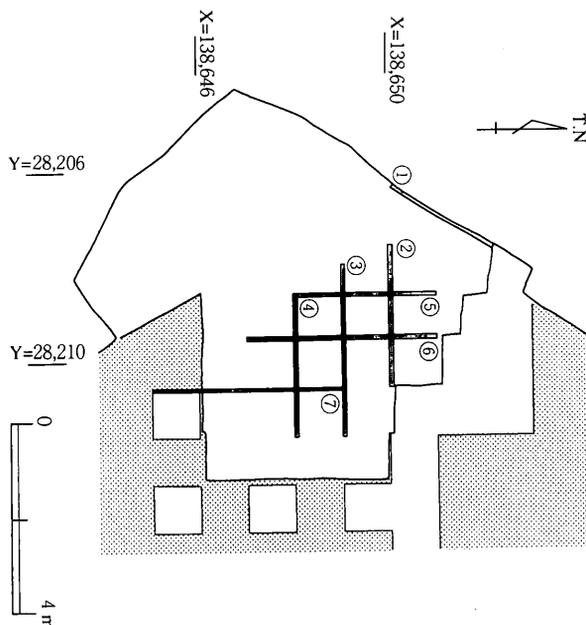
なお、石器ブロックにおいては第8層中への遺物の混入がみられた。これは後述するよ
うに自然要因による垂直移動の結果と推定される。したがって、石器ブロック範囲につい
ては第8層下面の基底礫層上面まで掘り下げて精査を行っている。

b. 土層堆積状況

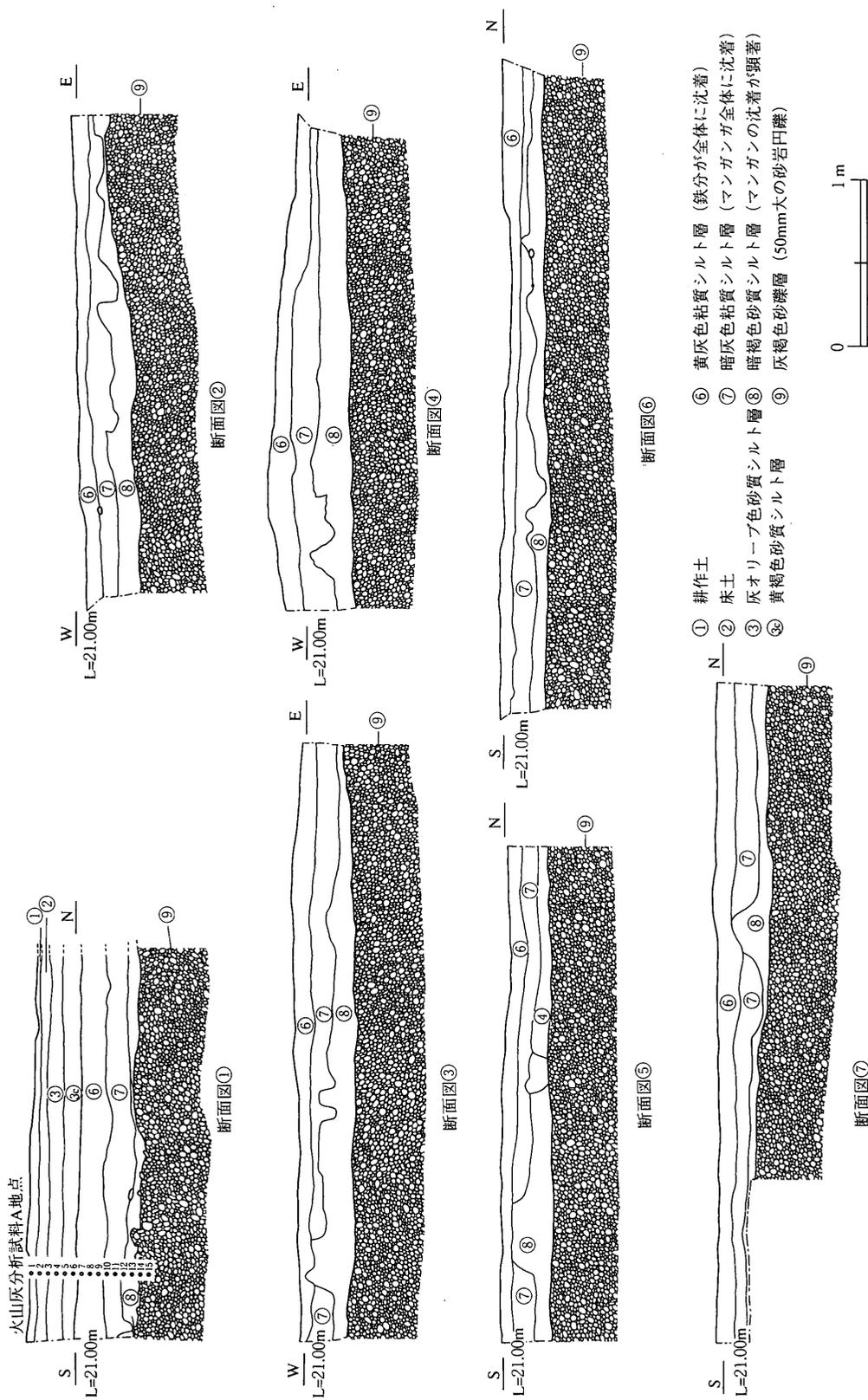
土層堆積の確認は、石器ブロックにおける微地形の復元と石器ブロック周辺の地理的景
観の復元を主眼として行った。前者については石器ブロック内に1 mメッシュの畦を設定
し、第6層～基底礫層までの層界を記録することにより各層面ごとの細かな起伏を抽出し
た。ただし、一部においては8層上面、および基底礫層上面のレベルデータしか記録して
いない箇所もある。また、後者については重機で掘り下げた石器ブロック周辺のトレンチ
断面を記録し、火山灰分析の結果をふまえて調査区内の巨視的な起伏を抽出した。

石器ブロック内の土層堆積状況（第12・13図）

ブロック内土層のうち西側の土層については、分割した調査となり、統一的な断面の記
録がとれなかったため、レベルデータを後述の微地形復元に援用している。ブロック内の
主として東側の土層断面図を提示する。



第12図 石器ブロック内土層断面取得位置図



第13図 石器ブロック内土層断面図

石器が包含されるのは第6層の上面を覆う第3C層から第8層までの厚さ約40cmの範囲である。このうち第3C層は奈良時代ごろの堆積層であることから、図は第6層以下を記録している。

全般的にみて基底礫層が南東から北西に向かって緩やかに下降し、それに従って第6層から第8層が次第に層厚を増す傾向が窺われる。ただし第8層は上面が部分的に凹凸をなす箇所が目立ち、必ずしも均質な層厚をもつものではなく、これに対して第6・7層は比較的均質に8層上面を覆っていることがわかる。断面5を細かくみると、第8層の部分的な隆起に対応して第7層が一部とぎれており、それを上部カットする格好で第6層が堆積している。これは第7層が第8層の凹凸に応じてきわめて緩やかに堆積し、その後第6層が若干の削平を伴いつつ第7層の上面を覆っていることがわかる。これは石器ブロックの形成時期頃の基盤層を開析しつつ、低地部に堆積層を形成する当調査区の全体的な傾向を反映するものといえる。

今回の調査では第8層中にも石器が若干包含される。これらは8層中に貫入する乾痕内より出土するものが多く、石器ブロック形成時の基盤は少なくとも第8層より上にある。石器の垂直分布（第21図）からは第7層ないし第6層がブロック形成時の原層準との見通しがたつが、これについてはブロック周辺の土層堆積状況や火山灰分析結果、また石器の分布状況を総合して後述する。

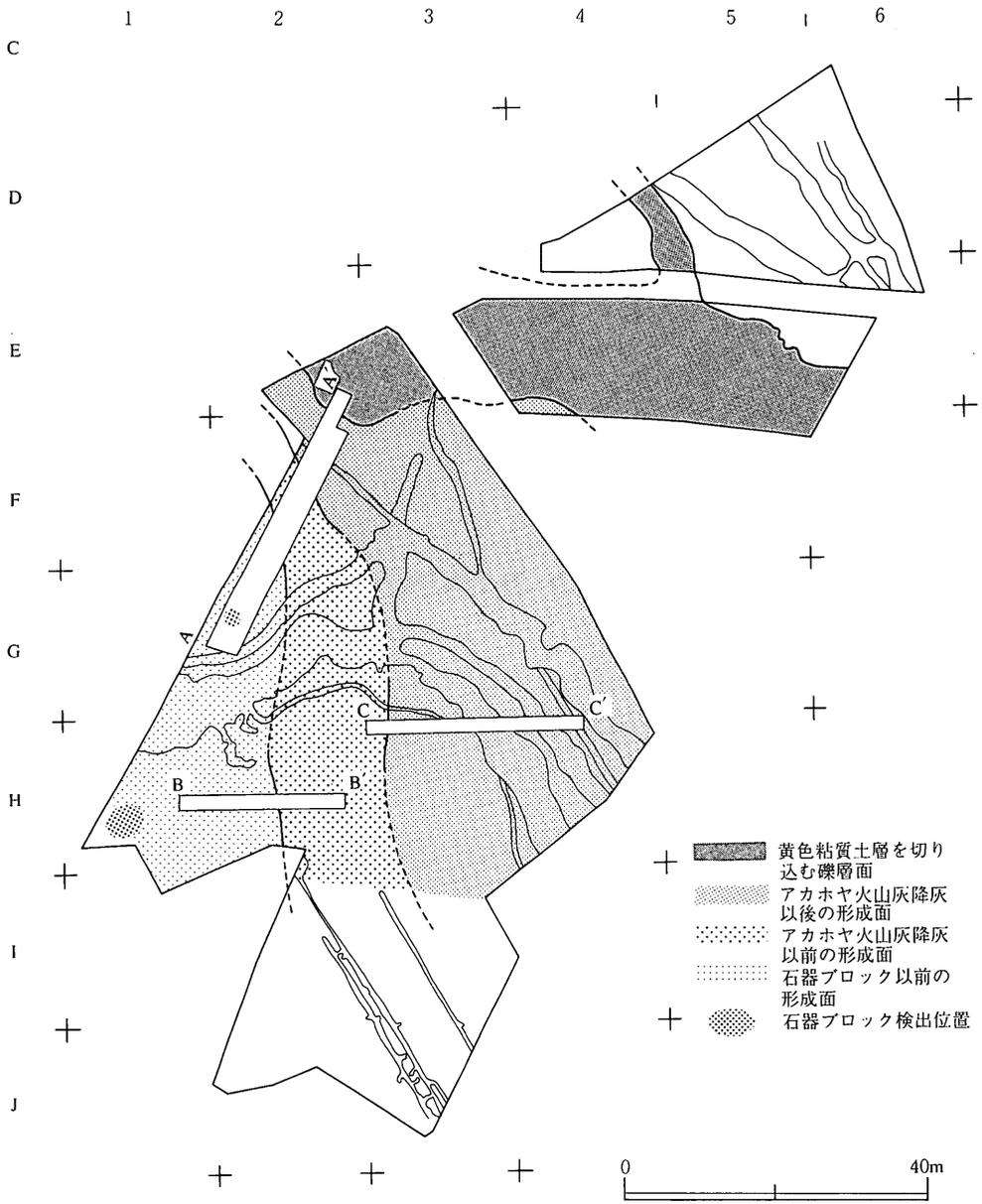
石器ブロック周辺の土層堆積状況（第14～16図）

重機によるトレンチ掘削は3箇所で行った。Aトレンチは第8層上面まで掘り下げたG-2区のトレンチをさらに掘り下げて、断面を記録した。B・CトレンチはH-1区からH-4区まで一部軸を切り替えながら東西方向に掘削した。

Aトレンチでは火山灰分析を併用した。

基底礫層（第15図28層）の上面レベルは石器ブロック地点のレベルと比べてかなり低い位置にある。凹凸があり堆積物は砂岩の亜円礫・亜角礫が主体であるが、部分的にはシルト質を交える箇所もあり、その上層で確認される各時期の流路に伴う砂礫層と区別できていない可能性が残っている。

礫層を覆う堆積土は流路堆積層が大部分をしめ、シルトや砂がレンズ状に堆積しているものが多い。これは特にトレンチ北半でみられた。



第14図 石器ブロック周辺トレンチ位置及び土層形成概要図

石器ブロックにもっとも近い南側の土層序は、肉眼的にはあるが第6層～第8層を区分できた。第6層対応層（第15図13層）は層厚15～20cmで、北に下降しながら一様に堆積している。第7層対応層（第15図17層）は北に傾斜しながら堆積するが、9mほどのエリアにその分布域が限られる。トレンチ唯一の出土遺物である角錐状石器は、この第7層対応層で出土している。第8層対応層（第15図24層）はトレンチの南半分に分布し、特に分布域内の北側では流路堆積層として複数の層序をもつ。なお、第6層と第8層との間に流路が1条存在することがわかる（第15図15・16層）。

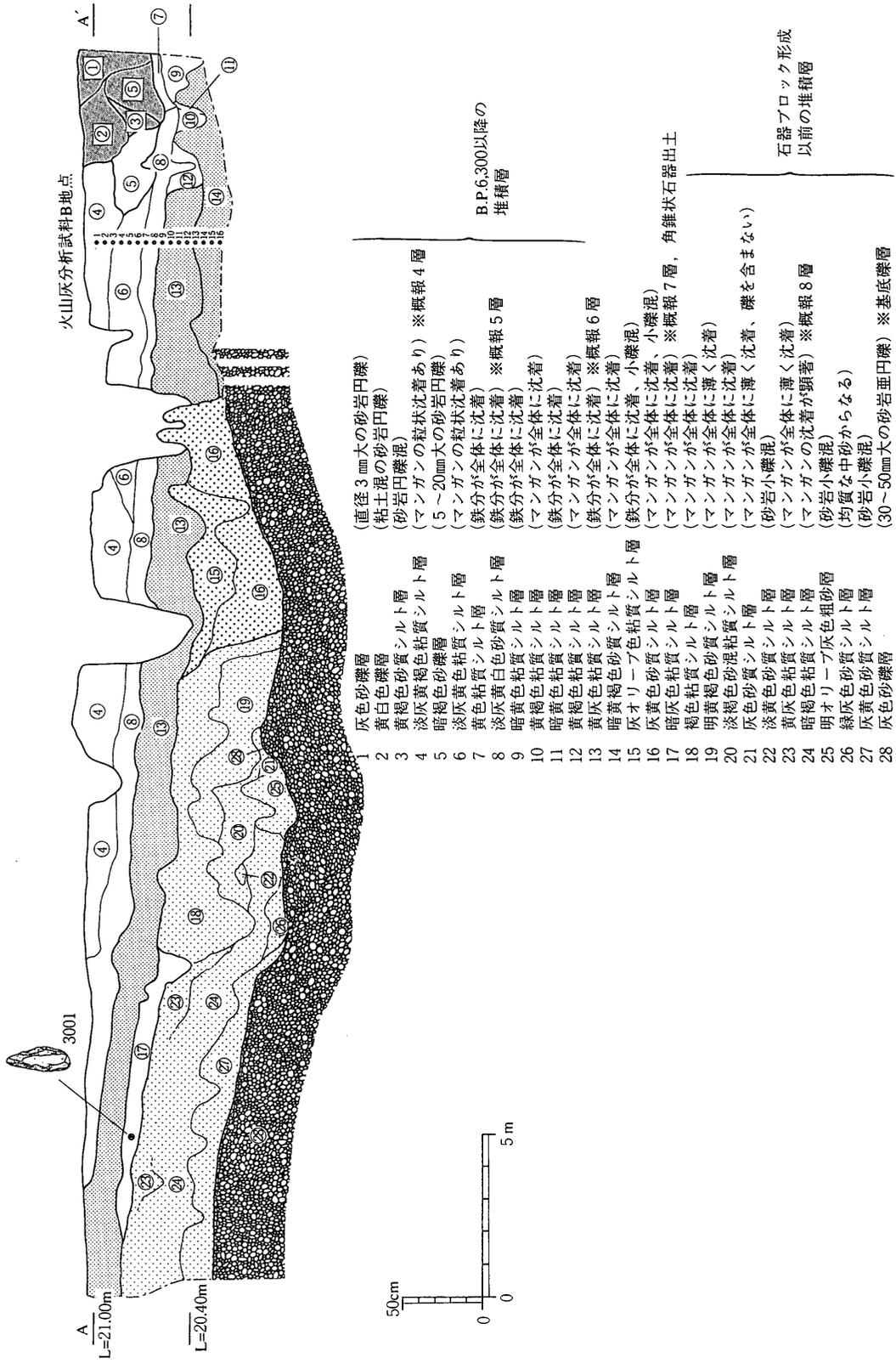
トレンチ北側では第6層対応層の堆積後、第5層対応層（第15図6・8層）および第4層対応層（第15図4層）が緩やかに堆積し、その北端でそれに対応する流路が砂礫層を伴って走行していることがわかる（第15図1～3層・5層）。

火山灰分析の結果、第6層はK-Ah火山灰の2次堆積としてのピーク層があり、第6層はB.P6300年以後において比較的まとまった開析作用を伴って当時の起伏を覆ったものと推定される。

B・Cトレンチ（第16図）においても、基本的にはAトレンチに対応する形で各層位を確認した。ただし第6層対応層（第16図2層・第16図9層）はそれ以後の堆積によって削平され、石器ブロック形成以前の窪地にレンズ状に堆積するものを留めるのみとなっている。

以上により巨視的にみて調査区内において基底礫層の窪地に相当するAトレンチ付近では、石器ブロック形成以前に堆積した土層からそれ以後に堆積した土層が、平面的にみて南から北側に移動し、盛んに地形形成がなされていることがわかる（第14図）。石器ブロックの形成はそのような地形形成の途上にあるが、断面観察によれば、第6層と第7層との層界が比較的明瞭であり、第6層の堆積が地形形成における一つの画期と考えることが可能である。

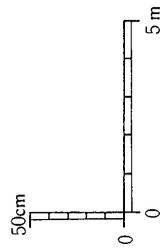
土層堆積状況を検討した結果、石器の原層準は第7層にある可能性が高いと推定される。この場合、第6層の堆積作用が少なくとも石器の分布状況に影響を与えていた可能性が同時に想定されることから、後に石器の分布状況の分析と併せて検討する。



火山灰分析試料B地点

L=21.00m

L=20.40m



第15図 Aトレンチ断面図

- 1 灰色砂礫層 (直径3mm大の砂岩円礫) ※概報4層
- 2 灰白色砂質シルト層 (粘土混の砂岩円礫)
- 3 黄褐色砂質シルト層 (マンガンの粒状沈着あり) ※概報4層
- 4 淡灰黄褐色粘質シルト層 (マンガンの粒状沈着あり)
- 5 暗褐色砂質シルト層 (5~20mm大の砂岩円礫)
- 6 淡灰黄色粘質シルト層 (鉄分が全体に沈着) ※概報5層
- 7 黄色粘質シルト層 (鉄分が全体に沈着)
- 8 淡灰黄色白色砂質シルト層 (鉄分が全体に沈着)
- 9 暗褐色粘質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 10 黄褐色粘質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 11 暗褐色粘質シルト層 (鉄分が全体に沈着)
- 12 黄褐色粘質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 13 黄灰色粘質シルト層 (鉄分が全体に沈着)
- 14 暗黄褐色砂質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 15 灰オリーブ色粘質シルト層 (鉄分が全体に沈着、小礫混)
- 16 灰白色砂質シルト層 (マンガンが全体に沈着、小礫混)
- 17 暗灰色粘質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 18 褐色粘質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 19 明黄褐色砂質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 20 淡褐色砂質粘質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 21 灰色砂質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 22 淡黄色砂質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 23 黄灰色砂質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 24 暗褐色粘質シルト層 (マンガンが全体に沈着)
- 25 明オリーブ灰色粗砂層 (均質な中砂からなる)
- 26 緑灰色砂質シルト層 (砂岩小礫混)
- 27 灰黄色砂質シルト層 (30~50mm大の砂岩重円礫) ※基底礫層
- 28 灰色砂質シルト層

B.P.6,300以降の堆積層

角錐状石器出土

石器ブロック形成以前の堆積層

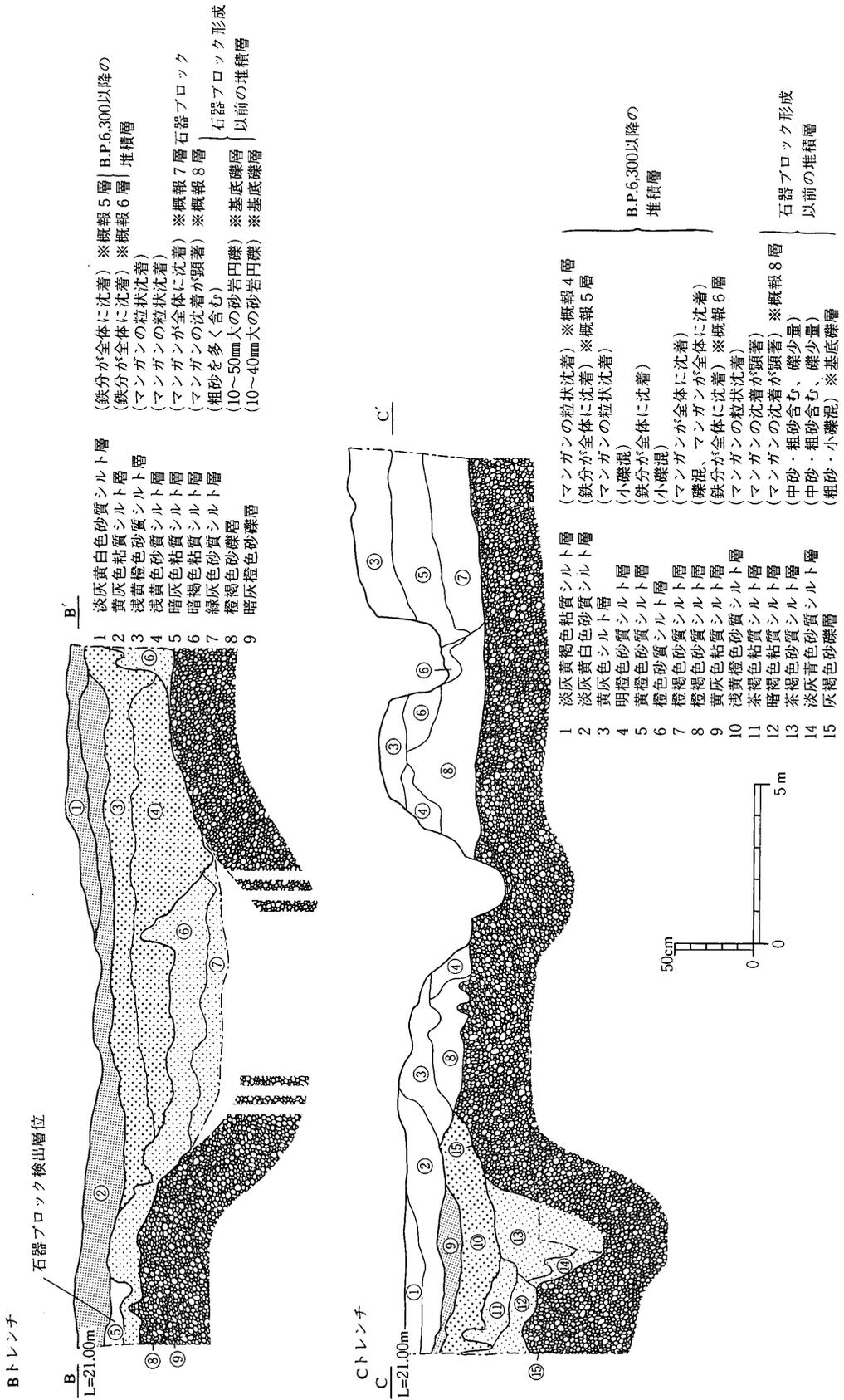
(砂岩小礫混)

※概報7層

※概報8層

※概報5層

※基底礫層



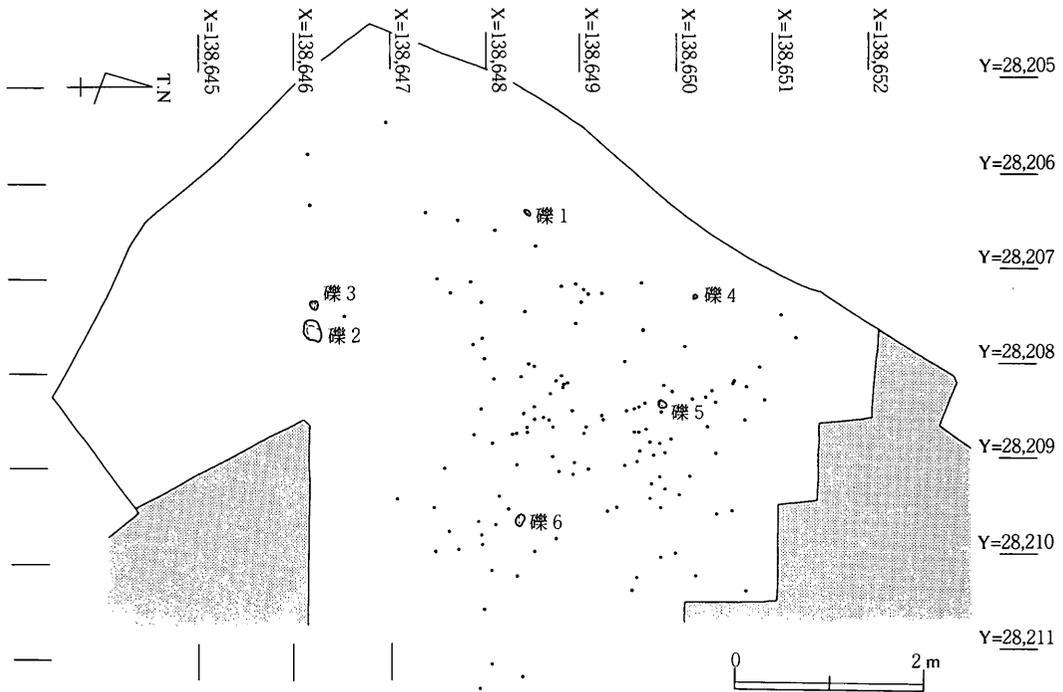
第16図 B・Cトレンチ断面図

(2) 遺物の分布

a. 礫石類の分布 (第17図・第9表)

石器ブロック周辺は土層堆積状況の観察から基底礫層が隆起し地形的に高くなった箇所であったことが判明している。石器ブロックの基盤と考えられる第8層においては礫の包含は少ないが、10~20cm下には砂岩垂円礫・垂角礫からなる基底礫層が広がっている。このような条件下にあって、旧石器時代の遺跡に通常みられる礫・礫群などの人為的な遺構を検出するのは困難を伴う。礫群は通常被熱して赤色化するものや、人為的な破碎がみられる場合が多く、このような観点で調査時に注意して礫の観察につとめたが、少なくとも上記2点にあてはまる礫は存在しなかった。そこで、人為的であるかどうかは別として、第8層より上に存在する礫および表面に付着物のある礫については出土位置を記録して取り上げ、後の整理作業において石器出土分布や微地形等を勘案して、人為物である可能性を検討するための材料とした。なお、調査当初は単純に被熱の有無により判断していたため出土位置の記録のみのものもある。

礫は石器ブロック内およびその近辺において合計6個体を検出した。No.5はブロック



第17図 石器全点及び礫石類分布図

番号	取上時番号	出土位置		法量 (mm)		重量 (g)	破損	被熱	付着物	石材	備考
		X	Y	長さ	幅						
1	礫1	138,648.45	28,206.35	20.783	72	21	なし	なし	黒褐色皮膜	砂岩	調査時半折
2	礫2	138,646.20	28,207.60	20.750	173	67	なし	なし	黒褐色皮膜	砂岩	磨面?あり
3	礫3	138,647.20	28,207.40	20.765	75	48	あり	なし	なし	砂岩	磨面?あり
4	158	138,650.20	28,207.21	20.756	42	12	あり	なし	全面茶褐色皮膜	安山岩	周縁風化顕著
5	12	138,649.82	28,208.40	21.035	90	—	—	なし	—	砂岩	法量(長・幅)は図上推定
6	4	138,648.40	28,209.60	21.060	135	—	—	なし	—	砂岩	法量(長・幅)は図上推定

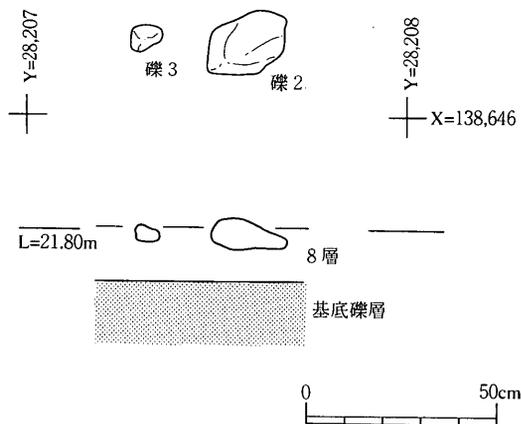
第9表 礫石類一覽表

の中心分布域に位置し、それ以外はブロック外縁部に位置する。このうち、No.2とNo.3は10cmほどの間隔で東西に並んでいる。出土状況の平面図とレベルデータから断面を復元すると、第8層に一部食い込む形で存在し、基底礫層からは約10cmほど浮いていることがわかる(第18図)。No.2とNo.3は形状に著しい差違が認められるにもかかわらず、ほぼ同レベルで一緒に礫層から浮いていることから、自然に動いた結果とは考えにくい。これ以外の礫については、特に1箇所に集中する傾向はみられない。

石材は1点が安山岩で、ほか5点は砂岩である。いずれの礫も被熱痕はみられない。重量はNo.4が14gと軽量で、重量不明のものも平面図から復元した大きさからみて、100g~500gにおさまるものが多い。No.2はその中であって、1,500gを越える大型の礫である。

礫の表面に黒褐色(茶褐色)の皮膜が観察されるものが多い。

これは土壌中にも認められるマンガンの沈着がおよんで付着したものと考えることができる。



第18図 礫2・3出土状況実測図

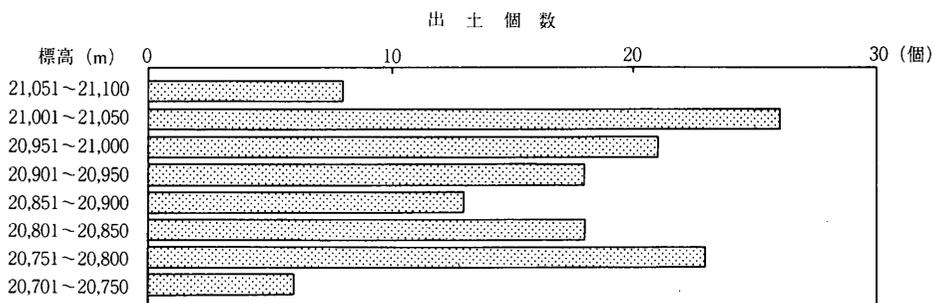
また、磨面と思われる平滑箇所を確認できる個体が2点あった。しかし、一部サンプルとして採取した基底礫層に含まれる砂岩表面にも、これと同様の平滑箇所が認められるため、人為的な作業の痕跡と考えることはできない。

b. 石器の分布 (第19～28図)

石器はH-1区中央部の約6mの範囲に分布する。分布の中心となる直径4mの範囲内に115点(全体の85%)が分布し、直径6mの範囲には130点(全体の96%)が分布する。もっとも遠隔の石器が主要分布域の中心点から4.9m離れているが、全体としてまとまりのよい分布状況を示す。

器種別の分布に注意すると、微細な碎片・剥片類はほとんどが4m圏内に分布し、外縁には5g以上の剥片や角錐状石器・石核等の出現度が高いことが指摘される。(第22図)

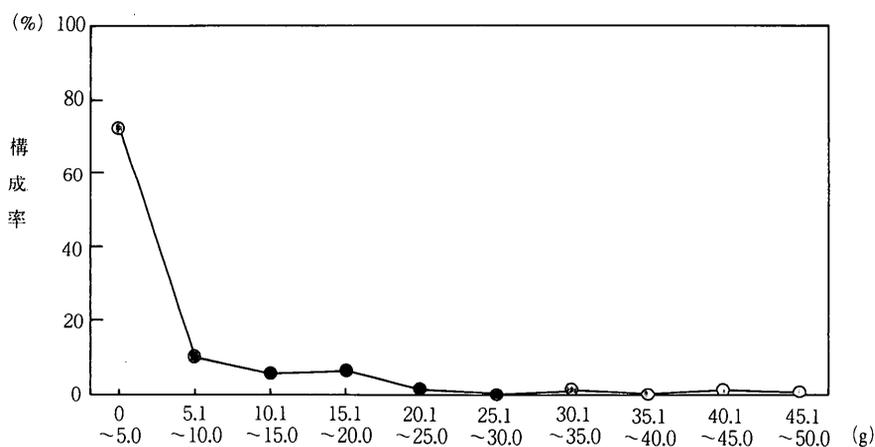
垂直分布では約40cmの幅で上下に分布しており、3c層下位から8層上面に及ぶ。この垂直分布を5cm単位で集計したグラフ(第19図)では、21.001～21.050mと20.751～20.800mの2カ所のピークが認められる。通常このような場合は層位的に分離できる2つの文化層が重複している可能性が考慮されるが、平面的な分布ではまとまりがよい分布状況を示している。そこで、各石片の重量と石片同志の接合状況を平断面図に投影させたのが(第22図)である。これによると、上位のピークにある一群と下位のピークにある一群が接合する事例が多数認められ、重量のある石片は下位にまとまる傾向をある程度読みとることができる。しかし上位の一群にも5g以上の石片が多く含まれていることも事実である。



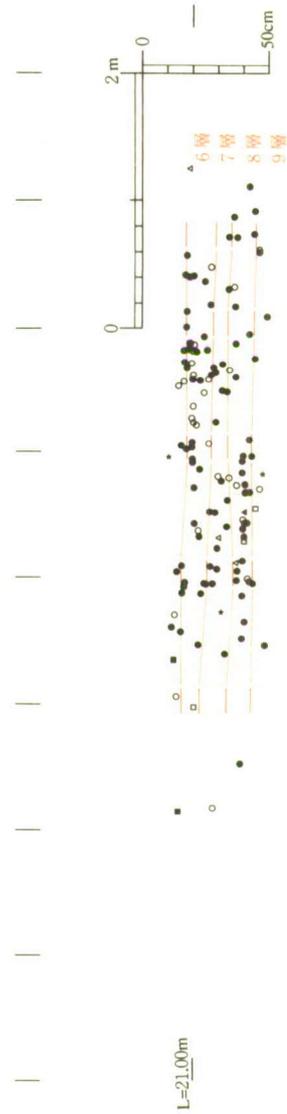
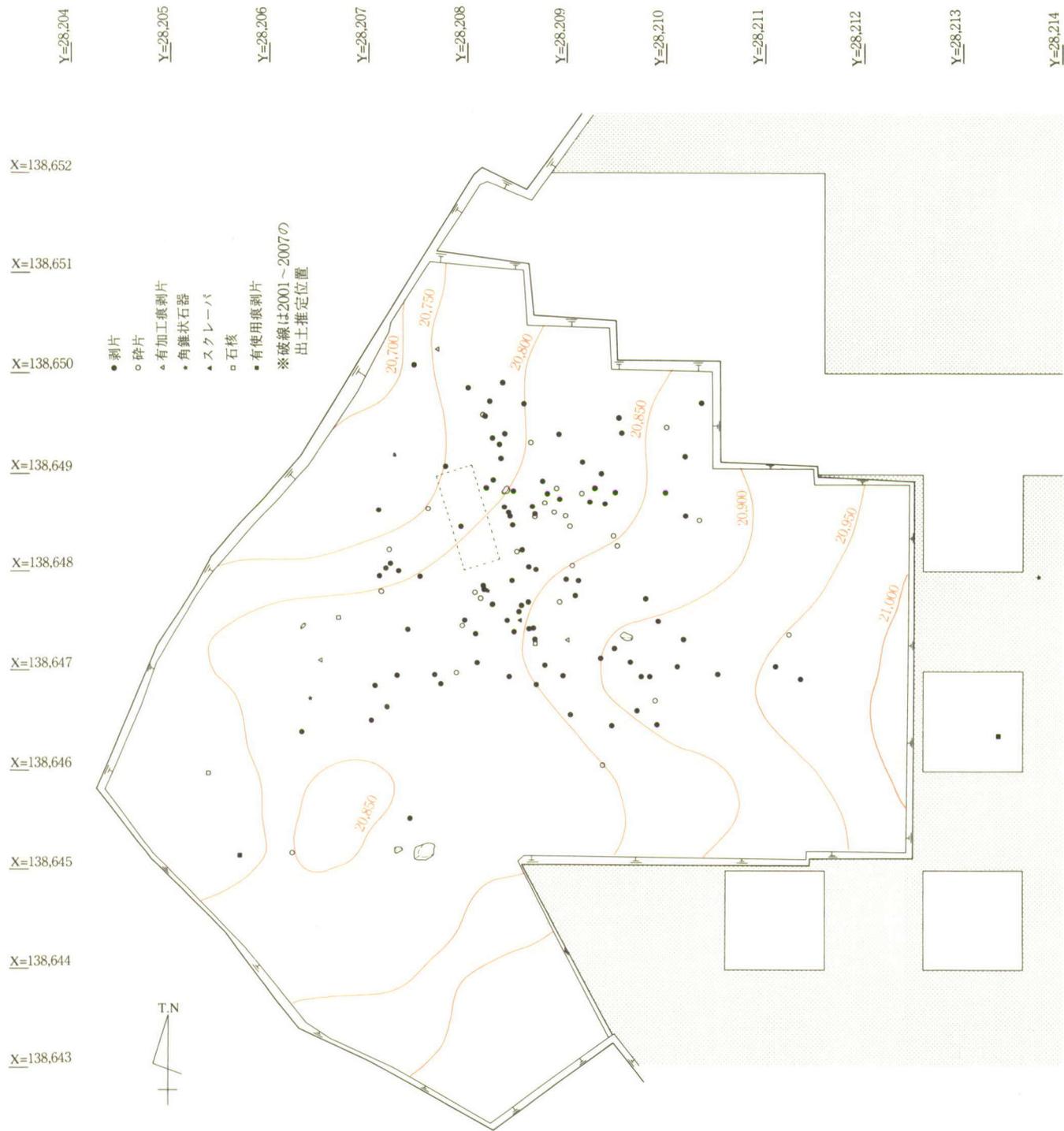
第19図 石器垂直分布グラフ

ここで注意されるのは、上位と下位の接合事例の多くが一定方向に収れんすることである。すなわち、南側（図の左下）の下位の一群と北側（右上）の上位の一群の接合例が非常に多い点である。これは平面的にみても、目安として21.000mより上に分布する遺物の主要な分布域が、下位の石器の主要な分布域とは微妙に北方向にずれていることも合致する。元来、同一時期の石器の垂直分布のうち上位に該当するものは、自然条件等によって浮き上がったものと判断される。このブロックにおいても当然「浮き上がり」を考慮する必要がある、その一群が主として北方向に一様に移動が認められる点は、ブロック形成後にある程度垂直分布が形成された後、上部が何らかの攪拌を受けた可能性を示している。先の土層堆積の状況から推定して、第6層の形成時にその要因を求めるのが妥当と考えられる。

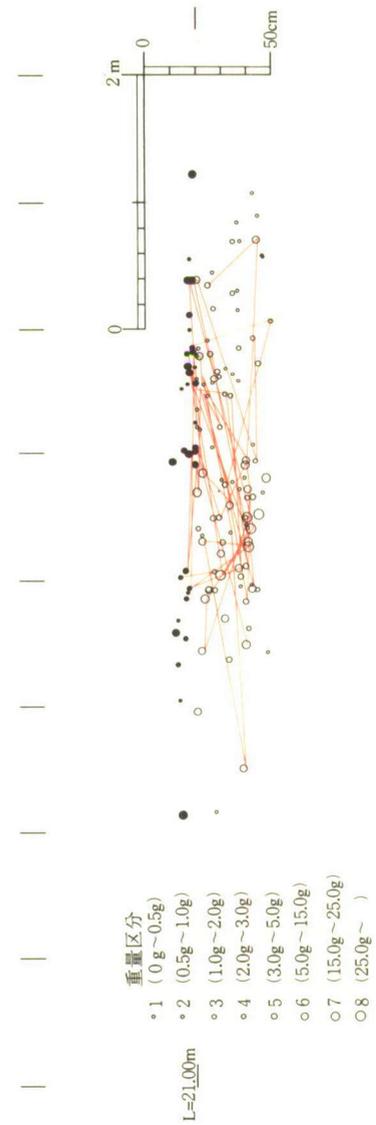
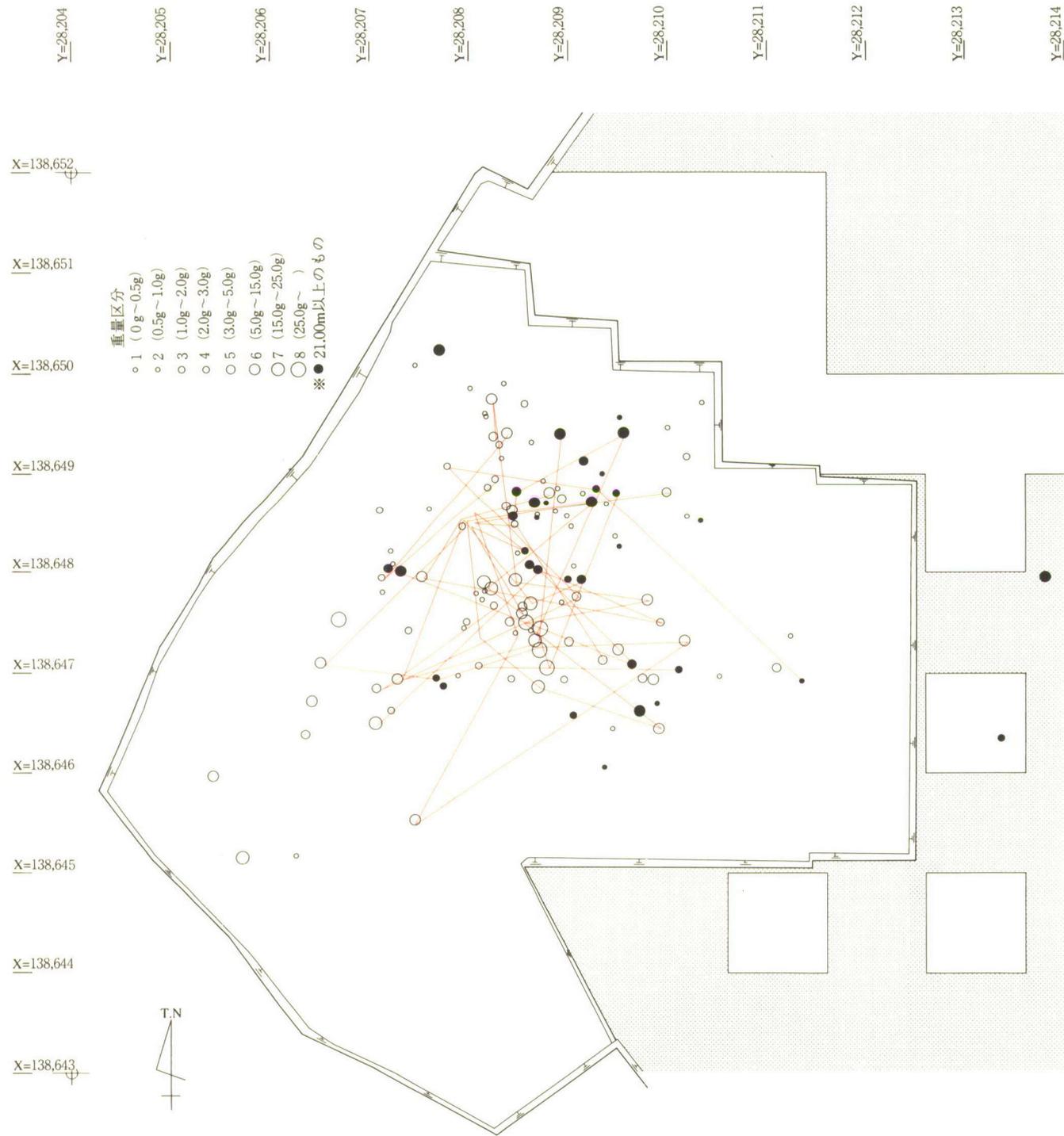
以上のことから、出土した石器群のうち上部の攪拌された一群で、一部散逸した石片が存在する可能性を考慮する必要はあるものの、垂直分布にみる2つのピークは主として自然的要因によって形成されたものであり、石器群自体の一括性・同時性を疑うものではないことを確認できたものと考えられる。



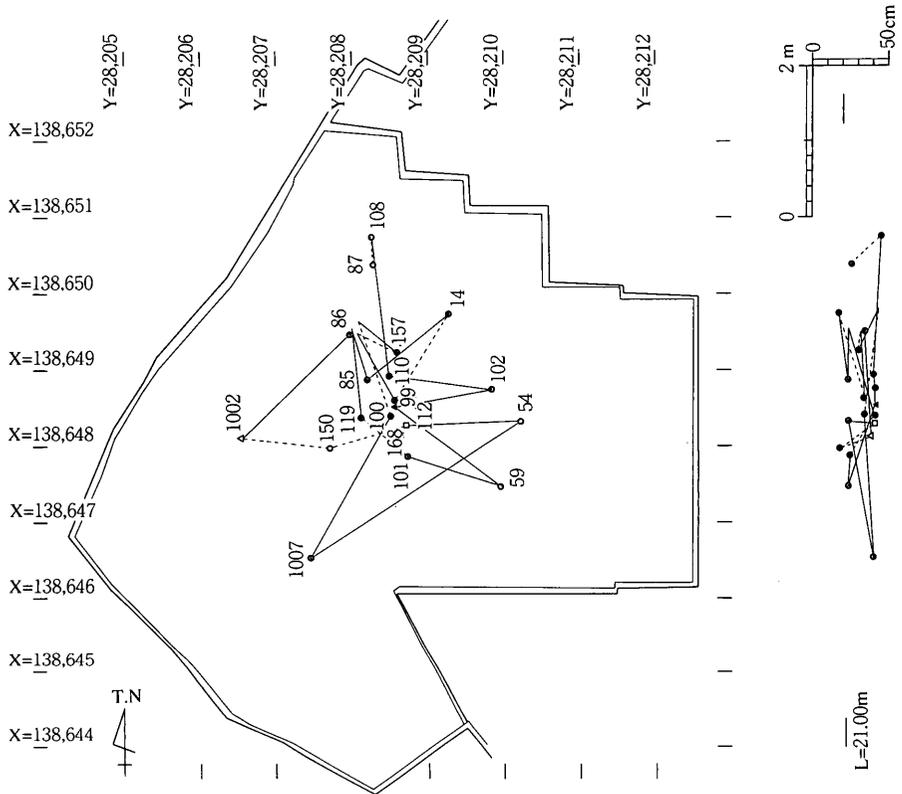
第20図 出土石器重量別比率グラフ



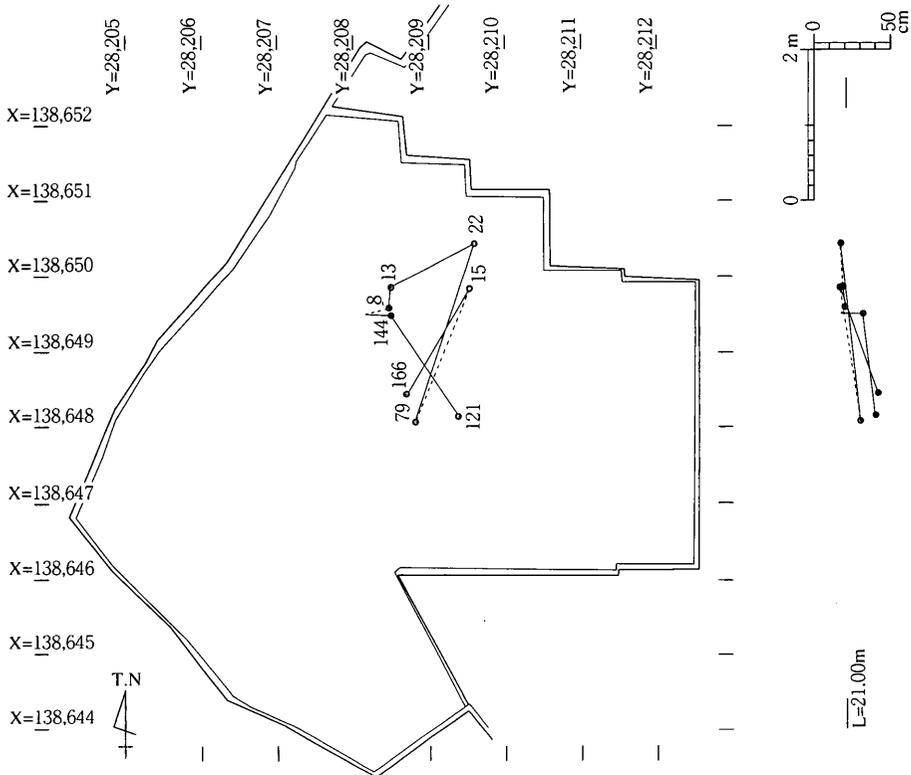
第21図 器種別石器分布図



第22図 重量別分布及び接合関係図

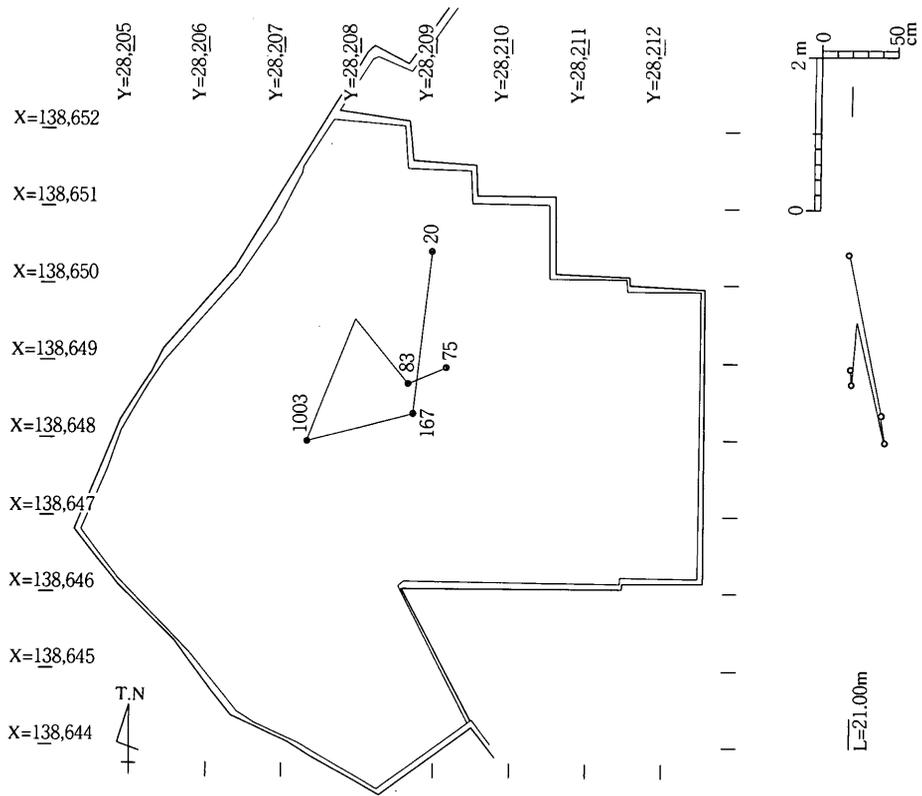


第23図 接合資料 1 分布図

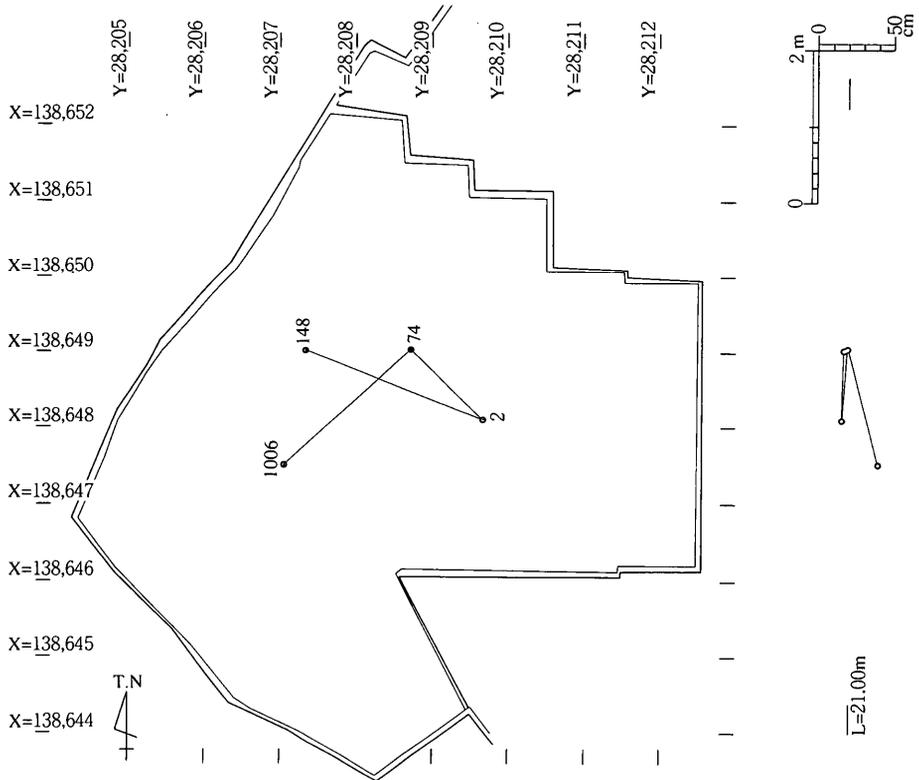


第24図 接合資料 2 分布図

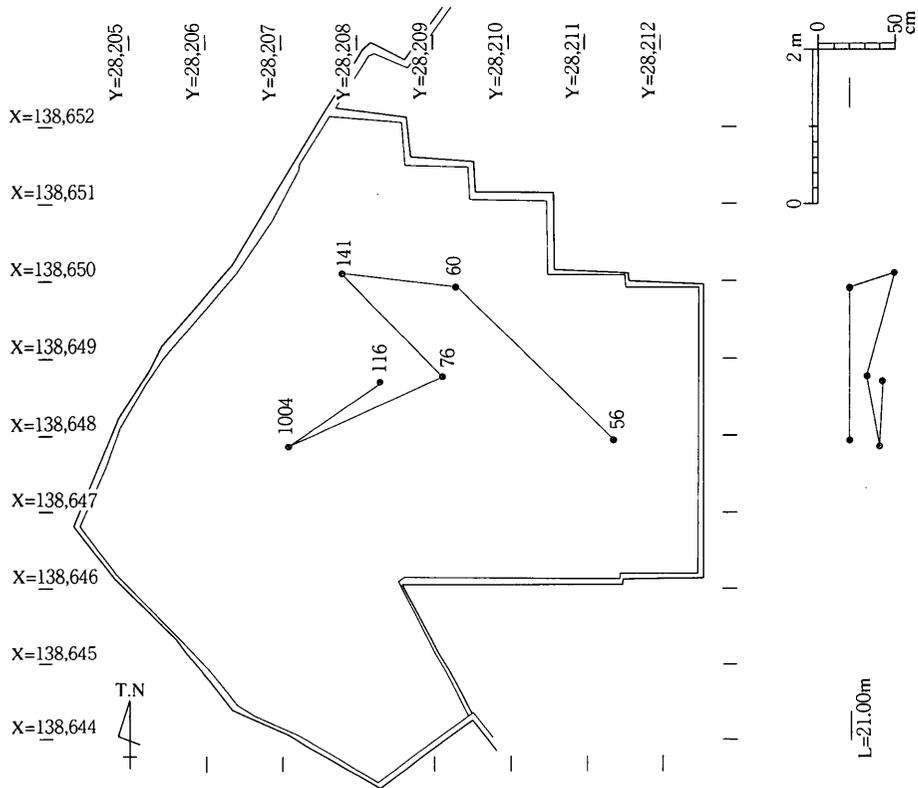
※実線はI種接合，破線はII種接合



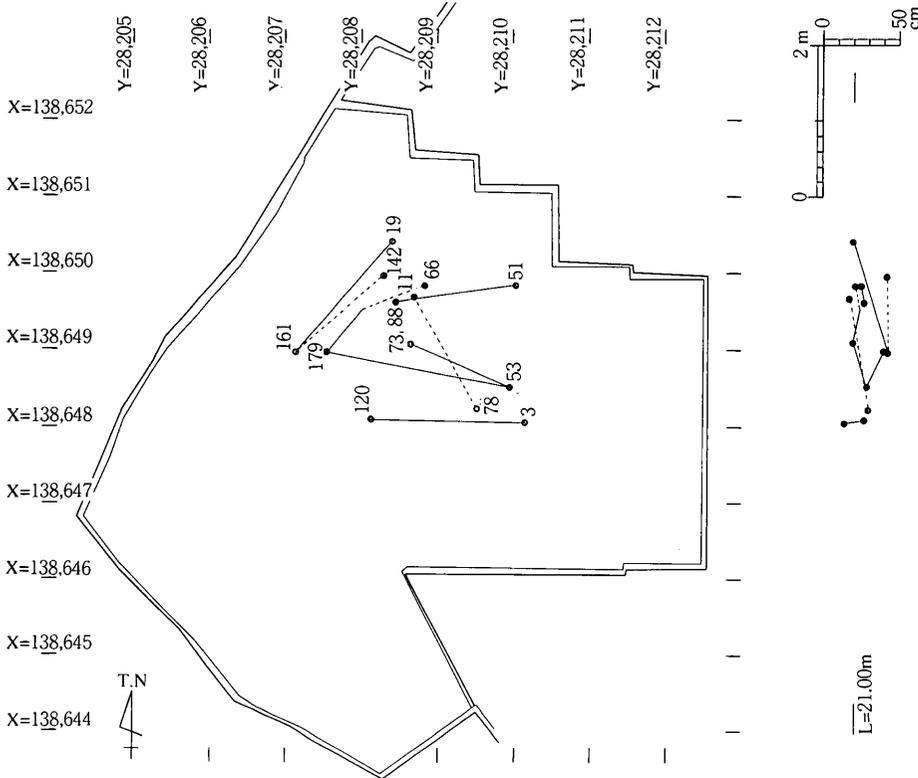
第25図 接合資料 3 分布図



第26図 接合資料 4 分布図



第27图 接合資料 5 分布图



第28图 接合資料 6~10 分布图

(3) 出土遺物

a. 石器組成 (第10～11表・第29図)

石器はブロック内から141点、ブロック外から2点の合計143点が出土した(第10表)。器種は剥片がもっとも多く、101点で全体の7割強を占める。次に多いのは碎片27点で約2割である。定形石器は角錐状石器と削器が確認できる。また少数の有加工痕剥片・有使用痕剥片が存在する。使用に供する石器は全体の7%と少なく、主として石器の生産を主体としたブロックと考えられる。石核は3点が出土している。ただし削器とした1点は石核を転用した可能性もある。

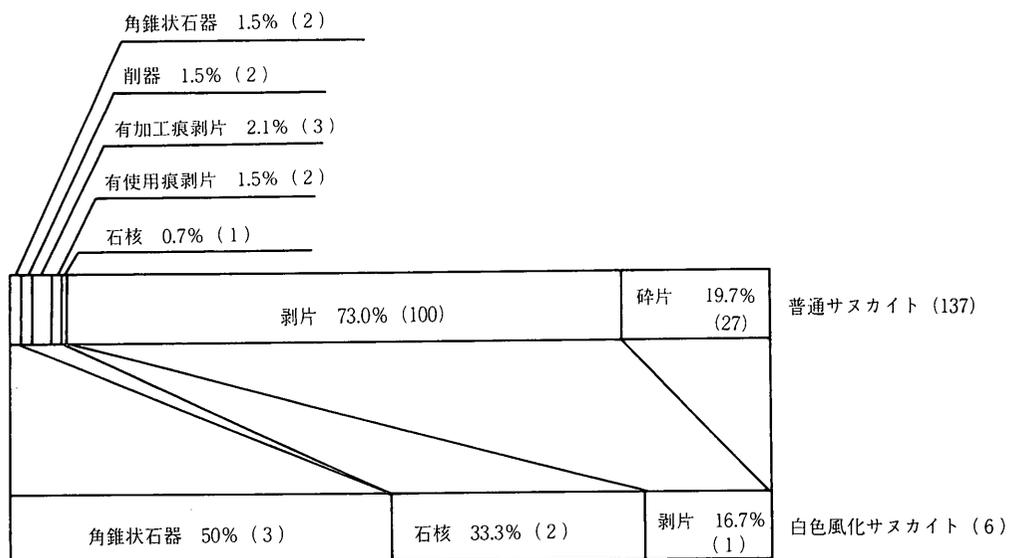
石器の石材はすべてサヌカイトである。サヌカイトは肉眼的には灰色系に風化する「普通サヌカイト」と、白色系に風化して風化度が顕著な「白色風化サヌカイト」に分類することが可能である⁽²⁷⁾。ブロック出土の石器はほとんどが普通サヌカイトであり、白色風化サヌカイトは5点(全体の3%)にすぎない。サヌカイトの分類に従って器種の組成をみると、白色風化サヌカイトは角錐状石器2点・石核2点・剥片1点で構成されており、剥片・碎片が主体の普通サヌカイトの組成とは大きな食い違いを見せる。これは、ブロック内の剥片剥離が専ら普通サヌカイトを使用しているのに対して、白色風化サヌカイトはブロック内での剥片剥離が行われず、上記の器種をブロック内に持ち込み、廃棄したものとみることができる。

器種	ブロック内(比率)		ブロック外	合計(比率)	
角錐状石器	3	2.1%	2	5	3.5%
削器	2	1.5%		2	1.4%
有加工痕剥片	3	2.1%		3	2.1%
有使用痕剥片	2	1.5%		2	1.4%
石核	3	2.1%		3	2.1%
剥片	101	71.6%		101	70.6%
碎片	27	19.1%		27	18.9%
合計	141	100.0%	2	143	100.0%

第10表 石器組成一覧表

器種	普通サヌカイト		白色風化サヌカイト		備考
角錐状石器	2	1.5%	3	50.0%	普サヌ1点・白サヌ1点がブロック外
削器	2	1.5%	0	0.0%	
有加工痕剥片	3	2.1%	0	0.0%	
有使用痕剥片	2	1.5%	0	0.0%	
石核	1	0.7%	2	33.3%	
剥片	100	73.0%	1	16.7%	
碎片	27	19.7%	0	0.0%	
合計	137	100.0%	6	100.0%	

第11表 石材別石器組成一覧表



() 内は実数

第29図 石材別器種組成比較グラフ

b. 角錐状石器 (第30図)

ブロック内から3点、ブロック外から2点の合計5点が出土している。ブロック内の2点とブロック外の1点は白色風化サヌカイトを素材としており、当器種に関しては利用度が高い。

156は普通サヌカイトを素材とする。長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ1.1cmの完形品で断面が三角形状を呈する。底面をもった横長剥片を素材としており、主要剥離面を甲板面とする。背面左縁には甲板面からの丁寧なブランティングを施す。右縁には調整加工時の失敗とみられる大きな剥離面を残す。稜線はそれによってほとんど滅失するが、左縁には稜上加工の痕跡がみられる。基部は折損面で、そこには折損後の左縁末端からの2回の加工痕が認められる。素材剥片の主要剥離面は石理におおむね平行する。

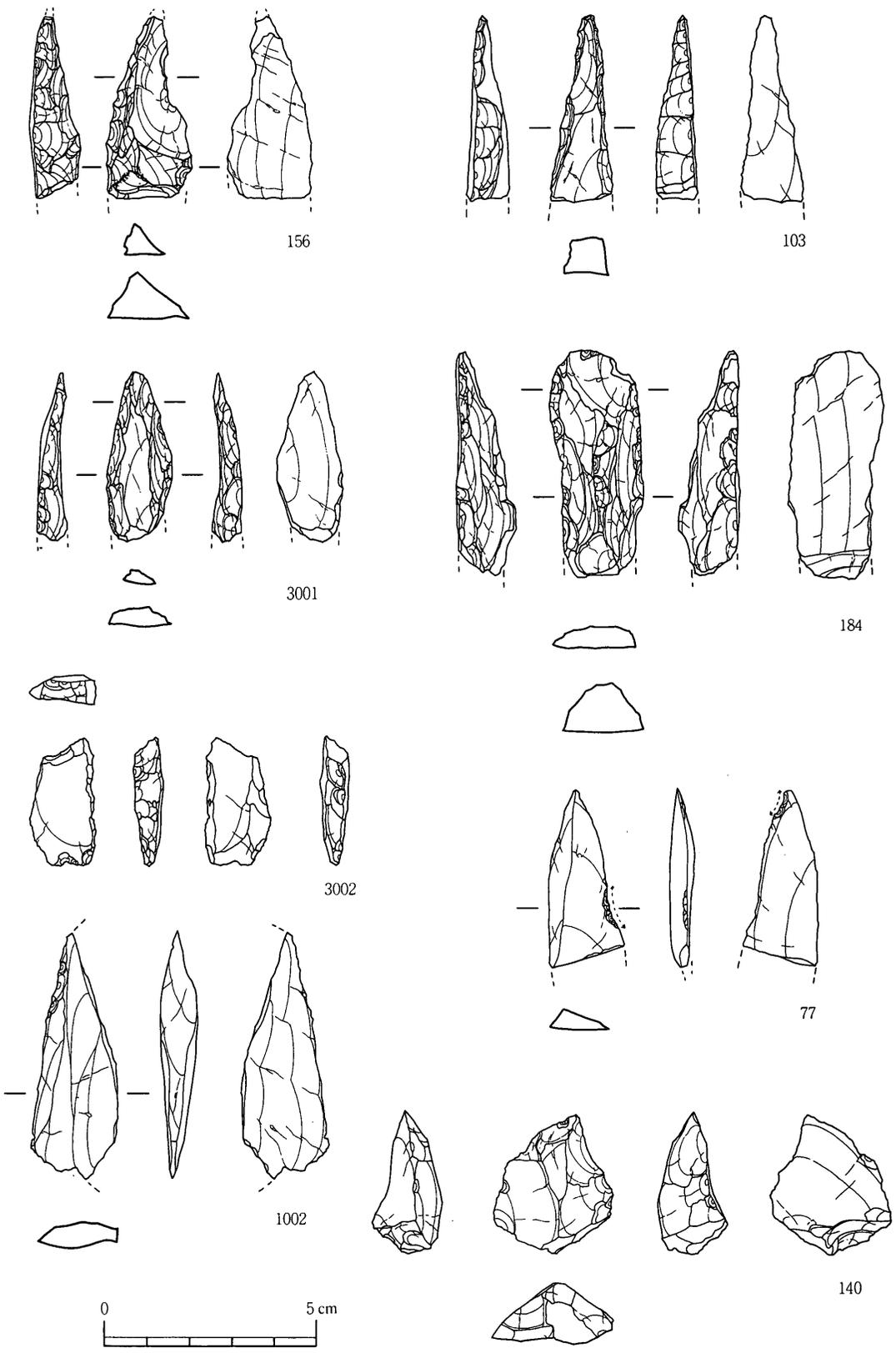
103は断面方形の白色風化サヌカイト素材。長さ4.3cm、幅1.4cm、厚さ1.0cmを測る。極度に風化しており剥離痕の観察は困難を伴う。素材剥片の形状は不明であるが、甲板面は平坦な1面の剥離面、背部に2面の素材剥離面が観察できる。剥離方向は不明瞭。左右両縁に急角度のブランティングを施す。基部は素材剥片あるいは調整加工時の折損面と推定されるが、折損面には加工しない。石理は甲板面と約13°の角度をなす。

3001は長さ3.9cm、幅1.5cm、厚さ0.7cmの薄手。白色風化サヌカイトの横長剥片を素材とし、主要剥離面を甲板面とする。背部には主要剥離面と同一方向の剥離面をとどめる。両側縁に甲板面からのみ調整加工を施す。概して調整剥離角は浅い。基部は風化のため不明瞭であるが、調整加工時に折損した可能性が高い。

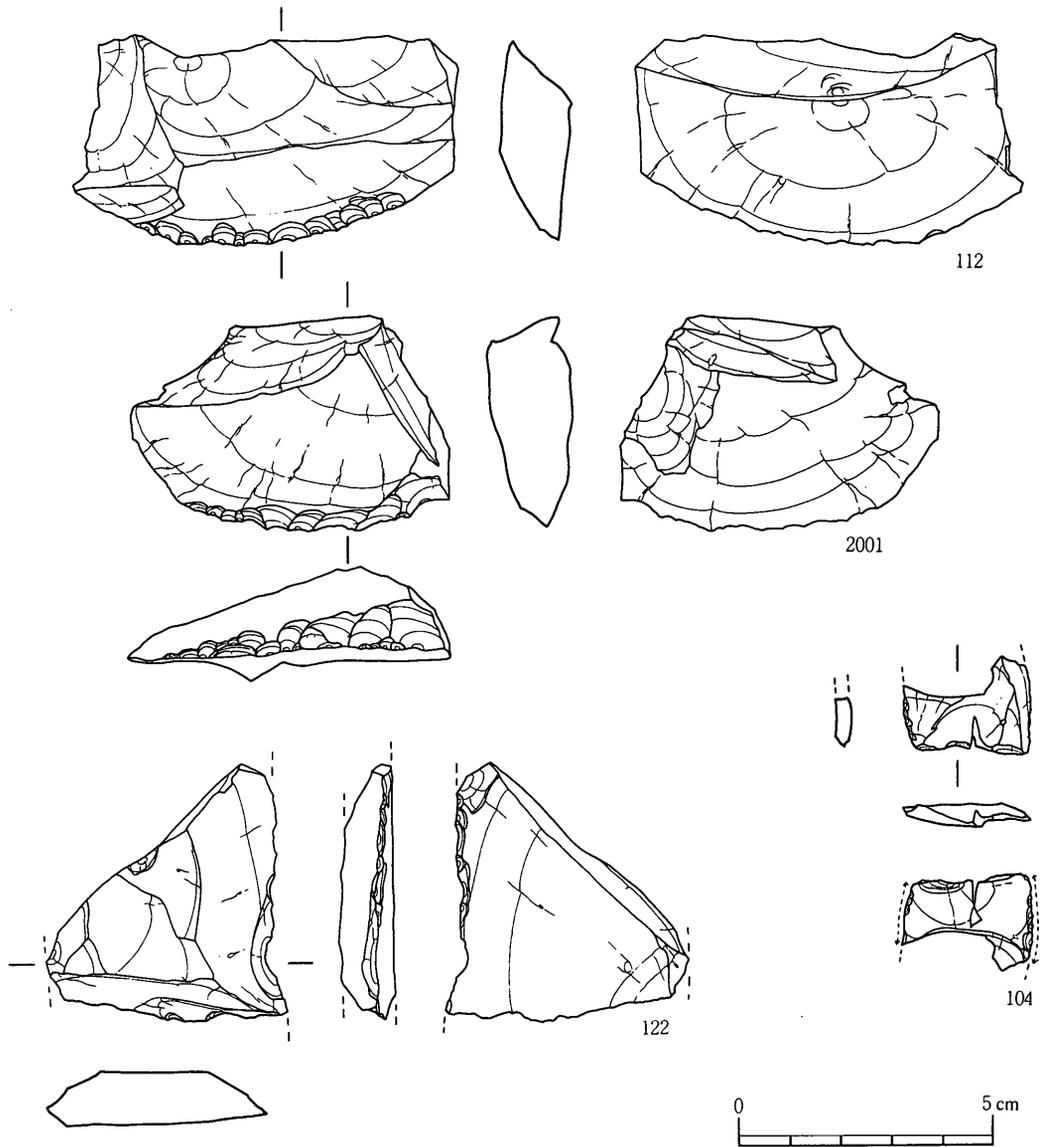
184は長さ5.4cm、幅2.2cm、厚さ1.2cmで断面台形状を呈す。先端は薄くなっており、素材剥片のネガティブな剥離面を残す。両側縁及び稜上をブランティングしており、基部はその過程で折損している。甲板面は平坦な剥離面で、ネガポジの判別は困難。白色風化サヌカイトを素材としており、風化が著しい。甲板面は石理と完全に平行する。

3002は普通サヌカイトを素材とする。長さ3.0cm、幅1.6cm、厚さ0.7cmの小型品。背面に複数の剥離面をもつ横長剥片を素材とし、両側縁に急角度のブランティングを施す。先端は折損面を背部側から加工し、尖頭部の再生を図っている。基部の調整は粗雑である。

以上の5点の角錐状石器はすべて折損品で、いずれも精美な形状はとどめていない。また、156・3002は折損面の再加工が認められた。156・3001・3002は横長剥片を素材とするが、103・184は甲板面が平坦で、石核素材面を留めている可能性もある。いずれの個体にも甲板面に調整加工が施されていない点は注意される。



第30图 石器实测图(1)



第31図 石器実測図(2)

c. 削器 (第31図)

2点出土している。112は接合資料1に所属する横長の作業面調整剥片を素材とし、底縁部に 50° ほどの角度の安定した調整加工を主要剥離側からのみ施す。刃縁は緩やかな弧状を呈し、調整部延長5.5cmを測る。

2001は普通サヌカイトの石核を転用した可能性がある削器で、素材の末端部を片側にのみ $40^{\circ}\sim 50^{\circ}$ の調整加工がみられる。刃縁は弧状を呈し調整部延長5.3cmを測る。

d. 有加工痕剥片・有使用痕剥片（第30・31図）

加工痕をもつ剥片はブロック内で3点が出土した。いずれも普通サヌカイトを使用する。

77, 1002は剥片末端部の細長の折損片を素材とし、先端の尖頭状をなす付近に微細な調整加工を施すものである。77は基部側縁に使用痕と思われる微細剥離痕がある。1002は接合資料1に所属する。加工痕はいずれも安定して認められるものではないが、形態や尖頭部を意識した加工箇所は77と共通する。

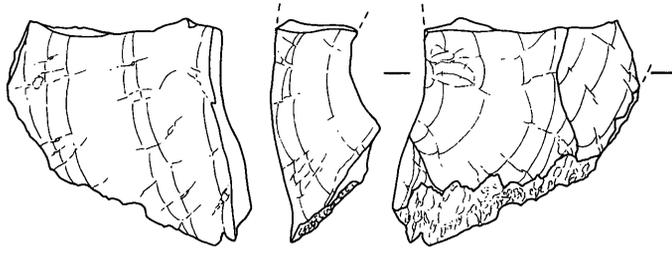
140は半折した厚手の剥片を素材とし、両側縁に部分的な加工痕をとどめるものである。右側縁にはバルブをとどめない剥離面が2面認められる。素材剥片剥離後、主要剥離面側から施された加工は左側縁先端付近に3面、右側縁から折損部にかけて3面が確認できる。

使用痕をもつ剥片は2点出土した。ブロック内の周縁部に位置する。いずれも普通サヌカイトを使用する。122は石理にほぼ平行して剥取された、底面をもつ剥片である。両側縁が欠損し、平面三角形状を呈する。剥片の末端部は直線的で、ほぼ全面に刃こぼれ状の使用痕を認める。104は平坦打面を連続的に打撃して剥取した剥片を素材とし、剥片の両側縁に微細な使用痕をとどめている。底縁部の折損面は使用痕を切っており、使用痕の形成後に折損したものである。

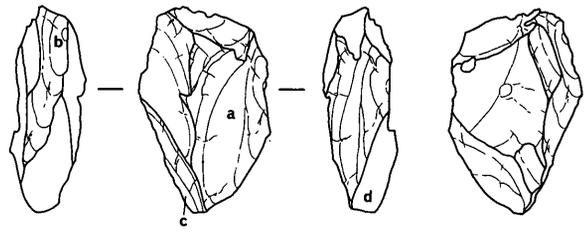
e. 石核（第32図）

ブロック内より3点が出土した。接合資料1に所属する168が普通サヌカイトで、他の2点は白色風化サヌカイトである。

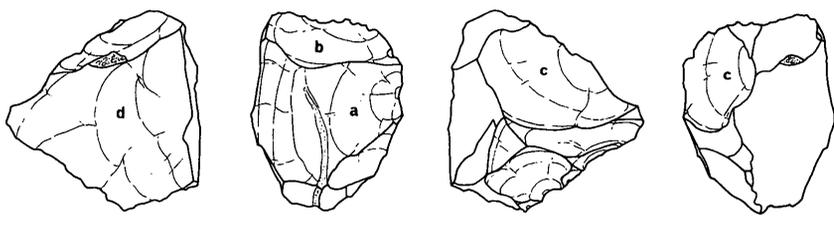
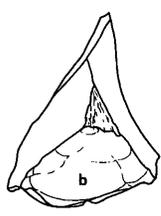
168は石核上面の剥離面が最終剥離面であるが、接合資料1の検討により、これは打面調整であることが判明するために、最終の作業面としての剥離面は、底縁と119°をもつ前面の剥離面である。ここに横長剥片1007が接合する。石材中の気泡が認められ、それを原因として剥片剥離中に半折している。1007が剥取される前の作業面の幅は接合状態から推定して約10cmであり、一方に偏った位置を打撃している。折損は1007剥取後の打面調整の54を打撃した段階で生じたものと推定される。また末端部も同時に折損し、同時割れの石片である150+86と有加工痕剥片1002が生成されている。石核としての単体での検討では、石核の性格を推定することは困難であるが、接合資料の検討から翼状剥片石核であることが判明する。



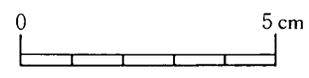
168



153



1001



第32图 石器实测图(3)

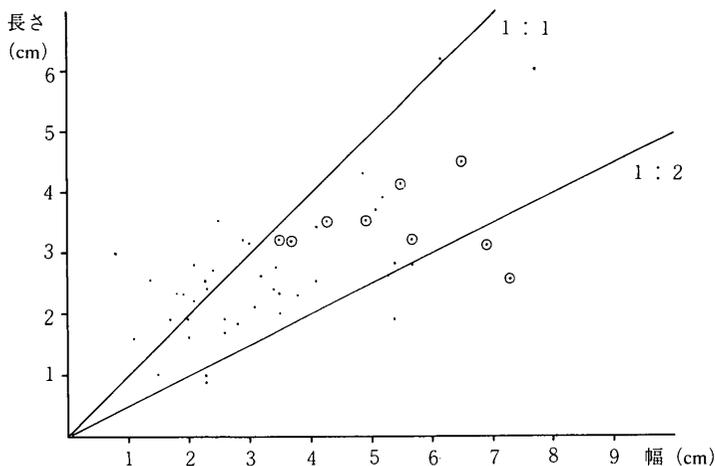
153は風化によって石理の縞目がより顕著になる石材を使用している。この特徴は角錐状石器103の風化状況に酷似する。石理に沿って剥取された剥片を素材とする。最終剥離面は対向するa・b面が該当し、それ以前の剥離面はd面→c面の順で交互に形成される。a面は幅3.5cm、高さ1.6cmを測る。打面の転移、並列的剥離など、消耗が著しい石核の形態を示す。

1001は表面が粉状に風化する石材を使用している。この特徴は角錐状石器184・3001及び剥片147の風化状況に酷似する。d面は素材剥片の主要剥離面と推定される。d面と石理とは約60度の角度をもつ。剥離面はc面→b面→a面の順で形成されており、石理とは無関係に、頻繁な打面転移を繰り返し、不定型な剥片を剥取していることがわかる。a面は幅3.1cm、高さ2.9cmで、末端はヒンジフラクチャーを生じている。

f. 剥片（第43～49図）

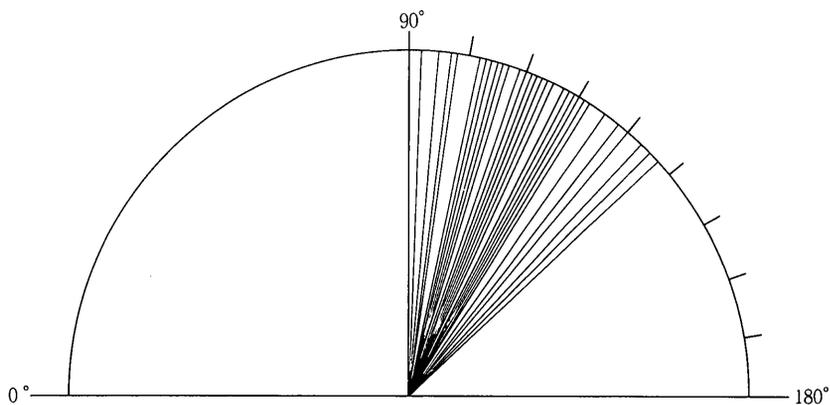
剥片はブロック内より101点が出土した。概ね1cm以上の大きさをもつものを対象としている。これらは打撃時に打面部や底縁部を欠損するもの、あるいは垂直割れ、ヒンジフラクチャーによる割れ、同時割れなどによって生成されたものを含んでいる。石材は1点の白色風化サヌカイトを除いて、すべて普通サヌカイトで構成される。

なお、ここで取り扱う剥片の大多数は調整剥片と考えられる。調整剥片は剥片剥離中のあらゆる現象に対応して適宜生成された可能性があるが、接合資料との整合を含めて類型化を行うこととする。

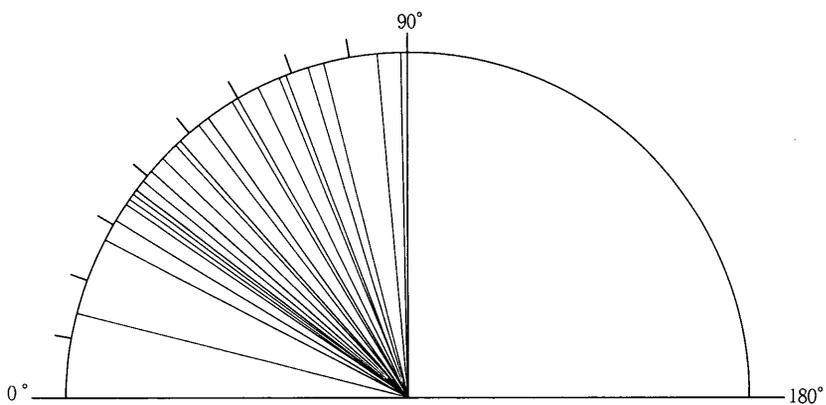


○は接合資料1・3に所属する打面調整剥片

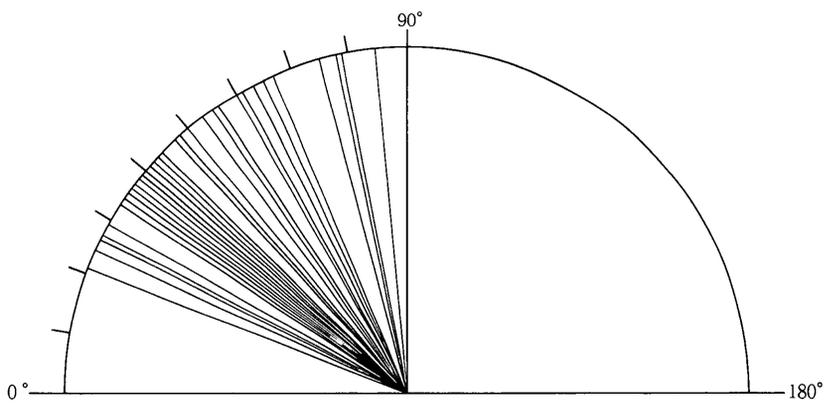
第33図 完形剥片長幅グラフ



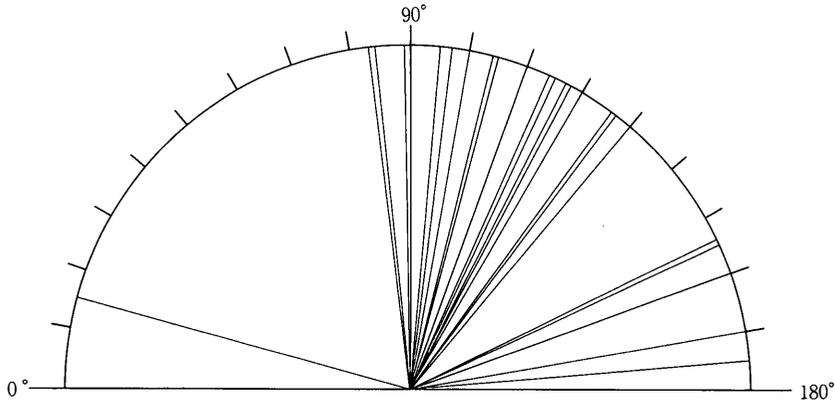
第34図 剥片剥離角分布グラフ



第35図 刃縁角分布グラフ（底面保有剥片）



第36図 刃縁角分布グラフ（底面をもたない剥片）



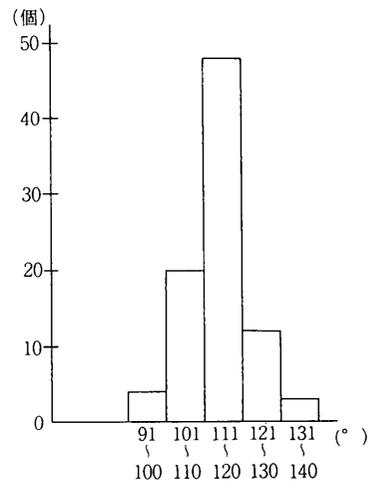
第37図 石理角分布グラフ (判明分のみ)

剥片の大きさと形状を把握するために、完形剥片の長幅比を第33図のグラフに示している。大きさは、幅が1～8 cmの範囲に分布し、長さは1～6 cmの範囲で分布する。全体的な傾向は横長であるが、大きさに対応して形状の特徴が異なっている。長さ3 cm未満の剥片は長幅比1:1のラインを中心に縦長と横長がほぼ均等に分布するのに対して、長さ3 cm以上の剥片は1:1のラインを境に縦長となるものはほとんど見られない。

剥片剥離角は90～135度の範囲に分布する(第34図)。分布の中心は110～120度のエリアで、約半数がこの範囲に含まれる。

剥片類の特徴を抽出するために打面部と背面の形状が観察可能な剥片を中心として、次のように分類した。

- 1類 平坦あるいは点状の打面部をもち、背面に当該剥片と打面を共有し、かつ背面中央にバルブをとどめる剥離面が認められるもの
- 2類 平坦あるいは点状の打面部をもち、背面に当該剥片と打面を共有し、かつバルブが左右に振れる剥離面が認められるもの
- 3類 平坦な打面部をもち、背面に主要剥離面と同一方向の、バルブをとどめない剥離面をもつもの



第38図 剥片剥離角度数分布グラフ

分類	点数(比率)	完形率	重量(g)	厚さ(cm)	剥離角(°)	底縁角(°)	石理角(°)	隣面付着率	底面保有率	背面構成(A:B:C:D)
1類	27 (31.8)	51.9%	3.5	0.6	112.4	50.7	106.0	33.3%	29.6%	53 : 4 : 0 : 1
2類	33 (38.8)	69.7%	6.1	0.7	114.3	52.8	113.3	30.3%	48.5%	77 : 14 : 0 : 0
3類	7 (8.2)	85.7%	8.3	1.0	112.7	43.1	97.0	28.6%	71.4%	10 : 3 : 3 : 0
4類	4 (4.7)	25.0%	8.1	0.7	115.8	60.8	160.0	0.0%	100.0%	4 : 0 : 0 : 0
5類	14 (16.5)	35.7%	7.4	0.7	115.0	47.5	100.8	53.3%	13.3%	6 : 3 : 0 : 1
小計	85									・重量～石理角は平均値
6類	22									・有使用痕剥片, 有加工痕剥片, 削器を含む
総計	107									

第12表 剥片総括表

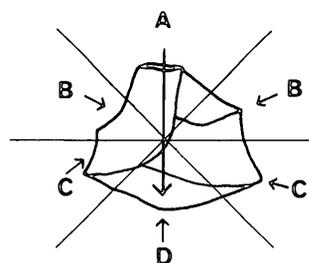
4類 山形に調整された打面部をもち、背面に主要剥離面と同じ方向の1～2面のネガティブな剥離面が認められるもの

5類 背面に礫面あるいは大きな剥離面（素材面）をもつもの

なお、石器一覧表ではその他の同時割れ、垂直割れで生じた石片などを6類として表記している。

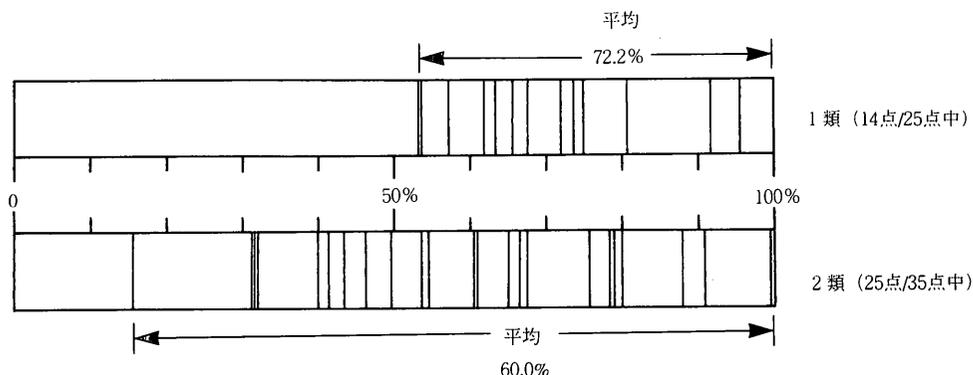
各分類毎の数量を第12表に示している。1類～5類までの分析有効数85点のうち、2類が33点、1類が27点で、両者あわせると全体の約7割を占める。

上記分類は背面の先行する剥離面をもとに分類している。背面が1面で構成されるものは少なく、ほかの剥離面の状況を反映させるために、各剥離面の剥離方向を観察し、直前のネガ面以外の剥離方向を第39図のようにA～Dに分類した。その結果、全体の8割以上がAに所属した。ブロック出土の剥片は、このように主要剥離面と同じ方向のみの剥離面を背面にとどめるものが圧倒的に多い。後述する接合資料においても、打面を転移する工程は認められず、単一方向から剥片剥離を進行する特徴を抽出することができる。



第39図 背面剥離方向分類図

以下、各分類毎に説明する。



第40図 完形剥片の打面幅/最大幅比分布グラフ

剥片1類（第43・44図）

1類は打面の形状に特徴がある。剥片を打面部側から見ると、打点を中心として翼状に打面部が広がり、比較的横長の打面部をもつものが多い（第40図）。最大幅3 cm未満の2002・90・5から最大幅5 cmを越える8 + 2008・88・2007まで、大きさに関係なく、打面形状に共通性がある。また、底面付着率が29.6%と、次の2類と比較すると低い。これは、石核上の同一箇所を連続的に打撃することから、石核上の打面部分に凹面が形成され、さらにそこを打撃することで、上記のような打面形状となるのであろう。また「力」の抜けが悪く、底面まで到達しないために、底面の付着が少なくなるものと思われる。また、完形率が51.9%と、2類や3類に比べて低いことも、打撃前に打面部や剥離面の調整を行わず無理な打撃を行っていることを反映している。剥離角は平均で112.4°であり、ほかより若干深い剥離を行っている。また、背面に横方向からの剥離面が認められるもの（背面構成B・C）がほかより若干多いが、ほとんど（91%）は同一方向の剥離面である。平均の重量や厚さは、各類の中でもっとも低い数値を示す。

以上の属性から、まず生成される剥片が製品加工に適したものではなく、調整剥片であった可能性が高いものと考えられる。その上で、当該調整剥離の効果は、局所的な石核の変形度を増幅させることにあったものと考えられる。後述する剥片2類が、打点を横方向にずらして、全体的に石核の厚みを減じたり、石核の変形を避けて効果的に調整を行うのに対して、剥片1類はむしろ強制的に石核の形状を変更し、特定の意図達成するために便宜性を排除して、非効率的な剥片剥離を行った結果として生成された剥片といえる。

接合資料においては、接合資料3に作業面を補正するために連続的に4回の打撃を行っている例が認められる。

剥片 2 類 (第45・46図)

2 類の打面形状は、いびつなレンズ状のものが多く、ほかに点状のもの (109・160) が含まれる。剥片の平面形は大小問わず、平行四辺形状のものが多く、「力」が左右いずれかに偏って伝わっていることがわかる。

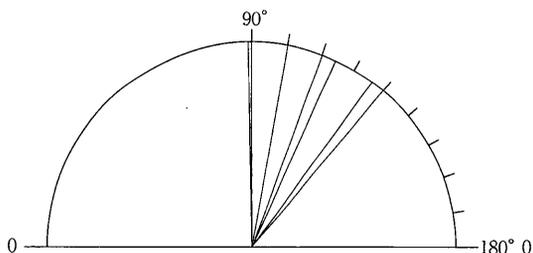
完形率は69.7%と高く、1 類と対照的である。これに対応して、底面付着率は約48.5%と、比較的高い。背面は同一方向の剥離面が84.6%である。

石理角の平均値は 113.3° と、1 類とさほど違いは見られないが、個別に見ると1 類が平均値周辺に集積する (第41図) のに比べ、2 類は 100° 前後のピークと 150° 前後のピークに分散している (第42図)。前者は打面と石理が平行に近いグループで、後者は主要剥離面と石理が平行に近いグループである。石理に関しては、接合資料や県内他遺跡の様相を観察する限り、比較的厳密に使い分けがなされており、主要剥離面と石理が平行するのは、目的剥片かあるいは作業面調整の剥片と考えられる。また、打面と石理が平行するものは、打面調整剥片を含むと考えられる。ただし、接合資料4に見られるような、石核の形状を大きく変化させず、一様に厚みを整形するために行われた剥片剥離も、この剥片を生成するものと考えられる。

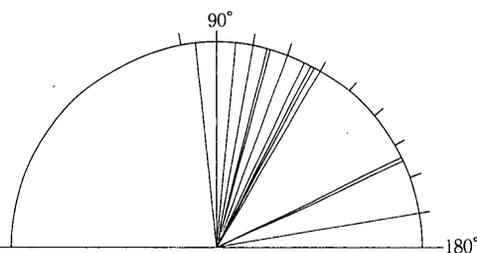
剥片 3 類 (第49図)

3 類はすべて石理に反して剥離される剥片で、7 点中3 点が接合資料1 に所属する。交互剥離状の剥片剥離においてもこれと同様な剥片が生成される可能性があるが、その場合は主要剥離面と石理が概ね合致するものが多いことが知られており、当遺跡の剥片は該当しない。

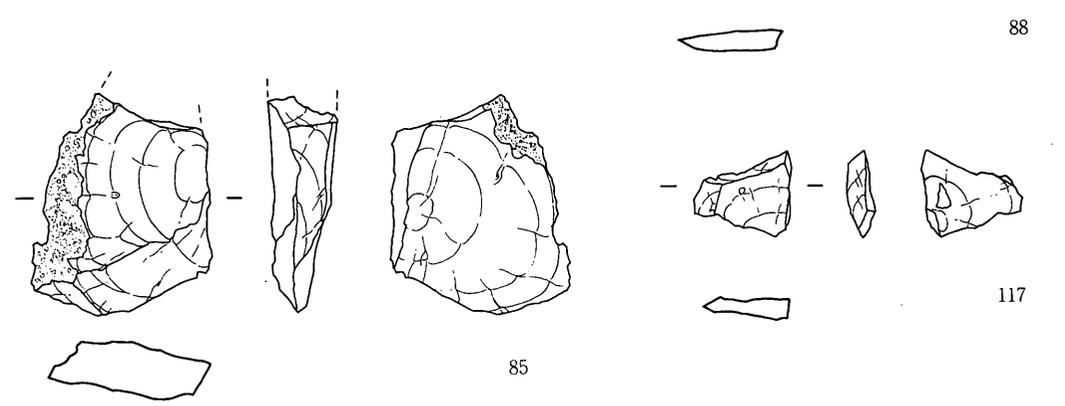
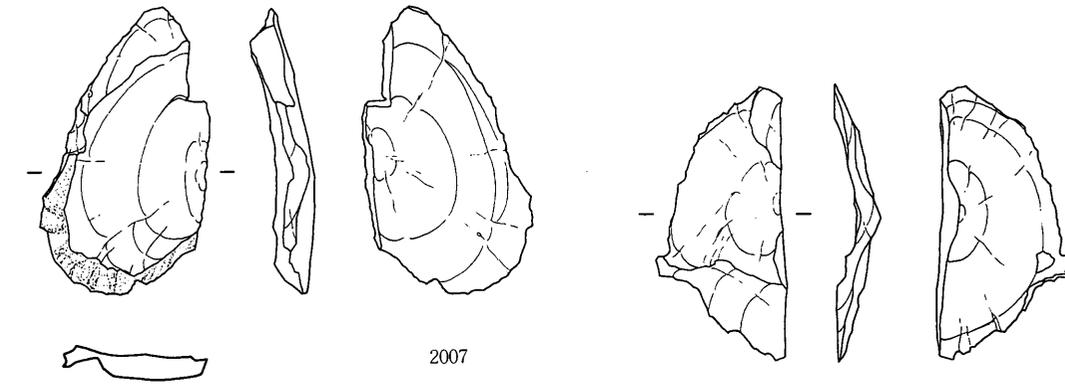
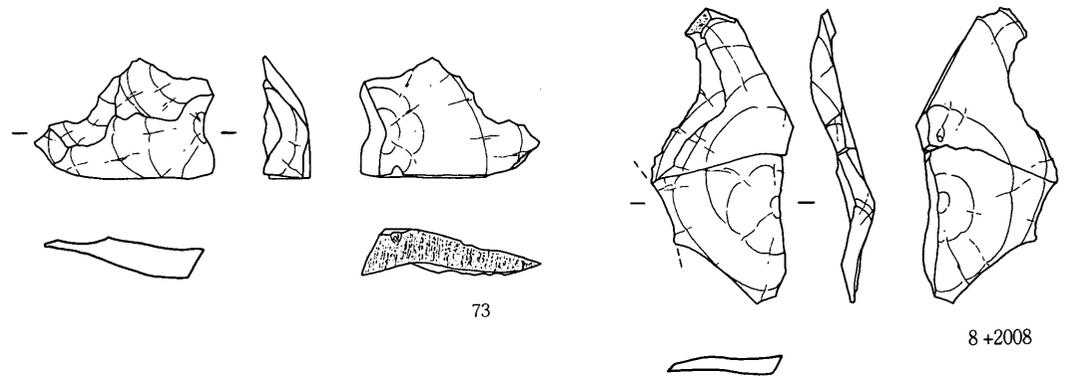
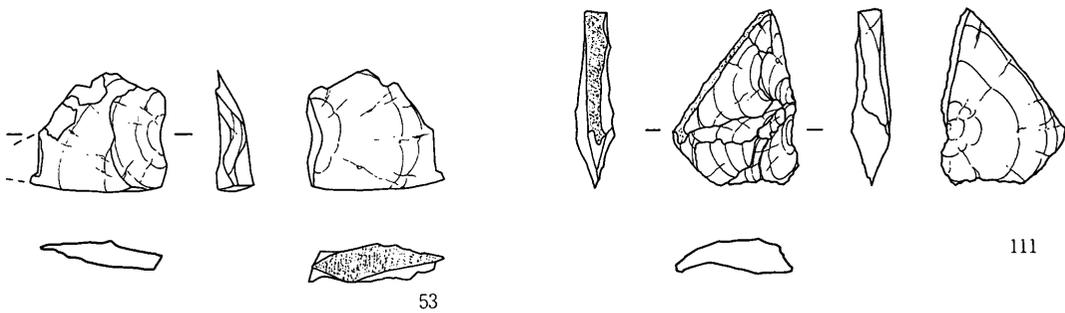
作業面と打面が明確に区分されている石核から剥離された打面調整剥片が多いと考えられる。



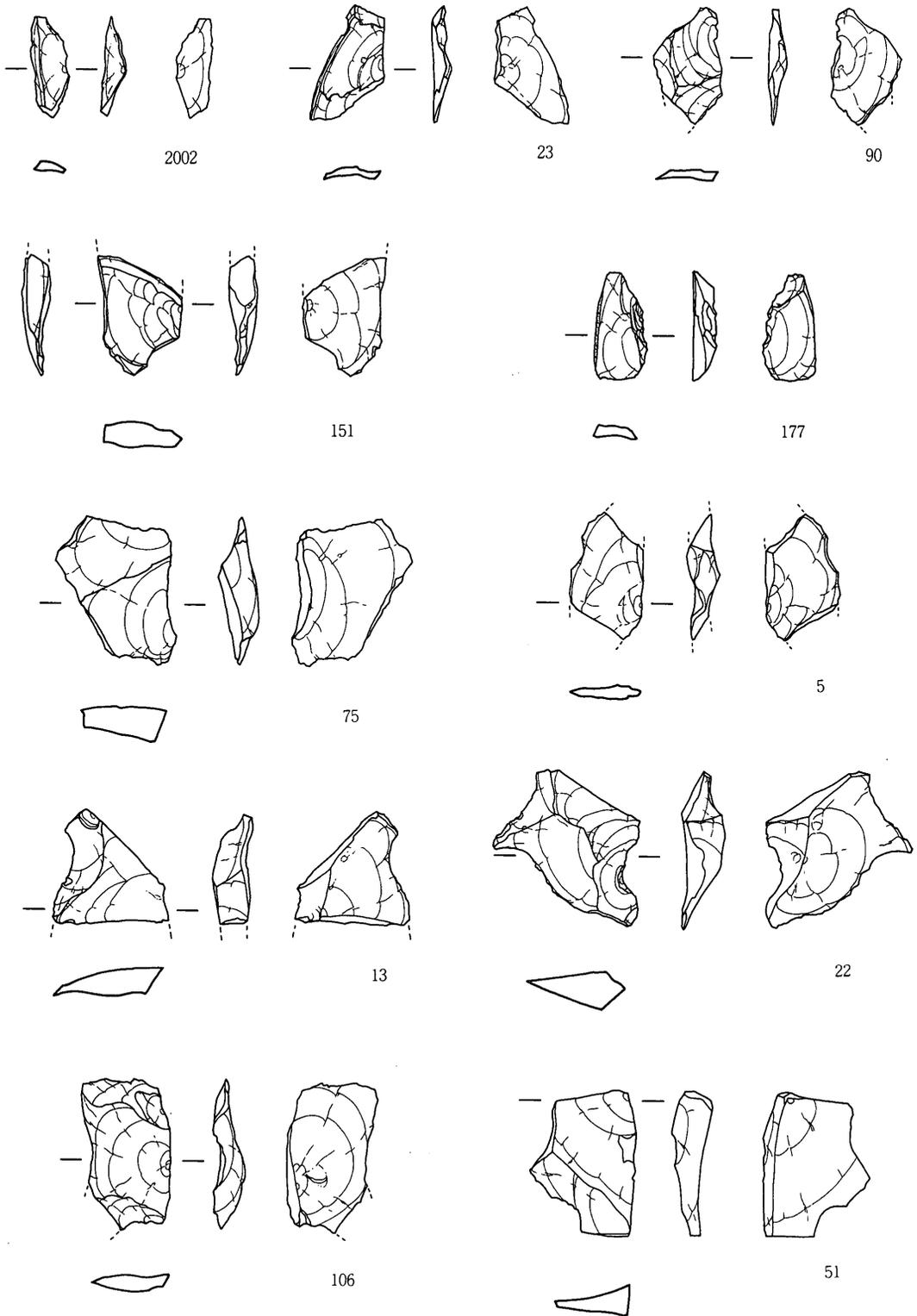
第41図 剥片 1 類の石理角分布グラフ



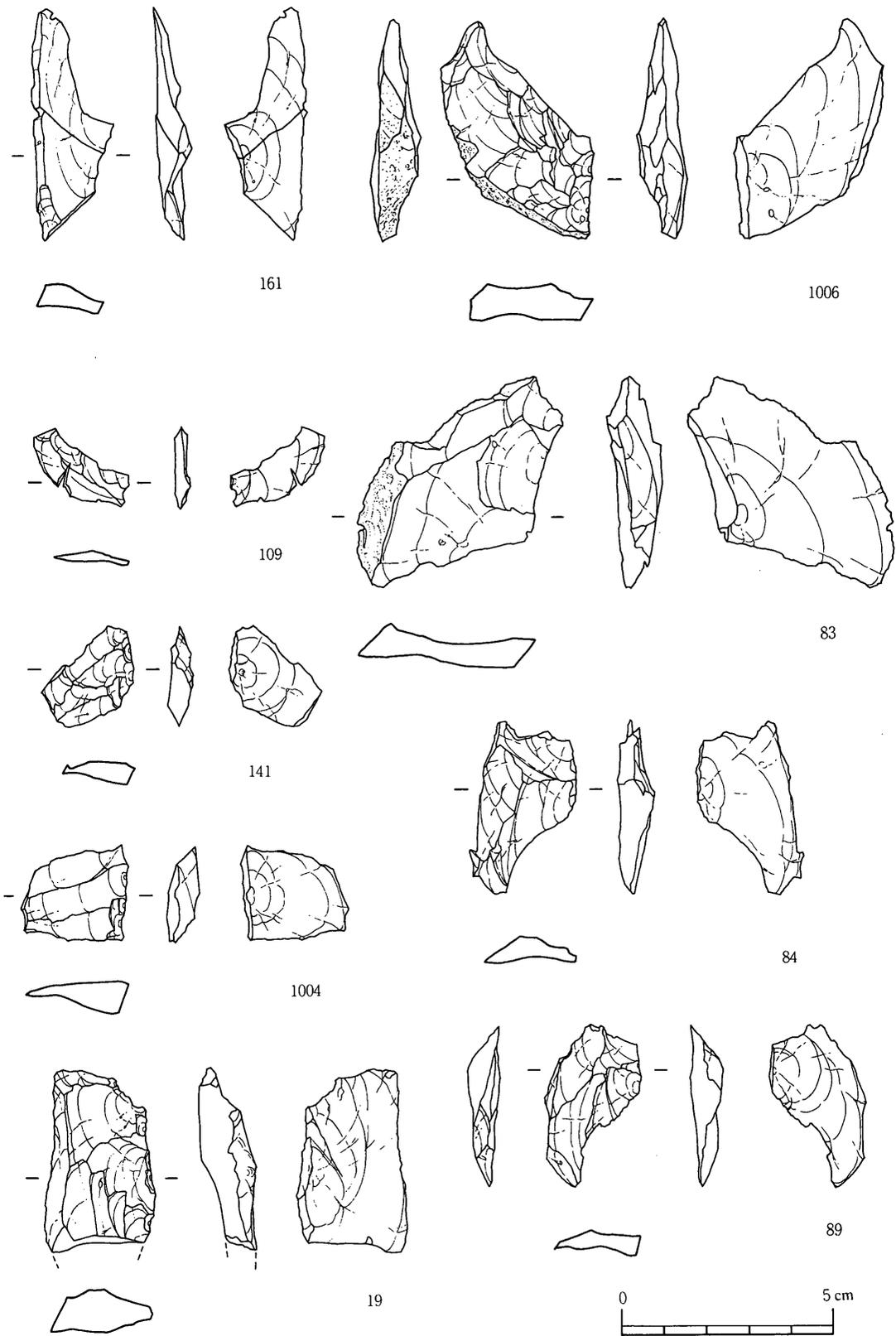
第42図 剥片 2 類の石理角分布グラフ



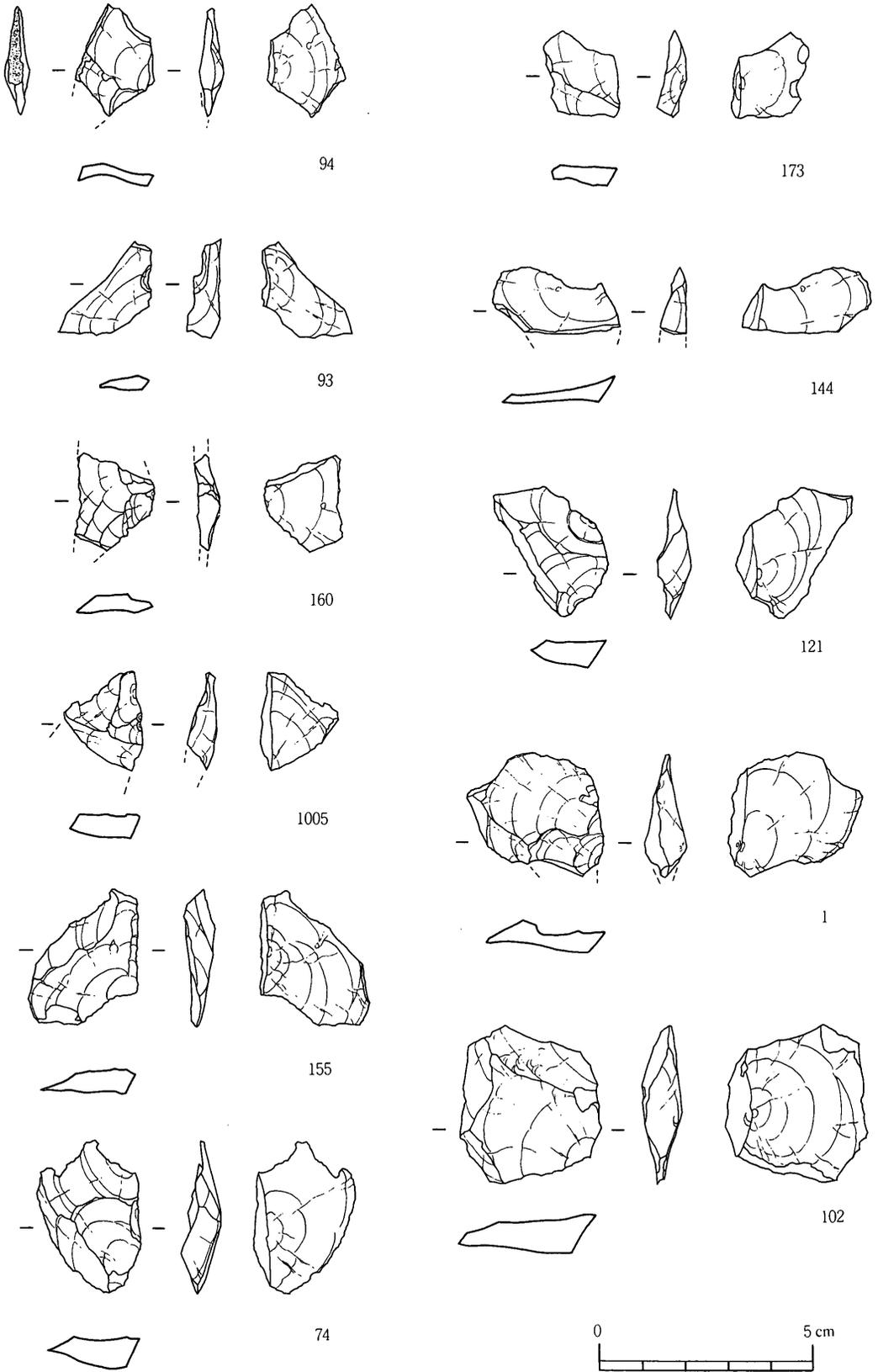
第43图 石器实测图(4) —剥片1類—



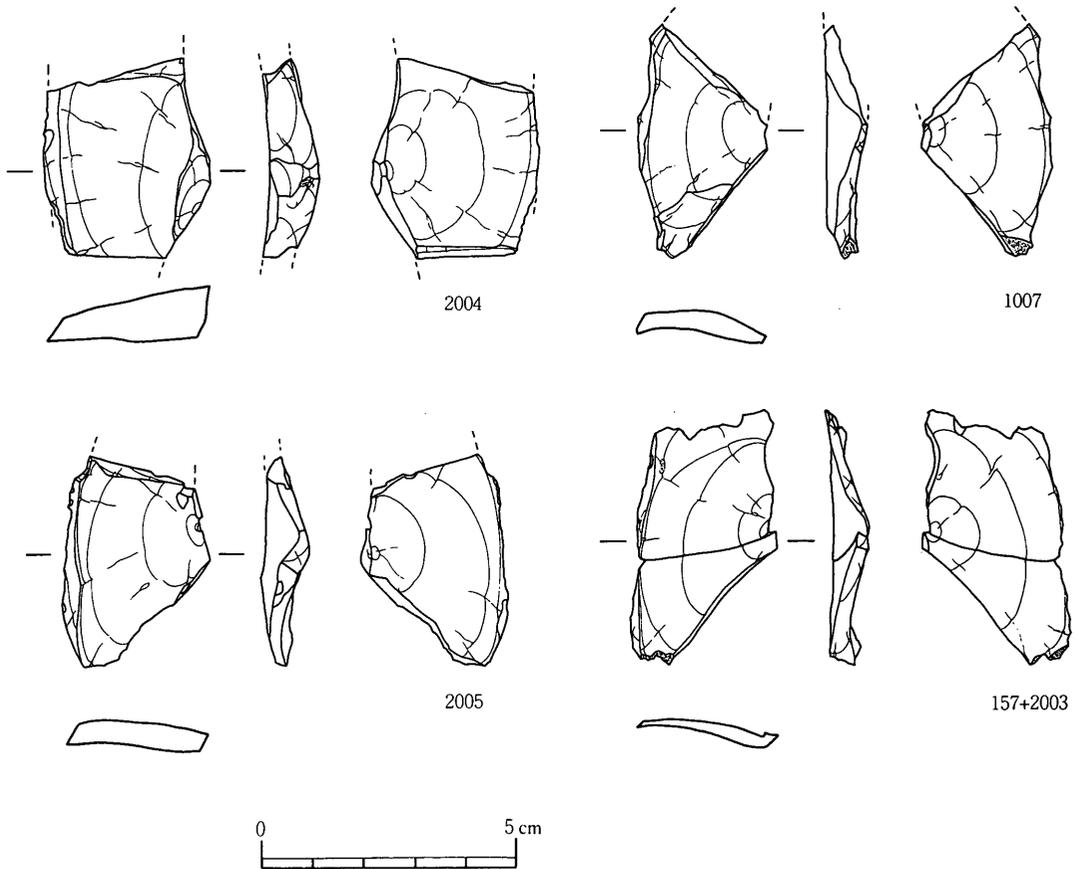
第44图 石器实测图(5) - 剥片1類 -



第45图 石器实测图(6) - 剥片2類 -



第46图 石器实测图(7) - 剥片2類 -



第47図 石器実測図(8)－剥片4類－

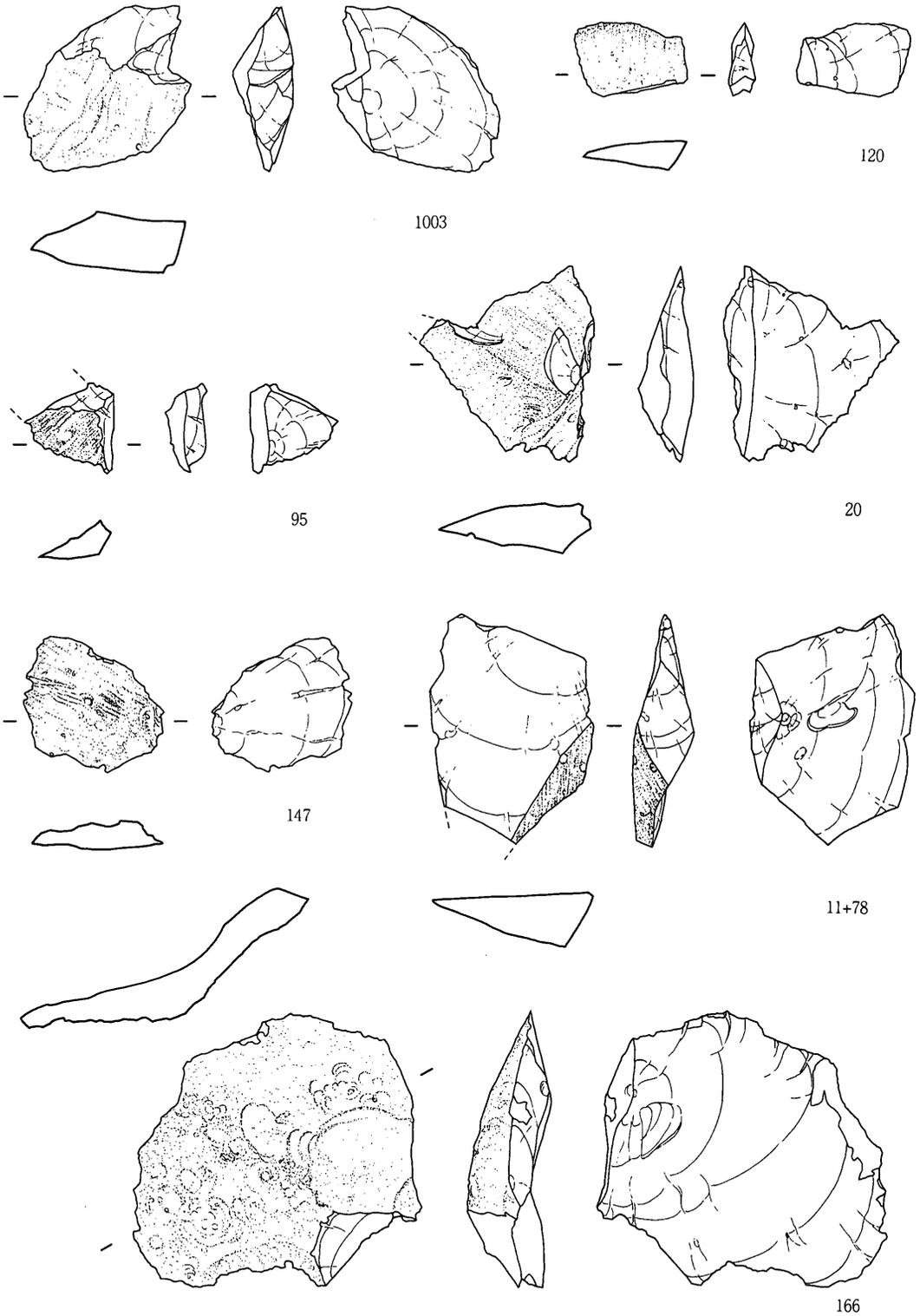
剥片4類 (第47図)

抽出した4点はすべて接合資料1に所属する剥片である。1007, 2005, 2004の3点は折損する。157+2003は打点付近で半折したものがⅡ種接合した厚さ0.4mmの薄い剥片で、接合面に同時割れによる段差が認められる。接合資料3には理論的には当該分類に該当する167(第59図)が存在するが、折損や底面の取り込み等の事故によって、剥片を単体で分類した場合に区分されるべきものとはなっていない。

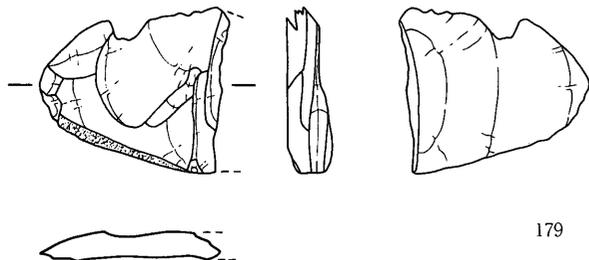
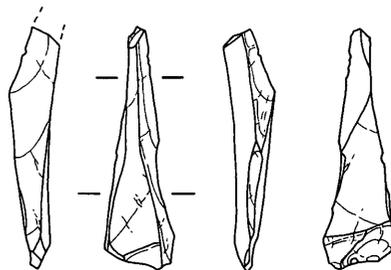
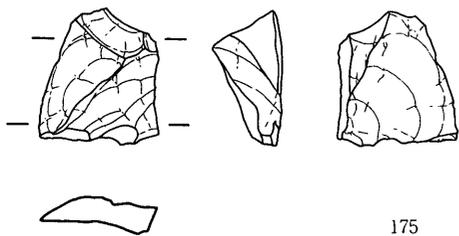
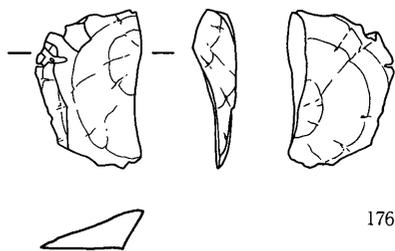
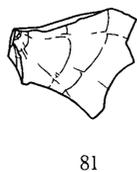
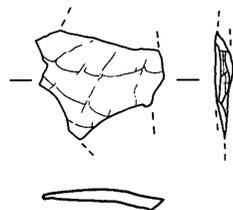
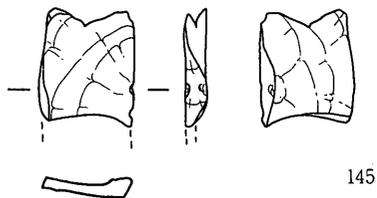
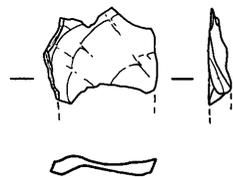
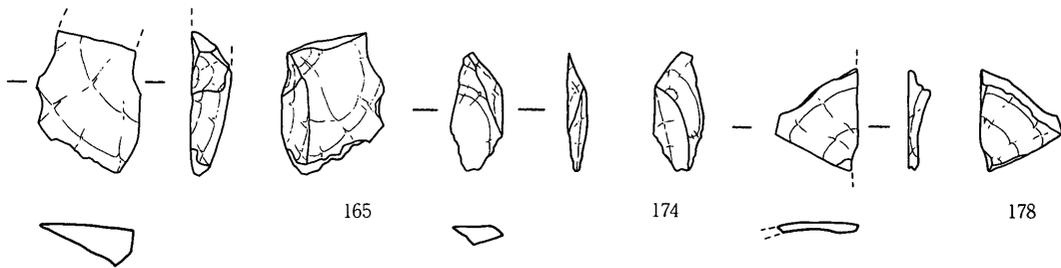
各剥片の詳細は接合資料1の項で別に述べる。

剥片5類 (第48・49図)

素材剥片から初期に剥離された調整剥片と考えられる。147は白色風化サヌカイトの唯一の剥片である。点状打点で、背面は全面が礫面に覆われる。11+78は石理に反して剥離された剥片で、側面に縞状の礫面をとどめる。接合資料では接合資料1・2・3・9に認められる。剥片の属性にはばらつきが多く、特性を抽出することは困難である。



第48图 石器实测图(9) - 剥片5類 -



第49図 石器実測図(10) - 剥片3・5類ほか -

g. 接合資料

概要

石器ブロック内の141点，石器ブロック外の2点の合計143点の石器について，接合作業を行った。その結果，ブロック内外では接合するものはなく，ブロック内で剥離面において接合したもの（以下，Ⅰ種接合とする）が39件，折れ面において接合したもの（以下，Ⅱ種接合とする）が12件認められた。接合する個体の合計は61点である。接合率は全個体数を母数とした場合に42%，剥片に限った場合に60%となる。

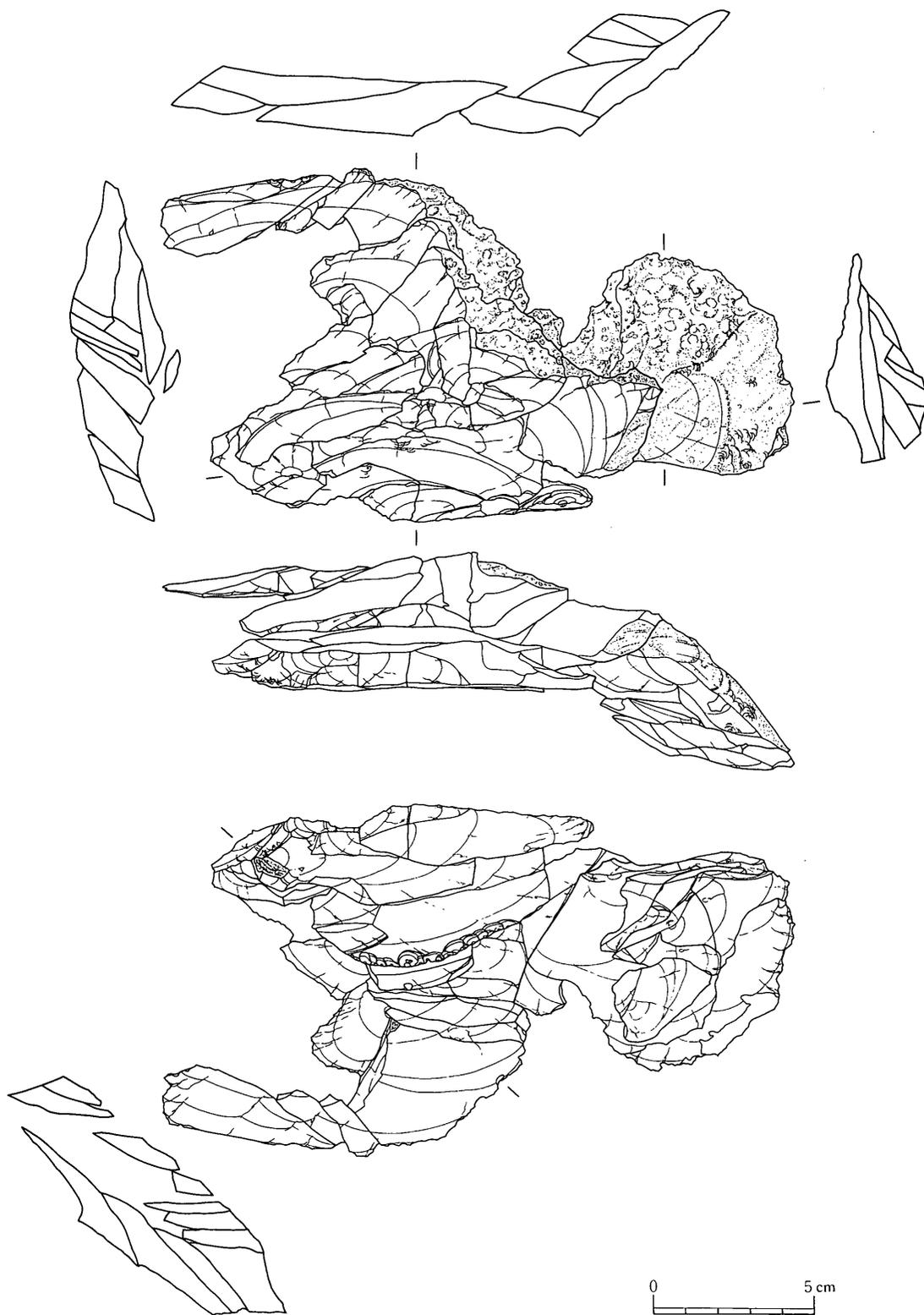
接合資料は10群に区分される。これはⅡ種接合のみのものも含まれる。Ⅱ種接合のみの個体はここでは説明を省き，第13表に基づき1～9の番号の順で説明を行うこととする。なお，接合資料1と接合資料2は接合関係にあり，その接合状況を説明した後に各接合資料の内容を記す。

接合資料1～5については，剥片剥離作業の工程図をチャート式で示している。上から下へ剥片剥離作業の進行に従って生成される剥片の番号を並べている。このうち，イ，ロ，ハ・・・としたものは，剥片がブロック内に遺存しないものを示している。また，工程図の右側に打撃の意味合い⁽²⁸⁾や便宜的な剥片の名称等を付記している。

番 号	Ⅰ種接合件数	Ⅱ種接合件数	個体数合計	製 品
1	14	7	22	削器1・有加工痕剥片1
2	6	2	9	
3	5	0	6	
4	3	0	4	
5	5	0	6	
6	1	1	3	
7	1	0	2	
8	3	1	5	
9	1	0	2	
10	0	1	2	
合 計	39	12	61	

Ⅰ種接合 …… 剥離面接合
Ⅱ種接合 …… 折れ面接合

第13表 接合資料数量表 (接合資料1と接合資料2の接合を除く)



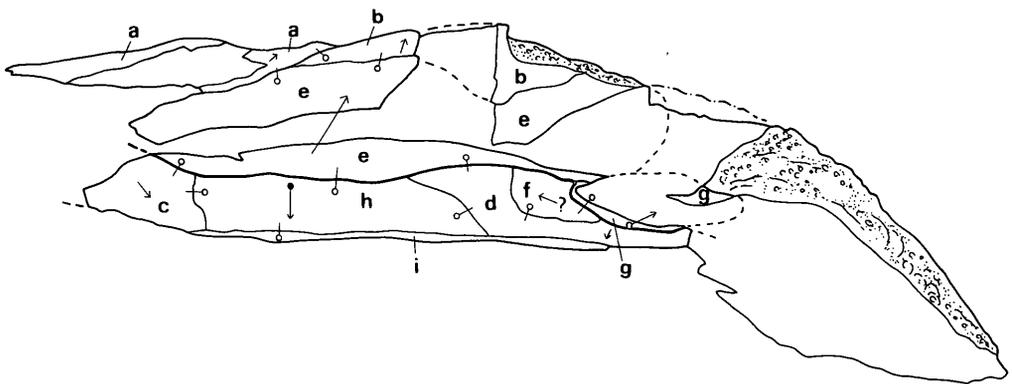
第50図 接合資料1+2実測図

接合資料1 + 接合資料2 (第50図)

接合資料1は14件のI種接合と7件のII種接合の、合計22点の剥片類から構成される。剥片を素材とした石核であり、最初に剥ぎ取られた剥片から末尾の残核までが接合し、石核の全容がほぼ判明する。さらに、別の石核における剥片剥離を示す接合資料2とも接合関係にあることから、石核素材剥片剥離工程の復元においても参考となる資料である。ここでは後述する接合資料2を含めた石核素材剥片剥離工程の内容を説明する。

接合資料1石核素材は長さ11.1cm、横幅16.5cm、厚さ4.2cmのやや右に偏った扇状の平面形を有する横長剥片である。右底縁部に礫面を残し、背面には3面のネガティブな剥離面をもつ。打面は現状で幅2.7cm、厚み1.2cmほどの平坦な剥離面であり、後述する第4剥片が打面部分を取り込むと推定されることから、元来の打面幅は現状より若干広かったものと推定される。主要剥離面との剥離角は剥片末端までの角度を測って約 110° 、バルブ周辺のみを測って約 130° である。打面の左側には側面を形成せず、主要剥離面と背面左側の剥離面とのエッジが剥片の側縁に該当する。これに対して、打面の右側には厚み約1.0cmほどの側面が認められ、4面の剥離面が観察できる。ただしそのうち1面は背面側に展開する剥離面であり、正確には3面とすべきであるかもしれない。

接合資料2は6件のI種接合と2件のII種接合から構成される。このうち、一部が接合資料1の主要剥離面と接合する。したがって、同一の母岩から接合資料1の石核素材剥片が剥取された後に、接合資料2の石核素材剥片が剥取されたものであることが判明する。ただし、接合資料2については石核素材剥片の打面や主要剥離面を特定することができないため、素材剥離工程上の位置づけは困難である。



第51図 接合資料1 + 2剥離面説明図

接合資料1の側縁部・背面部の剥離面を観察し、それぞれの剥離方向と隣接する剥離面の切り合い状況を第51図に示した。これに基づき、接合資料1が剥取される直前の母岩の石核形状を復元したものが第52図1である。接合資料1と2の右側は礫面で覆われることから、剥片剥離は接合資料1の主として左側で進行していたことがわかる。剥片剥離は石核上を表裏交互に進行していたものと推定され、接合資料1の背面と打面・側面との剥離境が接合資料1の素材剥片剥取直前の石核の上端稜線に相当する。

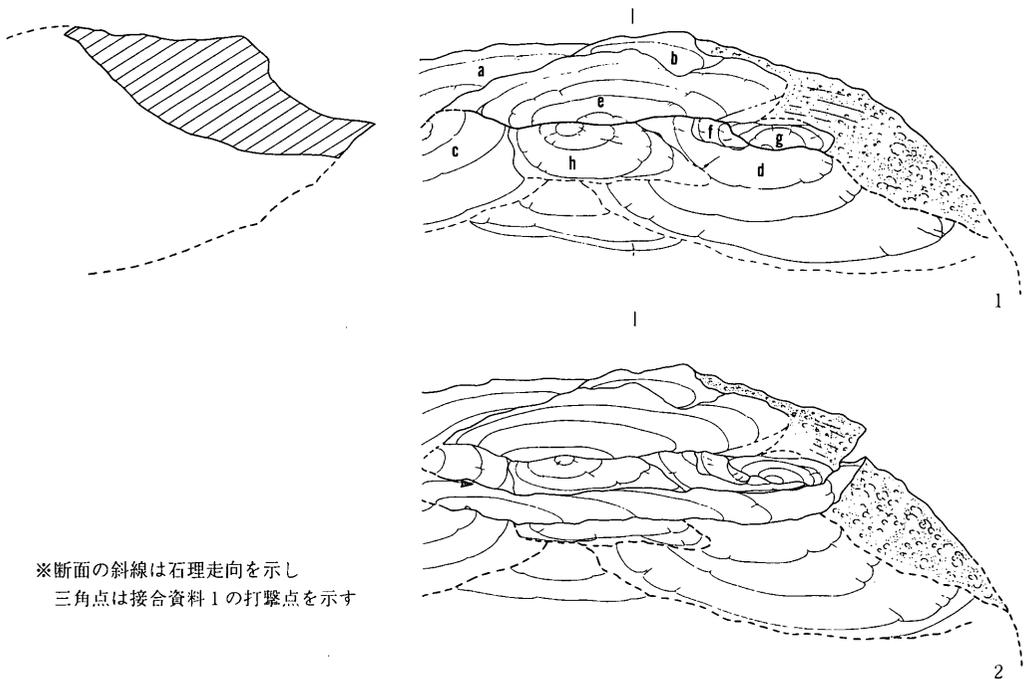
—前剥離面—

接合資料1の背面に残される剥離面のうち、主たる剥離面はa～eの5面である。切り合いから見て下記の順で形成されている。



dは図の右側の礫面を打撃し、その後打面を転移してdとcで形成された稜線付近を打撃してeの剥離面が形成されている。石核の稜線上を打点を左右に振りながら、表裏交互に素材剥片を剥取したものと考えられる。

h・g・fについては、剥離痕が小さいことから素材剥片のネガ面とは考えられない。



※断面の斜線は石理走向を示し
三角点は接合資料1の打撃点を示す

第52図 接合資料1（素材剥片）剥離概念図

－石核整形－

剥離面 e にみられる素材剥片剥取の後、ネガバルブ付近を小規模に打撃する剥離面 h が形成される。これは素材剥片の剥取の際に、ダメージを受けた稜線形状を補正した石核整形の一種と考える。

同様に石核の整形と推定されるのが、接合資料 1 の右側縁末端部にみられる微小な 2 面の交互の剥離面 (f・g) である。剥離面 f はネガバルブを残しておらず、剥離面 e に先行する面である。剥離面 d を剥取した際のバルバスキアの可能性もある。剥離面 g は剥離面 f を切って打撃する。また、リングの収束等の観察から剥離面 e に先行するものと考えられる。これも剥離面 d のネガバルブ推定箇所を除去するかのごとく剥離しており、先の剥離面 h に共通する。

－素材剥片の剥取－

石核整形が施された後に、接合資料 1 の素材剥片が剥取される。打面は石核の剥離面の側縁部に設定される。石理との関係でみると、平面的にみて約 45° 傾斜している。打撃の結果、先に調整された側縁部分は約 1.0cm の均等厚で素材剥片に取り込まれ、また剥離面 a と礫面からなる底面を形成する。打面を基準に考えると、左に片寄った不均等の素材剥片となる。打面の打撃痕（弧状クラック）を観察すると、剥離にいたった打撃以外に多数の打撃痕が認められるのに対して、側縁部分には打撃痕が認められないことから、当初から剥離面 c を打撃して素材剥片を剥取する意図があったことがうかがえる。

－素材剥片剥取後の石核形状と接合資料 2 の関係－

接合資料 1 の素材剥片を剥取した後は、石核表面に大きなネガティブ面が形成される。接合資料 1 の左底面部の礫面は、元来礫の凹部が影響して異質な剥離となっている。石核形状はこの部分で礫面をとどめる左側が瘤のように取り残された可能性が強い。

以上の素材剥片剥離作業は、大型のやや扁平な母岩をいわゆる交互剥離によって、適宜石核調整を加えながら、順次素材剥片を得るという工程を踏む。交互剥離である点では、二上山北麓遺跡群で指摘される瀬戸内技法第 1 工程⁽²⁹⁾に共通する。しかし、打点を左右にずらしながら打面を狭く設定し、裾広がり素材剥片を剥取する点では模式的な二上山北麓の第 1 工程とは異なる。

接合資料 1 (第53～55図)

接合資料 1 の剥片剥離工程は概報ですでに詳細に述べているところである。しかし、接合作業を行った結果、あらたに石片が接合することが判明し、それを踏まえて再度説明するものである。

接合資料 1 の剥片剥離工程は 2 段階に区分される。第 1 段階は平坦な打面を連続的に打撃して剥片を剥離する過程。第 2 段階は打面調整を施し、山形の稜線を作出したのちに、製品素材となる横長剥片を剥取する過程である。作業面は転移せず、残核にいたるまで一定の方向を維持している。この方向を「作業方向」とする。

なお、文中の左右方向は作業面を上にして素材剥片の主要剥離面、すなわち石核の底面側からみての方向に統一する。

－第 1 段階－

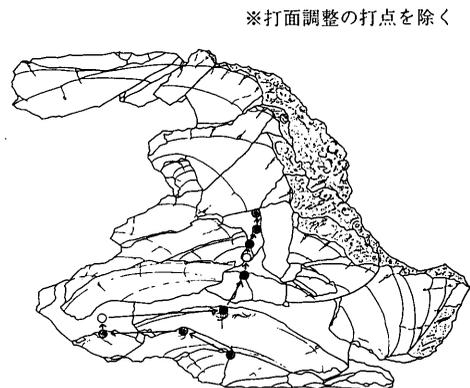
作業面は素材剥片の打面側の側縁部に石理と平行するように設定される。したがって石核の左側に素材剥片の打点があり、素材剥片の主要剥離面の剥離方向と、作業方向とは一致せず、およそ 45° の角度をもつ。

この段階の石核の形状は底面左側に素材剥片の打瘤があるために左側が分厚く、右側は素材剥片が石理に反して剥離されているために、底面に凹凸がみられる。なお、作業面における石核中央部の厚さは $1.1\text{cm} \sim 1.3\text{cm}$ と薄い。

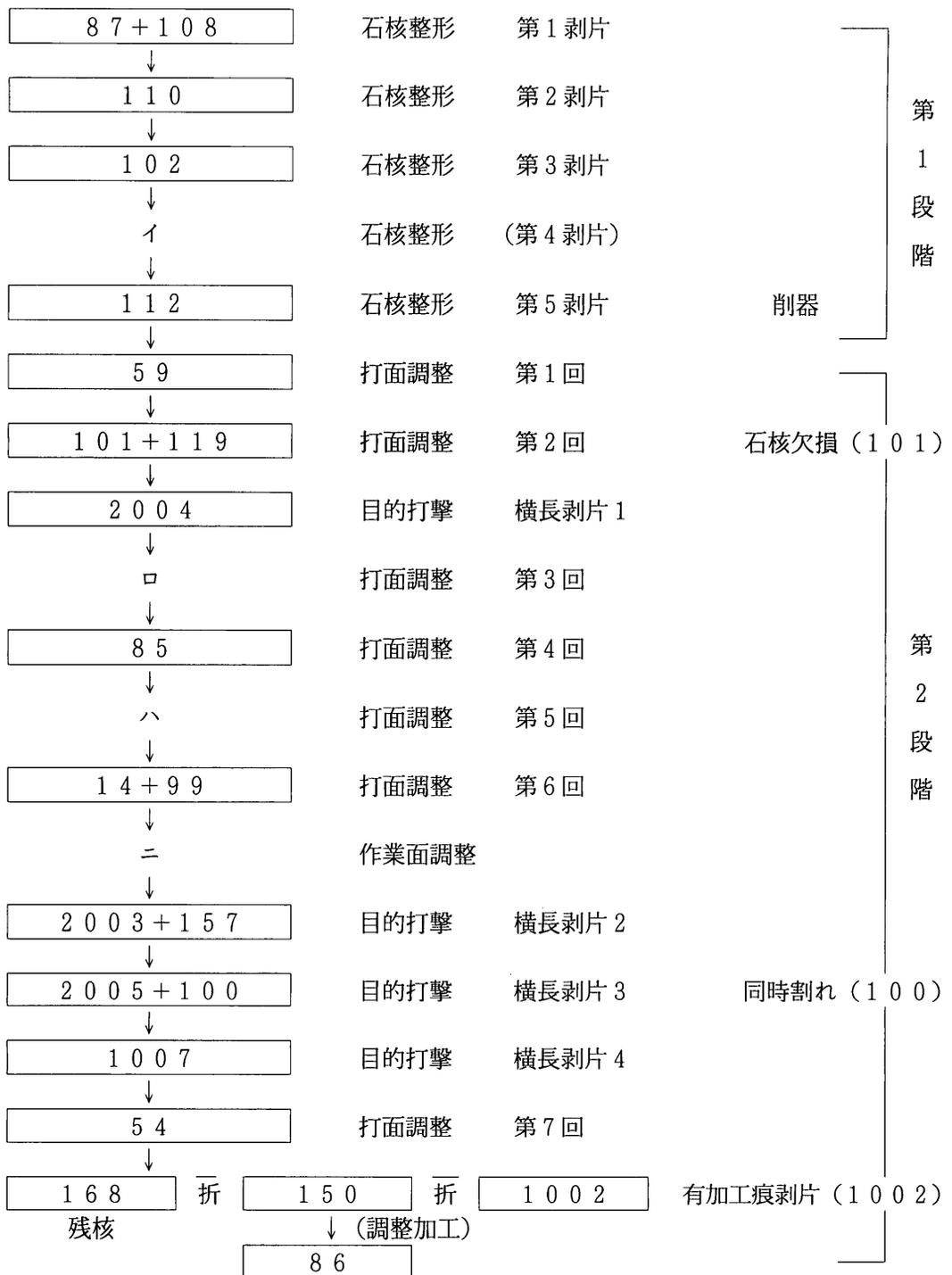
この段階で得られる剥片は 5 片あったと推定され、そのうち 4 片を検出、接合した。石核上の打点位置は左右にずれながら推移する (第 53 図)。

第 1 (87+108)・2 (110) 剥片は打点を左にずらせながら剥取する。底面に素材剥片の打瘤が残り、厚みのある左側へは「力」が抜けきらず、主に右に偏った横長剥片となる。

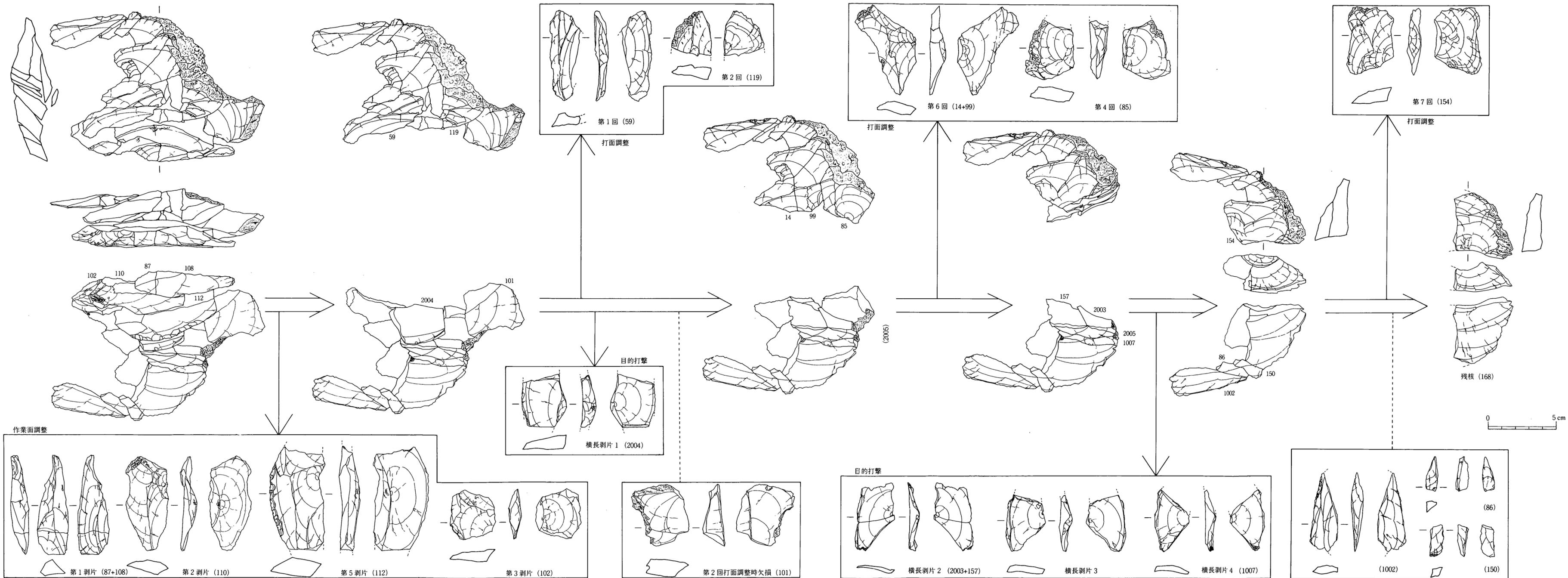
第 3 (102) 剥片と第 4 (イ) 剥片は、石核の左寄りの部分を打撃して得られた不定形剥片で、「力」の抜けは左右均等であるものの、剥片幅は石核幅の $1/3$ に満たない。この 2 回の剥片剥取によって、素材剥片の打瘤部分はほぼ除去し終え、石核の厚みが安定する。



第 53 図 接合資料 1 における打点の移動



第54図 接合資料 1 剥片剥離作業工程図



第55圖 接合資料1 実測図

第5剥片(112)は石核幅の中央部を打撃して得られた横長剥片で、第4剥片に切られた部分を除いて、ほぼ石核幅全体を取り込んだものとなる。底縁部分を主要剥離面側から加工して、「削器」としている。

以上第1段階は、冒頭で述べたように、打面調整を行わず、平坦打面を連続的に打撃して剥片を剥取するものであった。その中で本例の特徴としては次の3点が指摘できる。

- (1) 打点が主に左方向に偏る傾向がある。
- (2) 石核幅一杯を取り込んだ剥片は少なく、不定形な剥片が多い。
- (3) 剥取された剥片は基本的にはブロック内に遺存する

このうち、(1)(2)の特徴は、素材剥片の打瘤に影響されたものと考えられる。すなわち、平坦面を打面とすると、作業面での石核の厚みが安定していないと、左右均等に「力」が抜けきらない。この事例の場合、左側に打瘤があり、右側に比べて厚みがあるため、石核における作業方向を一定にするためには「力」が抜けにくい左側をより多く打撃する必要がある。その結果、打点が左側にずれ、かつ、不定形な剥片を生むことになる。広義の石核整形段階といえる。

－第2段階－

打面調整を施して、横長剥片を剥取する段階である。作業面は第1段階の第4剥片・第5剥片の大きなネガ面に設定される。この段階の石核底面の状況は、素材剥片の主要剥離面のリングと作業面が平行に近い状態になってきており、残核にいたっては素材剥片の主要剥離面のリングが作業面と完全に平行する。

打面調整は、合計7回行われ、ブロック内に5片が遺存する。横長剥片剥取のための目的打撃は少なくとも4回行われ、ブロック内にすべてが遺存する。それぞれ剥離の順序にしたがって1～の番号を付す。

なお、打面調整と横長剥片剥取の関係は、第1単位が2回の打面調整につき1回の横長剥片の剥取、第2単位が4回の打面調整につき3回の横長剥片剥取、最後に1回の打面調整の際に石核が折損し、工程が終了する。

打面調整1(59)・2(119)によって作出される石核上面の山形の稜線はほぼ石核の中央にあり、作業方向に平行する。石核上面が最も隆起した部分をとばすように剥ぎ取られているが、稜線は石核の末尾にまで及ぶものではない。なお、2の打撃の際に石核の左端部が大きく欠損(101)し、石核形状がこの時点で変化している。これにより元来礫面の凹部に該当する箇所を挟み右端に突出した異形部分が除去されたことになり、石核としての

形状は安定したものと推定される。

この時点で横長剥片 1 (2004) が 1 枚剥取される。

横長剥片 1 は、左右を折損するが、打面調整によって作出された稜線付近を打撃して得られた剥片であり、瀬戸内技法の「翼状剥片」としての形態上の条件を備える。石核における打点の位置は、前回の打面調整段階で右端部分を折損しているために、やや右に偏った位置であるが、作業面と石理はほぼ一致する。

この直後、4 回の打面調整が行われる。この 4 回の打面調整によって作出される稜線の方法は作業方向に対して約 20° ほど右に傾き、後尾は石核の末端までには及ばないが、石核上面の $2/3$ 程度を取り込んでいる。

この後、作業面における剥片剥離がはじまるが、最初に剥取された剥片 (ニ) はブロック内に遺存しない。石核の右側を主として除去するもので、石核幅一杯を取り込むものではなく、作業面を整える作業面調整の剥離であった可能性が高い。この剥離により、石核底面のリングと作業面が平行したものとなる。また、作業面は石理と一致している。

この段階での作業面は、右側に先の作業面調整のネガ面と、左側に前回剥取された横長剥片 1 (2004) のネガ面の 2 面で構成される。打面調整によって作出された稜線は存続しており、この段階の打撃も前回と同様にほぼ稜線部に加えられる。

得られた横長剥片 2 (2003+157) はきわめて薄く、打点部分の垂直割れが生じて、前回の作業面調整と同様に右に偏った剥片となる。

次の打撃も、ほぼ前回と同様の稜線部分に加えられる。得られた横長剥片 3 (2005) は打点のやや左側で垂直割れを生じて、少なくとも 2 分割されている。左折損部はブロック内に遺存しない。残存部分では石核幅一杯を取り込んでいるように観察できるが、左の折損部付近が薄く、前回と同様に石核の右側に偏った剥片であった可能性が強い。この要因としては、石核の中心からやや右にずれた位置に作業方向の主軸が設定されているために左右に均等の石核の厚さが得られておらず、素材の末端に近い右側が若干薄いために、「力」の抜けるスピードが早く、したがって右に偏った剥片が得られるものと推定される。

上記問題点は克服されないまま、次の剥片剥離が連続的に行われる。打点も前回と同様に稜線部付近である。得られた横長剥片 4 (1007) は、垂直割れを生じている。垂直割れは、残核の折損部断面にみられる気泡が原因となったものと考えられる。

石核が当初の大きさから $1/2$ ほどになった段階で、打面調整が加えられる。打面調整剥片 6 は横長剥片 4 のネガバルブ付近を打撃して、稜線部の再生を図っている。これは稜線

が石核の中心から右に偏っている状況を是正し、石核幅一杯の横長剥片を得られるように打面の作出を行ったものと推定される。

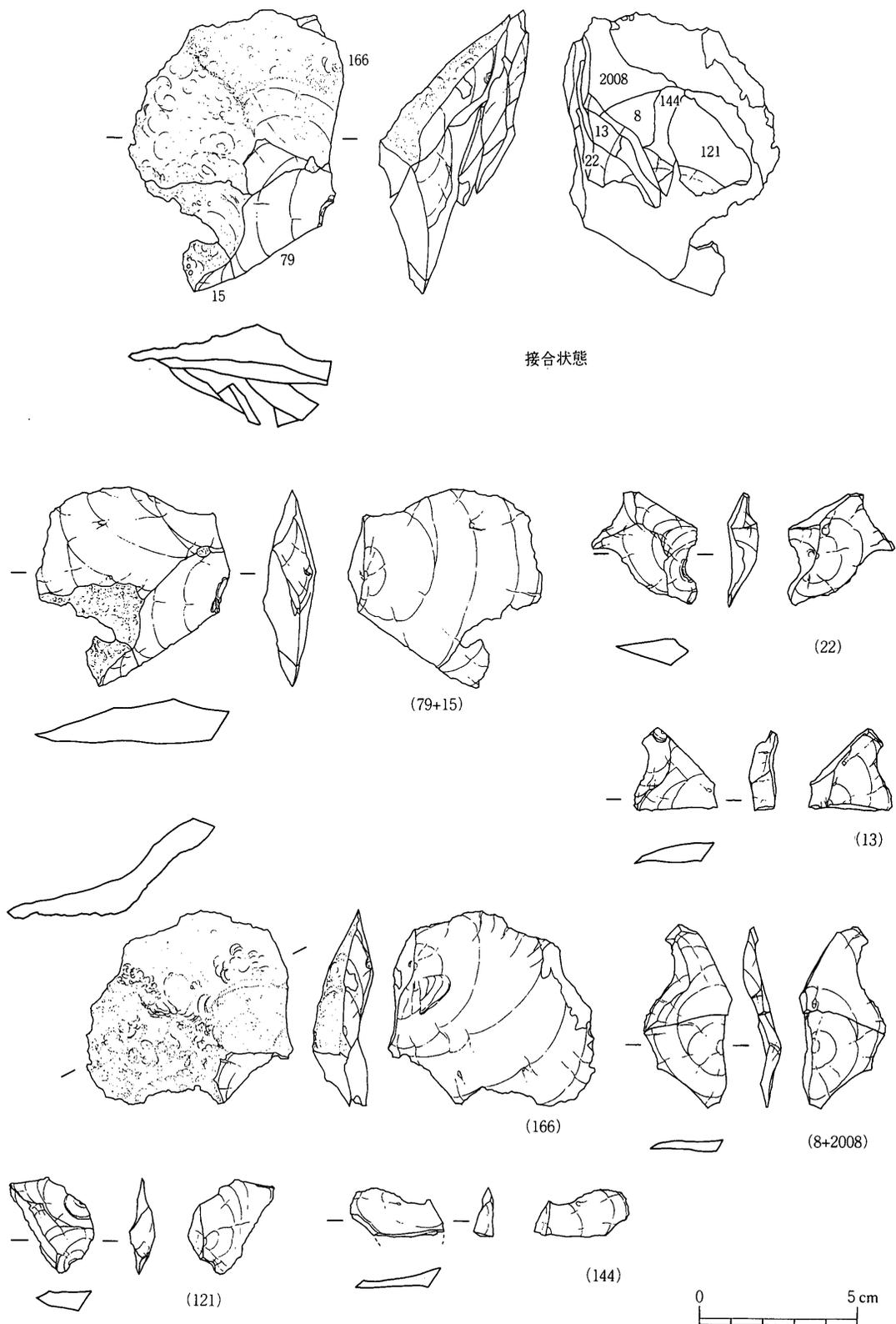
しかし、打撃後に石核が先の気泡部分で垂直割れを生じ、半折した。また、末端部分も影響を受けて2片の横長の石片が切り離されている。これで、この石核における剥片剥離工程は終了する。残核は右側(168)がブロック内に遺存し、それに末端部の石片が接合する。なお直接接合しないが、削器に加工された2001(第31図)は形状等から残核左側に該当する可能性がある。もし、それが正しければ、右側残核とのあいだにさらに空間が存することから、最終の打面調整段階で石核は5片の石片に分割されたことになる。

残核の末端に接合する石片は150+86と1002の2片である。150+86は残核から分割された直後は、長さ7cmほどの方柱状の石片であったと考えられる。86はその側縁中央付近を、元の石核素材の背面側から打撃して生成された小形の剥片であり、打点部で半分に分れている。同時に方柱状の石片も折れたものと考えられ、150はそのうちの右側の分割片である。すなわち、便宜的に得られた適度な長さの方柱状石片に、若干の調整加工を施す過程で欠損したものと考えられる。1002は元の石核素材の末端にあたる側縁に主要剥離面側から若干の調整を施した有加工痕剥片である(補注1)。

以上の接合資料1の剥片剥離工程は、大きく2段階に分けられた。第1段階は石核上面の平坦面を連続的に打撃して剥片を剥離するものである。しかし、すでに記述したように、ほとんどがブロック内に遺存しており、一部削器に加工したものもあるが、目的剥片としての取り扱いとは考えられない。そして、打撃の順序から推定すると素材剥片の打瘤の除去と、安定した作業面の作出にその意図が看取されることから、この段階は横長剥片剥離工程に先立つ石核整形の段階と考えられる。

第2段階は打面調整を施しながら横長剥片の剥離を進めており、工程上、本質的な段階である。瀬戸内技法のバリエーション⁽³⁰⁾として把握できるであろう。しかし、石核形状等が不安定なため、結果として良好な剥片は1片も得られず、工程を終えている。

(補注1) 石核の分割片のうち、特に末端の折れ面に接合する石片が接合資料1の剥片剥離工程中のどの段階で生じたかについて、厳密に見分けるのは難しい。ここでの説明は、残核(168)の折れ面に気泡が見られることと、その際の折れが作業面上端側からの作用に起因するように観察されることから、石核が縦方向に分割されるのと同時に、石核末端では横方向の分割が生じたものと考えて記述したが、石核が縦方向に分割する前にすでに末端部分が切り離されていた可能性もあることを付記しておく。

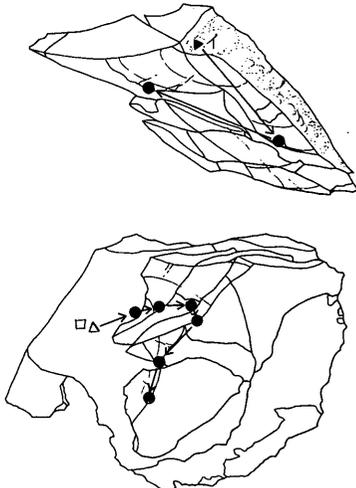


接合状態

第56図 接合資料 2 実測図

接合資料 2 (第56~58図)

接合資料 2 は 7 片の剥片で構成される。先行して 166 と 79+15 の打面部に残るバルブをもつ剥離面を形成した剥片 (イ) が剥取される。この剥片は、接合資料 1 のネガ面との間に形成された稜線付近の自然面を打撃している。166 と 79+15 は左右に打点をずらせ、稜線を形成するごとく剥離するが、次の剥離は 79+15 で形成された平坦面を打撃して、幅 5cm 以上の横長剥片 (ロ) を得ている。その後、(ロ) の剥離面を連続的に 6 回打撃して剥片剥離が行われる。いずれも不定形剥片であり、打面の調整を目的とするものとも考えられるが、当初の石核の大きさや形状が不明であり、元来打面の調整を意図したかどうかは判断できない。第 57 図は上がイから 79+15 までの打点の推移を、また下がロ以降の打点の推移を示している。



第 57 図 接合資料 2 における打点の移動



第 58 図 接合資料 2 剥片剥離作業工程図

接合資料3 (第59～61図)

背面の大部分が礫表に覆われた、厚さ4.0cmほどの剥片を素材とする。長さ(奥行)は10cm程度と推定され、素材剥片剥離工程における初期に剥取された剥片であろう。石理は石核の側面からみて約 20° 傾く。上面形は扇状で、礫表の稜線は比較的明瞭に確認される。打面側からみた石核の正面形はややいびつな台形状を呈し、石理は約 15° 右に傾いている。

剥片剥離は、素材の主要剥離面を底面に、石核の上面形である扇状面を打面に設定し、石理に沿って浅い角度で連続的に剥取するように作業面が設定されて進行する。

まず、素材の主要剥離面の打瘤を除去するためと推定される調整剥離(イ)が作業面側に施される。剥片はブロック内に遺存しないが、167の背面に奥行約3cm、剥離角 15° のネガ面を残している。ネガ面から推定すると、多数の垂直割れを生じていることがわかる。

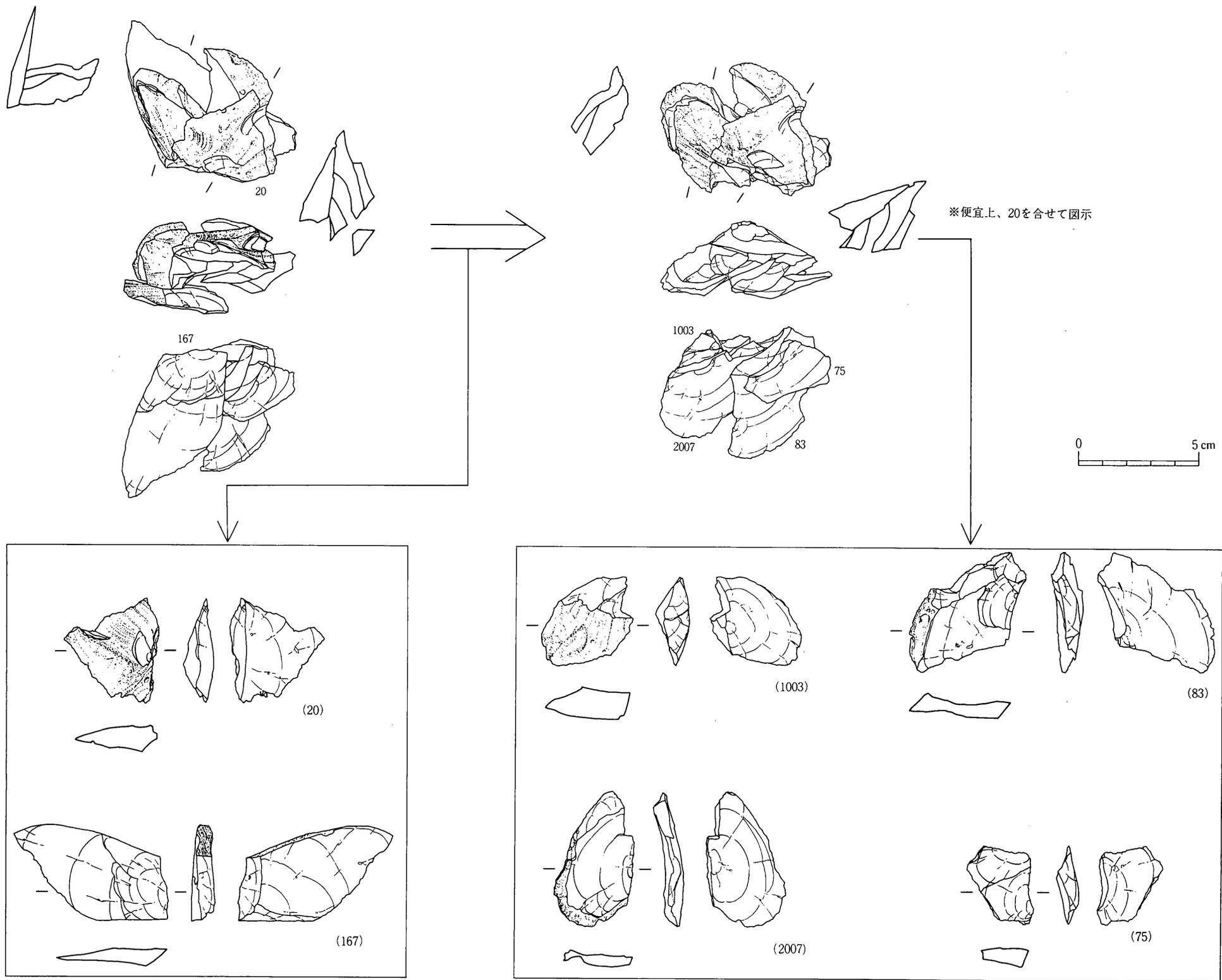
次に作業面側から打面調整が2回行われる。最初の打面調整剥片は20で、打面部分は横割れを生じて欠損し、ブロック内に遺存しないが、他の剥片のネガ面の観察から石核の中央付近を打点とし、主として石核上面の右側の礫表を除去しているものと推定される。

その後、同じ面から石核の左側に小規模な打面調整(ロ)が加えられる(1003の背面に残る小剥離痕)。この2回の打面調整によって、山形の稜線が形成される。

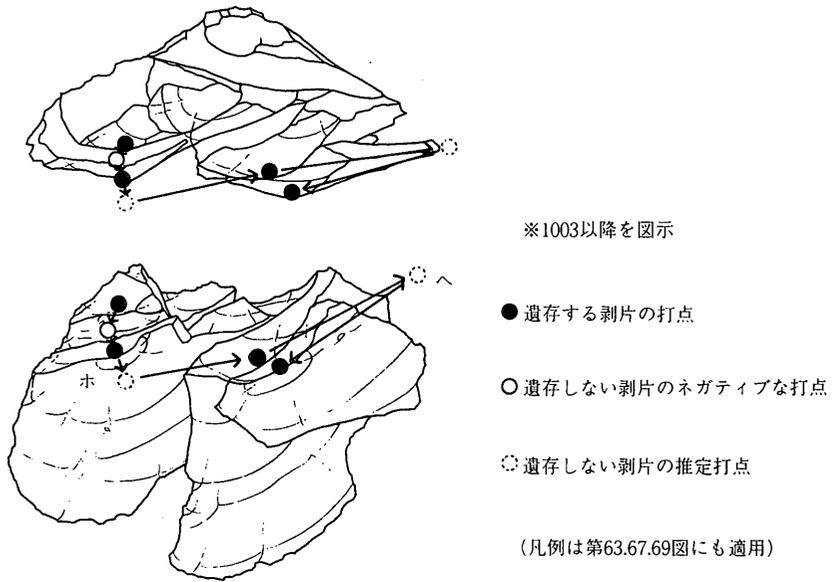
目的剥片の剥取は、打面調整によって形成された山形稜線のやや右側の石核中央の平坦面を打撃して行われたものとみられる(167)。しかし、剥片は打面から1cmほどのところで横割れを、また打面付近で垂直割れを生じて、3～4分割される。また、石核左側では石核底面に沿って「力」が抜けたために、左側の底面を大きく取り込んだ偏った剥片となる。剥片末端部における石核底面と主要剥離面の角度は 13° と非常に浅い。

2回目の目的剥片剥取は、新たな打面調整を行わず、連続的に行っている(ハ)。打面は前回のやや右側の平坦面上に設定される。打撃の結果、今回は石核の左側へは「力」が抜けず、左側縁部では途中で剥離が停止し、高低差約0.5cmの段が作業面に形成された。剥片は、段部分のリングに沿って、折損したものと推定される。

次に乱れた作業面を補正するために、段部分を作業面側から連続的に4回打撃して石核整形を行っている。1回目(1003)と3回目(2007)の剥片が遺存する。4回とも打点は段の中央付近に固定され、左右にはほとんど振れず、段の除去を目的として連続的に打撃している。



第59図 接合資料3実測図



第60図 接合資料3における打点の移動



第61図 接合資料3 剥片剥離作業工程図

このうち4回目の石核整形（ホ）は、後に行われる打面調整の機能もあわせもっていたものと推定される。剥片の形状は、ネガ面から推定すると、底面の約3/5に礫面を残しているが、長さ約7cm、厚さ約1cmの良好な横長剥片が剥取されている。ブロック内に遺存しないことから持ち出された可能性もある。製品に加工するとすれば、二側縁加工のナイフ形石器の製作が可能であろうが、剥片剥離の流れの上では副次的に得られた横長剥片と考えられる。

以上の石核整形によって作業面は整形されたが、打面形状は左右が不均等となった。これを補正するために、次は石核の右側の整形に取りかかっている。これは、良好な打面を作出するための打面調整と考えられる。

打面調整は石核の右側を3回打撃して行われる。打点は1回目(83)と3回目(75)がほぼ同じ位置で、2回目(へ)は石核の右端付近に振れている。

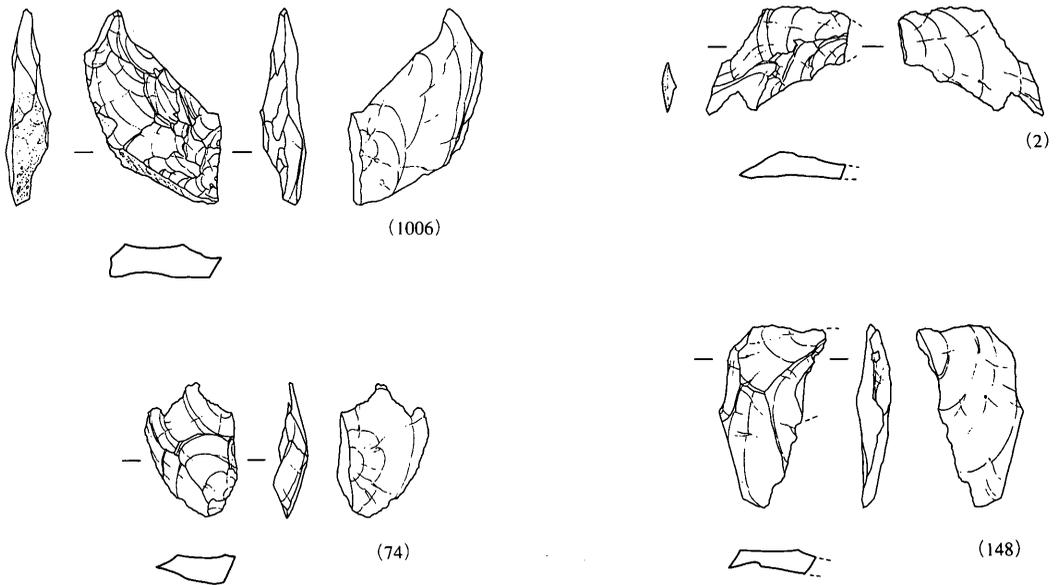
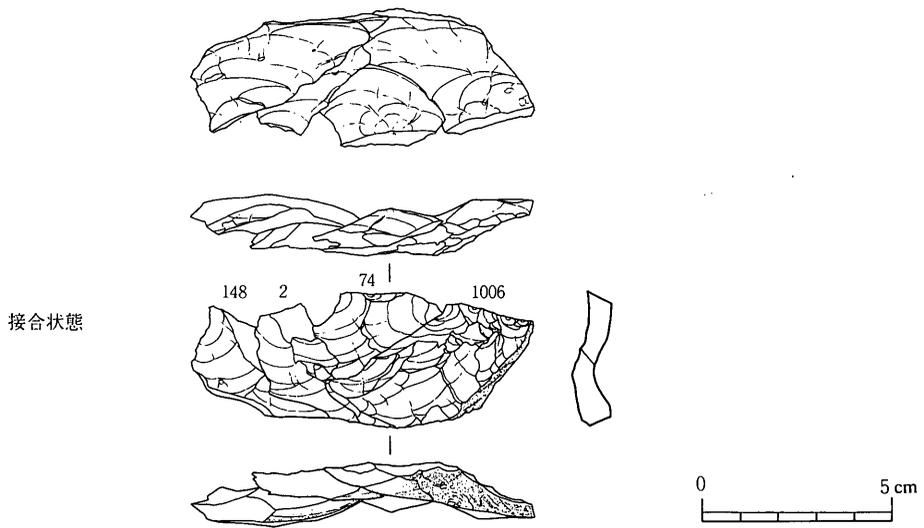
その後の剥片剥離工程はブロック内に遺存しない。推定される石核の形状は作業面の高さが約3cm、横幅が約10cm、打面は石核整形4回目(ハ)のネガ面と打面調整1回目(83)との間の稜線と打面調整2回目(へ)・3回目(75)の間の稜線の2条の稜線をとどめており、打面形状はまだ調整不十分である。さらに調整が加わったものとする。

以上の検討により、初期段階で得られた素材剥片を用いて、石核整形や打面調整を施しながら作業面を一定に保ち、石核幅一杯の横長剥片を得ようとする意図が看取された。石核整形を多用する剥片剥離の実態には、相当の変異を含むが、基本的には瀬戸内技法の第2工程に比定されうるものであろう。

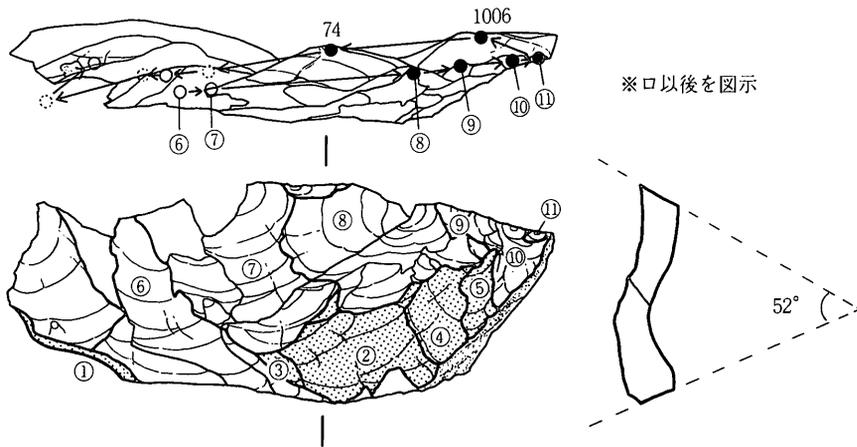
接合資料4（第62～64図）

平坦な剥離面を打面とし、打点を横方向にずらせながら連続的に打撃して剥離された4片の接合資料である。このうち、1006→74は連続的に、74→2および2→148はそれぞれ1回の打撃を間に挟んでおり、その間の剥片は遺存していない。

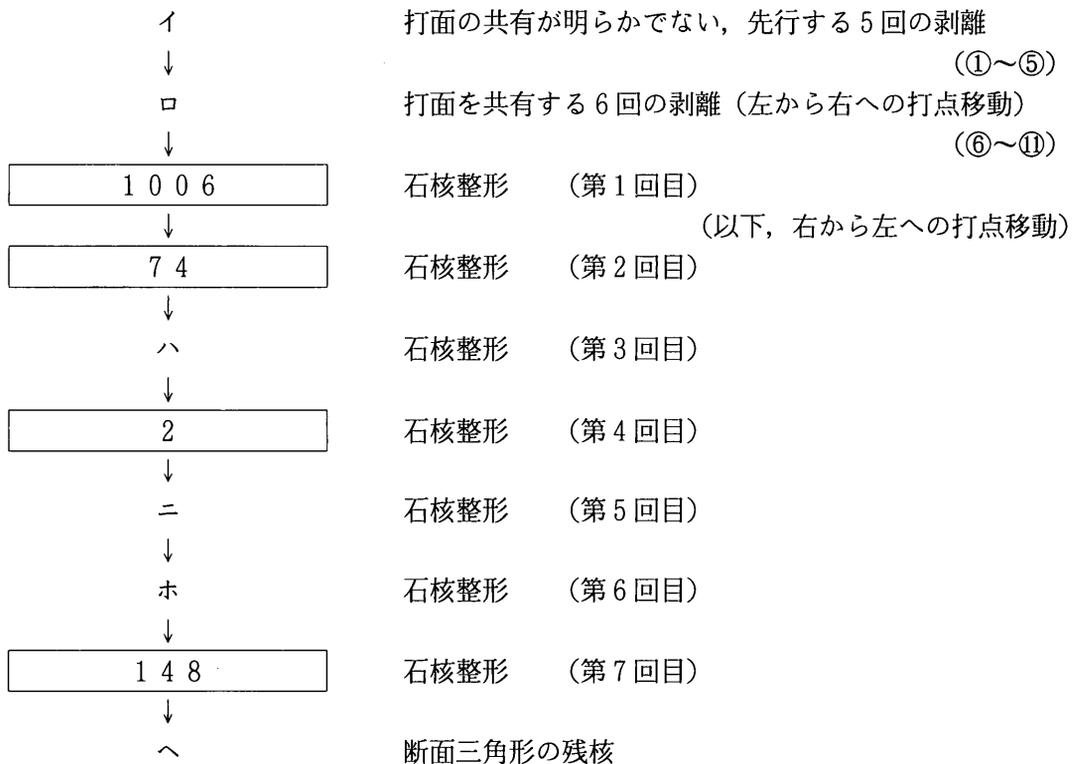
各剥片とも石理に直交する方向に打撃されており、ヒンジフラクチャーを生じたり、左右に偏りがあったり、いずれも不定型である。また、各剥片のネガ面には同一の打面を連続的に打撃した剥離面が認められる。したがって打面を形成した剥離はかなり大きな剥離面であった可能性が強い。



第62図 接合資料4 実測図



第63図 接合資料4における打点の移動



第64図 接合資料4 剥片剥離作業工程図

石核形状を示す要素としては、1006の左側縁部に礫面が認められる点、また各剥片の底面に、風化が著しく、一部に礫表面が散見される古い平坦な剥離面が存する点があげられる。平坦な打面が石核の末端まで継続し、また、底面の古い剥離面も同様に継続したと仮定すると、それらの面の延長線が交わる点は剥片のネガ面から約4 cm程度のところで、その交わる角度は 52° である。すなわち、当該剥片剥離が行われる直前の石核形状は一辺4 cm強の三角形状の断面を呈した石核であったことが推定される（第63図）。

まず遺存する剥片の剥取に先行する剥片剥離について、確認できる範囲でその流れを追うこととする。以下の文中の「左右」は第62図の接合状態図、および第63図に則す。

ネガ面に残る剥離面のうち、バルブをとどめない比較的古い段階に形成された剥離面は第63図の網掛け部分の合計5面である。①は石核の左側縁部分を大きく除去した剥離面で、剥片の末尾は大きく波打つ。②は石核中央付近を打撃して、礫表を底面に取り込んで剥離している。①との先後関係は不明。③は②の左にわずかに残る剥離面である。②を切り込んで剥離する。④⑤は打点を右にずらせながら連続的に剥離した剥離面である。

次にネガ面にバルブをとどめるか、あるいは遺存する剥片の直前に形成されたとみられる剥離面を検討する。剥離面は⑥～⑪の6面で、石核の左から右に向かって連続的に打撃している。⑥は打点を欠損するが石核の中央やや右寄りを打撃したものと推定される。①と③からなる稜線を取り込み、石核底面まで及ぶ剥離である。⑦は⑥のやや右側にバルブが想定され、②と③の稜線を取り込んで、右に偏った不定形な剥片を生成している。剥離は石核底面まで及ばず、 $2/3$ ほどでヒンジフラクチャーを生じて止まっている。⑧は石核右寄りにバルブをとどめる剥離面で、②と④の稜線を取り込み、やや左に片寄った不定形剥片を生成している。打面から $1/2$ 弱の辺りでヒンジフラクチャーを生じて剥離が止まっている。また、剥離面の右側では多数の垂直割れを生じて分割された状況が読みとれる。⑨⑩⑪は、石核右端を細かく調整した剥離面で、⑧のネガ面の乱れと、⑧と⑤の稜線を除去している。

引き続き、遺存する剥片を中心とした剥離工程を説明する。打撃数は7回で、遺存する剥片数は4片である。第1回目の打撃点は石核の右端付近で、先行する剥離面⑩の打点から5 mm後退して、やや左にずらした地点である。剥離された剥片（1006）は左に大きく偏った不定形剥片で、右側縁に礫面を取り込み、左側のネガ面には②～⑤剥離面、⑦・⑧のヒンジフラクチャー部分を取り込んで剥ぎ取られている。ポジ面にはバルブスカーがみられ、左側打面縁はその際厚さ1.5mmほどの碎片が生成されている。このため、次の剥片

とは打面では接合しない。

第2回目は2.5cm左に打点をずらし、先行剥離面から6mm後退して打撃し、74を剥離している。この剥片もやや左に偏った不定形剥片である。剥離は石核の2/3ほどで止まっておき、石核形状にはあまり大きな変化を与えていない。

第3回目の打撃は打点を左に2cmずらし、石核の1/3程度を薄く剥離する(ハ)。

これ以降の打撃は打点が残っていないために、剥離面から推定される大まかな打点の位置を基準とする。第4回目で剥離される2は右に偏った不定形剥片で、前回の打撃から約1cm左にずれた地点と推定される。剥離は⑥・⑦の稜線を取り込んで、石核底面の平坦な剥離面まで達している。第5回目の打撃は、2と非常に近い位置を打点とし、2と同様の右に偏った不定形剥片を剥離(ニ)している。

第6回目の打撃は剥片の左端付近と推定される。右に偏った不定形剥片が剥取(ホ)される。①と⑥の稜線を取り込んで①で形成された石核左縁を剥ぎ取っている。

第7回目の打撃で剥離された148は打点をやや右にもどして剥離する不定形剥片である。第5・6回目の剥離で生じた稜線を取り込み、左側縁に①面、底面に石核底面をとどめている。

それ以降の剥片は遺存していない。以後も剥片剥離が行われたかどうかは不明であるが、石核は基本的に剥離前の断面三角形の形状を維持しており、一辺3cm程度の大きさに減ぜられたものとみられる。

ここで剥離された剥片は、どれも左右の偏りが大きい不定型なものであり、目的剥片とは考えにくい。打点移動の面においては、左→右あるいは右→左と規則的な動きがみられ、また剥離の結果として石核形状が大きく変化した様子は見られない。むしろ形状を維持したまま、一様に大きさを減じようとする意図がうかがえた。したがって接合資料4にみられる剥片剥離の目的は石核本体を整形し、何らかの製品製作を行うことにあった可能性が高い。

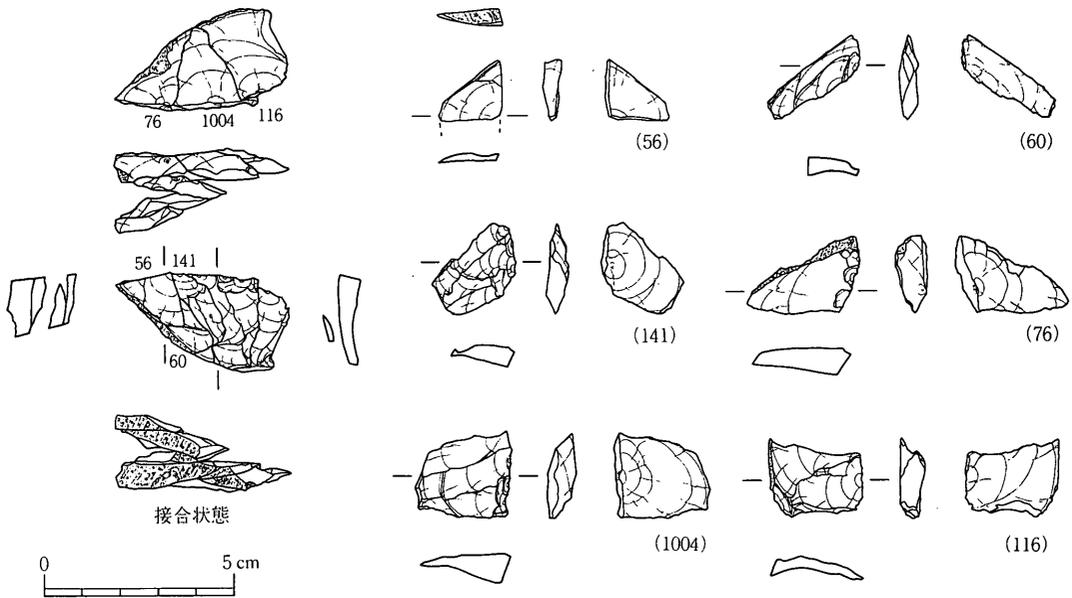
接合資料5（第65～67図）

左側縁に縞状の礫面をとどめ、平坦な同一打面を連続的に剥離する6片の接合資料である。打面は現存幅4cmのネガ面で、現存しない右側を含めると、幅8cm以上の剥離面が想定される。底縁部には打面と概ね平行する剥離面があり、礫面との境に打撃痕があることから、石核素材剥離段階の打点が遺存するものと考えられる。この素材面は、図の右側にさらに広がることから、元来の石核は幅8cm以上、高さ約2.5cmで、側面形が舟底に近い形状であったと考えられる。

合計20面の剥片剥離面が観察される。すべての剥離面が同一の打面を共有している。第67図に打点の移動を示している。①～⑥までは小刻みに打点を左右に振り、石核の左側縁の礫表部分を取り込みながら、56や60などのややねじれた縦長の剥片を剥離している。

141の背面には前回の⑥の打撃(60)から連続して、小刻みな4回の打撃(⑦～⑩)が観察される。いずれもヒンジフラクチャーを生じて途中で剥離が止まっている。⑪の打撃も連続し、141が剥離されるが、これも末端はヒンジフラクチャーを生じている。ここまでの11回の打撃で石核左端の礫表部分の厚みが1.3mm減じている。

次の⑫は打点を大きく右にずらして打撃し、幅広の剥片を剥離している。



第65図 接合資料5実測図

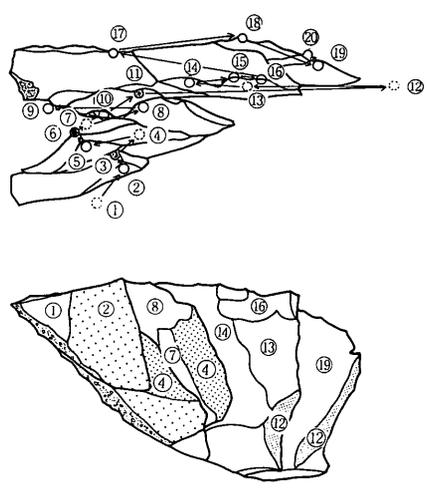


第66図 接合資料 5 剥片剥離作業工程図

次の⑬・⑭は打点を左に戻し、並列にねじれた縦長剥片を剥離している。⑮・⑯は⑬の打点付近を再度打撃しているが、小規模な剥離にとどまっている。

⑰～⑳は打点を左から右にずらしながら、連続的に打撃している。遺存する76・1004は打面を5mm以上の厚さで取り込んだ厚手の剥片で、石核の変形度が高い。

1類剥片が多産され、部分的な石核整形が集中して行われる様相は、接合資料3に類似するが、石核の厚みが2.5cmしかないことから、瀬戸内技法の打面調整の工程とは考えにくい。むしろ、遺存する工程の最終段階で、厚みのある剥片が剥離されていることからみて、接合資料4に共通する残核の利用を目的とした石核整形である可能性が強いものである。

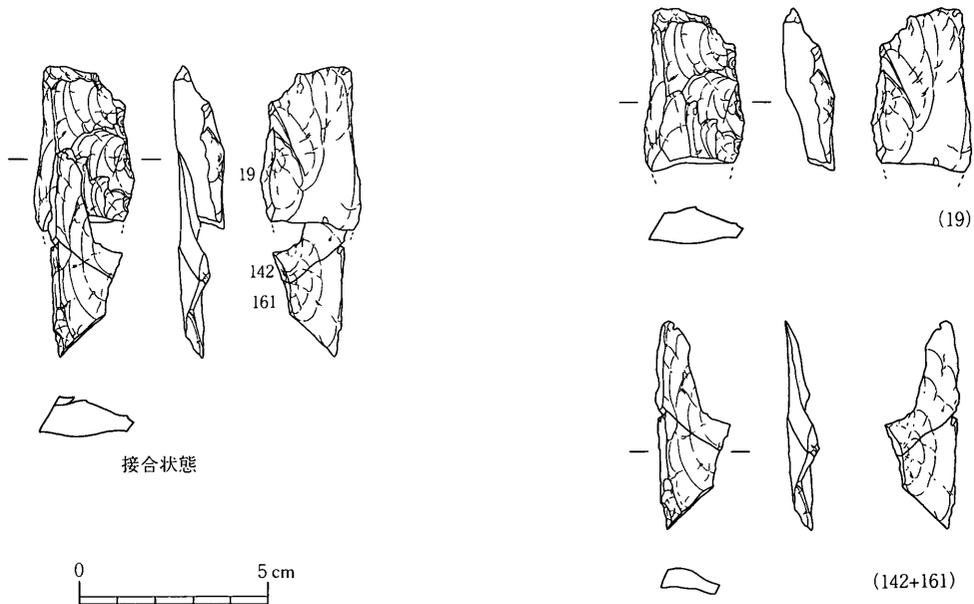


第67図 接合資料 5 における打点の移動

接合資料 6 (第68・69図)

Ⅱ種接合した2片の石片と垂直割れにより折損した剥片とのⅠ種接合による、合計3片の石片からなる。同一打面上を打点を左右にずらしながら、連続的に剥片を剥離するものである。打面に相当する石核上面は一枚の剥離面で構成されており、石核中央部で高く、石核右端で低くなっている。石核正面からみると中央部分の厚さが2.5cm、右端部で1.1cmと、一枚の剥離面でありながら中央部で緩やかな山形を呈す。石核幅は9～10cmと推定される。底面は石核の右端付近にバルブを想定できる一枚の剥離面で、全体的に緩やかな凹面をなす。石理との関係は側面からみた場合、石核の上面と底面の剥離面がおおむね石理に平行しているが、正面から見た場合は約20°ほど左に傾いている。

遺存する剥片を含めて合計10回の打撃を確認できる。ただし、そのうち3回は打面からの剥離面の長さが2mmほどの弱い打撃であり、また1回は石核左端にわずかに残る剥離面である。ここではそれらを除いて明確に確認できる6回の打撃による剥離の順序と形状を説明する。



第68図 接合資料 6 実測図

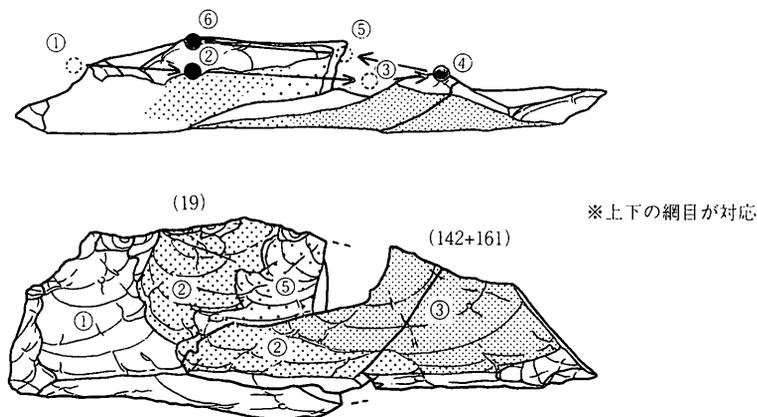
①～④の打撃は打点を左から右にずらしながら剥片を剥離している。遺存する142+161は第4回目に剥離された剥片である。剥離角はいずれも120°弱を測る。すべての剥離が石核底面まで達しており、この4回の剥離で作業面が一新される。

⑤の打撃は打点をやや左に戻して、③のバルブ周辺を浅く剥ぎ取っている。剥離角は105°を測る。

⑥の打撃によって横長剥片19が剥離される。打点を山形部のやや左に設定し、強い打撃を加えている。厚さは最大で1cmを越えており、剥片は石核中央やや右側で垂直割れを生じて半折しているが、半折部の厚さが0.7cmと厚めであり、石核幅一杯を取り込んだ長さ8cmほどの剥離であったものと推定される。

その後の石核は遺存しないが、石核の上面や底面の剥離面の状況から素材の奥行はまだ延長され得るものと推定され、引き続き剥片剥離が行われたものと考えられる。

以上の剥片剥離のうち、⑥の打撃で得られた横長剥片19はほかの剥離と異なって石核幅一杯を取り込んで剥離が行われていた。これは目的剥片として剥離された可能性が強いものと思われる。この場合、石核上面すなわち打面形状を振り返ると、剥離面は1面であるものの石核中央に山形部が形成されており、⑥の打撃はこの山形部を意識している。すなわち打面調整を行わず、石核上面の形状を利用して瀬戸内技法の翼状剥片と形態的に類似した横長剥片を得ようとしたものと推定される。先行する①～⑤の剥離は目的剥片の剥取に先立つ作業面の調整と位置づけることが可能であろう。

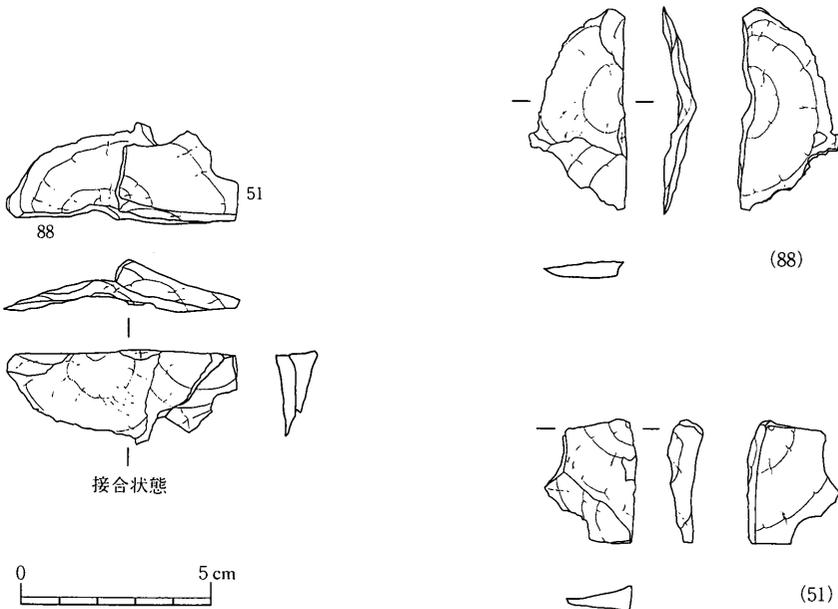


第69図 接合資料6における打点の移動

接合資料7（第70図）

平坦打面を連続的に打撃して剥離する2剥片からなる接合資料である。同一打面を先行して1回打撃しており、88の背面にやや左に偏った剥離面をとどめている。剥離角は約 110° を測る。88は先行する剥離の打点から3mm後退した位置を打撃して剥離された剥片で、剥離角は 103° を測る。剥片末端部でヒンジフラクチャーを生じて、底面は取り込まない。次の51も打点を直線的に5mm後退させた位置を打撃している。打点で垂直割れを生じて折損し、底面は確認されない。

以上の剥片剥離は、直線的に打点を後退させ連続して3回打撃している。1回目の剥離で切られた剥離面は1面からなる大きな剥離面であり、また、打面も平坦な1面からなる剥離面である。したがって、石核形状は不明であるが剥片剥離の初期段階の石核整形剥片である可能性が強い。

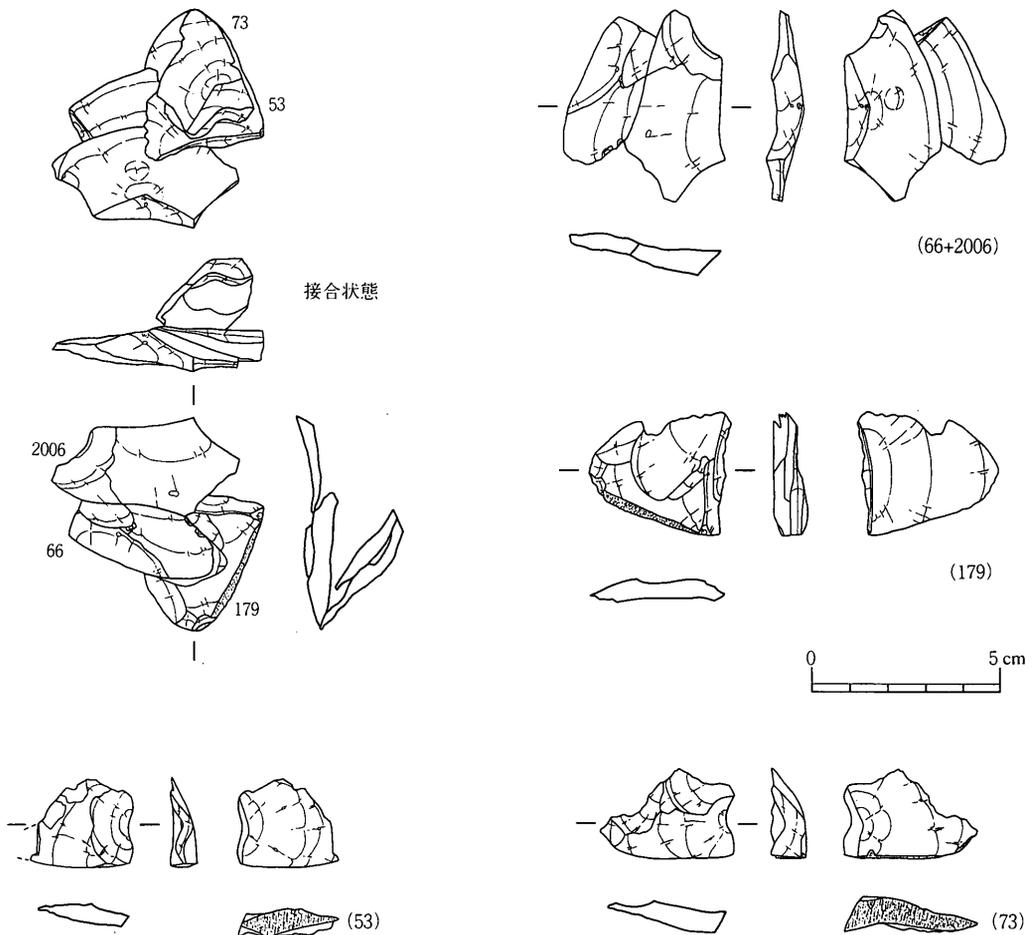


第70図 接合資料7実測図

接合資料 8 (第71図)

5 片の石片からなる接合資料である。うちⅡ種接合が 1 件含まれるので、4 剥片で構成される。最初に剥取された 66+2006 は平坦な打面を打撃して石理と直行する方向に剥取された剥片で、剥離途中で横割れを生じて分割される。背面は 3 面で構成され、左の剥離面が打面を共有しているものと推定される。ほかはバルブをとどめない。打面は平坦な一枚の剥離面であるが、右側に打面の剥離に切られる剥離面が存在する。剥離角は 115° を測る。

次に剥離される 179 は右側縁に礫表をとどめた剥片で、打面部分が欠損する。その主要剥離面の末端部分のわずかな面で、73 と接合する。ただし、その間に何枚かの剥片が剥離されており、179 とは直接接合しないが、73 の背面の大部分で接合する 53 もその一つである。



第71図 接合資料 8 実測図

53と73は平坦な一面の剥離面を打面とし、打点の移動が直線的であるが、73の背面右側にはもう一面の剥離面が認められるため、2者の間には一度左に打点をずらせて、一枚の剥片を剥離していることがわかる。53と73はいずれも右側に礫表をとどめており、以上の一連の4枚の剥片は石理に直交して剥離されている。

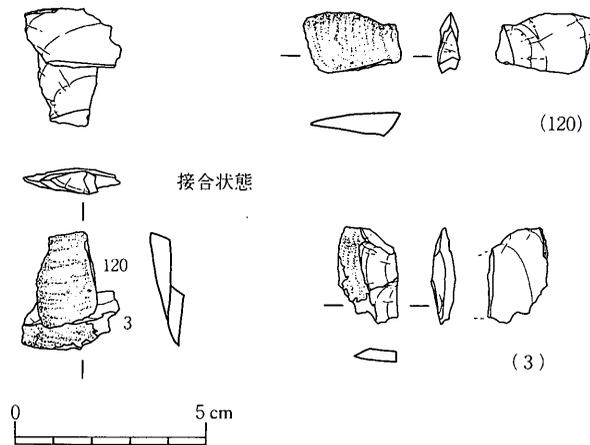
以上の接合資料からは、元の石核の形状は復元できるだけの材料がない。ただし、66+2006はの背面には、打面に接してネガティブな打点をとどめない剥離面があり、石理に平行した打面を形成する剥離面がそれを切っていることから推定すると、瀬戸内技法における打面調整剥片の接合資料である可能性もある。

接合資料9（第72図）

背面を全面礫表に覆われた剥片（120）と、底面に礫表をもつ剥片（3）との接合資料である。3は剥離途中で横割れを生じて打面側の石片が折損して遺存しないが、剥離方向は2者とも共通する。

120の打面は平坦な剥離面で、ネガ・ポジの判別は困難である。石理は打面と完全に平行する。剥離角は 110° を測る。

剥片剥離の初期に行われた工程と推定される。



第72図 接合資料9実測図

旧出土石器一覧表

凡 例

番号	調査時の取り上げ番号，報告書遺物番号，遺物注記番号をすべて統一している。
石材	「普サヌ」は普通サヌカイト，「白サヌ」は白色風化サヌカイトを示す。
幅・厚さ	Ⅱ種接合するものは，接合状態の計測値を，番号の若い方にのみ掲載した。
重量	Ⅱ種接合するものも，個別の計測値をそれぞれに掲載した。
接合	Ⅱ種接合するもののみ「=番号」として表記した。
重量区分	第22図に基づく区分
残存度	欠損箇所とおおまかな残存度を，分母を4に統一して表記した。
礫面付着	「○」は付着有り，「×」は付着無しで，○内に付着位置を示した。
打面遺存	「○」は打面が遺存するもので，打面形状を○内に記した。 (平) 平坦打面 (稜) 稜状打面 (点) 点状打面

番号	挿図番号	写真図版	接合資料番号	出土位置(X=)	出土位置(Y=)	標高(m)	器種	剥片分類	石材	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合	剥離角(°)	底縁角(°)	石理角(°)	重量区分	残存度	礫面付着(位置)	打面遺存(形状)	底面付着	備考
1	46			138,647.60	28,209.72	21.081	剥片	2類	普サヌ	2.9	3.2	0.6	5.20		117	50		6	完形	×	○(平)	×	
2	62	27	4	138,648.08	28,209.65	21.042	剥片	2類	普サヌ	2.8	(3.4)	0.7	3.67		(117)	52	117	5	打面部欠損3/4	×	-	○	
3	72		9	138,648.04	28,210.12	21.061	剥片	1類	普サヌ	2.6	(1.5)	0.3	1.43		(117)	39		3	打面部欠損2/4	○(底縁)	-	○	
5	44			138,648.93	28,209.00	21.005	剥片	1類	普サヌ	(2.8)	1.7	0.7	2.31		107	47	90	4	右側縁欠3.5/4	×	○(平)	×	
8	43	24	2	138,649.57	28,208.43	21.004	剥片	1類	普サヌ	5.7	2.8	1.2	3.04	=2008	114	42		5	完形	×	○(平)	×	
9				138,649.56	28,208.69	21.034	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.21		-	-		1	-	-	-	-	
10				138,649.52	28,210.34	21.051	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.10		-	-		1	-	-	-	-	
11	48			138,649.68	28,208.66	21.027	剥片	5類	普サヌ	5.1	3.7	1.4	10.49	=78	106	41	127	6	完形	○(右側縁)	○(平)	×	
13	44	24	2	138,649.83	28,208.46	21.013	剥片	1類	普サヌ	(2.6)	2.7	0.8	4.35		122	29		5	右側欠2/4	×	○(平)	×	
14	55	21	1	138,649.72	28,209.24	21.031	剥片	3類	普サヌ	6.5	4.5	1.2	5.42	=99	112	85	90	6	完形	○(左底縁)	○(平)	○	
15	56	24	2	138,649.82	28,209.49	21.038	剥片	2類	普サヌ	6.2	6.2	1.7	1.45	=79	113	38	115	3	完形	○(底縁)	○(平)	×	
17				138,650.00	28,209.35	21.027	剥片	1類	普サヌ	1.4	(1.1)	0.3	0.31		102	-		1	底縁部欠3/4	×	○(平)	×	
18	49			138,650.13	28,209.16	21.023	剥片	6類	普サヌ	(1.4)	5.3	1.0	4.05		-	-		5	打面及び両端欠1/4	×	-	-	
19	45	29	6	138,650.41	28,208.38	20.997	剥片	2類	普サヌ	(4.4)	2.7	1.2	13.11		113	59	118	6	右側欠3/4	×	○(平)	○	
20	48	26	3	138,650.40	28,208.92	21.011	剥片	5類	普サヌ	4.3	(3.9)	1.2	12.37		(118)	34	130	6	打面部欠3/4	○(背面全面)	-	×	
22	44	24	2	138,650.41	28,209.56	21.030	剥片	1類	普サヌ	4.1	3.4	0.9	5.9		119	33	130	6	完形	×	○(平)	×	
23	44			138,650.57	28,209.53	21.026	剥片	1類	普サヌ	2.6	1.7	0.4	0.92		117	41		2	完形	×	○(平)	○	
51	44	28	7	138,649.82	28,210.00	20.942	剥片	1類	普サヌ	(3.2)	2.4	0.8	4.09		95	67	126	5	左側欠2/4	×	○(平)	×	
52				138,649.56	28,210.20	20.970	剥片	1類	普サヌ	(1.1)	1.2	0.4	0.42		119	-		1	左側欠2/4	×	○(平)	×	
53	43	30	8	138,648.50	28,209.93	20.912	剥片	1類	普サヌ	2.4	2.7	0.7	3.62		114	39	110	5	完形	○(右側面)	○(平)	×	
54	55	17	1	138,648.32	28,210.18	20.975	剥片	3類	普サヌ	4.9	3.5	1.0	14.71		112	35	83	6	完形	×	○(平)	○	
55				138,648.37	28,211.25	20.976	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.20		-	-		1	-	-	-	-	
56	65	28	5	138,647.92	28,211.36	21.033	剥片	1類	普サヌ	(1.6)	1.7	0.5	0.88		(112)	40	90	2	右側欠2/4	○(左側面)	○(平)	×	
58				138,647.70	28,209.90	21.070	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.02		-	-		1	-	-	-	-	
59	55	17	1	138,647.46	28,209.92	20.979	剥片	3類	普サヌ	6.4	(2.4)	1.1	10.79		115	36	97	6	打面部欠3/4	×	-	○	
60	65		5	138,649.86	28,209.29	21.005	剥片	2類	普サヌ	0.9	3.0	0.5	1.42		110	85		3	完形	○(左側面)	○(平)	×	
61				138,649.80	28,209.16	20.998	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.17		-	-		1	-	-	-	-	
62				138,649.70	28,209.39	20.881	剥片	6類	普サヌ	3.1	(1.1)	0.3	0.92		113	-		2	小片0.5/4	×	-	-	
63				138,649.36	28,209.48	20.999	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.11		-	-		1	-	-	-	-	
64				138,649.26	28,209.52	21.003	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.23		-	-		1	-	-	-	-	
65				138,649.86	28,208.90	20.990	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.15		-	-		1	-	-	-	-	
66	71	30	8	138,649.81	28,208.81	20.989	剥片	3類	普サヌ	4.9	4.3	1.0	7.55	=2006	115	40	110	6	完形	×	○(平)	×	
67				138,649.07	28,208.79	21.001	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.14		-	-		1	-	-	-	-	
68				138,649.57	28,208.99	20.938	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.12		-	-		1	-	-	-	-	
69				138,649.61	28,208.88	20.998	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.46		-	-		1	-	-	-	-	
70				138,649.46	28,209.04	20.955	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.18		-	-		1	-	-	-	-	
72				138,649.07	28,209.06	20.939	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.06		-	-		1	-	-	-	-	
73	43	30	8	138,649.06	28,208.61	21.002	剥片	1類	普サヌ	2.5	3.5	0.8	4.89		105	47	90	5	完形	○(右側縁)	○(平)	×	
74	46	27	4	138,649.03	28,208.70	21.004	剥片	2類	普サヌ	3.5	2.3	0.9	4.11		92	47	100	5	完形	×	○(平)	○	
75	44	26	3	138,648.91	28,209.13	21.004	剥片	1類	普サヌ	3.5	(2.6)	0.6	4.80		109	35	114	5	底縁部欠3/4	×	○(平)	×	
76	65	28	5	138,648.76	28,209.10	20.884	剥片	2類	普サヌ	2.1	2.8	0.8	3.41		104	61	104	5	完形	○(左側縁)	○(平)	×	
77	30	14		138,648.31	28,209.02	20.896	有加工痕剥片	6類	普サヌ	(1.8)	(4.1)	0.6	3.10		-	21		5	打面部欠1/4	×	-	×	
78	48			138,648.22	28,209.49	20.904	剥片	6類	普サヌ	-	-	-	7.99	=11	-	-		6	-	-	-	-	
79	56	24	2	138,648.06	28,208.79	20.902	剥片	6類	普サヌ	-	-	-	36.86	=15	-	-	110	8	-	-	-	-	
81	49			138,647.56	28,209.05	21.046	剥片	5類	普サヌ	(2.2)	2.5	0.3	1.39		(135)	26		3	左側欠2/4	×	○(平)	×	
82				138,647.06	28,209.38	21.063	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.51		-	-		2	-	-	-	-	
83	45	26	3	138,648.70	28,208.63	20.998	剥片	2類	普サヌ	5.5	4.1	1.0	16.17		(118)	48	90	7	完形	○(底縁)	○(平)	○	
84	45			138,648.50	28,208.41	20.932	剥片	2類	普サヌ	4.1	2.5	0.7	4.46		118	41	105	5	完形	×	○(平)	○	
85	43	21	1	138,648.85	28,208.17	20.974	剥片	1類	普サヌ	4.3	3.5	0.9	18.56		112	68	89	7	完形	○(底縁)	○(平)	○	
86	55	23	1	138,649.46	28,207.94	20.869	剥片	5類	普サヌ	(2.4)	1.1	0.7	1.51		125	-		3	右側欠3/4	×	○(平)	-	
87	55	18	1	138,650.36	28,208.26	20.951	剥片	2類	普サヌ	7.3	2.5	1.3	3.08	=108	137	-	155	5	完形	×	○(平)	○	
88	43	28	7	138,649.61	28,208.42	20.929	剥片	1類	普サヌ	5.3	(2.6)	0.7	5.29		103	37	100	6	完形	×	○(平)	×	
89	45			138,649.67	28,208.38	20.919	剥片	2類	普サヌ	3.8	2.3	0.6	3.09		117	48	110	5	完形	×	○(平)	×	
90	44			138,650.18	28,210.20	20.934	剥片	1類	普サヌ	2.6	(1.6)	0.4	1.21		(117)	-	110	3	打面部欠3.5/4	×	-	×	
91				138,650.46	28,210.08	20.929	剥片	-	普サヌ	-	-	-	0.26		-	-		1	-	-	-	-	
92				138,650.71	28,210.36	20.824	剥片	2類	普サヌ	(1.1)	1.3	0.3	0.51		115	-		2	左側欠2/4	×	○(平)	×	
93	46			138,650.17	28,208.34	20.835	剥片	2類	普サヌ	2.1	2.2	0.3	0.86		114	27	115	2	完形	×	○(平)	×	

第14表 出土旧石器一覽表(1)

番号	挿図番号	写真図版	接合資料番号	出土位置(x=)	出土位置(Y=)	標高(m)	器種	剥片分類	石材	幅(cm)	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	接合	剥離角(°)	底縁角(°)	石理角(°)	重量区分	残存度	礫面付着(位置)	打面遺存(形状)	底面付着	備考
94	46			138,650.30	28,208.32	20.856	剥片	2類	普サヌ	2.6	1.9	0.4	1.47		113	54	90	3	完形	○(底縁)	○(平)	○	
95	48			138,649.87	28,208.19	20.830	剥片	5類	普サヌ	2.0	(1.9)	0.9	2.40		122	35		4	完形	○(背面)	○(平)	×	
97				138,649.59	28,208.69	20.831	剥片	1類	普サヌ	(1.6)	(2.4)	0.2	0.86		105	63		2	右側欠3/4	×	○(点)	×	
98				138,650.86	28,208.02	20.838	剥片	6類	普サヌ	(2.4)	(0.9)	0.3	0.76		(120)	—		2	打面部欠3/4	×	—	×	
99	55	21	1	138,648.61	28,208.53	20.865	剥片	6類	普サヌ	—	—	—	8.53	=14	—	—		6	—	—	—	—	
100	55	22	1	138,648.40	28,208.47	20.866	剥片	6類	普サヌ	(0.8)	(2.7)	(0.4)	0.47		—	—		1	—	—	—	—	同時割れの石片
101	55	17	1	138,647.86	28,208.70	20.968	剥片	6類	普サヌ	(3.8)	(4.3)	(1.4)	21.73		—	—		7	—	—	—	—	同時割れの石片
102	46	18	1	138,648.73	28,209.81	20.791	剥片	2類	普サヌ	3.7	3.2	(0.8)	9.42		121	60	154	6	完形	×	○(平)	○	
103	30	14		138,648.95	28,213.76	21.091	角錐状石器	—	白サヌ	1.4	(4.3)	1.0	5.20		—	—		6	基部欠2/4	×	—	—	
104	31			138,647.35	28,213.36	21.072	有使用痕剥片	1類	普サヌ	2.6	(1.9)	0.4	1.39		120	—		3	底縁部欠2/4	×	○(平)	—	側縁に微細剥離痕
106	44			138,648.05	28,211.11	20.821	剥片	1類	普サヌ	3.5	2.0	0.6	3.20		97	47		5	完形	×	○(平)	×	
107				138,650.91	28,208.36	20.756	剥片	2類	普サヌ	1.1	1.6	0.3	0.54		115	—	170	2	完形	○(底縁)	○(平)	×	
108	55	18	1	138,650.73	28,208.23	20.760	剥片	6類	普サヌ	—	—	—	12.14	=87	—	—		6	—	—	—	—	
109	45			138,650.58	28,208.18	20.733	剥片	2類	普サヌ	1.9	2.3	0.3	0.65		105	24		2	完形	×	○(点)	×	
110	55	18	1	138,648.81	28,208.46	20.807	剥片	2類	普サヌ	6.9	3.1	1.0	15.91		121	31	84	7	完形	×	○(平)	○	
111	43			138,649.75	28,208.94	20.755	剥片	1類	普サヌ	3.4	2.4	0.8	4.85		110	79	100	5	完形	○(左側縁)	○(平)	×	
112	31	19	1	138,648.51	28,208.54	20.799	削器	2類	普サヌ	(8.0)	3.9	1.3	45.78		120	—	84	8	右端欠3.5/4	×	○(平)	○	
113				138,648.82	28,208.18	20.809	剥片	2類	普サヌ	1.5	1.0	0.3	0.32		118	69		1	完形	○(底縁)	○(平)	○	
114				138,648.79	28,208.08	20.852	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.29		—	—		1	—	—	—	—	
115				138,648.73	28,208.14	20.826	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.16		—	—		1	—	—	—	—	
116	65	28	5	138,648.67	28,208.27	20.793	剥片	1類	普サヌ	2.1	2.5	0.6	1.97		130	70		3	完形	○(底面)	○(点)	○	
117	43			138,648.52	28,207.99	20.806	剥片	1類	普サヌ	1.7	1.9	0.4	1.18		112	56	120	3	完形	×	○(平)	×	
118				138,648.45	28,207.96	20.800	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.25		—	—		1	—	—	—	—	
119	55	17	1	138,648.38	28,208.08	20.804	剥片	1類	普サヌ	—	—	—	—		—	—		—	—	—	—	○	
120	48		9	138,648.08	28,208.10	20.930	剥片	5類	普サヌ	(1.6)	2.7	0.6	2.09		110	48	118	4	右側欠2/4	○(背面)	○(平)	×	
121	46	24	2	138,648.13	28,209.35	20.803	剥片	2類	普サヌ	2.8	1.8	0.6	3.33		114	64		5	完形	×	○(平)	○	
122	31			138,646.15	28,205.71	21.051	有使用痕剥片	2類	普サヌ	(4.9)	5.1	1.0	22.60		133	—	175	7	両端欠2/4	×	—	○	
140	30	14		138,651.24	28,207.70	21.010	有加工痕剥片	6類	普サヌ	3.4	(2.8)	1.6	9.10		—	—		6	打面部及び右側欠2/4	×	—	○	
141	45	28	5	138,650.08	28,207.78	20.706	剥片	2類	普サヌ	1.8	2.3	0.5	1.84		110	63	110	3	完形	○(左底縁)	○(平)	×	
142	68	29	6	138,649.95	28,208.27	20.771	剥片	2類	普サヌ	5.4	1.9	0.5	1.91	=161	111	—	100	3	完形	×	○(平)	○	
143				138,649.64	28,207.60	20.852	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.26		—	—		1	—	—	—	—	
144	46	24	2	138,649.48	28,208.46	20.884	剥片	2類	普サヌ	(1.5)	2.9	0.6	1.48		120	44		3	右側欠2/4	×	○(平)	×	
145	49			138,649.63	28,207.11	20.911	剥片	5類	普サヌ	(2.3)	1.9	0.4	1.60		102	73	95	3	右端欠3/4	×	○(平)	○	
146				138,649.23	28,207.22	20.999	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.09		—	—		1	—	—	—	—	
147	48			138,649.04	28,207.19	21.046	剥片	5類	白サヌ	3.0	3.2	0.6	4.65		115	56		5	完形	○(背面)	○(点)	×	
148	62	27	4	138,649.00	28,207.31	21.022	剥片	2類	普サヌ	4.9	(2.2)	0.7	7.43		—	44	95	6	打面部欠3/4	×	—	○	
149				138,649.93	28,208.76	20.953	剥片	6類	普サヌ	2.3	(1.0)	0.3	0.45		—	—		1	打面部欠1/4	×	—	×	
150	55	23	1	138,647.96	28,207.68	21.030	剥片	6類	普サヌ	(2.4)	(1.0)	0.7	1.61		—	—		3	—	—	—	—	同時割れの石片
151	44			138,647.87	28,207.74	21.040	剥片	1類	普サヌ	(2.7)	2.0	0.7	2.85		107	89	110	4	左側欠2/4	×	○(平)	○	
152				138,646.17	28,206.25	20.920	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.03		—	—		1	—	—	—	—	
153	32	15		138,646.97	28,205.40	20.991	石核	—	白サヌ	2.6	4.0	1.2	12.69		—	—		6	完形	×	—	—	
154		23		138,649.20	28,208.50	20.984	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.29		—	—		1	—	—	—	—	
155	46			138,647.39	28,206.35	20.871	剥片	2類	普サヌ	3.2	2.6	0.6	3.66		110	43	90	5	完形	×	○(平)	×	
156	30	14		138,647.72	28,206.42	20.886	角錐状石器	—	普サヌ	2.1	(4.2)	1.1	7.40		—	—		6	基部欠	×	—	—	
157	47	22	1	138,649.22	28,208.56	20.908	剥片	4類	普サヌ	5.4	2.8	0.4	2.16	=2003	112	56	160	4	完形	×	○(稜)	○	
159				138,650.32	28,208.64	20.833	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.16		—	—		1	—	—	—	—	
160	46			138,650.70	28,208.56	20.854	剥片	2類	普サヌ	(2.2)	1.9	0.5	1.65		98	41	115	3	左側欠3/4	×	○(点)	×	
161	45	29	6	138,648.95	28,207.13	20.769	剥片	6類	普サヌ	—	—	—	2.69	=142	—	—		4	—	—	—	—	
163				不明	不明	20.756	剥片	3類	普サヌ	3.3	2.7	0.4	2.07		117	14		4	完形	×	○(平)	○	
164				138,649.08	28,207.23	20.776	剥片	6類	普サヌ	(2.6)	(0.9)	0.3	0.72		—	—		2	打面部欠1/4	×	—	×	
165	49			138,648.67	28,208.56	20.774	剥片	5類	普サヌ	(2.8)	2.0	0.7	3.34		117	33	15	5	左側欠2/4	×	○(平)	×	
166	48	24	2	138,648.43	28,208.67	20.787	剥片	5類	普サヌ	7.3	6.0	1.3	43.75		115	78		8	完形	○(背面)	○(平)	×	
167	61	26	3	138,648.32	28,208.68	20.799	剥片	5類	普サヌ	(4.0)	(6.5)	0.8	17.86		(130)	27		7	打面部・右側欠3/4	○(左側縁)	—	○	
168	32	23	1	138,648.27	28,208.68	20.796	石核	—	普サヌ	(4.3)	4.4	2.1	30.89		(109)	—		8	半欠3/4	○	—	—	
169	49			138,647.95	28,208.43	20.760	剥片	5類	普サヌ	(1.9)	2.2	0.3	1.00		112	75		3	右側欠3/4	○(右側縁)	○(点)	×	
170				138,648.42	28,208.64	20.797	剥片	6類	普サヌ	(0.6)	(3.1)	0.5	0.76		—	—		2	両端・打面欠1/4	×	—	—	
171				138,648.80	28,207.14	20.900	碎片	—	普サヌ	—	—	—	0.43		—	—		1	—	—	—	—	

第15表 出土旧石器一覧表(2)

番号	挿図 番号	写真 図版	接合資 料番号	出土位置(x=)	出土位置(Y=)	標高(m)	器種	剥片 分類	石材	幅(cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	接合	剥離角 (°)	底縁角 (°)	石理角 (°)	重量 区分	残存度	礫面付着(位置)	打面遺存 (形状)	底面 付着	備考
172				138,651.08	28,207.46	20.771	剥片	2類	普サヌ	1.2	(1.2)	0.5	0.57		112	-		2	底縁部欠2/4	×	○(平)	-	
173	46			138,648.42	28,207.40	20.991	剥片	2類	普サヌ	2.0	1.6	0.4	1.54		117	90		3	完形	○(底縁部)	○(平)	×	
174	49			138,647.97	28,210.53	20.827	剥片	5類	普サヌ	2.3	1.0	0.3	0.57		119	39	120	2	完形	×	○(平)	×	
175	49			138,647.94	28,209.84	20.950	剥片	6類	普サヌ	(2.7)	2.4	1.2	5.95		137	48		6	右側欠2/4	×	○(点)	○	
176	49			138,647.95	28,209.76	20.951	剥片	3類	普サヌ	3.1	2.1	0.7	3.85		107	37		5	完形	×	○(平)	○	
177	44			138,647.96	28,209.71	20.920	剥片	1類	普サヌ	1.2	2.5	0.5	1.45		125	60		3	完形	○(左側面)	○(平)	×	
178	49			138,647.45	28,209.46	20.719	剥片	5類	普サヌ	(2.0)	1.6	0.4	0.79		122	53		2	右側欠2/4	×	○(平)	×	
179	49	30	8	138,648.95	28,207.53	20.800	剥片	6類	普サヌ	3.2	(3.6)	0.8	8.62		(125)	36	130	6	打面部欠3/4	○(右側縁)	-	×	
181				138,648.70	28,208.94	20.734	碎片	-	普サヌ	-	-	-	0.17		-	-		1	-	-	-	-	
184	30	14		138,648.81	28,208.21	20.728	角錐状石器	-	白サヌ	2.2	(5.4)	1.2	15.22		-	-		7	先端部欠3/4	×	-	-	
185				138,647.98	28,207.90	20.780	碎片	-	普サヌ	-	-	-	0.29		-	-		1	-	-	-	-	
186				138,650.58	28,208.18	20.733	碎片	-	普サヌ	-	-	-	0.20		-	-		1	-	-	-	-	
1001	32	15		138,648.53	28,206.70	20.751	石核	-	白サヌ	3.9	3.0	3.8	30.35		-	-		8	完形	-	-	-	
1002	30	14	1	138,648.11	28,206.53	20.824	有加工痕剥片	6類	普サヌ	(5.8)	(2.0)	0.8	7.52		-	-		6	-	-	-	-	同時割れの石片
1003	48	26	3	138,647.95	28,207.31	20.775	剥片	3類	普サヌ	3.5	3.2	1.3	13.65		111	55	105	6	完形	○(右背面)	○(平)	×	
1004	45	28	5	138,647.85	28,207.08	20.807	剥片	2類	普サヌ	2.3	2.4	0.7	3.45		110	36	110	5	完形	×	○(平)	×	
1005	46			138,647.64	28,207.20	20.793	剥片	2類	普サヌ	(2.2)	1.9	0.6	1.94		110	65		3	左端欠3/4	×	○(平)	×	
1006	45	27	4	138,647.51	28,207.05	20.802	剥片	2類	普サヌ	5.2	3.9	1.1	15.42		121	90	100	7	完形	○(右側縁)	○(平)	○	
1007	47	22	1	138,646.53	28,207.43	20.811	剥片	4類	普サヌ	(4.6)	2.6	0.6	6.81		119	72	160	6	左端欠3/4	×	○(稜)	○	
2001	31			-	-	-	削器	砥礫	普サヌ	(6.9)	(4.1)	1.7	41.56		-	-		8	左半欠3/4	×	-	-	
2002	44			-	-	-	剥片	1類	普サヌ	2.3	0.9	0.4	0.36		128	54		1	完形	×	○(平)	○	
2003	47	22	1	-	-	-	剥片	6類	普サヌ	-	-	-	2.20	=157	-	-		4	-	-	-	-	
2004	47	20	1	-	-	-	剥片	4類	普サヌ	(3.8)	3.4	1.1	15.34		113	52	160	7	両端欠2/4	×	○(稜)	○	
2005	47	22	1	-	-	-	剥片	4類	普サヌ	(4.2)	2.9	0.6	8.01		119	63	160	6	左端欠3/4	×	○(稜)	○	
2006		30	8	-	-	-	剥片	6類	普サヌ	-	-	-	4.00	=66	-	-		5	-	-	-	-	
2007	43	26	3	-	-	-	剥片	1類	普サヌ	5.7	3.2	0.7	11.72		114	34	105	6	完形	○(底縁部)	○(平)	○	
2008	43	24	2	-	-	-	剥片	6類	普サヌ	-	-	-	3.71	=8	-	-		5	-	-	-	-	
3001	30	14		-	-	-	角錐状石器	-	白サヌ	1.5	3.9	0.7	4.56		-	-		5	完形	×	-	-	G-2区7層
3002	30	14		-	-	-	角錐状石器	-	普サヌ	1.6	(3.0)	0.7	3.43		-	-		5	先端部欠	×	-	-	H-4区表採

第16表 出土旧石器一覧表(3)

第4節 弥生時代～古墳時代

I II区およびIII区において溝を中心とする遺構を検出した。以下、各遺構ごとに説明する。

(1) SD-01(第73～78図)

I II区で検出した溝である。調査区内を東から西へ弧状に走行する。幅は2.5～4.0mと、地点によって広狭がみられる。断面は「V」字状を呈す部分と、「U」字状を呈す部分があり、深さは約1.0mを測る。G-4区およびG-3区で強く蛇行する箇所がみられる。また、G-3区以東は第3章において、旧石器時代の地形形成に関して検討したように、AT降灰期以降に微高地が漸次形成されたことが判明している。したがって、調査地の西側では微高地を切り込むように当溝が流れていることがわかる。

埋土は褐色系で、次の3層に大別できる。

I層 古墳時代の須恵器を極少量含むシルト層。F-3・G-3区付近で顕著に見られる。

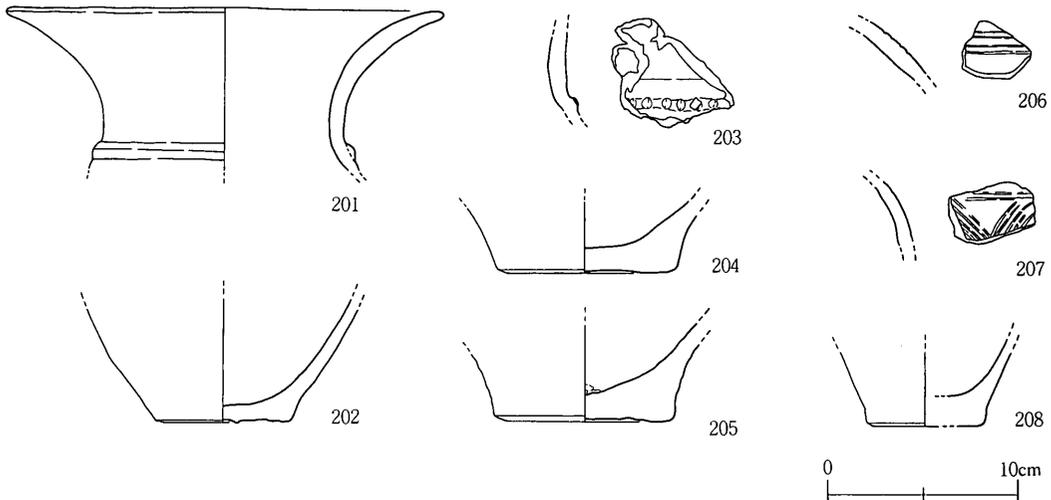
層厚0.1mほどの薄い層である。

II層 弥生時代後期の土器を含む粘土層。濃い黒褐色を呈す。

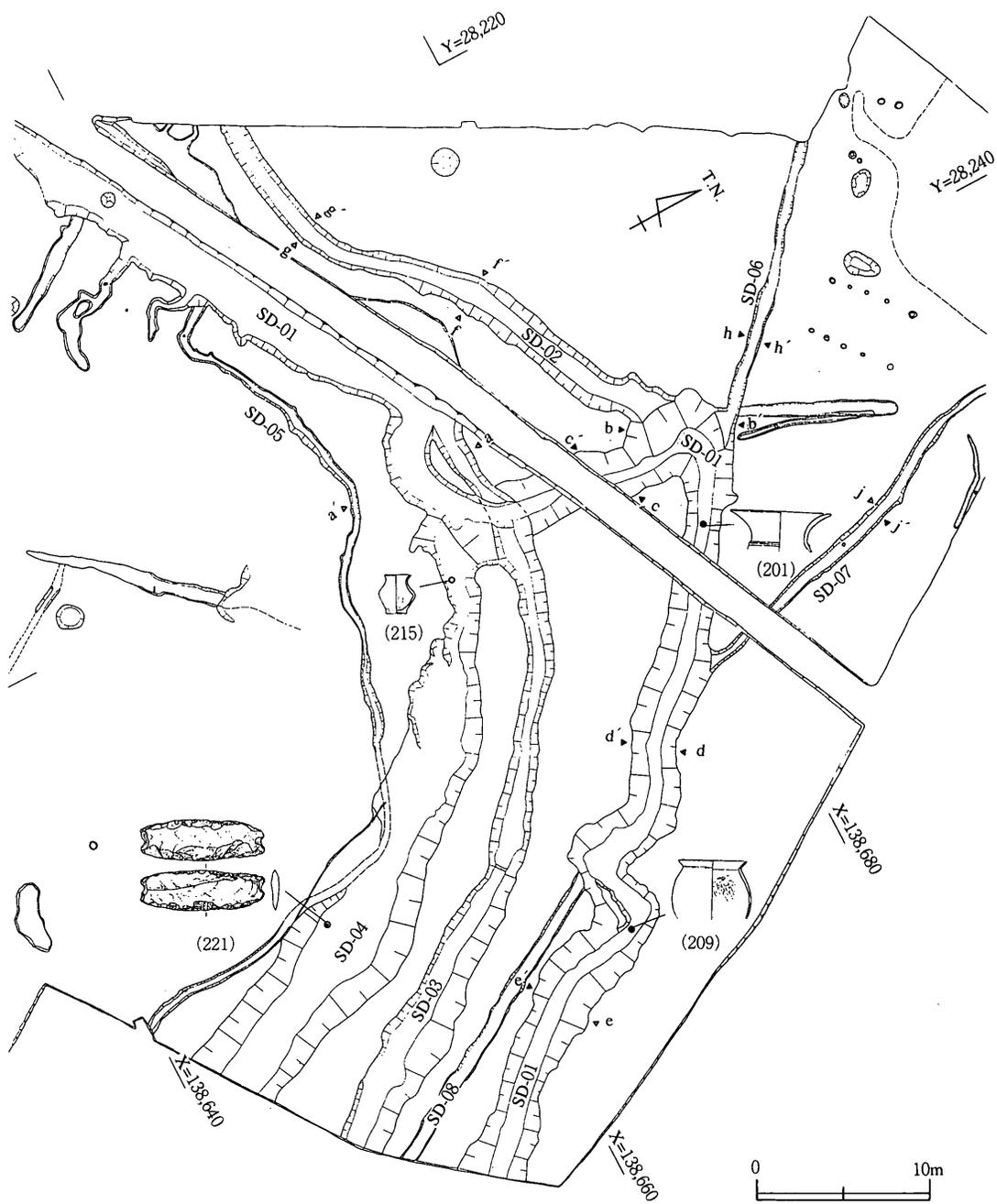
層厚は0.4mを測る。

III層 粘土層と中～粗砂層が交互に堆積する黒褐色土層。

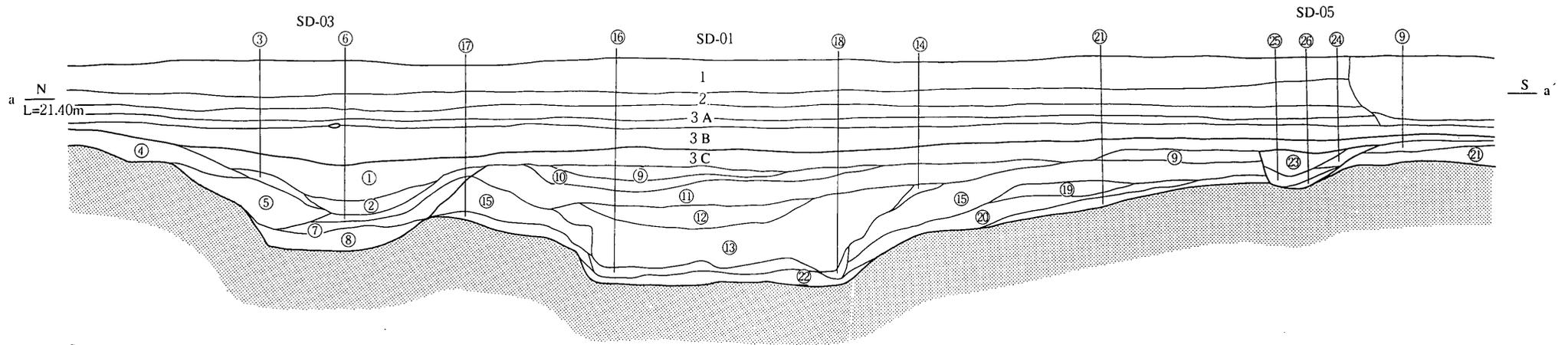
弥生時代前期の遺物を含む。



第73図 SD-01出土遺物実測図(1)



第74图 SD-01~SD-08平面图

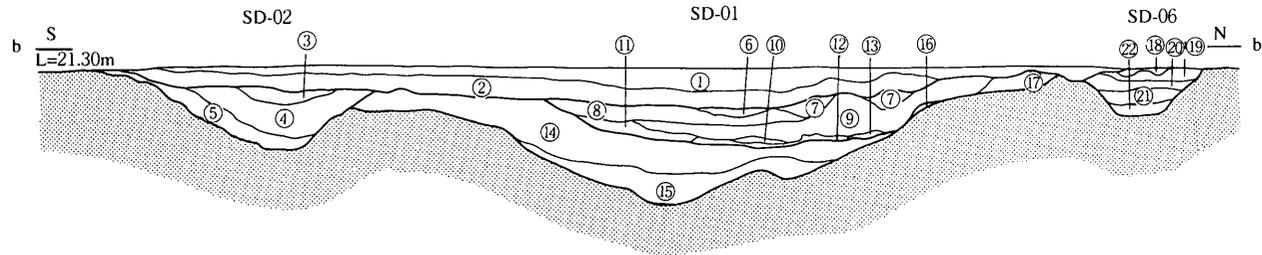


- ① 黒褐色粘土
- ② 黒褐色粘土質極細砂
- ③ 褐灰色シルト質中砂 (1~2cm大の風化礫混じる)
- ④ 灰黄褐色粘土質中砂 (基盤層ブロック混じる)
- ⑤ 灰褐色シルト質細砂
- ⑥ 暗赤褐色粘土質極細砂
- ⑦ 灰褐色粘土質極細砂
- ⑧ 褐灰色中砂 (1~2cm大の風化礫・基盤層ブロック混じる)
- ⑨ 黒褐色粘土質細砂
- ⑩ 黒灰色粘土質細砂
- ⑪ 灰黄褐色シルト質細砂
- ⑫ 灰褐色シルト質中砂
- ⑬ 褐灰色細砂 (1~2cm大の風化礫混じる)

SD-03
SD-01 I 層
SD-01 II 層

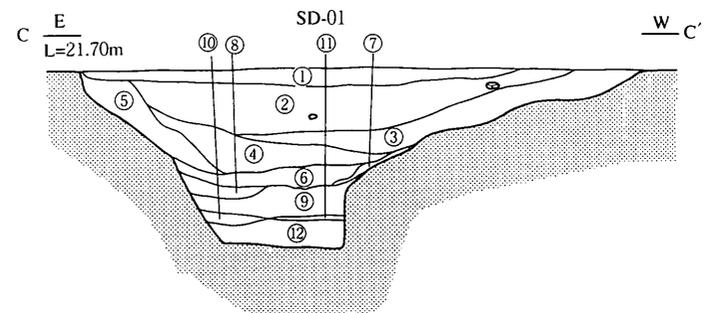
- ⑭ 灰黄褐色粘土質細砂
- ⑮ 灰褐色シルト質細砂
- ⑯ 黄灰色細砂
- ⑰ 黄灰色中砂 (1~2cm大の風化礫混じる)
- ⑱ 黒色粘土質極細砂 (白色砂ブロックを含む)
- ⑲ 灰黄褐色中砂
- ⑳ 褐灰色粘土質細砂
- ㉑ 暗灰黄色中砂 (1~2cm大の風化礫混じる)
- ㉒ 黄灰色中砂
- ㉓ 黄灰色粘土質極細砂
- ㉔ 黄灰色シルト質細砂
- ㉕ 灰黄褐色シルト質細砂
- ㉖ 黄灰色シルト質中砂

SD-01 III 層
SD-05



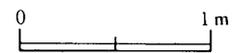
- ① 褐灰色粘土質極細砂
- ② 黒褐色粘土
- ③ 黒褐色シルト質細砂
- ④ 黒灰色シルト質細砂
- ⑤ 褐灰色シルト質細砂
- ⑥ 黒褐色シルト質細砂
- ⑦ 黒褐色粘土質極細砂
- ⑧ 黒灰色粘土質極細砂
- ⑨ 褐灰色粘土質極細砂
- ⑩ 暗赤灰色粘土質極細砂
- ⑪ 灰褐色粘土質細砂

- ⑫ 褐灰色粘土質細砂
- ⑬ 暗灰色粘土質細砂
- ⑭ 黒褐色粘土質細砂
- ⑮ 灰褐色細砂
- ⑯ 黄灰色シルト質細砂
- ⑰ 黄灰色粘土質極細砂
- ⑱ 黄灰色シルト質細砂
- ⑲ 灰黄褐色シルト質細砂
- ㉑ 暗灰黄色細砂
- ㉒ 暗灰黄色中砂
- ㉓ 灰黄褐色中砂

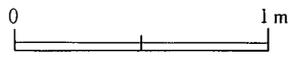
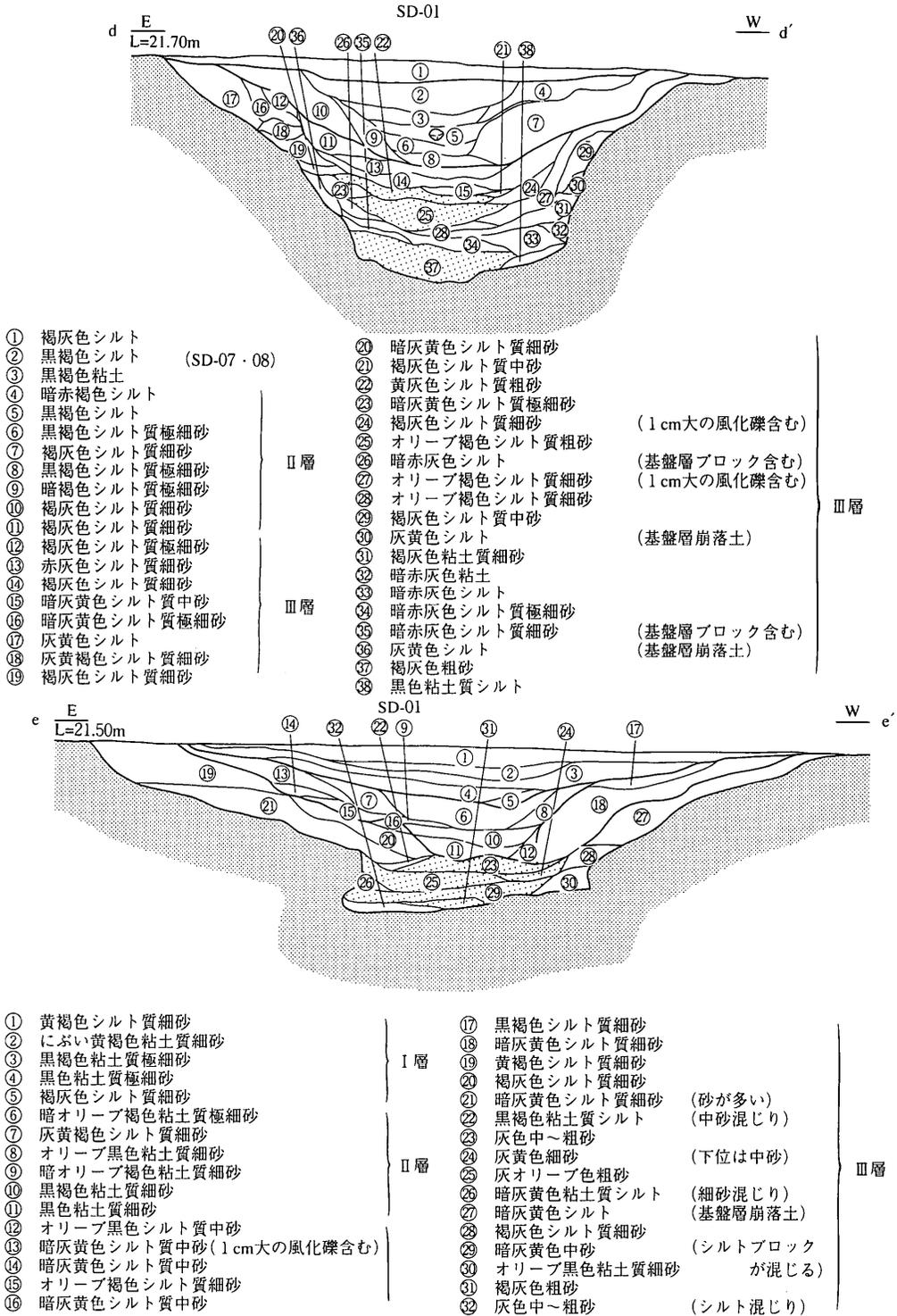


- ① 暗赤灰色粘土質極細砂
- ② 黒褐色シルト
- ③ 黒褐色粘土質細砂
- ④ 赤灰色粘土質極細砂
- ⑤ 褐灰色シルト質細砂
- ⑥ 黄灰色細砂
- ⑦ 褐灰色シルト質中砂 (基盤層ブロック含む)
- ⑧ 褐灰色シルト質細砂 (基盤層ブロック含む)
- ⑨ 黄灰色粘土質細砂 (基盤層ブロック含む)
- ⑩ 黄褐色粘土質細砂
- ⑪ 暗灰黄色粘土質細砂
- ⑫ 灰色粗砂 (1~2cm大の風化礫含む)

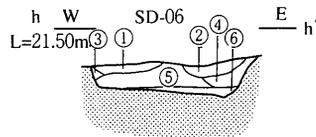
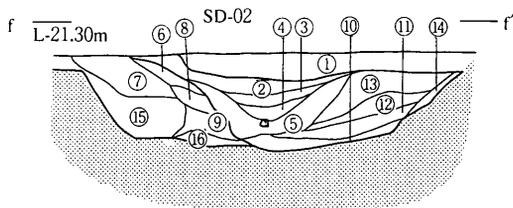
SD-01 I 層
SD-02 II 層
SD-01 II 層
SD-01 II 層
SD-01 III 層
SD-06



第75図 a~cライン土層断面図



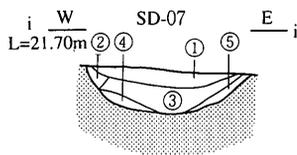
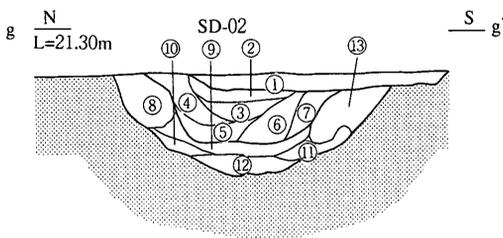
第76図 d・eライン土層断面図



- ① 黒褐色粘土質極細砂
- ② 黒色粘土質極細砂
- ③ 灰黒色粘土質極細砂
- ④ 黒褐色粘土質極細砂
- ⑤ 黒褐色粘土質極細砂
- ⑥ 褐灰色シルト質極細砂
(黒色土をブロック状に含む)
- ⑦ 黄灰色シルト質極細砂
- ⑧ 褐灰色シルト質細砂
- ⑨ 灰褐色シルト質細砂
- ⑩ 明黄褐色粘土質中砂
(基盤層ブロック含む)
- ⑪ 褐灰色粘土質細砂
- ⑫ 灰黄褐色シルト質細砂
- ⑬ 赤灰色シルト質細砂
- ⑭ 黄褐色粘土質細砂
- ⑮ 黄灰色シルト
(基盤層崩落土)
- ⑯ 暗黄灰色シルト
(基盤層ブロック混じる)

- ① 暗灰黄色シルト質細砂
- ② 灰黄褐色シルト質細砂
- ③ 黄灰色粘土質極細砂
- ④ にぶい黄褐色中砂
- ⑤ 褐色細砂 (粘土ブロック混じる)
- ⑥ にぶい黄褐色中砂

①～⑤ I層, ⑩～⑭ II層, ⑥～⑨⑮⑯ III層

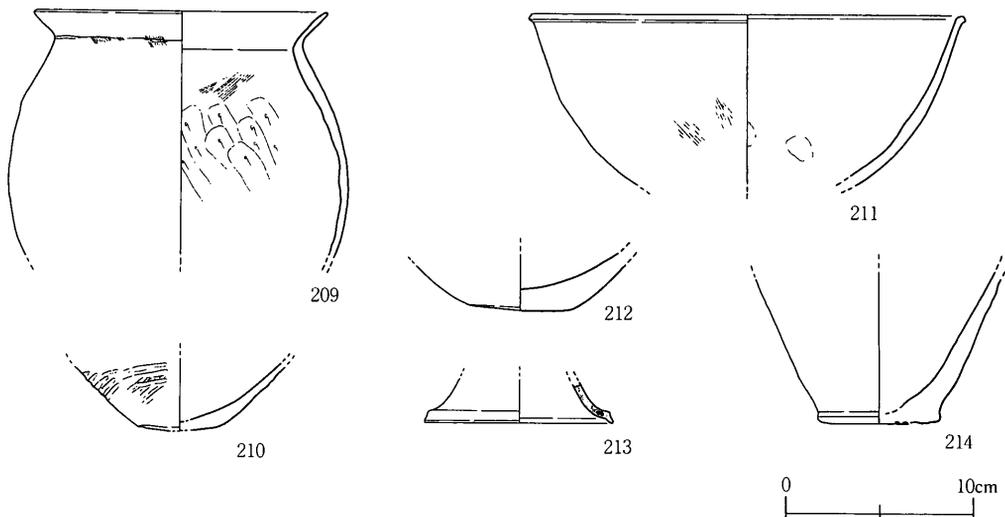


- ① 黒褐色粘土質極細砂
 - ② 黒色粘土質極細砂
 - ③ 灰黒色粘土質極細砂
 - ④ 黒褐色粘土質極細砂
 - ⑤ 黒褐色粘土質極細砂
 - ⑥ 黒褐色粘土質極細砂
 - ⑦ 黄灰色シルト質細砂
 - ⑧ 黄褐色シルト質細砂
 - ⑨ 褐灰色シルト質細砂
 - ⑩ 灰黄褐色シルト質細砂
 - ⑪ 褐灰色シルト質細砂
 - ⑫ 黄灰色細砂
 - ⑬ 黄灰色細砂 (基盤層崩落土)
- I層
II層
III層

- ① にぶい黄褐色シルト
- ② 黄灰色シルト (基盤層崩落土)
- ③ 暗黄灰色粘土質細砂
- ④ 黄灰色シルト質細砂
- ⑤ 灰黄色シルト質細砂



第77図 f～iライン土層断面図



第78図 SD-01出土遺物実測図(2)

Ⅲ層中には基盤層の黄橙色土がブロック状に多く混在し、また溝の側壁が崩れてオーバーハング状になるところもみられる。出土した遺物は、201～208がⅢ層、209～212がⅡ層、213・214がⅠ層である。主要な土器は溝が強く蛇行する付近で出土する。

201・203は頸部に凸帯を持つ壺である。201の凸帯上には刻目の痕跡が磨滅面でかろうじて観察できる。206・207は壺の肩部片。206は半裁竹管による沈線文。207はヘラ描沈線による木葉文。底部片は肉厚のものが多い。弥生前期前半から中葉に比定される。

209・210は同一個体の可能性が高い甕。淡茶褐色を呈し、胎土中に黒雲母、角閃石を含む。底部付近に叩き目が残り、内面下半は顕著な篋削り。211は半円形の鉢。底部は丸底に近い形状と推定される。口縁端部は断面三角形状に若干拡張する。外面は粗いナデ調整。内面は平滑に仕上げている。弥生時代後期後半に比定される。

213は6世紀末～7世紀初頭頃の須恵器高杯底部片である。

(2) SD-02・SD-06 (第74・75・77図)

SD-01から派生する、幅約2.0mの溝である。深さは0.6mを測り、SD-01の溝底のレベルより0.2mほど高い。埋土は褐色系。1回の掘り直しが断面から観察でき、SD-01のⅡⅢ層に対応するものと考えられる。bラインではⅡ層とⅢ層が明瞭に区分される。

SD-06はSD-01との切り合いを確認できなかったが、埋土が褐色系であり、SD-01・SD-02と併存した可能性が高い。いずれの溝からも出土遺物はなかった。

(3) SD-03・SD-05 (第74・75図)

SD-03はSD-01・SD-04と平行して走行する溝である。幅は広い部分で1.3m、狭い部分で3.6mを測る。埋土は褐色系。SD-01とはG-3区で切り合いがみられ、それ以西では重複して走行したのと考えられる。断面観察ではSD-01とある時期に同時併存した可能性があるものの、掘り直して包含層3C層を切り込む段階ではSD-01の埋没後に走行していたことがわかる。出土遺物は皆無であるが、SD-01が概ね埋没して若干窪みを残す段階に掘削され、その後3C層が堆積する時期に掘り直して機能を存続し、3B層が堆積する時期までには埋没したのと考えられる。SD-01が6世紀末頃に埋没し、3B層が8世紀中葉に堆積していることから、その間が存続年代と考える。

SD-05は幅0.5～1.0mの浅い溝である。SD-04を一部で切り込み、SD-03と平行して走行する。西端では直角に屈曲し、SD-01 (SD-03と重複する箇所) に合流する。出土遺物は

ないが、SD-03との同時存続の蓋然性が高い。

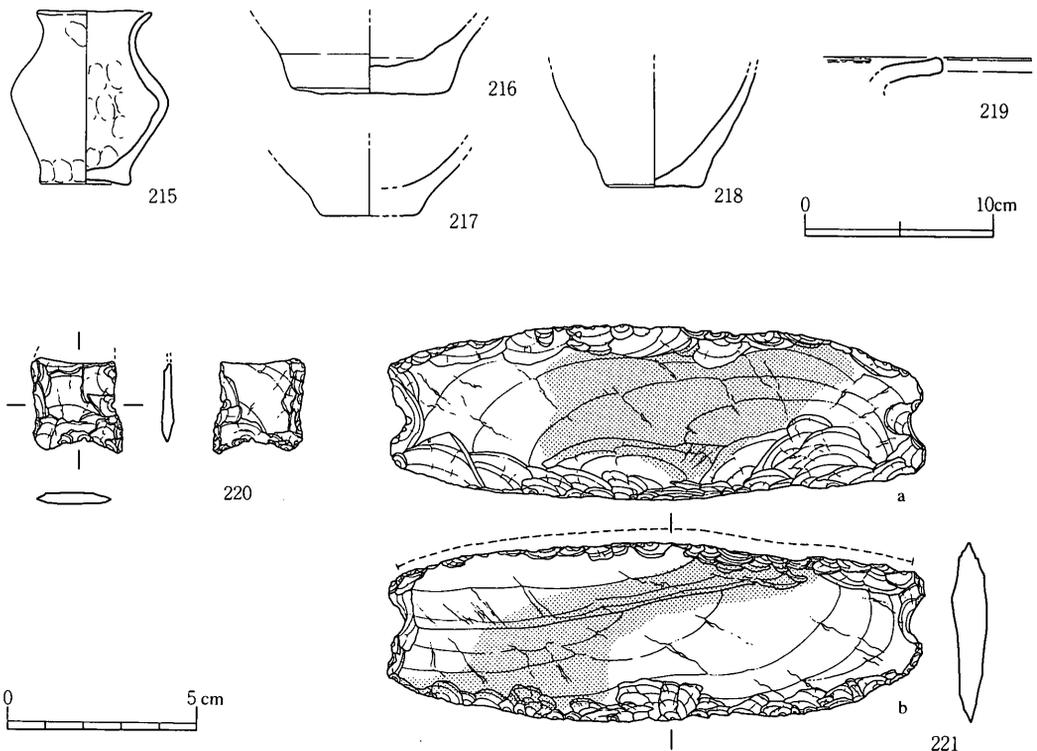
(4) SD-04 (第74・79図)

SD-01の東を同一方向に走行し、G-3区でSD-01に合流する断面皿状の溝である。深さは約1.0m。埋土は褐色系。弥生時代前期の小壺(215)、石鏃(220)、打製石庖丁(221)が出土した。存続時期はSD-01に共通するものと考える。

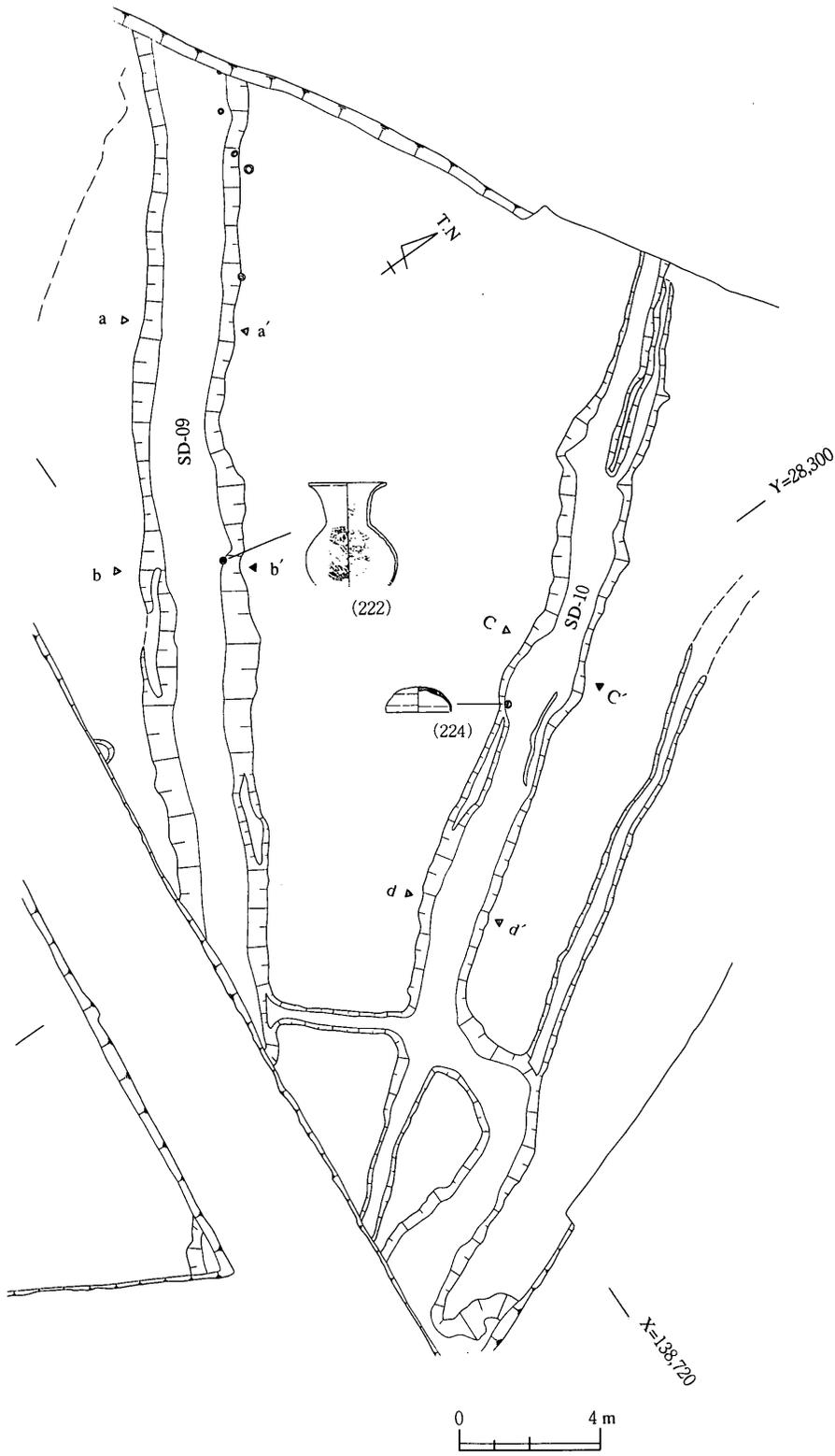
215は口縁部の外反度が弱く、肩部付近はやや張り気味の器形を呈しており、弥生時代前期前半に一般的である。

220の石鏃はサヌカイト製。基部の調整が左右不均等であり、未製品である。

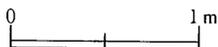
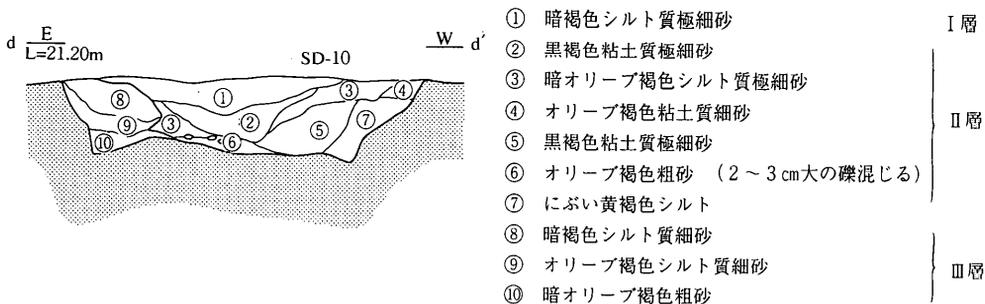
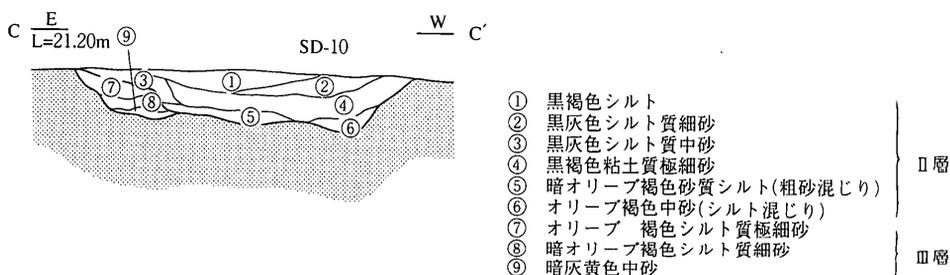
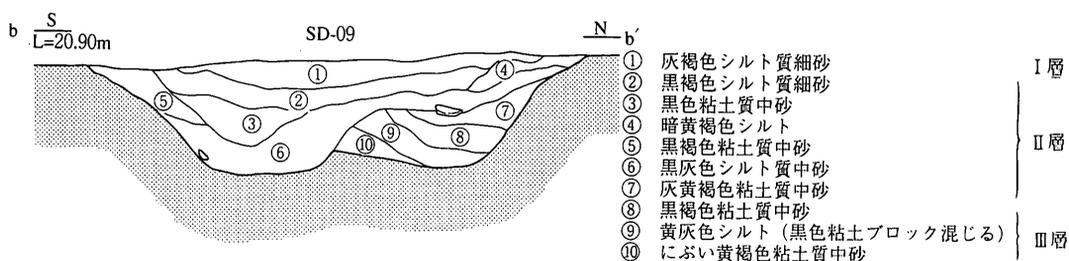
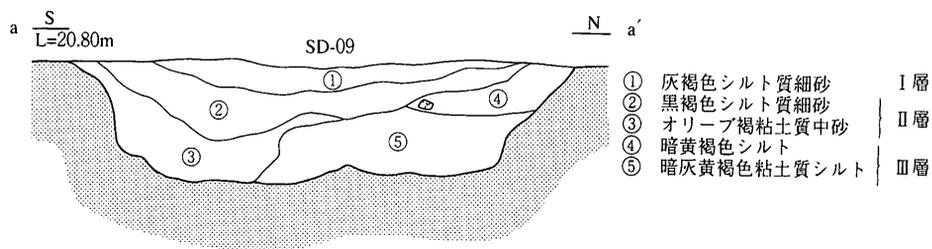
221はサヌカイト製の完形の打製石庖丁である。幅は14cmを越える大型品で扁平な曲背曲刃タイプである。石理に沿って剥離された幅広の横長剥片を素材とし、図のa面が主要剥離面、b面が背面に相当する。b面の素材相当面は2面の大きな剥離面で構成される。上部の面は幅広の横長剥片を剥取したネガ面で、下部の面は平坦でありネガポジの判別は難しい。



第79図 SD-04出土遺物実測図



第80图 SD-09・10平面图



第81図 SD-09・10断面図

上部のネガ面は図上で左に偏っており、また、当該素材剥片の打点は図の右寄りに想定されることから、石核は幅14cmをかなり越える大きさの作業面をもっていたことが考えられる。また、ネガ面は当該剥片に近い位置においてリングが収束する様子が見られない。したがって、素材剥片段階においてもネガティブなバルブは留めていなかった可能性が高い。以上のことから、幅20cm以上の大型の板状石核から交互剥離によって素材剥片を剥離したものと推定される。表裏の網目部分に摩滅痕が残るが、刃部の光沢は目立たない。

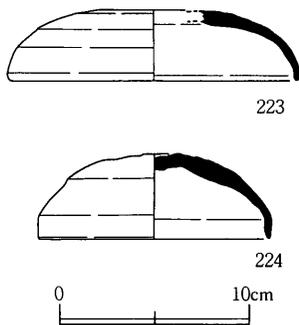
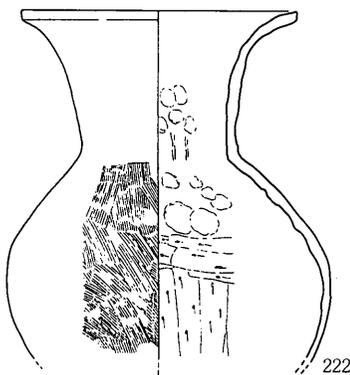
(5) SD-07・SD-08 (第74図)

SD-01と重複して検出した溝である。褐色系粘土層を埋土とする。調査中には切り合いを確認していないが、dラインの②層が対応して、SD-01の埋没後に掘削された同一の溝である可能性が高い。埋土の色調から中世以前と考えられ、dラインの断面では上面が褐色系包含層①に覆われていることから、SD-03・05と同時期に機能していたものと思われる。遺物は出土していない。

(6) SD-09・SD-10 (第80・81図)

Ⅲ区の北半ではほぼ北西方向に走行する溝である。両溝はE-6区で小溝を介して合流する。SD-10はD-6区とE-6区の境目付近で強く蛇行し、その部分で他の小溝も合流・派生する。

両溝とも幅2～3mを測り、埋土は褐色系で、概ね3層に大別される。Ⅰ層は中世土器の小片を含む浅い窪み状の堆積層。Ⅱ層は古墳時代後期の須恵器坏が出土した。Ⅲ層は弥生時代後期後半の壺が出土した。土層断面からⅢ層からⅡ層への明瞭な掘り直しが観察できる。



222はSD-09Ⅲ層より出土した壺である。球形の胴部に、頸部がやや開き気味に立ち上がり、口縁部がラップ状に開くもので、口縁端部は拡張しない。弥生時代後期前半に比定される。223・224はSD-10Ⅱ層より出土した須恵器坏蓋

第82図 SD-09・10出土遺物実測図

である。6世紀末～7世紀初頭に比定される。

(7) 小結 (第83図)

I II区で確認した多数の溝群は、出土遺物が少なく、時期決定に不安を残すが、概ね2段階に区分することができる。

第1段階 弥生時代前期に掘削され、後期に掘り直しが行われるSD-01を基幹とする段階

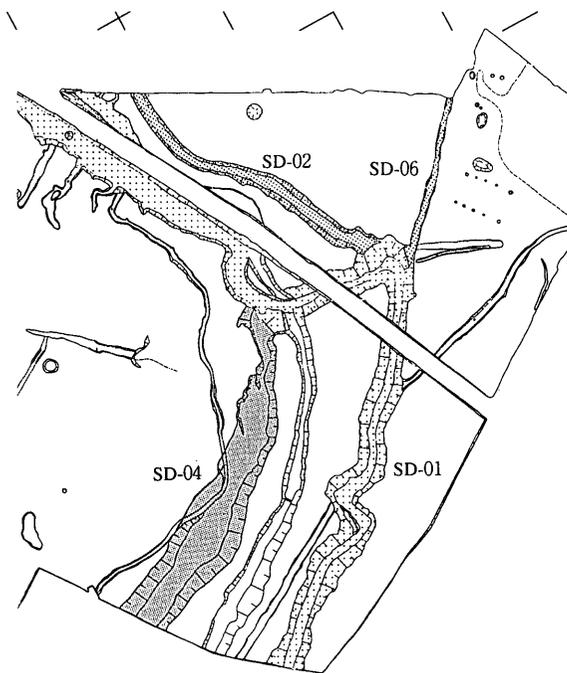
第2段階 SD-01が埋没した後に、その機能をSD-03が継承する段階。

第1段階ではまずSD-01が微高地縁辺を走行し、途中から微高地を切り込むように掘削されており、かつ自然形成とは考えにくい強い蛇行が認められる点で人為的に掘開された灌漑用基幹水路と考える。派生する溝はSD-02・SD-06があり、いずれも蛇行部分から派生する。SD-06は地形的に低い方向に直線的に伸びるのに対して、SD-02は20mほどSD-01と併走し、その後北に向きを変えるようである。SD-06が浅い溝であり、隣接する田地への配水に適した形状を示し、SD-02は比較的深く、調査地外の低い田地に配水するのに適している。SD-04は上流側の田地からの排水の機能を有したものと考えられる。この時期の水田は調査地北側の後世の礫堆積に覆われた低地部にかけて展開したものと考えられる。弥生時代前期段階の導水企画を示す資料といえる。

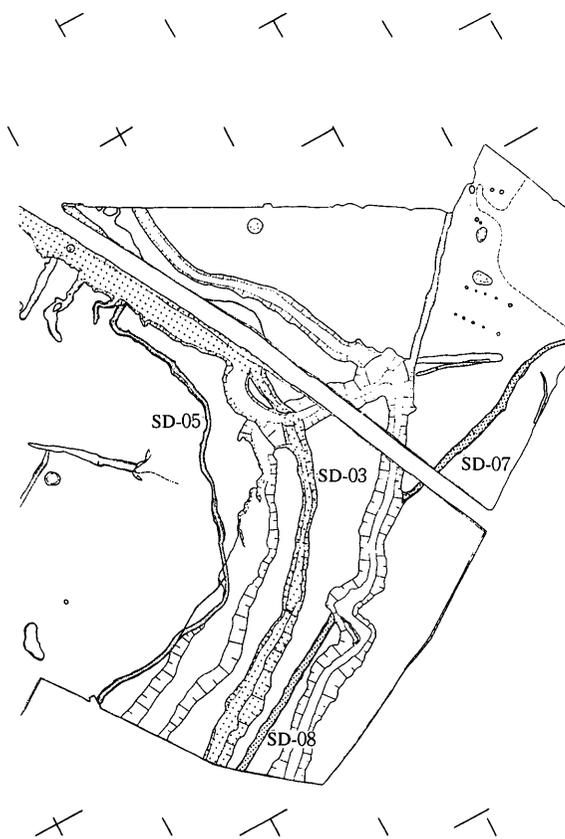
なお、SD-01・SD-02は明確な掘り直しが確認できた。掘り直しの後に弥生時代後期の土器が投棄されている。SD-01が掘開された弥生時代前期から掘り直しまでの間、水路が継続的に使用されていたかどうかは不明であるが、掘り直しを行う際にも、基本的には従前の導水企画を継承したものと考えられる。

SD-01は6世紀末頃にはほとんど埋没し、第2段階では基幹水路は少し微高地側に寄ったSD-03に移行している。北の低地部に向けて派生する溝はSD-07・08が新たに掘削され、SD-05はSD-03に併走した後に合流しており、主として西側田地の排水を行ったものと考えられる。このように第2段階の基幹水路とそれに付属する用排水路が、第1段階のそれぞれの位置から一様に微高地側に移動していることが理解される。

Ⅲ区のSD-09・SD-10は下層から弥生時代後期前半、上層から古墳時代後期の土器が出土している。後世の礫堆積が旧流路低地域を示すとすれば、Ⅲ区の溝はI II区の対岸に位置する。Ⅲ区の北東では郡家原遺跡で弥生時代後期後半・古墳時代末頃の居住遺構が確認されており、SD-09・SD-10はそれに連動する可能性がある。



第1段階
(弥生時代)



第2段階
(古墳時代末)

第83図 I II区水路変遷図

第5節 古代～中世

(1) SB-01 (第85図)

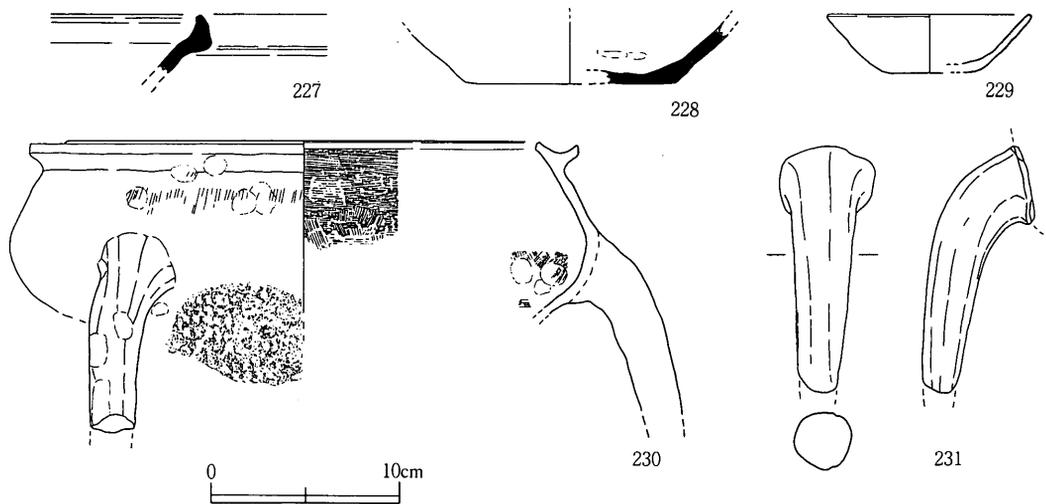
F-2・3区で検出された掘立柱建物である。梁間1間，桁行4間で主軸方位はN-51°Wで，周辺の条里地割と約10°の角度差がある。梁間の柱間距離は約3.0m，桁行の平均柱間距離は1.2mを測る。柱穴の大きさは最小で直径0.24m，最大で0.5m。深さは概ね0.2mである。埋土は灰色系シルト質土の単層で，柱痕は認められなかった。出土遺物は皆無で所属時期の詳細は不明であるが，隣接する土坑（SK-01・02）と共通する方向性を持つことから，SK-01の所属時期を援用し13世紀後半～14世紀初頭頃と考える。

(2) SK-01 (第84・85図)

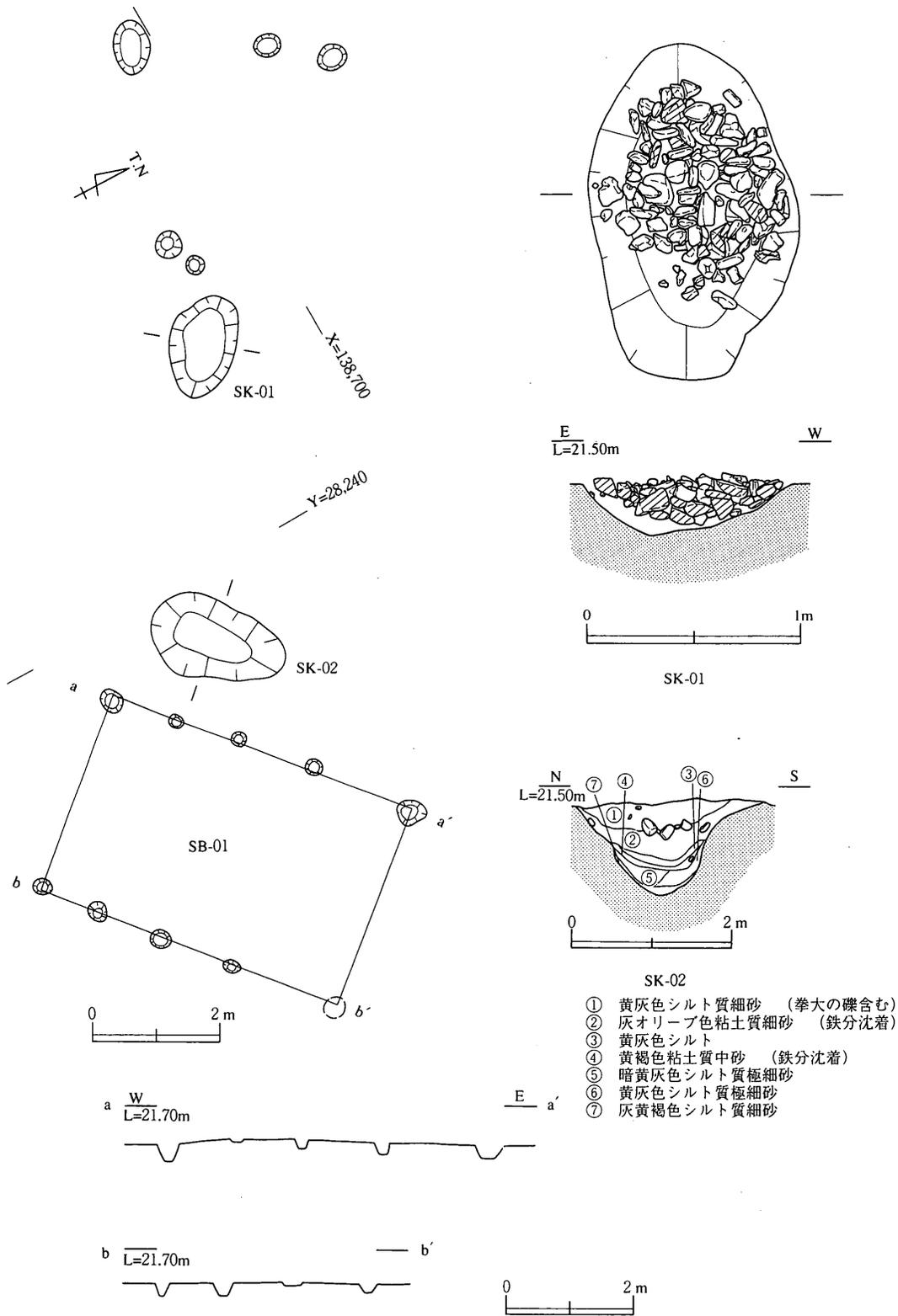
F-2区において検出されたSB-01と直交する主軸をもつ楕円形の土坑である。長さ1.64m，幅1.02m，深さ0.24mを測る。埋土は灰褐色系粘質土層で，拳大の円礫を多く含む。

須恵器，土師器が出土した。

227，228は灰色を呈する東播系こね鉢の口縁部片および底部片である。口縁部は上方への拡張が顕著で「く」の字に近い形状。229は土師器の杯。230，231は土師器土釜である。なお，図化していないが龍泉窯系の鎗蓮弁文をもつ青磁碗体部片も出土している。13世紀後半～14世紀初頭に比定される。



第84図 SK-01出土遺物実測図



第85図 SB-01及び周辺遺構実測図

(3) SK-02 (第85図)

F-3区において検出されたSB-01と平行する主軸をもつ楕円形の土坑である。SB-01の北側桁行柱穴列の1m外側に位置する。長さ2.20m、幅1.32m、深さ0.50mを測る。埋土は灰褐色系粘質土層で、円礫を少量含む。図化していないが、土釜片少量が出土した。

(4) SK-03・04 (第86図)

I-3区において検出されたSD-08の両側に配された円形の土坑である。SK-03は直径0.8m。SK-04は直径1.0m、深さはいずれも0.1mほどである。埋土は灰色系粘質土で出土遺物はなかった。

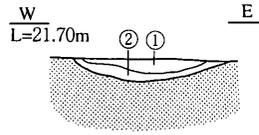
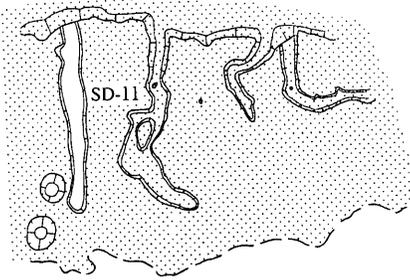
(5) SD-11・12・13 (第86図)

IⅡ区のJ-3区からH-2区にかけて検出された3条の平行する溝である。SD-11・SD-12は間隔約2m、SD-13はSD-12から東に約8mの位置にある。いずれも条里地割に合致する方向性をもつ。

SD-11は幅0.7~0.8m、深さ0.15mで断面は浅い皿状を呈す。埋土は灰色系シルト質土で薄い細砂層が認められた。部分的に細かく派生する溝が付属しており、それによってSD-12とつながっている。同時に機能した溝と推定される。出土遺物はなく、埋土の色調・土質により平安期以降の所産と考える。

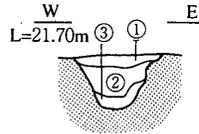
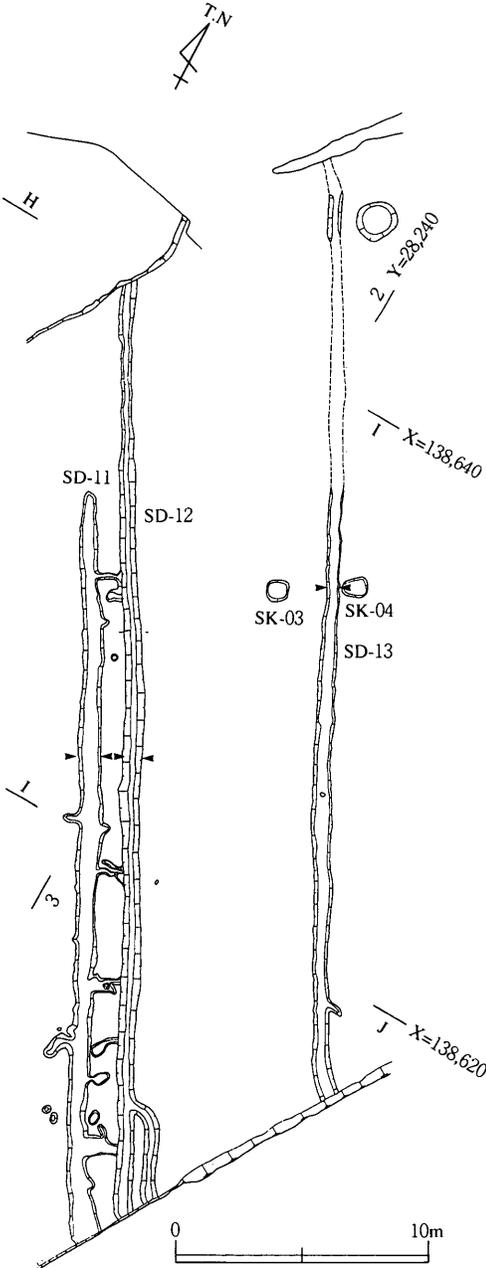
SD-12は幅0.48m、深さ0.28mで断面は逆台形状を呈す。埋土はSD-11と共通し、最下層には黄灰色粘土の基盤層ブロック粒が混入する。調査区南端ではSD-11とは逆方向に派生する溝が付属する。なお、H-2区南端では溝が一旦途切れ、H-2区北端で再び確認できる。途中については削平によって微妙に途切れたものとする。北端で確認できた箇所は、後述する奈良時代に形成された包含層(第3B層)を切り込んで掘削されている。出土遺物はなかった。

SD-13は幅0.45m、深さ0.10mで断面は扁平な逆台形状を呈する。埋土は上記2つの溝と共通する。I-3区北端で両側に土坑(SK-03・SK-04)が配される。出土遺物はなかった。



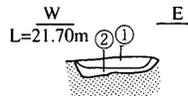
SD-11

- ① 灰黄褐色シルト質細砂
- ② 暗灰黄色シルト質中砂



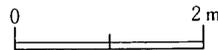
SD-12

- ① 暗灰黄色シルト質細砂
- ② 灰黄褐色弱シルト質中砂
- ③ 灰黄褐色シルト質細砂 (基盤層ブロック混じる)



SD-13

- ① 暗灰黄色シルト質極細砂
- ② 黄褐色弱シルト質中砂



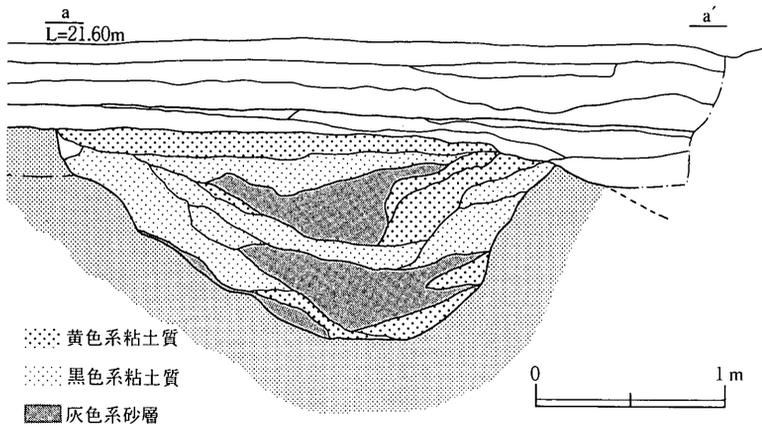
※平面図の網目は第3B層の分布

第86図 SD-11~13実測図

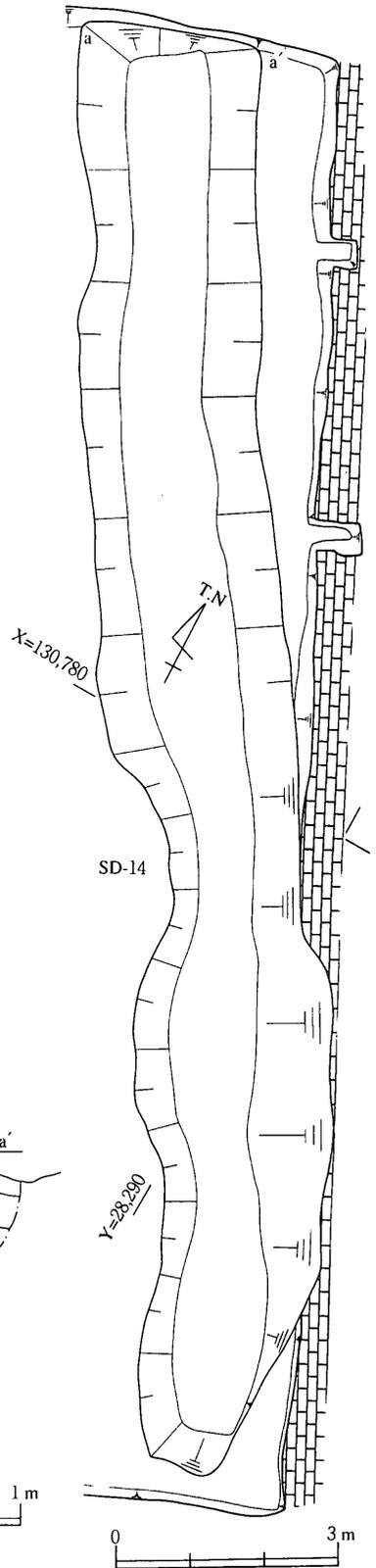
(6) SD-14 (第87～89図)

IV区屋敷地下層で検出された溝である。走行方向は座標北から西に約30°振れており、条里地割の方向に合致する。幅2.3m、深さ1.0mで断面はV字に近い。第87図の網目部分が埋土で、上面は屋敷地の造成等によって、削平されているものと推定される。断面観察では概ね3回の流路堆積が確認できる。黄色系粘土層、黒色系粘土層、灰色系砂層を一つの単位として、溝が次第に浅くなっている状況が確認できる。遺物は中間の黒色系粘土層において奈良時代から平安時代中期の土器が出土している。奈良から平安期頃までの基幹水路と考えられる。隣接する郡家原遺跡で検出された8世紀代の出水に端を発するSD-77とは、109m一町の間隔である。条里制施工に関わる水路の可能性はある。

なお、当遺跡内では条里地割と同一方向のSD-13との間隔が109mとなる。

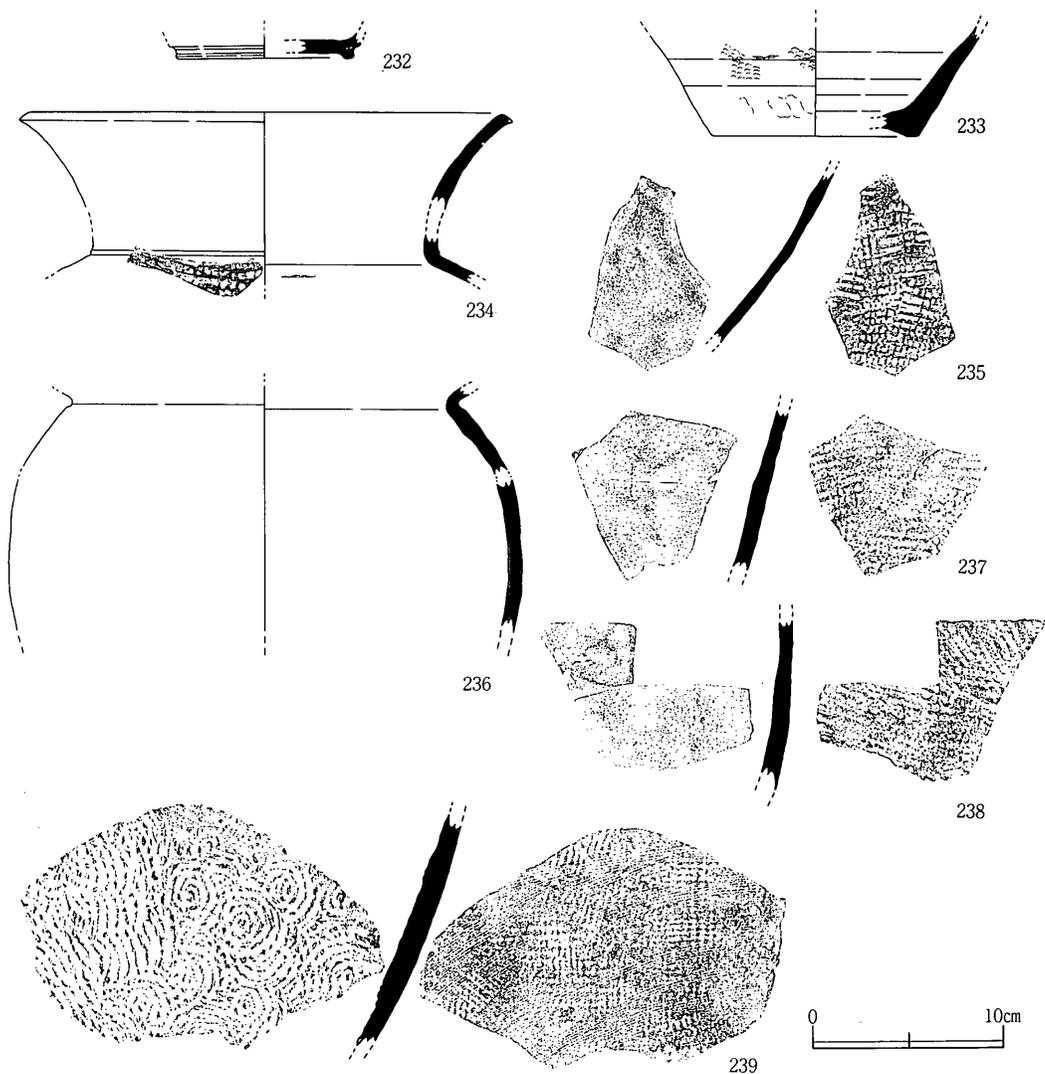


第87図 SD-14土層断面図



第88図 SD-14平面図

232は須恵器杯底部片である。底端部に近い位置に低い高台が付される8世紀後半代の特徴をもつ。234, 233は須恵器壺の口縁部片および底部片である。ラップ状に開く口縁部の端部を外下方に若干つまみ出し、内外面を丁寧に回転ナデ調整するもので、体部から底部にかけて外面に格子状タタキを施している。県下綾歌郡内の十瓶山窯跡群で生産された可能性が高く、9世紀末ごろに比定される。235~239は須恵器の胴部片で、外面を平滑にナデ調整するものと、格子状タタキを施すものがある。内面は丁寧に回転ナデ調整を行うが、239のみ青海波文のあて具痕をとどめる。



第89図 SD-14出土遺物実測図

(7) 包含層 (第75・90～93図)

溝の上部に堆積する褐色系の包含層(3A～3C層)には8世紀代の遺物が多数含まれる。3A層は水平に堆積しており、広い分布域をもつ。3B層はSD-01～SD-05の上面の窪地に水平に堆積する。3C層はSD-03を最終的に埋没させた土層である。3B層と3C層は平面的にはほぼ等しく分布しており、H-2、H-3区付近では標高21.000m以下の範囲に分布する。

一部近世以降の遺物を混在して取り上げたために、同一図版で掲載している。以下各層位ごとの出土遺物を説明する。

a. 3A層出土遺物 (第90図)

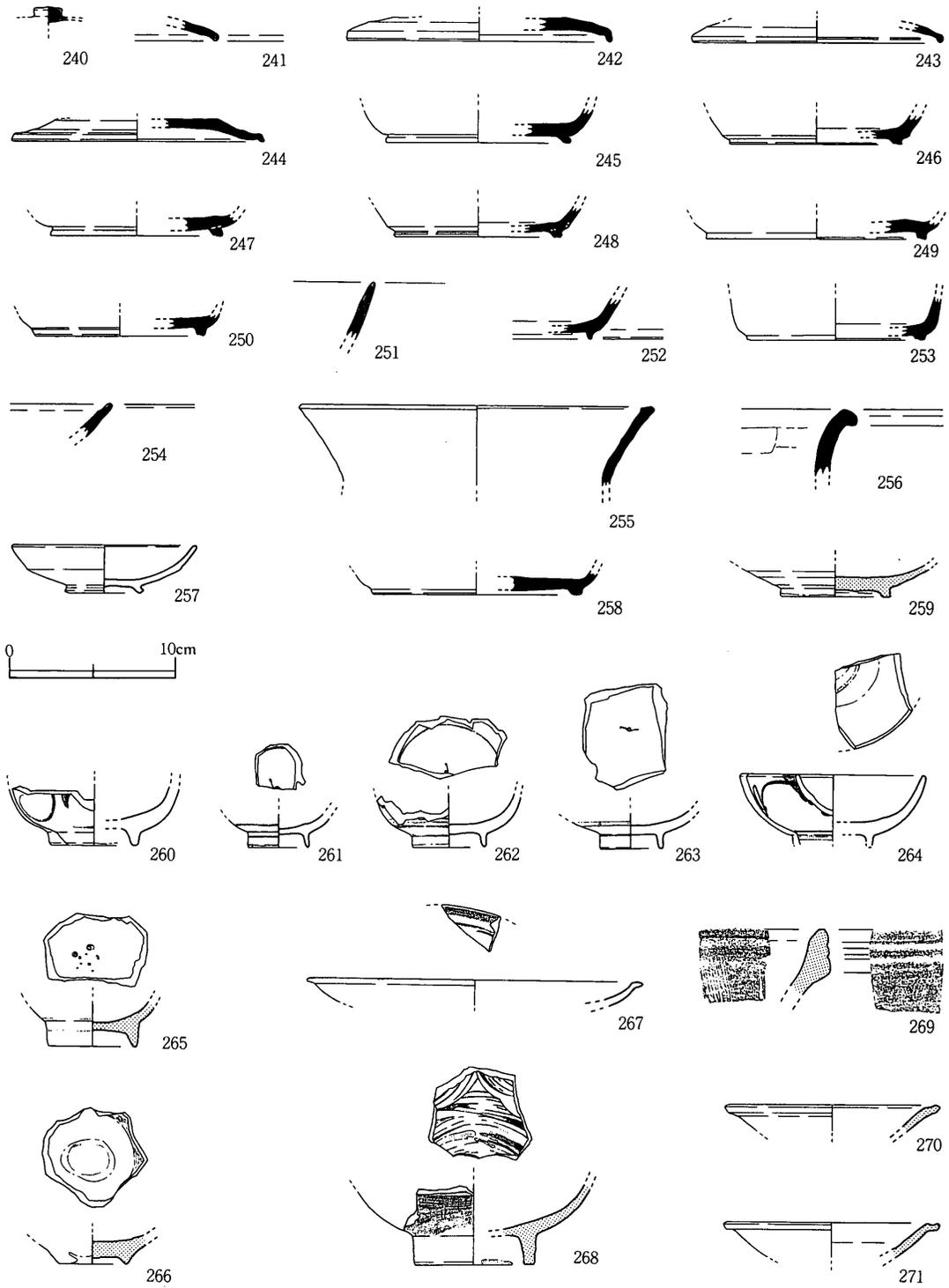
須恵器・土師器・無釉陶器がある。240～244は須恵器杯蓋片である。器高が低く、端部を外下方に拡張する。245～253は須恵器杯底部片である。低い高台が底端部に付され、いずれも外端で接地する。255・256は須恵器甕の口縁部片、258は土師器杯底部片である。以上は8世紀後半代に比定される。259は10世紀ごろの洛西産無釉陶器。257は14世紀前半の吉備系土師器碗である。260～271は18世紀後半以降の混在品である。260は肥前系陶胎塗付、261～264は肥前系磁器、265は瀬戸産広東碗、268は唐津系刷毛目碗である。

b. 3B層出土遺物 (第91図)

須恵器を中心とした土器類が出土した。杯蓋は径が小さく器高が比較的高いもの(278～280)と径が大きく扁平なもの(281～283)がある。いずれも端部はさほど拡張しない。杯身は高台が底端部に付されるものが多いが、口縁部の外反度は弱い。295・296の壺底部の高台は短く垂下し、外端が接地する。以上は8世紀前葉～後半の時期幅をもつ。301はサヌカイト剥片であるが、一面に頭著な磨耗痕が見られる。打製石斧の再調整剥片であろう。

c. 3C層出土遺物 (第92図)

須恵器片が少量出土した。302～307の杯蓋は器高が高く、端部の拡張が目立たない。309の壺底部の高台は外下方に踏ん張る形態で、内端に接地面がくる。以上の特徴により、7世紀末～8世紀前半代を主体とする時期に比定される。

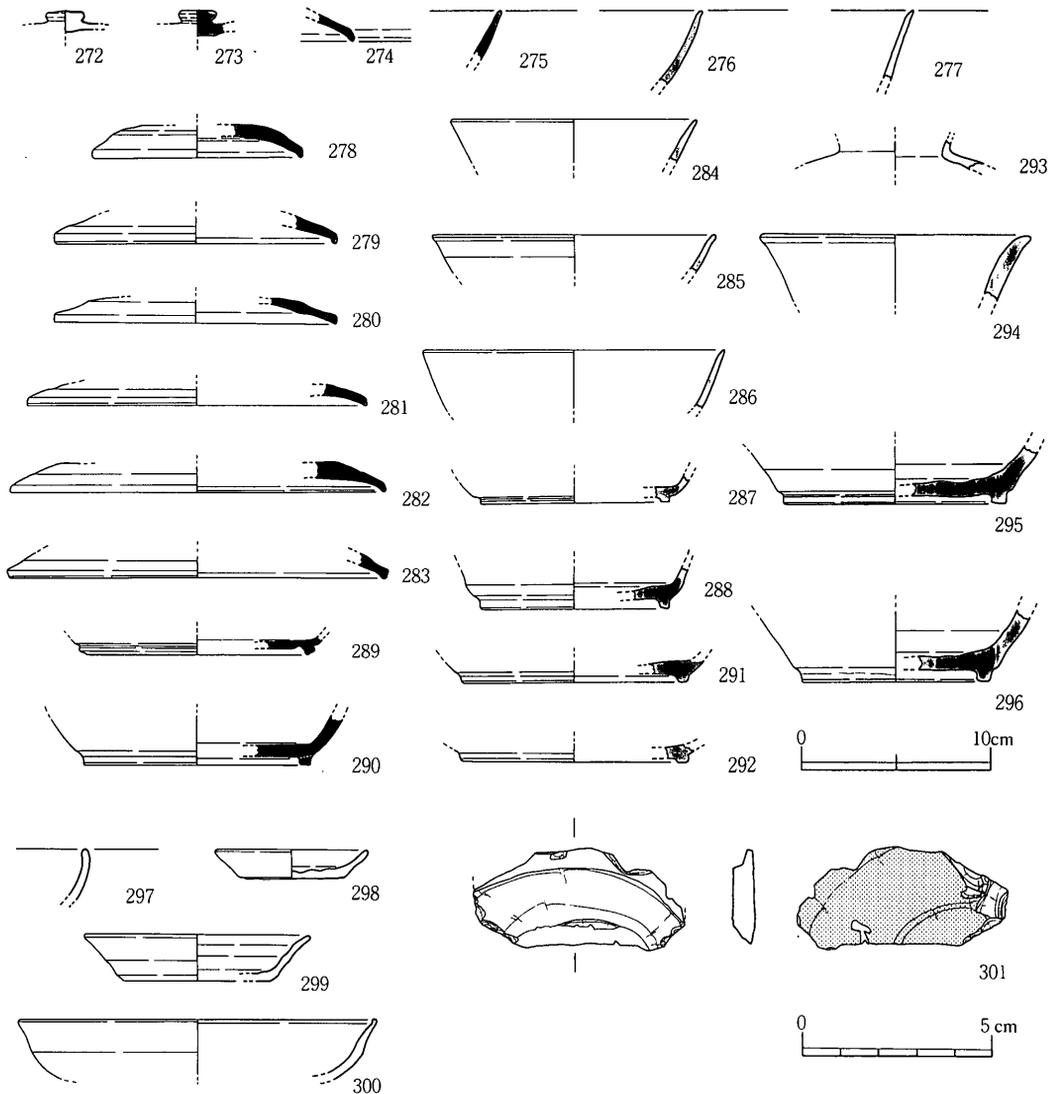


第90图 3A層出土遺物実測図

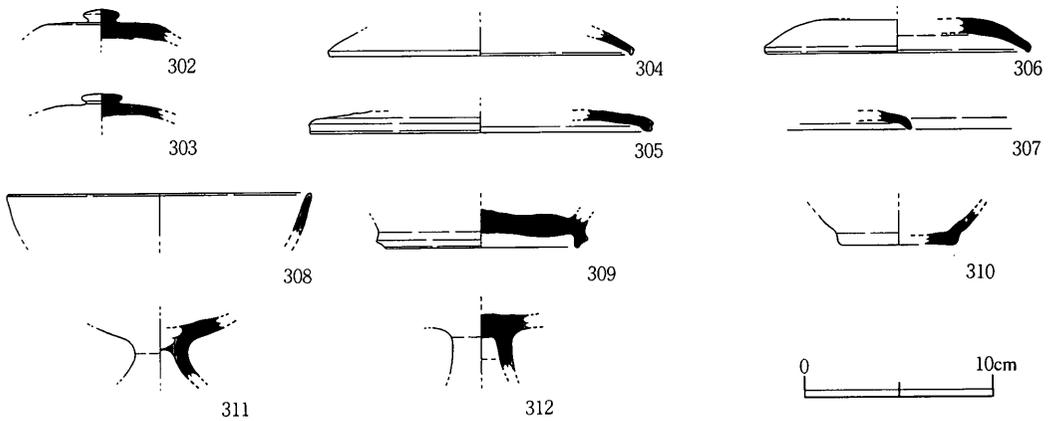
d. 石器 (第93図)

出土した層位が不明瞭であるが、上記以外にサヌカイト製石器が出土している。225は周縁を著しく敲打し、上端の折損部も敲打と見られる階段状剥離が多数見られ、楔形石器と認定される。風化度や形状等から縄文～弥生期と考える。

素材は表裏にネガ面がみられることから、求心的な剥片剥離を行った扁平な残核を転用したものである。剥片剥離は石理に沿って行われている。作業面の大きさは、最大5.0cm、最小2.3cmの幅を有しており、いずれの面も打点部を残していないことから、目的剥片としては幅5cm以上の薄手のものであったと考える。周縁の敲打は入念に行われている。敲打した後、一部に条痕も観察される。

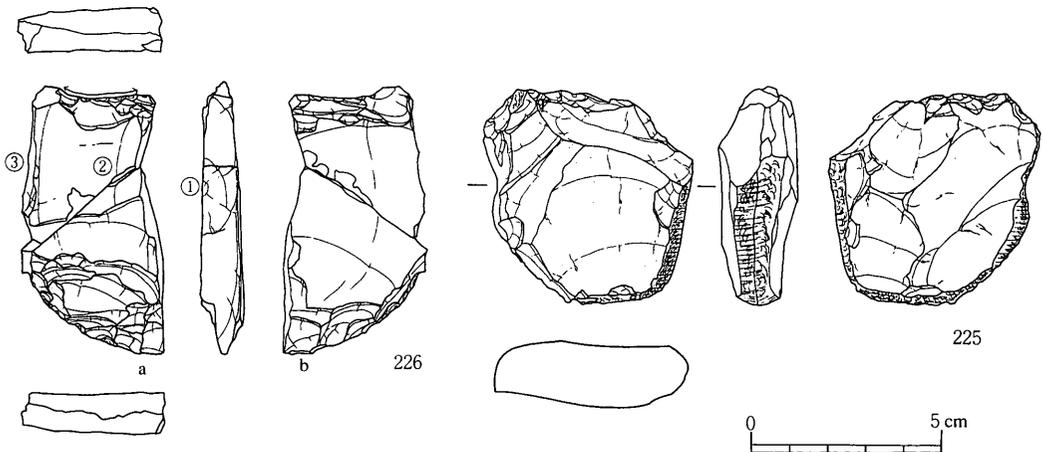


第91図 3B層出土遺物実測図



第92図 3C層出土遺物実測図

226は上縁を刃潰し、下縁に刃部調整を施した厚さ1.1cmのスクレーパー片である。刃部は表裏両面から加工し、曲刃をなす。表裏に残る素材面は平坦で、ネガポジの判別は困難であるが、石理に沿って剥離された幅7.0cm以上の横長剥片を素材としたものと思われる。なお、これは2片の石片が接合したものである。折面の観察により①→②の順に素材面を打撃して意図的に分割している。③の面はバルブが明確でないが、下側の石片の左縁との間に段差がみられることから、②の打撃後に分割あるいは折損した面と考えられる。



第93図 包含層出土石器実測図

第6節 近世（ⅠⅡ区）

(1) SK-05（第94～96図）

第3層を切り込んで作られた直径0.8mの円形土坑である。埋土は灰色系シルト層で、深さは約0.2mを測る。埋土中より江戸時代後半の遺物が少量出土した。

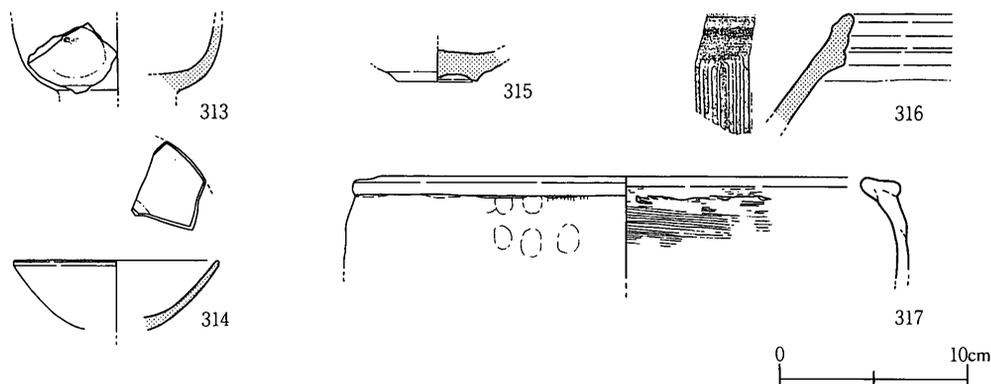
313～314は施釉陶器片である。313には外面に草花文の染付がみられる。314内面は釉剥ぎ。315は外面は無釉で、内面には緑色系の釉が厚く掛かる。316は赤褐色の備前系播鉢である。拡張された口縁部外面に凹線が巡り、内面に粗い播り目が認められる。内面はヨコナデが顕著。ただし播り目を消すヨコナデはない。317は土師器土釜口縁部である。鏝は口縁部に近づき、形骸化したものである。以上は18世紀中葉を中心とする。

(2) SK-06～08（第95・96図）

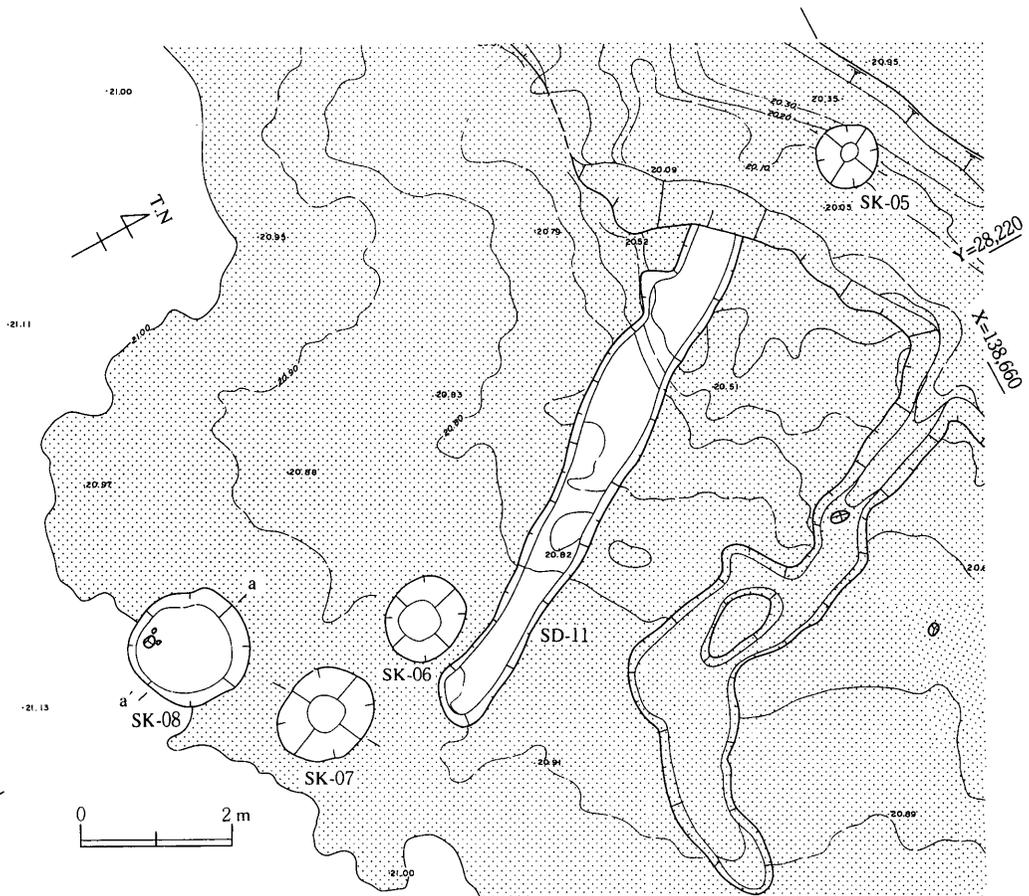
第3層を切り込んで作られた直径0.8～1.3mの円形土坑である。埋土は灰色系シルト層で、SK-08からは拳大の多数の礫が出土した。出土遺物は土器・陶器片少量で図化していない。江戸時代に下るものとする。

(3) SD-15（第97～100図）

F-2区北部で東西方向に走行する溝である。試掘トレンチの埋土と誤認して掘削したために、溝としての十分な記録は取れていない。取り上げた遺物は19世紀～明治段階のものである。Ⅳ区の屋敷地がもっとも大規模に展開した時期と合致することから、何らかの関連があったものと思われる。

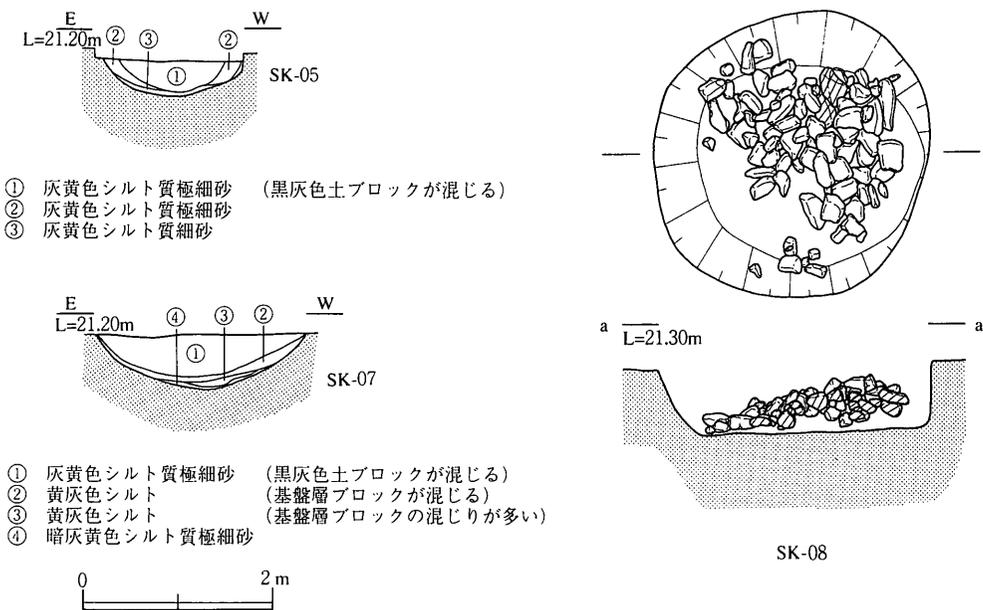


第94図 SK-05出土遺物実測図

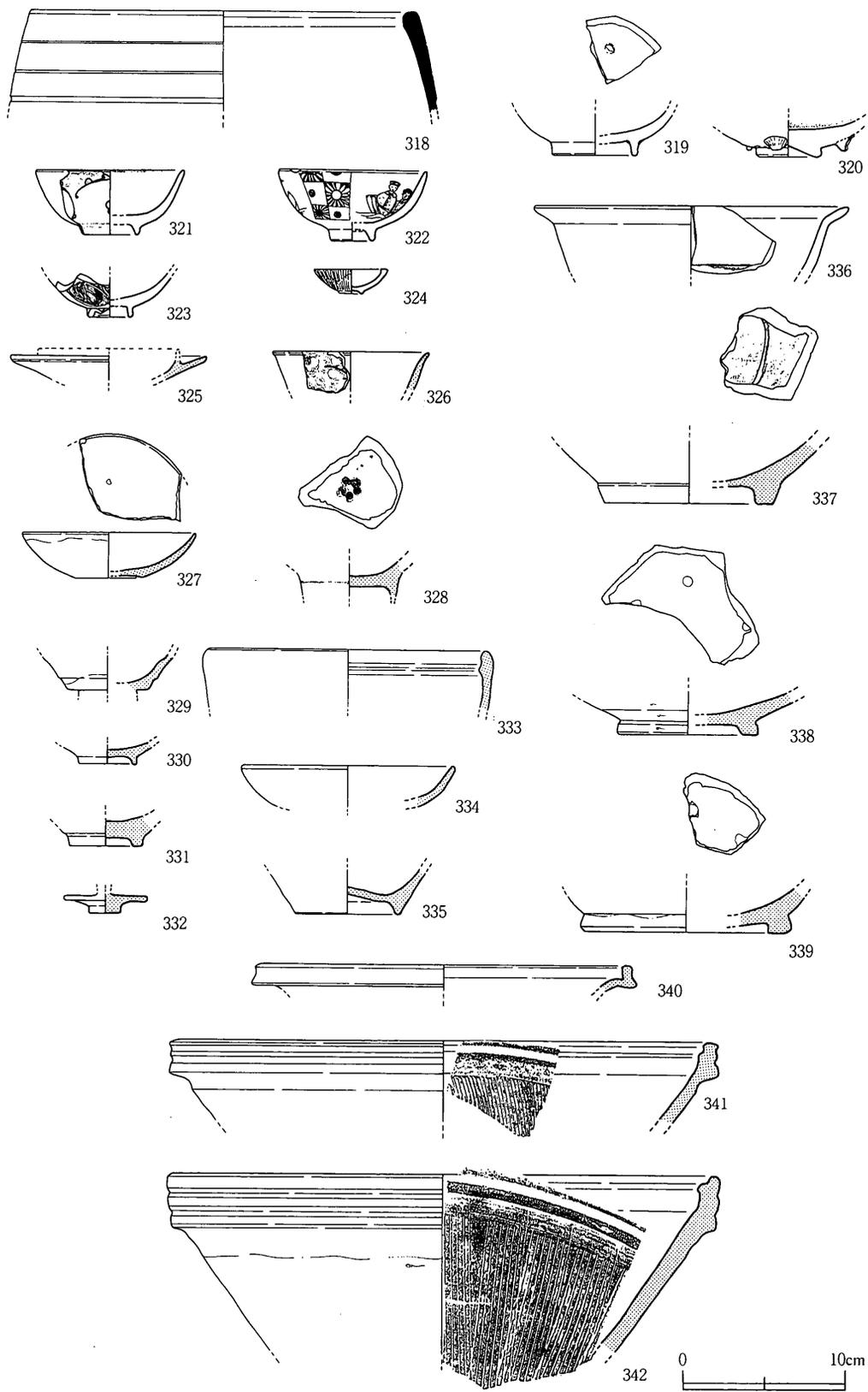


※ 網目は第3層の分布

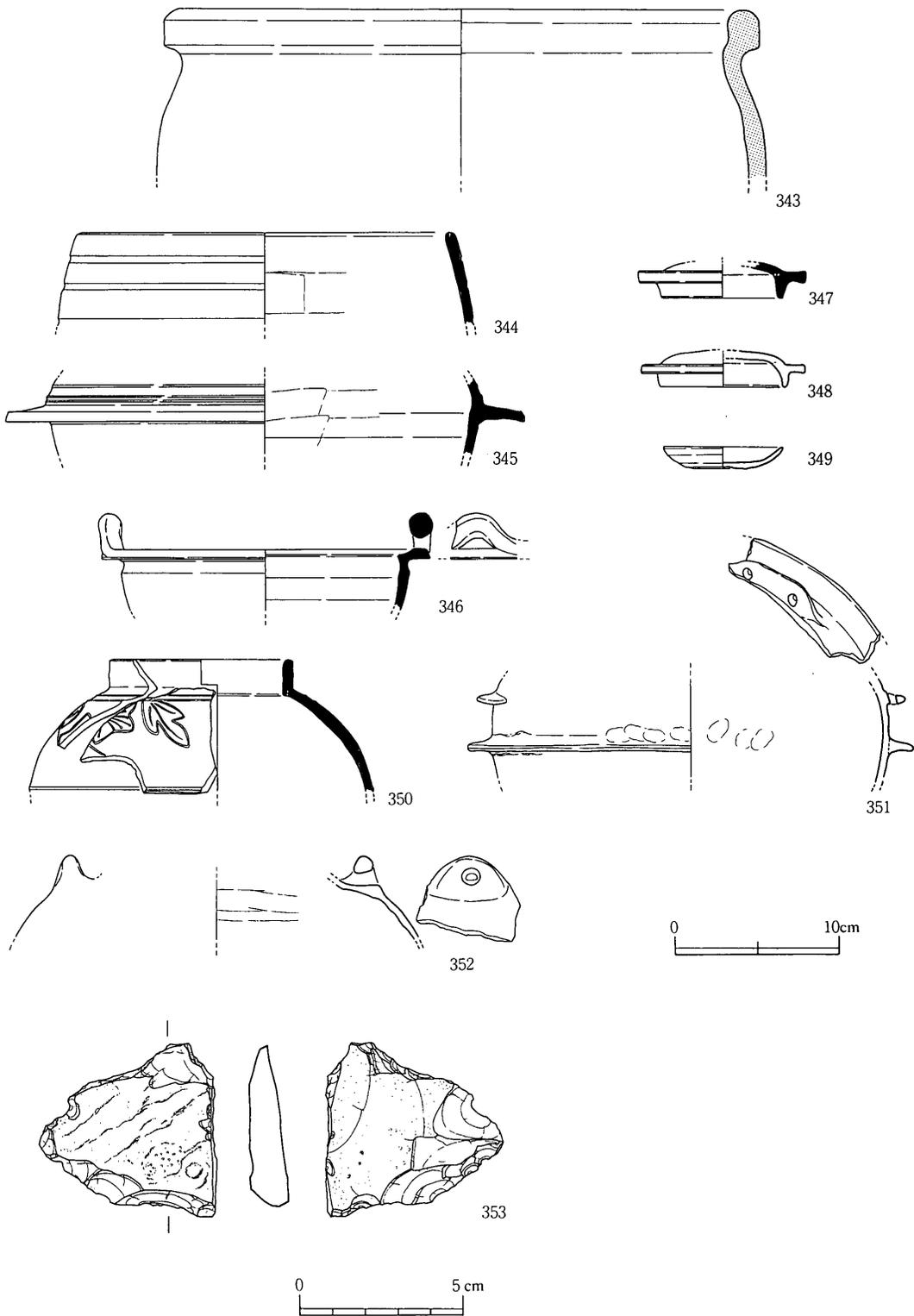
第95図 I II区近世遺構平面図



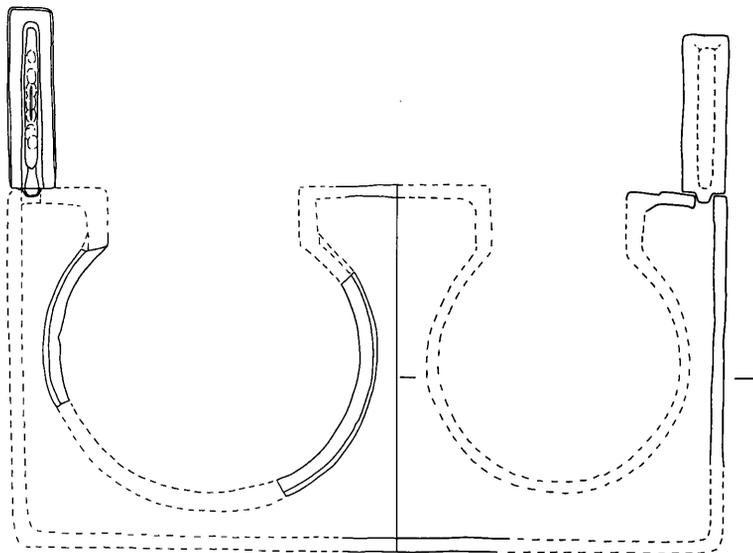
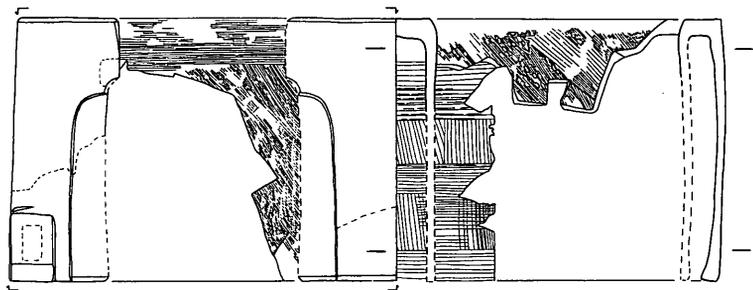
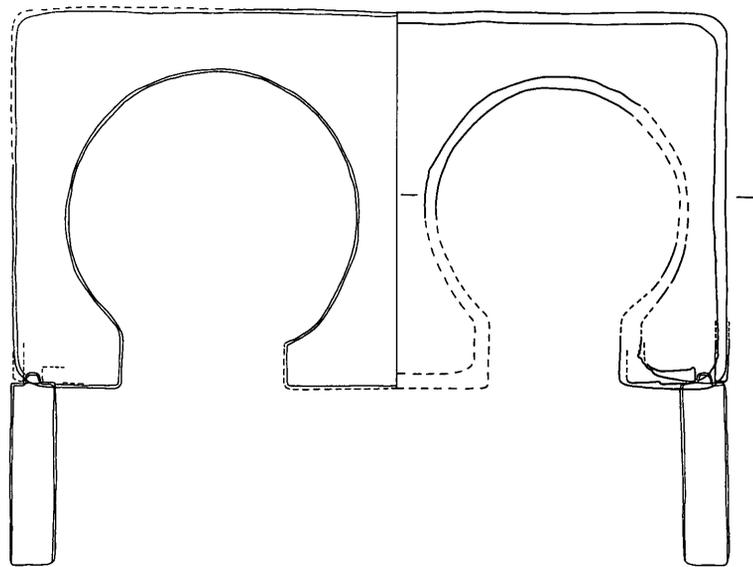
第96図 SK-05・07・08実測図



第97图 SD-15出土遺物実測図(1)



第98圖 SD-15出土遺物実測図(2)

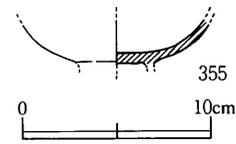


354

0 20cm

第99図 SD-15出土遺物実測図(3)

318は瓦質羽釜片である。319～324は肥前系磁器。325・327・334は信楽系陶器灯明皿。326は京焼系陶器。328は見込部に五弁花文を施す瀬戸産広東碗である。333は瀬戸産の片口鉢である。341・342は重ね焼痕をとどめる堺産播鉢である。343は阿波大谷産と推定される陶器甕。344～346, 350・352は瓦質の羽釜および茶釜である。347・348は瓦質・土師質の壺蓋で、外型づくりである。349は土師質小皿, 351は土師質羽釜である。353は調整痕のあるサヌカイト剥片で、風化度から縄文時代以降と考える。



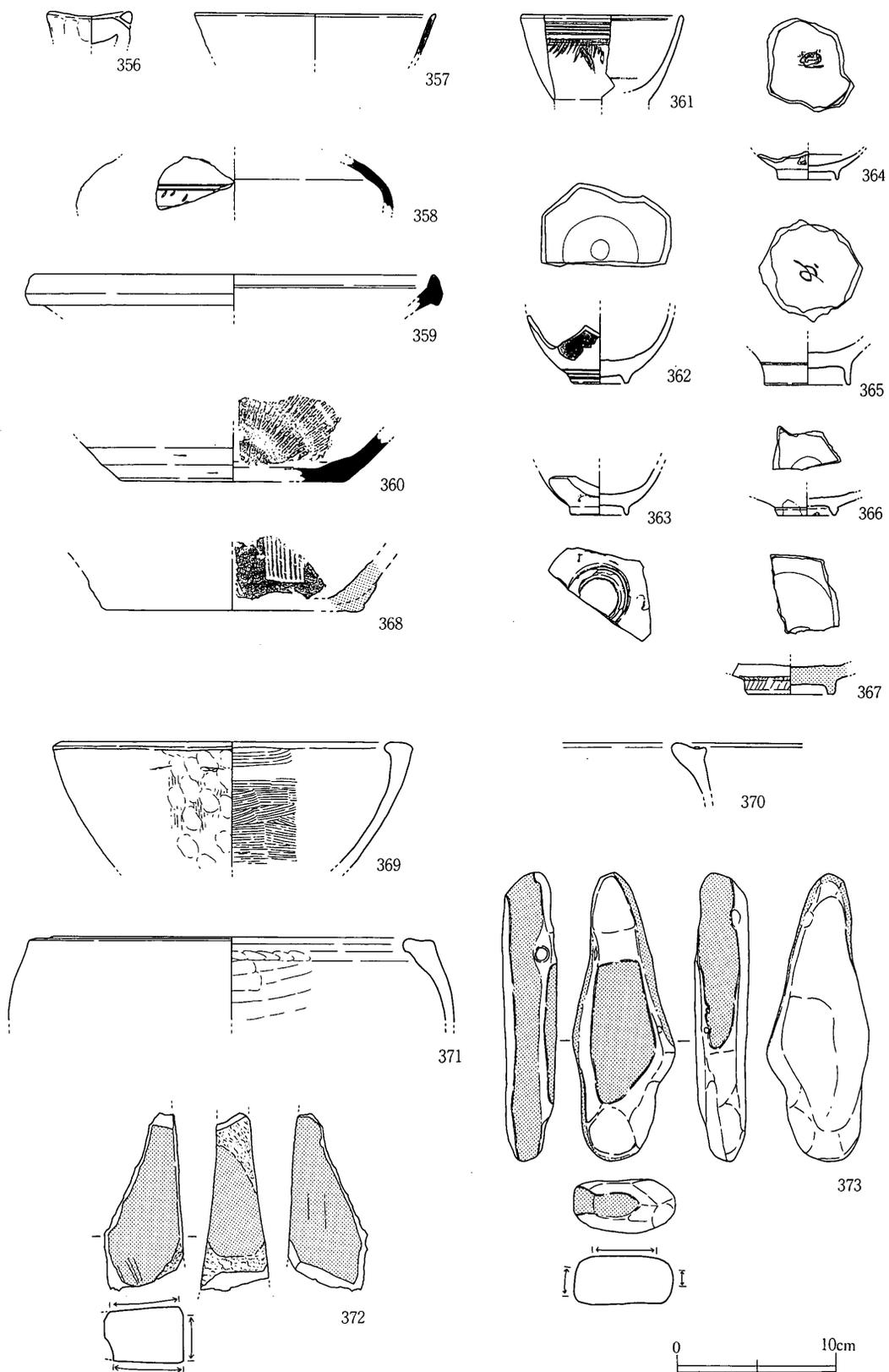
第100図 SD-15出土遺物実測図(4)

354は土師質の2窓式竈で、前面下部にほぞ穴を組み合わせる方式の灰溜用のブロックが付属する。左窓の直径は30.6cm, 右窓の直径は26.4cmをはかる。灰溜用のブロックは手前に向かって次第に薄くなる流線形で、基部に突起が付属して、本体下部のほぞ穴と組み合う。本体、ブロックともに体部は中空であり、外型分割成形技法と考えられる。

355は漆塗碗で内外面に赤漆が残る。

(4) 包含層出土遺物 (第101図)

当該遺跡の基本的土層のうち、第1層は現代の田地耕作土、第2層は灰色シルト層である。両層から出土した遺物を一部抽出し図化した。356は弥生土器甕蓋で前期に属す。上端部に1個一対の穿孔を施す。357・358は須恵器杯および壺胴部片, 359は東播系こね鉢, 360は播鉢底部である。361～365は肥前系磁器である。369・371は土師質火鉢, 370は土師質土釜口縁部片である。372は緻密な火山岩系石材の砥石, 373は砂岩製の砥石。



第101图 1·2层出土物实测图

第7節 近世（Ⅳ区）

（1）はじめに

調査前、当該調査区は江戸時代の庄屋であった久留島家の屋敷地との把握がなされていた⁽³¹⁾。現在は水田となっているが、調査区の東側の水路沿いには石垣が残っており、これが久留島家屋敷地の痕跡とされていた。

久留島家の由来や伝承については、これまで次の事項が説明されている⁽³²⁾。

- ① 久留島家は村上水軍の末裔と伝承される。
- ② 子孫が北畠顕家より拝領したとされる大袖、豊臣秀吉の面頬を所蔵している。
- ③ 江戸時代に代々庄屋職に就き、繁栄をきわめた。
- ④ 久留島修平は明治12～14年に、多度津郡選出の愛媛県議会議員に就いた。
- ⑤ 屋敷図が明治30年発行の「日本博覧図」に掲載された。
- ⑥ 明治末期に家継ぎが絶えて、屋敷は廃絶した。

このうち、久留島修平が日本博覧図にみられる屋敷に居住し、前代の江戸時代の庄屋から明治にいたっても当時の富豪であったことは、伝承や各種記録から確実視されるが、久留島家の系譜や由来についての①②など疑問とすべき部分が多い。今回の調査報告では文化財調査として、久留島家に関する文献史料や考古史料をまとめることにより、明治時代の富豪が輩出された歴史的背景を考察する基礎史料を提示できるように努めた。

以下、文献史料等の調査成果、発掘調査成果の順で報告する。

（2）文献等からみた久留島家とその屋敷地について

屋敷地は現在の丸亀市三条町字黒島で、旧那珂郡三条村。江戸時代には高松藩領地に含まれる。久留島家が代々三条村の庄屋であったとの伝承があることから、まず三条村の成立に関する文献を提示し、その後久留島家に関するものを提示する。

a. 寛永10年讃岐国絵図⁽³³⁾

最古の讃岐国絵図である。寛永17年（1640）付けの裏書きによって、同10年（1633）に生駒高俊の命によって作図し、その写しが金比羅宮に寄進されたものである。

郷・庄名およびその石高を記載する。またそれに付随して地名も記載されている。郷・庄は101箇所、地名は578箇所記載される。

調査地周辺には「〇〇黒島」との地名記載がなされているが、「三条」の記載はない。

b. 讃岐国郡村升惣高覚帳（生駒領高覚書）

寛永17年（1640）成本。生駒時代末の讃岐国の村名と石高を記す。「三条」の記載はみられない。

c. 金毘羅一山規則書⁽³⁴⁾

天保3年（1832）に作成され、翌年に高松藩寺社奉行へ提出されたもの。金比羅宮とその別当金光院にかかわる基本的事項がまとめられている。

これによると、寛文13年（1673）に松平頼重が、木徳村の50石を金比羅社領地として寄進した経緯がまとめられている。これを元にした記録が「万御寄附物留記」などにみられ、それらは三条村の田地を寄進した旨の記載に変更されている。

これは当時の木徳村のうち、後の三条村に取り込まれた土地が寄進地であったことを示すとともに、寛文13年当時は三条村が成立しておらず、木徳村の一部であった可能性が高いことを示している。

金毘羅一山規則書

(表題)
「天保四癸巳年正月 金毘羅一山規則書」

(表紙書き込み)
「但し天保三壬辰年閏十一月高松寺社奉行寛又蔵康甄
萬福院宥諭・神護院宥尊呼出有之、御当山規則書尋ニ
付、此帳面仕立十二月十九日右両院高松江持参仕候
事、夫々度々押方等有之、同四巳年正月廿三日致清書、
萬福院持参相納候事 小口 紙数裏紙共九拾八枚」

箱二入、其上八書
金毘羅一山規則書 附一山取約書

高五拾石神供料・千躰仏香花料・神馬料として龍
雲院様御寄付被遊候事

一金毘羅大権現之神供領并千躰仏香花料・神馬料として
於木徳村興高ヲ以五拾石寛文十三癸丑年 龍雲院様
御証文被下之、従是 御代々相統御寄付之御証文被
下之候事

第102図 金比羅一山規則書

d. 智証大師八百五十年忌御法会之記事⁽³⁵⁾

元文5年(1740)9月27日から29日まで金倉寺で行われた智証大師850年忌の法会について、16年後の宝暦6年に記録をまとめたもの。郡中政所の合力米・檀家奉下米・伽藍修理・立札などの準備に関する経緯がみられる。

記事によると、元文4年(1739)2月に郡役人を集め、奉下米の件を依頼したが、その際の名簿に「三条村金兵衛」の記載がある。また翌年8月には三条村から人足15人が出された旨の記事もあることから、この段階ですでに三条村は成立していることがわかる。金兵衛と久留島家の関係は明かでないが、当文献の寄進物一覧に宮内金兵衛母が幡四流を寄進したことが記載されている。この金兵衛が同一人物かどうか判然としないが、仮に同一とすると別家系が庄屋職にあった可能性が高い。

右大政所江金甌三袋宛小政所江式袋宛遣之中事

木徳村	金蔵寺村	原田村	三条村	柞原村	郡家村	与北村	高篠村	四条村	吉野下	吉野上	岸上村	真野村小政所	七ヶ村小政所	塩入村小政所	公文村大政所	垂水村大政所
			金兵衛	儀右衛門	理右衛門	伝四郎	新次郎	八三郎	伝兵衛	五左衛門	嘉十郎	新七	多左衛門	弥重郎	庄金七	植松藤三郎
	平七	久左衛門														

一同二月中旬郡役人江右奉加米之義何分宜頼存旨使僧ニ
而村々江頼遣候

第103図 智証大師八百五十年忌御法会之記事

e. 池泉合符録⁽³⁶⁾

文政元年(1818)成本。高松藩領内の水利施設の台帳である。宝暦5年(1755)の調査結果に基づき、寛政9年(1797)に再調査し、その結果を製本したものである。したがって、データは寛政9年以前の状況を示している。

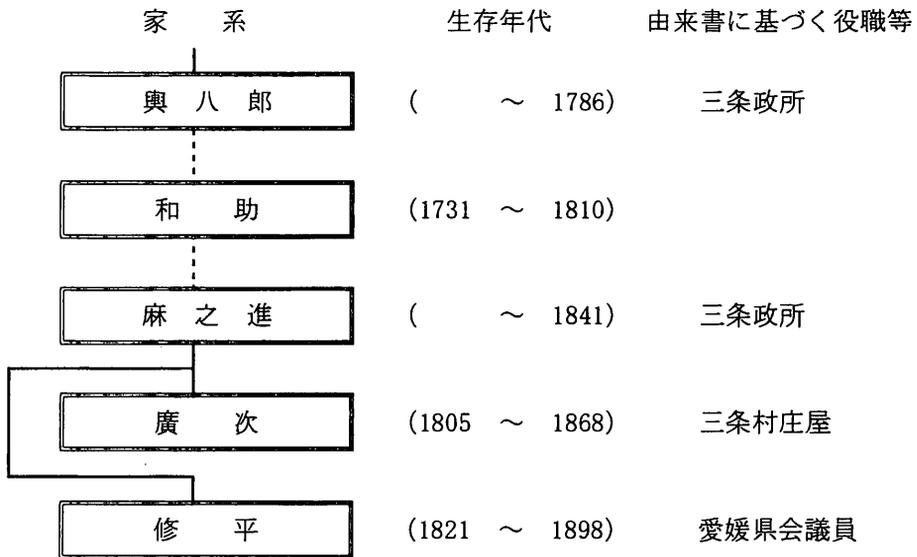
これによると、那珂郡内に三条村の項目があり、4箇所の溜池が記載されている。合計の溜池水掛高は1,669石で郡内の他村と比較して遜色ない。古くから存在した木徳村は501石と、三条村の1/3以下である。

f.久留島家家系

久留島家に関する家系は現在久留島家の関係の方が保管されている過去帳⁽³⁷⁾で追うことができる。調査にご協力いただき、今回の発掘調査成果とその歴史的背景を考察するにあたり、直接関わる部分のみ第104図に示した。

過去帳の上で、はじめて三条政所として三条村の庄屋職に就いているのは興八郎（重信からであり、興八郎以前には3人の系譜が記されている。興八郎が死去するのは天明6年（1786）である。このとき次の和助は55歳であるが、政所としての記載はない。次の麻之進は三条政所の記載がある。次は長男廣次が庄屋職を引き継ぎ、慶応4年（明治元年）に死去した後は、弟の修平が家督を継いだようである。過去帳には由来書が付属しており、色々な美飾がみられるが、享和3年（1802）に麻之進が政所となり、文政8年（1825）に帯刀を許されたことは信頼性のある記事と考える。なお、寛政2年（1790）に興八郎が政所となった旨の記事は先の過去帳の記事と矛盾するので、そのまま信用することはできない。

提示した過去帳の記録は、現在調査地の西側に現存する久留島家墓所の墓碑文と概ね一致している。



第104図 久留島家家系図

g.金毘羅金堂寄進帖⁽³⁸⁾

金毘羅金堂の建立にあたり、寄進された金品の台帳である。金毘羅の金堂は明和8年(1771)に発願されたが、水害の影響で一時中断した。その後、文化3年(1806)に改めて計画がたてられ、天保2年(1831)に初重の上棟を行っている。寄進された金品は、したがってその間になされたものと考えられる。寄進帖は弘化3年(1846)に編集されたものである。

三条村からは久留島麻之進が銀120目を寄進しているほか、宮武六助その他の名がみられる。個人としては大きい額である。その他の村の個人寄進者も庄屋・牢人クラスが多い。

h.天保5年打ちこわし諸役人固一件⁽³⁹⁾ (第105図)

天保4年、東北や関東の気候不順により米価の高騰が全国的に問題となった。讃岐では気候不順による被害はさほど大きくはなかったが、米麦・雑穀の値上がり等により、農村部でも下層農民や飯米購入層が痛手を受けたようである。⁽⁴⁰⁾

天保5年2月に宇多津・坂出・金比羅で買い占め商人等に対する打ちこわしが行われた経緯を示す文献が残されている。⁽⁴¹⁾

実際には当遺跡周辺的那珂郡において打ちこわし等はなかったが、この「天保5年打ちこわし諸役人固一件」によると、那珂郡も騒動が波及するという噂が流れ、打ちこわしの波及を防止するために高松藩では郷士・浪人が多数動員されている。

動員に関する費用は地元の庄屋層に頼る部分が多かったようであり、史料末尾に名が出ている久留島麻之進は、庄屋との記載はないが、藩の郷士・浪人に用立てしたことが記載されている。

i.御領分中村高大小庄屋姓名覚帳⁽⁴²⁾

高松藩領の村高と大庄屋・庄屋名を記したもので、年代の記載はないが外の史料の登揚人物との照合から、天保10年(1839)～弘化3年(1845)の間のもものと推定されている。

高松藩領には浪人・代々刀指・郷騎馬・郷侍などの帯刀人が在村しており、この史料では庄屋の内帯刀人であったものに印が付けられている。帯刀人で庄屋になっているものが多い中で、那珂郡17人の庄屋のうち大庄屋格はおらず、6人の浪人等の帯刀人がみられる。

三条村は庄屋に久留島広助の名が挙がっているが、帯刀人にはなっていない。久留島広助は、過去帳には登場しないが、麻之進が天保12年(1841)に死去しており、次の廣次に家督を移して間もない頃と考えられることから、廣次の前称であった可能性が高い。

一前頭之通

騷動詠立相濟、国君が者出張之諸士迄御賞言付、小役人之者へ鳥目等被下候様成始終諸入用、他御下銀并ニ御仕替銀ニ而永年賦ニ被成、被当分ニ而御國中江割、一郡割等人足御仕用之分、賃錢被下ニ相成申候ニ付、村方が窄人者も傭入ニ人足之分、賃銀指遣度ニ付、右之通聞合

以手紙得御意候、然者当春騷動之節、^(マヤ村カ)林人足之義、上之御仕用分御下ケ銀御座候ニ付、拙者共へも^(村カ)林方が傭之義故、人足代払出申度候、尤上ニ御仕用分、手前支度ニ而、老人前多分^(マヤ)之御下ケ銀ニ相成るよし、拙者共召連之人足者不残昼夜共、支度上が被下ニ相成候、依之手前傭人夫昼夜ニ付、老人前銀老奴ツ、指遣も御座候、郡中同列聞合候処、一統同断之事ニ承り申候、如何可致哉、此段御聞合申度、如斯ニ御座候、以上

十月三日

古川齋

宮武六郎

切封

来島麻之進様

右之返書

御状拝見仕候、然者当春騷動之砌、御出張之節御申越ニ、付、村人足指出御座候、然る所郡方江指出候人足之分者、御下銀ニ相成候、且御申越御傭人足之所者、御下銀無之候ニ付、御召連之分江老人前ニ付、銀老奴ツ、御渡被成候由、郡中御同列御同様之由、併当村方義者指掛り村方が指出候人足之義ニ付、御加勢ニ可致候様可仕与奉存候間、左様御承知可被下候、御答迄、如斯御座候、以上

十月四日

久留島麻之進

宮武六郎様

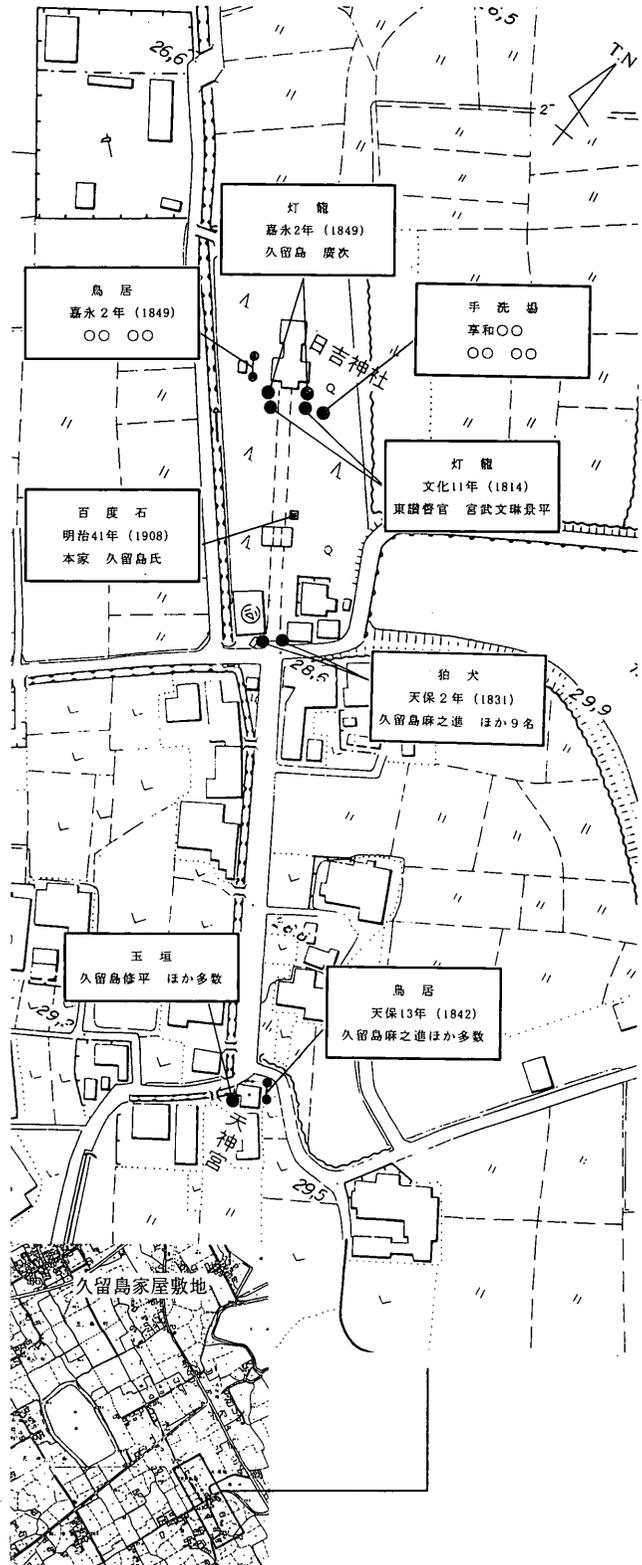
古川齋様

j.日本博覧図（第107図）

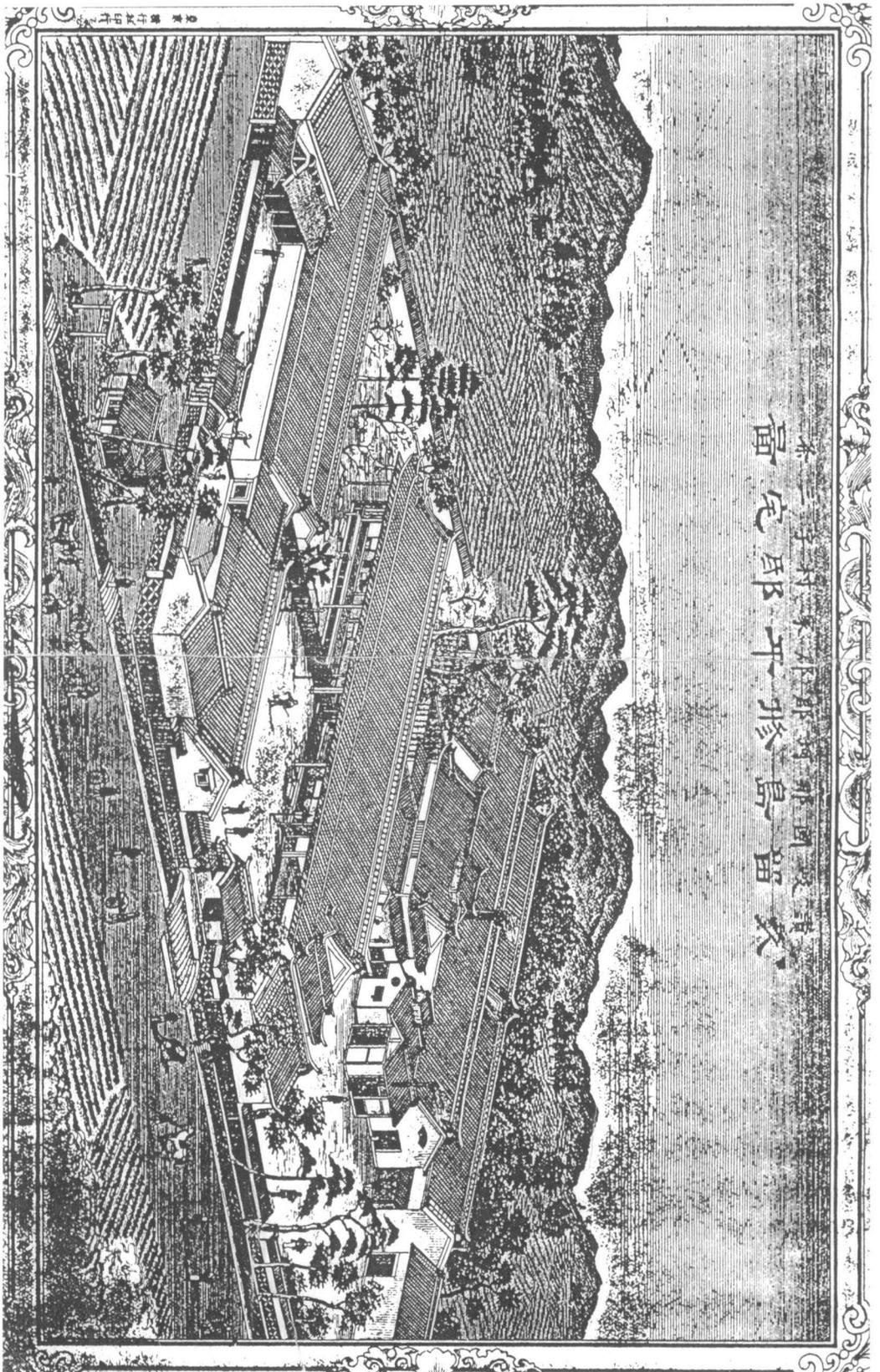
明治30年に刊行されたときされる書物。全国の社寺、名勝、邸宅、工場などの絵図を収録し、第12編に香川県のもものが29図掲載されている。丸亀市内では1寺と久留島邸の2図がある。⁽⁴³⁾

表題は「讃岐国那珂郡郡家村字三条久留島修平邸宅図」とされる。三条村は明治以降、郡家村に合併されている。

絵図の内容をみると、土塀に囲まれた大規模な屋敷が描写されている。屋敷地の中心に入母屋形式の建物がある。ほかには切妻形式が多いことから、これが母屋と考える。母屋は横長であり、図の左側に庭に接した広縁がとりついている。形式的にみて、広縁の方向が南と考えられる。母屋の北には3列の土蔵が建ち並ぶ。また、庭を介してその南には東西に長い建物が屋敷地幅一杯に建てられている。そのやや東寄りに中門が配される。中門の南は若干の間隔をへだてて南門があり屋敷地外と接している。また、庭の東



第106図 久留島家関係碑文分布図



茶三子村 本外郎河那國 留太 留宅郎平珍島留太

第107図 日本博覧図

には東門があり、こちらは直接屋敷地外と接している。東門と南門は規模・構造の面で東門が優っており、東門が主門と考えられる。中門と南門との間は東西に小規模な建物が付属しており、使用人などが居住する空間であった可能性が高い。

ただし、屋敷地の東に接する南北方向の道路は、明治段階の地籍図等で確認したが実在するものではない。作者は構図上の美飾も加えているものと考えられるので、そのまま屋敷地内の建物配置を信頼するには慎重を要する。

k.久留島家関係碑文（第106図）

調査地から南に約1 Kmほどのところに日吉神社がある。この境内に多数の灯籠等が奉納されており、碑文中に久留島家関係のものが散見される。第106図に碑文の分布をまとめている。

このなかで、久留島麻之進、久留島廣次については家系の記述に従えば、当事者が庄屋職にある時期に奉納していることがわかる。これからすると、この神社の灯籠等の奉納は代々庄屋職の職務の一つであった可能性がある。なお、文化11年久留島氏以外が奉納した灯籠は、形式的に見て嘉永2年の灯籠に先行するものとは思えず、また、碑文中の美飾が顕著であることから年代的には疑わしい。また、拝殿東側の手洗鉢は、表面の劣化が著しいが「享和二」が判読でき、享和年間に奉納されたものとする。

1.小結

久留島家に関する家系をはじめとして、文献史料からみた久留島家を概観した。ここで、文献等の調査をまとめておきたい。

久留島家が居住した那珂郡三条村は江戸時代には高松藩領であった。三条村は寛文13年(1673)に一部が金比羅社領地となっており、その経緯を記述したもっとも古い文献である「金比羅一山規則書」(天保3年、1834年)には、木徳村と記載がある。また、讃岐国郡村併惣高覚帳(生駒領高覚帳)(1640年)においても三条村の記載はないので、17世紀後半までは三条村は村組織としては機能していなかったことがわかる。ただし、寛永10年讃岐国絵図(1633)には黒島との記載があり、地名として黒島が存在したことは確実である。その黒島が、当該久留島家とどのような関係であったか、それは文献史料の上では明らかにすることはできない。

三条村が文献にみられるのは、元文4年(1739)2月に智証大師八百五十年忌法会に関

わり参会した際の名簿に「三条村金兵衛」の記載があるのが初現である。また寛政9年(1797年)成本の「池泉合符録」には確実に記載がある。この間、17世紀末から18世紀中葉に三条村が成立したものと推定される。

久留島家の名が文献にみられるのは、金比羅社金堂建立に係る寄進帖である。弘化2年の編集であるが、金堂の上棟が天保2年(1831)であり、それまでの寄進を書き記している。その中で「三条村久留島麻之進」は銀120目を寄進しており、この段階で村の有力者であったことがわかる。天保5年には幕府領他の金比羅打ちこわし事件に関する文書「天保5年打ちこわし諸役人固一件」にも登場する。高松藩領の村高と大庄屋・庄屋名を記した「御領分中村高大小庄屋姓名覚帳」(天保10年(1839)～弘化3年(1845))では久留島広助が庄屋となっており、これが廣次である可能性が高い。また、周辺の神社に奉納された灯笼等の碑文からも、久留島麻之進以後の名がみられ、文献史料と一致している。これらによって、19世紀前半までには久留島家が庄屋職として定着し、世襲していたことが推定される。

関係者に伝わる家系では、麻之進以前に和助、その前に興八郎が直系として記され、興八郎は三条村の庄屋であったことが付記されている。これは今回、史料的裏付けを得ることはできなかった。興八郎の死後、麻之進が実力者として金毘羅社へ寄進を行う文政年間(1825頃)まで約40年間、麻之進が由来書のとおり享和2年(1802)に庄屋職に就いたとしても、興八郎の死去から約20年の隔りがある。この間の記録については不明瞭である。

以上の文献史料から得られたデータをもとに、対象地内の発掘調査の成果をふまえて、節末にそれを総合する。

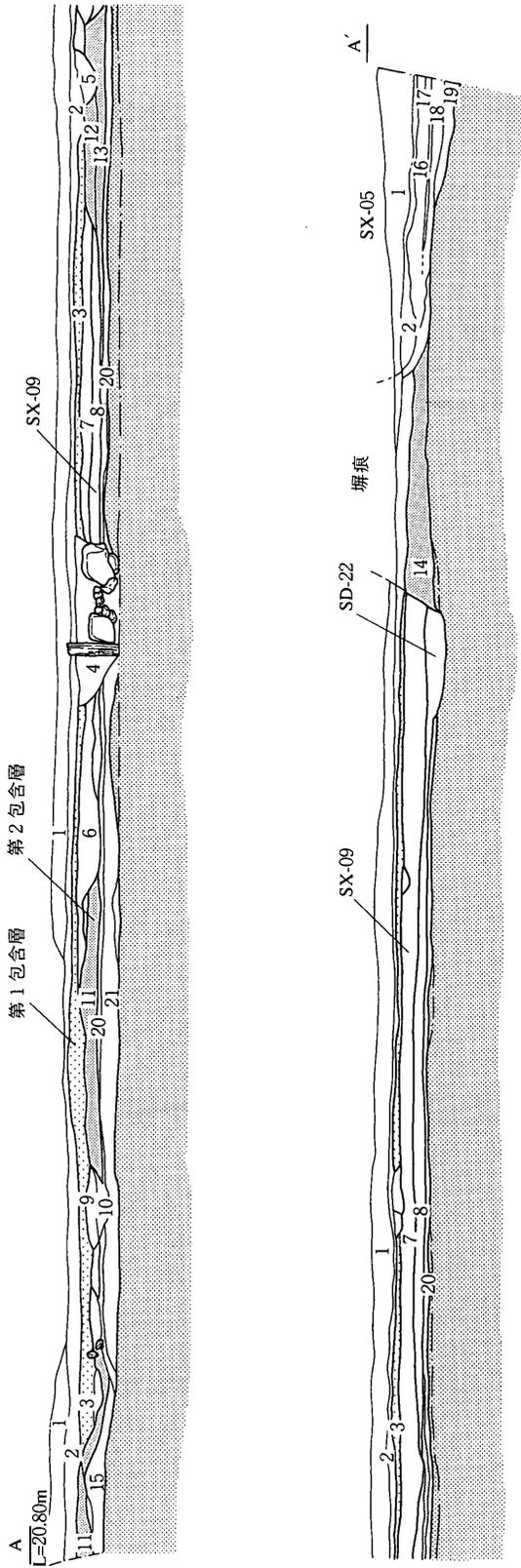
(3)発掘調査の結果

a.概要

調査地はかつての繁栄が虚構であるかのごとく、平坦な水田と化しており、東側の用水路の石垣にその痕跡をわずかにとどめているのみであった。現在の耕作土を除去すると、橙色シルトの床上層が拡がっており、その下位に焼土・瓦の堆積層がみられた。これは上層では全面的な拡がりを見せたが、瓦が主体となる下位堆積層においては、ある程度限定されており、SX-08・09では畦状の高まりで画された長方形区画に特に集中して瓦が堆積していた。瓦群を除去すると、各所で建物に関連する石列等の遺構が検出されはじめ、また、両側を溝で掘りくぼめ、基壇状の高まりをとどめた塀跡も南辺で確認された。さらに面を下げると、建物の基礎と考えられる面より下で畑等の畝に相当する溝や、不明の落ち込みなどを検出した。これらは建物がこの調査地付近に築造される以前の土地利用状況を示すものである。

最終的な面では、古代の溝が石垣のラインを切り込んでほぼ条里地割に並行して掘削されている。これについてはすでに述べた。以上により、古代の溝が埋没し、その上に畑の畝等の遺構が確認できる面を第1段階、その面を薄く覆う包含層（第2包含層）および建物遺構に切られる遺構が埋没した段階を第2段階、建物が機能した時期（各種遺構）を第3段階、建物を取り壊した時期（SX-08・09）を第4段階、建物取り壊し後埋めた段階（第1包含層）を第5段階として、遺構等を区分した。ただし、第4・5段階は堆積状況からも連続的なものと考えられる。

以下、各段階ごとにその状況を述べる。



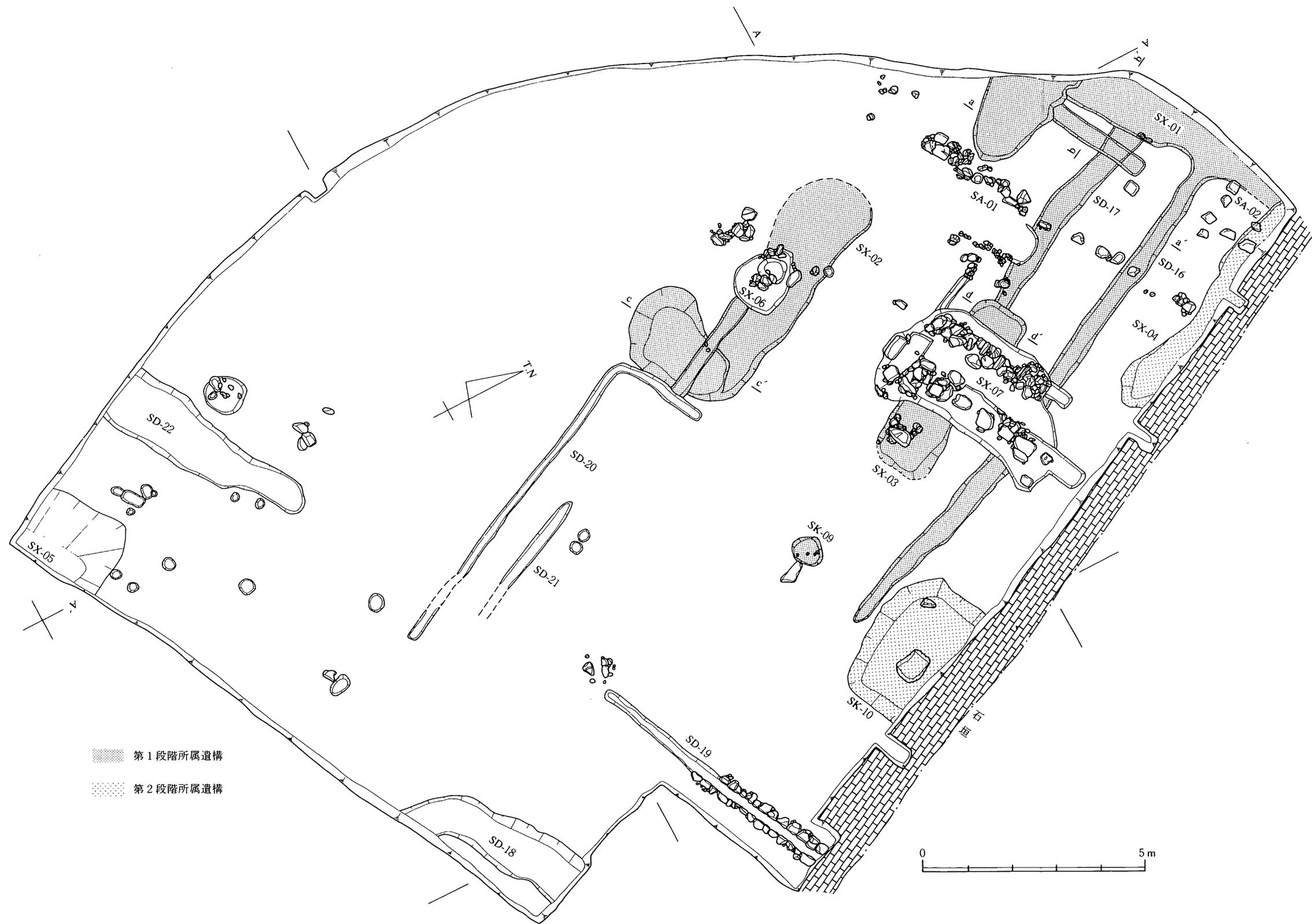
- 1 耕作土
- 2 床土
- 3 灰色シルト層 (焼土・瓦片を多く含む)
- 4 灰色小礫層
- 5 暗黄褐色粘質土層
- 6 灰色粘土層
- 7 灰土層
- 8 瓦堆積層
- 9 暗黄灰色粘土層
- 10 灰色粘土層

- 11 暗灰褐色粘質土層 (焼土ブロック混)
- 12 暗灰褐色粘質土層 (焼土ブロック混)
- 13 淡灰色シルト層
- 14 灰色シルト層
- 15 暗黄褐色シルト層
- 16 暗灰緑色砂質シルト層
- 17 木質腐食土層
- 18 灰緑色シルト層
- 19 濁黄褐色シルト層

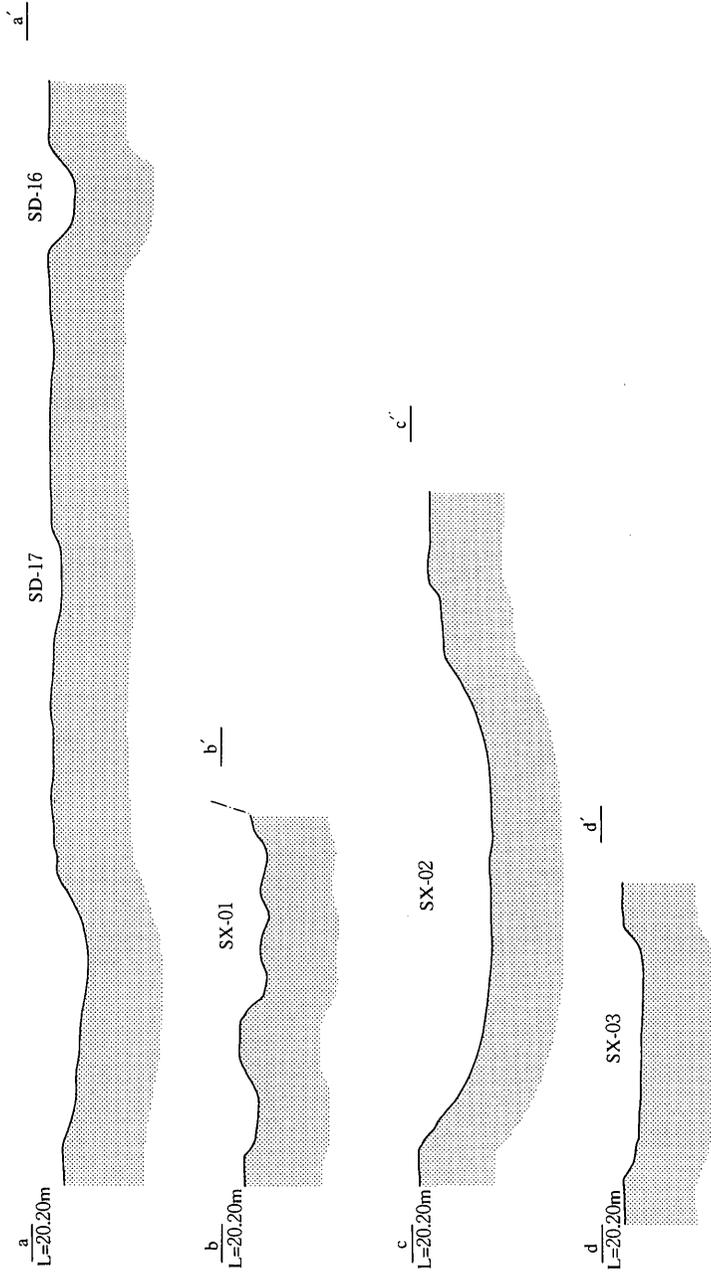
※ 3…第1包含層
 6～8…SX-08・09
 11～14…第2包含層
 16～19…SX-05



第108図 IV区土層断面図



第109図 第1・2段階所属遺構平面図



第110图 第1阶段退构断面图

b. 第1段階の遺構（第109・110図）

第109図において濃い網目をかけた遺構が建物築造以前の整地層（第2包含層）より下の遺構である。SX-01は調査区北端部で検出した落ち込み状の遺構である。深さ約0.1mで、下端が波を打つように凹凸する。埋土は灰色シルトで単層。SD-16に接続する。SD-16・17はともに平行して南北方向に走行する浅い溝である。また、SX-01の西にある不定形な落ち込みもこれらの溝に平行するような主軸方位をもつ。SD-17や不定形な落ち込みは、遺構検出段階で切り合いが認められたが、埋土の一部が共有するなど併存していた可能性が高い。SD-16・17と不定形落ち込みがほぼ等距離で並んでおり、溝間が畑の畝であったものとする。

SX-03はSD-17を切り込んで作られた長方形の土坑である。同じ主軸方向をもつSX-02と対をなすものとする。出土遺物はさほど多くないが、畑の畝溝と考えたSD-16・17に後出するものであり、土地利用の変更があったものとする。

c. 第1段階出土遺物（第111図）

374～377は肥前系染付である。374・375は腰が張る形態の高さ15cmほどの瓶で、外面に草花文を施す。18世紀前半以降の作⁽⁴⁴⁾。376は赤絵の蛸唐草文を描く扁平の小形瓶。377は二重網目文を施す碗口縁部片である。

378は白磁三足香炉である。高さは7.5cmほどと推定される。足部外面には竜頭文の痕跡化した意匠を陰刻する。三足形式であることから、19世紀まで下らない作と推定される⁽⁴⁵⁾。

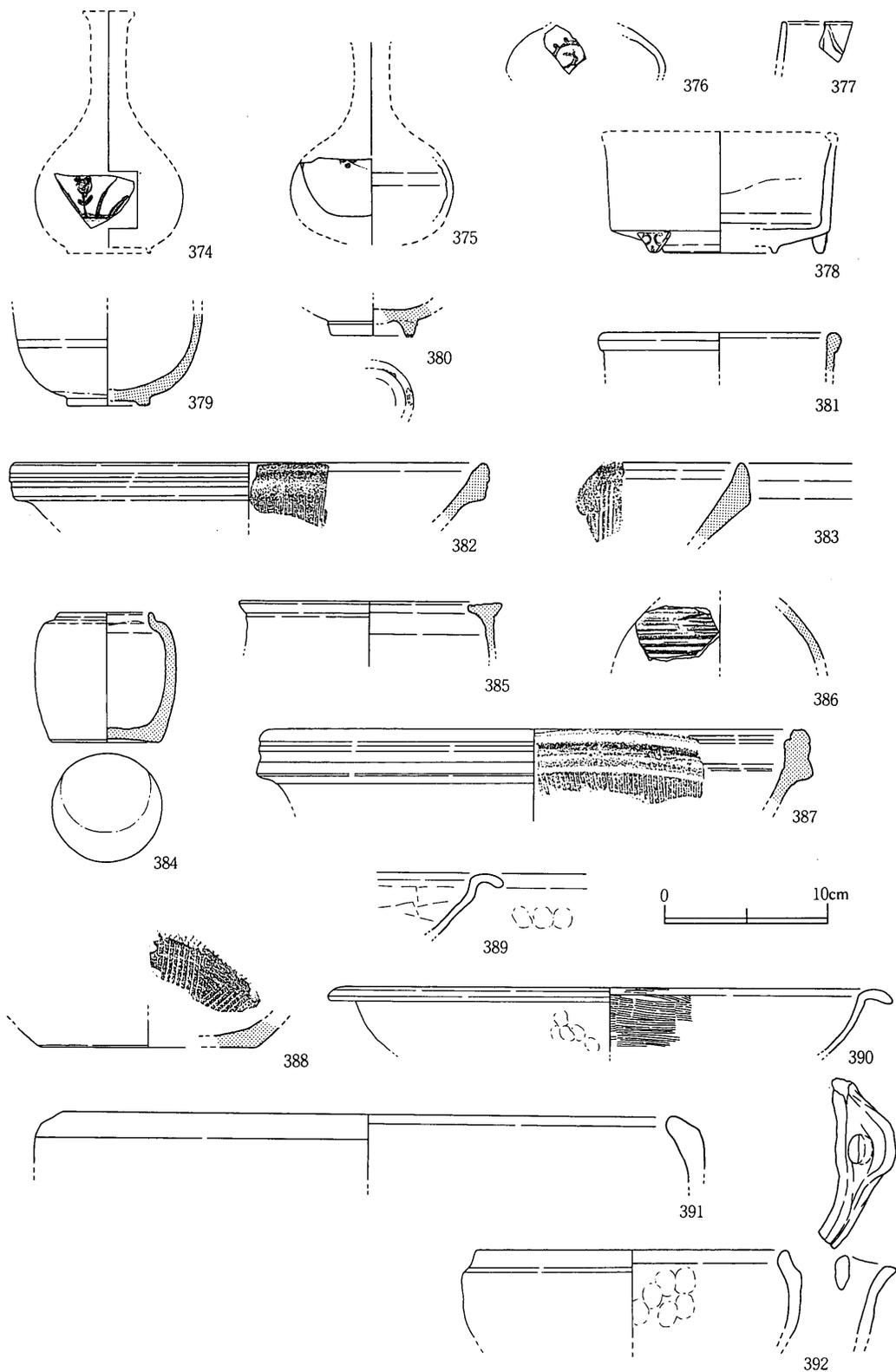
379～381は施釉陶器で379は乳灰色釉、380は灰釉を施す。

382・383は播鉢口縁部片である。383は口縁部が上方に突き出す形態を有し、灰色系の胎土。382は赤褐色系。

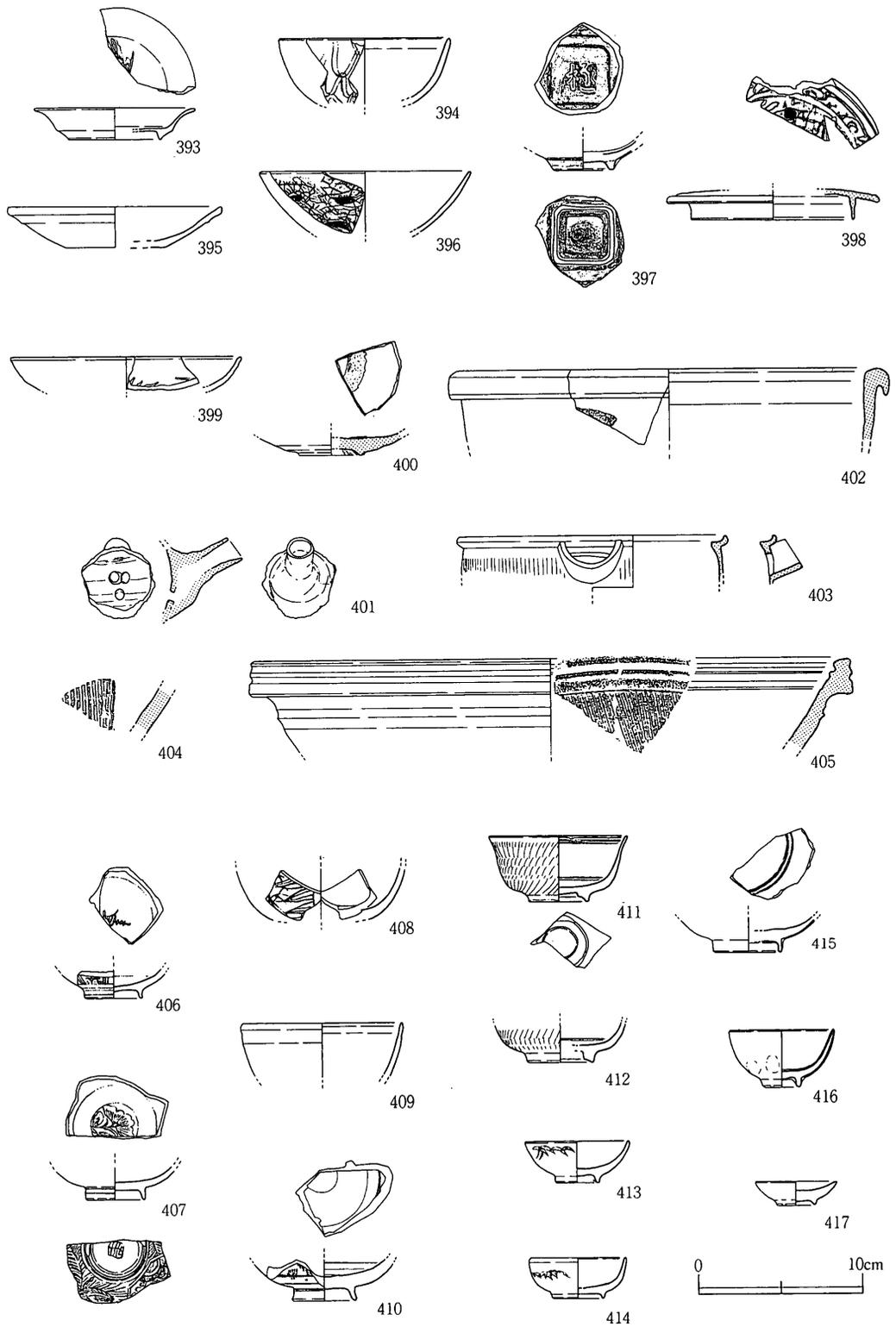
384は高さ8cmほどの陶器茶入小壺である。土師質に近く、軟質焼成。外面に暗赤褐色の施釉。体部下半をスリップし、その他の箇所はナデ調整。

385は陶器の水差。386は刷毛目塗りの徳利肩部片である。387・388は堺産の播鉢。389・390は土師質の焙烙、391・392は土師質の火鉢・土鍋。

以上の遺物は374や378等に依拠して、18世紀後半を下限とするものとする。



第111图 第1阶段所属遺構出土遺物実測図



第112图 第2段階所属遺構出土遺物実測図(1)

d. 第2段階（第109図）

第109図の濃い網目をかけた部分が相当する。第1段階の遺構を覆う整地層である。灰色粘質土を基調とし、炭化物粒を多数含む。厚さは3～5cmで、第4段階のSX-08・09と重複する箇所を除き、調査区全体に分布する。また、SX-04は石垣築造時の裏込土である。緩やかに西に傾斜し、土器片・瓦片を含む。SK-10は石垣築造前の土坑であり、建物廃絶時期（第5段階）の瓦溜に上部を切られる。埋土下部に扁平な板石がある。埋土中には材木片などがある。深さは約0.5m。これらは第2包含層の整地にあわせて形成された可能性が高い。

e. 第2段階出土遺物（第112図）

393～405はSX-04・SK-10より出土した遺物である。

393～379は肥前系染付。393は口縁部が強く外反する小皿。394は外面に二重網目文を施す。397は三田・王地山産の型物の青磁四方小鉢。見込み部に「極」銘を施し、高台底端の露胎部は柿色に変色している。398は陶胎染付の蓋。400～402は施釉陶器の皿・こね鉢・急須である。403は陶器の行平。405は堺産の播鉢で口縁部内面に強いよこなでがみられる。以上の遺物は、397の三田・王地山産青磁が19世紀前半代に生産流通の興隆がみられる⁽⁴⁶⁾ことなどから、19世紀前半を中心とした時期と考える。

406～430は第2包含層より出土した遺物である。

406～421は肥前系染付。407・408は線描きを多用する草花文染付を施する碗である。410は型紙刷りの施文を行っており、第3段階以降に多く存在することから、混在品と考える。411・412は青磁染付の碗である。口縁部は口鏝で端反形を呈し、底部は蛇ノ目凹形高台。体部外面には斜行陰刻線を施す。413～417は磁器の紅猪口。413・414は外面に笹文の染付を施す。416は緑味のある透明釉を内外面に厚く施す。418～420は皿底部片。421は大形皿口縁部片である。

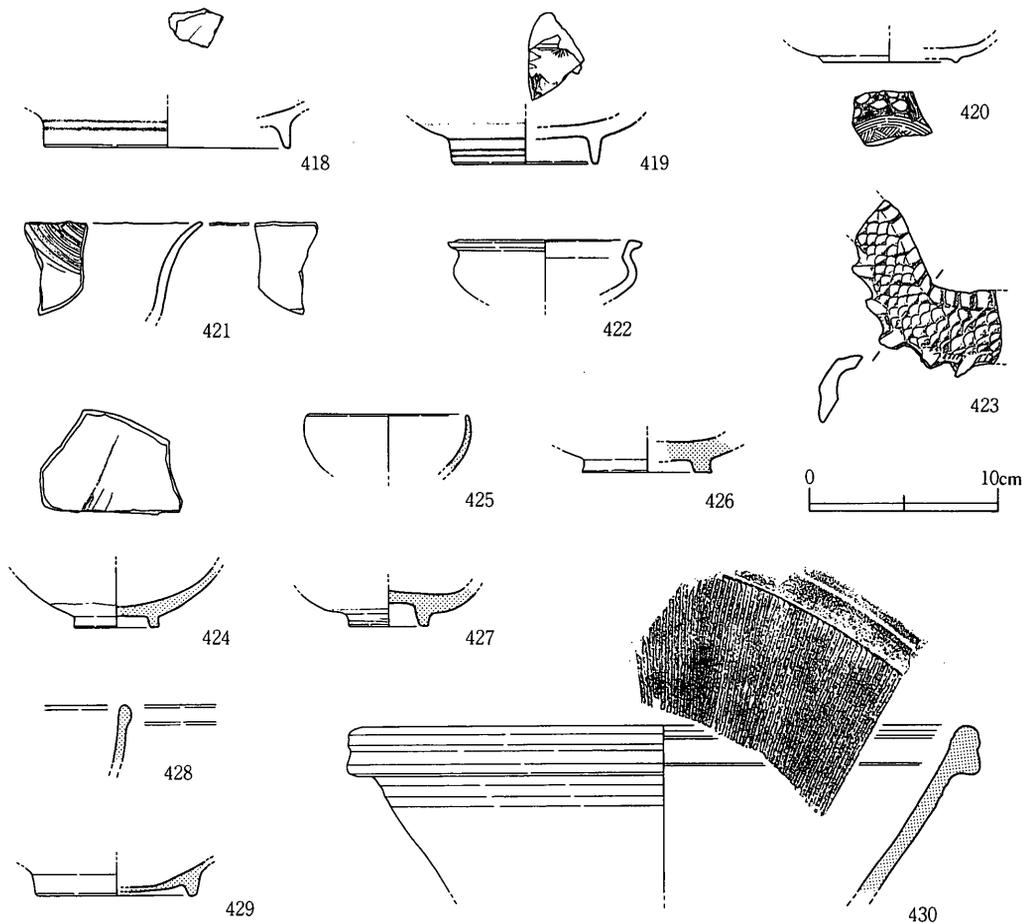
422は青磁香炉。423は青磁龍形水注の半折品である。

424・425は京焼系陶器。426は瀬戸産片口の底部片である。高台はやや外に張り出す断面方形の形態を有し、底面は厚い。内面のみ灰釉を施す。

427・428は施釉陶器片。429は陶器大瓶の底部。430は口縁部内面に強いなでが巡る堺産播鉢である。

以上の第2包含層出土の遺物は、407にみられる線描きを多用する草花文が18世紀後葉

以降に特徴的である⁽⁴⁷⁾こと、426の瀬戸産片口の底部形状および施釉状況によって18世紀後半ごろに位置づけられること⁽⁴⁸⁾等によって包含層下部遺構出土遺物が示す19世紀前半までに収まるものと考える。



第113図 第2段階所属遺構出土遺物実測図(2)

f. 第3段階（第114～116図）

建物築造後、存続段階に相当する遺構である。

調査区北東には「L」字状に板石を配置するSG-02がある。東側は石垣へ、北側は調査区外へ延びる。東側の石垣と南北石列との距離は概ね2m弱を測り、石垣部を取り込んだ1間小口の南北方向に延びる構造物が想定される。

SG-01はSG-02の南辺から南に2.0mの位置にある東西に長い石列である。遺存状況は良好でないが、残存する箇所では上面を揃えている。

SX-07は東西に主軸をもつ不整長方形の掘り形内に石列を東西方向に2列配し、西端小口部に堅く締まった土をおく。性格不明の遺構である。北側石列には30～50cmおきに柱材が残存し、南側石列には一辺25cmほどの方形板を2箇所配置している。

SX-06はSX-07から西に3mはなれて検出された遺構で、不整形土坑中に石組みをもつ。位置的にはSX-07の南石列の延長上にある。

SD-20・21は幅0.2～0.3mの浅い溝である。約0.9mの間隔をもって併走し、SD-20は北側で90°屈曲して東に延びる。いずれも遺存状況は良好でなく、途中で途切れる。SD-19は東西方向に延びる溝で、東側は石列を、西側は土管を伴う。土管部分は暗渠であったものと推定される。

SD-22は東西方向に延びる浅い落ち込み状の溝である。明確に溝として掘削されたものではない可能性がある。埋土中には多量の瓦が包含される。南側には1.8mの間隔をおいて落ち込み状遺構のSX-05が存在する。この遺構には瓦がほとんど含まれずSD-22とは対照的である。同様にSD-18はやや弧を描きながら東西方向に走行する浅い落ち込み状の溝で、埋土中には瓦はほとんど含まれていなかった。断面の観察から、SD-22とSX-05の間には建物築造前の整地土である第2包含層が部分的に残っている。これらのことから、SD-22の南に建物を区画する1間幅の塀が存在し、SD-18の北側まで東西に延びていたことが想定される。

g. 第3段階出土遺物（第116図）

431～443は塀跡の外側（南側）で確認した溝・落ち込みから出土した遺物である。

431・432、435～443は肥前系磁器である。432は口縁部が強く外反する小皿で、第2段階で出土した393より外反度が強い。435は内外面に型紙刷の染付を施す碗。437・438は線描きの笹文・笹垣文を施文する端反碗。440・441は外面に赤壁賦文、内面に雷文を施文

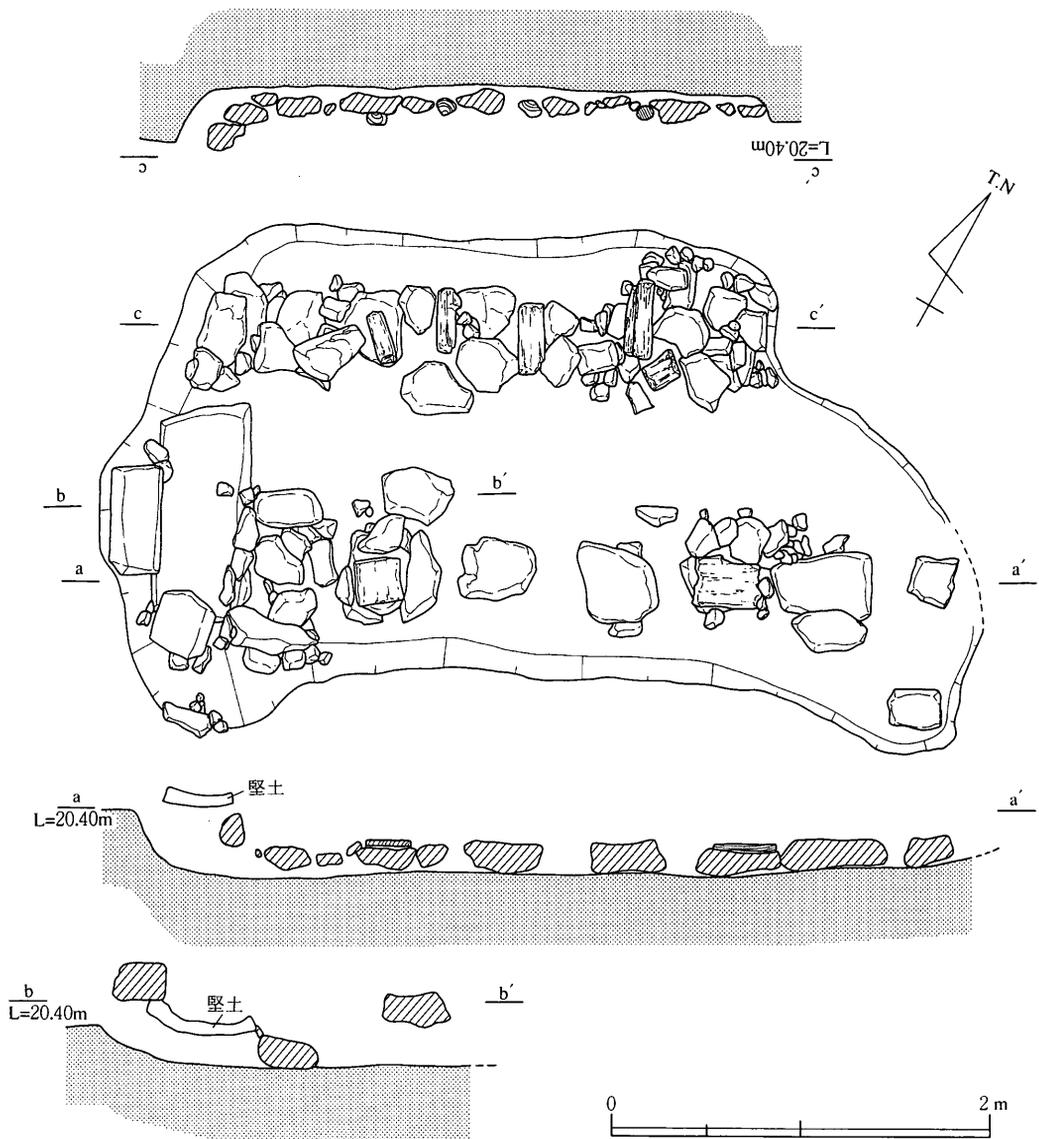
する皿である。442, 443は大皿。444は無文の紅猪口。445は小形の瓶底部である。

433は京焼系大鉢の口縁部片。鋏状に端部が垂下する。内外面に灰釉を施する。

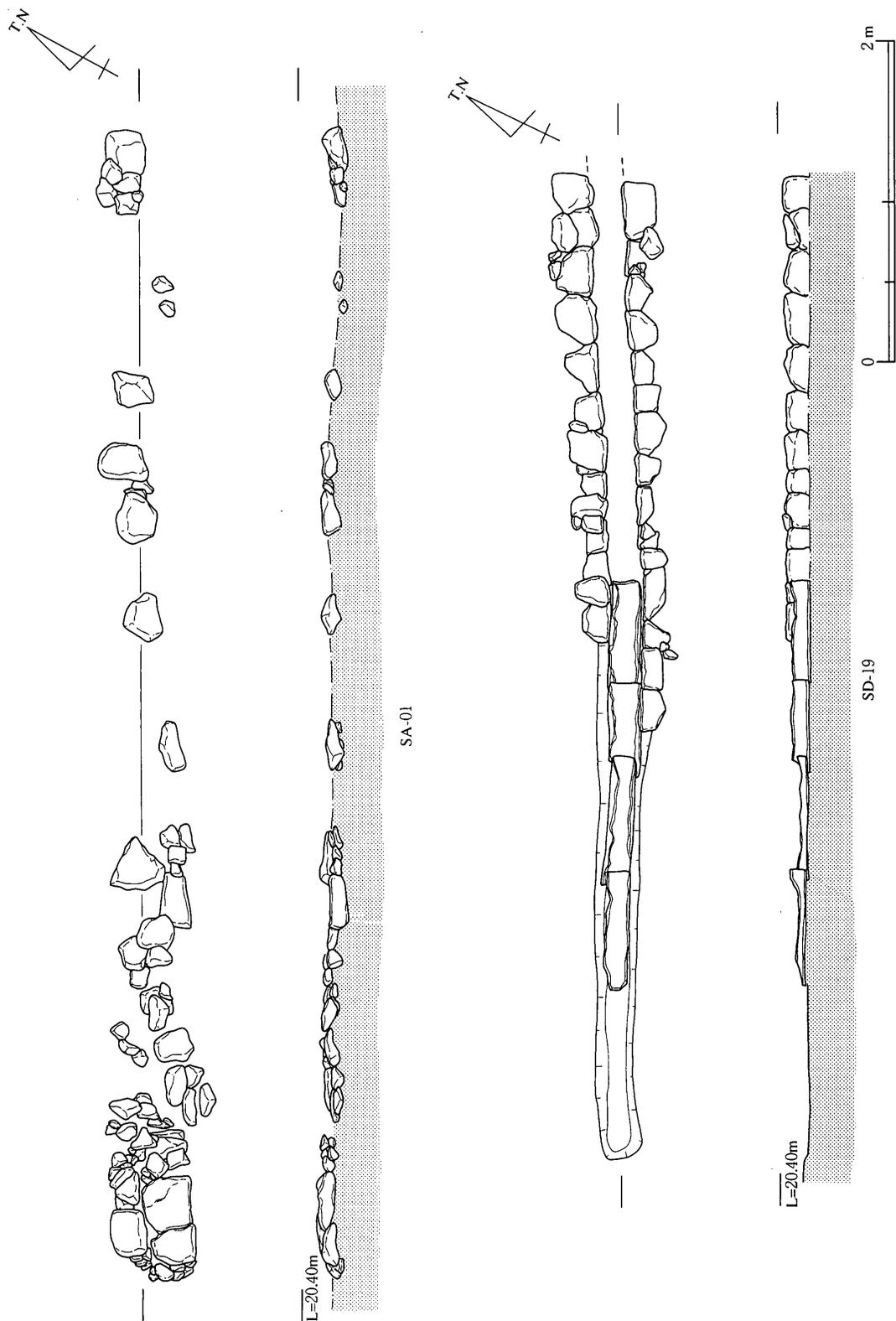
434は美濃産の片口。口縁部は端部を内側に折り曲げ、外面に幅広の段をもつ。全体的に薄手で、高台は方形でやや外に張り出す。高台部を除き施釉。

446～457は第1段階の遺構を切り込んで作られた建物存続時の遺構出土の遺物である。

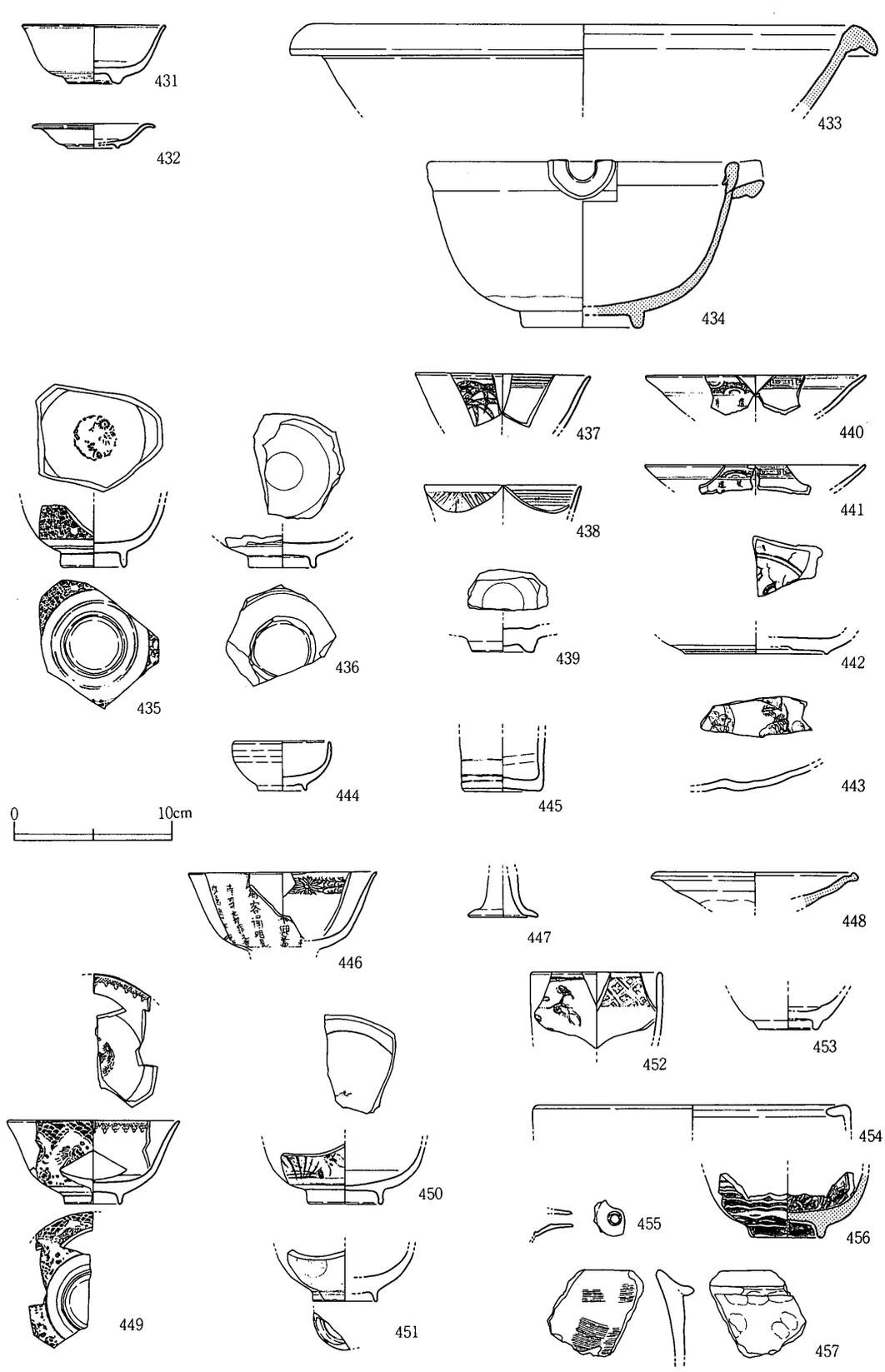
446・447・449～454は肥前系磁器である。446は赤壁賦文の碗, 449は型紙刷の碗である。両者とも口縁部は端反を呈す。450～452は染付碗。453は瓶の底部である。454は深緑色釉掛けの磁器香炉。455は水注口縁部片。456は唐津系刷毛目塗り碗。457は土師質土釜である。



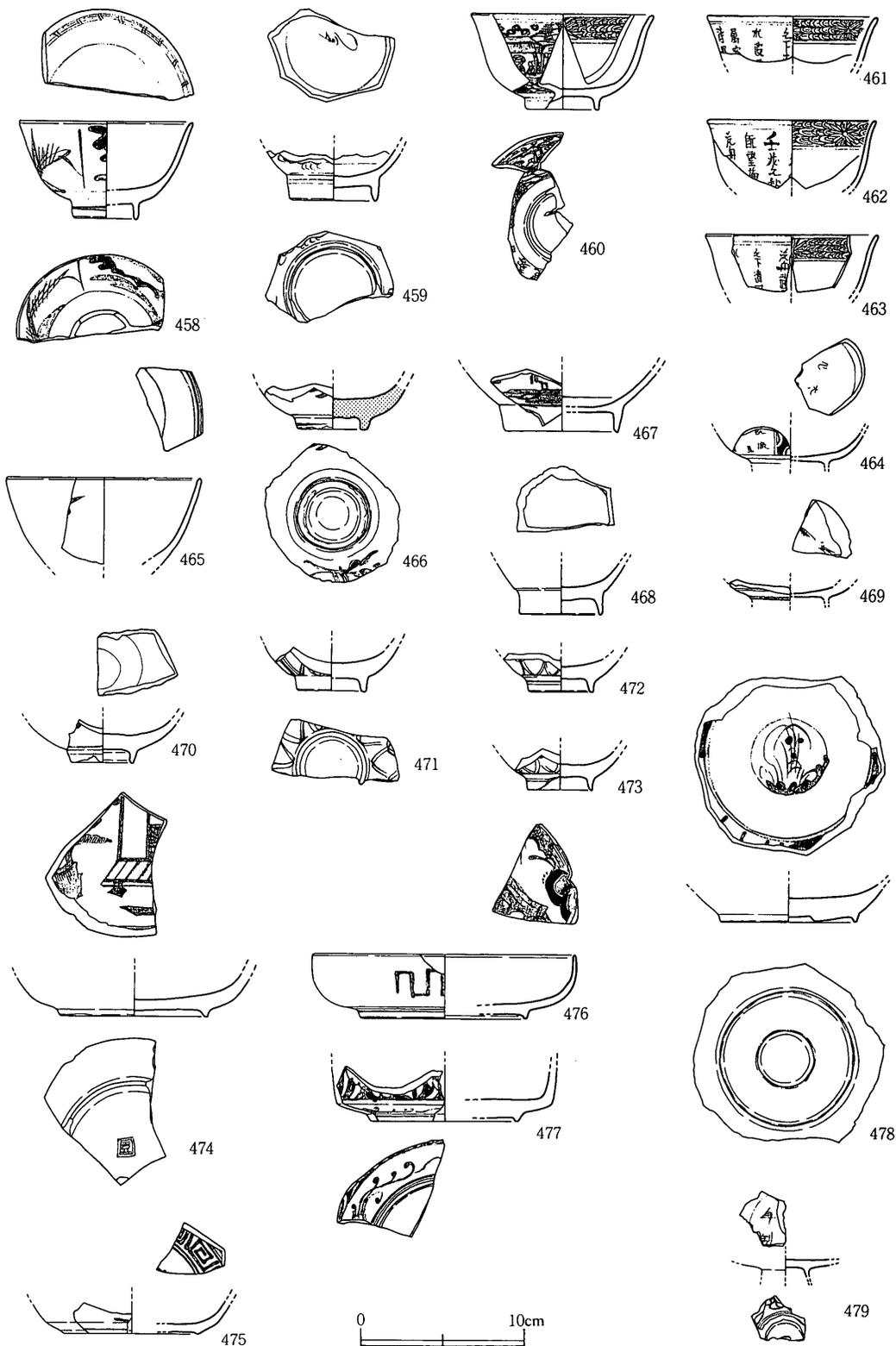
第114図 SX-07実測図



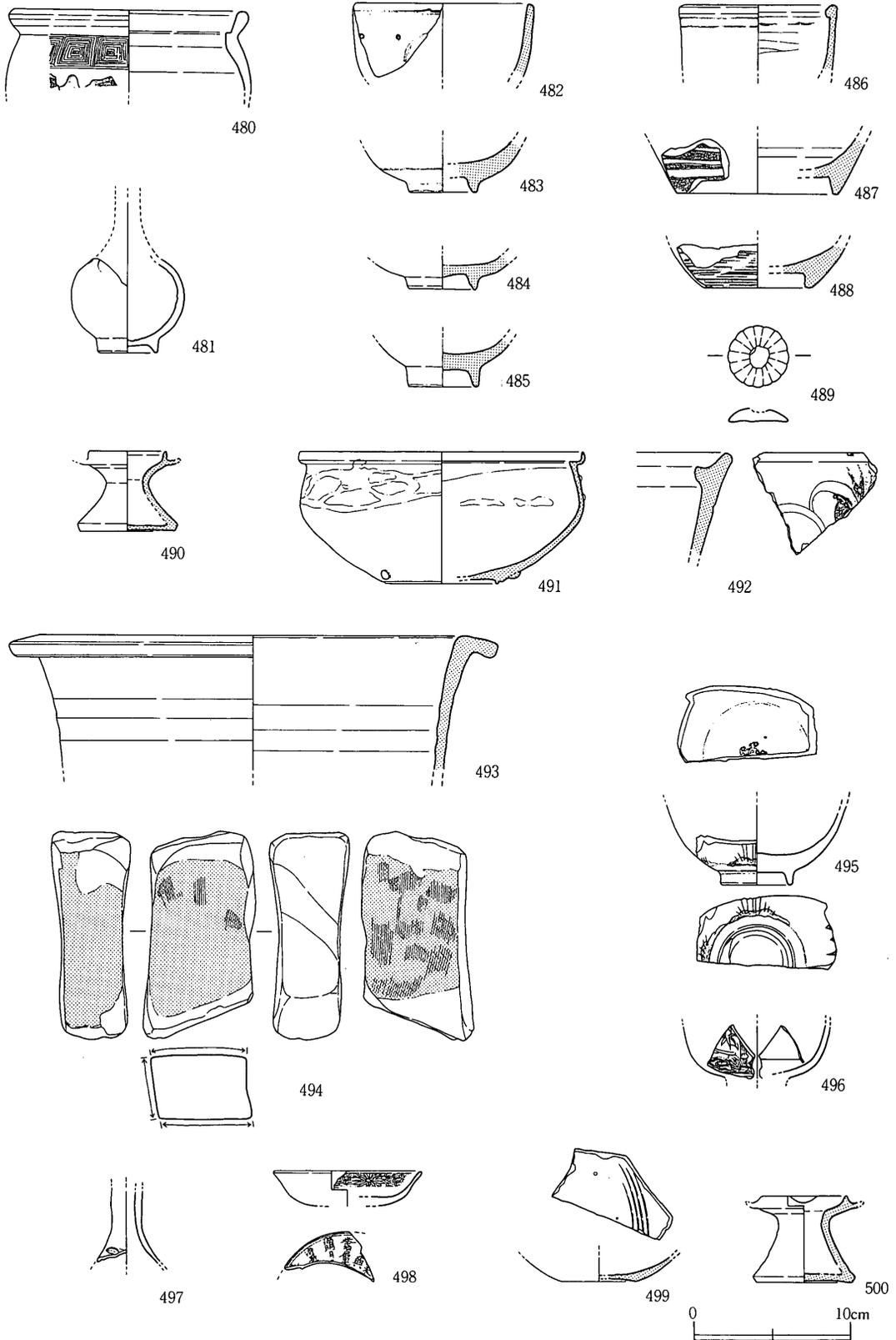
第115图 SA-01・SD-19实测图



第116図 第3段階所属遺構出土遺物実測図



第117图 第4段階所属遺構出土遺物実測図(1)



第118图 第4段階所属遺構出土遺物実測図(2)

以上の出土遺物は、肥前系磁器においては型紙刷、赤壁賦文などの施文上の特徴が19世紀前葉以降、明治10年代までの時期幅を示し⁽⁴⁹⁾、434の美濃産片口は19世紀前葉の作である⁽⁵⁰⁾。このことから、19世紀全般にわたる建物存続期を反映したのと考えて矛盾はない。

h.第4段階(第119図)

建物廃絶に伴う遺構群である。調査区西側に面的に広がる遺構があり、東側には若干の瓦溜土坑がある。

SX-08・09は深さ0.2mで面的に広がる矩形の遺構である。掘り形は整地層の下に広がる黄色シルト(基盤層)まで達しており、人為的に掘削されたものである。両遺構の間には畦状の高まりが残っている。埋土中には多量の瓦・焼土が包含されており、建物撤去の際の遺構である可能性が高い。両遺構とも南は第3段階で確認した塀跡付近で途切れている。

i.第4段階出土遺物(第117～118図)

第4段階と第5段階は両者とも建物廃絶時の土層から出土したものであり、本来同時に報告すべきであるが、便宜上区分けをして報告する。

458～481、495～498は肥前系磁器である。458・459・467・468は広東型碗である。薄い呉須絵を施すもの(458)、線描き施文のもの(459)、山水文を持つもの(467)がある。

460～464・498は赤壁賦文をもつ碗、皿である。口縁部はいずれも端反。471～473は二重網目文を施す碗である。469は内面見込みに「○明成」銘がある。474の皿は内面に建物の意匠が見え、山水文と考える。478は内面に線描きの草花文をもち、底部は蛇ノ目凹形高台。

479は内面に「○年制」の銘文がある。495は内面にコンニャク判の五弁花文を付す。

482～486は肥前系と推定される施釉陶器。487・488は唐津系刷毛目塗りの徳利底部。489は土師質の陶燭台である。499は信楽系の灯明皿。491は西播系と推定される陶器の行平である。492は水甕口縁部で瀬戸産。493は植木鉢で瀬戸産。494は硬質砂岩の砥石である。3面に砥面が認められる。

以上の第4段階の出土遺物は、第3段階と同じく、19世紀全般を反映したのと考えられる。

j.第5段階

第4段階の遺構を薄く覆う包含層である。建物撤去後の田地化に伴う整地層。調査中にはSX-08・09と同時に掘削したことから、出土遺物の大半は本来SX-08・09に所属するものである。

k.第5段階出土遺物（第120～122図）

501～560は肥前系磁器である。501～504・509は外面に線描きの染付をもつ碗である。505～508・511は薄い呉須絵の染付をもつ碗。510は二重網目文を施文する。512・513は丸文をもち、514・515は型紙摺の施文をもつ端反碗。518～526は赤壁賦文の端反碗。527・529は高台が長い広東碗である。531・523は外面に精緻な梅花文を施文する小形の碗である。534～541は中形の皿で、540は型紙摺の施文をもつ。542・543は口縁部が小さな玉縁となる中鉢で、内面に線描き格子を施文する。541は外面に笹垣文をもつ鉢である。544～549は紅猪口で口縁部が直立するもの（548）と、端反のもの（546）がある。546は19世紀後半ごろの美濃産。550・551は瓶で、550は色絵染付、551は底部が蛇ノ目凹形高台で、内面無釉。552・553は線描き施文の蓋。554は色絵染付の段重である。555～561は呉須絵をもたない皿。そのうち556は内面に「寿」文を配し、口縁部が強く外反する形態をもつ、19世紀中葉頃の美濃産。557は口縁端部に呉須による口鏝をもつ菊皿。

562～565は青磁および青磁染付。562は香炉で緑味の強い施釉。564は内面に線描きの染付をもつ。565は内面に細蓮弁の陰刻を施文し、底部は蛇ノ目高台。

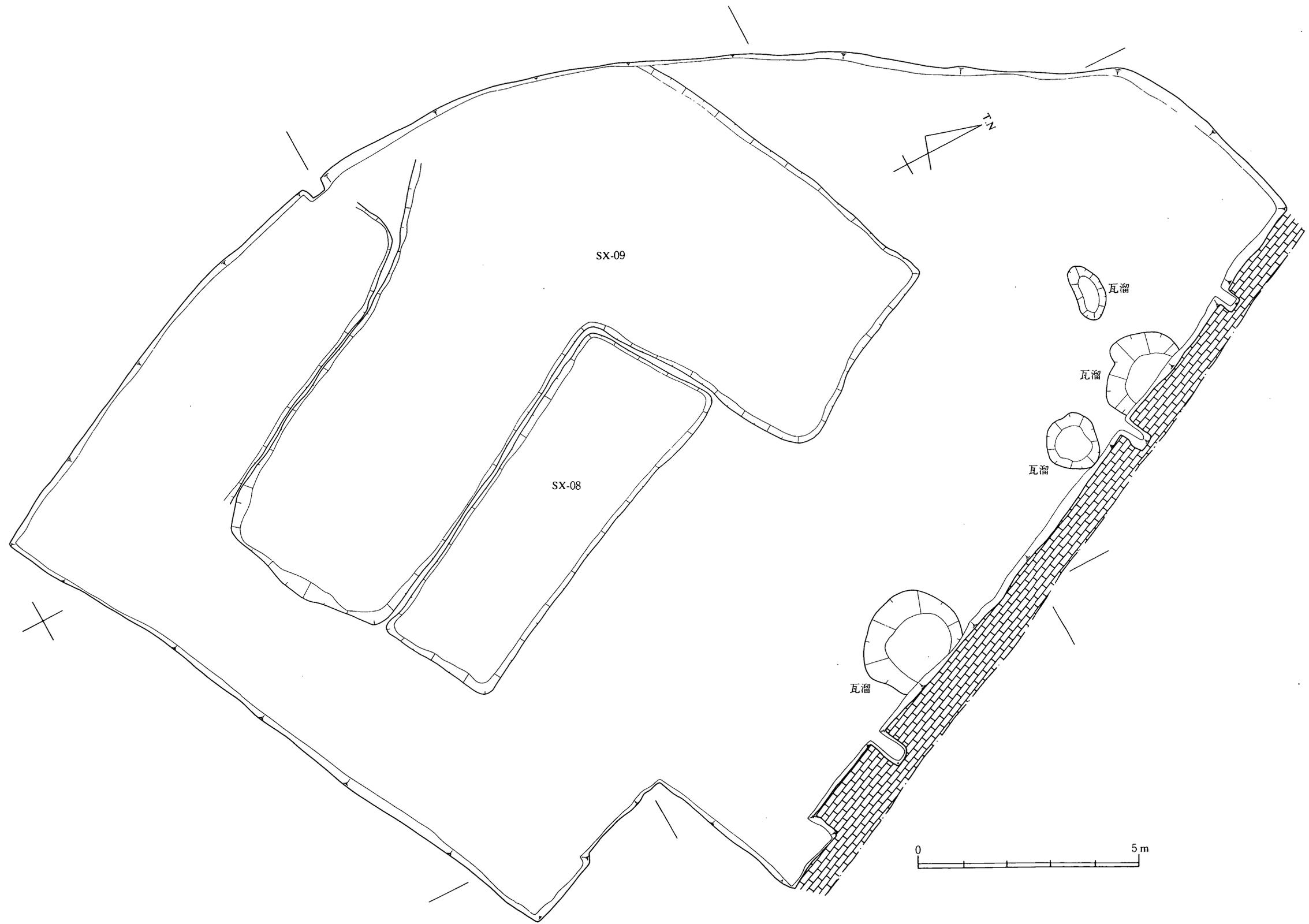
566～579・582は施釉陶器。566は瀬戸産広東碗。568・569は京焼系碗。573は瀬戸産の腰鏝碗である。577は唐津系刷毛目塗りの鉢。578は瀬戸・美濃系片口で、外面は高台近くまで施釉が及ぶ。579は内面鉄釉の鉢。582は内面無釉の灰吹。

580は陶器徳利。581は陶器蓋。583は土師質焙烙である。

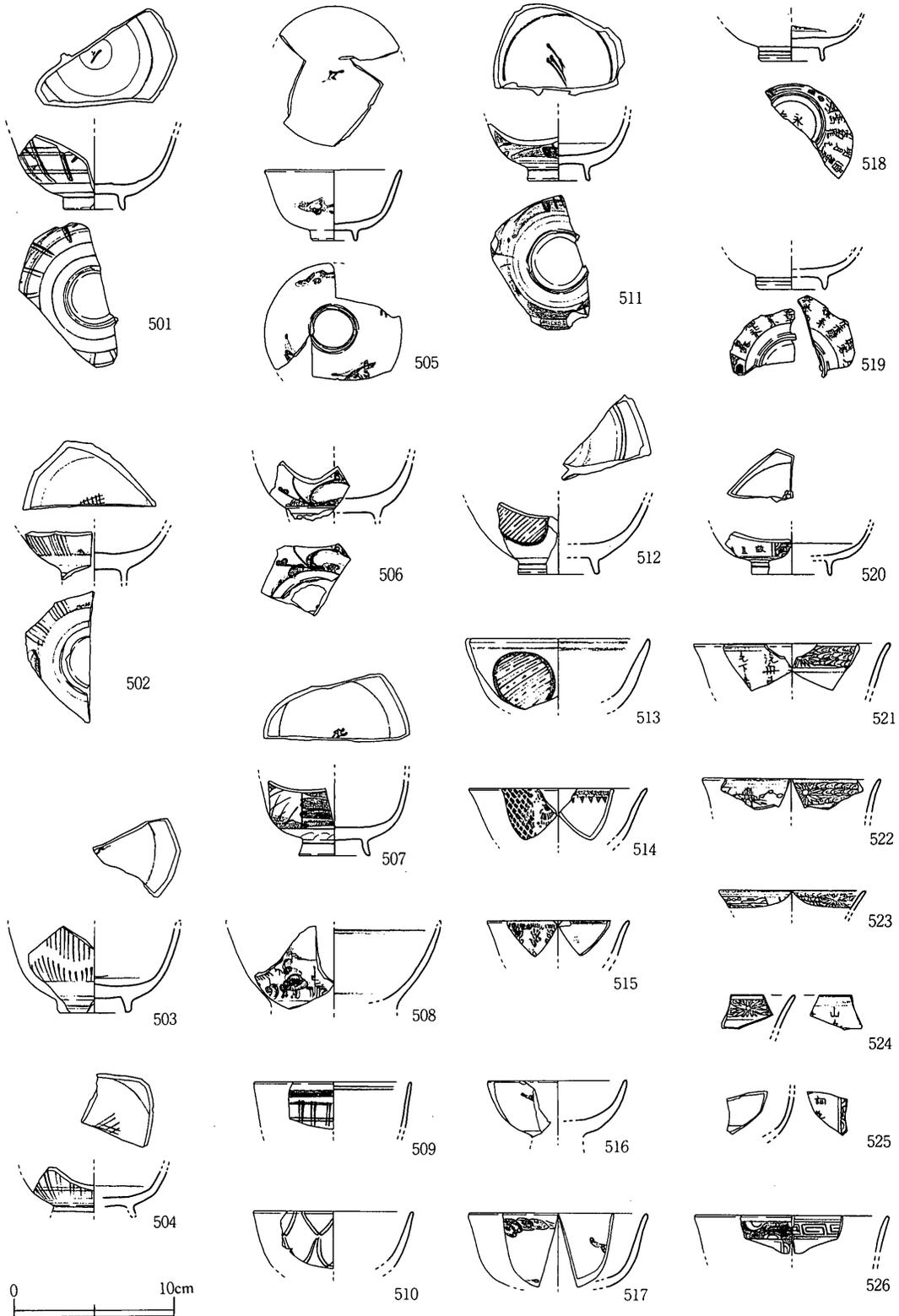
以上第5段階の出土遺物は、18世紀後半から19世紀後半までの時間幅をもつものである。明治末期の建物廃絶期に概ね一致する。

l.鉄器（第123図）

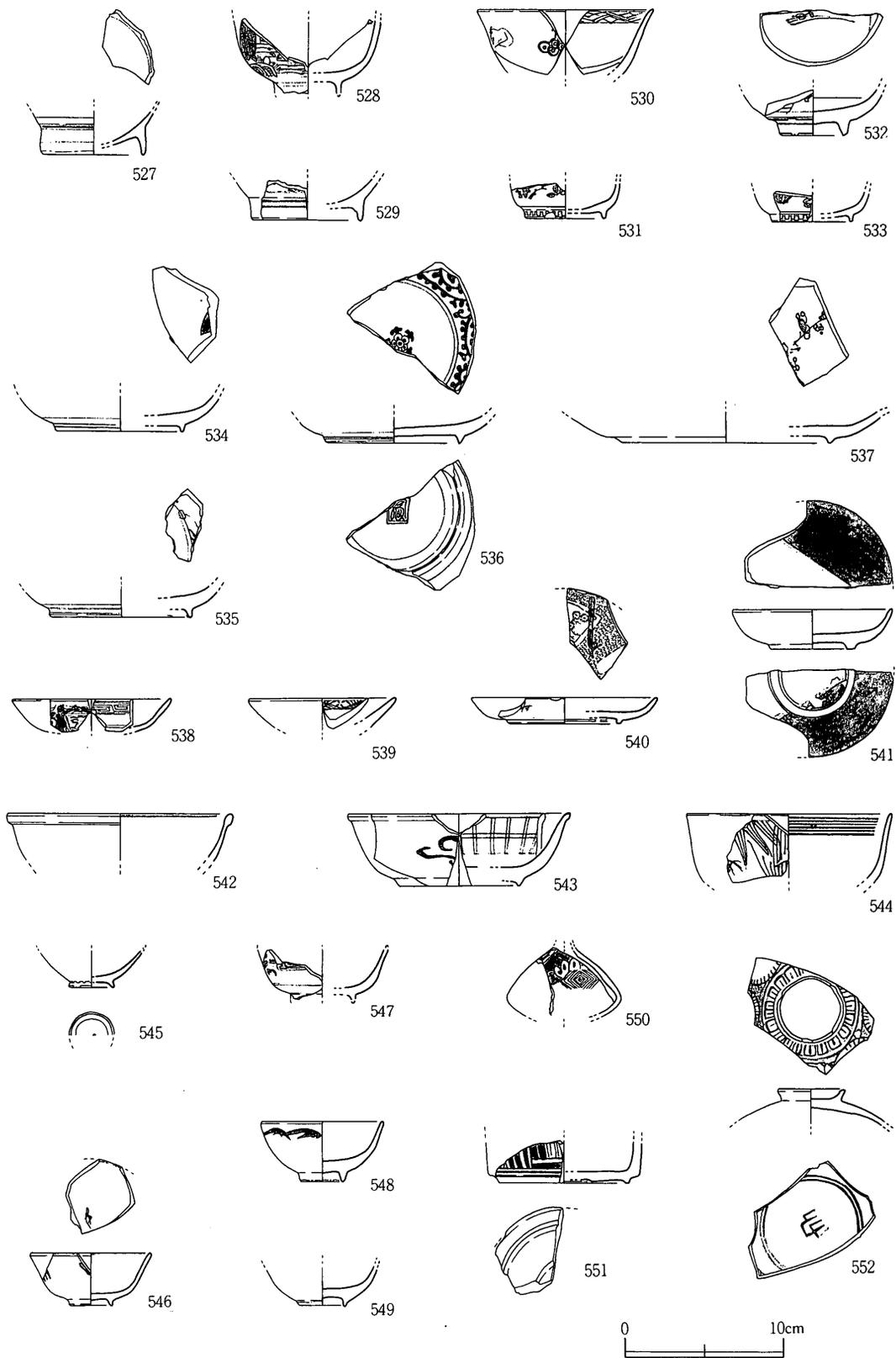
584～587は第1包含層より出土した鉄器である。584は長さ51cmの鉾状の刺突具である。先端が「U」字状に二股に分かれ、基部は袋部をもつ。先端は「く」字状に屈曲する。585は長さ52cmの刺突具。尖頭の先端から12cmまでは断面扁平で、それ以下の断面は直径1.0



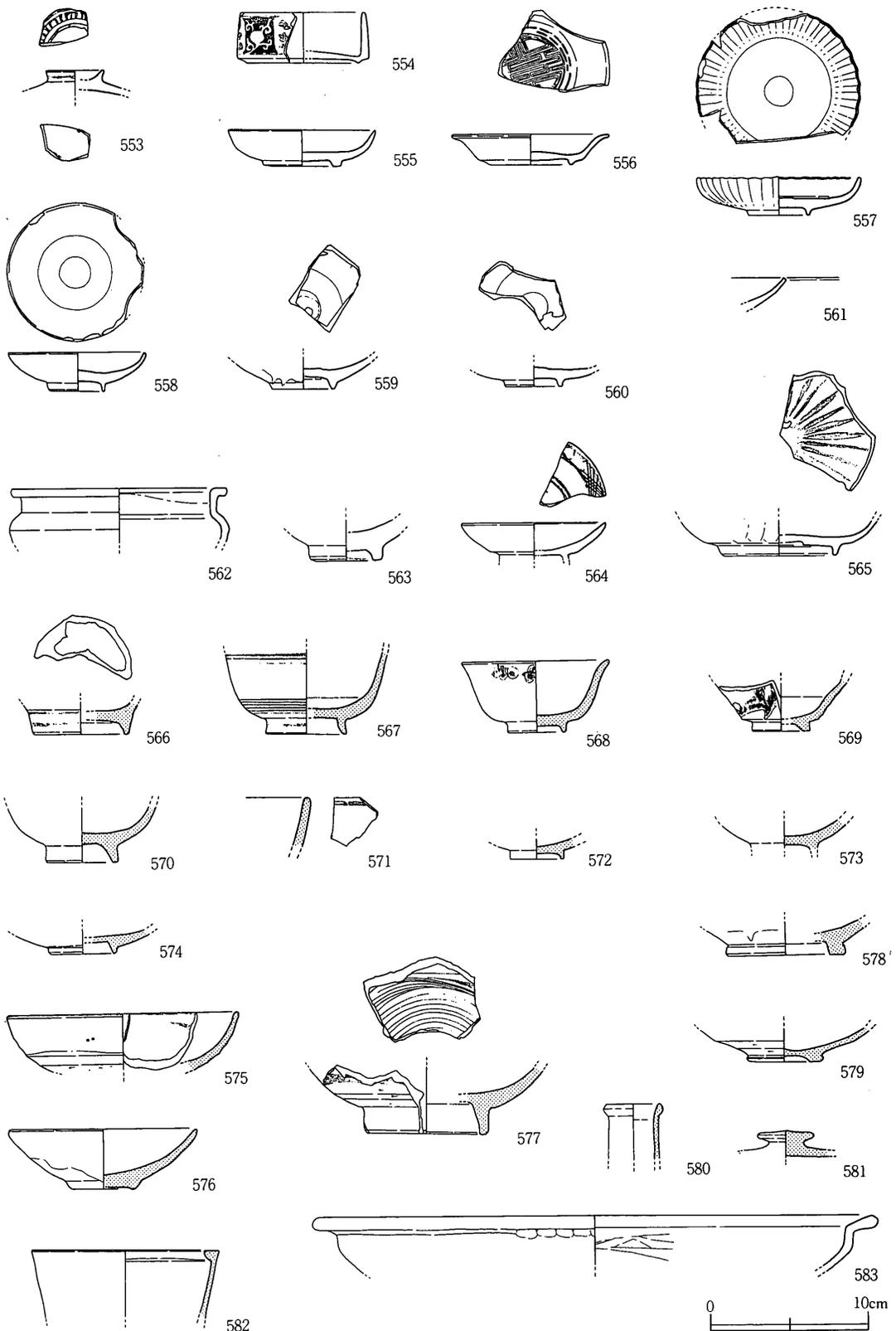
第119図 第4段階所属遺構平面図



第120图 第5段階所属遺構出土遺物実測図(1)



第121图 第5阶段所属遺構出土遺物実測图(2)

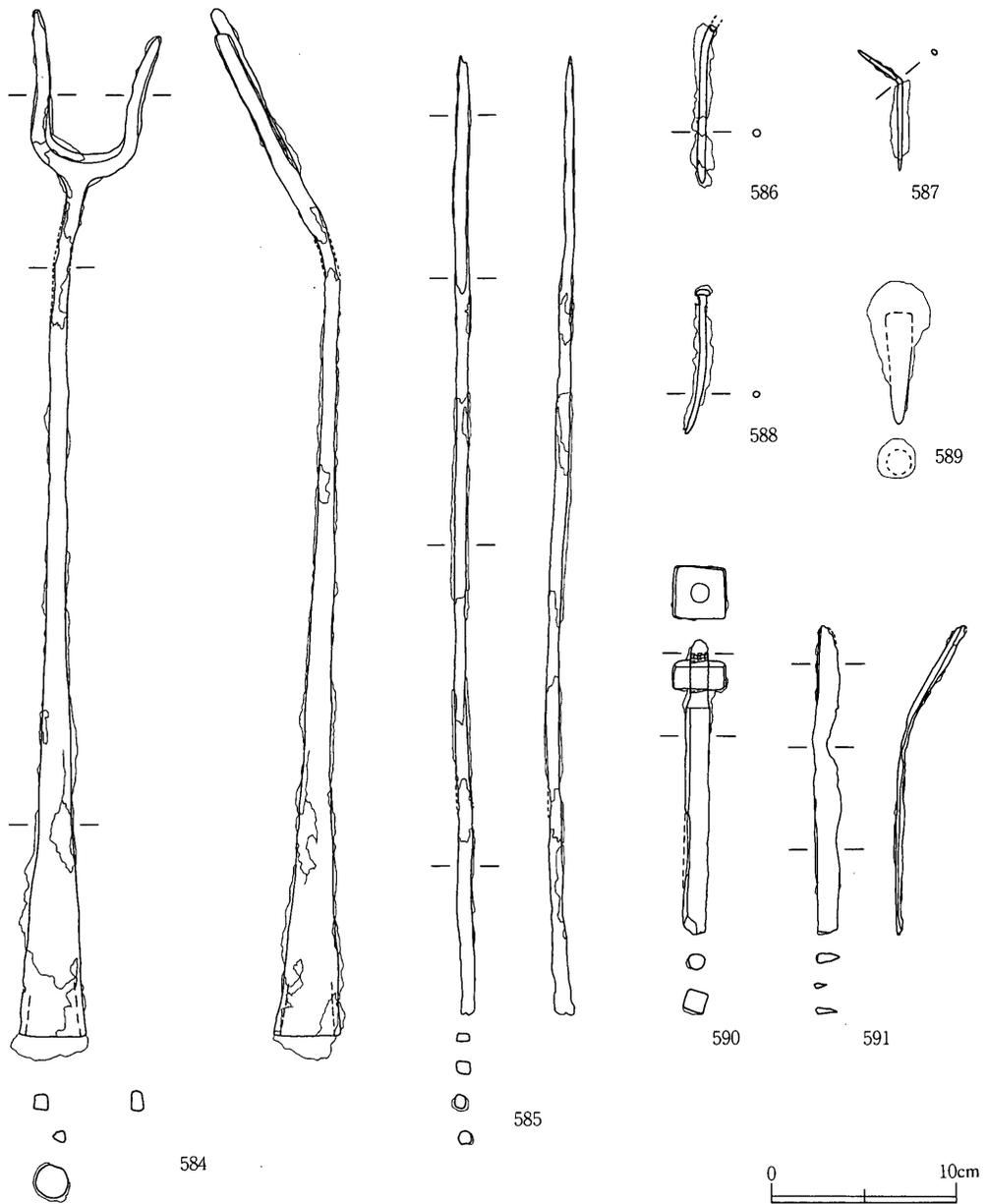


第122図 第5段階所属遺構出土遺物実測図(3)

cmの円形。基部は未加工。586・587は釘で586は頭部が欠損する。587は細手で両端が尖り、「く」字状に屈曲する。

588はSX-07より出土した釘。長さ7.8cmを測る。589は第2包含層より出土した。錆化が著しく、形態が不明瞭であるが、太身の釘と推定される。

590はSX-07より出土した鉄器である。ボルト、ナットの組み合わせで、下端部は欠損する。591はSX-04より出土した小刀である。中程で屈曲する。



第123図 IV区出土鉄器実測図

(4)屋敷地の消長について

文献史料と発掘調査資料を総合し、屋敷地の消長を検討する。

発掘調査の結果、今回の調査地に建物が築造されたのは第2段階の整地層（第2包含層）上面であることが判明した。第2段階の陶磁器類は19世紀前半を中心とする時期に比定されており、整地と建築が連続的と考え、19世紀前半に建物築造時期を比定できるものとする。

a.建物配置と絵図の照合

第3段階の各遺構は、建物の配置を推定するいくつかのデータを提示している。絵図との照合の結果を概報にも若干掲載したが、今回改めて検討する。

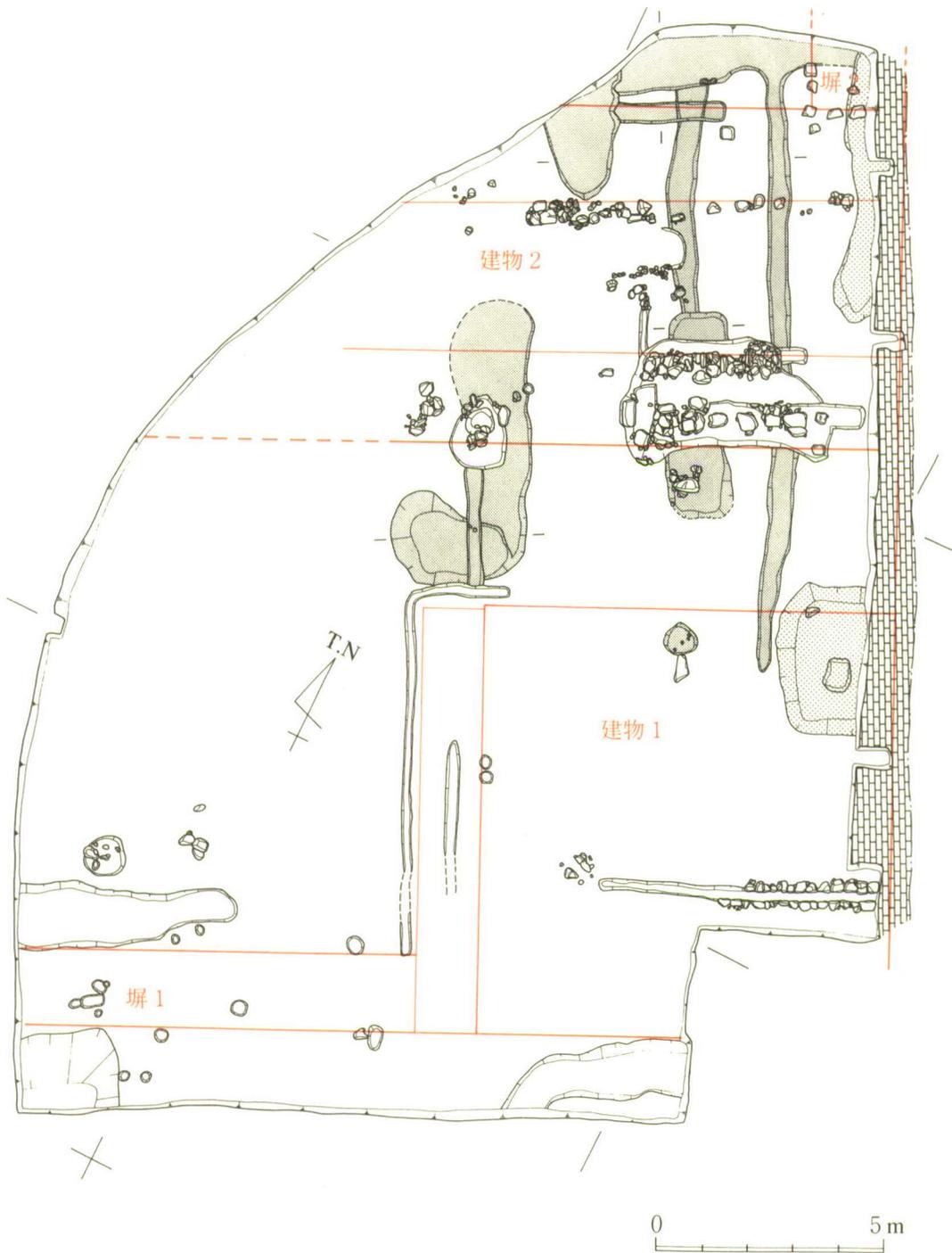
まず、調査区の南側に推定した塀跡については、SD-18・22・SX-05の配置や瓦の出土状況の差異、またSX-08・09の南辺の位置と断面にみられる第2包含層の残存がすべて対応することから、塀跡が存在したことは確実であろう。これを塀1とする。

絵図にみられる石垣は現在もなお残る石垣に対応するものと考えられる。したがって、絵図に見られる屋敷地の南東部に今回の調査区が対応することになる。

調査区内の遺構の分布をみると、東側に溝や土坑状の遺構が多い点が注意される。これは絵図において屋敷地の南東隅に建物が入り組んでいることに、大まかには対応するものであろう。細かく見ると、SD-20が「L」字状に屈曲している部分は、これが建物の雨落ち溝と考え、建物の北側ラインに対応する可能性が高い。これを建物1とする。

SX-07の南石列とSX-06が概ね東西方向に揃っていることを先に述べた。北側約5.3mには石列SG-01が同じ方向に配されている。これは東西に長い建物が存在したことを示すものと考えられる。これを建物2とする。SX-07はその建物内に配置された遺構であると推定される。

SG-01の1.8m北には石垣に沿った石列SG-02が存在する。南北石列と石垣との間隔は1.8mを測り、調査区南の塀跡の幅と一致する。石垣に沿って一間幅の構造物を考えると、礎石を配した塀跡と考えて矛盾はない。これを塀2とする。



第124図 IV区検出遺構と絵図の照合

以上の建造物の配置をまとめると、第124図のようになる。塀跡と石垣端線を基準に建造物の大きさを換算すると、建物1が南北約9m、東西10.35mとなる。ただし、SD-20の内側にSD-21が存在しており、これをもとに計測すると東西は約9mとなる。絵図には屋敷地南東隅に南北棟の建物が描かれているが、建物西側の張り出し状の屋根構造を勘案すると、基底部では正方形の基礎構造をもったものと推定される。建物1はSD-21を基準にして計測すると、9m四方の大きさをもっており、絵図と照合できるとすると、5間×5間の建物となる。絵図に描かれた建物1が5間×5間と仮定した場合、その北側に描かれた東西棟の建物は、概ね2間の間隔をへだてて4間幅で建築されていることになる。さらにその北には石垣に沿って塀が取り付いている。これを遺構に対応させると、建物2が東西に長い建物と推定され、塀2が南北に延びる塀であることから矛盾はない。塀2と建物1との間隔は絵図上では6間と仮定され、遺構配置上では概ね11m弱（6間）となる。これは遺構から絵図を参考にして推定した配置が誤っていないことを示す。したがって、絵図に描かれた屋敷地の建物配置については、基本的には大きな美飾は加えられず実物に忠実であることが判明する。

b. 屋敷地の系譜

調査地における建物建築以前の状況については、整地層以下に畑の畝状の遺構とそれを切り込む遺構がみられ、それぞれ陶磁器類が出土していることから、調査地に近接して建物が存在する時期と、その後調査区内に何らかの建物が構築された時期が考えられる。

出土した陶磁器類から18世紀後葉を中心とする年代が想定され、それを遡る陶磁器類は基本的には存在しない。したがって、18世紀後葉以前は今回の調査地から離れた箇所に建物等が存在したか、調査地周辺の居住が18世紀後葉頃に開始されたか、いずれかであろう。

前者の場合にあっても、古い時期の遺構が調査地の北側にまとまること、後の建物が方格地割に規制され、北側に現在ものこる道・水路等による地境を越えることはないと考えられること、また後の建物の絵図において母屋が北に存在すること等によって、調査区の主として北側において、後の建物より規模の小さい先行建物を想定することが可能である。

文献史料からは19世紀前半ごろまでに久留島麻之進が庄屋職についていることが判明した。この年代は発掘資料に基づく調査区内の建物構築時期と矛盾しない。それ以前においても調査区周辺で久留島家が居住していたことは、墓碑の存在によってほぼ確実視されることから、調査区周辺において居宅を構えた久留島家が、庄屋職に就くか、あるいは庄屋と

しての勢力を増強するにあたって、居宅の拡大、充実を図ったものと推定される。

今回の調査では19世紀前半以前の様相を把握することが困難であったが、調査区の東に近接する郡家原遺跡では、当調査区に近い位置において17世紀後半～18世紀前半の建物群が検出されている⁽⁶¹⁾。当調査区で推定した18世紀後葉以降の久留島家の足跡とは約半世紀の空白があるが、墓碑にみられる系譜を考慮すれば、久留島家に関係が深い遺構群である可能性もある。

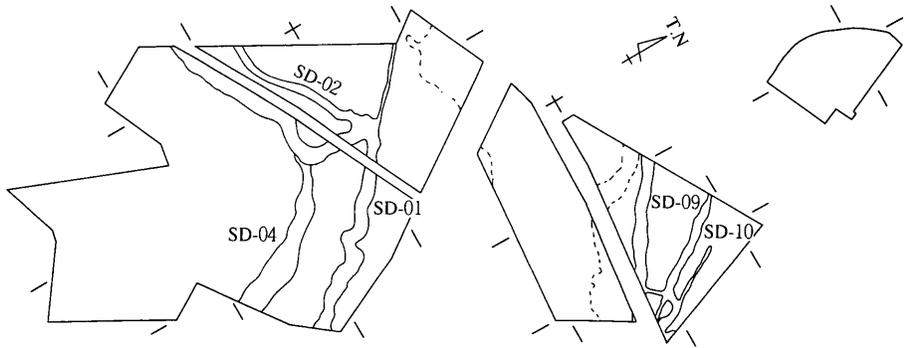
c.小結

近世の行政機関としての村と、村の内部における階層関係は、必ずしも江戸時代を通じて安定的に推移したものではない。新たに行政機関としての村が設置されたり、あるいは古くから存在する村の領域が次第に狭くなるなど、時々有力農民の盛衰動向等に呼応して変動したことが予想される。久留島氏は現資料から見る限り、18世紀後葉以降急速に勢力を拡充した農民層であり、三条村の成立とも関わっていたものと予想される。

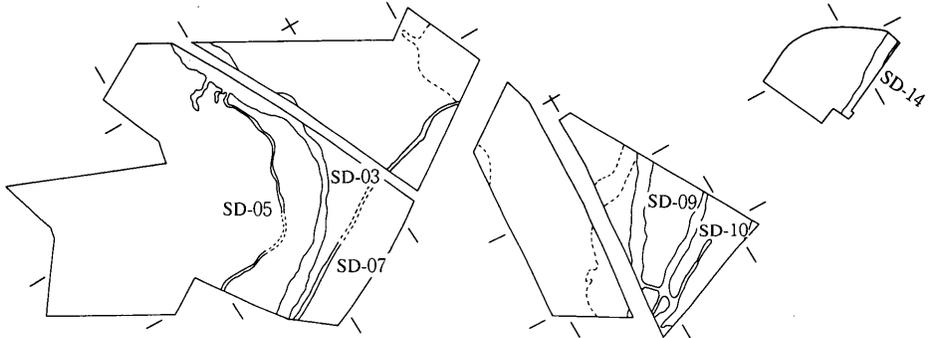
18世紀中葉以降、周辺では郡家一里屋遺跡や郡家大林上遺跡など小規模な1棟の居宅と1棟の納屋程度から構成される宅地が各所で出現する様子が窺える。これら小農民層の頻出も、それらを統括する有力農民層の盛衰と関わるものであろう。

久留島氏屋敷地に隣接する郡家原遺跡の掘立柱建物群は、6棟ほどが集中する小規模建物群からやや北に離れて、一部総柱を含む100㎡ほどの大型建物が存在しており、同時期の他遺跡の建物構成とは様相を異にする点は注目できる。ほぼ同時期の寛文4年(1664)豊田郡木之郷村の農民構成(香川県史3近世I 1989)を参考にすると、最有力層の居宅の広さと名子・下人軒数が概ね一致する。17世紀後半～18世紀前半段階では持高の大きい有力農民の宅地であった可能性が高い。これが久留島氏屋敷地の前身であるかどうかは別の検証が必要であろうが、このような18世紀以後の宅地の規模や分布は江戸後期の農民階層構造を理解する上では、不可欠な検討作業である。

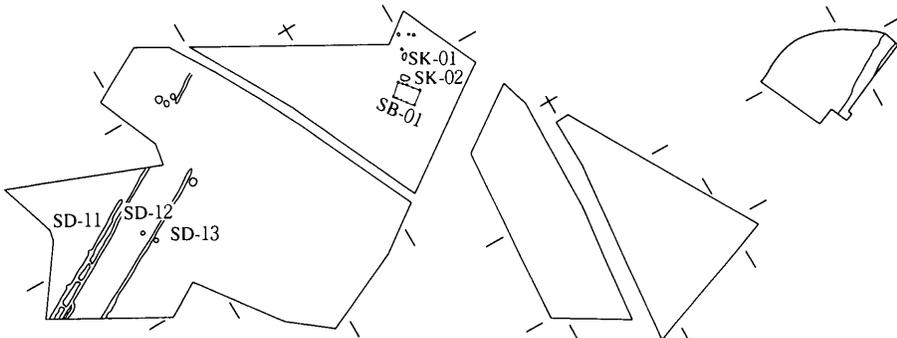
なお、今回出土した陶磁器類は周辺諸遺跡で出土する陶磁器の種類とさほど変わるところはみられない。調査地が絵図から推定される使用人階層の居宅地であった可能性と関わるものと考えられるが、一方で今回は陶磁器の産地区分や組成の面での比較は十分にできていないことから、今後例えば他地域産陶磁器と在産陶磁器の保有率の差などの検証作業を踏まえながら、農民層の経済的背景を考察する必要もあろう。



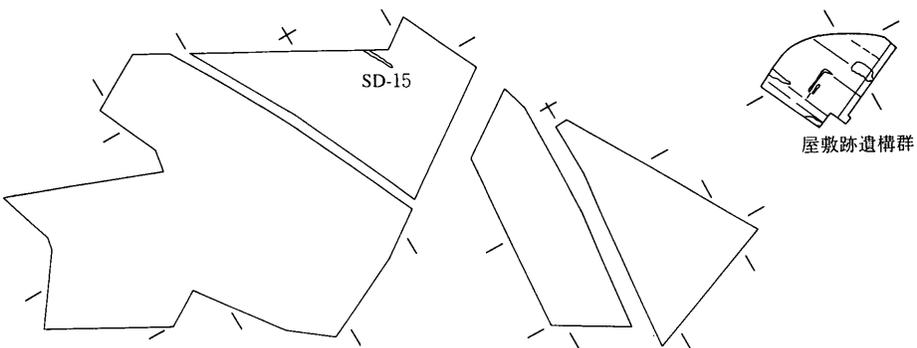
弥生時代（前期～後期）



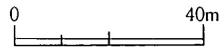
古墳時代末～奈良時代



平安時代～中世



中世～近代



第125図 三条黒島遺跡遺構変遷図

三条黒島遺跡出土遺物觀察表

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
73	201		弥生 壺	I II区 SD01 III層	口縁部1/2 口径23.0cm	外：ナデ。頸部に断面 三角形凸帯 内：ナデ=表面剥落	赤褐	3mm以下の白 色砂粒を多量 に含む	
73	202		弥生 壺	I II区 SD01 III層	底部1/2 底径6.9cm	外：表面剥落調整不 明 内：表面剥落調整不 明	にぶい 黄橙	5mm以下の白 色砂粒を多量 に含む	
73	203		弥生 壺	I II区 SD01 III層	頸部細片	外：刻目凸帯O字 内：ナデ	にぶい 黄橙	4mm以下の砂 粒を多量含む	
73	204		弥生 壺	I II区 SD01 III層	底部完存 底径9.3cm	外：ナデ 内：ナデ=表面剥落 著しい	明褐	3mm以下の白 色砂粒を多量 含む	
73	205		弥生 壺	I II区 SD01 III層	底部完存 底径9.0cm	外：表面剥落調整不 明 内：ナデ 指頭痕	浅黄	5mm以下の白 色黒色砂粒を 多量含む	
73	206		弥生 壺	I II区 SD01 III層	肩部細片	外：ナデ。細沈線4条 内：ナデ	にぶい 赤褐	3mm以下の白 色砂粒を含む	
73	207		弥生 壺	I II区 SD01 III層	肩部細片	外：ナデ。へら描木葉 文 内：ナデ	灰黄褐	2mm以下の砂 粒を少量含む	
73	208		弥生 甕	I II区 SD01 III層	底部1/6 底径6.2cm	外：表面剥落 内：表面剥落	にぶい 赤褐	2mm以下の白 色砂粒を少量 含む	
78	209		弥生 甕	I II区 SD01 II層	体部完存 口径15.6cm	外：表面剥落 頸部 くびれ部分に一 部刷毛目 内：表面剥落 へら 削り	茶褐色	3mm以下の黒 白赤色砂粒を 含む	
78	210		弥生 甕	I II区 SD01 II層	底部	外：タタキ 内：表面剥落調整不 明	茶褐色	3mm以下の黒 白赤色砂粒を 含む	209と同一 個体か
78	211		弥生 鉢	I II区 SD01 II層	体部1/3 口径23.0cm	外：表面剥落、一部 刷毛目残 内：指押さえ後ナデ	にぶい 黄	5mm以下の白 色砂粒を少量 含む	
78	212		弥生 壺	I II区 SD01 II層	底部完存 底径5.1cm	外：ナデ 内：ナデ	明褐	4mm以下の白 色砂粒を多量 含む	
78	213		須恵器 高杯	I II区 SD01 I層	脚部小片 脚径10.0cm	外：回転ナデ 内：ナデ	淡灰	1mm以下の 砂粒を少量含 む	
78	214		弥生 甕	I II区 SD01 I層	底部1/6 底径6.4cm	外：表面剥落調整不 明 内：表面剥落調整不 明	浅黄	4mm以下の白 色砂粒を多量 含む	
79	215	31	弥生 ミニチュ ア壺	I II区 SD04	ほぼ完存 全体2/3 口径6.1cm 器高9.0cm 底径4.8cm	外：指押さえ後ナデ 内：指押さえ後ナデ	淡橙～ 黒灰	5mm以下の砂 粒を多量含む	黒斑
79	216		弥生 不明	I II区 SD04	底部完存 底径8.3cm	外：表面剥落調整不 明 内：表面剥落調整不 明	にぶい 橙	5.5mm以下の 砂粒を多量含 む	
79	217		弥生 不明	I II区 SD04	底部1/6 底径5.0cm	外：表面剥落調整不 明 内：表面剥落調整不 明	にぶい 黄橙	3mm以下の小 石を多量含む	
79	218		弥生 不明	I II区 SD04	底部1/4 底径4.8cm	外：表面剥落調整不 明 内：ナデ	赤褐	4mm以下の砂 粒を多量含む	

第17表 三条黒島遺跡出土遺物観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
79	219		弥生 甕	I II区 SD04	口縁部細片	外：表面剥落調整不明 内：表面剥落 一部 へら磨き	橙	3mm以下の砂 粒を多量含む	
79	220		石鏃	I II区 SD04	折損 残存長2.5cm 幅2.5cm 厚0.3cm	薄い剥片の一方に基 部加工を施す	灰白	サヌカイト 石理顕著	未製品
79	221	31	石庖丁	I II区 SD04	完形 長4.7cm 幅14.3cm 厚0.9cm	打製品 背部は敲打による刃 潰し 両端に抉り	灰	サヌカイト 石理顕著	表裏面磨減 刃部再加工
82	222	31	弥生 壺	I II区 SD09 III層	口縁部、体部 完存 体部3/5 口径14.5cm 残高18.4cm	外：口縁部、頸部ナ デ 体部刷毛目 内：体部上半指押さ え、下半へら削 り	淡黄褐色(内面 黒色 断面灰 黒色)	2mm以下の砂 粒含む	黒斑
82	223		須恵器 杯蓋	I II区 SD10 II層	細片 口径15.0cm 器高3.7cm 底径8.1cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
82	224	31	須恵器 杯蓋	I II区 SD10 II層	ほぼ完存 口径12.2cm 器高4.5cm 底径5.5cm	外：天井部回転へら 切り未調整 内：回転ナデ	緑灰	3mm以下の砂 粒を含む	
93	225		楔形石 器	I II区 3A層	完形 長5.8cm 幅5.7cm 厚1.7cm	上縁：階段状剥離 周縁：敲打後横方向 の条痕	灰	サヌカイト 石理顕著	石核転用
93	226		スクレー パー	I II区 3A層	折損 残存長7.3cm 残存幅3.8cm 厚1.1cm	上縁：刃潰し 下縁：刃部調整	灰白	サヌカイト 白色斑点顕著	接合資料
84	227	32	須恵器 こね鉢	I II区 SK01	口縁部1/12	外：回転ナデ 内：ナデ	灰白	2mm以下の砂 粒を含む	東播系
84	228	32	須恵器 こね鉢	I II区 SK01	底部1/4 底径11.3cm	外：ナデ,砂目 内：ナデ	灰白	2mm以下の砂 粒を含む	東播系
84	229	32	土師器 杯	I II区 SK01	口縁部1/12 口径10.8cm 器高3.0cm 底径4.8cm	外：ナデ 内：ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
84	230	32	土師器 土釜	I II区 SK01	口縁部1/8 口径25.0cm	外：体部刷毛目, 底 面格子タタキ 内：刷毛目	外：黒 褐色 内：灰 白	3mm以下の砂 粒を含む	
84	231	32	土師器 土釜脚	I II区 SK01	脚部片1/3	外：ナデ 内：ナデ	灰黄	2mm以下の砂 粒を含む	
89	232		須恵器 杯	IV区 SD14	高台部1/12 底径9.4cm	外：回転ナデ, 底面 未調整 内：回転ナデ	暗灰	1mm以下の砂 粒を含む	
89	233	33	須恵器 壺	IV区 SD14	底部片1/6 底径10.9cm	外：格子タタキ後ナ デ 内：回転ナデ	外：暗 赤褐 内：橙	2mm以下の砂 粒を含む	十瓶山系
89	234	33	須恵器 壺	IV区 SD14	口縁部片 口径26.0cm	外：口縁回転ナデ, 肩部格子タタキ 内：回転ナデ	胎：赤 褐 外：灰 褐	微細砂粒を含 む	図上復元 十瓶山系
89	235		須恵器 甕	IV区 SD14	体部片	外：格子タタキ 内：あて具痕ナデ消 し	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
89	236	33	須恵器 甕	IV区 SD14	体部1/12	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を少量含む	図上復元

第18表 三条黒島遺跡出土遺物観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
89	237	33	須恵器 甕	IV区 SD14	体部片	外：格子タタキ 内：あて具痕ナデ消 し	灰	1.5mm以下の 砂粒を少量含 む	
89	238		須恵器 甕	IV区 SD14	体部片	外：格子タタキ 内：あて具痕ナデ消 し	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
89	239		須恵器 甕	IV区 SD14	体部片	外：格子タタキ後カ キメ 内：同心円あて具痕	外：灰 白 内：灰	2mm以下の砂 粒を含む	
90	240		須恵器 杯蓋	I II区 3A層	つまみ部完存	外：ナデ 内：ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を少量含む	
90	241		須恵器 杯蓋	I II区 3A層	口縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	242		須恵器 杯蓋	I II区 3A層	口縁部1/10 口径15.8cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を含む	
90	243		須恵器 杯蓋	I II区 3A層	口縁部1/12 口径15.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	微細砂粒を含 む	
90	244		須恵器 杯蓋	I II区 3A層	口縁部1/16 口径15.0cm	外：回転ナデ、口縁 端面沈線 内：回転ナデ	灰	微細砂粒を含 む	
90	245		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部1/12 底径11.0cm	外：回転ナデ、貼付 高台 内：回転ナデ、ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	246		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部1/8 底径10.2cm	外：回転ナデ、貼付 高台 内：回転ナデ、ナデ	灰	3mm以下の砂 粒を含む	
90	247		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部1/6 底径10.2cm	外：回転ナデ、貼付 高台 内：回転ナデ、ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	248		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部1/8 底径10.0cm	外：回転ナデ、貼付 高台 内：回転ナデ、ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を含む	
90	249		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部1/12 底径13.1cm	外：回転ナデ、削出 高台 内：回転ナデ、ナデ	胎：灰 赤、暗灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	250		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部1/12 底径10.2cm	外：回転ナデ、削出 高台 内：回転ナデ、ナデ	青灰	1mm以下の砂 粒を少量含む	
90	251		須恵器 杯	I II区 3A層	口縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	252		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部細片	外：回転ナデ、短小 高台 内：回転ナデ、ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	253		須恵器 杯	I II区 3A層	高台部1/12 底径10.6cm	外：回転ナデ、削出 高台 内：回転ナデ、ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	254		須恵器 杯	I II区 3A層	口縁部細片	外：回転ナデ、浅沈 線 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	255		須恵器 壺	I II区 3A層	口縁部1/6 口径21.2cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
90	256		須恵器 壺	I II区 3A層	口縁部細片	外：回転ナデ 内：回転板ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
90	257		土師器 杯	I II区 3A層	口縁部1/7	外：ナデ、貼付高台 内：ナデ	灰橙	3mm以下の砂 粒を含む	吉備系 内面黒色付 着物
90	258		須恵器 杯	I II区 3A層	底径12.0cm	外：ナデ 内：ナデ	外：浅 黄橙 内：に ぶい橙	1mm以下の砂 粒を微量含む	焼成不良
90	259		陶器 杯	I II区 3A層	高台部3/4 底径6.5cm	外：回転ナデ・ヘラ 削り 内：回転ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を含む	洛西産 無釉陶器

第19表 三条黒島遺跡出土遺物観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
90	260		磁器 碗	I II区 3A層 (混在)	高台部1/12 底径5.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：オリ ブ灰 呉：暗 青灰	微細粒を含む	高台施釉 貫入 備前系
90	261		磁器 碗	I II区 3A層 (混在)	高台部1/4 底径3.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系
90	262		磁器 碗	I II区 3A層 (混在)	高台部1/3 底径4.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：薄 青	精良	肥前系
90	263		磁器 碗	I II区 3A層 (混在)	高台部ほぼ完 存 底径3.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系
90	264		磁器 碗	I II区 3A層 (混在)	口縁部1/4 口径11.1cm 底径4.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉、 砂目積	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	高台施釉 蛇ノ目釉剥 ぎ
90	265		陶器 碗	I II区 3A層 (混在)	高台部1/2 底径5.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡 黄釉：透 明呉：緑	精良	瀬戸産
90	266		陶器 碗	I II区 3A層 (混在)	高台部1/2 底径4.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：蛇ノ目釉剥ぎ	胎：灰 白釉：灰 オリブ	微細粒を含む	釉：表面剥 落
90	267		磁器 皿	I II区 3A層 (混在)	口縁部細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青 灰	精良	肥前系
90	268		陶器 刷毛目 碗	I II区 3A層 (混在)	高台部1/5 底径7.2cm	外：回転ナデ後施釉、 回転ナデ 内：回転ナデ後施釉	胎：褐 灰釉：白 濁オリ ブ褐	精良	唐津系 胎土目積
90	269		陶器 播鉢	I II区 3A層 (混在)	口縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ後卸目	外：に ぶい橙 内：灰 褐	1.5mm以下の 砂粒を含む	備前系 外面沈線
90	270		陶器 溝縁皿	I II区 3A層 (混在)	口縁部1/10 口径12.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：褐 灰釉：白	1mm以下の砂 粒を少量含む	唐津系
90	271		陶器 溝縁皿	I II区 3A層 (混在)	口縁部1/12 口径12.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：オリ ブ灰	精良	唐津系
91	272		土師器 坏蓋	I II区 3B層	つまみ部完存	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄	2mm以下の砂 粒を含む	
91	273		須恵器 坏蓋	I II区F-2 3B層	つまみ部完存	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	微細砂粒を含 む	
91	274		須恵器 坏蓋	I II区F-2 3B層	口縁部細片	外：ナデ 内：ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	

第20表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (4)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
91	275		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	□縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を少量含む	
91	276		須恵器 杯	I II区 3B層	□縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	白色系胎土 のスリップ
91	277		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	□縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を含む	
91	278		須恵器 杯蓋	I II区F-2 3B層	□縁部細片 □径11.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 自然釉： 灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
91	279		須恵器 杯蓋	I II区 3B層	□縁部1/12 □径14.8cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1.5mm以下の 砂粒を少量含 む	
91	280		須恵器 杯蓋	I II区 3B層	□縁部細片 □径15.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
91	281		須恵器 杯蓋	I II区F-2 3B層	□縁部細片 □径18.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
91	282		須恵器 杯蓋	I II区 3B層	□縁部細片 □径20.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
91	283		須恵器 杯蓋	I II区F-2 3B層	□縁部1/16 □径20.2cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
91	284		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	□縁部1/12 □径13.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	微細砂粒を含 む	
91	285		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	□縁部細片 □径15.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
91	286		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	□縁部1/8 □径15.9cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
91	287		須恵器 杯	I II区 3B層	高台部細片 底径10.0cm	外：回転ナデ、貼付 高台 内：回転ナデ	外：青 灰 内：灰 白	2mm以下の砂 粒を含む	
91	288		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	高台部1/4 底径10.0cm	外：回転ナデ、貼付 高台 内：回転ナデ	灰	微細砂粒を含 む	焼成不良
91	289		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	高台部1/8 底径12.4cm	外：回転ナデ、貼付 高台 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
91	290		須恵器 杯	I II区F-2 3B層	高台部1/8 底径12.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	微細砂粒を含 む	
91	291		須恵器 杯	I II区 3B層	高台部1/8 底径12.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	焼成不良
91	292		須恵器 杯	I II区 3B層	高台部細片 底径12.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	青灰	1mm以下の砂 粒を含む	
91	293		須恵器 壺	I II区F-2 3B層	頸部1/6	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
91	294		須恵器 壺	I II区F-2 3B層	□縁部細片 □径14.4cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を含む	
91	295		須恵器 壺	I II区F-2 3B層	底部1/8 底径11.8cm	外：回転ヘラ削り、 底面不整方向ナ デ 内：回転ナデ	灰	4mm以下の砂 粒を少量含む	
91	296		須恵器 壺	I II区F-2 3B層	底部1/8 底径11.8cm	外：回転ヘラ削り、 底面不整方向ナ デ 内：回転ナデ	灰	4mm以下の砂 粒を少量含む	295と同一 個体か
91	297		縄文 浅鉢	I II区 I-2 水路際 3B 層 (混在)	□縁部細片	外：ナデ 内：ナデ	外：赤 褐 内：黒	3mm以下の砂 粒を含む	
91	298		土師器 小皿	Ⅲ区D-5 3B層下面	完形 □径8.1cm 器高1.6cm 底径5.6cm	外：回転ナデ、ヘラ切 り 内：回転ナデ	浅黄橙	微細粒を含む	

第21表 三条黒島遺跡出土遺物観察表(5)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
91	299		土師器 皿	Ⅲ区D-5 3B層下面	□縁部1/7 □径11.9cm 器高2.4cm 底径7.8cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	浅黄橙	1mm以下の砂 粒を含む	
91	300		土師器 杯	I II区 3B層	□縁部1/12 □径19.0cm	外：横ナデ 内：横ナデ	橙	1mm以下の砂 粒を含む	
91	301		石鍬	Ⅲ区D-5 3B層下面	残存長 2.5cm 残存幅 5.7c m 残存厚 0.6 cm	再調整剥片 表面磨滅	灰	サヌカイト 石理顕著	下縁部は調 査時の欠損
92	302		須恵器 坏蓋	I II区H-1 3C層	つまみ部完存	外：回転ナデ, ナデ 内：回転ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
92	303		須恵器 坏蓋	I II区H-1 3C層	つまみ部完存	外：回転ナデ, ナデ 内：回転ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
92	304		須恵器 坏蓋	I II区H-1 3C層	細片 □径16.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	微細砂粒を含 む	
92	305		須恵器 坏蓋	I II区H-1 3C層	□縁部1/12 □径18.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
92	306		須恵器 坏蓋	I II区H-1 3C層	□縁部1/12 □径14.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
92	307		須恵器 坏蓋	I II区H-1 3C層	小破片	外：表面剥落調整不 明 内：表面剥落調整不 明	灰白	2mm以下の砂 粒を少量含む	焼成不良
92	308		須恵器 杯	I II区H-1 3C層	□縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	微細砂粒を含 む	
92	309		須恵器 壺	I II区H-1 3C層	高台部1/5 底径11.2cm	外：高台付近回転ナ デ, 底面未調整 内：横ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	
92	310		須恵器 杯	I II区H-1 3C層	底部1/3 底径6.0cm	外：表面剥落調整不 明 内：表面剥落調整不 明	灰白	1mm以下の砂 粒を少量含む	焼成不良
92	311		須恵器 高杯	I II区H-1 3C層	脚部片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	胎：灰 白 外：灰	2mm以下の砂 粒を含む	焼成不良
92	312		須恵器 高杯	I II区H-1 3C層	坏, 脚部つなぎ 目ほぼ完存	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	2mm以下の砂 粒を含む	焼成不良
94	313		陶器 碗	I II区 SK05	体部1/7	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 白 呉：青	2mm以下の砂 粒を少量含む	260と同一 個体 肥前系
94	314		陶器 碗	I II区 SK05	□縁部1/12 □径10.9cm 器高3.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：黄 灰	微細砂粒を含 む	肥前系
94	315		陶器 碗	I II区 SK05	高台完存 底径4.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：淡 褐 釉：緑	微細砂粒を含 む	肥前系
94	316		陶器 擂鉢	I II区 SK05	□縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	赤褐	1mm以下の砂 粒を含む	備前系 重ね焼痕
94	317		土師器 土釜	I II区 SK05	□縁部1/7 □径25.4cm	外：刷毛目, 指押え後 ナデ 内：刷毛目後ナデ	浅黄橙	2mm以下の砂 粒を少量含む	
97	318		瓦質 羽釜	I II区 SD15	□縁部1/6 □径23.8cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰・灰 白	2mm以下の砂 粒を含む	外面沈線
97	319		磁器 碗	I II区 SD15	高台部1/6 底径5.3cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：黒 褐	精良	鉄釉 ハマ熔着痕 肥前系
97	320		磁器 香炉	I II区 SD15	高台ほぼ完存 底径4.0cm	外：回転ナデ, 回転ナ デ後施釉 内：砂目積み	胎：灰 白 釉：明 緑灰	精良	青磁 有三足 肥前系

第22表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (6)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
97	321		磁器 碗	I II区 SD15	高台径1/6 口径9.2cm 器高3.9cm 底径3.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 呉 暗黒 灰	精良	肥前系
97	322		磁器 碗	I II区 SD15	口縁部1/2 口径9.1cm 器高4.25cm 底径2.5cm	外：回転ナデ後施釉剥 離 内：回転ナデ後施釉剥 離	灰白	精良	色絵剥離 肥前系
97	323		磁器 碗	I II区 SD15	高台部1/4 底径2.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：赤	精良	色絵丸文 肥前系
97	324		磁器 紅猪口 菊花形	I II区 SD15	完形	外：刷毛目後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明	精良	肥前系
97	325		陶器 灯明皿	I II区 SD15	口縁部1/10 口径12.1cm	外：回転ナデ、回転ナ デ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明	精良	信楽系
97	326		陶器 碗	I II区 SD15	口縁部1/8 口径9.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡 黄 釉：透 明 呉：オ リーブ 灰	精良	京焼系 貫入
97	327		陶器 灯明皿	I II区 SD15	口縁部1/4 口径10.8cm 器高2.7cm 底径4.1cm	外：へら削り後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：緑 灰	精良	信楽系 ハマ熔着痕
97	328		陶器 碗	I II区 SD15	高台部1/2	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青	精良	瀬戸産 五弁花文
97	329		陶器 碗	I II区 SD15	細片	外：回転ナデ後施釉、 回転へら削り 内：回転ナデ後施釉	胎：に ぶい黄 橙 釉：褐 灰、白	精良	
97	330		陶器 碗	I II区 SD15	高台部1/2 底径3.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡 黄 釉：透 明	精良	
97	331		陶器 碗	I II区 SD15	高台部完存 底径4.6cm	外：横ナデ 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 オリーブ	微細粒を含む	
97	332		陶器 蓋	I II区 SD15	口縁部1/4 口径5.1cm 底径1.9cm	外：回転ナデ後施釉、 回転ナデ、へら切 り 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：浅 黄	精良	
97	333		陶器 片口鉢	I II区 SD15	口縁部1/13 口径14.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：浅 黄	精良	瀬戸産
97	334		陶器 灯明皿	I II区 SD15	口縁部細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 黄 釉：灰 オリーブ	微細粒を含む	信楽系

第23表 三条黒島遺跡出土遺物観察表(7)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
97	335		陶器 徳利	I II区 SD15	高台部3/8 底径6.6cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	胎：に ぶい赤 外：灰 白内：オリ ブ黒	1mm以下の砂 粒を含む	
97	336		磁器 鉢	I II区 SD15	口縁部細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系 青磁 外面貫入
97	337		陶器 鉢	I II区 SD15	高台部1/6 底径10.4cm	外：回転ナデ,回転ヘ ラ切り 内：回転ナデ後施釉	胎：赤 灰 釉：白	精良	
97	338		陶器 鉢	I II区 SD15	高台部3/8 底径8.7cm	外：へら削り 内：回転ナデ後施釉	胎：に ぶい褐 釉：灰 オリブ	1mm以下の砂 粒を含む	ハマ熔着痕
97	339		陶器 鉢	I II区 SD15	高台部1/8 底径13.0cm	外：回転ナデ後施釉, へら削り 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：茶 褐	2mm以下の砂 粒を含む	ハマ熔着痕
97	340		陶器 鉢	I II区 SD15	口縁部1/12 口径23.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 内：茶 褐 外：灰 白	微細粒を含む	
97	341		陶器 掃鉢	I II区 SD15	口縁部細片	外：回転ナデ,削り後 ナデ 内：回転ナデ,卸し目	赤灰	2mm以下の砂 粒を含む	堺産
97	342		陶器 掃鉢	I II区 SD15	口縁部1/8 口径34.2cm	外：回転ナデ,へら削 り後ナデ 内：回転ナデ,卸し目	にぶい 赤褐,赤 褐	4mm以下の砂 粒を含む	堺産 重ね焼き痕
98	343		陶器 甕	I II区 SD15	口縁部1/6 口径36.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：赤 褐 釉：暗 赤灰	2mm以下の砂 粒を含む	
98	344		瓦質 羽釜	I II区 SD15	口縁部1/10 口径22.3cm	外：横ナデ 内：板ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を含む	沈線
98	345		瓦質 羽釜	I II区 SD15	体部1/12	外：ナデ,板ナデ 内：板ナデ	外：灰 内：灰 白	1mm以下の砂 粒を含む	凸線 煤付着
98	346		瓦質 土釜	I II区 SD15	口縁部1/8 口径20.1cm	外：横ナデ,外型粹痕 後ナデ 内：横ナデ,回転横ナ デ	胎：灰 白 内 外： 黒	1mm以下の砂 粒を含む	把手
98	347		瓦質 蓋	I II区 SD15	口縁部3/8 口径7.4cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	黒褐	1mm以下の砂 粒を含む	外型粹痕
98	348		土師質 蓋	I II区 SD15	口縁部1/4 口径7.6cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	褐	2mm以下の砂 粒を含む	外型粹痕
98	349		土師器 灯明皿	I II区 SD15	完形	外：回転へら削り 内：回転ナデ後仕上 げナデ	赤橙	1mm以下の砂 粒を含む	口縁部煤付 着
98	350		瓦質 茶釜	I II区 SD15	口縁部1/12 口径11.3cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	胎：灰 白 外：黒	1mm以下の砂 粒を含む	
98	351		土師質 羽釜	I II区 SD15	体部1/10	外：指押え後横ナデ 内：指押え後横ナデ	黄灰	2mm以下の砂 粒を少量含む	接合痕 煤付着
98	352		土師質 羽釜	I II区 SD15	細片	外：ナデ,回転ナデ 内：板ナデ	胎：黄 灰 内 外： 黒褐	1mm以下の砂 粒を含む	

第24表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (8)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
98	353		スクレーパー	I II区 SD15	折損 長5.4cm 幅5.5cm 厚1.2cm	古い剥離面の側縁を調整	灰白	サヌカイト 石理顕著	
99	354	34	土師器 甕	I II区 SD15	1/2 幅76.4cm 奥行40.0cm 高26.8cm	外：ナデ 内：へら削り,刷毛目	外：暗 灰 内：灰 黄,にぶ い褐	微細粒を含む	内外面に煤 付着 灰溜側壁ブ ロック付属
100	355	34	木器 漆椀	I II区 SD15	細片	外：赤漆塗り 内：赤漆塗り	外：赤 内：赤		高台痕跡
101	356		弥生 蓋	I II区G-2 2層	天井部完存	外：ナデ 側縁穿孔	にぶ い 橙	2mm以下の砂 粒を含む	穿孔は1個1 対
101	357		須恵器 杯	I II区F-2 2.3層	口縁部1/12 口径15.2cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	微細粒を含む	
101	358		須恵器 壺	I II区G-3 3層	細片	外：回転ナデ 沈線間 斜線文 内：回転ナデ	灰	2mm以下の砂 粒を含む	
101	359		須恵器 こね鉢	I II区F-3 2.3層	口縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1mm以下の砂 粒を含む	東播系
101	360		須恵器 擂鉢	III区 2層	底部1/8 底径14.0cm	外：へら削り 内：回転ナデ後卸目	灰	1mm以下の砂 粒を含む	備前系
101	361		磁器 碗	I II区西 側 2層	口縁部1/8 口径10.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 白 呉：青	精良	肥前系
101	362		磁器 碗	I II区西 側 2層	高台部1/2 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：蛇ノ目釉剥ぎ	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青灰	精良	肥前系
101	363		磁器 碗	I区 表採	高台部1/2 底径3.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：白 呉：黒	精良	肥前系
101	364		磁器 碗	I II区F-3 2.3層	高台部完存 底径3.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青灰	精良	肥前系 高台部施釉
101	365		磁器 碗	I II区西 側 2層	高台部ほぼ完 存	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青	精良	肥前系 広東型
101	366		磁器 皿	表採	高台部1/3	外：回転ナデ後蛇ノ 目釉剥 内：回転ナデ後蛇ノ 目釉剥	胎：灰 白 釉：透 明	精良	見込み部蛇 ノ目釉剥ぎ 砂目 高台部無釉
101	367		陶器 鉢	I II区 1.2層	高台部1/4 底径5.7cm	外：へら削り,回転ナ デ 内：見込み部蛇ノ目 釉剥ぎ	胎：灰 白 釉：緑 茶褐	精良	見込み部蛇 ノ目釉剥ぎ
101	368		陶器 擂鉢	I II区西 側 2層	底部1/8 底径15.9cm	外：回転ナデ,へら切 り 内：ナデ,卸目	にぶ い 赤褐	3mm以下の砂 粒を少量含む	備前系
101	369		土師器 鉢	I II区 上部礫層	口縁部1/8 口径22.6cm	外：横ナデ,指押え後 刷毛目 内：刷毛目	浅黄橙	3mm以下の砂 粒を含む	
101	370		土師器 土釜	III区 2層	口縁部細片	外：横ナデ 内：横ナデ	浅黄	1mm以下の砂 粒を含む	

第25表 三条黒島遺跡出土遺物観察表(9)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
101	371		土師器 鉢	I II 区 西 側 2層	口縁部1/6 口径15.5cm	外：横ナデ 内：横ナデ、指押え、ナ デ	灰白	1mm以下の砂 粒を含む	
101	372		砥石	I II 区 西 側 2層	欠損 厚3.4cm	表裏および側面に砥 面	灰青色	粗質安山岩	
101	373		砥石	I II 区 西 側 2層	完形	側面および表面に砥 面	灰緑色	砂岩	
110	374	35	磁器 瓶	IV区 SD17	体部1/10	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青灰	精良	肥前系 玉壺春形 草花文
110	375		磁器 瓶	IV区 SX01	体部1/10	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 青灰	精良	肥前系 竹梅文
110	376	35	磁器 小瓶	IV区 SX02	体部細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 白 釉：透 明 色 絵： 暗赤褐	精良	肥前系 赤絵 蛸唐草文
110	377		磁器 猪口	IV区 SX07	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青灰	精良	肥前系 口鏝 二重網目文
110	378	35	磁器 香炉	IV区 SD17	胴体部1/8 底径13.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明	精良	白磁 足部龍頭文 陰刻
110	379		陶器 碗	IV区 SX02	高台部1/2 底径4.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：明 赤褐 釉：灰 白	精良	
110	380	36	陶器 碗	IV区 SX02	高台部1/5 底径5.0cm	外：回転ナデ後施釉 砂目痕 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明	精良	
110	381	36	陶器 鉢	IV区 SD16	口縁部1/12 口径14.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：濃 緑	精良	玉緑口縁
110	382	36	土師器 播鉢	IV区 SD16	口縁部1/12 口径30.2cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ後即し 目	にぶい 橙	0.5mm以下の 砂粒を含む	備前系
110	383	36	陶器 播鉢	IV区 SD16	口縁部1/12	外：回転ナデ 内：回転ナデ後即し 目	明オリ フ 灰	1mm以下の砂 粒を含む	丹波系
110	384	35	陶器 茶入小 壺	IV区 SX01	底部完存 口径5.5cm 器高7.8cm 底径6.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：赤 褐 釉：淡 赤褐	2mm以下の黒 色砂粒を含む	唐津系
110	385	36	陶器 水差	IV区 SX01	口縁部1/6 口径16.0cm	外：回転ナデ口縁端 面沈線 内：回転ナデ	褐	1mm以下の砂 粒を含む	

第26表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (10)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
110	386	36	陶器 徳利	IV区 SD17	体部細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 白 内：灰 黄 呉：灰 白	微細砂粒を含む	唐津系 刷毛目塗り
110	387	36	土師器 播鉢	IV区 SK09	口縁部1/10 口径33.6cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ後卸し 目	明赤褐	1mm以下の砂 粒を含む	堺産 11本単位の 卸目
110	388	36	土師器 播鉢	IV区 SK09	底部1/6 底径13.3cm	外：へら削り後ナデ 内：回転ナデ後卸目	橙	1mm以下の砂 粒を含む	
110	389	36	土師器 焙烙	IV区 SX03	口縁部細片	外：横ナデ、指押さ え 内：横ナデ、板ナデ	黒褐色	3mm以下の砂 粒を含む	大原、御厩 系
110	390	36	土師器 焙烙	IV区 SX03	口縁部1/10 口径34.3cm	外：板ナデ、指押さ え 内：横ナデ、刷毛目	黒褐	1mm以下の砂 粒を含む	大原、御厩 系
110	391		土師器 火鉢	IV区 SD17	口縁部1/12 口径30.6cm	外：横ナデ 内：横ナデ	灰白	4mm以下の小 石を含む	
110	392	41	土師器 土鍋	IV区 SD17	口縁部1/6 口径19.0cm	外：ナデ 内：指押さえ後ナデ	にぶい 黄橙	1mm以下の砂 粒を含む	
112	393	40	磁器 小皿	IV区 SK10	口縁部1/4 口径10.0cm 器高1.9cm 底径5.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：濃 青	精良	肥前系
112	394		磁器 碗	IV区 SX04	口縁部1/8 口径10.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 白 呉：青	精良	肥前系 二重編目文
112	395		磁器 皿	IV区 SK10	口縁部1/12 口径13.0cm 器高2.5cm 底径3.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	精良	内面貫入
112	396		磁器 中碗	IV区 SX04	口縁部1/8 口径13.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青	精良	肥前系 平形 氷裂文
112	397	35	磁器 四方小 鉢	IV区 SX04	高台完存 底径4.5cm	外：横ナデ後施釉 内：内型施文 横ナデ 後施釉	胎：灰 白 釉：緑 灰	精良	三田王地山 系 見込み部に 「極」文
112	398	40	陶器 蓋	IV区 SX04	口縁部1/10 口径9.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 黄 釉：灰 白 呉：青	細砂を少量含 む	陶胎染付
112	399		磁器 小皿	IV区 SX04	口縁部1/16 口径14.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：濁 緑灰	精良	肥前系 鉄絵
112	400	41	陶器 碗	IV区 SX04	高台部1/4 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：黄 褐 釉：白	1mm以下の 砂粒を少量含 む	
112	401	36	陶器 急須	IV区 SX04	注口部のみ	外：回転ナデ後施釉 内：板ナデ	胎：黄 灰 釉：白、 緑	微細砂粒を含 む	貫入
112	402	36	陶器 こね鉢	IV区 SX04	口縁部片 口径25.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰	1mm以下の 砂粒を少量含 む	肥前系 陶胎染付

第27表 三条黒島遺跡出土遺物観察表(11)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
112	403	41	陶器 行平	IV区 SX04	□縁部1/12 □径16.7cm	外：回転ナデ後刷毛 目後施釉 内：回転ナデ後施釉	内：に ぶい黄 橙 外：褐	精良	外面鉄釉
112	404		陶器 搗鉢	IV区 SX04	細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ後卸目	胎：赤 褐色	1mm以下の砂 粒を含む	
112	405	41	陶器 搗鉢	IV区 SX04	□縁部1/12 □径36.6cm	外：回転ナデ後ヘラ 削り 内：回転ナデ後卸目	胎：茶 黒 外：赤 茶 内：赤	3mm以下の砂 粒を含む	堺産
112	406	35	磁器 碗	IV区 第2包含層	高台径5/8 底径3.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青	精良	肥前系
112	407	35	磁器 中碗	IV区 第2包含層	高台径1/2 底径3.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 青灰	精良	肥前系
112	408		磁器 碗	IV区 第2包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 青灰	精良	肥前系 貫入 笹文
112	409	36	磁器 碗	IV区 第2包含層	□縁部1/8 □径9.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明	精良	貫入
112	410	35	磁器 碗	IV区 第2包含層	高台径5/8 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉 見込み部蛇の目 釉剥ぎ	胎：灰 白 釉：明 緑 灰 呉：青	精良	肥前系
112	411	35	磁器 碗	IV区 第2包含層	高台部3/8 □径8.4cm 器高4.0cm 底径3.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：外、 明緑 内、 透明 呉：青	精良	肥前系 青磁染付 蛇の目凹形 高台
112	412		磁器 碗	IV区 第2包含層	高台部1/6 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：緑、 透明 呉：青	精良	肥前系 青磁染付 蛇の目凹形 高台
112	413	36	磁器 紅猪口	IV区 第2包含層	高台完存 □ 縁部5/8 □径6.4cm 器高2.6cm 底径2.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：明 緑 灰 呉：青 灰	精良	肥前系 平形 笹文
112	414	35	磁器 紅猪口	IV区 第2包含層	□縁部1/12 □径5.8cm 器高2.5cm 底径3.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青 灰	精良	肥前系 笹文

第28表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (12)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
112	415	35	磁器 碗	IV区 第2包含層	高台部1/4 底径3.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：明 緑灰 釉：透 明 呉：青 明緑灰	精良	肥前系 青磁染付
112	416		磁器 紅猪口	IV区 第2包含層	高台部1/4 口径6.3cm 器高3.4cm 底径2.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：明 緑灰 釉：透 明 呉：青 明緑灰	精良	青磁 紅猪口
112	417	36	磁器 紅猪口	IV区 第2包含層	ほぼ完形 口径4.8cm 器高2.0cm 底径2.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青 明	精良	肥前系 無文
113	418		磁器 中皿	IV区 第2包含層	細片 底径13.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青 明	精良	肥前系 貫入
113	419		磁器 中皿	IV区 第2包含層	高台部1/8 底径7.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 紫青	精良	肥前系 貫入
113	420		磁器 五寸皿	IV区 第2包含層	高台部1/6 底径7.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 青灰	精良	肥前系
113	421		磁器 中鉢	IV区 第2包含層	口縁部1/10	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 青	精良	肥前系 呉須：刷毛 目
113	422	35	磁器 香炉	IV区 第2包含層	口縁部1/4 口径9.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	外：明 オリ-フ 灰 内：灰	精良	青磁
113	423	35	磁器 龍形水注	IV区 第2包含層	注口部半切 残存長10.2cm	外：外型施文 内：半分施釉 接合面：施釉	胎：灰 白 釉：青 緑	精良	青磁 型物 釉着技法
113	424		陶器 碗	IV区 第2包含層	高台部1/2 底径4.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡 黄 釉：透 明 呉：暗 青	精良	京焼系
113	425	36	陶器 碗	IV区 第2包含層	口縁部1/8	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 オリ-フ	1.5mm以下の 砂粒を含む	京焼系
113	426	36	陶器 片口鉢	IV区 第2包含層	高台部5/8 底径6.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：黄 灰褐 釉：緑 灰	精良	瀬戸産 貫入
113	427	36	陶器 碗	IV区 第2包含層	高台部1/2 底径4.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 呉：緑 灰	微細砂粒を含 む 貫入	

第29表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (13)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
113	428	36	陶器 鉢	IV区 第2包含層	口縁部細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：オ リーフ	精良	玉縁口縁
113	429	36	陶器 大瓶	IV区 第2包含層	高台部5/8 底径8.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：赤 褐 釉：灰 白	精良	
113	430	36	陶器 搗鉢	IV区 第2包含層	口縁部1/7 口径31.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	赤褐	2mm以下の砂 粒を含む	堺産 12本単位の 卸目
116	431		磁器 碗	IV区 SD18	高台部1/2 口径9.1cm 器高3.6cm 底径3.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青	精良	肥前系
116	432		磁器 小皿	IV区 SD18	高台部1/4 口径9.8cm 器高1.5cm 底径3.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	灰白	精良	肥前系
116	433	41	陶器 大鉢	IV区 SD18	口縁部1/10 口径37.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：黄 灰白 釉：透 明	精良	京焼系
116	434	37	陶器 片口鉢	IV区 SD18	1/4 口径19.7cm 器高10.3cm 底径7.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 オリーフ	精良	美濃産
116	435	39	磁器 碗	IV区 SX05	高台部完形 底径4.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：暗 青灰	精良	肥前系 型紙刷
116	436		磁器 碗	IV区 SX05	高台部1/3 底径4.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉 蛇の目釉剥ぎ	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青灰	精良	肥前系
116	437	39	磁器 碗	IV区 SX05	口縁部1/12	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：白 濁 呉：青	精良	肥前系
116	438		磁器 碗	IV区 SX05	口縁部1/5 口径9.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青灰	精良	肥前系
116	439		磁器 碗	IV区 SX05	高台部1/2 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉 見込み部蛇の目 釉剥ぎ	胎：灰 白 釉：透 明	精良	肥前系
116	440	39	磁器 五寸皿	IV区 SX05	細片 口縁部14.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青	精良	肥前系 赤壁賦文
116	441	39	磁器 皿	IV区 SX05	口縁部1/16 口径14.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青	精良	肥前系 赤壁賦文 貫入

第30表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (14)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
116	442	38	磁器 中皿	IV区 SX05	高台部1/7 底径9.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：紫 青	精良	肥前系
116	443		磁器 大皿	IV区 SX05	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系
116	444		磁器 紅猪口	IV区 SX05	高台部1/6 口径6.0cm 器高31.0cm 底径3.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰	精良	肥前系
116	445	40	磁器 德利	IV区 SX05	底径部1/2 底径4.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系
116	446	39	磁器 碗	IV区 SX02	口縁部1/8 口径12.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系 赤壁賦文
116	447		磁器 仏飯器	IV区 SX06	高台部5/8 底径4.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	肥前系
116	448	41	陶器 小皿	IV区 SX06	口縁部1/16 口径12.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：赤 褐釉：白 濁	精良	唐津系
116	449	38	磁器 碗	IV区 SX07	高台部3/8 口径10.8cm 器高5.3cm 底径3.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系 型紙刷
116	450	38	磁器 碗	IV区 SX07	高台部1/6 底径4.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青灰	精良	肥前系
116	451	40	磁器 碗	IV区 SX07	高台部1/5 底径4.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青 灰	精良	肥前系 胎土内部赤 色化 コンニャク 判
116	452	39	磁器 碗	IV区 SX07	口縁部1/13 口径8.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青灰	精良	肥前系
116	453		磁器 小瓶	IV区 SX07	高台部3/8 底径3.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後鉄さ び	胎：灰 白釉：緑 灰	精良	肥前系
116	454		陶器 香炉	IV区 SX07	口縁部1/16 口径19.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：緑	精良	肥前系

第31表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (15)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
116	455		磁器 水差し	IV区 SX07	注口部のみ	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：緑	精良	青磁 貫入
116	456	41	陶器 碗	IV区 SX07	高台部1/2 底径4.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 釉：暗 緑白	精良	唐津系 貫入
116	457	41	土師質 土釜	IV区 SX07	細片	外：横ナデ指押さえ 後横ナデ 内：ハケ	淡黄	2mm以下の砂 粒を含む	
117	458	38	磁器 碗	IV区 SX08	口縁部1/3 口径10.6cm 器高5.9cm 底径3.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系
117	459	38	磁器 碗	IV区 SX08	高台部1/2 底径5.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉 暗青 灰	精良	肥前系 広東型
117	460	39	磁器 碗	IV区 SX08	高台部1/3 口径16.0cm 器高3.9cm 底径10.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉 明 青灰	精良	肥前系 口紅 赤壁賦文
117	461		磁器 碗	IV区 SX08	口縁部1/5 口径10.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉 明 青灰	精良	肥前系 口紅 赤壁賦文
117	462		磁器 碗	IV区 SX08	口縁部1/5 口径10.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉 明 青灰	精良	肥前系 口紅 赤壁賦文
117	463		磁器 碗	IV区 SX08	口縁部1/6 口径10.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉 明 青灰	精良	肥前系 口紅 赤壁賦文
117	464	39	磁器 碗	IV区 SX08	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉 暗 青灰	精良	肥前系 赤壁賦文 見込銘文
117	465	38	磁器 碗	IV区 SX08	口縁部1/10 口径11.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：灰 白呉 青	精良	肥前系
117	466	37	陶器 碗	IV区 SX08	高台ほぼ完存 底径4.3cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：赤 褐釉 白呉 暗 青灰	微細粒を含む 貫入	

第32表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (16)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・分量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
117	467	40	磁器 碗	IV区 SX08	高台部1/12 底径7.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系 広東型
117	468	40	磁器 碗	IV区 SX08	高台部1/3 底径2.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系 広東型
117	469		磁器 碗	IV区 SX08	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系 見込銘文 「〇明成〇」
117	470	38	磁器 皿	IV区 SX08	高台部1/6 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系
117	471	40	磁器 碗	IV区 SX08	高台部1/2 底径4.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系 二重網目文
117	472	40	磁器 碗	IV区 SX08	高台部3/8 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 灰	精良	肥前系 砂目 二重網目文
117	473	40	磁器 碗	IV区 SX08	高台部7/8 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青	精良	肥前系 二重網目文
117	474	38	磁器 中皿	IV区 SX08	高台部1/4 底径9.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明・薄 緑灰 呉：青	精良	肥前系 青磁塗付
117	475	38	磁器 中皿	IV区 SX08	細片 底径8.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系 底部釉剥ぎ
117	476	38	磁器 皿	IV区 SX08	1/12 口径16.0cm 器高3.9cm 底径10.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系
117	477	40	磁器 五寸皿	IV区 SX08	高台部1/6 底径9.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青灰	精良	肥前系 蛇ノ目凹形 高台

第33表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (17)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
117	478	38	磁器 皿	IV区 SX08	高台ほぼ完存	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系 蛇ノ目凹形 高台
117	479	39	磁器 小皿	IV区 SX08	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青	精良	肥前系
118	480	40	磁器 甕	IV区 SX08	口縁部1/8 口径14.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：灰 白呉：青	精良	肥前系
118	481	40	磁器 小瓶	IV区 SX08	高台部1/4 底径3.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系
118	482	40	陶器 碗	IV区 SX08	口縁部1/6 口径11.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：オ リーブ 灰	微細砂粒を含 む	肥前系 陶胎染付 貫入
118	483	37	陶器 碗	IV区 SX08	高台部3/8 底径4.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 釉：透 明呉：青 灰	微細砂粒を含 む	肥前系 陶胎染付 貫入
118	484	37	陶器 碗	IV区 SX08	高台部3/8 底径4.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 釉：透 明	微細砂粒を含 む	肥前系 陶胎染付 貫入
118	485	37	陶器 碗	IV区 SX08	高台完存 底径4.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：黄 褐釉：透 明	精良	貫入
118	486	37	陶器 火入	IV区 SX08	口縁部1/8 口径10.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：板ナデ	胎：灰 白釉：明 オリ ーブ灰 呉：緑	2mm以下の砂 粒を含む	
118	487		陶器 徳利	IV区 SX08	高台部1/8 底径10.2cm	外：回転ナデ後施釉、 刷毛目塗 内：回転ナデ後施釉	胎：明 褐灰 釉：透 明 呉：褐	1mm以下の砂 粒を含む	唐津系
118	488	37	陶器 小瓶	IV区 SX08	底部1/8 底径6.8cm	外：回転ナデ後刷毛 目塗り 内：回転ナデ	胎：灰 白釉：灰 黄褐	精良	唐津系
118	489		土師質 陶燭台	IV区 SX08	基部のみ 基部径3.7cm	外：縦沈線	胎：橙 釉：黒	微細砂粒を含 む	
118	490	41	陶器 台付灯 明皿	IV区 SX08	底部完存 底径6.3cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：黄 灰釉：透 明	2mm以下の砂 粒を少量含む	

第34表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (18)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
118	491	37	陶器 土鍋	IV区 SX08	□縁部3/8 □径18.2cm 器高8.2cm 底径7.0cm	外：回転ナデ後施釉。 回転ナデ 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 褐 釉：白 緑灰	精良	西播系
118	492	37	陶器 水甕	IV区 SX08	□縁部細片	外：回転ナデ後施釉 沈線文 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：淡 黄オリ ーフ	2mm以下の砂 粒を含む	瀬戸産 貫入
118	493	41	陶器 植木鉢	IV区 SX08	□縁部細片 □径26.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：灰 オリフ 内浅	3mm以下の砂 粒を少量含む	瀬戸産
118	494		砥石	IV区 SX08	長さ：13.0cm 幅：6.0cm 厚さ：3.5cm	表裏側面の3面砥面	暗灰	粗質安山岩	
118	495	38	磁器 碗	IV区 SX09	高台部3/8 底径4.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：暗 青	精良	肥前系 内面の五弁 花文はコン ニャク判
118	496	39	磁器 碗	IV区 SX09	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青	精良	肥前系
118	497	40	磁器 小瓶	IV区 SX09	頸部完存	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青 灰	精良	肥前系
118	498	39	磁器 小皿	IV区 SX09	□縁部1/6 □径9.4cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 青灰	精良	肥前系 口紅 赤壁賦文
118	499		陶器 灯明皿	IV区 SX09	底部1/2 底径4.6cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明	精良	信楽系 見込み足付 ハマ溶着痕
118	500	41	陶器 台付灯 明皿	IV区 SX09	底部完存 器高：5.4cm 底径：6.6cm	外：回転ナデ後施釉 ヘラ切り 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 内：オリ ーフ	精良	貫入
120	501	38	磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径3.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白=釉： 透明＝ 呉：明	精良	見込み部蛇 ノ目釉剥ぎ
120	502	40	磁器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：青 灰	精良	肥前系
120	503	40	磁器 碗	IV区 第1包含層	体部1/12 底径4.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白 釉：透 明 呉：明 青灰	精良	肥前系

第35表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (19)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
120	504		磁器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青	精良	肥前系
120	505		磁器 碗	IV区 第1包含層	ほぼ完形 口径8.35cm 器高4.3cm 底径2.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系
120	506		磁器 碗	IV区 第1包含層	体部1/4	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系
120	507	39	磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径4.3cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系
120	508		磁器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系 広東型
120	509		磁器 碗	IV区 第1包含層	口縁部細片 口径9.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青 緑	精良	肥前系
120	510	40	磁器 碗	IV区 第1包含層	口縁部1/12 口径10.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系 二重網目文
120	511	38	磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部3/4 底径3.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：白 濁呉：青	精良	肥前系
120	512	40	磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径5.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青	精良	肥前系 蛇の目釉剥ぎ
120	513	40	磁器 碗	IV区 第1包含層	口縁部1/4 口径11.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 オリ ッ 呉：暗 青	精良	肥前系
120	514		磁器 碗	IV区 第1包含層	口縁部1/10 口径11.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：濃 青	精良	肥前系 型紙刷

第36表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (20)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
120	515		磁器 碗	IV区 第1包含層	□縁部1/6 □径8.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青灰	精良	肥前系 型紙刷
120	516		磁器 紅猪口	IV区 第1包含層	□縁部1/8 □径8.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系 蛇の目釉剥 ぎ
120	517		磁器 碗	IV区 第1包含層	□縁部1/8 □径11.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系
120	518	40	磁器 小皿	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径4.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系 赤壁賦文
120	519	40	磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径4.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青灰	精良	肥前系 赤壁賦文
120	520		磁器 碗	IV区 第1包含層	細片 底径4.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青	精良	肥前系 赤壁賦文
120	521		磁器 碗	IV区 第1包含層	□縁部細片 □径12.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：青 茶	精良	肥前系 赤壁賦文
120	522		磁器 碗	IV区 第1包含層	□縁部1/8 □径11.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系 口紅
120	523		磁器 碗	IV区 第1包含層	□縁部1/5 □径9.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系 口紅
120	524		磁器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系 赤壁賦文
120	525		磁器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系 赤壁賦文
120	526		磁器 碗	IV区 第1包含層	□縁部1/12 □径11.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青	精良	肥前系

第37表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (21)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
121	527		磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/6 底径6.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰 呉：薄 青	精良	肥前系
121	528	39	磁器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系 広東型
121	529		磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/8 底径7.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：薄 青	精良	肥前系 広東型
121	530		磁器 碗	IV区 第1包含層	口縁部1/8 口径11.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青	精良	肥前系
121	531		磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/5 底径5.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青灰	精良	肥前系
121	532		磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径4.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系
121	533		磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/8 底径5.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系
121	534		磁器 中皿	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径4.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	肥前系
121	535		磁器 中皿	IV区 第1包含層	高台部1/8 底径9.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：オ リ ーフ	精良	肥前系
121	536	38	磁器 中皿	IV区 第1包含層	高台部1/5 底径8.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青 灰	精良	肥前系
121	537	40	磁器 中皿	IV区 第1包含層	高台部1/12 底径13.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系

第38表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (22)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
121	538		磁器 小皿	IV区 第1包含層	□縁部1/12 □径9.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青	精良	肥前系
121	539	40	磁器 小皿	IV区 第1包含層	□縁部1/12 □径9.3cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系
121	540	40	磁器 五寸皿	IV区 第1包含層	高台部1/6 □径11.6cm 器高1.6cm 底径7.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：濃 青	精良	肥前系 型紙刷
121	541	40	磁器 小皿	IV区 第1包含層	□縁部1/2 □径10.0cm 器高2.45cm 底径5.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明・茶	精良	肥前系 掛け分け
121	542		磁器 中鉢	IV区 第1包含層	□縁部1/12 □径14.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青	精良	肥前系 玉縁口縁
121	543	38	磁器 中鉢	IV区 第1包含層	□縁部1/8 □径14.0cm 器高4.4cm 底径7.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：外： 暗黒青 内：薄 青	精良	肥前系
121	544		磁器 碗	IV区 第1包含層	□縁部細片 □径12.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：暗 青灰	精良	肥前系
121	545		磁器 酒杯	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径3.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：明 青灰	精良	肥前系
121	546	39	磁器 紅猪口	IV区 第1包含層	高台部3/5 □径7.6cm 器高3.2cm 底径2.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明呉：青	精良	美濃産 酒杯
121	547	40	磁器 紅猪口	IV区 第1包含層	体部1/3	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明色 絵： 赤茶、 明緑	精良	肥前系
121	548		磁器 紅猪口	IV区 第1包含層	1/4 □径7.7cm 器高3.5cm 底径2.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明 薄 青	精良	肥前系

第39表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (23)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
121	549		磁器 紅猪口	IV区 第1包含層	高台部3/8 底径2.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	肥前系
121	550	40	磁器 小瓶	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：灰 白釉：透 明 色絵： 赤茶、 赤緑	精良	肥前系 色絵
121	551	40	磁器 中瓶	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径8.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明 呉：暗 青灰	精良	肥前系
121	552	39	磁器 碗蓋	IV区 第1包含層	つまみ部3/4	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：白 濁 呉：濃 青	精良	肥前系
122	553	40	磁器 碗蓋	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径3.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明 呉：暗 青	精良	肥前系
122	554	40	磁器 段重	IV区 第1包含層	高台部1/6 口径8.0cm 器高3.2cm 底径7.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明 呉：青 灰色 絵： 赤茶、 明緑	精良	肥前系 色絵
122	555	37	磁器 小皿	IV区 第1包含層	3/8 口径9.4cm 器高2.3cm 底径4.9cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	肥前系
122	556	37	磁器 小皿	IV区 第1包含層	1/4 口径10.0cm 器高1.9cm 底径6.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	美濃産 寿文皿
122	557		磁器 小皿	IV区 第1包含層	口縁部2/3 口径10.4cm 器高2.4cm 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明 呉：濃 青	精良	肥前系
122	558	37	磁器 小皿	IV区 第1包含層	高台完存 口径8.7cm 器高2.4cm 底径3.65cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	肥前系
122	559		磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/5 底径4.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	肥前系 蛇の目釉剥 ぎ
122	560		磁器 五寸皿	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径3.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	肥前系 蛇の目釉剥 ぎ

第40表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (24)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・分量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
122	561		磁器 皿	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：青 緑	精良	肥前系
122	562		磁器 香炉	IV区 第1包含層	口縁部1/4 口径13.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉 回転ナデ	胎：灰 白釉：青 灰	精良	肥前系 青磁
122	563		磁器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径4.5cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰	精良	肥前系
122	564		磁器 小皿	IV区 第1包含層	口縁部1/7 口径9.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：白 濁 呉：緑	精良	肥前系
122	565	37	磁器 五寸皿	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径7.3cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：明 緑灰	精良	肥前系 青磁
122	566		陶器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径6.1cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡 黄釉：透 明 呉：濁 緑青	微細粒を含む	瀬戸産 広東碗
122	567		陶器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：黄 灰釉：白 濁	精良	
122	568	37	陶器 碗	IV区 第1包含層	高台部3/4 口径9.4cm 器高4.6cm 底径3.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：灰 オリー フ 呉オリー	精良	京焼系 貫入
122	569	41	陶器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/3 底径3.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉 高台部無釉	胎：灰 白釉：灰 白 鉄釉：黒	精良	鉄釉
122	570	41	陶器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/2 底径4.7cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡 黄釉：浅 黄	微細粒を含む	貫入
122	571		陶器 碗	IV区 第1包含層	細片	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：暗 灰釉：透 明 呉：オ リー フ	精良	肥前系 陶胎染付 貫入
122	572	41	陶器 碗	IV区 第1包含層	体部1/4	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：透 明	精良	
122	573		陶器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径4.2cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：内 灰白、 外赤黒	1mm以下の砂 粒を含む	美濃産 腰錆
122	574		陶器 碗	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径4.3cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 白釉：灰 白	微細粒を含む	

第41表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (25)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
122	575	41	陶器 碗	IV区 第1包含層	細片 口径14.8cm	外：回転ナデヘラ削 り後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：灰 釉：白 裏：青	1mm以下の砂 粒を含む	陶胎染付
122	576		陶器 小皿	IV区 第1包含層	高台部1/10 口径11.9cm 器高3.8cm 底径3.8cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：に ぶい 釉：灰 白	1mm以下の砂 粒を含む	
122	577	41	陶器 皿	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径9.9cm	外：回転ナデヘラ削 り後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡黄 釉：透 明	2mm以下の砂 粒を含む	唐津系 刷毛目塗皿
122	578		陶器 中鉢	IV区 第1包含層	高台部1/4 底径7.6cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：淡 黄 釉：透 明	微細粒を含む	
122	579	41	陶器 中鉢	IV区 第1包含層	高台部完存 底径4.9cm	外：ヘラ削り 内：回転ナデ後施釉	胎：黄 灰 釉：茶 褐	微細粒を含む	
122	580	41	陶器 中瓶	IV区 第1包含層	口縁部完存 口径3.8cm -	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ後施釉	胎：に ぶい 釉：赤 褐 釉：黄 褐	微細粒を含む	
122	581		陶器 蓋	IV区 第1包含層	つまみ部完存	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：淡 黄 釉：黄 褐	精良	
122	582	41	陶器 碗	IV区 第1包含層	口縁部1/12 口径12.0cm	外：回転ナデ後施釉 内：回転ナデ	胎：淡 橙 釉：白 濁	精良	
122	583	41	土師器 焙烙	IV区 第1包含層	口縁部1/12 口径34.0cm	外：外枠後横ナデ 内：板ナデ	外：暗 褐 内：淡 褐	1mm以下の 砂粒を含む	御厩系
123	584	42	鉄器 雁股鉾	IV区 第1包含層	完形 長51.0cm	先端はU字状に分か れる 基部は袋状			先端屈曲
123	585	42	鉄器 (刺突 具)	IV区 第1包含層	完形 長52.0cm	先端から12.0cmまで が刃部			
123	586	42	鉄器 釘	IV区 第1包含層	頭部欠 長8.4cm				
123	587	42	鉄器 釘	IV区 第1包含層	完形 長6.8cm	両端が尖る			中程で屈曲
123	588	42	鉄器 釘	IV区 SX07	完形 長7.8cm				
123	589		鉄器 釘	IV区 第2包含 層	完形 長(3.4cm)				錆化顕著
123	590	42	鉄器 ボルト・ ナット	IV区 SX07	下端部欠損 長15.8cm				
123	591	42	鉄器 小刀	IV区 SX04	刃部一部欠 長16.5cm				中程で屈曲

第42表 三条黒島遺跡出土遺物観察表 (26)

第4章 川西北七条 I 遺跡の調査

第1節 調査の概要と調査の方法

川西北七条 I 遺跡は、土器川西岸約300mの平野部に位置し、南から北への地割りの乱れが見られる旧河道推定地に相当する。本調査は、予備調査において確認された旧河道とその兩岸の微高地部を中心に実施した。

調査区は、廃土の場内処理を行うために、大きく1～3区に分け、さらに1区を①～③に、2区を①・②に分けて実施した。これと併せて、国土座標第IV系に沿ったグリッドを使用し、第127図のようなアルファベットと数字の組み合わせのグリッド名を付した。

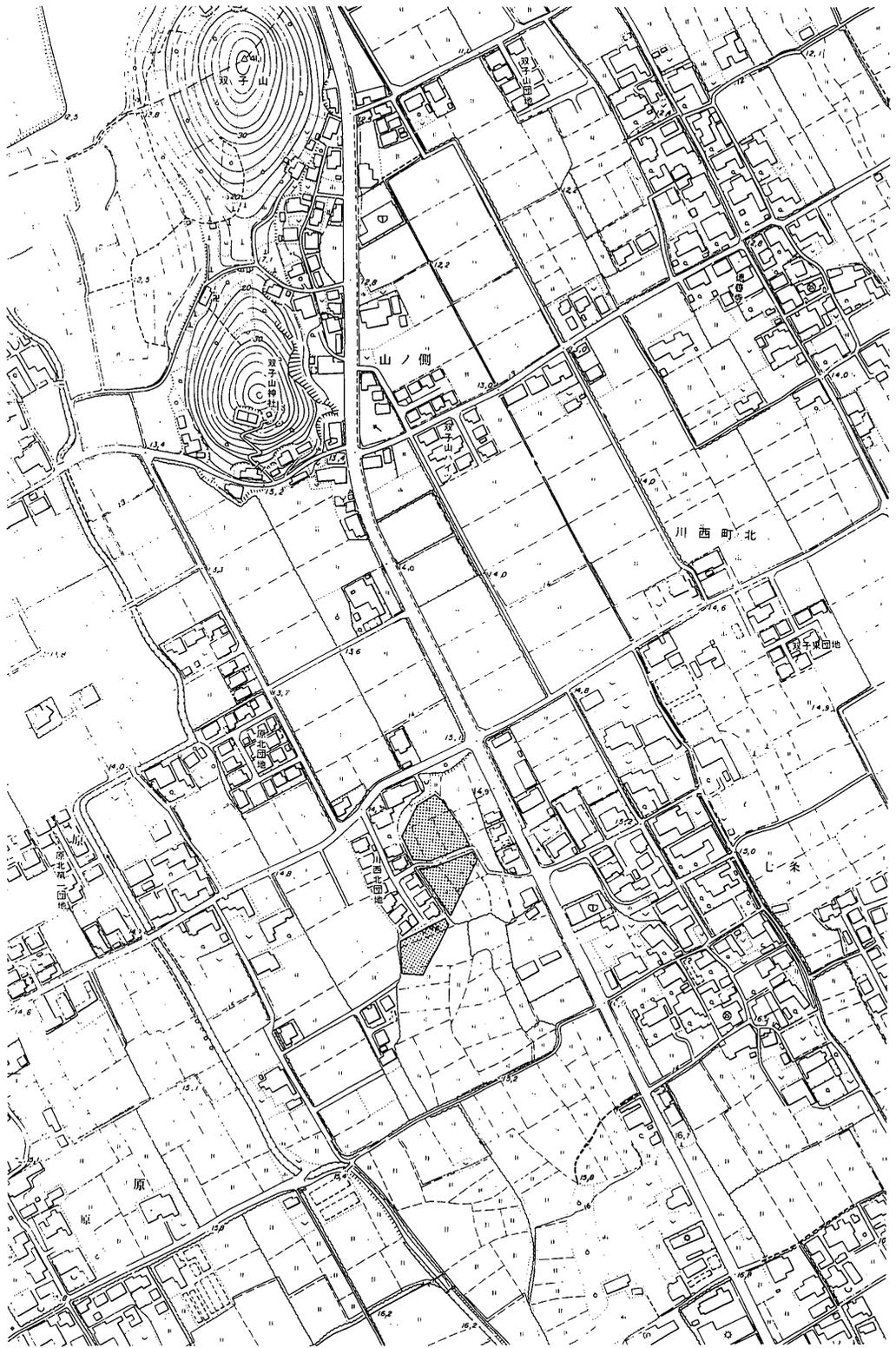
検出した遺構は縄文時代以前の石器集中部2箇所と、弥生時代～古代の旧河道、また中世以降の用水路などで、主として灌漑関係の遺構が多く見られた。出土遺物は全体でコンテナ4箱程度と少量であった。このうち、河道から出土する木製品と石器集中部は、出土地点を平板に記録して取り上げている。

遺構の記録は航空測量による1/50平面図を基本とし、適宜実測により補測した。断面図はグリッド境の畦を基本として、適宜畦を設定して実測により記録した。

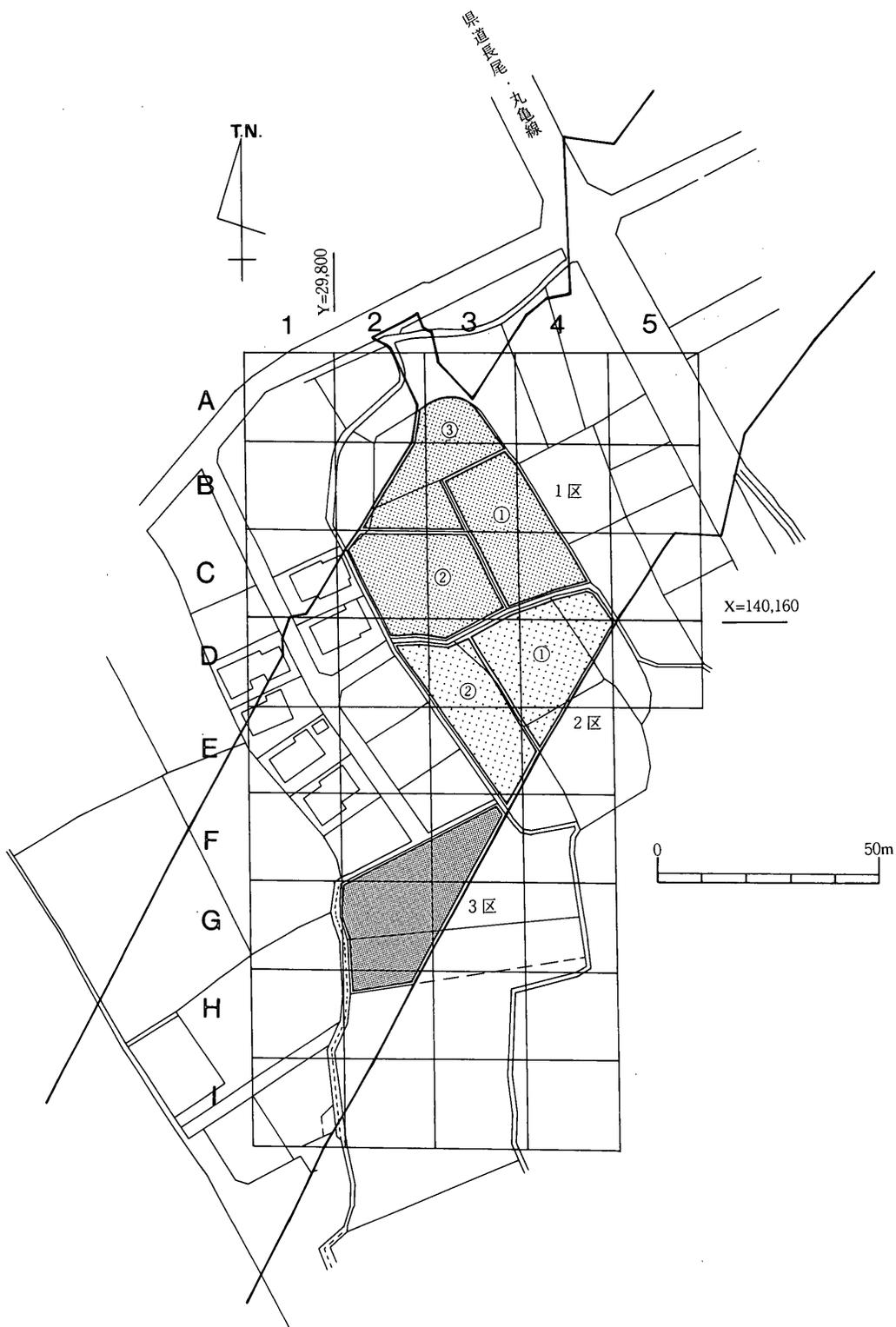
発掘調査時の遺構番号と、本報告の遺構番号は異なっている。新旧遺構番号対照表を第43表に示している。

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
SR-01 流路A	SR-14	SD-03	SD-18	SK-03	SK-26
SR-01 流路B	SR-15	SD-04	SD-25	SK-04	SK-27
SR-01 流路C	SR-13	SD-05	SD-22	SK-05	SK-28
SR-01 流路D	SR-21	SD-06	SD-23	SK-06	SK-30
SX-01	SR-17	SD-07	SD-11	SK-07	SK-31
SD-01	SR-20	SK-01	SK-02		
SD-02	SR-01	SK-02	SK-12		

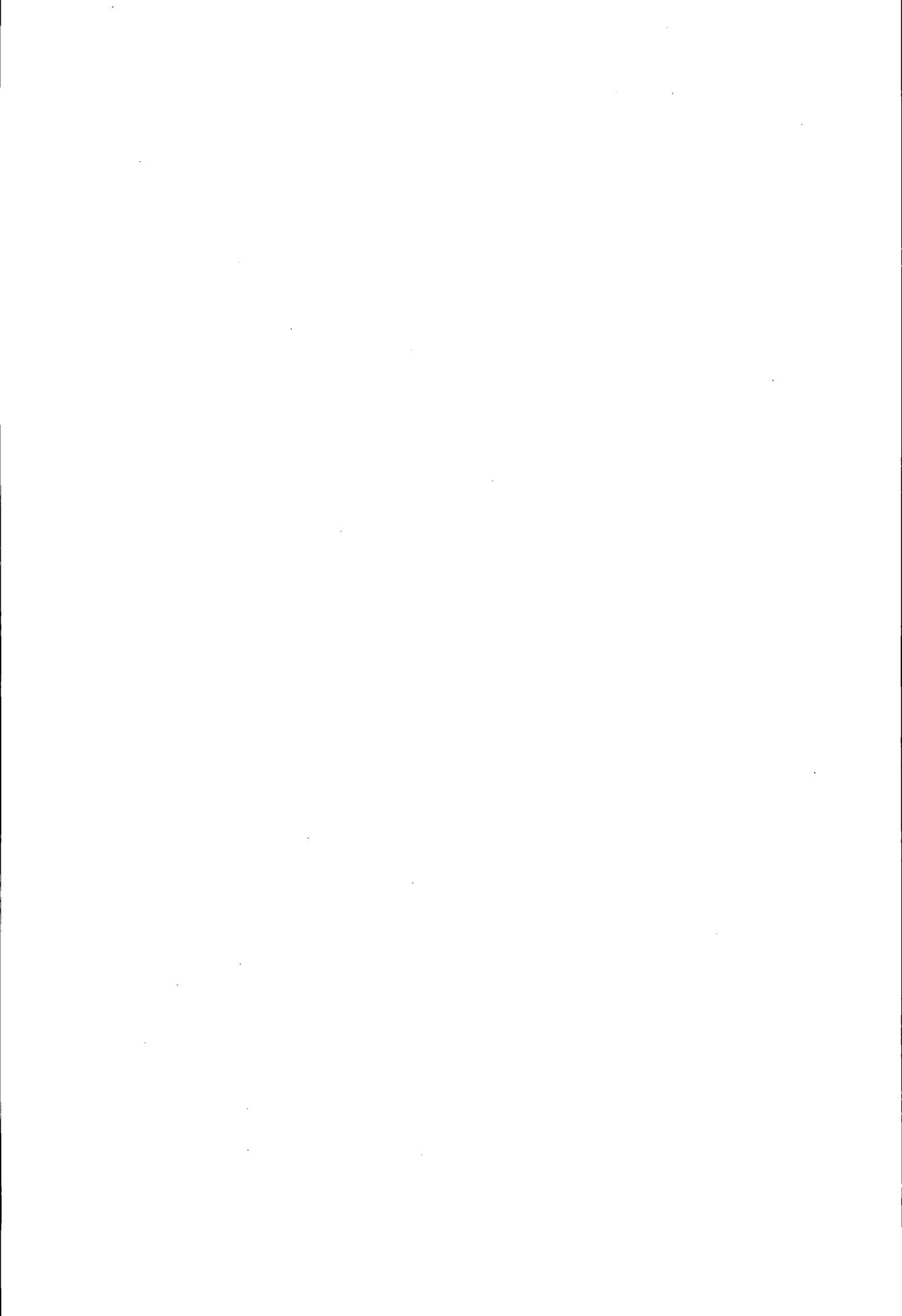
第43表 川西北七条 I 遺跡遺構番号新旧対照表

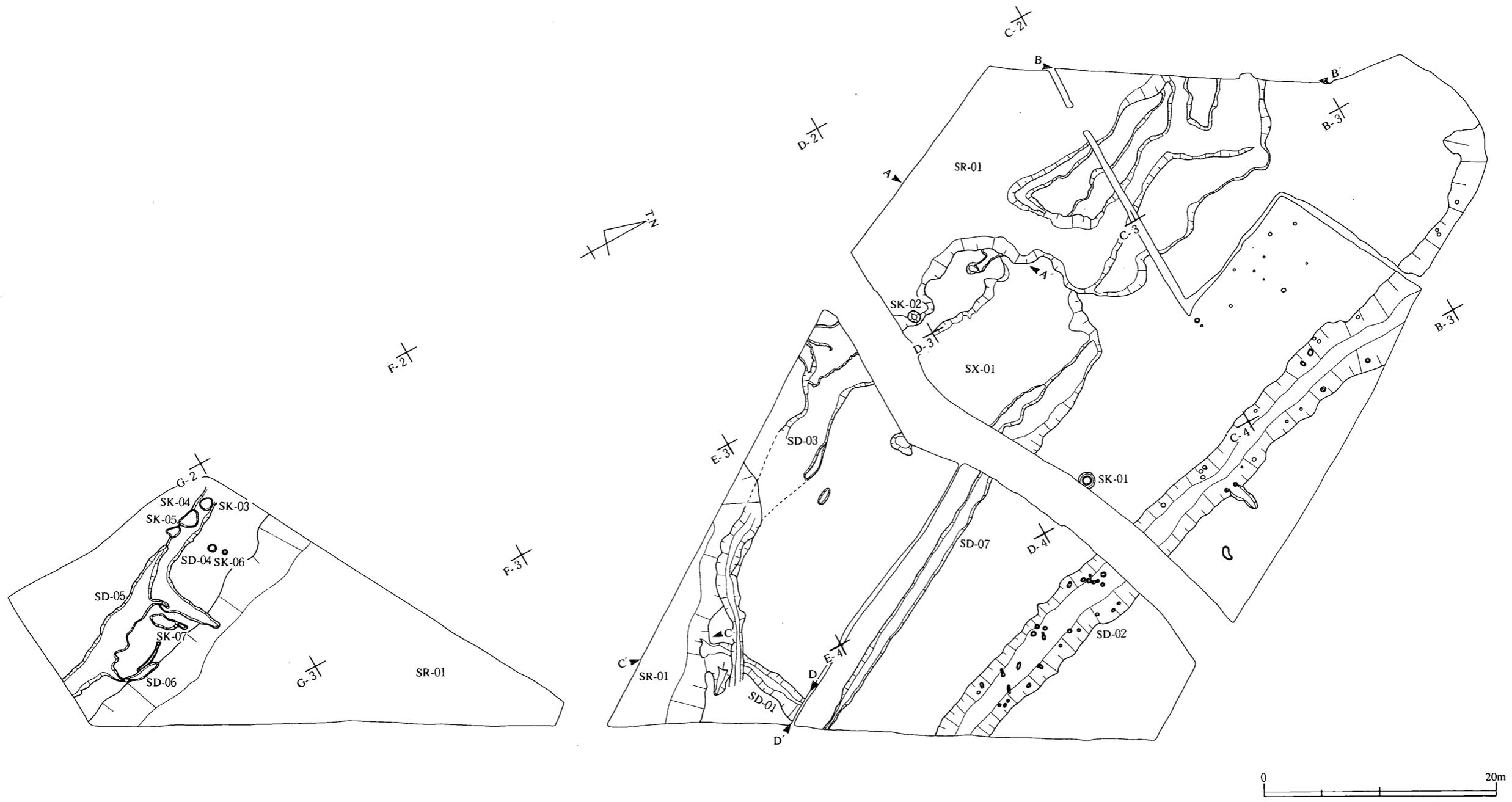


第126図 調査地位置図 (1/5,000)



第127図 調査区割図





第128図 全体遺構分布図

第2節 基本土層

調査区の中央に南から北に向かう旧河道SR-01が存在する。SR-01は弥生時代以降の流路であり、基盤となる黄灰色シルト層を開析して走行する。したがって、調査区中央部では旧河道の堆積層が厚く堆積し、その上に数枚の遺物包含層を形成している。

それに対して、調査区の東西端では現在の耕作土を除去すると、すぐに黄灰色シルト層が露出し、遺構の掘り形が確認できる。

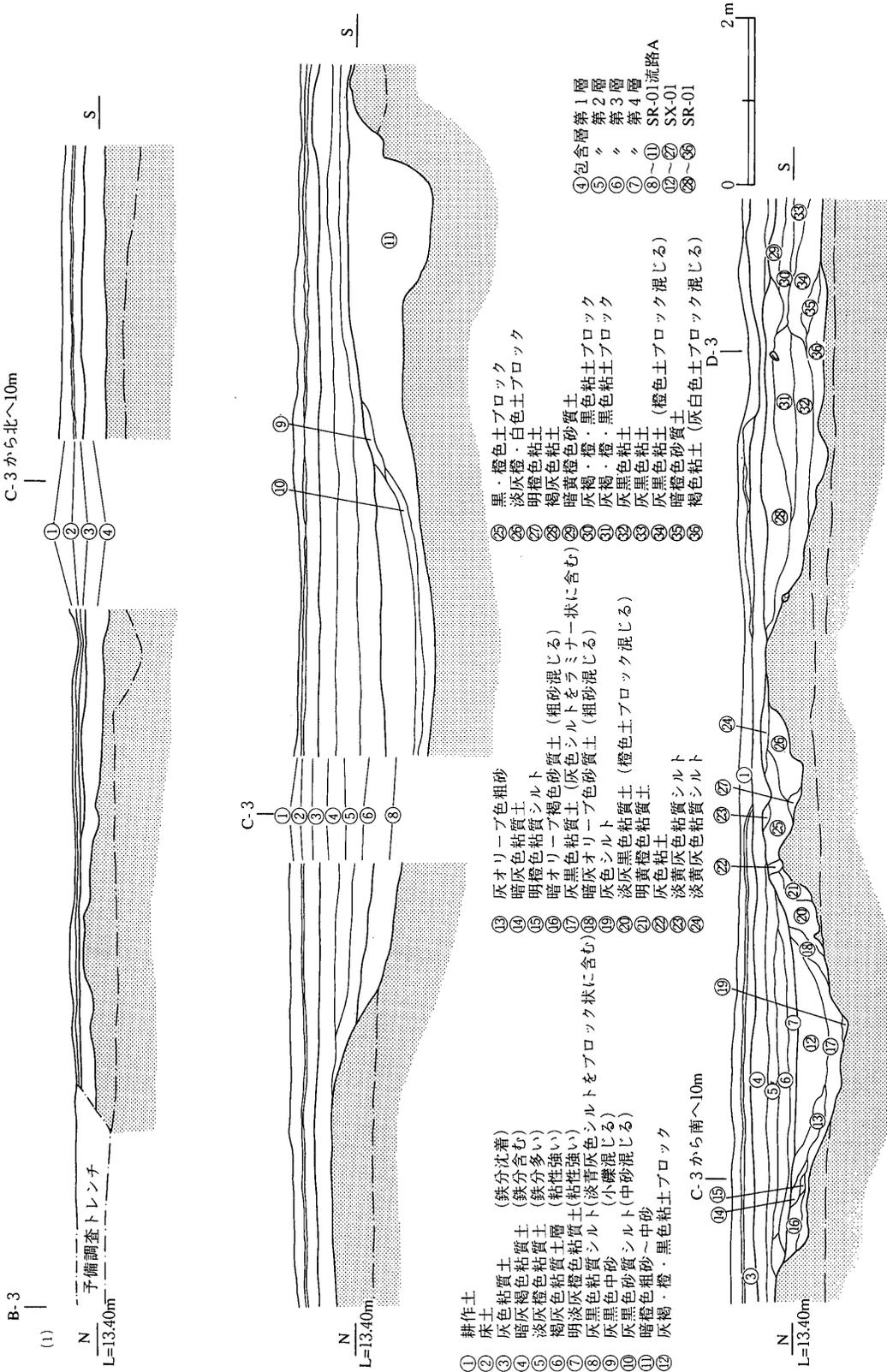
このことから、旧河道が機能していた頃の調査区内の旧地形は、調査区の東西端と中央部との比高差が現在より顕著であったものと考えられる。その後、旧流路が埋没し、周辺が田地化されるにつれて、高所部の削平と低地部の埋積が進行して現在に至ったものと考えられる。

基本土層は以下のように定めたが、現耕作土から遺構埋土上面までの堆積層は、上記の状況から分布範囲が限られる。第129～130図は1区の2-3グリッド境界ライン、2区②調査区北壁、3区の調査区北壁を図示したものである。

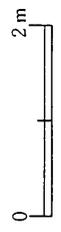
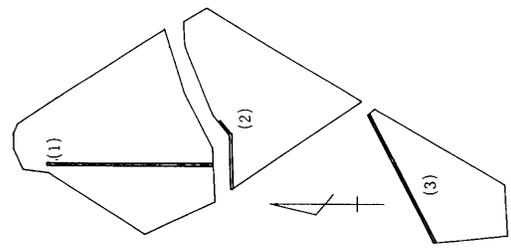
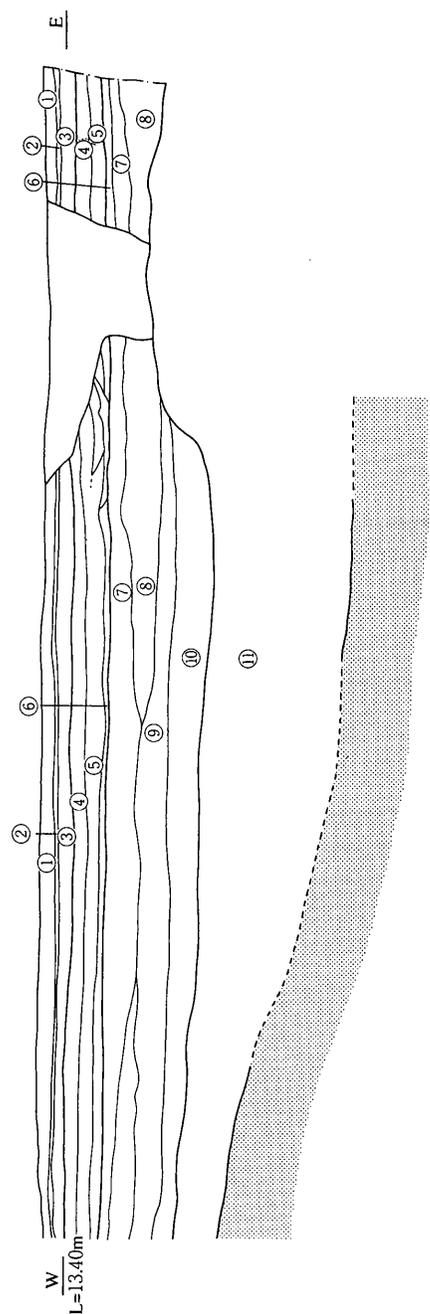
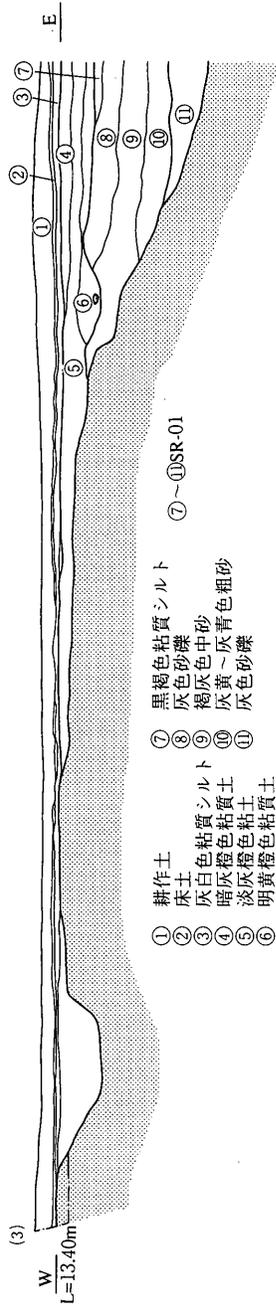
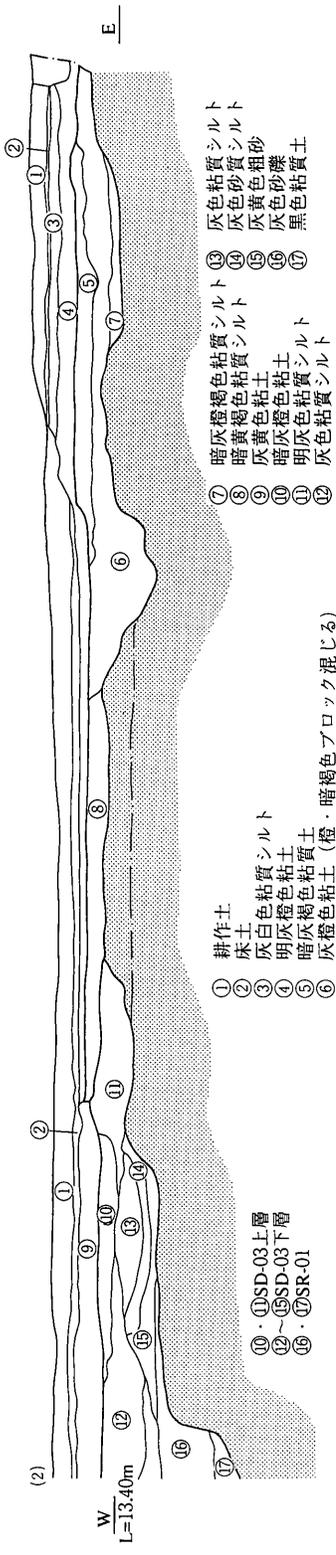
基本土層

	現耕作土	
	床土	
	灰色粘質土（前耕作土）	
第1層	暗灰褐色粘質土	
第2層	淡灰橙色粘質土	
第3層	褐灰色粘質土	
第4層	明淡灰橙色粘質土	（一部黄灰色土ブロックが混じる）

第1層以下は、旧河道上面を概ね水平に堆積しており、中世以降の水田耕作土層と推定される。土質は比較的均質で、粘性が強い。しかし、砂層やシルト層の間層が形成されておらず、平面的に水田を把握するには至っていない。



第129図 土層断面実測図(1)

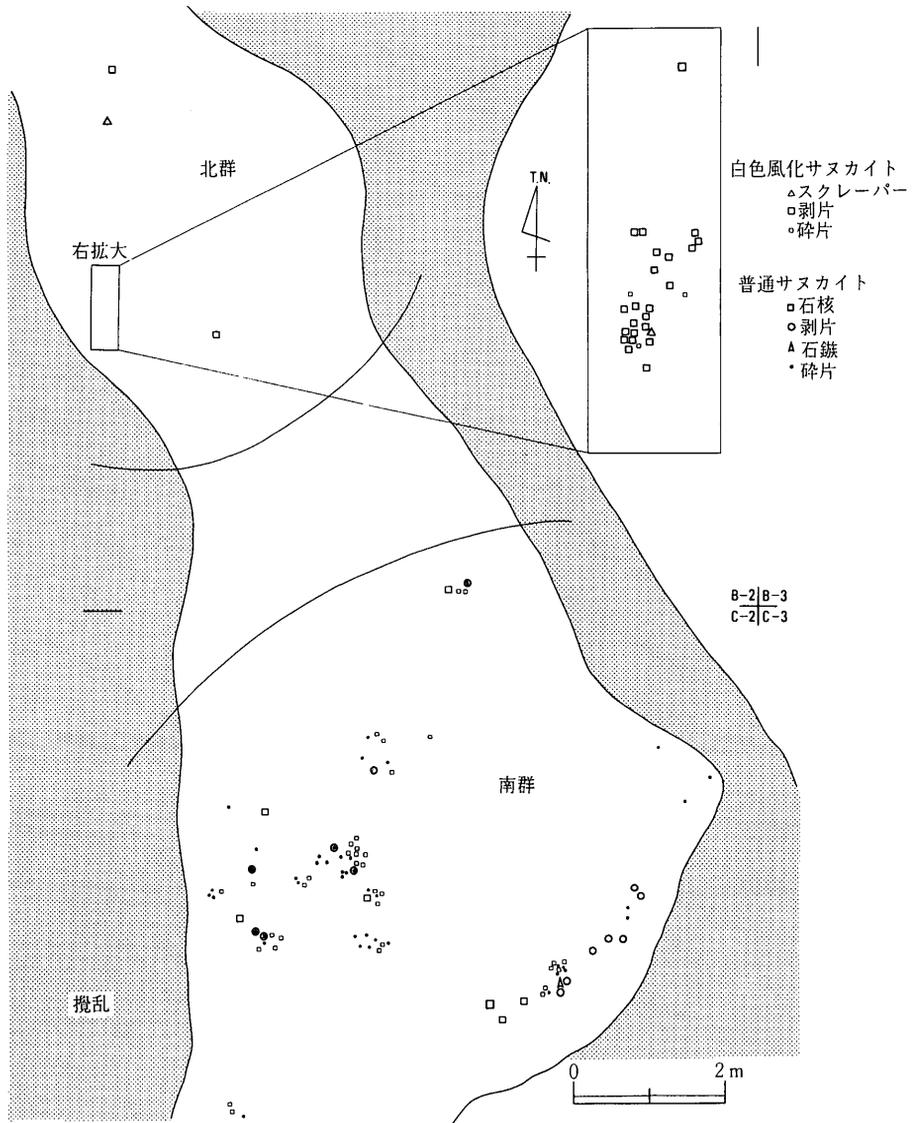


第130図 土層断面実測図(2)

第3節 縄文時代以前

1区③調査区において、土器を伴わないサヌカイト製の石器剥片類が出土した。出土点数は、碎片を含んで約130点である。これらは、弥生時代以降の旧河道の浸食を受け、中州状に残された黄色系シルト層中に含まれる。

石器は南北に細長い地形残存部の北側と南側にそれぞれ集中して出土した。北側は30点が0.5mの狭い範囲に折り重なるように密集し、南側は径6mほどの範囲の周縁部に約100点が分布する。



第131図 石器出土分布図

前者を北群，後者を南群として把握する。なお，後述する土層堆積の状況から，石器は必ずしも剥片剥離作業の原位置を留めていない可能性がある。したがって，通常の石器ブロックとは区分して「群」として報告する。

以下，各群の出土状況の詳細を記述する。

(1)北群における石器出土状況（第132図）

北群では白色風化サヌカイトの剥片がまとまって出土している。第132図の南側，延長約0.5mに剥片が集中する状況が観察される。そこから北に0.5mほど離れた地点で，単独で塊状の普通サヌカイト石核が出土している。また，この集中範囲の周辺では3点の剥片が散在している。

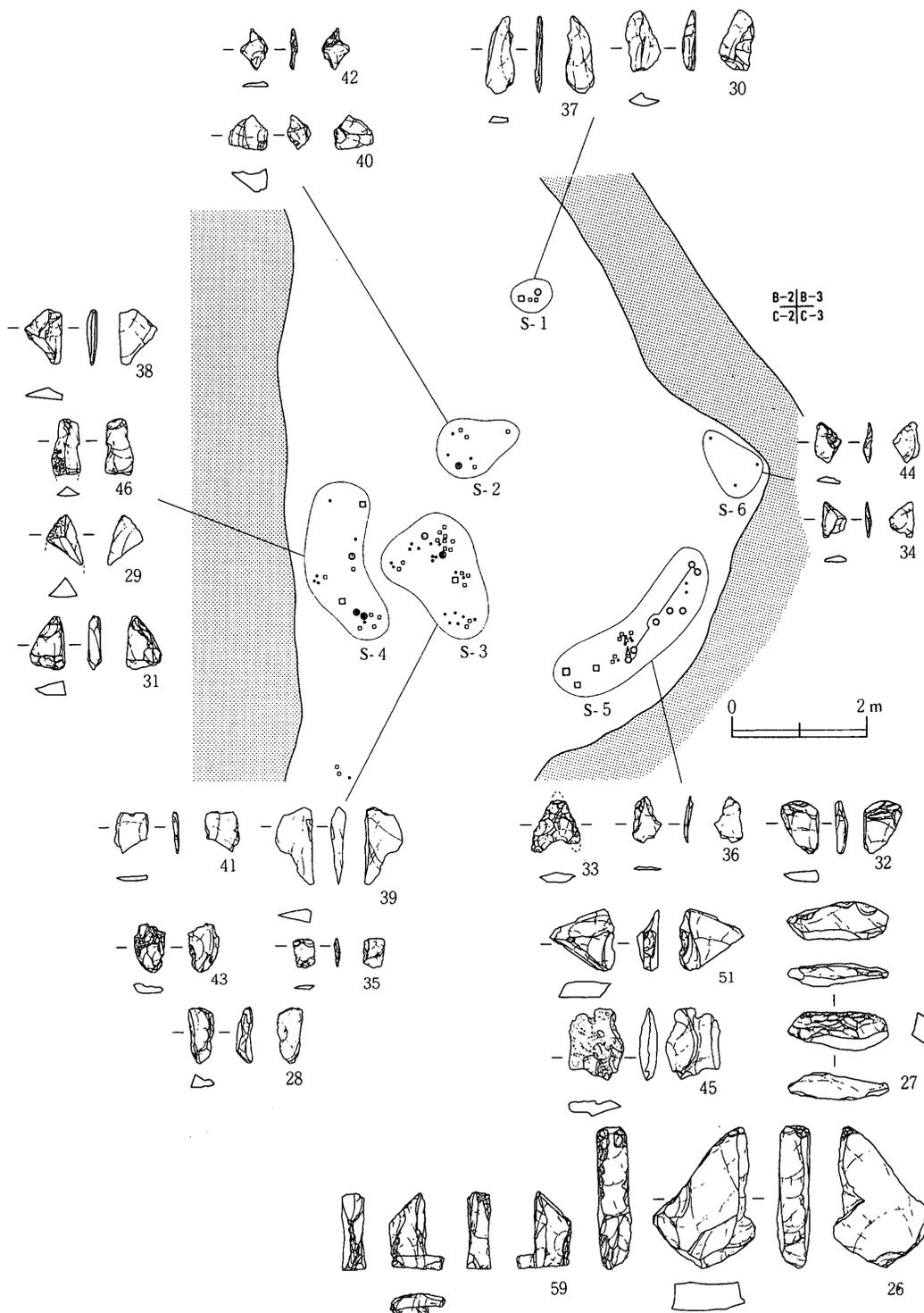
北群の堆積状況を第134図Aラインの断面で観察すると，下位には灰色礫層（⑩）が存在し，その上に暗褐色粘土層（⑪）が存在する。この2層が基本的には基盤となって，その周縁部の斜面堆積層中に北群石器が含まれている。

Bライン断面においても暗褐色粘土層は南にわずかながら下降していることが観察できる。したがって，北群の分布する東側に地形的な高まりがあり，その南や西の周縁に形成された堆積層中に北群石器が含まれているものと判断される。ただし，1箇所集中する出土状況から二次的に移動したものとは考えにくい。出土位置東側の地形的高まりが剥片剥離作業主たる「場」であり，そこから一括して西側斜面に投棄したものとするのが適当であろう。

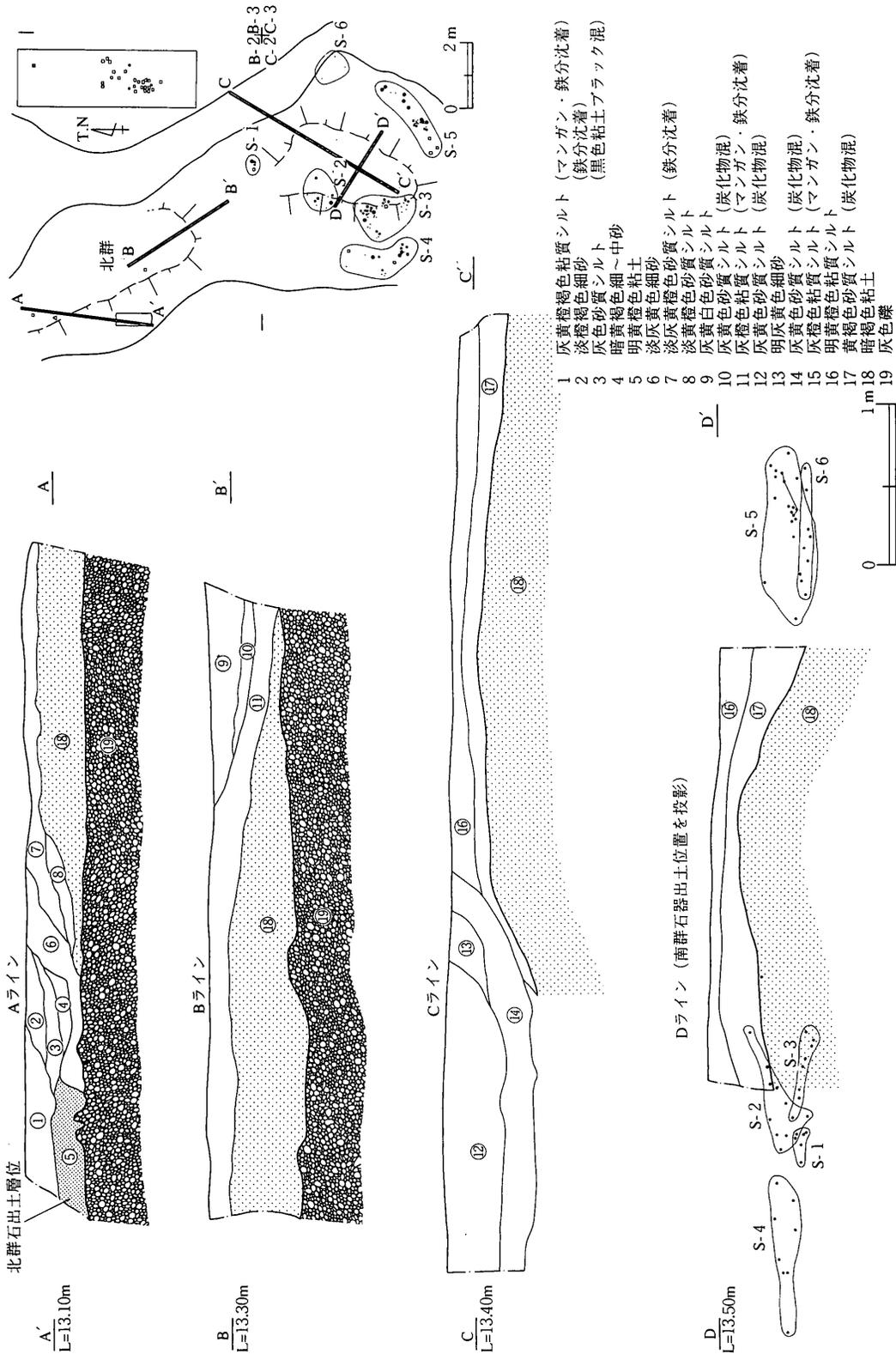
層中からは，焼石は出土していないが，Bラインの南側に斜面堆積する灰黄色砂質シルト層（⑩）には炭化物少量が含まれていた。



第132図 北群石器出土状況



第133图 南群石器出土状况



第134図 石器分布域土層断面図

(2)南群における石器出土状況（第133図）

南群では碎片が70点ほど、剥片が20点ほど、それに石鏃が1点伴って出土した。剥片は北群と異なり、小形のものが多い。また、石材的には普通サヌカイトと白色風化サヌカイトの2者があり、その出土数は拮抗している。

出土状況を細かく見ると、概ね6群に分けられる。これを小群としてS-1～番号を付している。各小群の石器内容を観察すると、S-5においてやや大きめの剥片や石核が出土し、また接合資料も出土しているのに対して、それ以外の小群では小形の調整剥片や、碎片が多い。

第134図のC・Dラインの土層断面では、基盤となる暗褐色粘土層が北群と同じように中央部が盛り上がっている。その上の黄褐色砂質シルト層(⑩)が石器を出土する層準である。この層は流路中の堆積層とは考えられず、基盤層の凹凸に応じて緩やかに堆積している。層中には炭化物を含む。これらのことから、北群と同様に南群の中央部に地形的な高まりがあり、石器はその周縁部に投棄あるいは流入して堆積したものと考えることができよう。北群との間にはBライン南側の傾斜から判断して、浅い窪みが介在していたものと思われる。周縁部含めて、焼石は出土していない。

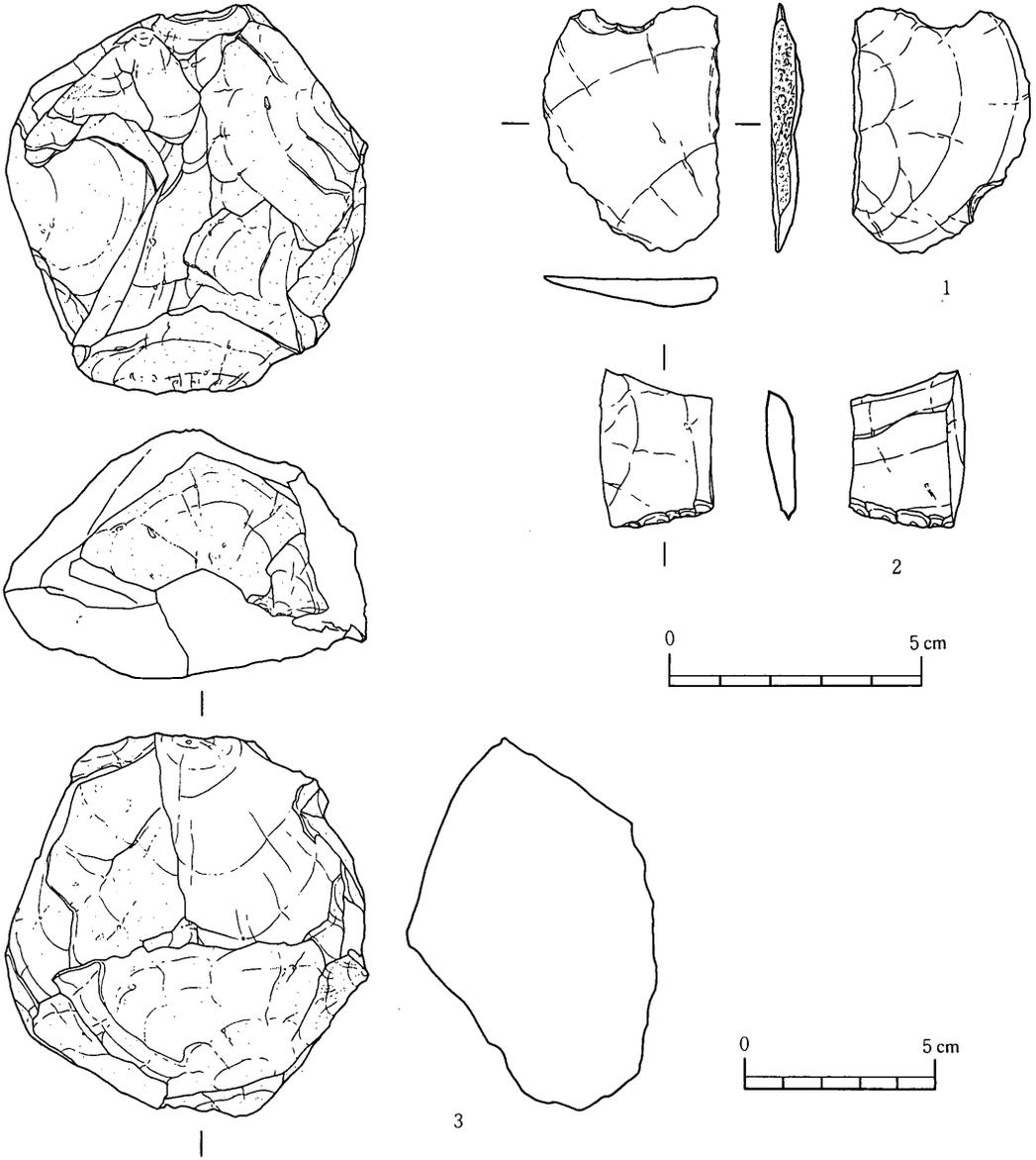
(3)北群出土石器（第135～139図）

26点の石器を図示している。3の石核を除くとすべて白色風化サヌカイトを石材としている。表面はいずれも極度に風化し、剥離痕を判別するのが困難なものも含まれる。抉入石器1点、削器1点、石核1点があり、それ以外は剥片である。

a. 抉入石器（第135図1）

自然面を打面とし、石理に沿って剥離された、幅4.9cm、長さ3.5cmの横長剥片を素材とする。厚さは0.55cmで、背面は石核の平坦な剥離面を全面に留め、底面はもたないために、末端角はきわめて浅い。

側縁の中ほどに、剥片の主要剥離面側からのみ調整を行い、抉部を作出する。抉部の弧は直径0.9cmほどの曲線を呈し、調整部延長は1.05cmをはかる。剥片の底縁に、長さ0.9cmほどの剥離痕を1面確認できるが、抉部のような細調整ではないため、自然堆積中の欠損の可能性もある。



第135图 北群出土石器实测图(1)

b. 削器（第135図2）

剥片の末端を表裏両面から調整し、直線的な刃部を作出している。剥片の両側縁、また打面部が夾雑物を契機として蝶番剥離し、それによって欠損したもので、表面の風化によって調整痕と折損面の関係が不明瞭であるが、楔形石器と同様の使われ方をした可能性もある。現状で刃部幅2.1cm、長さ3.15cm、厚さ0.8cmをはかる。

c. 石核（第135図3）

普通サヌカイトを石材とする。10cm大の多面体で、各面とも風化が進んで表面に気泡が多く認められる。礫面はみられないが、剥片剥離面を除き、どの面も安定した剥離痕を観察することができない。したがって、原産地付近において自然に形成された剥落面か、あるいはきわめてラフに形状を整えたものを、遺跡内に持ち込んでいるものと考えられる。

剥片剥離は古い平坦な剥落面を打面とし、長さ6.0cm、幅4.5cmの縦長状の剥片を剥離している。しかし、剥離面の打面付近には蝶番剥離によって段が形成されていることからみて、良好な剥片を剥離しているとは言い難い。

剥片剥離がそれ以上進行していないこと、また当該石材の剥片が北群には見られないことなどから、放棄された石核と考えられる。

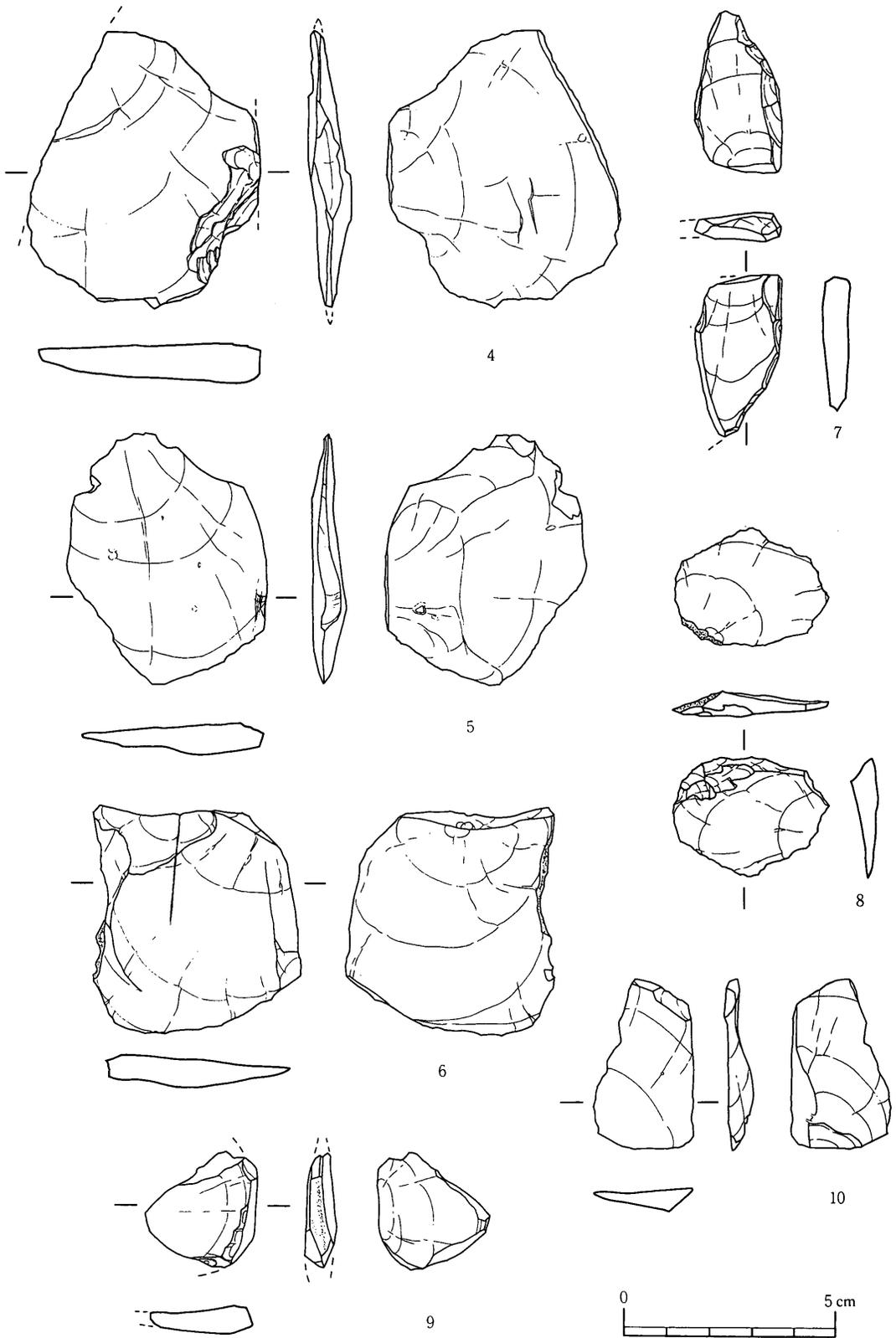
d. 剥片（第136～139図・148図）

23点の剥片を図示している。内1点は折損部で接合したものである（第148図58）。剥片を概観すると、いずれも白色風化サヌカイトで、色調や風化度が近似し、同一母岩かもしくは同一原産地で採取した石材を使用しているものと思われる。

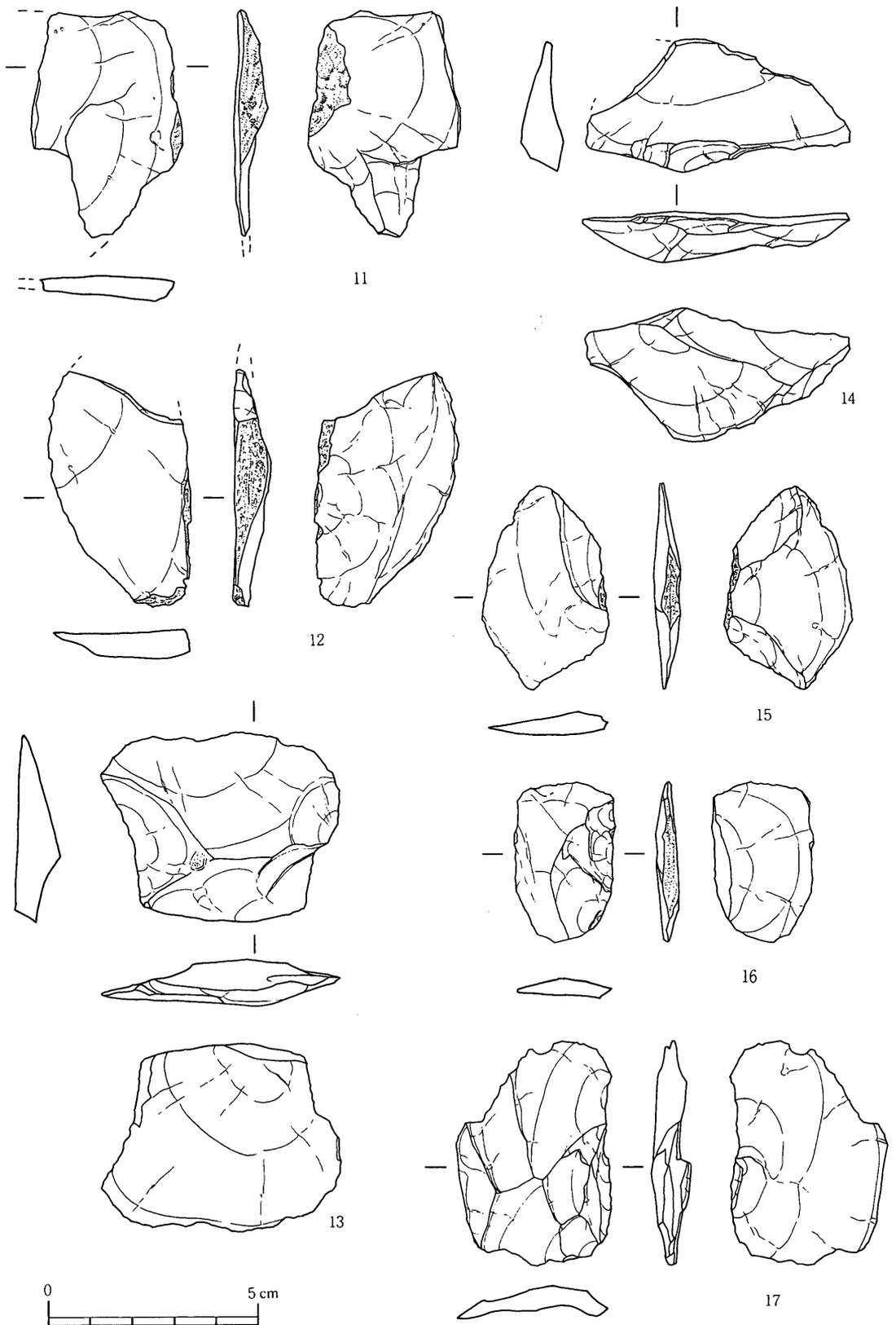
技術的にみると、調整打面をもつものは1点もみられず、自然面かもしくは平坦面を打撃して得られた剥片ばかりであり、底面をとどめるものも非常に少ない。また、すべて石理に沿って剥離されたものであり、背面に自然面を残すものはない。このようなことから、石理に沿った板状剥片素材の石核から剥片剥離を行ったものとの予測がたつ。

しかし、製品として加工されたものは先の削器あるいは抉入石器のみであり、目的剥片の峻別は難しい。ここでは、剥片の形状と剥離角の計測値に基づき、剥片の類型化を試みる。なお、類型化にあたっては、先の抉入石器とした1が素材の剥片形状をよくとどめていることから、これも対象として加える。

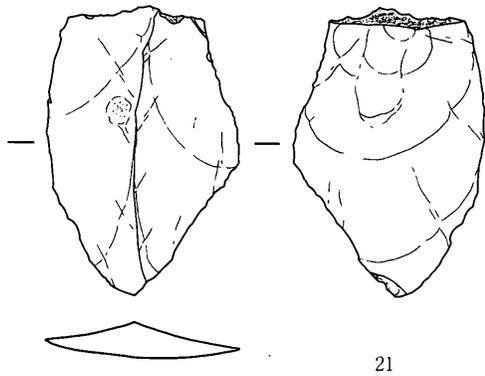
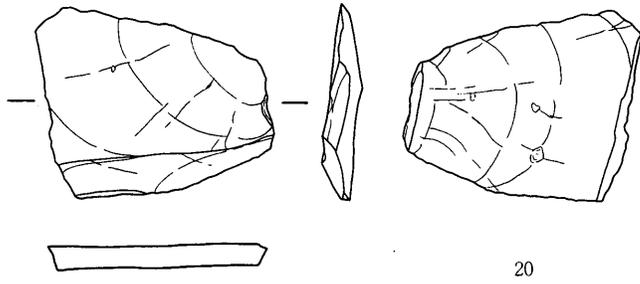
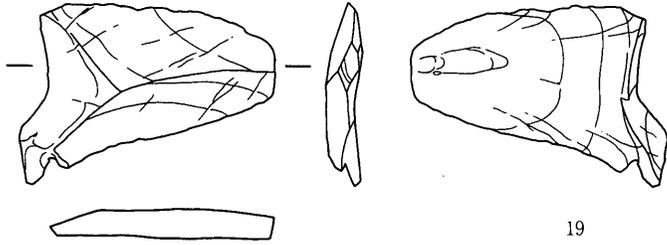
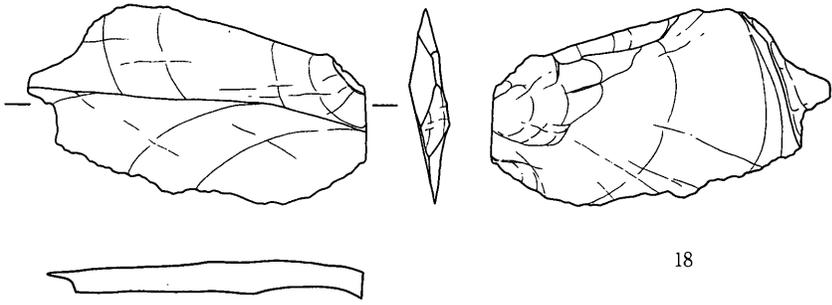
打面と剥片末端の角度を剥片剥離角として第140図にまとめている。かなり、ばらつきがあるが、 $25^{\circ}\sim 45^{\circ}$ に分布するもの、 $60^{\circ}\sim 70^{\circ}$ に分布するもの、 90° 前後に分布するもの三者に区分される。これをⅠ類、Ⅱ類、Ⅲ類と区分する。



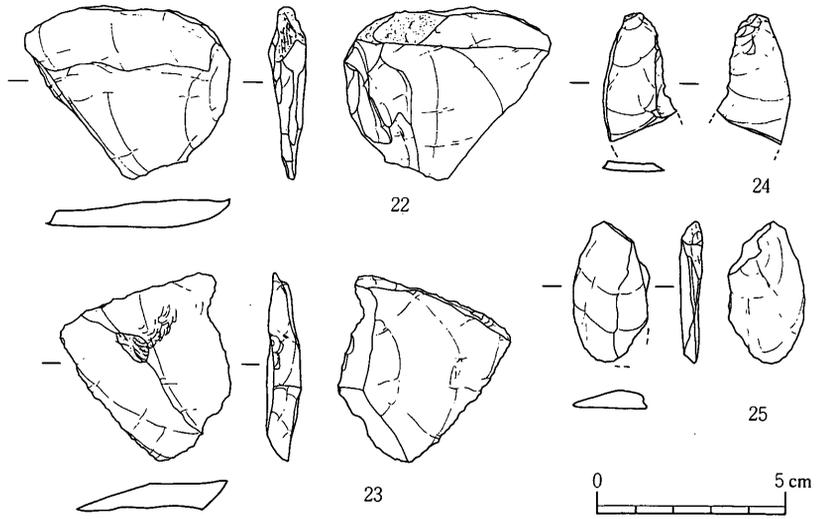
第136图 北群出土石器实测图(2)



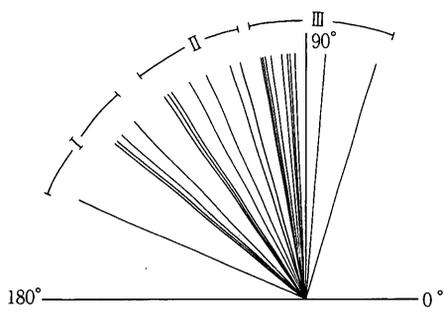
第137图 北群出土石器实测图(3)



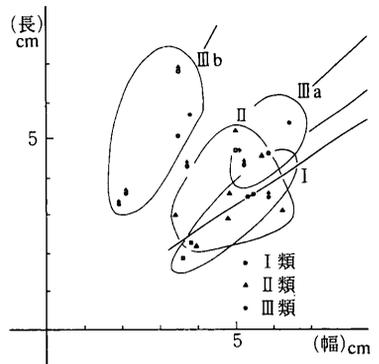
第138图 北群出土石器实测图(4)



第139図 北群出土石器実測図(5)



第140図 剥片剥離角分布図



第141図 剥片長幅比グラフ

平面形状を示す長幅グラフ（第141図）で剥離角における分類ごとに観察すると、Ⅰ類は長さ：幅が概ね0.65：1と幅広の横長剥片が剥取されている。また、Ⅱ類は分布に幅があるが、概ね0.75：1のラインを分布の中心としており、Ⅰ類と同様に横長剥片を剥取している。Ⅲ類は0.9：1の群と1.8：1の群に明確に分離される。前者は長ささと幅がほぼ等しい剥片で、後者は縦長剥片である。これをⅢa類、Ⅲb類として区分する。

それぞれの分類ごとの数量と遺物番号は以下のとおりである。

Ⅰ類.....5点（11・16・17・23・25）

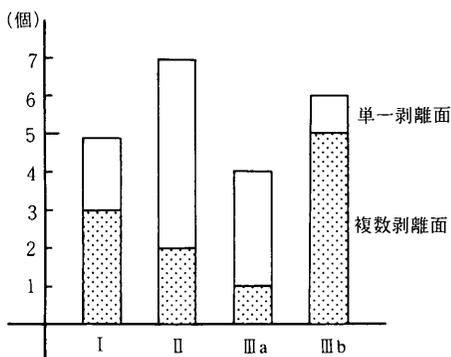
Ⅱ類.....7点（1・6・8・10・13・14・15）

Ⅲa類...4点（4・5・12・22）

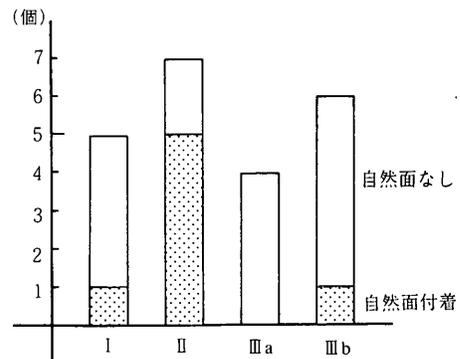
Ⅲb類...6点（7・18・19・20・21・24）

各類型ごとに背面の剥離面の状況を観察し、微細な剥離痕を除いて、複数の剥離面からなるものと、大きな1面の剥離面からなるものに区分した。第142図によると、Ⅰ類とⅢb類が背面が複数の剥離面からなるものが多く、Ⅱ類、Ⅲa類は単一の剥離面をとどめるものが多い。また、自然面を残す剥片は全体で6個体あり、内1個体が側面に自然面を残し、残りは打面に自然面が認められる。各類型ごとに第143図でみると、自然面を残すものはⅡ類に集中していることがわかる。

以上のことから、Ⅱ類、Ⅲa類は板状石核の素材面か、あるいは剥片の大きさを越える大形の剥片を剥離した後の面を取り込んで剥離された剥片で、背面に複数面が存在して自然を残すものが少ないⅠ類とⅢb類は剥片剥離が進行する過程で剥離されたものであるものといえる。

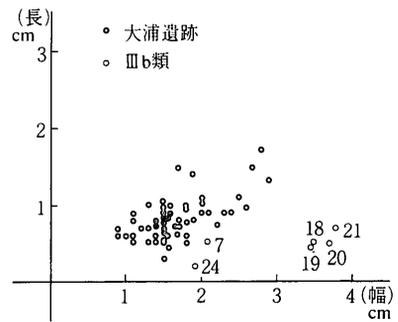


第142図 類型別背面構成比較



第143図 類型別自然面付着度比較

Ⅲ b類については坂出市大浦遺跡の縦長剥片との比較を行った。第144図は大浦遺跡の主な縦長剥片と当遺跡のⅢ b類を重ねたものである。その結果、大浦遺跡が1 : 2ほどの厚手の剥片を剥取しているのに対して、当遺跡の縦長剥片はきわめて薄い剥片が剥取されていることがわかる。これは、大浦遺跡では、出土する小口面を利用した縦長剥片石核が肉



第144図 Ⅲ b類の厚／幅比

厚な規格的な剥片の剥取を保証しているのに対して、当遺跡では、そのような技術がみられず、板状剥片の素材面を適宜浅く剥ぎ取っていることが、厚みの違いとして現れているものと考えられる。

e. 剥片剥離技術

石核や製品が欠落した資料であることから、剥片剥離技術の具体的な内容について検討することは難しい。しかし、上記の剥片の観察から推測すると、北群における剥片剥離は、大浦遺跡のような規格的な剥片の剥取を想定することは難しく、縦長剥片でみると、かなりラフな技術で素材面に稜線を作成し、適宜縦長剥片を剥取していることが予測できた。

Ⅲ b類以外の剥片についても、規格的な様相はみられない。これは、特定の目的剥片を剥取する規格的な技術が存在したものではなく、むしろ多様な形態の剥片を多数剥取すること自体が目的の剥片剥離技術であった可能性を示唆するものである。

北群出土石器の所属時期を示す積極的な根拠はないが、このような多様な形態の剥片の需要を考えると、二次的な調整加工を多用して製品を生産する縄文期に所属する可能性が高いものといえよう。

(4)南群群出土石器 (第145・146図)

南群では、普通サヌカイトと白色風化サヌカイトが混在して出土している。石材は肌理の細かさや、色調、あるいは光沢度などで4種類に区分される。

A類……白色風化サヌカイト、全体的に風化が顕著で、白く粉状に風化するものや石理が縞状に観察できるもの等のバリエーションがある。

B類……普通サヌカイト (風化が進むと、白色風化サヌカイトに分類する場合もある石材)、灰白色で肌理がやや粗く、フィッシャーが目立ち、表面は光沢を持たない。

C-1類…普通サヌカイト、剥離面がなめらかで風化度が弱く、若干の光沢をもつ。黒色を呈し、肌理が細かい。

C-2類…普通サヌカイト、c-1類に類似するが、灰色を呈する。

なお、北群で出土した白色風化サヌカイトはすべてA類に分類されるものである。以下、石材毎に説明する。

A類 (第145図)

7点を図示している。S-6小群を除くすべての小群で出土している。S-5小群において大形の剥片類が出土する点は他の石材の傾向に共通する。

26は厚さ1.2cmの板状石材を長さ6.3cm、幅4.5cmに分割したものである。表裏に素材面を、側面に分割面を留める。c面は長さ4.0cmほどの縦長剥片を剥取したネガ面である。分割面はエッジの潰しを示す微細剥離痕がみられ、a面両側面と上端部のc面のバルブ周辺は特に顕著である。a面上半は両極打撃の剥離痕が認められる。

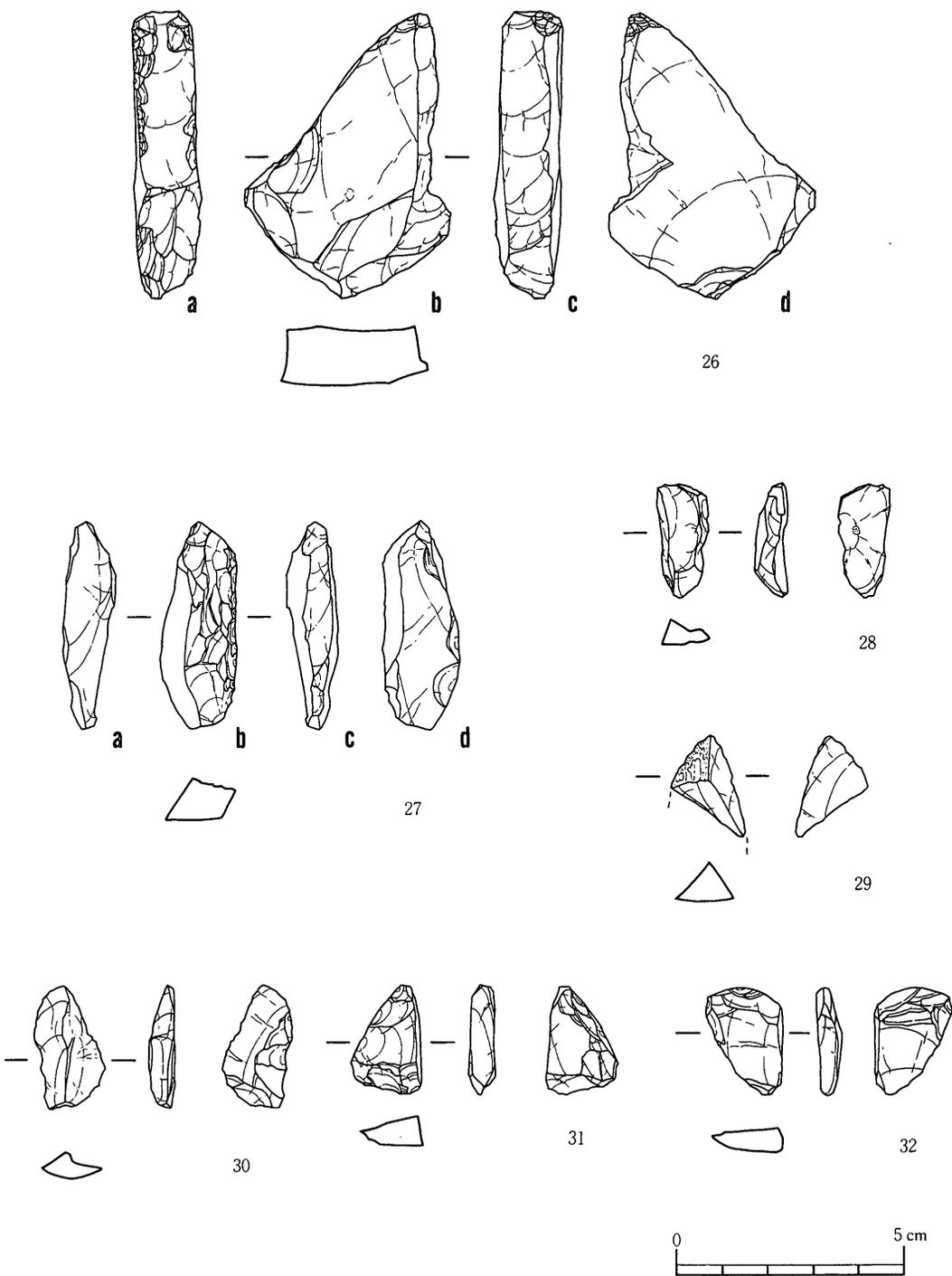
27は長さ4.3cmの分割碎片で、a面が分割面に相当する。c面は分割に伴う樋状剥離痕であり、分割打撃の前に行われた潰しを示す微細剥離痕を抉り取って剥離している。上下両端面は素材面がほとんど遺存していないために、分割前の形状は不明である。

28～31は分割面を留める分割時の碎片である。31と32は側縁に分割前の剥離痕が顕著で、鋭角的な側面の作出があり、石鏃等の未製品の可能性もある。

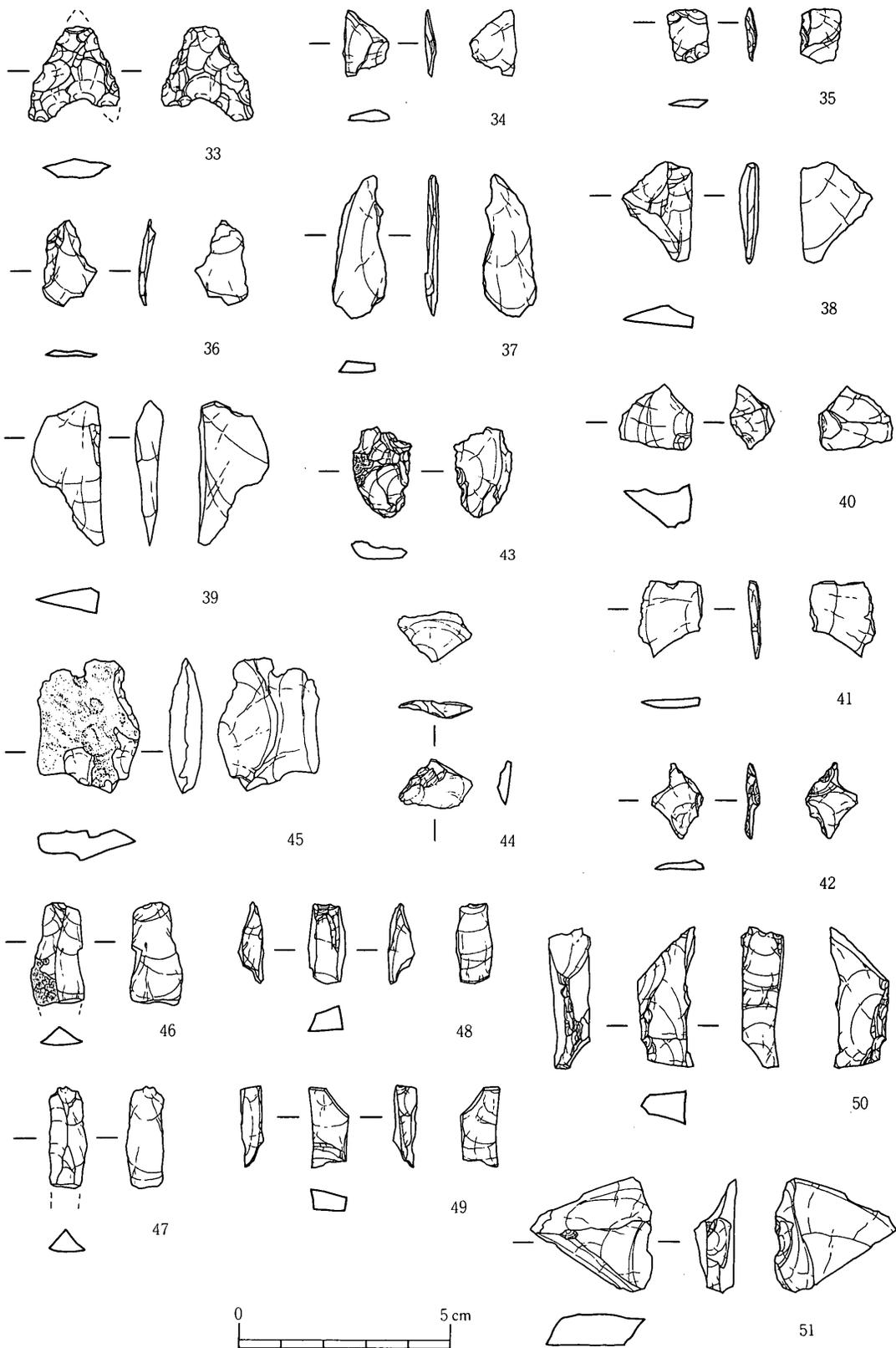
B類 (第146図33～39)

S-2小群を除くすべての小群で出土している。33は長さ2.3cmの凹基式石鏃である。先端部及び逆棘端部が欠損する。側縁調整が不十分で、逆棘基部の幅が左右で異なるなど、製作途上の未製品であった可能性が高い。34～36は一部に微細な剥離痕を留める小剥片で、潰しによって形成された剥離痕ではなく、調整剥離の痕跡と推定される。石鏃等の小形器

種の製作時の調整剥片と考えられる。37~39は長さ2.3~3.3cmの剥片で、微細な剥離痕はみられない。



第145図 南群出土石器実測図(1)



第146图 南群出土石器实测图(2)

C-1類 (第146図40~42)

S-2・S-3・S-4の小群で各1点ずつ出土している。1.5cmほどの小形の剥片である。40, 42は微細剥離痕を留める。この石材の大形剥片や製品は出土していない。

C-2類 (第146図43~51)

S-3~6小群より出土している。そのうちS-5小群に5点がまとまり、4点が接合する。打点部周辺に微細剥離痕がみられる小形剥片(43・44)と点状打点をもつ縦長剥片(46・47)、分割碎片(48・49)、石核(50・51)に分けられる。45は背面に自然面を大きく残し、石核の初期の段階に剥離されたものであろう。50に接合するものについては、後に説明する。51は分割した石片の側面を作業面にして幅2.7cm、高さ0.8cmの横長剥片を剥取している。

(5)群外出土の石器 (第147図)

52は南群外縁で出土した石鏃である。詳細な出土位置は明確でない。基部の折損面は風化していない。先端は鋭利に尖り、側縁は微細な剥離痕が連続して施されており、完成品であったものと考えられる。石材はB類に近い。

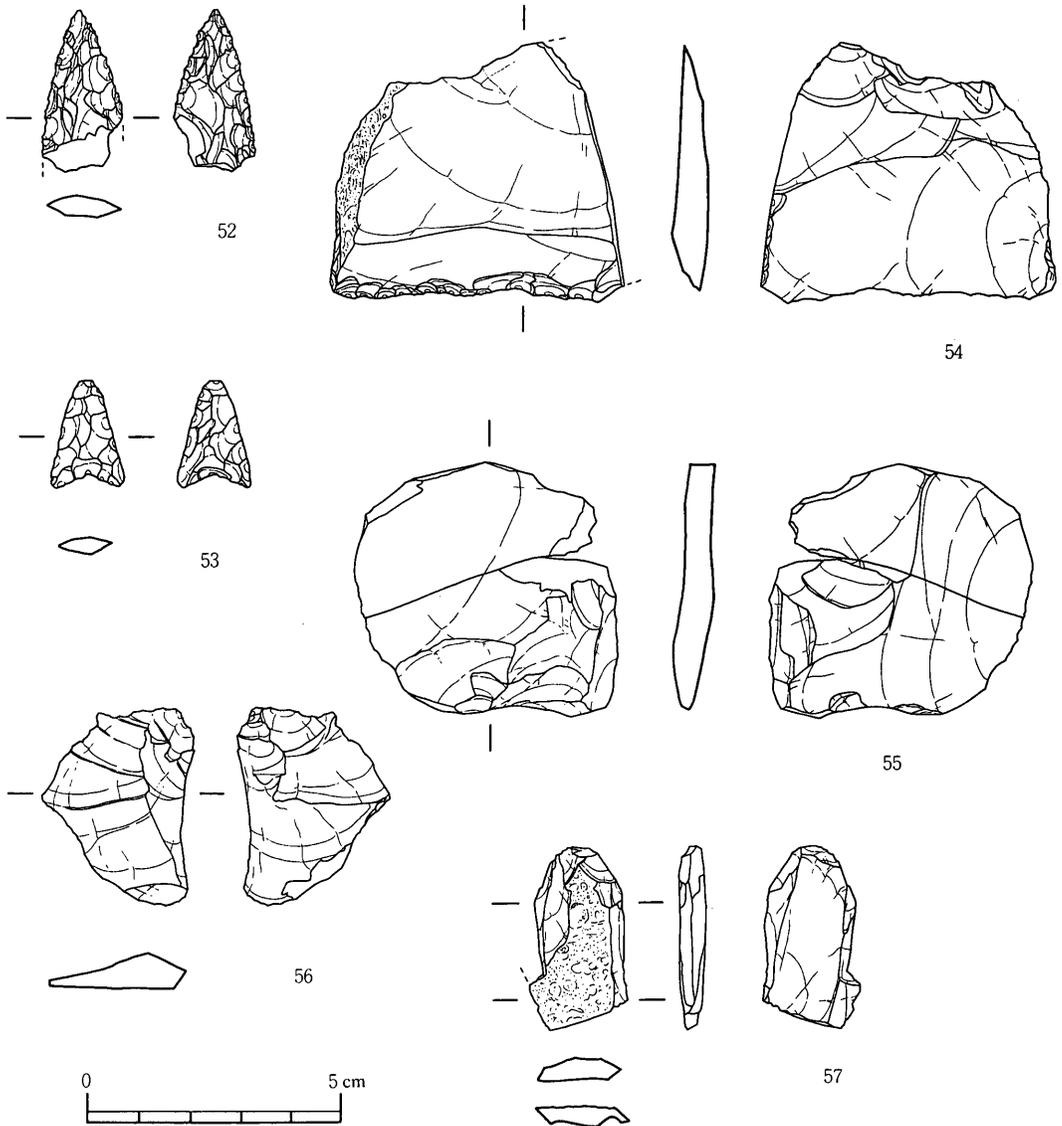
53は3区SR01流路Dより出土した石鏃であり、弥生時代以降の可能性はある。石材はいずれにも該当しない粗質の安山岩であり、極度に風化している。

54は1区C-2グリッドにおいて、中世の包含層(第4層)に浮き上がって出土した削器である。石材はA類で、側面の自然面を打面として、石理に沿って剥離された剥片を素材として。下端部に片面の丁寧な調整痕を留め、折損面下半には潰し状の微細剥離痕が認められる。

55は1区C-3グリッドにおいてSR-01埋土中に混在して出土した剥片である。石材はA類で、表面が極度に摩滅している。剥片剥離後、打面部周辺を調整している。

56は2区E-4グリッドのSD-01基盤層より単独で出土した剥片である。石材はB類で、石理に反して剥離している。背面、主要剥離面とも顕著な蝶番剥離の痕跡が認められる。

57は南群外縁部から出土した縦長剥片で、詳細な出土位置は明確でない。背面の大部分は自然面で覆われ、打面は平坦面である。上下両面からの打撃が認められ、楔形石器の削片と考えられる。

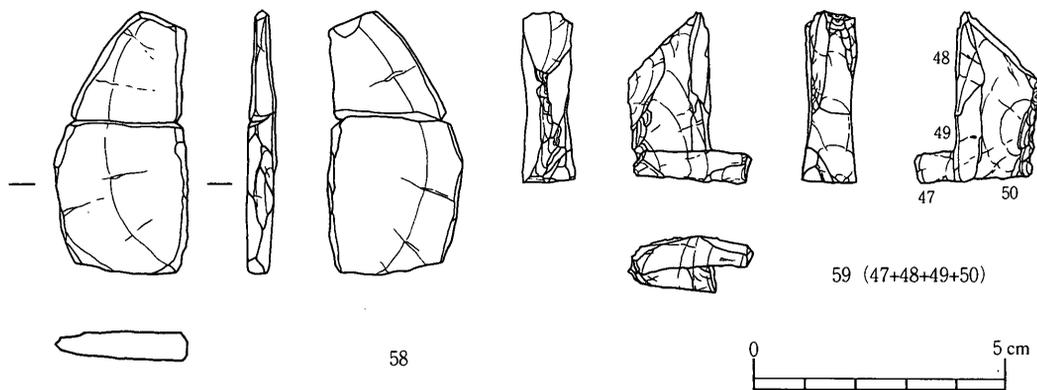


第147図 出土位置不明石器実測図

(6)接合資料 (第148図)

58は北群から出土した、折損面で接合する剥片で、すでに(3)d.で説明した。

59は南群S-5小群で検出した接合資料である。石核、分割碎片、縦長剥片の4点が接合する。石材はC-2類である。接合した状態での大きさは平面3.3×2.4cm、厚さは1.1cmで、台形状を呈する。各側縁は調整面と分割面で構成され、表裏に各1面の石核幅一杯のネガ面がある。第149図に各面の番号、切り合い記号、剥離方向を示している。これに基づき、剥片剥離の順にしたがって説明する。



第148図 接合資料実測図

①分割面(a)の形成

a面は斜めに形成された平坦な分割面である。表裏のネガ面(b,c)に切られており、素材を得た際の分割面であろう。現在の調整側縁(A)とは約 135° をなす。

②ネガ面(b~d)の形成

b,c面は遺存部に打点を残さないネガティブな剥離面で、bがcに先行する。b面のリングは、分割面(e)付近ではあまり収束する状況は見られず、素材の左右幅一杯の横長剥片を得た剥離面である可能性が強い。d面は調整痕(A)の中央付近に打点が想定される。

③調整痕(A)の形成

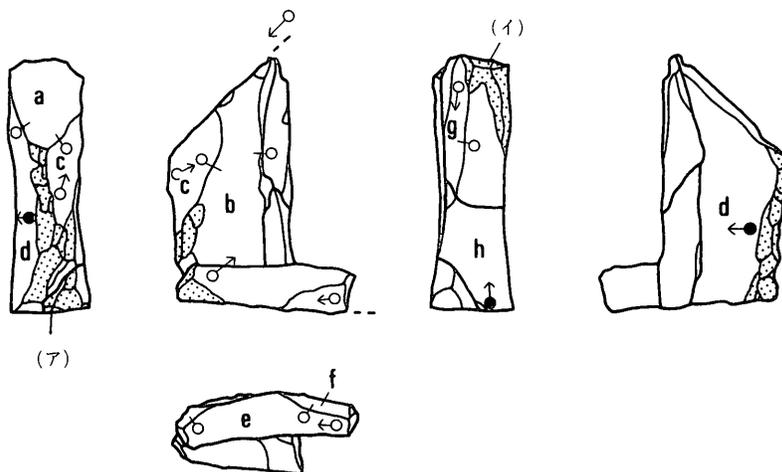
微細な階段状剥離が連続する調整痕は、もっぱらd面側に施される。c面には剥離が及ばないことから、両極打撃による剥離痕ではなく、単独の平坦剥離を行ったものと思われる。ただし、b面上端は潰し状に両面に剥離面が及ぶ。

④分割面(e)の形成

打点を 180° 転移し、剥離面(f)が形成される。分割面(e)はその際に形成されたか、あるいはその後に分割した際の面かのいずれかである。リングは単極的であるが、b面上端の微細剥離痕が対応して、両極打撃を行った可能性もある。なお、e・fの打面は遺存せず、打面に対して横方向にも石核が分割されたことを示している。

⑤縦長剥片(47)の剥取

再び打面を 180° 転移し、調整痕(A)端部を打撃して、分割面(e)とネガ面(b)の稜線を取り込んで長さ2.4cmの縦長剥片を剥取する。その後 90° 打面を転移し、分割面(a)を打面として剥離面(g)にみられる縦長剥片を剥取している。



第149図 接合資料59剥離痕説明図

⑥分割面(h)の形成

次に分割面(e)を打点として打撃して分割面(h)が形成される。分割された石片は長さ3.0 cmあまりの方柱状のもので、縦長剥片とも考えられるが、h面はポジティブなバルブを留めている。調整痕(イ)で切られるために観察できないが、a面とg面との鋭角部を機能部とした「楔」として使用された可能性もあろう。なお、e面には半円形の打撃痕が残る。

⑦調整痕(イ)の形成

h面上端をa面を打面とする平坦剥離によって調整している。a面側には剥離面は及んでいない。

⑧両極打撃による碎片(48+49)の生成

打面をe面の平坦面に設定し、調整痕(イ)を機能部として両極打撃が行われる。これによって碎片(48+49)が生成される。楔形石器の使用過程を示すものであろう。以上の工程をもって、石核50が廃棄される。

以上の接合資料59は、多くの分割工程を含む点に特徴がある。分割は意図的なものかどうかを判断するのは難しいが、④の分割の前には③の調整痕(ア)が平坦剥離によって施され、また、⑧の最終的な両極打撃の直前には⑦の調整痕(イ)が同じく平坦剥離によって施されていることから考えると、分割とした④・⑥と、両極打撃の⑧は本来同一の意図があったものとも考えることもできる。調整痕(ア)がc面に剥離面が及ばず、b面上端においてのみ潰れ状となるのは、剥離痕の形成が2段階にわたり、前段で平坦剥離によって調整された

後に、潰れをもたらす力が加わったと考えられ、その場合、縦長剥片(47)はこの際に生成された碎片と解釈される。同様に、⑥・⑦の工程も潰れを伴う打撃を想定することも可能である。すなわち、刃部調整を行った後に、対する平坦面を打撃するという「楔」としての使用を、素材の分割を境として③～⑤、⑥・⑦、⑧の3回の単位で抽出することができよう。

①・②の工程については安定した幅広の横長剥片を生成している。生成された横長剥片は石鏃などの小形器種に対応可能な法量を備えていたものと考えられることから、分割して生成された板状素材を石核として剥片の生成を行った後に、「楔」として機能が変化したものと予測される。

(7)小結

石器集中箇所2群を検出した。これらは比高差40～50cmをもって2箇所の微高地の縁辺部にそれぞれ形成された群であり、出土した石器の内容を検討した結果、縄文時代頃に形成されたものと考えられた。

北群の石器は板状素材を石核として多様な形態の大形剥片を生成する工程が看取された。製品の製作はほとんど行われていない。

南群は4種類の石材を素材として、石鏃の製作、楔形石器の使用などが確認された。技術的には石材の差違に影響されず、板状素材を分割して剥片類を生産する共通性を抽出することができよう。

北群と南群の様相の違いは、素材製作と製品製作という段階の差か、あるいは形成された時期が異なることがその原因であろうが、限られた範囲の調査のために判断材料がない。今後の課題として残る。

番号	挿図 番号	写真 図版	取り上 げ番号	所属	器種	石材	幅 (cm)	長 (cm)	厚 (cm)	重量 (g)	剥離角	残存度	稜面
1	135	56	367	北	扶入石器	A類	4.9	3.5	0.55	9.73	118°	完形	○ (打面)
2	135	56	364	北	削器	A類	2.3	3.15	0.8	6.00		両端欠	×
3	135	56	393	北	石核	普サヌ	10.1	10.1	6.6	661.46		完形	×
4	136	57	361	北	剥片	A類	6.2	5.5	1.0	29.38	85°	両側縁欠	×
5	136	57	377	北	剥片	A類	5.9	4.7	0.8	18.01	94°	完形	×
6	136	57	378	北	剥片	A類	5.0	5.3	0.8	22.09	108°	完形	○ (左側縁)
7	136	58	390	北	剥片	A類	2.0	3.7	0.7	6.51	93.5°	左側欠	×
8	136	58	381	北	剥片	A類	2.8	4.0	0.6	4.22	123°	完形	○ (打面)
9	136	58	383	北	剥片	A類	2.8	2.7	0.8	4.97		両側縁欠	×
10	136	58	375	北	剥片	A類	4.1	2.4	0.6	3.44	124°	完形	×
11	137	59	371	北	剥片	A類	5.4	3.7	0.8	11.08	157°	底縁部欠	○ (打面)
12	137	59	SE3	北	剥片	A類	5.6	3.4	1.0	15.74	73°	左側縁欠	○ (打面)
13	137	59	SE1	北	剥片	A類	5.7	4.6	1.1	22.90	114°	完形	×
14	137		SE4	北	剥片	A類	6.3	3.2	1.3	14.50	106°	右端欠	×
15	137		372	北	剥片	A類	4.8	3.1	0.6	6.96	125°	完形	○ (打面)
16	137		386	北	剥片	A類	3.9	2.5	0.5	5.12	138°	完形	○ (打面)
17	137		379	北	剥片	A類	5.4	4.8	0.9	12.50	140°	完形	×
18	138	60	SE2	北	剥片	A類	3.8	6.7	0.8	13.06	92.5°	完形	×
19	138	60	380	北	剥片	A類	3.5	5.0	0.7	8.59	98°	完形	×
20	138	60	368	北	剥片	A類	3.8	4.7	0.7	11.48	100.5°	完形	×
21	138	60	376	北	剥片	A類	3.8	5.7	0.7	15.16	99.5°	完形	○ (打面)
22	139	61	SE6	北	剥片	A類	4.5	5.5	1.0	19.32	96°	完形	○ (左側縁)
23	139	61	373	北	剥片	A類	4.9	4.5	0.9	14.27	134.5°	完形	×
24	139	61	369	北	剥片	A類	2.0	3.3	0.3	1.81	100°	端部欠	×
25	139	61	363	北	剥片	A類	2.0	3.7	0.6	3.85	141°	右端欠	×
26	145	62	324	南S-5	石核	A類	4.5	6.3	1.2	41.53		完形	×
27	145	62	323	南S-5	剥片	A類	1.7	4.4	1.2	7.53		完形	×
28	145	62	348	南S-3	碎片	A類	2.4	1.2	0.5	1.93		完形	×
29	145	62	358	南S-4	碎片	A類	1.7	2.2	1.1	1.69		基部欠	○ (背面)
30	145	62	331	南S-1	碎片	A類	2.6	1.6	0.6	1.55		完形	×
31	145	62	352	南S-4	碎片	A類	1.6	2.3	0.6	2.60		完形	×
32	145	62	325	南S-5	碎片	B類	2.3	1.7	0.6	1.92		完形	×
33	146	63	318	南S-5	石鏃	B類	2.2	2.2	0.5	1.45		先端部及 び右基部 欠	×
34	146	63	301	南S-6	剥片	B類	1.6	1.1	0.3	0.26		完形	×
35	146	63	345	南S-3	剥片	B類	1.3	1.0	0.3	0.28		完形	×
36	146	63	311	南S-5	剥片	B類	1.3	2.0	0.2	0.50		完形	×
37	146	63	328	南S-1	剥片	B類	3.3	1.3	0.3	1.08		完形	×
38	146	63	354	南S-4	剥片	B類	1.7	2.3	0.4	1.18		完形	×
39	146	63	347	南S-3	剥片	B類	2.7	3.4	0.7			完形	×
40	146		340	南S-2	剥片	C-1類	1.6	1.7	1.0	1.58		完形	×
41	146		344	南S-3	剥片	C-1類	1.8	1.5	0.2			完形	×
42	146		341	南S-2	剥片	C-1類	1.8	1.3	0.3	0.41		完形	×
43	146	64	351	南S-3	剥片	C-2類	2.1	1.4	0.5	1.38		完形	○ (底縁)
44	146	64	300	南S-4	剥片	C-2類	1.7	1.2	0.3	0.48		完形	×
45	146	64	310	南S-5	剥片	C-2類	3.2	2.4	0.8			完形	×
46	146	64	351	南S-4	縦長剥片	C-2類	1.3	2.4	0.5	1.45		完形	○ (側縁)
47	146	64	317	南S-5	縦長剥片	C-2類	0.9	2.4	0.6	1.02		端部欠	×
48	146	64	305	南S-5	分割碎片	C-2類	0.9	1.9	0.6	1.14		完形	×
49	146	64	319	南S-5	分割碎片	C-2類	1.0	1.9	0.5	1.35		完形	×
50	146	64	306	南S-5	石核	C-2類	1.4	3.3	1.0	4.50		完形	×
51	146	64	312	南S-5	石核	C-2類	2.9	2.7	1.0			完形	×
52	147	65	C-3		石鏃	B類	1.6	3.1	0.4	1.88		基部欠	×
53	147	65	SR21		安山岩		1.5	2.1	0.3	0.73		完形	×
54	147	65	52		削器	A類	5.1	5.8	0.7	24.58		右側縁欠	○ (側縁)
55	147	65	47		剥片	A類	5.1	4.9	0.8	22.38		完形	×
56	147	65	SE10		剥片	B類	2.9	4.0	0.8	6.46		完形	×
57	147	65	SE9		縦長剥片	C-2類	2.0	3.6	0.5	4.64		左側縁欠	○ (背面)
58	148	65	370,374		剥片	A類	5.1	2.6	0.6				×
59	148	66	305,306, 317,319	南S-5	接合資料	C-2類	3.3	2.5	1.1				×

第44表 川西北七条 I 遺跡出土石器一覧表

第4節 弥生時代以降

弥生時代以降，調査地の中央に幅40mほどの河川が黄色系シルト層を切り込んで走行する。その東西両岸には溝や土坑が分布する。居住関係の遺構は全く見られず，すべては農業水路とその関連遺構に限定されうる。

以下，土坑，溝，河川，包含層の順で報告する。

(1)土坑

SK-01

C-3区の東よりで検出した円形の土坑である。深さ0.4mで底面が二段に掘られる。埋土は黒灰色土がブロック状に混じる灰色シルト層で，出土遺物はない。

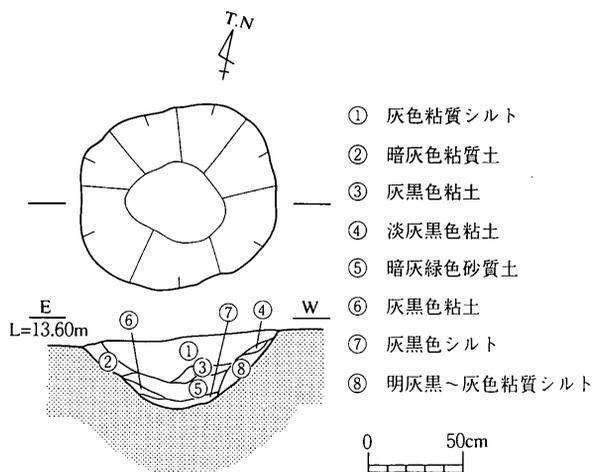
SK-02 (第150・151図)

D-2区のSR-01埋土を切り込んで作られたややいびつな円形の土坑である。深さ0.4mをはかり，断面は半円状を呈す。埋土は灰色～黒色の粘質シルト層で，底面近くでシルト層と粘土層の互層となる。

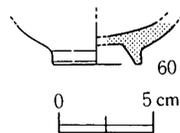
埋土の中層（5層）より陶胎染付の底部片が出土している。江戸時代後半期の所産である。

SK-03～07 (第152図)

3区G-2区で検出した土坑群である。SK-03～SK-05は鎌倉期の溝SD-04を切り込んで，



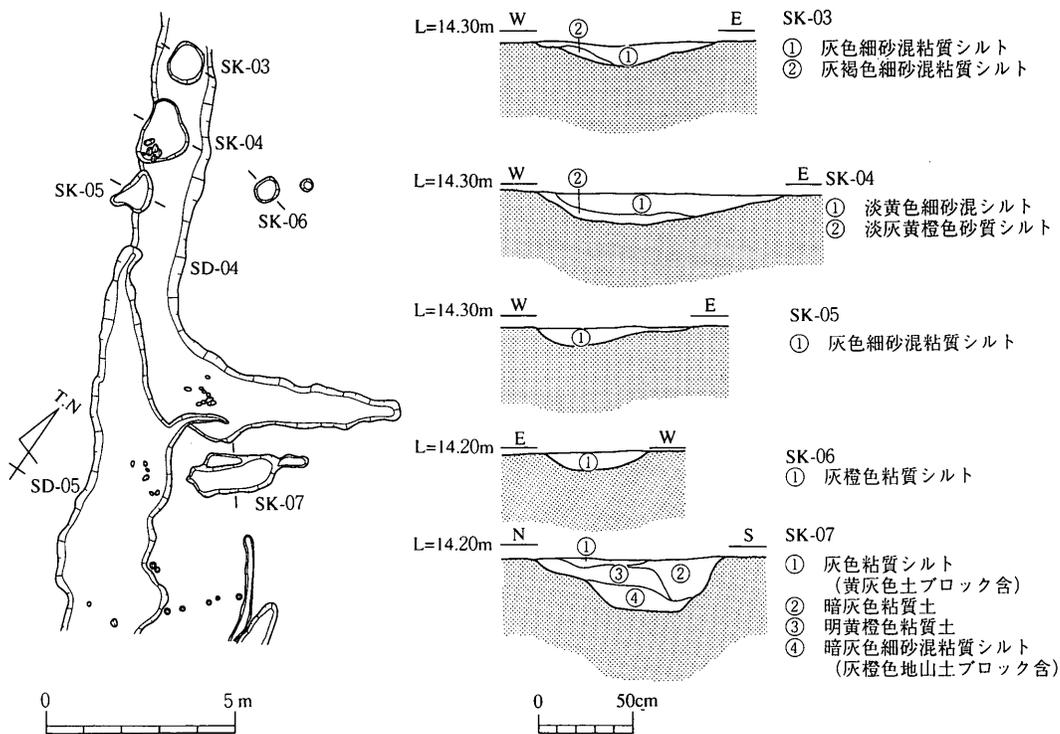
第150図 SK-02実測図



第151図 SK-02出土遺物実測図

一列に作られた不定形土坑である。大きさは概ね1mほどで、深さは0.2~0.3mと浅い。SK-04は埋土中に拳大の礫を含んでいた。SK-04, SK-05から図化不能の土器細片が出土している。

SK-06は直径0.6mの円形土坑で、深さは0.1m。出土遺物はない。SK-07はSD-04が東方向に屈曲するのに沿って設けられた長楕円形の土坑である。深さ0.3mで2段の掘り形をもつ。出土遺物はなかったが、位置的にみて、SD-04に付属する可能性が高く、SK-03~05に先行するものと思われる。

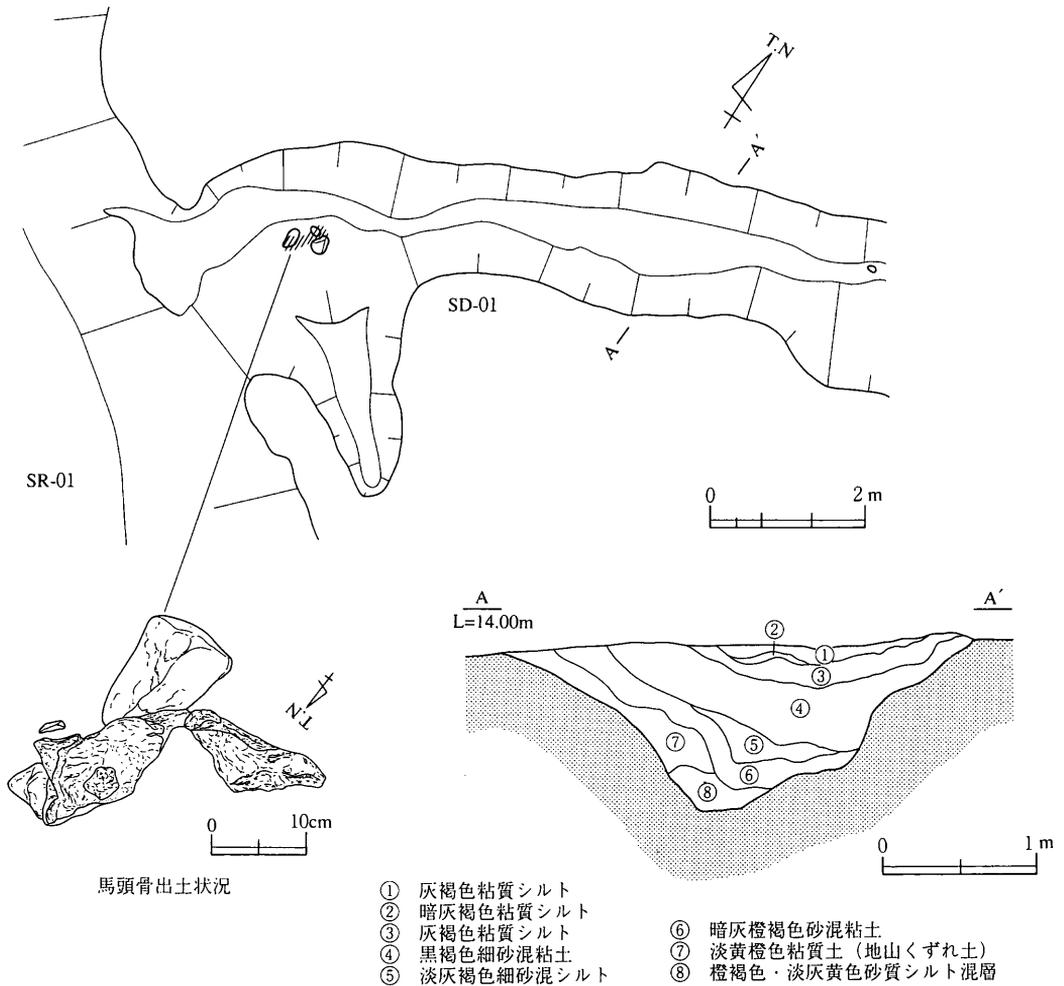


第152図 SK-03~07実測図

(2)溝

SD-01 (第153図)

2区E-3・4区で検出された溝である。N-115° -Wで西に走行し、SR-01に合流する。合流部分でやや南に屈曲し、SR-01とはほぼ直角に交わる。幅は3.0mで、深さは断面取得位置で計測して1.1mである。SR-01に近づくにしたがって次第に深くなる。断面形状は「V」字状を呈す。埋土は上層(①~④)が黒色系の粘質シルト層で、下層(⑤~)が褐色系の細砂混じりシルト層である。底面付近では基盤の黄色系シルト層がブロック状に混



第153図 SD-01実測図

在していた。

SD-01がSR-01に交わるやや西側には、南肩部に長さ2.5mほどの別流路が取り付く。基盤面から約20°の傾斜で掘り込まれ、SD-01の底面から0.15mの高さのところ段を形成して合流する。

いずれの箇所においても、土器等は出土しなかった。ただし、SD-01と付属する小溝の合流点、巨視的にみてSD-01がSR-01と合流する地点の底面において、馬頭骨1個体が出土した。骨は15×10cm大の砂岩垂角礫の上に安置されており、左を下に、鼻先を西に向けている。上顎骨の左側が遺存しており、それに伴って臼歯が出土している。下顎骨および上顎骨の右側は滅失するが、左側は良く原型を留めることから、当初からこの位置に埋置されたものとする。重量がある上腕骨やその他の骨が片鱗も見られないことから、馬

の全身が溝に投棄された可能性は低いであろう。出土骨の詳細は、第5章を参照されたい。

溝の所属時期は、SR-01の存続時期と関わって、弥生時代中期～奈良時代の幅が考えられる。SR-01は出土している土器等から、弥生中期～後期と古墳末期～奈良の概ね2期に分けられる。SD-01がいずれの時期かを特定する積極的な根拠はないが、SR-01埋没後の平安期に掘開されるSD-02とは概ね90°の角度を有しており、SD-02の走行方向はすでに存在していたSD-01に関連する地割りの方向性に規制された可能性があると考えられる。その場合、SD-01の掘削時期はSR-01の中でも、より新しい後者の段階に位置づけるのが適当である。

SD-02 (第154～156図)

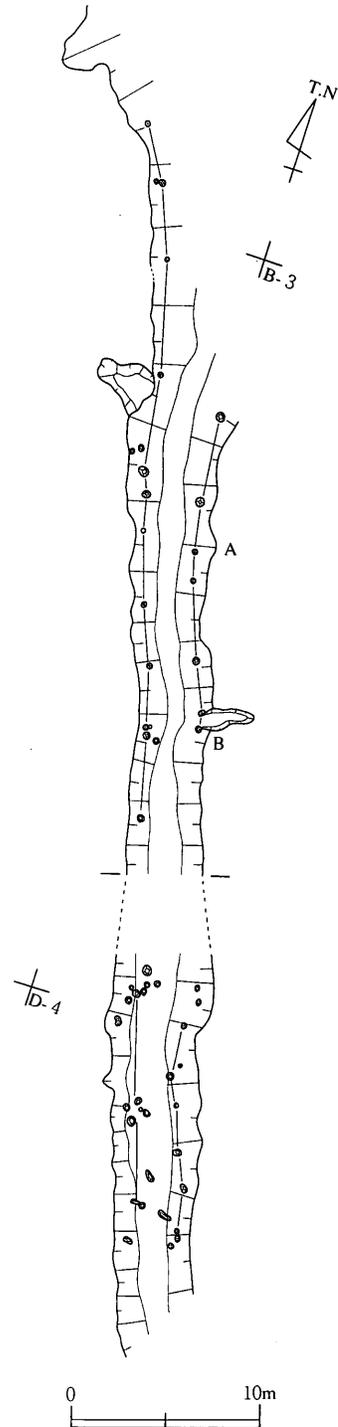
調査地の東端を南北方向に走行する比較的大規模な溝である。幅が4～5mで、深さは0.7～1.0mを測る。断面は「U」字状を呈す。直線的に走行するが、調査区の北端でやや東に向きを変える傾向にある。

東西兩岸に杭列が確認できる。杭は3～4m間隔で設けられ、杭痕を立ち割って断面を観察した結果、深さ0.7～1.0mの深い掘り形内に径7～10cm大の柱を据えていることが判明した。形態的には掘立柱建物の柱穴構造に共通する。

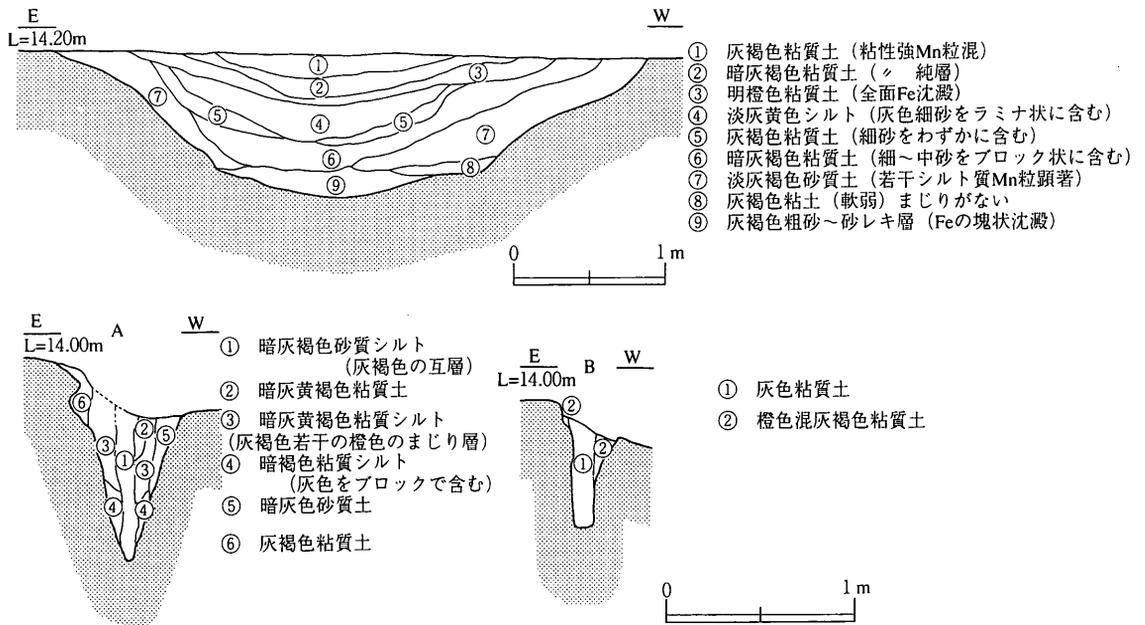
調査区の北側を中心として3箇所に排水口が存在する。そのうちもっとも南の排水口は、2本の杭を伴っている。

溝の埋土は上層と下層に区分でき、上層は粘質シルトを主体とし、摩滅を受けた土師器小片が伴っている。下層は砂混じりのシルト層で、あまり摩滅しない土師器が坏を中心に出土している。

当該溝は排水口の付設などからみて、農業用水路であ



第154図 SD-02平面図



第155図 SD-02断面図

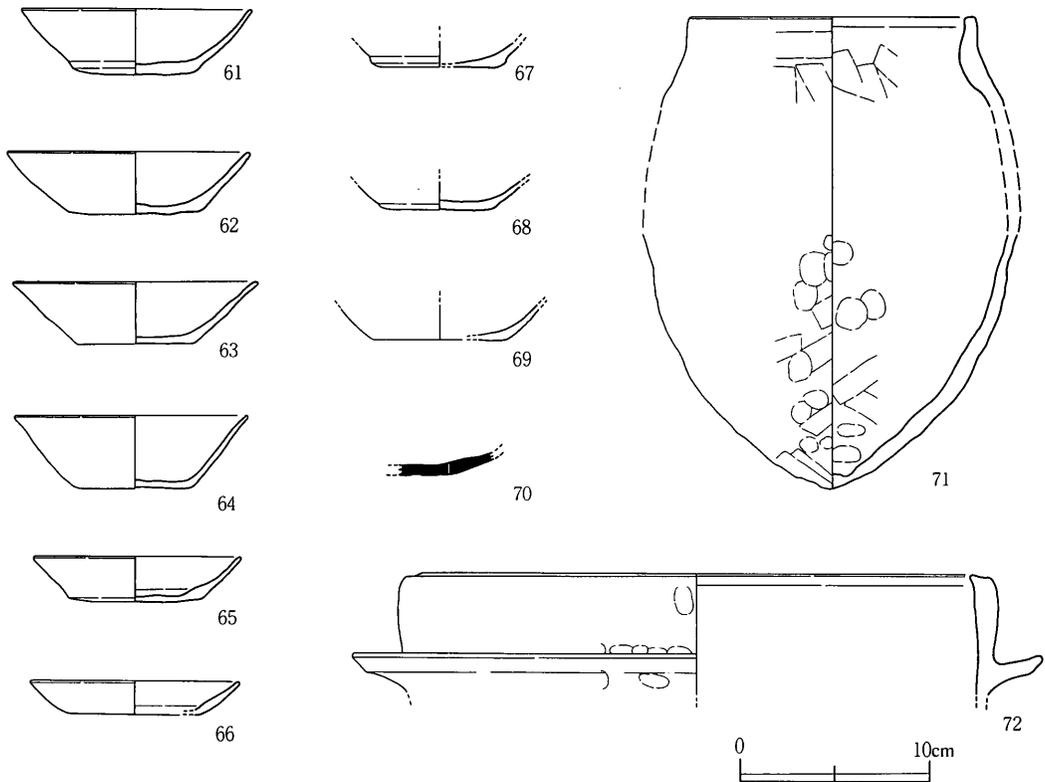
ることは間違いない。それも、規模が大きく杭列を伴っていることなどから、当該地一帯の灌漑システムの改変に伴って掘開された基幹的水路であった可能性が高い。SR-01が埋没してその上面が耕地化する段階に該当するものと思われる。溝の方位はN-15° -Wで、丸亀平野の現存方格地割とは若干異なっている。これは、SR-01と併存したSD-01の段階の地割りを、基本的には踏襲していることに起因するものと思われる。

出土遺物は土師器坏多数に蛸壺，土釜が伴っている。このうち，64・68・71は最下層(⑨)から，67は上層(①~③)から出土しており，その他は下層上位(④)から出土している。土師器坏はすべて底部をへら切りし，丁寧にナデ調整を行っている。胎土は黄橙色系の精良なもので，器壁が全体的に薄く，体部外面は回転台ナデが顕著である点で共通している。いずれも安定した大きめの底部をもち，体部が長く直線的に外上方に延びるもの(61~64)と短く延びるもの(65・66)がある。64は体部が長い点で古相を示し，他も体部下半が直線的である点で古相を留めている。13世紀前半を主体とするものと考えが，上記の古相を示す特徴は従来の中讃地域の編年(片桐編年)からみて11世紀後半頃にも遡り得る可能性を残して。また，65・66は14世紀前半頃まで下り得る形態である。

71の蛸壺は口縁部の外反度が緩く，底部が強く尖る特徴を有す。内外面を板ナデ，指押さえで整形する。12世紀後半の川津元結木遺跡SD10第2溝出土蛸壺より新しい形態である。

72の土師器土釜は体部外面に鐔が付き、体部からそのまま口縁部にいたる形式で、片桐分類のC類に該当する。ただし、鐔から口縁部までが長く間延びし、口縁端部を肥厚させる特徴は従来中讃地域に一般的な形態ではない。口縁端部を窪み気味に仕上げる特徴は体部の形態を無視すれば、12世紀後半頃に特徴的であり、該期以降に位置づけられよう。

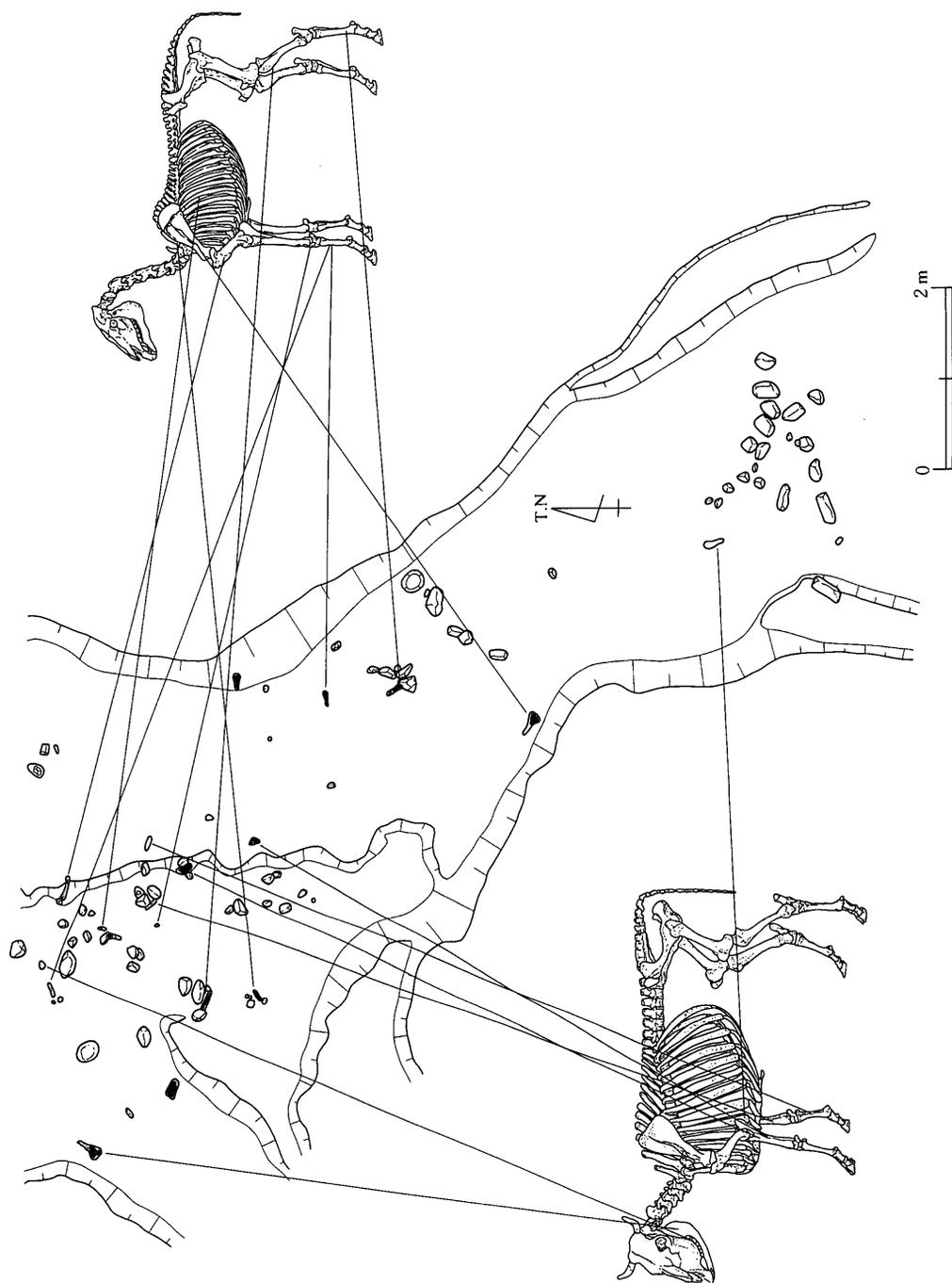
以上のように、土師器坏が従来の編年からみると11世紀後半～14世紀前半までの広い時期幅が想定される。他の器種を含めて考えると、13世紀前半までに盛んに土器投棄が行われ、その後14世紀前半までに埋没した溝と考えられる。



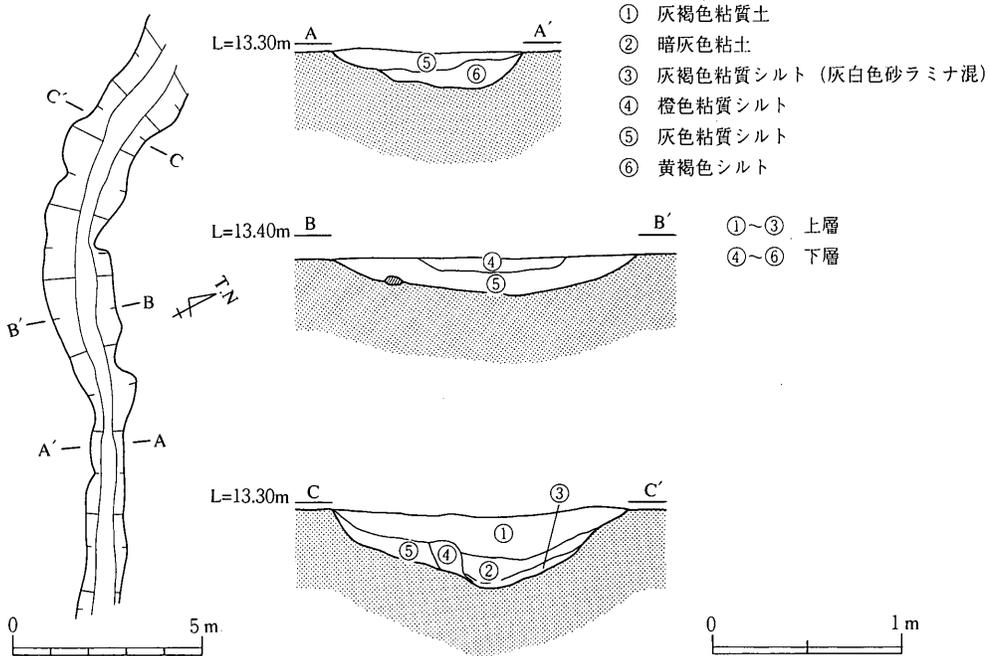
156図 SD-02出土遺物実測図

SD-03 (第157～159図)

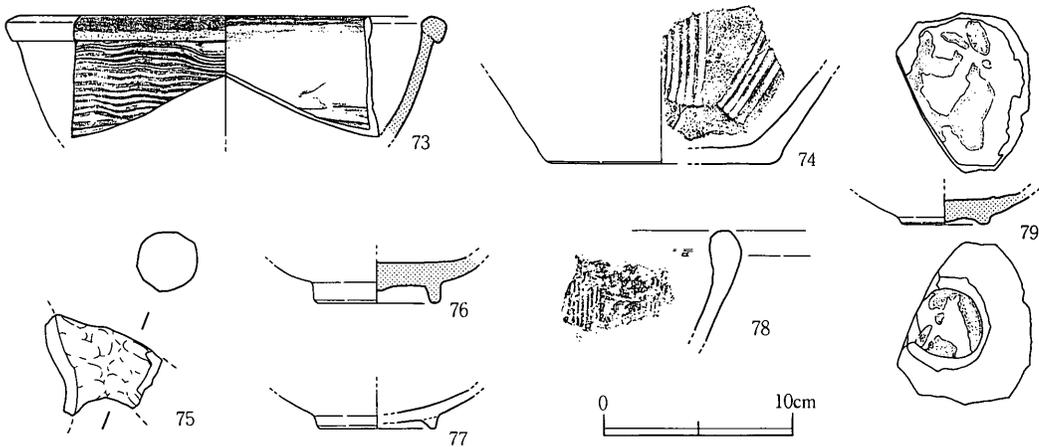
2区の西側を北西方向に向かって走行する溝である。下流に向かうほど幅が広がり、調査区北端では面的に広がって落ち込み状となる。深さは0.2～0.6mで断面は皿状を呈す。埋土は灰色系シルト層で、上流部では粘土質となり、下流では細砂のラミナー堆積を伴っている。



第157图 SD-03北半出土牛馬骨分布图



第158図 SD-03南半実測図



第159図 SD-03出土遺物実測図

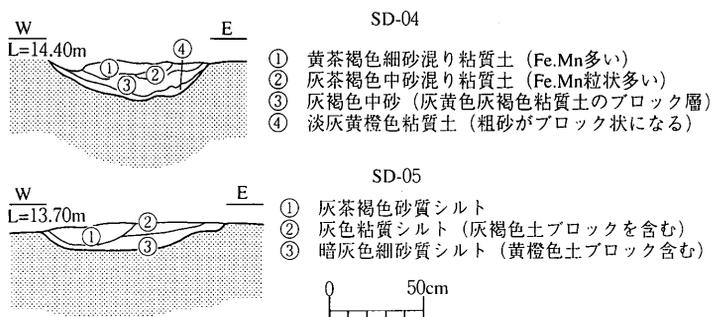
73は唐津系刷毛目塗りの陶器鉢である。暗赤褐色の胎土に乳灰色釉を施す。74は土師質播鉢で5条単位の粗い卸目をもつ。75は土師器土釜脚部片。76は厚手の青磁碗底部片。多孔質の胎土に緑味のある釉を施す。高台内面は無釉。内面見込み部に陰刻花文がみられる。77は土師器碗底部で断面三角形の高台が付す。78は土師質播鉢口縁部片。卸目はやや細かい。79は施釉陶器の皿で、内面に深緑色釉を施す。内外面に砂目痕を残している。

以上の出土遺物は14世紀前半から江戸時代中期頃の時期幅をもつ。

また、溝の北側を中心に牛馬骨が多数出土した。第5章に詳しいが、出土する部位が特

に偏る傾向はなく、解体痕は確認できないことから、遺体が廃棄された場であったことが想定される。牛馬骨の出土層位は概ね上層相当層に比定されることから、廃棄された時期は溝の下限である江戸時代中期頃と考えるのが妥当である。

調査区が分断されているために、当該溝と1区の包含層中に予想される水田層との対比ができないが、多量に廃棄された牛馬骨を考慮すると水田用水路として機能していたかどうか疑わしい。むしろ北側が面的に広がる落ち込み状となることから、調査区北西外の旧河道上部に、水田化していない澱み状の沼地帯が存在したことを示唆するものであろう。後述するようにSD-03埋没後の用水路機能はSD-07が踏襲したものと思われ、当溝はSD-07から分岐した排水路的な機能を持つものと考えられる。



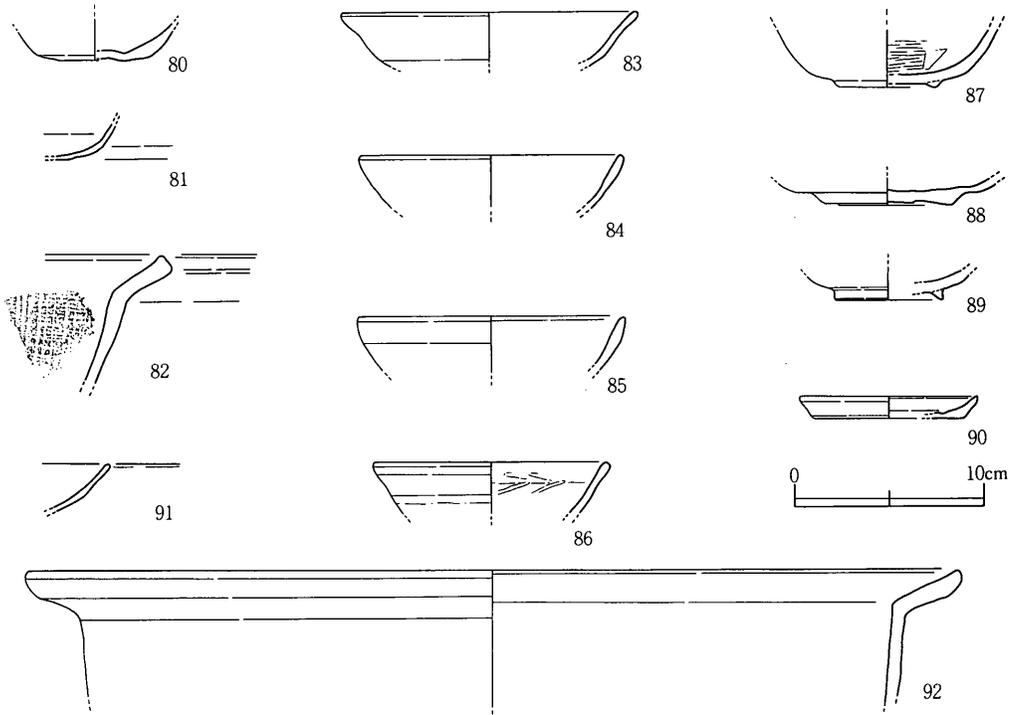
第160図 SD-04・05断面図

SD-04・05・06 (第160・161図)

3区西端で検出された現状方格地割に沿った溝である。SD-04は幅1.65m、深さ0.4cmで調査区中程で「L」字状に屈曲している。SD-05はSD-04の南に位置し、幅1.9m、深さ0.3mの規模をもつ。SD-05はSD-04に後出するような切り合いを調査中に検出したが、元来同一溝の可能性が高い。遺構面は削平されており、埋没の過程を切り合いと誤認したものと思われる。埋土はいずれも灰色系シルト層である。SD-06はSD-05に付属する小溝である。

80～82はSD-04から出土したものである。80・81は土師器坏で底部はヘラ切り。体部下半は緩やかに立ち上がるものである。82は土師器土鍋で頸部が「く」の字に屈曲し、体部は球形を呈するものであろう。屈曲部の内面の稜線は明瞭でない。体部外面は指押さえ、内面は縦横の粗い刷毛目。口縁端部は上方につまみ上げて端面をナデ調整している。

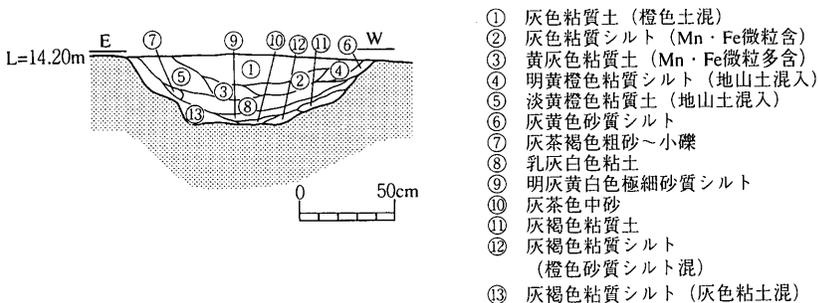
83～92はSD-05から出土したものである。83・91は吉備系土師器碗の口縁部片、84・85



第161図 SD-04・05出土遺物実測図

は口縁部がやや肥厚する土師器碗である。86は和泉型瓦器碗口縁部，87は高台部である。88は土師器坏底部でヘラ切り痕を明瞭に留める。89は土師器碗高台部片。90は土師器小皿。92は土師器土鍋である。

以上の土器は13世紀後半～14世紀前半に所属するものである。



第162図 SD-07断面図

SD-07 (第162図)

2区で検出した小規模な溝である。方向は現存方格地割に沿っている。幅は1.4m、深さ0.4mを測る。断面は逆台形状を呈す。埋土は灰色系シルト層で、砂層を間に挟む。土

器片少量が出土しているが、時期を特定できるものはない。埋土中層より馬歯が1点出土している。埋土の色調や土質はSD-03に近似しており、同時期に存在したものと考えられる。

1区では検出されていないことから、北側はすでに削平されたものと考えられる。なお、SD-04・05との距離は55mを測り、半町分の長さに相当する。

(3)旧河道とその付属遺構

SR-01・SX-01 (第163～171図)

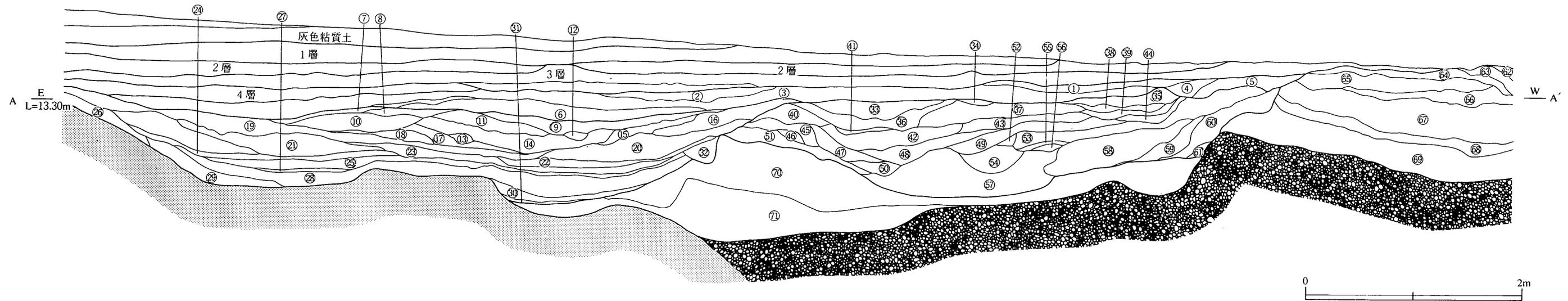
幅40mの自然河川跡である。北西方向に走行する。その痕跡は調査前に現状地割において確認され、また、古い空中写真を観察すると調査地から北方の双子山までの間で、幅が広がっており双子山を境にして東西に分岐する様子がわかる。

調査によって確認したもっとも古い遺物は、西肩で検出した弥生時代中期頃の土器である。河川の最深部はG-2区で設定したトレンチによって現地表面から3.3mの深さで基盤のシルト層に到達しており、弥生時代以前から河道は存在していたものと思われる。

面的な調査が可能であった箇所は、先の西肩の一部と、東肩の北側、南側である。東肩では河道が西に蛇行して一旦調査区外へ逃げていることから、2区北側付近では河道の肩を検出することはできなかった。このような部分的な範囲の調査となったことから、必ずしも系統的な河道の堆積状況は追跡できていない。

断片的であるが土層断面(第130図)の観察から判断すると、西肩に相当する3区では、弥生中期の土器が出土した堆積層の下位に厚さ2mの礫層が堆積していた。礫層は間にシルト・粘土層を挟んでいることから、弥生時代中期以前に活発な流路堆積が行われたことを示している。この礫層を基盤として弥生時代中期のシルトを中心とした堆積層が広がっている。

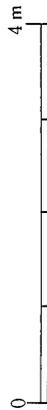
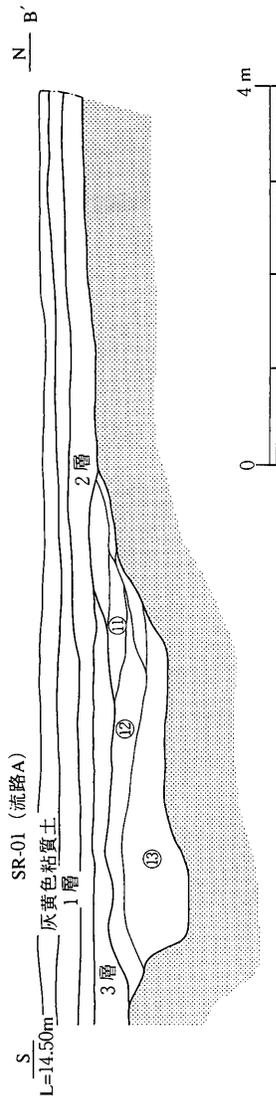
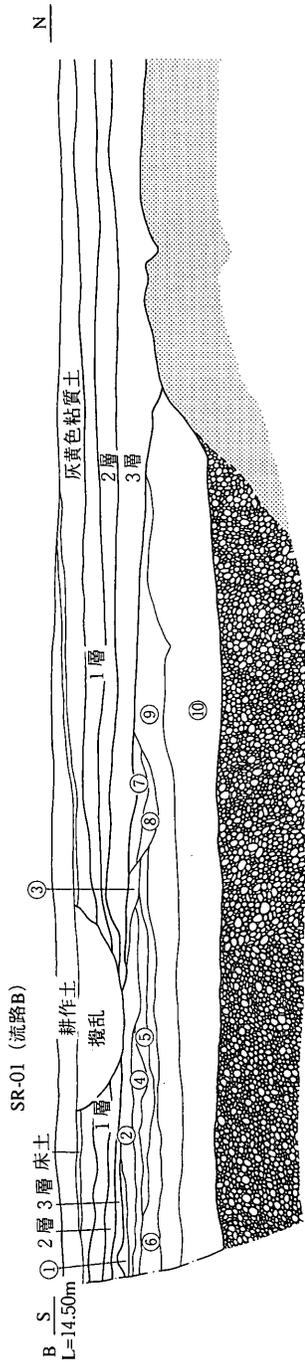
この礫層は1区の東肩では地表下2.0mほどの深さで確認できる。礫層の上面には砂層・シルト層・粘土層の堆積が1.5mほど認められ、その中で、いくつかの流路の単位を抽出することができる。断面図(第163図)で説明すると、最も西に位置する単位は弥生時代後期後半の土器が出土しており、礫層を基盤として砂質シルトの堆積層中に2層の砂層堆積が確認できる。中央の単位は古墳時代末期の土器が出土しており、下層は細礫層・漆黒色粘土層が比較的単純な堆積をし、上層では砂層を間に挟んでシルト層が約1m堆積している。



- | | | |
|--------------------------------|--------------------------------------|------------------------|
| ① 淡灰褐色粘質土 (Fe) | ②⑤ 灰白色弱粘質土 | ④⑨ 暗灰色小礫混粘質シルト |
| ② 灰褐色弱粘質土 | ②⑥ 暗灰色粘質土 (風化礫少量混) | ⑤⑩ 灰黒色粘土 (白色砂ブロック少量混) |
| ③ 灰褐色砂質土 | ②⑦ 灰緑粗砂～砂質 | ⑤⑪ 暗灰色粘土中～小礫 (砂岩風化礫) |
| ④ 暗灰褐色砂質土 | ②⑧ 黒色粘土 (灰青色細砂ラミナ状・炭化物多混) | ⑤⑫ 黒色細礫混粘質シルト |
| ⑤ 暗橙色砂質シルト | ②⑨ 漆黒色粘土 (白色砂粒混) | ⑤⑬ 暗灰色シルト (ラミナ状) |
| ⑥ 明橙褐色砂質土 | ②⑩ 漆灰黒色シルト (木片多く含む) | ⑤⑭ 淡灰黒色砂質シルト (白色砂粒少量混) |
| ⑦ 淡灰色砂質シルト | ②⑪ 灰黒色砂質シルト (木片多く含む) | ⑤⑮ 灰黄・灰青細砂 |
| ⑧ 暗灰褐色砂質シルト | ②⑫ 淡黄灰色粘土 (細礫～中礫ブロック混) | ⑤⑯ 淡灰青色粘質シルト |
| ⑨ 暗灰砂質シルト | ②⑬ 灰茶褐色粘質土 (Mn・Fe多) | ⑤⑰ 灰色小～中礫 |
| ⑩ 灰茶色砂質土 | ②⑭ 暗灰褐色粘質土 | ⑤⑱ 黒色粘土 (淡灰青色小粒多混) |
| ⑪ 暗灰色粘質シルト (黄色ブロック混) | ②⑮ 暗灰茶褐色砂質シルト (明橙色砂ブロック) | ⑤⑲ 灰黒～淡灰青色粘質土 |
| ⑫ 灰黄褐色中砂 | ②⑯ 淡灰黒色粘質シルト (黒色粘・黄灰・黄橙粘・小粒ブロック多混) | ⑤⑳ 黒色砂質シルト |
| ⑬ 灰黄灰白色粘土ブロック | ②⑰ 暗灰褐色細～中砂 (砂岩風化小礫含) | ⑤㉑ 暗茶色小～中礫 |
| ⑭ 暗灰色砂質シルト (白色砂ブロック少量) | ②⑱ 淡灰褐色砂質シルト | ⑤㉒ 暗灰色粘質シルト |
| ⑮ 暗灰色砂質土 | ②㉑ 暗灰褐色砂質シルト | ⑤㉓ 茶灰色砂質土 |
| ⑯ 暗灰橙色砂質土 (橙色粗砂ラミナ状) | ②㉒ 暗灰褐～暗橙茶褐色細砂 | ⑤㉔ 淡灰褐色粘質土 |
| ⑰ 暗灰色砂質シルト (黒色粘土及び黄色シルトブロック状混) | ②㉓ 暗灰茶色砂質シルト | ⑤㉕ 茶黒色粘質土 |
| ⑱ 茶色橙細砂 | ②㉔ 暗灰粘質シルト (細～中礫や黄灰白色・黄橙色粘質シルトを多く含む) | ⑤㉖ 茶黒色砂質シルト |
| ⑲ 暗灰黒色粘土 | ②㉕ 淡灰褐色砂質土 | ⑤㉗ 黒色シルト～粘土 |
| ⑳ 暗灰黄褐色中砂～暗灰色砂質シルト | ②㉖ 淡黄褐色細砂 | ⑤㉘ 暗灰黄黒色細砂 |
| ㉑ 灰黒色粘質土 (黒色細砂・橙色粘土ブロック混) | ②㉗ 明黄橙色粘土 | ⑤㉙ 淡灰青色砂質シルト |
| ㉒ 暗灰緑色粗砂 (暗灰色シルトラミナ状混) | ②㉘ 淡黄褐色砂質土 | ⑤㉚ 漆黒色粘質シルト (明灰緑色粘土粒混) |
| ㉓ 灰黒色粘土 (木混) | ②㉙ 灰黒色砂質シルト | ⑤㉛ 淡灰色小～中礫 (主に砂岩) |
| ㉔ 明灰黄緑色シルト | ②㉚ 淡灰黒色粗砂 (細礫多く、若干シルト質) | |

- ①～⑫ SR-01 流路A
 ⑬～⑲ SR-01 流路B
 ⑳～㉛ SR-01 流路C

第163図 SR-01断面図(1)



- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| ① 灰色細・中砂混シルト | ⑧ 灰黄褐色小礫混細砂 |
| ② 灰黑色細砂質シルト | ⑨ 黑色細・中砂混粘質シルト |
| ③ オリーブ褐色中砂および小～中礫混砂質土 | ⑩ 灰緑色細砂層 |
| ④ 暗オリーブ褐色中～細砂混砂質シルト (Fe・Mn多) | ⑪ 暗灰褐色細砂混粘質土 |
| ⑤ 黑色細砂混粘質シルト | ⑫ 黒灰色細砂混粘質シルト |
| ⑥ 漆黒色細砂混粘質シルト | ⑬ 黒色細砂混粘質シルト (白色砂質シルトをラミナ状に含む) |
| ⑦ 淡灰黒色粘質シルト | |

第164図 SR-01断面図(2)

東側の単位は奈良時代の土器や木製品が出土しており、黒色シルト層を基調として薄い砂層が多数貫入する状況がみられる。中央の単位と東側の単位はその境界が明瞭でなく、中央の単位の砂層が一部東側へ傾斜しながら堆積している状況がみられることから、中央と東の単位は必ずしも明確に区分できるわけではなく、同時期に堆積する時期があったことも考えられる。2区においては、河道域が一部しか含まれないことから、SD-01が合流する地点の流路単位が1区のどれに対応するか判断が難しい。

以上の観察の結果、幅40mの河道域内を弥生時代中期以降概ね西から東にその主たる流路を移しながら推移したことが想定される。以下、各流路の単位を下記のとおり区分し、流路単位で報告する。

流路A	奈良時代	(1区東側の単位)
流路B	古墳時代末	(1区中央の単位)
流路C	弥生時代後期	(1区西側の単位)
流路D	弥生時代中期	(3区)

－流路A－

1区において流路を平面的に把握できる。第165図に自然木を含めた出土遺物の分布図を示している。これによると、南側では流路Aが東に強く蛇行した後に、北に向きを変え、その部分に土器や木製品が投棄されている。この蛇行や屈曲は、自然に形成されたと判断するには平面形状の変化が激しいことから、人工的に掘開した可能性を考慮する必要がある。SX-01の西側に見られる排水口は、川岸に水田が接していたことを示唆する。

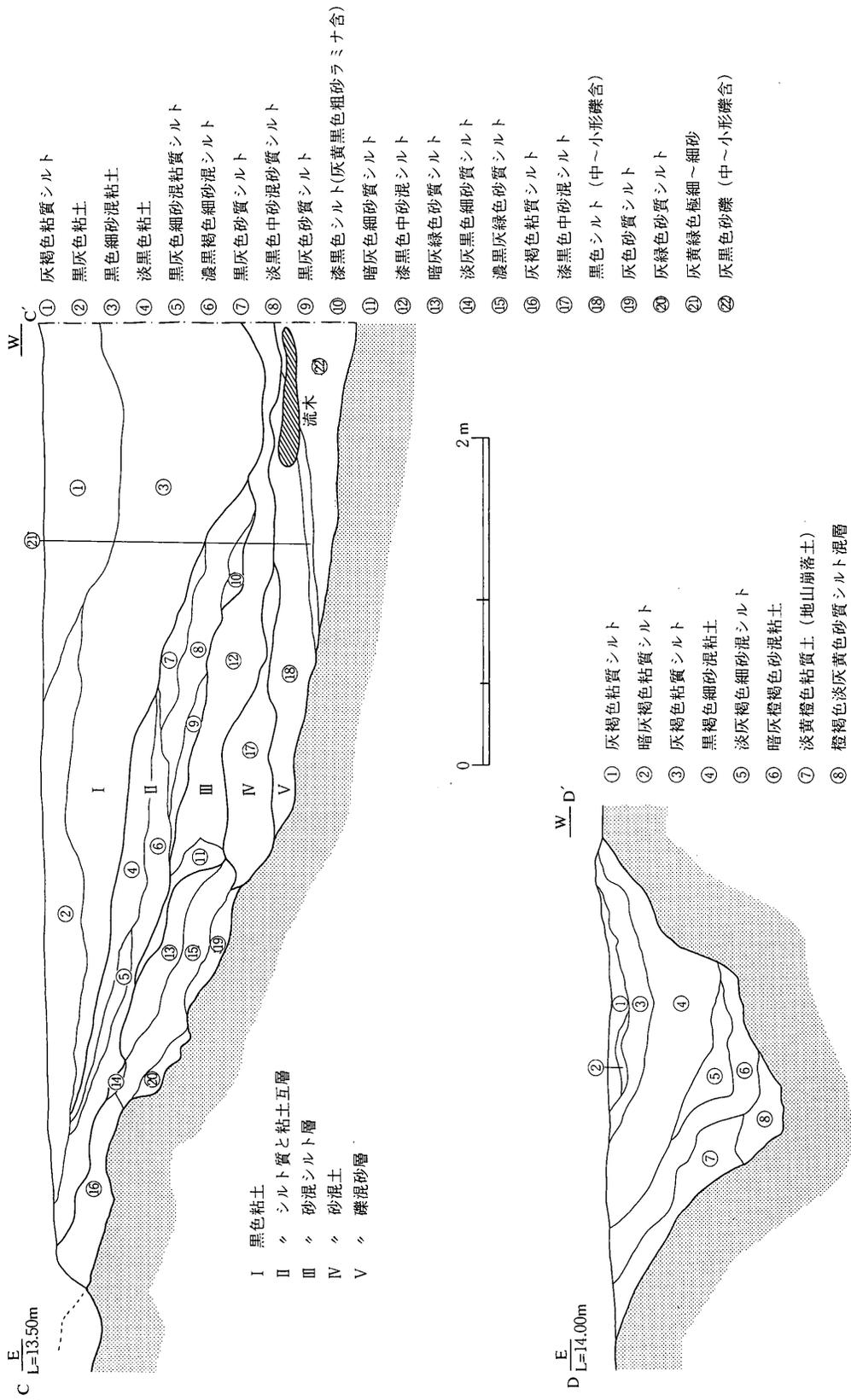
1区南側では自然木の分布に一定の方向性を見ることができ、これが流路Aの流路域を反映しているものと思われる。断面図によれば、流路Bの方向へも水の流れはあったものと思われるが、主たる水流は流路A側と考えられる。

出土する木製品は板状・棒状木製品が土器とともに一箇所に集中する傾向があり、杭材等は流路内に散漫に分布する。出土した土器から奈良時代に相当する。

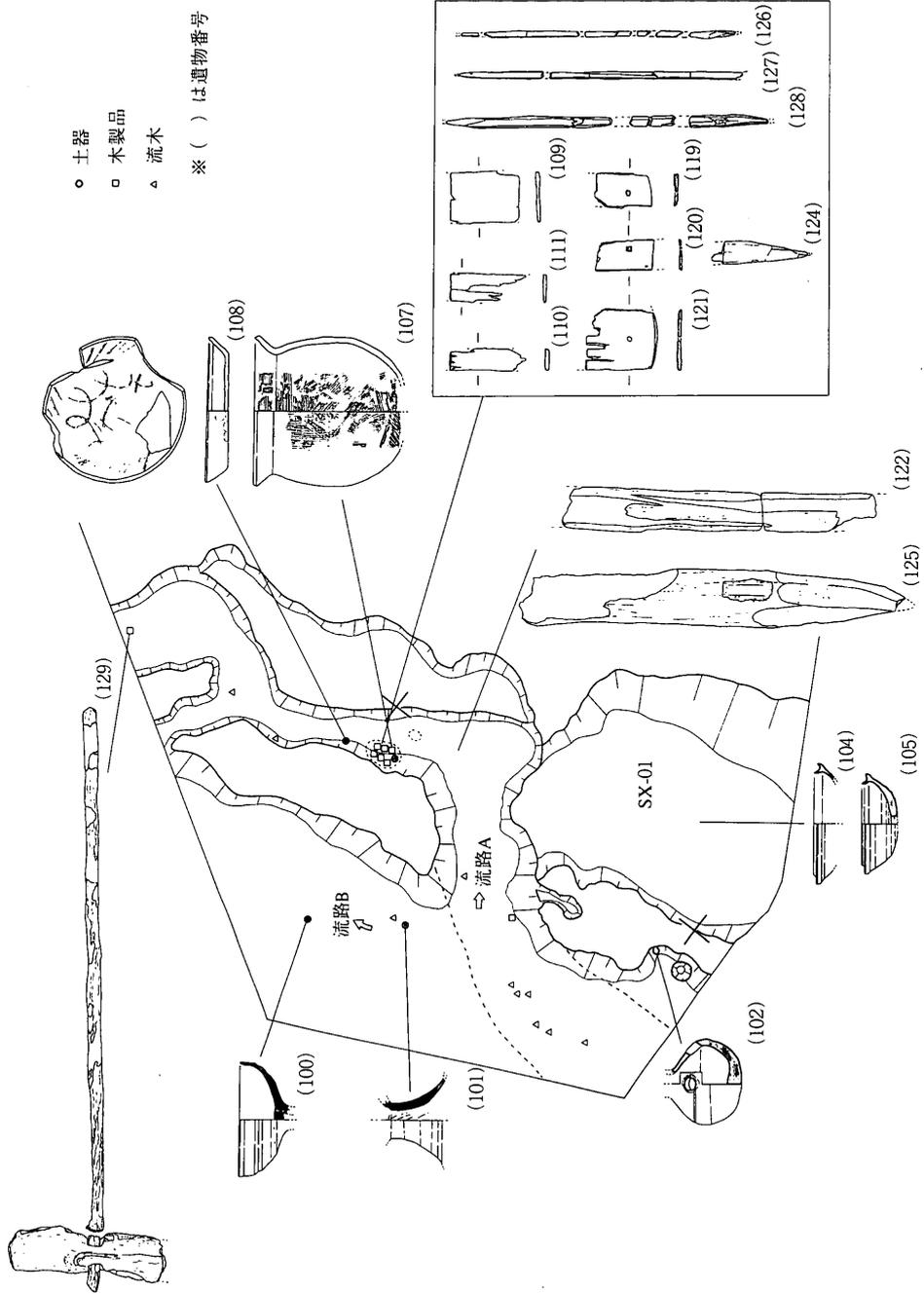
－流路B・SX-01－

1区において、流路Aに切られるかたちで確認できる。平面的に把握したわけではないが、自然木や木製品はほとんど含まれず、土器片が散漫に分布するにとどまる。

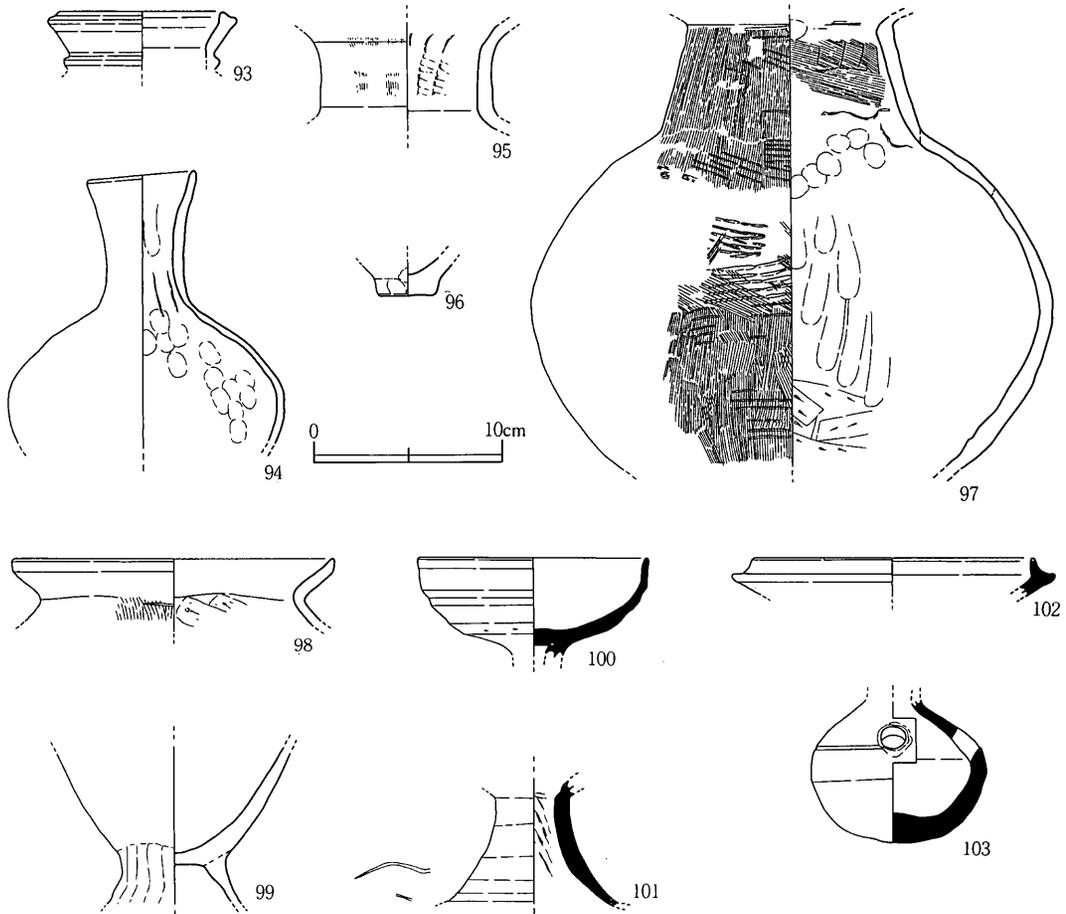
SX-01は出土した土器からみて流路Bに元来ともなっていたものと思われる。SX-01は土層断面(第129図)で観察すると、最上層が基盤の黄色系土が多数混じるブロック状の埋土が確認されており、人工的に埋められた可能性が高い。



第165図 SR-01 (2区部分断面図)



第166図 SR-01遺物出土状況



第167図 SR-01出土遺物実測図

上記の流路Aの蛇行や屈曲が人工的に掘開されたとすれば、それによって生成される土で埋めたものとも考えられる。

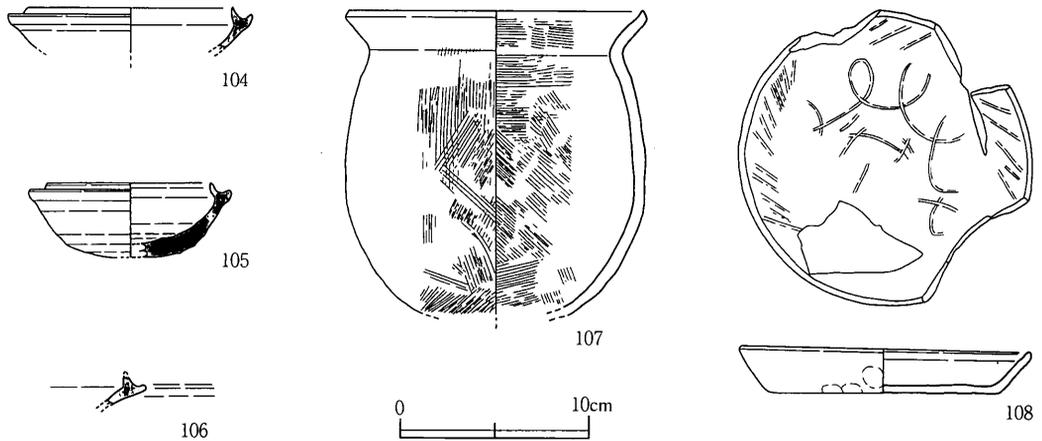
出土した土器から古墳時代末の7世紀代前半に相当する。

－流路C－

1区においては、断面（第163図）で観察するにとどまった。2区の最下層では自然木数に伴って弥生時代後期の土器が出土している。2区の断面では複数の単位に埋土を分離することが可能であり、2区では流路A～Cが重複している可能性が高いと考える。

－流路D－

3区で確認した流路である。礫層を基盤として幅広い粘土層の堆積がある。間に厚さ20～40cmの礫層を伴っている。西肩付近で弥生時代中期の土器片が出土した。



第168図 SR-01・SX-01出土遺物実測図

—出土遺物— (第167～171図)

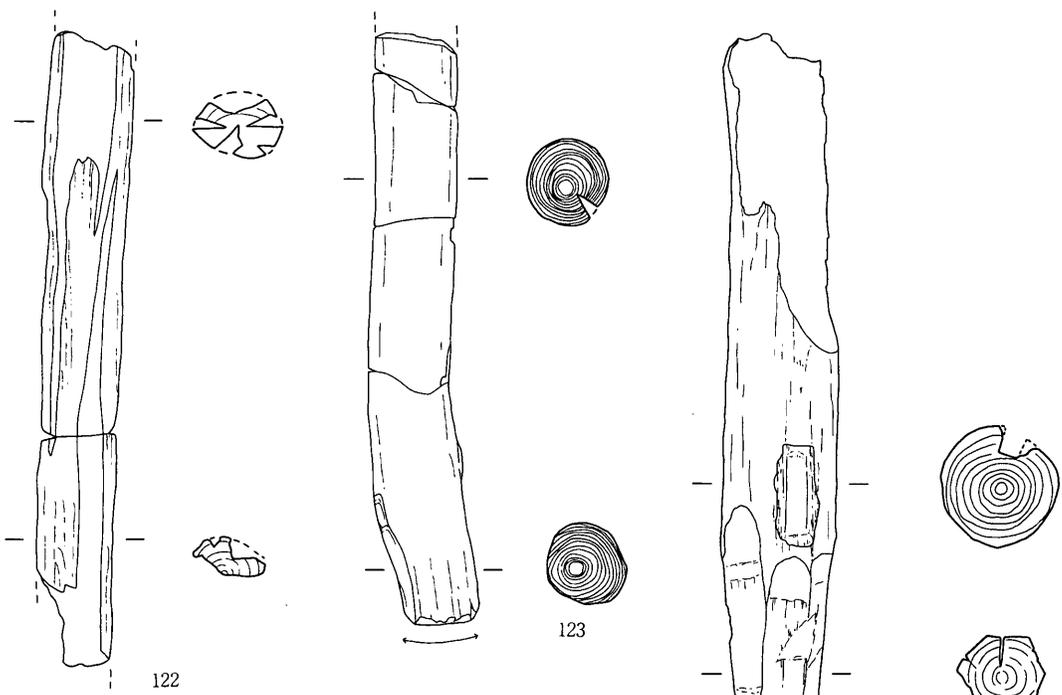
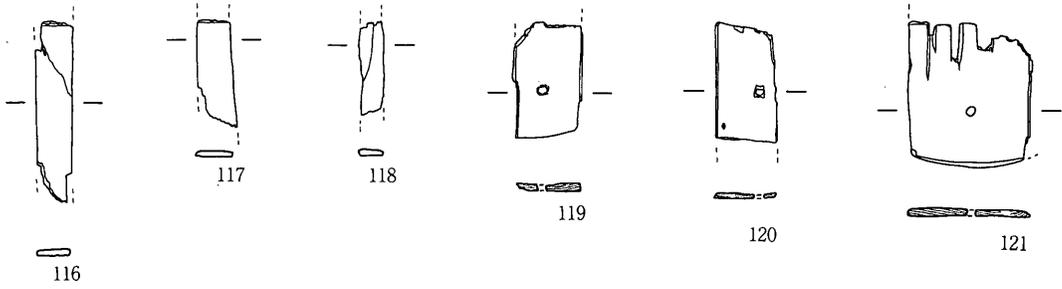
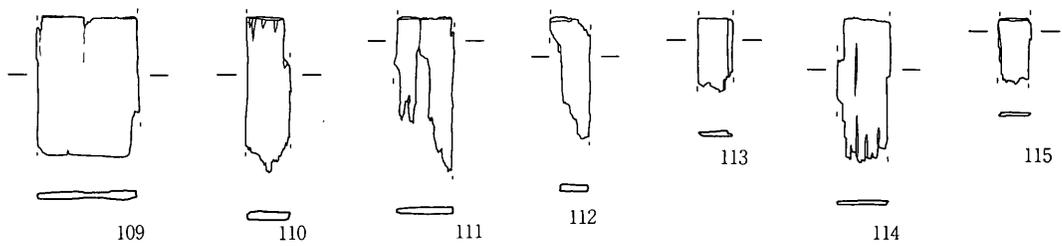
93・94は流路Dより出土した弥生土器である。93は壺口縁部で、口縁端面に浅い凹線文、頸部に断面三角形凸帯文をもつ。94は細頸壺で、玉葱状の体部からスムーズに頸部に移行し、口縁部はやや開き気味で端部を丸く収めている。器壁が薄く、胴部内面には指頭圧痕が顕著である。

95～99は流路Cより出土した弥生土器である。壺は直立あるいは「ハ」の字状を呈す頸部から、口縁部が強く屈曲して開く形態で、95は頸部外面の縦方向の刷毛目調整後、ヨコナデを行っている。97は頸部から胴部の破片を図上で復元している。外面は叩き成形後に、縦方向の細かい刷毛目調整、内面は下半のみヘラケズリを施す。98は甕口縁部片で、口縁部を上方につまみ上げ、端面に強いヨコナデを施す。内面は頸部付近までヘラケズリ。99は台付鉢で、内外面をナデ調整で仕上げる。

100～103は流路Bより出土した須恵器である。100は高杯杯部で下半1/3に反時計回りの回転ヘラケズリを施した後、脚部を付加する。101は低脚高杯の脚部またはハズウ頸部である。内外面を回転ナデ調整し、外面に波状のヘラ記号が観察できる。102は坏身口縁部片。103は甕体部である。底面の不整方向ナデが顕著である。

104～106はSX-01より出土した須恵器。すべて坏身で、かえり部が短く内傾し、口縁端部が膨れ気味に内彎する。

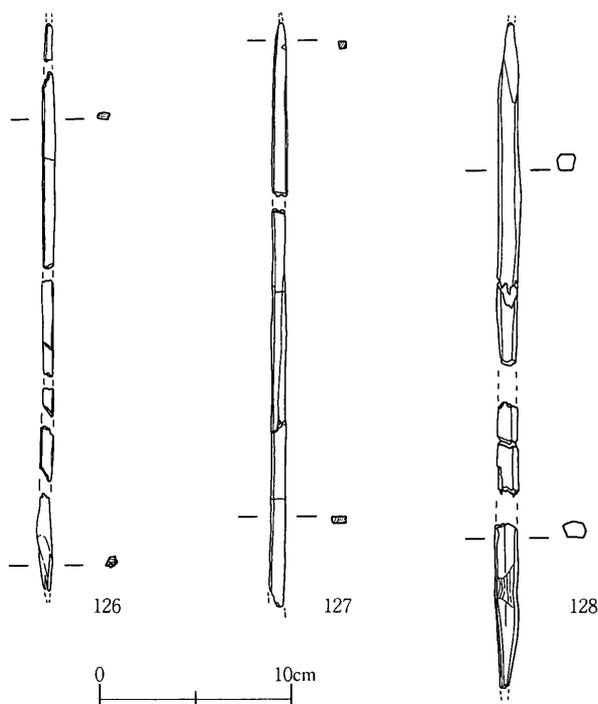
107・108は流路Aより出土した土師器である。107は土師器甕である。下膨れの胴部に「く」の字に屈曲する口縁部が接続する。胴部内外面を刷毛目調整し、口縁内面は同一工具による横方向の刷毛目。口縁端部は上方につまみ出す形態。108は土師器皿である。黄



← 敲打痕



第169图 SR-01出土木製品実测图(1)



第170図 SR-01出土木製品実測図(2)

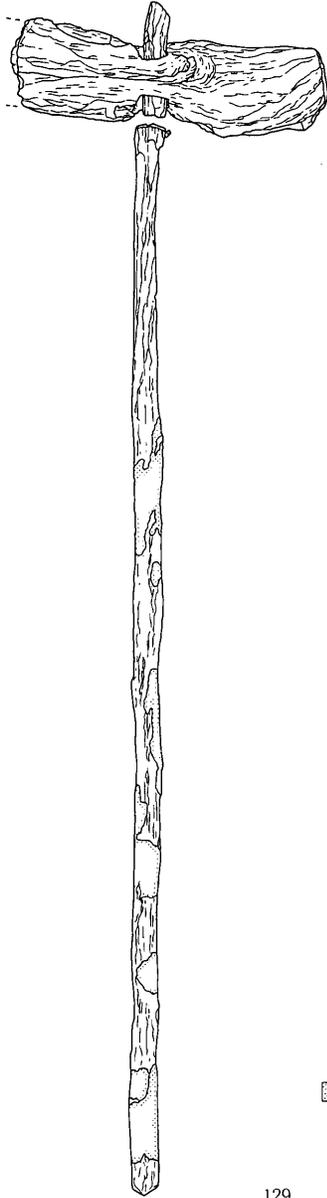
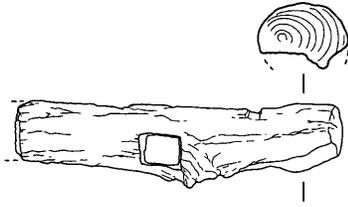
褐色の胎土に赤橙色粘土のスリップをかけ、内面に暗文を施す。

109～121は板状木製品である。表面を平滑に仕上げた厚さ0.2cmほどの板材を幅5cmに分割したもの(109)と幅2～3cmに分割したもの(110～117)がある。また、幅7cmほどに分割し、小口を弧状に整形したもの(119～121)があり、これらは体部なかほどに釘穴が残る。

122～125は杭材である。直径4～6cmの芯持材を使用する。123は図の下端が頭部で、敲打痕が認められる。125・124は先端部で、4～6面の面取りを行っている。125は側面にほぞ穴が認められ、建築材を転用したものと考えられる。

126～128は長さ35cmほどの棒状木製品である。遺存状態が良好な128は上下両端を尖らせる。体部は4～5面に面取りし、126・127はやや細目で幅が0.7～0.8cm、128は太めで1.0～1.2cmをはかる。

129は直径10cmの芯持ちの丸太材にほぞ穴があり、そこに長さ125cm、直径2.5cmの棒材が差し込まれた状態で出土したものである。当初、掛矢とも考えたが、丸太材の一方が破損面であること、棒材に対してほぞ穴が大きいこと、棒材の表面には表皮が遺存していたことなどからみて、杭列ないし柵列に用いられた部材が組み合わさった状態で出土した

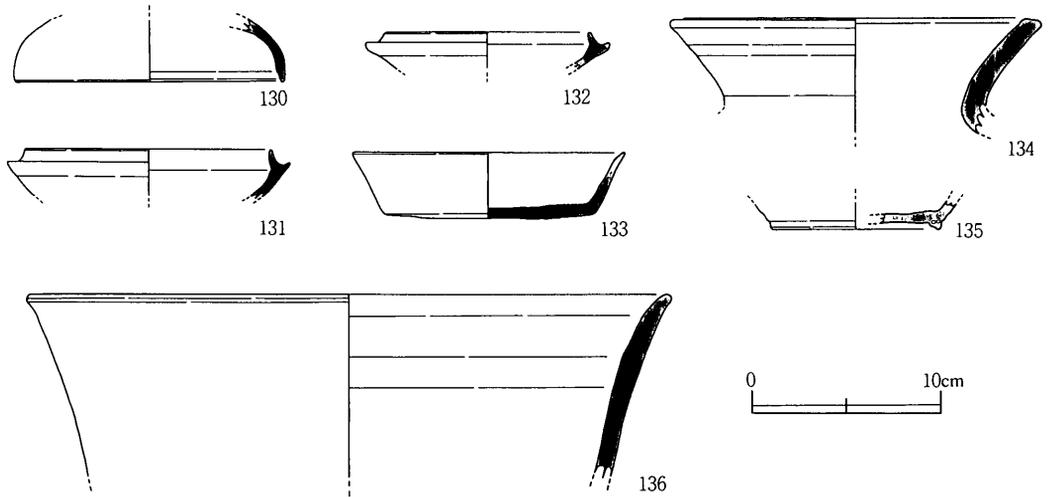


表皮遺存範圍

129



第171圖 SR-01出土木製品実測図(3)



第172図 包含層出土遺物実測図

ものと判断した。丸太材の破損面と反対の面は丸く整形されており、明確な敲打痕は認められないが、本来の上端部をとどめているものと思われる。棒材は、丸太材と反対側の端部を2方向から切り込みを入れて切断している。

(4)包含層

SR-01が埋没した後に、1～4層が堆積する。これらは、概ね水平に堆積しており、また部分的に畦状の高まりが見られることから、水田耕作土と考えられる。1区と3区では明瞭に確認できるが、2区では対応する層序が明確でない。すでに削平された可能性もあるが、用水路とは考えにくいSD-03が中世～近世にわたって斜め方向に走行することから見ても、2区周辺はその時期には田地として利用されていなかった可能性が高い。

1～4層中には少量の土器が含まれていたが、これらは下部遺構から遊離した遺物と考えられる。古墳時代後期～奈良時代の須恵器が出土している。

(5)小結

弥生時代以降の遺跡の状況は、旧河道とその埋没後の用水路関係の遺構が確認できた。

旧河道(SR-01)は弥生時代までは第5章の自然遺物の分析からみて、雑性の水生植物が繁茂した状況が復元されており、稲粃等も検出されていないことから、周辺に田地が広がるような、管理下におかれた河川とは考えにくい。ただし、冬瓜・ブドウ属・ひょうたん類の種子が確認されており、周辺が畑地として利用されていた可能性はある。

これに対して奈良時代以降は、1区において人為的な掘開行為の可能性のある流路変更が行われており、排水口の存在、杭材や他の木製品の出土状況から見ても隣接する微高地が開墾され、水田に近接する河川として管理された状況を示す。

この間にあたる古墳時代末(7世紀)の段階ではSX-01が自然条件下で考えにくい窪地が形成されているが、この段階での管理状況は遺構・遺物からは確認できない。

SD-01はSR-01のどの段階に伴うものか不明であるが、上記を前提とすれば奈良時代に所属する可能性が最も高い。馬の頭蓋骨を土坑や溝などに埋納する事例は、近畿地方を中心として7,8世紀に多く見られ、日本書紀皇極紀の殺牛馬記事に見られる民間祈雨行為と評価されている。SD-01に見られる馬頭蓋骨の埋納は時期的にも符合し、当該地域においても殺牛馬の風習が広がっていたことを示すものである。また、微高地上に開墾された水田が、降水量に左右されるような、不安定な灌漑システムの一面を示唆するものともいえる。

SD-02は旧河道が埋没した後、新たな灌漑システムの編成に伴って微高地上に掘開された幹線水路と考えられる。SR-01の上位の包含層から推定される水田は、この溝の掘削に伴って形成されたものと推定され、微高地上の灌漑の安定化とともに、併せて湿地の耕地化も進行したものと思われる。走行方向は周辺に認められる現存方格地割とは異なり、やや東に片寄っている。これは、SR-01が存続していた段階に使用されていたSD-01の方向とほぼ直交するものであり、微高地上の田地の地割の方向性は継承されたものと考えられる。掘開時期は明確でないが、出土した土器は13世紀前半ごろに中心がある。13世紀前半は文献によると、当遺跡周辺の二村郷内の荒野が興福寺五重塔の寺領として立荘された時期に相当する(九条家本「振鈴寺縁起」紙背文書)。調査地内はそれ以前から耕地化しており、その荒野部分には該当しないものと考えられるが、周辺の新たな耕地の開墾に伴って灌漑プランの再編成が行われ、幹線水路の付設が行われた可能性は十分に考えられる。

SD-04・05は微高地上に掘開された現存方格地割の方向に合致する溝である。当遺跡西

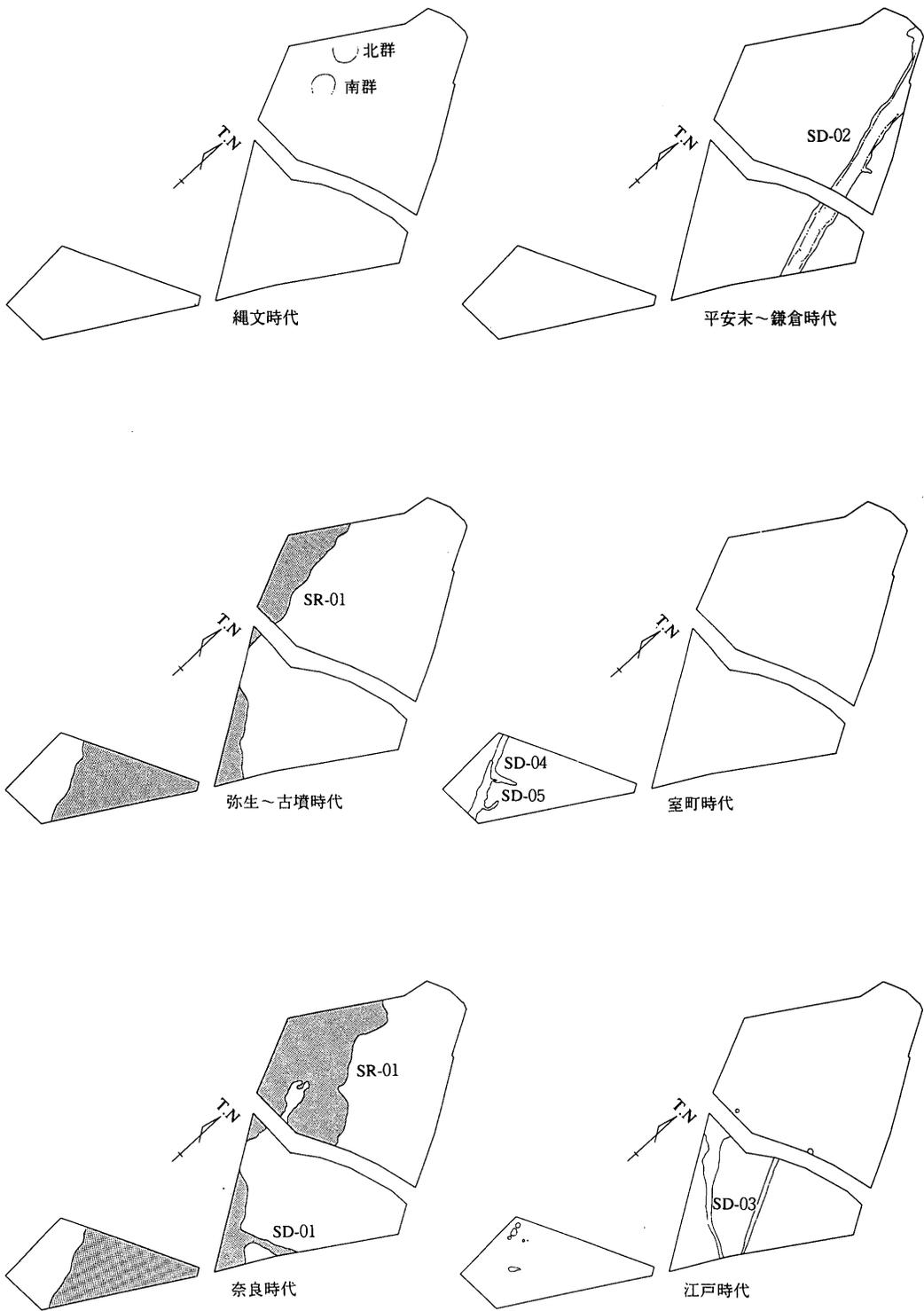
方には広範な微高地が広がっている。この地域の予備調査では、調査できていない現状水路（坪界線部分）を除外して、溝は全く検出されていない。灌漑水路は基本的に現存水路の下部に埋没している可能性が高く、SD-04・05が14世紀前半以降に使用されたものと考えられることから、微高地の開発がその頃に行われたことを示唆するものである。

SD-07は中世～江戸期の溝で、方向性は現存方格地割に合致するが、1区ではすでに浅くなって消失しているか、あるいはすでに削平されて確認できない。小規模な灌漑水路である。

現在（調査着手前）の田地形状はSR-01の旧河道上面に比較的広範囲に地割りの乱れが認められる。SD-04・05で確認した方格の区割を越えて、地割りの乱れが広がっている。これは、中世以降、現代に至るまでに、遺跡西方の灌漑プランが再編成されたことを示している。なお、当遺跡北側の水田区画は整然としているが、これは近年の圃場整備によって作られた地割りである。

今回の調査で検出した河道・水路の変遷をもとに、周辺の農耕地等の推移をまとめると次のとおりである。

- ①弥生～7世紀までは確実に水流を伴う自然河川が存在し、周辺の微高地には畑地の存在は考慮する必要があるが、少なくとも水田は展開していなかった可能性が高い。
- ②奈良時代には微高地上が開墾された。地割りは自然河川に規制された方向性を示す。
- ③鎌倉時代に幹線水路が掘削され、これに伴い河道上面が耕地化される。水路の方向から推定される地割りは、奈良段階の方向性を存続させる。
- ④西側微高地では鎌倉末期に現存方格地割に沿った溝を掘開して、耕地化する。
- ⑤中世～近世で旧河道上面の水田が沼地化し、廃棄物の投棄が認められる。これは、微高地の灌漑システムが完成し、旧河道部分がすでに有効な耕作地としての機能を脱却したことがその要因と考えられる。



第173図 川西北七条I遺跡遺構変遷図

川西北七条 I 遺跡
出土遺物觀察表

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
151	60		陶器 碗	SK-02	高台部1/2 底径4.6cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	胎：灰 高台部： にぶい黄 橙 釉：オリ ブ ⁺ 灰	微細粒を含む	肥前系 陶胎染付
156	61		土師器 杯	II区① B- 5 SD02 ④層	底部完存 口径12.1cm・器 高3.4cm 底径6.6cm	外：回転ナデ, 指押さえ 内：ナデ	淡黄	1.0mm以下の砂粒 を含む	
156	62	67	土師器 杯	I区① B- 4 SD02 ④層	底部完存 口径12.5cm・器 高3.3cm 底径7.0cm	外：ナデ 内：横ナデ	外：灰白 内：橙	2.0mm以下の砂粒 を少量含む	
156	63	67	土師器 杯	II区① D- 4 SD02 ④層	口縁部1/10 底 部3/4 口径12.9cm 器高・3.2cm 底径6.0cm	外：表面剥落 内：表面剥落	灰白	0.5mm以下の砂粒 を微量に含む	
156	64	67	土師器 杯	I区① B- 4 SD02 ④層	底部完存 口径12.1cm 器高3.9cm 底径6.0cm	外：横ナデ, ナデ 内：ナデ	灰白	微細粒を含む	
156	65		土師器 杯	I区① C- 4 SD02 ④層	底部完存 口径10.8cm 器高2.4cm 底径7.0cm	外：横ナデ, へら切り 内：横ナデ	灰白	2.0mm以下の砂粒 を含む	
156	66		土師器 杯	II区① S D02 ④層	少片 口径11.0cm 器高1.7cm 底径6.8cm	外：横ナデ 内：横ナデ	明赤褐	1.0mm以下の砂粒 を含む	
156	67		土師器 杯	SD02 上 層	底部1/6 底径7.0cm	外：表面剥落 内：表面剥落	浅黄橙	3.0mm以下の砂粒 を含む	
156	68		土師器 杯	I区① B- 4 SD02 ④層	底部1/4 底径6.1cm	外：ナデ,指 押さえ 内：ナデ	明赤褐	微細粒を含む	
156	69		土師器 杯	II区① S D02 ④層	底部1/3 底径7.0cm	外：ナデ 内：横ナデ	外：淡黄 内：灰白	1.0mm以下の砂粒 を含む	
156	70		須恵器 杯	I区① C- 4 SD02 下層	少片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	微細粒を含む	
156	71	68	土師器 蛸壺	I区① B- 3 SD02 ①層	底部完存 口径14.8cm	外：横ナデ 内：横ナデ	淡黄	2.0mm以下の砂粒 を多量に含む	図上復元
156	72	67	土師器	土釜	SD02 下層 口径29.0cm	外：横ナデ 内：横ナデ	赤褐	5.0mm以下の砂粒 を多量に含む	
159	73	70	陶器 鉢	SD03 上 層 口縁部1 /8		外：回転ナデ 後施釉 内：回転ナデ 後施釉	胎：褐灰 釉：オリ ブ ⁺ 黄赤 褐、灰白	砂粒を少量含む	唐津系
159	74	69	土師器 播鉢	SD03 上 層 底部1/4		外：ナデ 内：ナデ後卸 目	外：にぶ い黄橙 内：褐灰	1.5mm以下の砂粒 を含む	
159	75	69	土師器 土釜脚	SD03 上 層	少片	外：指押さえ 内：ナデ	外：灰黄 内：黄灰	1.0mm以下の砂粒 を多量に含む	
159	76	70	青磁 碗	SD03 下 層	高台部1/4 底径6.2cm	高台内：釉剥 ぎ	胎：灰白 釉：明緑 灰	微細粒を含む	内面見込 みに陰 刻花文
159	77	69	土師器 碗	SD03 下 層	高台部1/3 底径6.0cm	外：ナデ 内：ナデ	灰白	1.0mm以下の砂粒 を含む	
159	78	69	土師器 播鉢	SD03 上 層	少片	外：ナデ 内：刷毛目, ナデ,卸 目	灰白	3.0mm以下の砂粒 を含む	

第45表 川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表(1)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
159	79	70	陶器 碗	SD03 上 層	高台部1/2 底径4.0cm	外：回転ナデ、 砂目積 内：回転ナデ 後施釉、 砂目積	胎：にぶ い黄橙 釉：オリ フ、灰	1.0mm以下の砂粒 を含む	
161	80		土師器 杯	SD04	底部1/4 底径6.0cm	外：ナデ 内：ナデ	底部：へ ラ切り	灰白	1.0mm以下 の砂粒を 少量含む
161	81		土師器 杯	SD04	少片	外：ナデ 内：ナデ	底部：へ ラ切り	灰白	1.5mm以下 の砂粒を 少量含む
161	92	71	土師器 土鍋	SD04	少片	外：ナデ 内：ナデ	外：灰黄 褐 内：淡黄	3.0mm以下の砂粒 を多量に含む	煤付着
161	83	71	土師器 碗	SD05	口縁部1/5 口径15.4cm	外：磨滅 内：磨滅	明橙灰	1.0mm以下の微砂 粒を多量に含む	吉備系
161	84	71	土師器 碗	SD05	口縁部1/8 口径13.7cm	外：ナデ、横 ナデ 内：ナデ	外：にぶ い橙 内：灰白	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	
161	85		土師器 碗	SD05	口縁部細片	外：横ナデ 内：横ナデ	灰白	1.0mm以下の砂粒 を含む	
161	86	71	瓦器 碗	SD05	口縁部1/5 口径12.2cm	外：横ナデ 内：横ナデ後 斜めのへ ラ磨き	灰白	緻密	和泉型
161	87		土師器 碗	SD05	高台部1/3 底径10.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ、 板ナデ	外：灰 内：灰白	微細粒を含む	
161	88		土師器 皿	SD05	底部完存 底径6.6cm	外：回転ナデ、 回転へラ 切り 内：回転ナデ	灰白	1.0mm以下の砂粒 を含む	
161	89		土師器 碗	SD05	底部1/8 底径5.6cm	外：磨滅 内：磨滅	橙白	1.0mm以下の微砂 粒を多量に含む	
161	90		土師器 皿	SD05	底部1/8 口径9.3cm 器高1.15cm 底径7.8cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	細砂粒を微量に 含む	
161	91	71	土師器 杯	SD05	少片	外：ナデ 内：ナデ	外：浅黄 橙 内：黒褐	微砂粒を含む	吉備系
161	92	71	土師器 土鍋	SD05	口縁部細片	外：ナデ、指 押さえ後 ナデ 内：ナデ	外：灰黄 内：灰白	1.5mm以下の砂粒 を多量に含む	外面に煤 付着
167	93	72	弥生 壺	SR01 流 路D	口縁部1/8 底部細片 口径8.4cm	外：ナデ 内：ナデ	灰黄	3.0mm以下の砂粒 を含む	頸部に断 面三角形 凸帯
167	94	72	弥生 壺	SR01 流 路D	口縁部完存 体部1/3 口径5.7cm	外：ナデ、表 面剥落 内：ナデ、指 押さえ後 ナデ	外：にぶ い黄 内：黄灰	2.0mm以下の砂粒 を多量に含む	
167	95		弥生 壺	SR01 流 路C	頸部少片	外：刷毛目後 ナデ 内：絞り目、 板ナデ	外：灰黄 内：黄灰	3.0mm以下の砂粒 を含む	
167	96	72	弥生 甕	SR01 流 路C	底部1/2 底径3.0cm	外：指押さえ、 ナデ 内：ナデ	外：灰黄 内：にぶ い黄橙	2.0mm以下の砂粒 を含む	

第46表 川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表(2)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	色調	胎土・素材	備考
167	97	73	弥生 壺	SR01 流 路C	口頸部1/2 体部小破片	外：叩き後刷 毛目 内：下半ヘラ 削り	外：にぶ い黄橙 内：黄灰 にぶい黄 褐	3.0mm以下の砂粒 を少量含む	図上復元
167	98		弥生 甕	SR01 流 路C	口縁部1/6 口径16.8cm	外：横ナデ 刷毛目 内：ヘラ削り	にぶい赤 褐	2.0mm以下の砂粒 を少量含む	
167	99	72	弥生 鉢	SR01 流 路C	脚台部1/3	外：ナデ,板 ナデ 内：ナデ	明灰黄	5.0mm以下の砂粒 を多量に含む	内面に煤 付着,脚部 接合痕
167	100	74	須恵器 高杯	I区②SR 01 流路B 黒色粘	1/2 口径12.0cm	外：回転ナデ, 回転ヘラ 削り	暗灰	0.5~2.0mm大の 砂粒を含む	
167	101		須恵器 高杯	SR01 流 路B	脚体部完存	外：回転ナデ 内：回転ナデ, 絞り目	灰	2.0mm以下の砂粒 を含む	外面にヘ ラ記号
167	102		須恵器 杯	SR01 流 路B	口縁部細片 口径14.6cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	
167	103	74	須恵器 甕	SR01 流 路B	体部・底部完存	外：ヘラ削り 後不整方 向ナデ 内：絞り目, 不整方向 ナデ	灰	1.5mm以下の砂粒 を含む	肩部沈線
168	104		須恵器 杯	SX01 上 層	細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1.0mm以下の砂粒 を含む	
168	105	74	須恵器 杯	SX01 上 層	体部1/2 口径8.6cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1.0mm以下の砂粒 を含む	
168	106		須恵器 杯	SX01 下 層	口縁部細片	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	
168	107	75	土師器 甕	SR01 流 路A	口縁部1/4 口径15.6cm	外：ナデ,刷 毛目後ナ デ 内：刷毛目後 ナデ	黄灰	4.0mm以下の砂粒 を多量に含む	
168	108	75	土師器 杯	SR01 流 路A	口縁部1/2 口径15.5cm 器高2.5cm 底径12.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ 後暗文	にぶい橙	0.5mm以下の砂粒 を少量含む	内外面に 橙色土ス リップ
172	130		須恵器 杯蓋	I区②包 含層第2 層	口縁部1/10 口径14.0cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	
172	131		須恵器 杯	I区②包 含層第2 層	口縁部細片 口径13.4cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	
172	132		須恵器 杯	I区②包 含層第2 層	口縁部細片 10.9cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	
172	133	68	須恵器 杯	I区②包 含層第2 層	1/2 口径14.2cm 器高3.3cm 底径11.0cm	外：回転ナデ, ヘラ切り 後ナデ 内：回転ナデ	淡灰黄	緻密	
172	134		須恵器 壺	Ⅲ区包含 層0層	口縁部細片 口径17.9	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	
172	135		須恵器 杯	I区②包 含層第2 層	高台部1/6 底径8.8cm	外：回転ナデ, 回転ヘラ 削り 内：回転ナデ	外：灰 内：灰白	1.0mm以下の砂粒 を少量含む	高台部接 合痕
172	136		須恵器 壺	I区②包 含層第2 層	口縁部1/8 口径23.7cm	外：回転ナデ 内：回転ナデ	灰白	2.5mm以下の砂粒 を含む	

第47表 川西北七条I遺跡出土遺物観察表(3)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	木取り	備考
169	109	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長7.3cm 最大幅5.4cm 最大厚4.5mm	左右両端面取 り	柾目	
169	110	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長8.05cm 最大幅2.3cm 最大厚4.0mm	左右両端面取 り	柾目	
169	111	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長8.0cm 最大幅3.0cm 最大厚3.5mm	左右両端面取 り	柾目	
169	112	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長6.3cm 最大幅1.8cm 最大厚3.5cm	左右両端面取 り	柾目	
169	113	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長3.75cm 最大幅1.8cm 最大厚3.0cm	左右両端面取 り	柾目	
169	114	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長7.45cm 最大幅2.3cm 最大厚2.0mm	左右両端面取 り	柾目	
169	115	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長3.3cm 最大幅1.7cm 最大厚2.0mm	左右両端面取 り	柾目	
169	116	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長9.2cm 最大幅1.9cm 最大厚3.5mm	左右両端面取 り	柾目	
169	117	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長5.65cm 最大幅1.85cm 最大厚3.0mm	左右両端面取 り	柾目	
169	118	76	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘最下	欠損 現存長5.0cm 最大幅1.3cm 最大厚3.5mm	左右両端面取 り	柾目	
169	119	77	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土最下	欠損 現存長6.1cm 最大幅3.7cm 最大厚0.4cm	左右両端面取 り	柾目	釘穴
169	120	77	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土最下	欠損 現存長6.2cm 最大幅3.3cm 最大厚0.3cm	左右両端面取 り	柾目	釘穴
169	121	77	板状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土最下	欠損 現存長7.5cm 最大幅6.6cm 最大厚0.45cm	左右両端面取 り・下端部弧 状	柾目	釘穴
169	122	77	杭	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘シルト	欠損 現存長33.5cm 最大幅4.6cm 最大厚2.6cm		芯持	
169	123	77	杭	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土シル ト	欠損 現存長31.5cm 最大径5.7cm	頭部に敲打痕	芯持	
169	124		杭	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土シル ト	欠損 現存長10.2cm 最大幅2.4cm 最大厚2.6cm		芯持	
169	125	77	杭	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土シル ト	欠損 現存長41.2cm 最大径6.2cm	側面にはぞ穴	芯持	

第48表 川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表 (4)

挿図 番号	遺物 番号	図版 番号	器種	出土地点	残存量・法量	成形・調整	木取り	備考
170	126	78	棒状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土シル ト	欠損 現存幅0.7cm 最大厚0.6cm	上下両端尖る	柾目	
170	127	78	棒状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土シル ト	欠損 現存幅0.8cm 最大厚0.5cm		柾目	
170	128	78	棒状木製品	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土シル ト	欠損 現存幅1.2cm 最大厚0.9cm	上下両端尖る	柾目	
171	129	78	杭	I区②C-2 SR-01 流路A 黒色粘土最下	欠損・現存長34.5cm・ 最大径10.0cm	頭部丸く成形	芯持	ほぞ穴に 棒付属

第49表 川西北七条 I 遺跡出土遺物観察表 (5)

第5章 自然科学的調査

本報告で掲載する自然科学的調査結果は、次のとおりである。

三条黒島遺跡外	土壤中火山灰抽出分析
同	石器石材産地推定分析
川西北七条 I 遺跡	出土獣骨同定
同	花粉分析及び出土種子等同定

第1節 土壤中火山灰抽出分析

(1) 試料採取の状況

旧石器出土層準の年代推定及び旧地形復元の一環として、三条黒島遺跡の石器ブロックを中心に、周辺地を含めた土壤試料を採取した。

土壤は、土層断面を約10cm角で縦長に切り出し、硬質ビニール製の雨樋を被せて、その裏側をナイフで切り取ることによって採取した連続柱状試料、一定間隔で小形の容器に土壤を塊で採取した連続試料に区分される。各地点で、適宜採取法を変えて試料採取を実施した。

分析結果は、すでに第2章で堆積環境の考察に使用している。第4図の地点名と、ここで報告する地点名が異なっているので、下表で対照していただきたい。

なお、下表のC・D地点は三条番ノ原遺跡の範囲内にあり、遺跡の考古学的データについては三条番ノ原遺跡の報告書を参照していただきたい。

遺跡名	地点名	試料採取法	分析間隔	第4図地点名
三条黒島遺跡	A地点	連続柱状試料	5 cm	D地点
	B地点	連続柱状試料	5 cm	C地点
	C地点	連続柱状試料	10cm	E地点
三条番ノ原遺跡	D地点	連続試料	10cm	F地点

第50表 土壤中火山灰抽出分析試料採取地点一覧表

(2)分析結果

株式会社 京都フィッション・トラック

a.試料

分析試料は、財団法人香川県埋蔵文化財センターの手で三条黒島遺跡A地点(0~75cm), B地点(0~80cm), C-1地点(0~50cm), C-2地点(0~100cm)より採取された柱状試料と三条番ノ原遺跡D地点(0~200cm)より採取された柱状試料である。この試料は実験室内でさらにAおよびB地点では5cm間隔で、C-1, C-2, D地点については10cm間隔で連続的にサンプリングされ、合計66個の試料となった。なお試料採取層位は、測定データを総合的にまとめた第174図, 第175図, 第176図, 第177図の柱状図中に示されている。

b.分析方法

試料の分析は、第179図のフローチャートに従い行った。

次に処理工程について説明を加える。

1)色調判定

未処理試料50~100gを白紙上にとり、新版標準土色帳(農林省農林水産技術会議事務局監修, 1970)により判定表示する。

2)前処理

まず半湿潤状態の生試料を30.0g秤量し、60°Cで15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2リットルビーカー中で数回水替えしながら水洗し、超音波洗滌を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1~2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗滌水の交換を繰り返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別(60, 120, 250mesh)を行い、各段階の秤量をする。

こうして得られた120~250mesh(1/8~1/16mm)粒径試料を比重分別処理等を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石用薄片を作成した。

3)重鉱物分析

主要重鉱物(カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イディングサイト)(1)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉱物含有が少ないものは結果的に総数200個に満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉱物含有の

少ない試料は重液処理により重鉱物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。なお重鉱物分析は横山・楠木(1969)(2)および吉川(1976)(3)に準拠した。

4)火山ガラス分析

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

■ 火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物(土粒子やアモルファス粒子を含む)を識別し、各含有率を測定した。

■ 主要重鉱物

(3)重鉱物分析で得られた主要鉱物(カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・ザクロ石・イディング・サイト)(1)の量比を示した。

■ 火山ガラス型

吉川(1976)(3)の分類に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め表示した。なお吉川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

■ プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

■ 色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには、スコリア(塩基性火山砕屑物)中にしばしば含まれる赤褐、褐、黄、緑色などのガラスは含まれない。

5)火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製・保存された120～250mesh(1/8～1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS 86)を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

なお具体的に測定データはデータシートとしてまとめられ、次に述べるように表示され

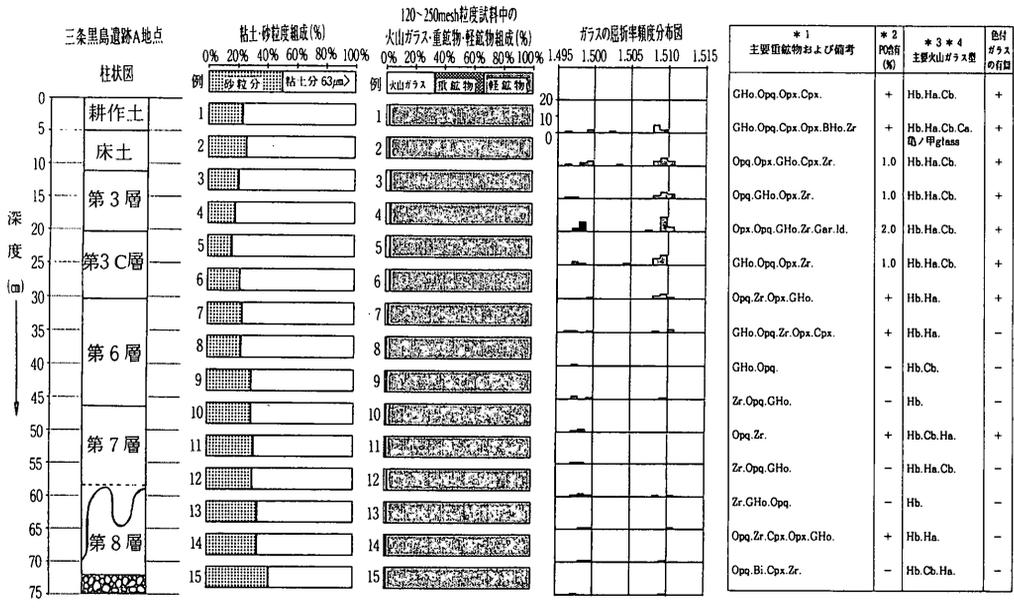
ている。まず最上位に試料名 (SeriesおよびSample Name) が印刷され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。Ndの式はその浸液温度から屈折率を換算するもので、Ndは屈折率、tは温度を示す。この式は一次式であり火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度が測定によって得られるので、この式から火山ガラスの屈折率が計算される。 $(As.+De.) / 2$ は合致温度を上昇させた時 (Ascent) と下降 (Descent) の平均値として求めた時の意味であるが、繁雑さを避けるため測定温度は表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみが表示されている。測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count, min, max, range, mean, st.dev, skewはそれぞれ屈折率の測定個数, 最小値, 最大値, 範囲, 平均値, 標準偏差, そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率にたいする火山ガラスの個数が表現される。

*一つが1個の火山ガラスである。

c.分析結果および考察

今回得られた分析結果は、集約され、前掲の第174図、第175図、第176図、第177図に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ (広域テフラ) の降灰層準を合理的に認定する根拠を与える情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や含有量比の情報が最も重要となる。一般に土壤中に含まれる重鉍物の分析が広く行われているが、重鉍物分析結果をテフラ降灰層準との関係で議論する場合には十分な注意が必要である。その理由は、土壤中の重鉍物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。しかも同一種類の重鉍物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉍物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

さて火山ガラスから得られる情報に着目すると、今回の試料中にはA地点で3種類、B・C両地点ではともに2種類、D地点で1種類のみ火山ガラスが含有される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに中国・四国地方でのテフラ・カタログと対照すると、始良Tn火山灰 (AT)、鬼界アカホヤ火山灰 (K - Ah) などに対比するのが自然であろう。次にこれらの対比にもとづき、今回の分析結果とその解釈を第51～54表に示す。



* 1 主要重鉱物の略称と鉱物名

Ol : カンラン石 Opx : 斜方輝石 Cpx : 単斜輝石 GHo : 緑色普通角閃石 BHo : 褐色普通角閃石
 Bi : 黒雲母 Gar : ザクロ石 Zr : ジルコン Id : イディングサイト Opq : 不透明鉱物

* 2 PO : プラント・オパール含有率の有無

* 3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Ha, Hb : 偏平型 (バブルウォール型) Ca, Cb : 中間型 (軽石型) Ta, Tb : 多孔質型 (軽石・繊維状型)

* 4 (吉川, 1976) 以外のガラス型略称

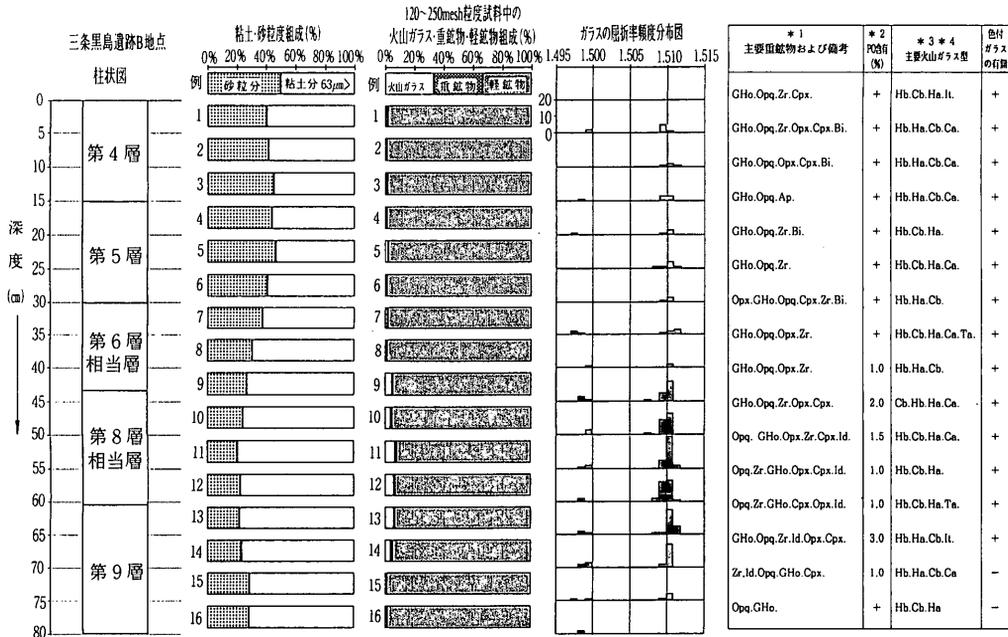
SG : スコリア質ガラス IT : 不規則型

第174図 三条黒島遺跡A地点 試料採取地点土層模式柱状図および分析結果

第51表 三糸黒鷲遺跡A地点 火山ガラス濃縮層準とその特徴

火山ガラス検出層準		屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	※(6) 対比される 広域テフラ	※(6) 降灰年代	備 考
分布層準 #ソフ#No.	最大濃集層準 #ソフ#No.					
深度	深度					
No.1 ～ No.15	No.3 ～ No.4	1.508 ～ 1.514 最頻値 1.510	H 型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス (A T) と混在する が深度30cm付近より上位で相対的な含有量が多い。ガラ ス形態はH型を主とし、濃い色付きガラスを含む。火山 ガラスの屈折率がかなり高いのが特徴。最濃集層準付近 でプラント・オパール含有量が多いのが注目される
No.1 ～ No.5	—	1.501 ～ 1.505	C 型 (中間型)	不 明 大山系の 火山灰?	—	No.2, 5 試料で少量検出されたのみであり、降灰層準 決定は困難。降灰層準に近いという情況証拠を与えるに とどまるが、火山ガラスの特徴と層序から大山系あるい は三瓶山系火山灰の可能性がある。
No.1 ～ No.15	—	1.498 ～ 1.501 最頻値 1.500	H 型 (扁平型)	始良Tn火山灰 (AT)	21,000 ～ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、全体に含有率が低く、 顕著な濃集層準を指摘することは困難である。無色透明 な扁平 (バブル・ウォール) 型ガラスを主とすするが、亀 ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含むこと がある。

※(6)町田 洋ほか (1984) : テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—, 古文化財の自然科学的研究, 865-928.



* 1 主要重鉱物の略称と鉱物名

Ol : カンラン石 Opq : 斜方輝石 Cpx : 単斜輝石 GHo : 緑色普通角閃石 BHo : 褐色普通角閃石
 Bi : 黒雲母 Gar : ザクロ石 Zr : ジルコン Id : イディングサイト Opq : 不透明鉱物

* 2 PO : プラント・オパール含有率or有無

* 3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Ha, Hb : 偏平型 (バブルウォール型) Ca, Cb : 中間型 (軽石型) Ta, Tb : 多孔質型 (軽石・繊維状型)

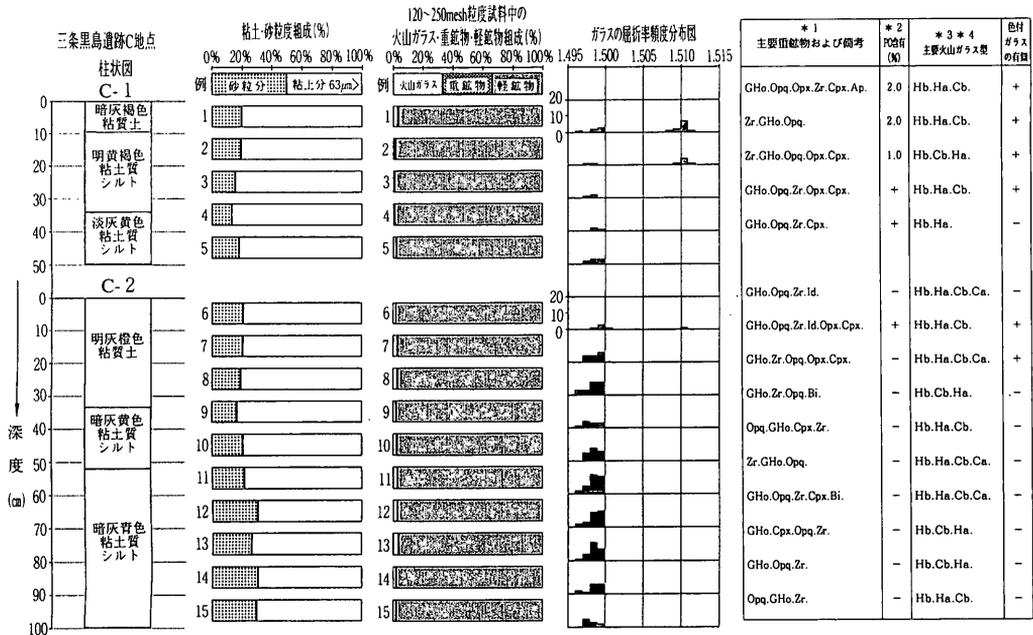
* 4 (吉川, 1976) 以外のガラス型略称

SG : スコリア質ガラス IT : 不規則型

第175図 三条黒島遺跡B地点 試料採取地点土層模式柱状図および分析結果

火山ガラス検出層準		最大濃集層準	深度	分布層準	屈折率 (Nd)	主な火山ガラス型	※(6) 対比される 広域テフラ	※(6) 降灰年代	備考
テフラNo.	テフラNo.								
No.1	No.11	50cm	0cm	No.1	1.508	H型	鬼界アカホヤ火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス(AT)と混在するがNo.11~13試料付近で相対的な含有量が多く、降灰層準はほぼこの層準付近にあると判断される。ガラス形態はH型を主とし、濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高いのが特徴。最濃集層準付近でプラント・オパール含有量が多いのが注目される
~	~	~	~	~	1.514				
No.27	No.13	65cm	135cm	No.27	最頻値 1.510	(扁平型)			
No.1	No.16	80cm	0cm	No.1	1.498	H型	始良Tn火山灰 (AT)	21,000 ~ 22,000 B.P.	今回のほぼ全分析層準で検出されるが、全試料を通じ火山ガラスの含有が少なく、顕著な濃集層準を指摘することとは困難である。おそらく二次的集積によるものと判断され、降灰層準はより下位にあるものと考えられる。無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラスを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。
~	~	~	~	~	1.501	(扁平型)			
No.16				No.16	最頻値 1.500				

※(6)町田 洋ほか (1984) : テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—, 古文化財の自然科学的研究, 865-928.



*1 主要重鉱物の略称と鉱物名

O1 : カンラン石 Opx : 斜方輝石 Cpx : 単斜輝石 GHo : 緑色普通角閃石 BHo : 褐色普通角閃石
 Bi : 黒雲母 Gar : ザクロ石 Zr : ジルコン Id : イディングサイト Opq : 不透明鉱物

*2 PO : プラント・オパール含有率or有無

*3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Ha, Hb : 偏平型 (バブルウォール型) Ca, Cb : 中間型 (軽石型) Ta, Tb : 多孔質型 (軽石・繊維状型)

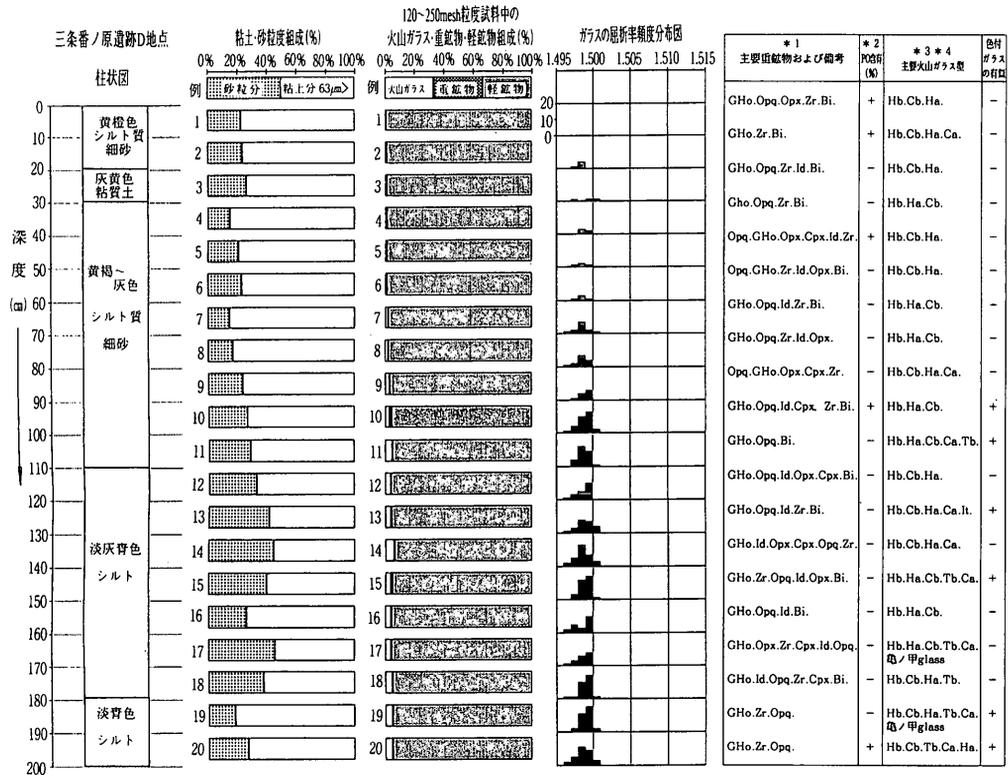
*4 (吉川, 1976) 以外のガラス型略称

SG : スコリア質ガラス IT : 不規則型

第176図 三糸黒島遺跡C地点 試料採取地点土層模式柱状図および分析結果

火山ガラス検出層準			屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	※(6) 対比される 広域テフラ	※(6) 降灰年代	備 考
分布層準 サンプルNo.	最大濃集層準 深度	地層名					
No.1	0cm	C-1 地点 暗灰褐色 粘質土	1.508 ～ 1.514	H 型 (扁平型)	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	全分布層準で下位層準の火山ガラス (A.T) と混在する が深度20cmより上位で相対的な含有量が多く、No.1 試 料で最も濃集するが、絶対的な含有量は少なく降灰層準 と認めるのは困難。ガラス形態はH型を主とし、濃い色 付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高いのが 特徴。最濃集層準付近でプラント・オパール含有量が相 対的に多いのが注目される。
No.6	70cm C2地点 10cmまで	(3 C層)	最頻値 1.510				
No.1	0cm	C-2 地点 暗灰黄色粘土 質シルト	1.498 ～ 1.501	H 型 (扁平型)	始良Tn火山灰 (A.T)	21,000 ～ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、絶対的な含有量は少 なく、降灰層準を指摘することは困難。しかしNo.11～ 13試料中で相対的に含有量は増加する。無色透明な扁平 (バブル・ウォール) 型ガラスを主とするが、亀ノ甲型 と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。
No.15	100cm	暗灰青色粘土 質シルト	最頻値 1.500				

※(6)町田 洋ほか (1984) : テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—, 古文化財の自然科学的研究, 865-928.



*1 主要重鉱物の略称と鉱物名

Ol : カンラン石 Opq : 斜方輝石 Cpx : 単斜輝石 GHo : 緑色普通角閃石 BHo : 褐色普通角閃石
 Bi : 黒雲母 Gar : ザクロ石 Zr : ジルコン Id : イディングサイト Opq : 不透明鉱物

*2 PO : プラント・オパール含有率or有無

*3 主要ガラス型の名称 (吉川, 1976)

Ha, Hb : 偏平型 (バブルウォール型) Ca, Cb : 中間型 (軽石型) Ta, Tb : 多孔質型 (軽石・繊維状型)

*4 (吉川, 1976) 以外のガラス型略称

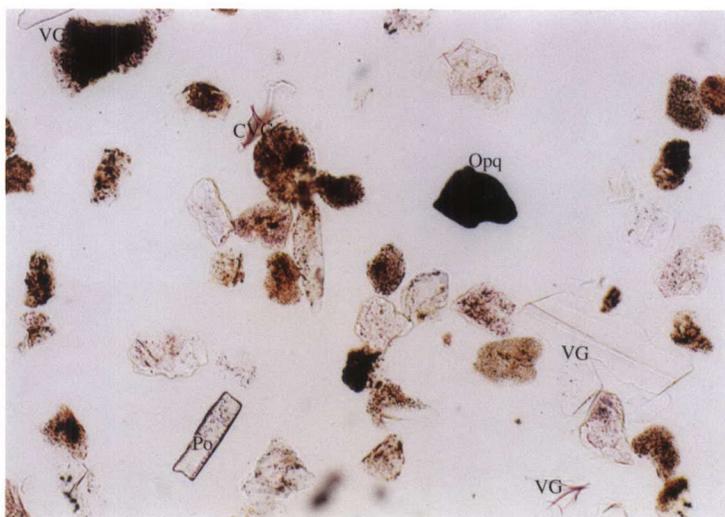
SG : スコリア質ガラス IT : 不規則型

第177図 三條番ノ原遺跡D地点 試料採取地点土層模式柱状図および分析結果

火山ガラス検出層準			屈折率 (Nd)	主な火山 ガラス型	※(6) 対比される 広域テフラ	※(6) 降灰年代	備考
分布層準	最大濃集層準	地層名					
サンプルNo.	深度	サンプルNo.	深度	サンプルNo.	深度	サンプルNo.	深度
No.1	0cm	No.11	100cm	H型	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	今回の全分析層準で全く検出されず、分析層準はK-A h火山灰降灰以前のものと推定される。なお含有される とすれば、ガラス形態はH型を主とし、濃い色付ガラス を含む。火山ガラスの屈折率がかなり高いのが特徴。
～	～	～	～	H型 (扁平型)			
No.20	200cm	No.20	200cm	H型 (扁平型)	始良Tn火山灰 (AT)	21,000 ～ 22,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、顕著な濃集層準はな い。No.11試料(100cm)以深で相対的な含有量が増す が、最大でも数%以下と低い。したがってAT火山灰の 降灰層準を特定するのは困難である。なおこの火山灰は 無色透明な扁平(バブル・ウォール)型ガラスを主とす るが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量 含む。

※(6)町田 洋ほか(1984)：テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—、古文化財の自然科学的研究、865-928。

第54表 川床原遺跡D地点 火山ガラス濃集層準とその特徴



三条黒島遺跡

A地点No.5

平行ニコル

写真倍率×93

OPX:斜方輝石

OPq:不透明鉱物

OI:カンラン石

CPX:単斜輝石

Gar:ザクロ石

Id:イディングサイト

GHO:緑色普通角閃石

Bi:黒雲母

Zr:ジルコン

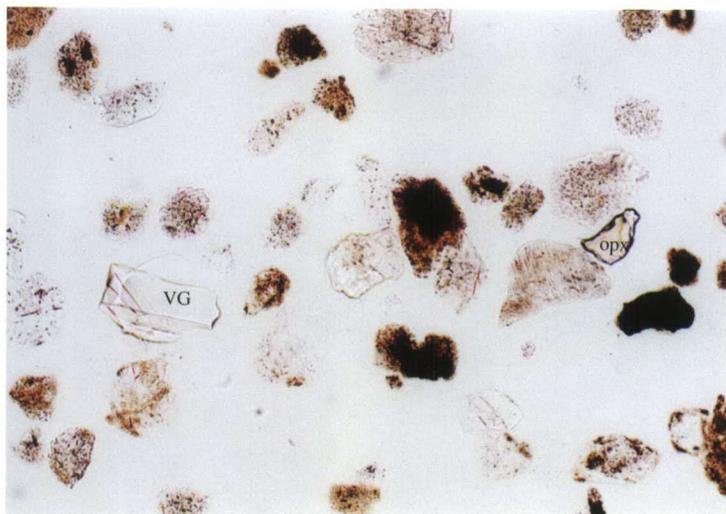
BHO:褐色普通角閃石

Ap:アバタイト

VG:火山ガラス

CVG:色付火山ガラス

Po:プラントオパール



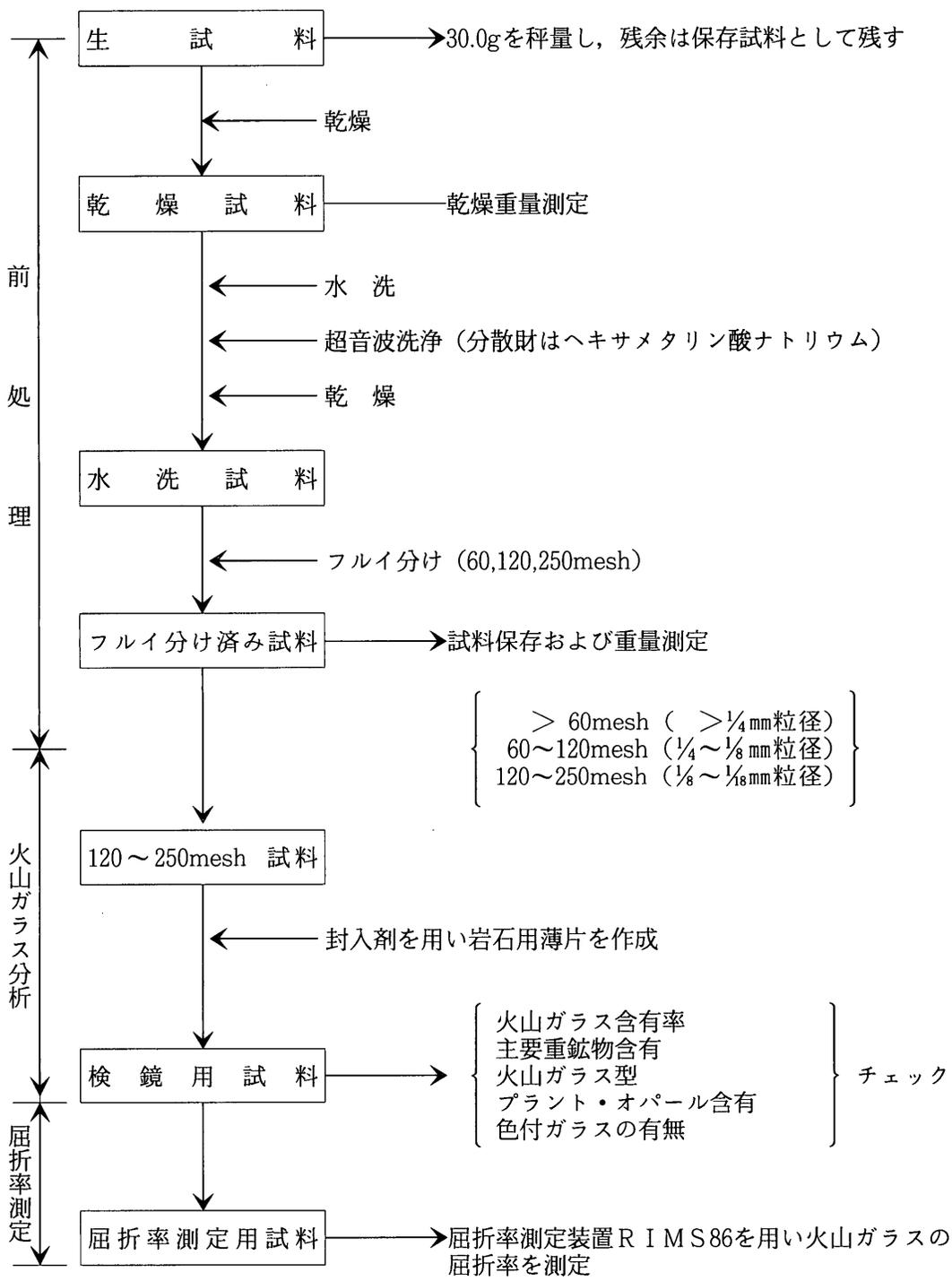
三条黒島遺跡

A地点No.7

平行ニコル

写真倍率×93

第178図 三条黒島遺跡検鏡用試料顕微鏡写真



第179図 土壤中火山灰（火山ガラス）抽出分析処理順序

注)

- (1)町田瑞男・村上雅博・斎藤幸治「南関東の火山灰層中の変質鉱物“イディングサイト”について」『第四紀研究』22 (1), 69-76. 1983
- (2)横山卓雄・楠木幹浩「鍵層としての火山灰層, 特に大阪層群の火山灰について」『同志社大学理工研報告』9, 58-93. 1969
- (3)吉川周作「大阪層群の火山灰層について」『地質学雑誌』82 (8), 479-515. 1976
- (4)横山卓雄・檀原徹・山下透「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25 (1), 21-30. 1986
- (5)竹村恵二・檀原徹「土壌中火山ガラス抽出分析による遺跡の地層対比および編年—温度変化型屈折率測定装置を使用して—」『考古学と自然科学』第20号日本文化財学会誌, 35-50. 1983
- (6)町田洋・新井房夫・小田静夫・遠藤邦彦・杉原重雄「テフラと日本考古学—考古学研究と関係するテフラのカタログ—」『古文化財の自然科学的研究』869-928. 1984

第2節 四国横断自動車道関連遺跡出土のサヌカイト製遺物の 石材産地分析

藁科 哲男

(京都大学原子炉実験所)

(1)はじめに

自然科学的な手法を用いて、石器石材の産地を客観的に、かつ定量的に推定し、古代の交流、交易および文化圏、交易圏を探ると言う目的で、蛍光X線分析法により研究を行っている。当初は手近に入手できるサヌカイトを中心に、分析方法と定量的な産地の判定法との確立を目標として研究したが、サヌカイトで一応の成果を得た後に、同じ方法を黒曜石にも拡張し、本格的に産地推定を行なっている(1, 2, 3)。サヌカイト、黒曜石などの主成分組成は、原産地ごとに大きな差はみられないが、不純物として含有される微量成分組成には異同があると考えられるため、微量成分を中心に元素分析を行ない、これを産地を特定する指標とした。

蛍光X線分析法は試料を破壊せずに分析することができて、かつ、試料調整が単純、測定操作も簡単である。石器のような古代人の日用品で多数の試料を分析しなければ遺跡の正しい性格が分からないという場合にはことさら有利な分析法である。分類の指標とする元素組成を遺物について求め、あらかじめ、各原産地ごとに数十個の原石を分析して求めておいた各原石群の元素組成の平均値、分散などと、遺物のそれを対比して産地を推定する。この際多変量解析の手法を用いて、各産地に帰属される確率を求めて産地を同定する。

今回分析を行なった試料は、香川県内四国横断自動車道関連遺跡のうち三条黒島遺跡出土の旧石器時代の6個、川西北七条I遺跡縄文時代の古い時期出土の11個、郡家田代遺跡の旧石器時代の8個の合計25個のサヌカイト製遺物および丸亀双子山南嶺産原石2個、坂出城山明神原産原石1個、善通寺瓦谷産原石2個の合計30個について産地分析の結果が得られたので報告する。

(2)サヌカイト原石の分析

サヌカイト両原石の風化面を打ち欠き、新鮮面を出し、塊状の試料を作り、エネルギー分散型蛍光X分析装置によって元素分析を行なう。分析元素はAl, Si, K, Ca, Ti, Mn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr, Nbの12元素をそれぞれ分析した。

塊試料の形状差による分析値への影響を打ち消すために元素量の比を取り、それでもって産地を特定する指標とした。サヌカイトでは、 K/Ca 、 Ti/Ca 、 Mn/Sr 、 Fe/Sr 、 Rb/Sr 、 Y/Sr 、 Zr/Sr 、 Nb/Sr をそれぞれ用いる。

サヌカイトの原産地は、西日本に集中してみられ、石材として良質な原石の産地および質は良くないが考古学者の間で使用されたのではないかと話題に上る産地、および玄武岩、ガラス質安山岩など、合わせて32ヶ所の調査を終えている。第180図にサヌカイトの原産地の地点を示す。このうち、金山・五色台地域では、その中の多く地点からは良質のサヌカイトおよびガラス質安山岩が多量に産出し、かつそれらは数ヶの群に分かれる。今回新たに丸亀市の双子山の南嶺から産出するサヌカイト原石で双子山群を確立し、またガラス質安山岩は細石器時代に使用された原材で善通寺市の大麻山南からも産出し、大麻山南第一、二群の2個の原石群を作り五色台産ガラス質安山岩と元素組成で区別が可能なことを明らかにした。これらの原石を良質の原石を産出する産地を中心に元素組成で分類すると45個の原石群に分類でき、その結果を第52・53表に示した。香川県内の石器原材の産地では金山・五色台地域のサヌカイト原石を分類すると、金山西群、金山東群、国分寺群、蓮光寺群、白峰群、法印谷群の6個の群、城山群および双子山群に、またガラス質安山岩は金山奥池・五色台地区産は五色台群の単群に、大麻山南産は大麻山南第一、二群の2群にそれぞれ分類された。

金山・五色台地域産のサヌカイト原石の諸群にほとんど一致する元素組成を示すサヌカイト原石が淡路島の岩屋原産地の堆積層から円礫状で採取される。これら岩屋のものを分類すると、全体の約2/3が第57表に示す割合で金山・五色台地域の諸群に一致し、これらが金山・五色台地域から流れ着いたことがわかる。淡路島中部地域の原産地である西路山地区および大崩地区からは、岩屋第一群に一致する原石がそれぞれ92%および88%と群を作らない数個の原石とがみられ、金山・五色台地域の諸群に一致するものはみられなかった。第58表に示す和泉・岸和田原産地からも全体の約1%であるが金山東群に一致する原石が採取される。第59表に示す和歌山市梅原原産地からは、金山原産地の原石に一致する原石はみられない。仮に、遺物が岩屋、和泉・岸和田原産地などの原石で作られている場合には、産地分析の手続きは複雑になる。その遺跡から10個以上の遺物を分析し、第54・55表のそれぞれの群に帰属される頻度分布を求め、確率論による期待値と比較して確認しなければならない。二上山群を作った原石は奈良県北葛城郡当麻町に位置する二上山を中心にした広い地域から採取された。この二上山群と組成の類似する原石は和泉・岸和田の

原産地から6%の割合で採取されることから、一遺跡10個以上の遺物を分析し、第58表のそれぞれの群に帰属される頻度分布をもとめて、和泉・岸和田原産地の原石が使用されたかどうか判断しなければならない。

(3)結果と考察

遺跡から出土した石器、石片は、風化のためサヌカイト製は表面が白っぽく変色し、新鮮な部分と異なった元素組成になっている可能性が考えられる。このため遺物の測定面の風化した部分に、圧縮空気によってアルミナ粉末を吹きつけ風化層を取り除き新鮮面を出して測定を行なった。一方黒曜石製のもは風化に対して安定で、表面に薄い水和層が形成されているにすぎないため、表面の泥を水洗するだけで完全な非破壊分析が可能であると考えられる。今回分析した遺物の結果を第60表に示した。石器の分析結果から石材産地を同定するためには数理統計の手法を用いて原石群との比較をする。説明を簡単にするためK/Caの一変量だけを考えると、分析番号47134番の遺物はK/Caの値が0.528で、白峰群の[平均値]±[標準偏差値]は、 0.534 ± 0.015 であるから、遺物と原石群の差を標準偏差値(σ)を基準にして考えると遺物は原石群から 0.4σ 離れている。ところで白峰原産地から100ヶの原石を採ってきて分析すると、平均値から $\pm 0.4\sigma$ のずれより大きいものが69ヶある。すなわち、この遺物が、白峰群の原石から作られていたと仮定しても、 0.4σ 以上離れる確率は69%であると言える。だから、白峰群の平均値から 0.4σ しか離れていないときには、この遺物が白峰群の原石から作られたものでないとは、到底言い切れない。ところがこの遺物を二上山群に比較すると、二上山群の平均値からの隔たりは、約 24σ である。これを確率の言葉で表現すると、二上山群の原石を採ってきて分析したとき、平均値から 24σ 以上離れている確率は、千兆の十億倍分の一であると言える。このように、千兆の十億倍個に一個しかないような原石をたまたま採取して、この遺物が作られたとは考えられないから、この遺物は、二上山群の原石から作られたものではないと断定できる。これらのことを簡単にまとめて言うと、「この遺物は白峰群に69%、二上山群に千兆の千万倍分の1%の確率でそれぞれ帰属される」。各遺跡の遺物について、この判断を第54・55表のすべての原石群について行ない、低い確率で帰属された原産地を消していくと残るのは、白峰群の原産地だけとなり、白峰産地または岩屋原産地の石材が使用されていると判定される。実際はK/Caといった唯1ヶの変量だけでなく、前述した8ヶの変量で取り扱うので変量間の相関を考慮しなければならない。例えばA原産地のA群で、Ca元素

とRb元素との間に相関があり、Caの量を計ればRbの量は分析しなくても分かるようなときは、A群の石材で作られた遺物であれば、A群と比較したとき、Ca量が一致すれば当然Rb量も一致するはずである。したがって、もしRb量だけが少しずれている場合には、この試料はA群に属していないと言わなければならない。このことを数量的に導き出せるようにしたのが相関を考慮した多変量統計の手法であるマハラノビスの距離を求めて行なうホテリングのT₂検定である。これによって、それぞれの群に帰属する確率を求めて、産地を同定する(4, 5)。産地の同定結果は1個の遺物に対して、サヌカイト製では45個の推定確率結果が得られている。今回産地分析を行った遺物の産地推定結果については低い確率で帰属された原産地の推定確率は紙面の都合上記入を省略し、高い確率で同定された産地のみを第61表に記入した。原石群を作った原石試料は直径3cm以上であるが、小さな遺物試料の測定から原石試料と同じ測定精度で元素含有量を求めるには、測定時間を長時間掛けなければならない。しかし、多数の試料を処理するために、1個の遺物に多くの時間をかけられない事情があり、短時間で測定を打ち切る。このため、得られた遺物の測定値には、大きな誤差範囲が含まれ、ときには、原石群の元素組成のバラツキの範囲を越えて大きくなる。したがって、小さな遺物の産地推定を行なったときに、判定の信頼限界としている0.1%に達しない確率を示す場合が比較的多くみられる。原石産地(確率)の欄にマハラノビスの距離D₂の値で記した遺物については、判定の信頼限界としている0.1%の確率に達しなかった遺物でこのD₂の値が原石群の中で最も小さなD₂値である。この値が小さい程、遺物の元素組成はその原石群の組成と似ているといえるため、推定確率は低いが、そこの原石産地と考えてほゞ間違いないと判断されたものである。

今回分析を行なった三条黒島遺跡出土の旧石器時代の6個の中の5個には白峰産サヌカイトが使用され、1個に蓮光寺産が使用されていた。川西北七条I遺跡縄文時代の古い時期出土の11個では、白峰産が3個で、城山・金山西産が5個で、金山産が1個、国分寺産、双子山産がそれぞれ1個使用されていることが明らかになった。また、郡家田代遺跡の旧石器時代の8個には、双子山産が2個、白峰産が2個、金山産、国分寺産、城山・金山西産、飯山産がそれぞれ1個使用されていることが明らかになり、飯山産サヌカイトが使用されていることから本遺跡が中国山地の情報を入手していたと推測しても産地分析の結果と矛盾しない。また、双子山産原石が旧石器時代と縄文時代の古い時期で使用が今回初めて客観的に証明された。善通寺市大麻山南産地においてもガラス質安山岩とともに肉眼観察では白峰原石と区別できない良質のサヌカイト原石が少量であるが産出しているが、こ

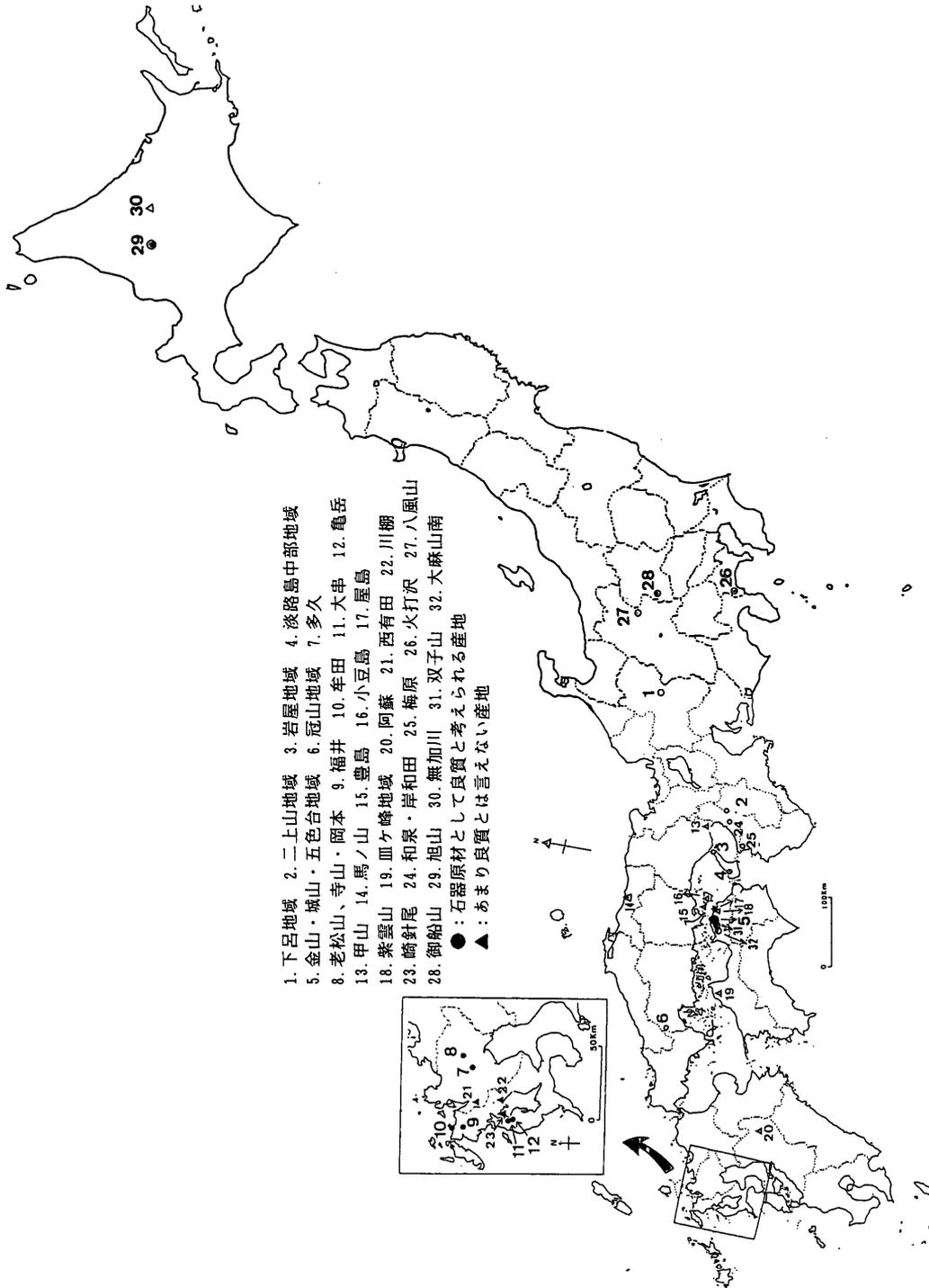
れらサヌカイトの組成は現在調査したサヌカイトと異なり元素比により区別でき、今回分析した遺物に使用されていないことを確認した。最近の分析で五色台産ガラス質安山岩が兵庫県加美町寺ノ下遺跡の縄文時代晩期に伝播していることが明らかになったが、この原石が産地周辺遺跡を通して伝播したかは、今後分析数を増やすことにより、西日本一帯の遺跡への石器原材の供給地遺跡としての性格が明らかになるであろう。

参考文献

- 1) 藁科哲男・東村武信(1975), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(II)。考古学と自然科学, 8:61-69
- 2) 藁科哲男・東村武信・鎌木義昌(1977),(1978), 蛍光X線分析法によるサヌカイト石器の原産地推定(III)。(IV)。考古学と自然科学, 10,11:53-81:33-47
- 3) 藁科哲男・東村武信(1983), 石器原材の産地分析。考古学と自然科学, 16:59-89
- 4) 東村武信(1976), 産地推定における統計的手法。考古学と自然科学, 9:77-90
- 5) 東村武信(1980), 考古学と物理化学。学生社

編者注)

第61表の試料番号については、末尾4ケタの数字が、三条黒島・郡家田代遺跡では「報告書遺物番号」を、川西北七条I遺跡では「取り上げ番号」を示している。後者の「取り上げ番号」と「報告書遺物番号」の照合は第44表で可能であるが、分析番号の47145～47148と47150は実測図を掲載していない北群出土の剥片である。



第180図 サヌカイト及びサヌカイト様岩石の原産地

原産地	原石群名	分析個数	K/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Ti/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Mn/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Fe/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Rb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Y/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Zr/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Nb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Al/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Si/Ca $\bar{X} \pm \sigma$
北海道	旭山	80	0.351±0.011	0.288±0.010	0.089±0.005	5.064±0.140	0.174±0.011	0.096±0.009	0.903±0.029	0.015±0.012	0.015±0.001	0.141±0.005
群馬県	荒船山	43	0.194±0.070	0.360±0.028	0.129±0.014	9.205±1.153	0.080±0.034	0.085±0.014	0.458±0.082	0.009±0.010	0.013±0.021	0.123±0.032
長野県	八風山	46	0.274±0.028	0.324±0.010	0.090±0.008	4.905±0.505	0.104±0.009	0.100±0.009	0.581±0.033	0.012±0.009	0.018±0.002	0.168±0.014
神奈川県	火打沢	40	0.092±0.005	0.285±0.009	0.166±0.009	12.406±0.332	0.023±0.006	0.111±0.008	0.483±0.023	0.005±0.007	0.012±0.001	0.012±0.001
岐阜県	下呂	93	1.576±0.055	0.227±0.011	0.038±0.004	0.766±0.025	0.277±0.020	0.031±0.013	0.504±0.024	0.035±0.009	0.052±0.003	0.660±0.025
奈良県	二上山	51	0.288±0.010	0.215±0.006	0.071±0.006	4.629±0.270	0.202±0.012	0.066±0.009	0.620±0.022	0.024±0.010	0.019±0.001	0.144±0.005
大阪府	和泉	26	0.494±0.023	0.325±0.025	0.056±0.004	4.060±0.148	0.296±0.021	0.065±0.010	0.706±0.025	0.038±0.010	0.023±0.001	0.194±0.009
兵庫県	岩屋第一	28	0.616±0.021	0.254±0.012	0.057±0.005	3.610±0.189	0.365±0.019	0.056±0.012	0.846±0.026	0.027±0.017	0.018±0.001	0.186±0.007
	第二	24	0.535±0.020	0.263±0.005	0.053±0.005	3.438±0.103	0.340±0.015	0.042±0.012	1.069±0.030	0.026±0.014	0.017±0.001	0.173±0.008
	甲山	22	0.300±0.017	0.154±0.005	0.056±0.007	3.350±0.261	0.130±0.012	0.061±0.033	0.574±0.021	0.012±0.007	0.018±0.001	0.159±0.008
香川県	五分寺	28	0.457±0.011	0.251±0.007	0.063±0.005	3.574±0.122	0.311±0.019	0.043±0.016	0.970±0.033	0.038±0.015	0.015±0.001	0.149±0.005
	蓮光寺	18	0.459±0.012	0.249±0.008	0.053±0.005	3.518±0.129	0.308±0.019	0.043±0.015	0.972±0.037	0.034±0.009	0.016±0.001	0.150±0.004
	白峰	51	0.534±0.015	0.262±0.005	0.053±0.005	3.376±0.108	0.340±0.014	0.040±0.016	1.071±0.051	0.032±0.011	0.017±0.001	0.173±0.007
	台法印谷	25	0.397±0.009	0.239±0.004	0.069±0.005	4.619±0.127	0.277±0.012	0.059±0.011	1.145±0.029	0.031±0.013	0.015±0.001	0.130±0.004
	金山	24	0.488±0.012	0.222±0.004	0.079±0.005	4.617±0.126	0.316±0.017	0.057±0.011	1.186±0.033	0.020±0.015	0.017±0.001	0.155±0.005
	西山	19	0.406±0.009	0.216±0.005	0.082±0.005	4.808±0.125	0.292±0.017	0.064±0.011	1.059±0.025	0.020±0.011	0.015±0.001	0.133±0.006
	城山	63	0.402±0.011	0.216±0.006	0.079±0.006	4.741±0.138	0.289±0.014	0.068±0.016	1.065±0.026	0.021±0.014	0.013±0.001	0.116±0.003
	双子山	54	0.350±0.007	0.233±0.005	0.074±0.006	4.898±0.169	0.261±0.012	0.061±0.014	1.093±0.035	0.023±0.016	0.011±0.002	0.105±0.004
	*五色台	63	0.869±0.048	0.120±0.006	0.023±0.005	2.294±0.114	0.484±0.026	0.006±0.011	0.705±0.044	0.043±0.011	0.039±0.003	0.459±0.028
	*大麻山南第一	39	0.705±0.069	0.146±0.008	0.040±0.008	2.837±0.189	0.473±0.050	0.023±0.015	0.941±0.052	0.028±0.021	0.020±0.002	0.251±0.024
	*第二	34	1.006±0.032	0.119±0.005	0.032±0.007	2.396±0.099	0.693±0.027	0.014±0.026	0.768±0.027	0.031±0.023	0.027±0.002	0.350±0.012
鳥取県	馬ノ山	23	0.188±0.007	0.178±0.006	0.011±0.001	0.916±0.033	0.032±0.002	0.001±0.002	0.177±0.009	0.004±0.002	0.015±0.001	0.111±0.005

第55表 各サヌカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(1)

原産地	分析個数	K/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Ti/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Mn/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Fe/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Rb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Y/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Zr/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Nb/Sr $\bar{X} \pm \sigma$	Al/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	Si/Ca $\bar{X} \pm \sigma$	
広島県	冠高	0.651 ± 0.021	0.485 ± 0.014	0.046 ± 0.004	3.322 ± 0.104	0.174 ± 0.009	0.029 ± 0.009	0.462 ± 0.017	0.185 ± 0.010	0.025 ± 0.002	0.241 ± 0.008	
	冠山	0.323 ± 0.019	0.363 ± 0.031	0.019 ± 0.001	1.607 ± 0.060	0.059 ± 0.009	0.003 ± 0.005	0.399 ± 0.043	0.025 ± 0.009	0.021 ± 0.001	0.171 ± 0.006	
	山飯	1.116 ± 0.061	0.472 ± 0.022	0.037 ± 0.005	2.228 ± 0.080	0.245 ± 0.011	0.023 ± 0.009	0.524 ± 0.014	0.246 ± 0.013	0.036 ± 0.003	0.391 ± 0.021	
佐賀県	久第一	0.831 ± 0.047	0.404 ± 0.013	0.056 ± 0.007	4.718 ± 0.225	0.510 ± 0.037	0.062 ± 0.019	0.850 ± 0.033	0.223 ± 0.018	0.016 ± 0.003	0.201 ± 0.011	
	" 第二	0.834 ± 0.055	0.396 ± 0.016	0.065 ± 0.010	5.342 ± 0.317	0.566 ± 0.047	0.081 ± 0.028	0.866 ± 0.046	0.242 ± 0.023	0.016 ± 0.005	0.202 ± 0.014	
	" 第三	1.097 ± 0.232	0.350 ± 0.028	0.065 ± 0.014	4.498 ± 0.903	0.701 ± 0.084	0.084 ± 0.025	0.828 ± 0.052	0.239 ± 0.019	0.021 ± 0.003	0.263 ± 0.046	
	老松	0.705 ± 0.034	0.314 ± 0.011	0.067 ± 0.009	5.323 ± 0.244	0.543 ± 0.036	0.075 ± 0.021	0.691 ± 0.034	0.208 ± 0.023	0.014 ± 0.002	0.174 ± 0.007	
	寺山	0.629 ± 0.043	0.310 ± 0.010	0.070 ± 0.008	5.600 ± 0.323	0.489 ± 0.029	0.066 ± 0.017	0.644 ± 0.032	0.192 ± 0.018	0.013 ± 0.001	0.157 ± 0.010	
	岡本	0.453 ± 0.019	0.331 ± 0.005	0.098 ± 0.010	7.489 ± 0.249	0.307 ± 0.024	0.081 ± 0.015	0.568 ± 0.023	0.106 ± 0.010	0.023 ± 0.002	0.237 ± 0.016	
	西有											
長崎県	大串	1.111 ± 0.118	0.140 ± 0.009	0.055 ± 0.020	1.650 ± 0.236	0.236 ± 0.043	0.041 ± 0.027	0.486 ± 0.038	0.082 ± 0.022	0.050 ± 0.006	0.607 ± 0.059	
	亀岳	1.072 ± 0.042	0.144 ± 0.008	0.041 ± 0.006	1.776 ± 0.152	0.233 ± 0.014	0.015 ± 0.013	0.497 ± 0.018	0.065 ± 0.015	0.049 ± 0.003	0.587 ± 0.018	
	田第一	0.784 ± 0.092	0.345 ± 0.026	0.069 ± 0.008	4.561 ± 0.236	0.875 ± 0.132	0.220 ± 0.028	0.727 ± 0.053	0.299 ± 0.039	0.015 ± 0.003	0.188 ± 0.021	
	" 第二	0.594 ± 0.048	0.328 ± 0.013	0.088 ± 0.010	7.759 ± 0.411	1.114 ± 0.104	0.348 ± 0.031	0.989 ± 0.071	0.496 ± 0.041	0.012 ± 0.001	0.144 ± 0.010	
	川棚	0.498 ± 0.030	0.302 ± 0.011	0.067 ± 0.005	4.225 ± 0.181	0.220 ± 0.018	0.076 ± 0.010	0.814 ± 0.048	0.035 ± 0.012	0.012 ± 0.002	0.133 ± 0.008	
	" 第一	0.406 ± 0.048	0.265 ± 0.027	0.071 ± 0.004	4.854 ± 0.374	0.203 ± 0.029	0.081 ± 0.012	0.714 ± 0.048	0.034 ± 0.017	0.011 ± 0.001	0.109 ± 0.011	
	福井	0.630 ± 0.012	0.329 ± 0.005	0.090 ± 0.011	7.531 ± 0.315	1.211 ± 0.040	0.365 ± 0.035	1.028 ± 0.047	0.534 ± 0.033	0.013 ± 0.001	0.154 ± 0.003	
	" 第一	0.512 ± 0.014	0.317 ± 0.008	0.084 ± 0.011	7.157 ± 0.312	0.941 ± 0.037	0.301 ± 0.027	0.874 ± 0.043	0.431 ± 0.033	0.011 ± 0.002	0.126 ± 0.004	
	崎針	0.382 ± 0.026	0.252 ± 0.023	0.052 ± 0.006	4.106 ± 0.227	0.160 ± 0.018	0.057 ± 0.009	0.434 ± 0.039	0.056 ± 0.011	0.010 ± 0.001	0.107 ± 0.007	
	尾第一	0.599 ± 0.115	0.373 ± 0.045	0.073 ± 0.014	5.167 ± 0.749	0.320 ± 0.058	0.077 ± 0.016	0.650 ± 0.084	0.086 ± 0.027	0.015 ± 0.002	0.163 ± 0.031	
	" 第二											
	熊本県	阿蘇	2.006 ± 0.258	0.646 ± 0.052	0.064 ± 0.011	2.085 ± 0.320	0.481 ± 0.068	0.106 ± 0.028	1.647 ± 0.197	0.063 ± 0.012	0.057 ± 0.010	0.597 ± 0.099
		" 第二	0.993 ± 0.198	0.514 ± 0.070	0.061 ± 0.008	3.087 ± 0.441	0.299 ± 0.066	0.064 ± 0.013	1.043 ± 0.182	0.038 ± 0.013	0.032 ± 0.005	0.293 ± 0.041
		菊池	0.678 ± 0.057	0.458 ± 0.020	0.062 ± 0.005	3.457 ± 0.206	0.194 ± 0.018	0.072 ± 0.009	0.728 ± 0.054	0.025 ± 0.010	0.019 ± 0.002	0.185 ± 0.015
JG-1 ^{a)}	1.327 ± 0.021	0.266 ± 0.006	0.058 ± 0.006	2.817 ± 0.074	0.756 ± 0.015	0.183 ± 0.024	0.762 ± 0.033	0.078 ± 0.014	0.036 ± 0.003	0.448 ± 0.011		

* : ガラス質安山岩 a) : Ando, A., Kurassawa, H., Ohmori, T. & Takeda, E. (1974). 1974 compilation of data on the GSJ geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal Vol.8 175-192.

第56表 各サマカイトの原産地における原石群の元素比の平均値と標準偏差値(2)

群 名	個 数	百分率	岩 屋 原 産 地 に 関 係 す る 他 群 名
岩屋第一群	20個	30%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
第二群	22	33	白峰群に一致
第三群	6	9	法印谷群に一致
”	5	8	国分寺群に一致
”	4	6	蓮光寺群に一致
”	3	5	金山東群に一致
”	2	3	和泉群に一致
”	4	6	不明（どこの原石群にも属さない）

第57表 岩屋原産地からのサヌカイト原石66個の分類結果

群 名	個 数	百分率	岩 屋 原 産 地 に 関 係 す る 他 群 名
岩屋第一群	12個	17%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
和泉群	9	13	” ” ”
岩屋第二群	6	8	白峰群に一致
	4	6	二上山群に一致
	1	1	法印谷群に一致
	1	1	金山東群に一致
	39	54	不明（どこの原石群にも属さない）

第58表 和泉・岸和田原産地からのサヌカイト原石72個の分類結果

群 名	個 数	百分率	岩 屋 原 産 地 に 関 係 す る 他 群 名
和泉群	10個	48%	淡路島、岸和田、和歌山に出現
岩屋第一群	1	5	” ” ”
	10	48	不明（どこの原石群にも属さない）

第59表 和歌山市梅原原産地からのサヌカイト原石21個の分類結果

分析 番 号	元 素 比									
	K/Ca	Ti/Ca	Mn/Sr	Fe/Sr	Rb/Sr	Y/Sr	Zr/Sr	Nb/Sr	Al/Ca	Si/Ca
47134	0.528	0.264	0.006	3.096	0.344	0.045	1.082	0.051	0.015	0.154
47135	0.447	0.199	0.005	3.144	0.389	0.057	0.870	0.000	0.014	0.169
47136	0.519	0.265	0.006	3.123	0.345	0.058	1.098	0.038	0.015	0.155
47137	0.539	0.260	0.006	3.339	0.341	0.017	1.035	0.042	0.016	0.154
47138	0.526	0.258	0.007	3.095	0.359	0.040	1.030	0.035	0.014	0.154
47139	0.543	0.256	0.006	3.121	0.360	0.057	1.143	0.055	0.016	0.168
47410	0.501	0.260	0.005	3.221	0.326	0.062	1.054	0.037	0.016	0.148
47141	0.542	0.265	0.006	3.005	0.356	0.053	1.081	0.043	0.014	0.157
47142	0.446	0.218	0.009	4.682	0.325	0.079	1.294	0.034	0.015	0.139
47143	0.547	0.265	0.006	3.403	0.350	0.048	1.082	0.022	0.014	0.151
47144	0.454	0.251	0.005	3.579	0.303	0.058	1.007	0.055	0.012	0.137
47145	0.396	0.222	0.006	4.804	0.284	0.084	1.080	0.046	0.011	0.114
47146	0.403	0.224	0.008	4.645	0.278	0.077	1.071	0.043	0.013	0.121
47147	0.405	0.223	0.007	4.414	0.293	0.086	1.035	0.030	0.015	0.123
47148	0.399	0.216	0.007	4.591	0.274	0.075	1.094	0.028	0.012	0.118
47149	0.336	0.221	0.007	5.316	0.245	0.074	1.113	0.068	0.012	0.109
47150	0.406	0.220	0.007	4.856	0.297	0.069	1.110	0.021	0.013	0.121
47151	0.437	0.225	0.008	4.467	0.312	0.052	1.081	0.022	0.013	0.127
47152	0.456	0.224	0.010	4.498	0.338	0.064	1.107	0.028	0.012	0.129
47153	0.435	0.260	0.006	3.729	0.289	0.057	0.951	0.023	0.012	0.123
47154	0.999	0.452	0.007	2.307	0.257	0.000	0.525	0.263	0.018	0.247
47155	0.509	0.268	0.005	3.660	0.338	0.064	1.047	0.033	0.015	0.152
47156	0.354	0.232	0.006	5.287	0.255	0.067	1.081	0.036	0.012	0.106
47157	0.508	0.257	0.007	3.596	0.313	0.033	1.010	0.013	0.015	0.152
47158	0.366	0.242	0.006	5.253	0.256	0.077	1.120	0.036	0.012	0.109
47159	0.353	0.239	0.006	4.849	0.257	0.070	1.108	0.040	0.011	0.105
47160	0.354	0.237	0.006	4.832	0.254	0.073	1.144	0.016	0.012	0.109
47161	0.396	0.217	0.007	4.616	0.269	0.071	1.049	0.032	0.014	0.114
47162	0.669	0.144	0.004	2.795	0.455	0.000	0.982	0.073	0.021	0.242
47163	0.956	0.121	0.003	2.343	0.674	0.000	1.749	0.013	0.030	0.345
JG-1	1.298	0.297	0.062	2.814	0.783	0.174	0.719	0.026	0.023	0.314

JG-1: 標準試料-Ando,A.,Kurasawa,H.,Ohmori,T.& Takeda,E. 1974 compilation of data on the GJS geochemical reference samples JG-1 granodiorite and JB-1 basalt. Geochemical Journal, Vol.8 175-192 (1974)

第60表 四国横断自動車道関連遺跡出土サヌカイト製遺物の元素比分析結果

分析番号	試料番号	遺跡及び地点名	時代(出土器)	原産地(確率)	判定	遺物品名(備考)
47134	No.1-1-0002	三条黒島	旧石器時代(約2万年前)	白峰(15%), 岩屋第2群(9%), 蓮光寺(4%)	白峰	剥片(接4)
47135	No.2-1-0147	"	"	蓮光寺(1%)	蓮光寺	"
47136	No.3-1-0155	"	"	白峰(20%), 岩屋第2群(3%), 蓮光寺(5%)	白峰	"
47137	No.4-1-0166	"	"	白峰(91%), 岩屋第2群(71%)	"	"(接2)
47138	No.5-1-0176	"	"	白峰(39%), 岩屋第2群(19%), 蓮光寺(4%)	"	"
47139	No.6-1-2001	"	"	白峰(1%)	"	削器
47140	No.7-2-0310	川西北七条 I	縄文時代(古い時期?)	白峰(37%), 岩屋第2群(16%), 蓮光寺(14%)	"	剥片
47141	No.8-2-0312	"	"	白峰(4%), 岩屋第2群(1%), 蓮光寺(1%)	"	石核
47142	No.9-2-0325	"	"	金山東(2%)	金山	碎片
47143	No.10-2-0344	"	"	岩屋第2群(98%), 白峰(94%)	白峰	剥片
47144	No.11-2-0347	"	"	国分寺(93%), 蓮光寺(40%), 岩屋第2群(3%)	国分寺	"
47145	No.12-2-0365	"	"	城山(17%), 金山西(44%)	城山・金山西	"
47146	No.13-2-0374	"	"	城山(60%), 金山西(15%)	"	"
47147	No.14-2-0382	"	"	城山(31%), 金山西(18%)	"	"
47148	No.15-2-0385	"	"	城山(58%), 金山西(5%)	"	"
47149	No.16-2-0393	"	"	双子山(1%)	双子山	石核
47150	No.17-2-2005	"	"	城山(90%), 金山西(87%)	城山・金山西	剥片
47151	No.18-3-0012	郡家田代	旧石器時代(約2万年前)	城山(2%), 金山西(14%)	"	"
47152	No.19-3-0014	"	"	金山東(56%)	金山	"
47153	No.20-3-0057	"	"	国分寺(8%), 蓮光寺(17%)	国分寺	"
47154	No.21-3-0058	"	"	飯山(2%)	飯山(広島)	"
47155	No.22-3-0059	"	"	岩屋第2群(30%), 白峰(4%), 国分寺(1%)	白峰	"
47156	No.23-3-0066	"	"	双子山(55%)	双子山	"
47157	No.24-3-0089	"	"	白峰(5%), 岩屋第2群(8%), 国分寺(14%)	白峰	翼状剥片
47158	No.25-3-0093	"	"	双子山(18%)	双子山	石核
47159	No.26-4-0001	双子山南嶺	"	双子山(79%)	"	双子山産原石
47160	No.27-4-0002	双子山南嶺	"	双子山(86%)	双子山	双子山産原石
47161	No.28-5-0001	城山明神原	"	城山(82%), 金山西(22%)	城山	城山産原石
47162	No.29-6-0001	普通寺瓦谷	"	大麻山南第1群(24%)	大麻山南	大麻山南産原石
47163	No.30-6-0002	"	"	大麻山南第2群(40%), 大麻山南第2群(8%)	"	"

第61表 四国畿断自動車道関連遺跡出土モノカイト製造物の原材産地推定結果

第3節 香川県川西北七条 I 遺跡出土の牛骨及び馬骨

鹿児島大学農学部 西中川 駿・日高 祥信

(1) はじめに

わが国の牛、馬の遺体の報告は、直良、金子ら多くの研究者によって、全国各地の遺跡から報告されている。筆者らの調査では、牛、馬の出土例は、全国でそれぞれ213,475カ所であり、時代別では両者共に中世が最も多く、次いで平安、古墳の順であり、縄文、弥生時代のものも報告されてる。しかし、この縄文時代の馬の遺体については、最近、近藤らの研究により、次々と時代が新しくなりつつある。また、牛では金子らにより報告された東京都伊皿子貝塚から出土したものが最も古く、これは弥生時代中期とされている。

四国地方からの牛、馬の出土例は、牛で6、馬で11カ所と非常に少ないが、中でも香川県内からは下川津遺跡、永井遺跡など馬6カ所、牛5カ所と多い。今回、動物遺体の調査を依頼された川西北七条 I 遺跡は、丸亀市川西町北字七条2027番地に所在し、香川県埋蔵文化財調査センターが発掘し、弥生末期から中世、江戸時代にいたる遺物の出土した遺跡である。動物遺体は牛、馬の骨や歯であり、肉眼的ならびに計測学的に検索し、わが国の在来牛である見島牛、口之島野化牛（口之島牛）ならびに在来馬のトカラ馬、御崎馬などの骨、さらに他の遺跡の出土遺物と比較検討を行ったので、ここにその概要を報告する。

(2) 出土状況と出土量

出土状況については、調査報告に詳しいのでここでは省略するが、条里方向に平行した中世の溝（SD-07）の埋土中層より馬歯1個、中世から江戸時代の溝（SD-03）の流路床直上より牛の下顎骨、橈骨など（369.1g）や馬の橈骨、脛骨など（750.8g）が検出され、また、自然河川（SR-01）に合流する弥生時代末から奈良時代の溝（SD-01）から馬の頭蓋骨や歯（70.8g）が出土しており、総重量は1,249.9gである。

(3) 出土骨の概要

SD-07

検出された馬歯1個は、上顎骨第三前臼歯（第182図の2）であり、その歯冠長×幅は23.4×19.7mmであり、非常に小さく、年齢10才位のものである（第182図の2）。

SD-03

この地区からは牛、馬の骨が出土している。まず、牛の遺体について述べると、土に埋没したまま固定されている下顎骨は下顎枝が欠損し、第二前臼歯から第三後臼歯を有し、遊離していた第三後臼歯の歯冠長×幅は、 $35.2 \times 13.7\text{mm}$ であり、推定年齢13才位のものと思われる（第182図の1,2）。左肩甲骨は骨片として出土しており、また、右上腕骨は僅かに原形をとどめているに過ぎず、両骨共に計測可能な部位はない。橈骨は左右2個出土しているが右橈骨は、近位端後面や遠位端の欠如した標本で、その計測値の比較は第62表に示したが、骨体中央幅×径は、 $35.0 \times 23.0\text{mm}$ である。左橈骨は縦に割れた内側近位部のものである。右中手骨は両骨端が欠如し、表面にひび割れなどがみられる。骨体中央幅×径は、 $31.4 \times 22.0\text{mm}$ である（第62表）。橈骨と中手骨の計測値から、骨長を推定し、体高を推定すると、 $113.6 \pm 5.5\text{cm}$ であり、これは日本在来牛である見島牛や口之島牛の雌とほぼ同じ大きさである（第181図の3～6）。

一方、馬の出土遺体は、肩甲骨、橈骨、脛骨、中手骨、中足骨などがみられる（第181図の7～12）。左肩甲骨は頸部のところのみで、土圧により押しつぶされている。左橈骨は、骨体はほぼ原形を保っているが、遠位端は欠如し、近位部も破損している。保存長は289.1mmで、骨体中央部の幅×径は、 $31.7 \times 23.8\text{mm}$ である。中手骨は左側のみが2本あり、大きさも異なり、両側端の欠如した標本であり、骨体中央幅×径は、 $30.9 \times 21.0\text{mm}$ と $28.0 \times 20.8\text{mm}$ である。左脛骨は、両骨端の欠如したもので、その中央幅×径は $31.7 \times 23.8\text{mm}$ である（第63表）。左中足骨も両骨端が欠如し、骨体のみからなり、前外側面に縦にひび割れがみられる。中央の幅×径は、 $23.9 \times 24.2\text{mm}$ であり、ほぼトカラ馬と同じ大きさである。第63表に示す計測値を用い、最大長を推定し、林田らの方法で体高を推定すると、 $120.6 \pm 4.4\text{mm}$ となり、トカラ馬雄より少し大きめの馬であったことが推測される。なお、SD-03から右下顎骨第四前臼歯（歯冠長×幅、 $21.5 \times 14.6\text{mm}$ ）、第二後臼歯（ $18.7 \times 12.3\text{mm}$ ）、第三後臼歯（ $27.6 \times 9.6\text{mm}$ ）がみられ、咬面が磨耗した老齢馬（19才位）のものである（第182図の4～6）。

SD-01

自然河川SR-01に合流する溝SD-01から出土した馬の頭蓋は、土に埋没したまま固定されているために全容を明らかにすることはできないが、左側を下にして土に埋没しており、頭蓋腔および前頭骨の一部がみられ、右側はほとんど破損している（第182図の1）。これに伴って出土した3個の歯がみられるが、これらは上顎第二前臼歯、第四前臼歯および第

一後臼歯である。第二前臼歯は不完全であるが、第四前臼歯はほぼ完形で、その歯冠長×幅は32.9×23.4mmで、第一後臼歯のそれらは22.3×21.7mmである。推定年齢は10才位である（第182図の3）。

以上のことから、牛は2体分で、馬は4体分であったことがうかがわれ、骨の形状も日本在来種の見島牛や口之島牛ならびにトカラ馬や御崎馬に似ていることがわかった。

(4) 考察

牛や馬が、いつ頃、どこから渡来してきたかについては、幾多の説があり未だに明らかにされていない。本遺跡から出土した牛、馬の遺体は、弥生時代末から江戸時代までと幅が広く、時代を特定するに少し疑問ももたれるが、SD-01から出土した馬の頭蓋は、発掘者の見解からおそらく奈良時代のものであろう。SD-03から出土した牛、馬の遺体は、中世で、SD-07のものは江戸時代のものであると思われる。

牛の出土例で最も古いものは、東京都の伊皿子貝塚のもので、貝層の下から頭蓋骨のみが出土しており、金子は祭祀に使われた可能性を示唆している。本遺跡から出土した牛骨は河川敷に散乱してみられ、解体痕もないことから、死後河川に埋葬されたものであろう。わが国の牛の起源、系統について、野沢らは華南の黄牛より、大陸中央部から蒙古、華北、朝鮮半島を経て渡来したと論じている。本遺跡出土の牛も、古代の形質を残しているといわれる見島牛や口之島牛の骨に似ていることから、朝鮮牛に由来するものと考えられる。

一方、馬の出土例は、古いものでは余山貝塚や出水貝塚が一般的に取り上げられるが、しかしながら、最近の近藤の研究によると、出水貝塚の馬骨は13世紀に下ると報告し、これまで縄文時代のものは次々と年代が新しくなっている。林田は野間馬やトカラ馬のような小型馬は、縄文時代末期に華南から琉球列島を北上し、御崎馬や木曾馬のような中型馬は、弥生時代に朝鮮半島かを経由して、わが国へ入ったと論じている。しかし、野沢は血液型や血清蛋白などの検索から、わが国の馬の起源を蒙古馬に求め、朝鮮半島から渡来したとしている。現在のところ両説共に否定する材料はないが、筆者らの調査では、南西諸島からの奈良時代以前の馬骨は検出されておらず、また、鎌倉市の千葉地東遺跡からは70体分の馬骨が出土しているが、この中には中型馬の多い中、小型馬もみられることから、小、中2型の馬が弥生時代以降に朝鮮半島経由で渡来したのと考えられる。

川西北七条 I 遺跡を遺した人々が牛、馬をどこから導入したかは明かではないが、弥生時代以降に北部九州に渡来したものが、香川にももたらされたであろう。四国では牛、馬

の出土例は少ないのであるが、その中でも香川県は最も多い。これは瀬戸内海に面し、他の地域との交流が盛んであったことがうかがわれ、特に馬は当時の人々の運搬や交通の手段として牛は一般に農耕用として飼育されていたのであろう。今回の資料は、香川県内の牛、馬の出土骨を比較する上にも、また、古代牛や古代馬の特徴を知る上にも貴重であり、特に土佐駒や野間馬など在来馬の起源、系統を知る上にも十分に参考になる資料である。

(5) まとめ

丸亀市川西町北川西北七条 I 遺跡出土の古墳時代末から中世および江戸時代の牛骨および馬骨について調査した。

1. 本遺跡からの出土総骨片数は、牛12個、馬13個で、総重量 牛369.1g、馬837.9gである。
2. SD-07からは馬骨（上顎第三前臼歯）1個の出土で、小型馬で、10才位のものである。SD-03からは牛の下顎骨、肩甲骨、上腕骨、中手骨などが検出され、また、馬の肩甲骨、橈骨、脛骨、中手骨、中足骨などが出土している。牛、馬とも小型のものである。SD-01から出土した馬骨は頭蓋骨の左半分で土に埋没したまま固定されている。これに伴った第三前臼歯、第四前臼歯、および第一後臼歯の3個がみられ、10才位の年齢と推定される。
3. 骨の形状は、在来牛や在来馬に似ており、SD-03から出土した骨の計測値から体高を推定すると、牛で 113.6 ± 5.5 cm、馬で 120.6 ± 4.4 cmであり、牛は見島牛、口之島牛に、馬はトカラ馬や野間馬とほぼ同じ大きさである。

(参考文献)

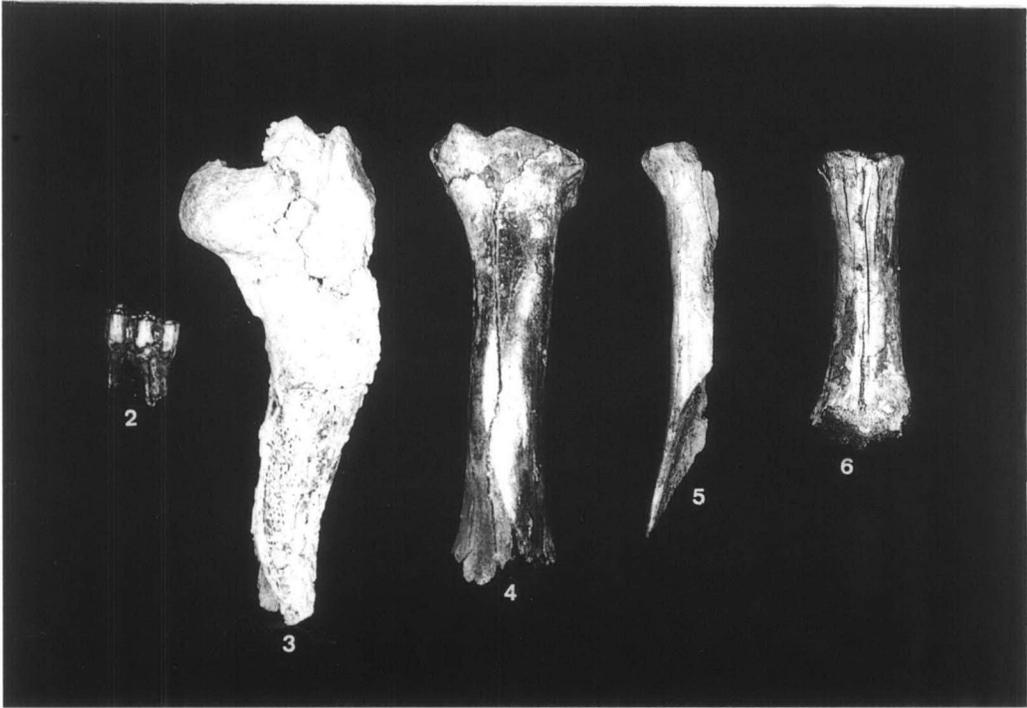
1. Driesch, A. Vonden: A Guide to the Measurement of Animal Bones from Archaeological sites. p1-101, Harvard Univ. Cambridge (1976)
2. 林田重幸：日本在来馬の系統に関する研究. p1-180, 日本中央競馬会, 東京(1978)
3. 林田重幸・山内忠平：馬における骨長より体長の推定法・鹿大農学術報告, 6, p146-156 (1957)
4. 近藤 恵他：野田市大崎貝塚縄文後期貝層出土ウマ遺骸のフッ素年代判定－縄文時代にウマはいたか－・人類学雑誌, 99(1), p93-99 (1991)
5. 直良信夫：日本馬の考古学, p1-201, 校倉書房 (東京)
6. 西中川 駿他：古代遺跡出土骨からみたわが国の牛, 馬の渡来時期とその経路に関する研究. 平成2年度文部省科学研究費補助金 (一般研究B) 研究成果報告書. p1-197, (1991)
7. 日本馬事協会：野間馬に関する学術調査報告書. p1-28 (1985)
8. 野沢 謙：東亜と日本在来馬の起源と系統・日本ウマ科学会雑誌, 3(1), p2-18, (1992)
9. 野沢 謙・西田隆雄：家畜と人間・p204-306, 出光書店, 東京 (1981)
10. 芝田清吾：日本古代家畜史の研究・p100-189, 学術出版会, 東京 (1969)

第62表 川西北七条 I 遺跡出土牛骨の計測値

	川西北 七条 I 遺跡	下川津遺跡	口之島牛 雄 (n = 4) 雌 (n = 16)	見島牛 雄 (n = 2) 雌 (n = 2)	黒毛和種 雄 (n = 10) 雌 (n = 25)
橈骨					
近位端幅	7.29	—	8.42 ± 0.22 7.51 ± 0.19	9.27 7.29	10.51 ± 0.50 8.79 ± 0.61
近位端径	3.45	—	4.11 ± 0.04 3.67 ± 0.13	4.65 3.67	5.23 ± 0.25 4.53 ± 0.33
骨体中央幅	3.50	—	4.04 ± 0.36 3.75 ± 0.12	5.41 4.40	5.82 ± 0.23 4.50 ± 0.28
骨体中央径	2.30	—	2.21 ± 0.13 2.07 ± 0.08	2.79 2.18	3.17 ± 0.20 2.70 ± 0.25
中手骨					
骨体中央幅	3.14	3.07	3.35 ± 0.44 2.87 ± 0.09	4.15 2.81	4.65 ± 0.21 3.48 ± 0.23
骨体中央径	2.20	2.48	2.22 ± 0.20 2.01 ± 0.07	2.68 2.15	2.84 ± 0.09 2.46 ± 0.17

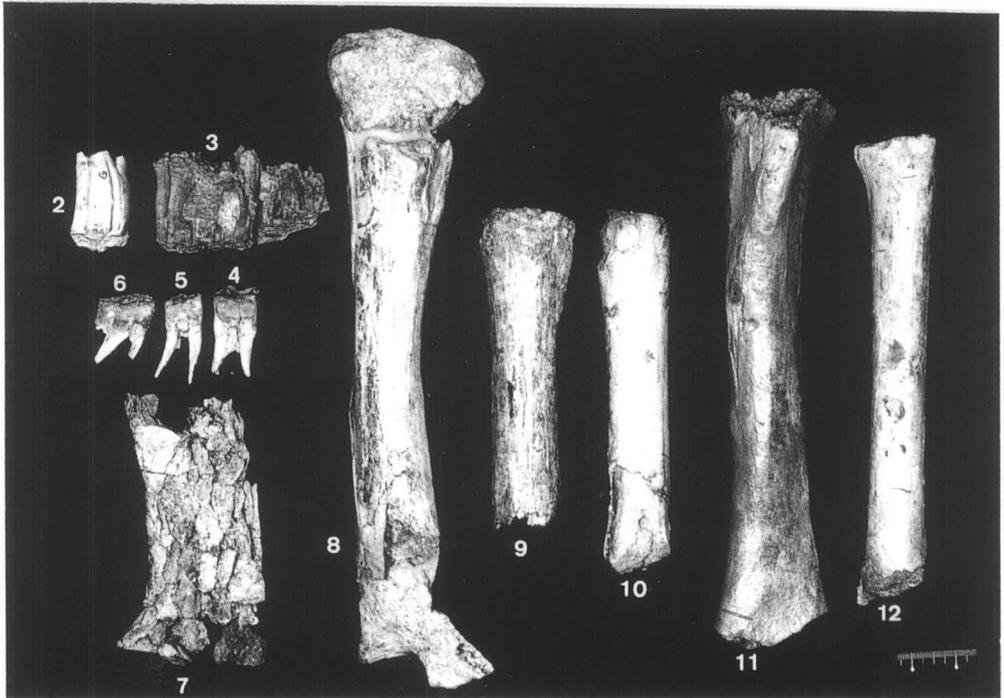
第63表 川西北七条 I 遺跡出土馬骨の計測値

	川西北 七条 I 遺跡	下川津遺跡	明神遺跡	野間馬 1 2	トカラ馬 雄(n=6) 雌(n=8)	御崎馬 雄(n=12) 雌(n=16)
橈骨						
近位端幅	7.18	-	-	6.36 6.49	7.11±0.17 6.92±0.36	7.98±0.31 7.89±0.26
近位端径	4.10	-	-	- -	3.98±0.22 3.96±0.22	4.68±0.28 4.62±0.24
骨体中央幅	3.17	-	2.93	2.90 -	3.29±0.33 3.25±0.26	3.72±0.15 3.63±0.17
骨体中央径	2.38	-	2.08	2.00 -	2.26±0.18 2.30±0.20	2.55±0.16 2.53±0.18
中手骨						
骨体中央幅 1	2.80	-	2.42	2.67 -	2.90±0.24 2.84±0.15	3.22±0.10 3.12±0.14
骨体中央幅 2	3.09	-	-	- -	- -	- -
骨体中央径 1	2.08	-	1.75	1.80 -	2.06±0.11 2.14±0.13	2.40±0.07 2.38±0.11
骨体中央径 2	2.10	-	-	- -	- -	- -
脛骨						
骨体中央幅	3.44	-	3.00	2.96 3.08	3.36±0.19 3.46±0.20	4.00±0.16 3.92±0.19
骨体中央径	2.87	-	2.35	2.27 -	2.81±0.21 2.87±0.14	3.29±0.22 3.27±0.13
中足骨						
近位端径	3.62	3.75	-	- -	3.69±0.12 3.54±0.23	4.29±0.29 4.23±0.28
骨体中央幅	2.39	2.77	2.24	2.47 -	2.69±0.21 2.72±0.11	3.07±0.09 3.03±0.14
骨体中央径	2.42	2.82	1.96	2.15 -	2.42±0.17 2.38±0.14	2.77±0.12 2.78±0.15



第181図 写真図版 I

- ウシ
1. 左下顎骨
 2. 左下顎骨第三後臼歯 (1と同一個体)
 3. 右上腕骨
 4. 右橈骨
 5. 左橈骨
 6. 右中手骨



第182図 写真図版Ⅱ

- ウマ 1. 頭蓋骨（左側のみ）
 2. 左上顎第三前臼歯
 3. 左上顎第二前臼歯，第四前臼歯，第一後臼歯
 4.5.6. 右下顎第一，二，三後臼歯
 7. 右肩甲骨 8. 左橈骨 9. 左中手骨
 10. 左中手骨 11. 左脛骨 12. 左中足骨

第4節 川西北・七条 I 遺跡周辺の古植生

パリノ・サーヴェイ株式会社

(1)はじめに

川西北・七条 I 遺跡が位置する丸亀平野は、土器川流域に広がる扇状地平野である。本遺跡は平野のほぼ中央部にあり、土器川左岸に位置する。これまでの発掘調査により、弥生時代中期から江戸時代の自然流路や溝跡などが主に検出されている。それらの遺構の中で、今回分析調査対象とする旧河川（SR-01）は、出土遺物などから弥生時代終末期から埋積が始まったとされている。

今回の自然科学分析は、本遺跡周辺の古植生について検討するために、SR-01埋積物を対象に花粉分析を行う。また発掘調査時にSR-01の埋積物を水洗選別した際に得られた植物遺体について種実遺体同定をそれぞれ実施した。

(2)試料

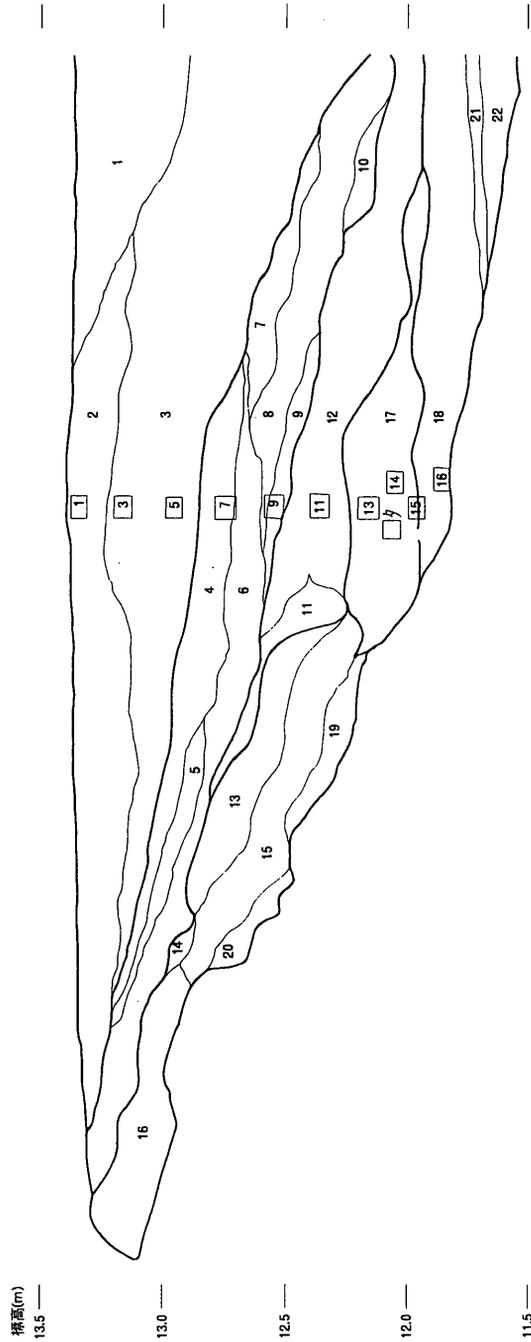
SR-01埋積物は、1層～22層に分層されている（第183図）。各層の時代性は、遺物の出土状況から18層が弥生時代末、7・8層が古墳時代、3層が奈良時代とされている。分析試料は、褐灰色～灰黄褐色を呈する

シルト～粘土、黒褐色シルト質砂である。

花粉分析は、この河川埋積物を対象に採取された10点（試料番号1・3・5・7・9・11・13・14・15・16）を実施する（第66表）。また、種実遺体同定は、発掘調査時に3層、7・8層、18層を水洗選別して得られた16点（試料番号1～16）について行う。なお、種実遺体を行った試料の詳細は結果と共に表示する。

試料番号	試料採取層位	層相
1	I-2層	灰黄褐色粘土
3	I-3層	灰黄褐色粘土
5	I-3層	褐灰色粘土
7	II-4・6層	褐灰色粘土
9	II-8・9層	褐灰色粘土
11	III-12層	灰黄褐色砂混じりシルト
13	III-17層	黒褐色砂混じりシルト
14	III-17層	黒褐色シルト質砂
15	III-17・18層	黒褐色シルト質砂
16	III-18層	灰黄褐色シルト

第64表 花粉分析試料の一覧



□ : 花粉分析試料採取位置

第183図 試料採取地点の土層断面

(3)分析方法

a. 花粉分析

花粉・孢子化石は、湿重約10gの試料について水酸化カリウム処理、篩別(250 μ m)、重液分離(臭化亜鉛、比重2.3)、フッ化水素酸処理、アセトリシス処理(無水酢酸:濃酸=9:1)の順に物理・化学的な処理を施して分離・濃集する。処理後の残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製した後、光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査しながら、出現する全ての種類について同定・計数を行う。

結果は同定・計数結果の一覧表および主要花粉化石群集の層位的分布図として表示する。図中の出現率は、木本花粉が木本花粉総数を、草本花粉・シダ類孢子が総花粉・孢子数より不明花粉を除いた数をそれぞれ基数とした百分率で算出する。なお、図表中で複数の種類をハイフォン(-)で結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

b. 種実遺体

双眼実体顕微鏡下で、その形態的特徴から種類を同定した。試料は種類毎にビンに入れて保存する。

(4)化石の産状

a. 花粉化石

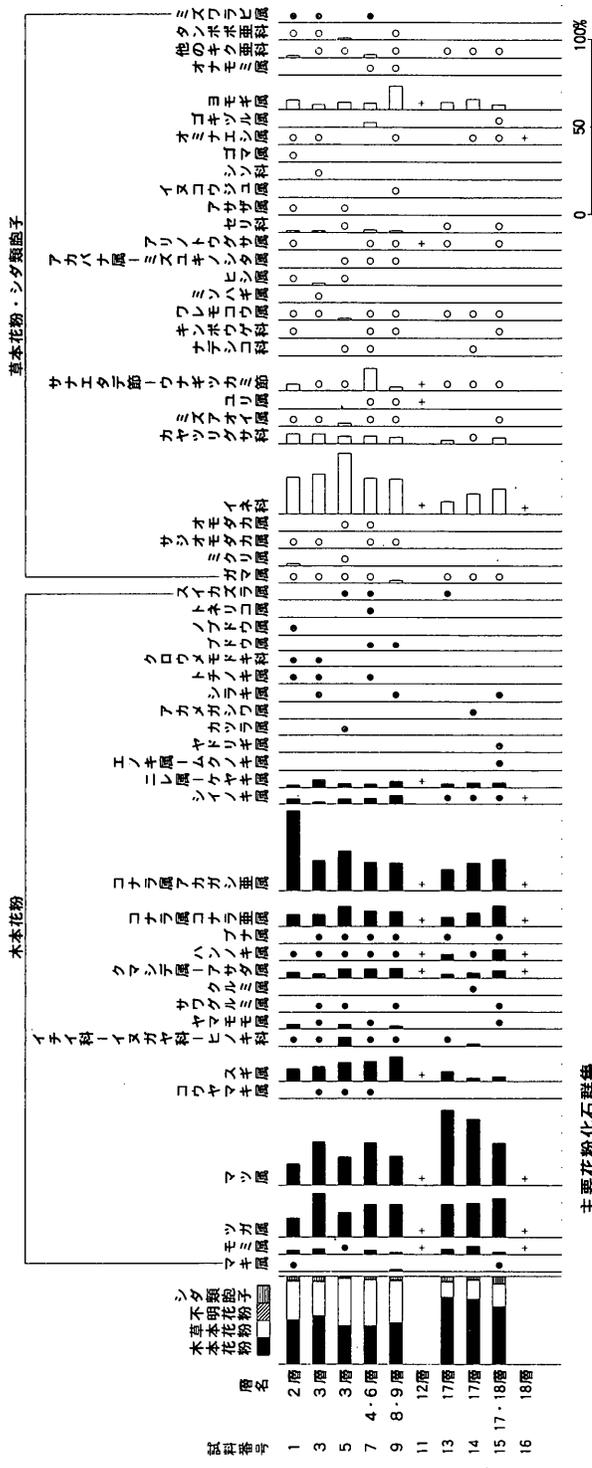
結果を第66表・第184図に示す。試料番号16は、花粉化石の検出個体数が少ない。また、試料番号11では、花粉化石の保存状態が極めて悪く、外膜が溶けて薄くなっていたり、あ

番号	試料名	種名	数量
1	SR-01 ③ 最下層	貝破片	
2	SR-01 ③ 最下層	不能(植物の刺-棘)	
3	SR-01 ③ 最下層	タデ属	4
		ブドウ属	4
		ヒルムシロ属	3
		カヤツリグサ科	2
		不能(木の芽など)	
4	SR-01 ③ 最下層	アオツツラフジ	1
		不能	
5	SR-01 ③ 最下層	タデ属	2
		ブドウ属	1
		不能	
6	SR-01 ③ 中層	貝破片	
7	SR-01 ⑬ 流木近く	トウガン	11
		タデ属	10
		ブドウ属	5
		カヤツリグサ科	4
		ヒルムシロ属	4
		エノコログサ属	4
		ミクリ属	2
		オナモミ属	1
		メロン類	1
		不明	7
		不能	
		8	SR-01 ⑬ 流木近く
9	SR-01 ⑬ 流木近く	不能(植物の棘)	
10	SR-01 ⑬ 流木近く	不能	
11	SR-01 ⑧ 中~下層	タデ属	3
		不能	
12	SR-01 ③ 下層	不能	
13	SR-01 ③ 下層	貝破片	
14	SR-01 ③ 下層	タデ属	4
		不明	2
		オナモミ属	1
		ブドウ属	1
		不能	
15	SR-01 II層 (⑦, ⑧)	不能	
16	SR-01 II層 (⑦, ⑧)	ヒョウタン類	1
		不能	

第65表 種実遺体同定結果

種 類	試料番号	1	3	5	7	9	11	13	14	15	16
木本花粉											
マキ属		1	-	-	-	4	-	-	-	2	-
モミ属		6	14	1	8	4	19	8	11	4	1
ツガ属		27	102	35	60	57	40	49	43	60	5
マツ属		30	102	40	78	51	62	113	83	66	3
コウヤマキ属		-	3	1	3	-	-	-	-	-	-
スギ属		18	35	27	37	43	6	15	5	8	-
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科		1	3	13	1	3	-	1	3	-	-
ヤナギ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヤマモモ属		7	2	7	3	6	-	-	-	1	-
サウグルミ属		-	2	1	-	3	-	-	-	1	-
クルミ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
クマシデ属-アサダ属		8	10	13	17	17	3	6	7	12	1
ハンノキ属		1	1	2	3	3	1	10	2	17	3
ブナ属		-	2	2	2	2	-	1	-	1	-
コナラ属-コナラ亜属		17	28	28	28	26	3	14	17	32	3
コナラ属-アカガシ亜属		113	73	57	54	50	4	33	36	50	4
シノキ属		8	5	8	11	16	-	1	2	2	1
ニレ属-ケヤキ属		4	19	6	7	11	2	6	6	8	-
エノキ属-ムクノキ属		-	-	-	-	-	-	-	-	2	-
ヤドリギ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
カツラ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
アカメガシワ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
シラキ属		-	1	-	-	3	-	-	-	1	-
ウルシ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
カエデ属		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
トチノキ属		1	1	-	1	-	-	-	-	-	-
クロウメモドキ科		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ブドウ属		-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
ツタ属		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
ノブドウ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
グミ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ハイノキ属		-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
トネリコ属		-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
スイカズラ属		-	-	1	1	-	-	1	-	-	-
草本花粉											
ガマ属		2	5	3	6	9	-	2	1	1	-
ミクリ属		6	-	3	-	-	-	-	-	-	-
サジオモダカ属		2	1	-	2	2	-	-	-	-	-
オモダカ属		-	-	2	2	-	-	-	-	-	-
イネ科		98	164	190	143	124	5	24	33	58	4
カヤツリグサ科		26	39	23	32	23	-	7	2	14	-
ミズアオイ属		1	4	10	6	1	-	-	-	1	-
ユリ属		-	-	-	1	1	2	-	-	-	-
クワ科		-	-	-	1	2	-	-	-	-	-
サナエタデ節-ウナギツカミ節		18	7	2	89	13	2	1	1	2	-
タデ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科		2	-	1	-	2	-	-	-	-	-
ナデシコ科		-	-	1	3	-	-	-	1	-	-
キンボウゲ科		1	-	-	2	2	-	-	-	1	-
アブラナ科		-	-	-	1	-	-	2	-	-	-
ワレモコウ属		1	2	6	2	3	-	1	1	1	-
バラ科		1	-	3	-	2	-	-	-	1	-
マメ科		-	-	5	-	2	-	-	1	1	-
ミソハギ属		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ヒシ属		1	8	1	-	-	-	-	-	-	-
アカバナ属-ミズユキノシタ属		-	-	1	3	2	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属		2	-	-	2	2	1	2	-	1	-
セリ科		5	8	5	12	7	-	1	-	1	-
アサザ属		2	-	2	-	-	-	-	-	-	-
イヌコウジュ属		-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
シソ科		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ゴマ属		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
オミナエシ属		2	2	-	-	3	-	-	1	2	1
ゴキツル属		-	-	-	19	-	-	-	-	1	-
ヨモギ属		26	22	23	26	86	3	14	18	12	-
オナモミ属		-	-	-	1	1	-	-	-	-	-
他のキク亜科		5	5	2	12	3	-	2	1	2	-
タンポポ亜科		2	3	6	-	2	-	-	-	-	-
不明花粉		7	7	1	10	6	-	2	2	3	-
シダ類孢子											
ミズワラビ属		1	1	-	1	-	-	-	-	-	-
他のシダ類孢子		20	40	15	22	29	29	21	12	35	2
合 計											
木本花粉		245	404	244	316	301	140	259	218	269	21
草本花粉		205	272	289	365	295	13	56	60	99	5
不明花粉		7	7	1	10	6	0	2	2	3	0
シダ類孢子		21	41	15	23	29	29	21	12	35	2
総計(不明を除く)		471	717	548	704	625	182	336	290	403	28

第66表 花粉分析結果



主要花粉化石群集
 花粉は本草花粉化石総数、草本花粉・シダ類孢子は総数より不明花粉を除く数を基数として
 出現率は、本草花粉は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。
 百分率で算出した。なお、○●は1%未満、+は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

第184図 主要花粉化石群集

るいは壊れている。したがって、これらの2試料については花粉化石を統計資料として扱うことを控える。木本花粉はツガ属・マツ属・スギ属・コナラ亜属アカガシ亜属が多産し、次いでスギ属・コナラ属コナラ亜属が多産する。この他に、クマシデ属ーアサダ属・シイノキ属・ニレ属ーケヤキ属などが検出される。

草本花粉では、イネ科が多産し、ガマ属・カヤツリグサ科・ミズアオイ属・サナエタデ節ーウナギツカミ節・ワレモコウ属・セリ科・ヨモギ属などが検出される。また、試料番号9~1では、ミクリ属・サジオモダカ属・ヒシ属・アサザ属・ミズワラビ属と水生植物に由来する花粉・胞子が豊富に検出される。また、試料番号1では、栽培植物のゴマ属が検出される。

(5)種実遺体

結果を第65表に示す。保存状態などから同定不能のものが多いが、これらは植物の棘・芽・樹皮の細片などで、種類が特定できないものである。また、淡水貝と思われる二枚貝や巻貝の破片も多く含まれている。検出された種実遺体の種類は、ブドウ属、ミクリ属、ヒルムシロ属、エノコログサ属、カヤツリグサ科、タデ属、アオツズラフジ、トウガン、メロン類、ヒョウタン類、オナモミ属の合計11種類である。以下に検出された種類の形態的特徴を記す。

・ブドウ属 (*Vitis* sp.) ブドウ科

種子が検出された。黒色。大きさは4 mm程度。心臓形。腹面には中央に縦筋が走り、その両脇には楕円形に深くくぼんだ穴が存在する。背面には中央に「さじ」状の「へそ」があり、「へそ」回りはくぼんでいる。

・ミクリ属 (*Sparganium* sp.) ミクリ科

果実が検出された。大きさは2 mm程度。側面観は紡錘形で、上面観は多角形状である。表面はざらつく。やや堅くて弾力があり、数本の筋が走る。先端部が鋭くとがる。

・ヒルムシロ属 (*Potamogeton* sp.) ヒルムシロ科

果実が検出された。褐色、広卵形で、大きさ2 mm程度。背部に小さな翼状の突起が2つある。背面の皮ははずれやすい。

・エノコログサ属 (*Setaria* sp.) イネ科エノコログサ属

穎が検出された。淡褐色、半球状で大きさ2 mm程度。表面には縦長の細胞が密に配列する。柔らかくて弾力があり、薄い。

・カヤツリグサ科 (*Cyperaceae* sp.)

果実が検出された。細長くて3稜があり、黒色。大きさは3 mm程度。表面は薄くて堅い。

・タデ属 (*Polygonum* sp.) タデ科

果実が検出された。黒色、3 稜形大きさは2 mm程度。表面は薄くて堅く、ざらつく。

・アオツズラフジ (*Cocculus orbiculatus* (L.) DC.) ツズラフジ科アオツズラフジ属
核が検出された。褐色で、大きさは2 mm程度。円形で扁平。背面は比厚し、放射状に細かい隆起がある。表面は堅くて厚く、ざらつく。

・トウガン (*Benincasa hispida* Cogn.) ウリ科トウガン属

種子が検出された。種子は褐色。長さ10mm程度。長楕円形をしており、種皮は厚くやや堅い。上端に明瞭なへそがある。縁に段差があり、薄くなっている。

・メロン類 (*Cucumis melo* L.) ウリ科キュウリ属

種子が検出された。大きさは6 mm程度。側面観は楕円形、上面観はやや偏平な楕円形。表面は比較的平滑で、弾力がある。

・ヒョウタン類 (*Lagenaria* sp.) ウリ科ユウガオ属

種子の破片が検出された。褐色で長さ8 mm程度。長楕円形をしており、周辺の縁の部分が厚い。大きく明瞭な「へそ」が存在する。

・オナモミ属 (*Xanthium* sp.) キク科

総苞が検出された。褐色で、大きさは10mm程度。総苞片の外側は開き、とげ状に突出する。刺の先には釣り針状の「かぎ」がある。

(6)遺跡周辺の古植生

弥生時代以降、本地域は、マツ属・スギ属・ツガ属などの針葉樹、ヤマモモ属・クマシデ属ーアサダ属・コナラ亜属・アカガシ亜属・シイノキ属・ニレ属ーケヤキ属などの広葉樹から構成される森林植生であったと考えられる。これらの種類の中でアカガシ亜属・シイノキ属が暖温帯常緑広葉樹林（照葉樹林）の主要構成要素であることから、周辺は暖温帯に属していたと考えられる。また、ツガ属は暖温帯から冷温帯の移行帯で森林を構成する温帯性針葉樹であることから後背山地等、サワグルミ属・クルミ属・ニレ属ーケヤキ属・トチノキ属などは湿地林や溪谷林を形成する種類を含むことから河川周辺等に分布していた可能性がある。この他、ブドウ属・クロウメモドキ科・ツタ属・ノブドウ属・スイカズラ属なども周辺に生育していたと推定される。このように、調査地点の周辺は種類構成が豊富な植生であったとみられる。丸亀平野東端の下川津遺跡（バリノ・サーヴェイ株式会社

社、1990)や高松平野の林・坊城遺跡(パリノ・サーヴェイ株式会社、1993)で実施した花粉分析でも、本遺跡と同様にアカガシ亜属・コナラ亜属・ツガ属・スギ属が多く検出されている。ただし、本遺跡では、下川津遺跡や林・坊城遺跡の分析結果と比較してマツ属の出現率が高い。これは、花粉化石群集の形成過程や局地的な植生を反映しているのかもしれない。いずれにしても丸亀平野や高松平野では、暖温帯性の森林植生が存在していたと考えられる。

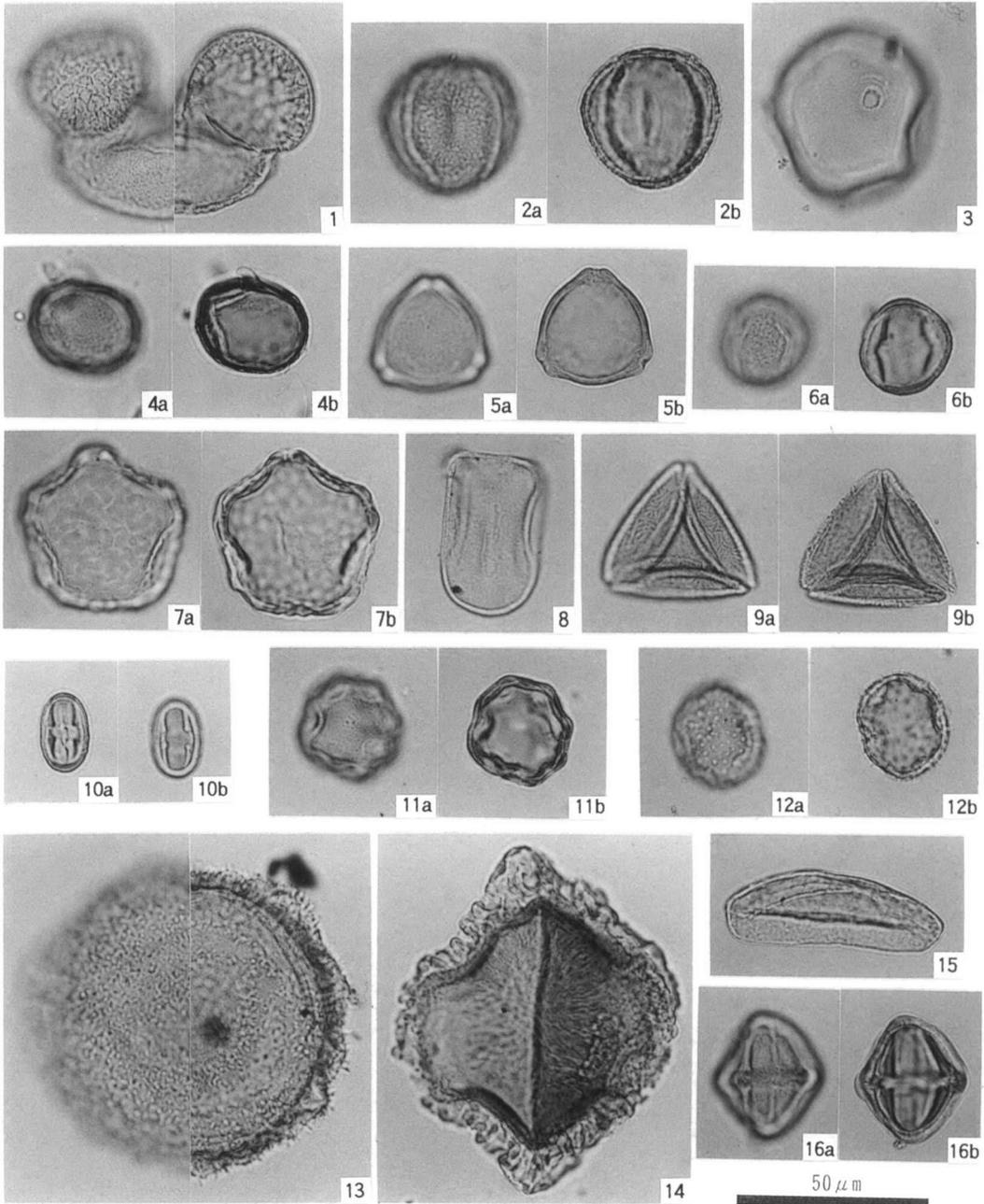
一方、河川埋積物中からはイネ科が多産し、抽水植物のガマ属・ミズアオイ属・サジオモダカ属、カヤツリグサ科・サナエタデ節ーウナギツカミ節・ワレモコウ属・アリノトウグサ属・ヨモギ属などが検出される。また、3層・2層で水面に葉を浮かべて生活する浮葉植物のヒシ属・アサザ属が検出される。種実遺体では、水生植物のヒルムシロ属・ミクリ属が検出されており、カヤツリグサ科・タデ属・アオツヅラフジ・エノコログサ属・オナモミ属など人里近くの開けた草地などを好んで生育する種類を含む分類群が多く検出されている。したがって、弥生時代末～古墳時代頃、河川の周辺はエノコログサ属などを含むイネ科を中心に、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節などのタデ属、ワレモコウ属、アリノトウグサ属、オナモミ属、ヨモギ属といった草本類が生育する草地となっており、また河川内部には抽水植物が生育していたと考えられる。しかし、奈良時代頃になると、河川内部は浮葉植物が生育する比較的水深があり、しかも流れが穏やかな安定した状態となっていたとみられる。

なお、種実遺体で検出されたブドウ属、トウガン、メロン類、ヒョウタン類は、食用など有用な植物である。このうち、ブドウ属は山野での採取が可能であるが、トウガン・メロン類・ヒョウタン類は栽培のために渡来した種類である。これらは日本では弥生時代以降に出土例が増加することが指摘されている(粉川、1988)。本地域でも、弥生時代以降になるとこれらの種類が栽培されていたとみられる。また、2層でゴマ属が検出されていることから、奈良時代以降にはゴマも栽培されていたと考えられる。このように弥生時代以降、河川の周辺では畑作が行われていたと推定されている。

<引用文献>

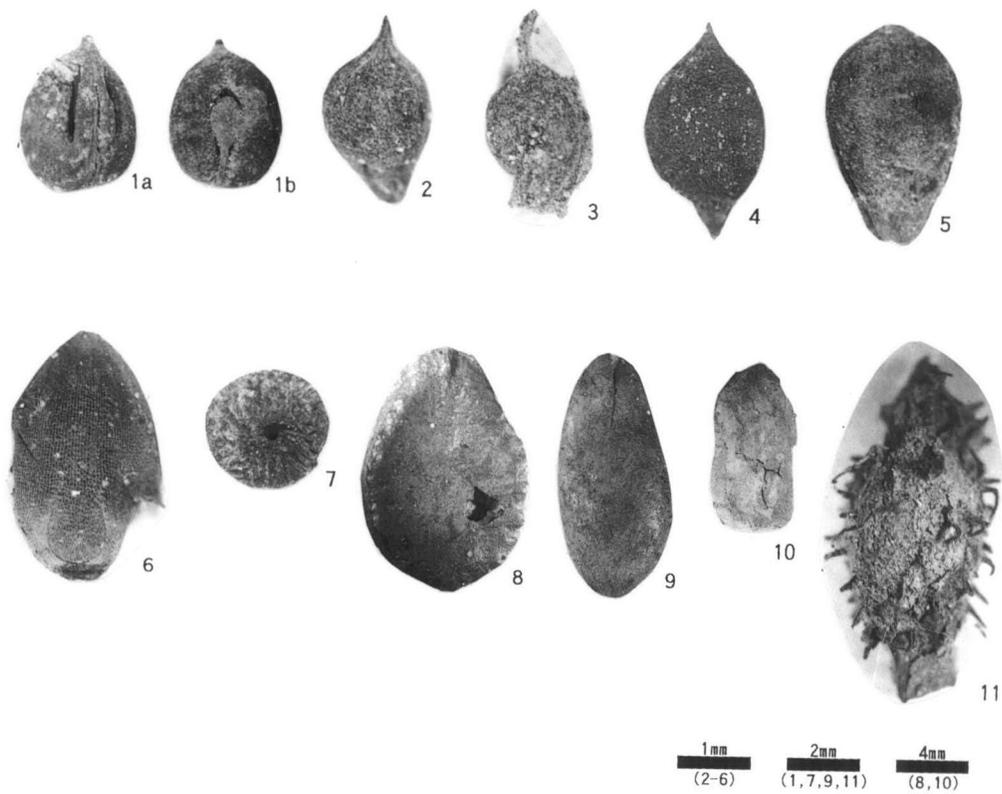
粉川昭平(1988)穀物以外の植物食。「弥生文化の研究2 生業」,金関 怨・佐原 真編, p.112-115., 雄山閣。

パリノ・サーヴェイ株式会社(1990)下川津遺跡における花粉・珪藻分析委託報告。「瀬



- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. マツ属 (試料番号 5) | 2. コナラ属 コナラ亜属 (試料番号 5) |
| 3. イネ科 (試料番号 5) | 4. スギ属 (試料番号 5) |
| 5. ヤマモモ属 (試料番号 5) | 6. コナラ属 アカガシ亜属 (試料番号 5) |
| 7. ニレ属-ケヤキ属 (試料番号 5) | 8. カヤツリグサ科 (試料番号 5) |
| 9. アサザ属 (試料番号 5) | 10. シイノキ属 (試料番号 5) |
| 11. サジオモダカ属 (試料番号 5) | 12. オモダカ属 (試料番号 5) |
| 13. ツガ属 (試料番号 5) | 14. ヒシ属 (試料番号 5) |
| 15. シズアオイ属 (試料番号 5) | 16. ワレモコウ属 (試料番号 5) |

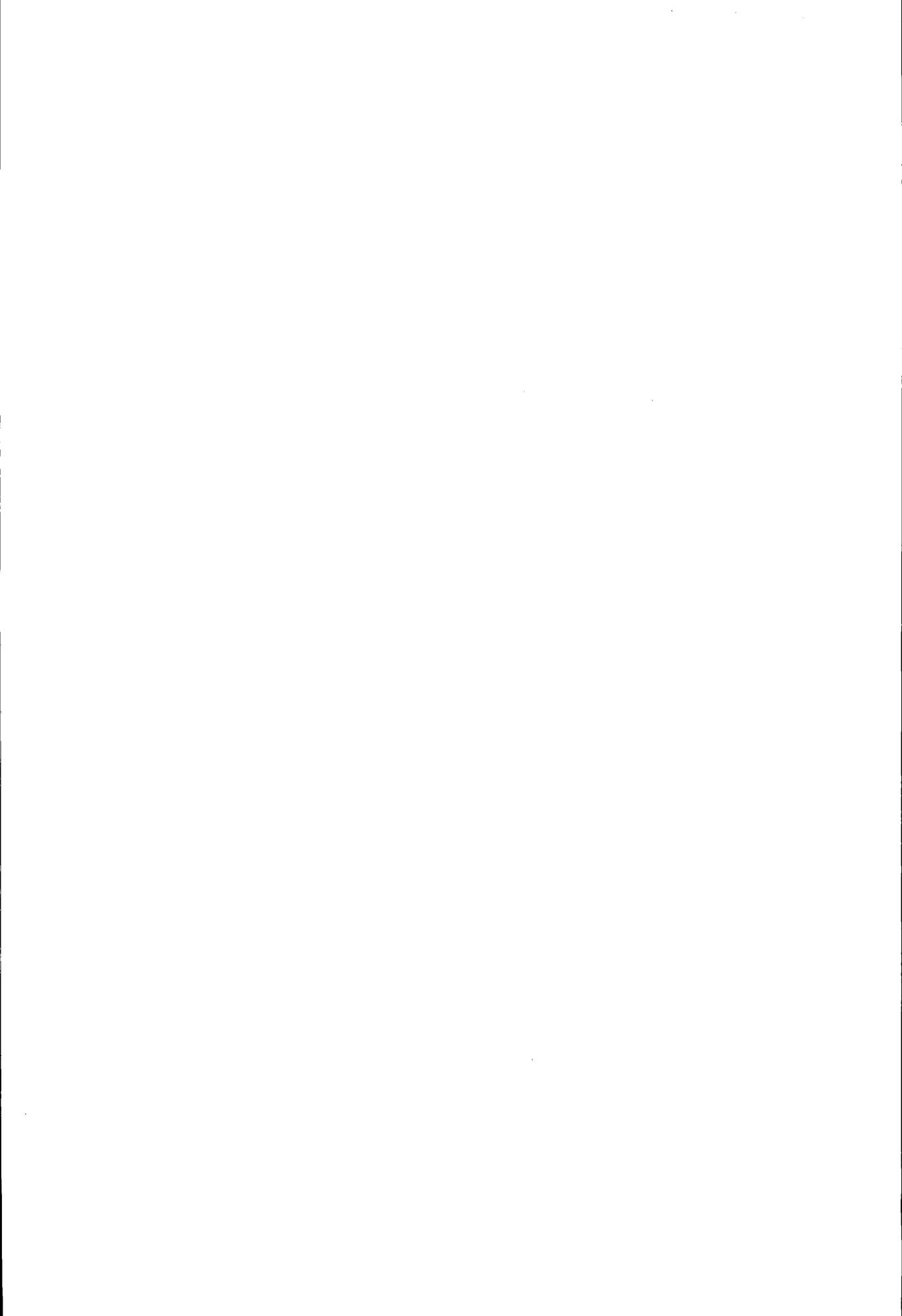
第185図 花粉化石図版



- 1. ブドウ属 (試料番号5)
- 2. ミクリ属 (試料番号7)
- 3. ヒルムシロ属 (試料番号7)
- 4. タデ属 (試料番号5)
- 5. カヤツリグサ科 (試料番号7)
- 6. エノコログサ属 (試料番号7)
- 7. アオツラフジ (試料番号4)
- 8. トウガン (試料番号7)
- 9. メロン類 (試料番号7)
- 10. ヒョウタン類 (試料番号16)
- 11. オナモミ属 (試料番号14)

第186図 種実遺体図版

戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡－第2分冊－, p.479-518,
香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター・本州四国連絡橋公団,
パリノ・サーヴェイ株式会社(1993)花粉分析とプラント・オパール分析, 高松東道路建
設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊「林・坊城遺跡」, p.239-263, 香川県埋蔵文化
財研究会.



第6章 考 察

三条黒島遺跡の旧石器ブロックと接合資料をめぐる

1 はじめに

三条黒島遺跡における旧石器とその接合資料の出土は、従来原産地である国分台周辺と備讃瀬戸島嶼部の二極的な遺跡群以外にほとんど把握されていなかった当該地域の遺跡分布と石材消費を巡る遺跡間関係を、今後立体的に確認してゆく方向性を提示できた点で重要であった。

現地調査から9年が経過し、その間に各所で旧石器が認識されはじめた⁽⁵²⁾。また、従前の発掘資料の中にもさほど風化していない旧石器が再認識され、周辺に遺跡の所在が予測されることもある⁽⁵³⁾。このような平野部の今後の調査で蓄積される資料は、旧石器の編年的研究や石材を消費した集団の性格に関して、貴重なデータを提示する。

今回検出した出土石器や石器ブロックについては、数量的に限界があり、また遺跡の広がりも十分に把握できていないことに加えて、当遺跡の調査後に新たに発見された旧石器資料もまだ資料整理が十分でない。したがって、ここで当遺跡の出土資料の総合的な評価を下すことは時期尚早である。しかしながら、膨大な資料が提示されている備讃瀬戸島嶼部の資料や当遺跡に近接する郡家田代遺跡⁽⁵⁴⁾、高松平野の中間西井坪⁽⁵⁵⁾・東井坪遺跡⁽⁵⁶⁾等でこれまでに提示された資料との比較は、今後の問題点を整理する上で必要なことであろう。また、第5章の石材原産地推定では郡家田代遺跡に広島県冠地方から石材がもたらされたことも判明しており、遠隔地との比較もまた重要である⁽⁵⁷⁾。

ここでは上記の制約を踏まえつつ、他遺跡、他地域とのやや概括的な比較をとおして、三条黒島遺跡の石器ブロックの特性や、接合資料に見られる技法の特徴について整理を行い、今後の調査研究に当たってのいくつかの視点を提示しようとするものである。

2 三条黒島遺跡石器ブロックの特性と消費地遺跡としての意義

まずはじめに、当遺跡のブロック内の石器分布と石器内容をやや詳細に検討し、次に他遺跡との比較を通して石材消費地遺跡としての特徴を、予察的に述べることにする。

－石器分布の検討－

ブロックは巨視的には北方向に緩やかに下降する微地形傾斜の上面に形成される（第14図）。しかしブロック内を細かく見ると、ブロック形成時の基盤層である第8層上面にかなり凹凸があり、ブロックの中心位置は北西方向へ開く凹地の谷頭部分に相当することが判る（第21図）。またブロックの南西には、中心部が若干窪む4 m四方ほどの平坦面があり、自然に浮き上がったとは思われない大小の礫が2点分布している。

ブロック内では多数の石片の接合が認められた（第22図）。これはブロック内で盛んな剥片剥離作業が行われたことを示している。この接合資料の分布、およびそのほかの石器の分布からみて、第187図に示す直径約4 mの範囲については、石器製作が行われ、それによって生じた石片がその場に遺棄された場として評価することができる。この範囲を主要分布域とする（第187図）。

一方、主要分布域から外に出る石器は20点あり、この分布を便宜上「外郭域」として区分しよう。ここには、剥片以外の器種が多く見られることに留意したい。角錐状石器、有加工痕剥片、有使用痕剥片、石核については50%以上が外郭域に分布している。

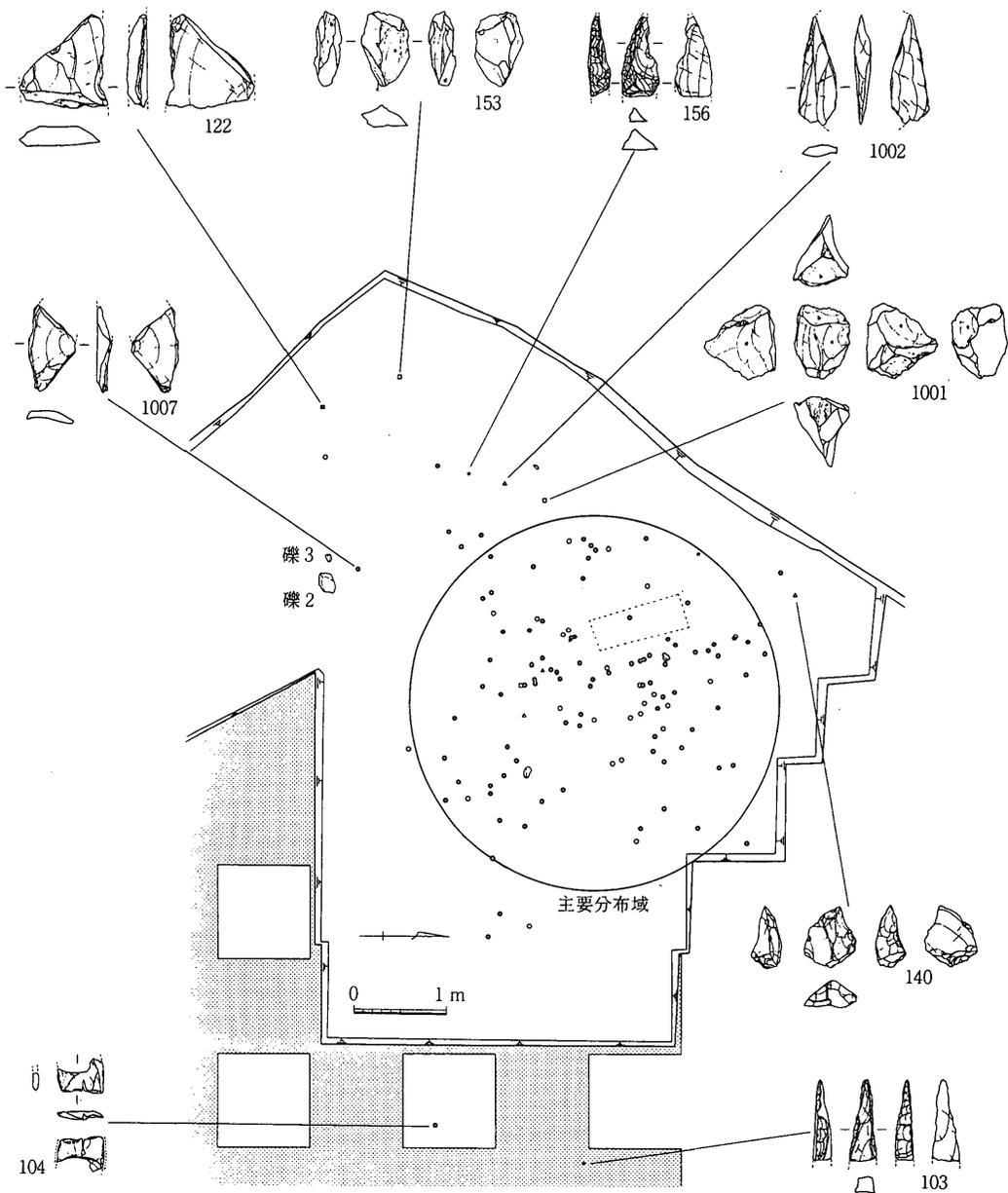
外郭域の分布をもう少し細かく見ると、主要分布域の南西部に10点以上のやや散漫なまとまりがあることに気付く。ここには、上記の外郭域主体分布器種以外にも、翼状剥片の1007も分布する。さらに、この範囲には、礫2・礫3の分布も認められる。礫については、被熱痕や磨耗痕などは観察できないが、大小の礫が一様に礫層から浮き上がっていることを評価し、人為的に動かされた礫と判断している。

このことから、主要分布域の南西部については、剥片剥離を盛んに行った主要分布域と関連しつつも、若干異なった機能を持った場として評価するのが適当と考える。これは、微地形から推定された平坦地の位置とも概ね一致する。

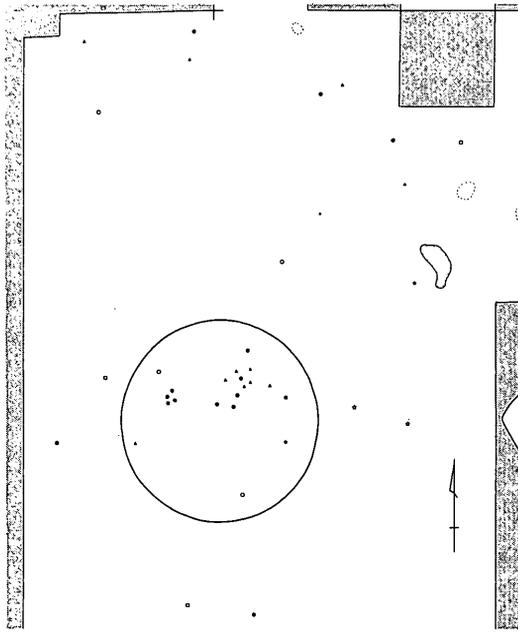
平坦地の機能については俄に判断し難いが、焼け石を伴ういわゆる「礫群」⁽⁵⁸⁾や、周辺に炭化物などの火処の痕跡がみられないことから、一定期間の居住地と考えるには材料が貧弱である。調査地外にそのようなブロックを併せ持つ可能性はあるが、現段階ではむしろ一時的な停留地の様相が強いブロックと言える。

－石器分布の比較－

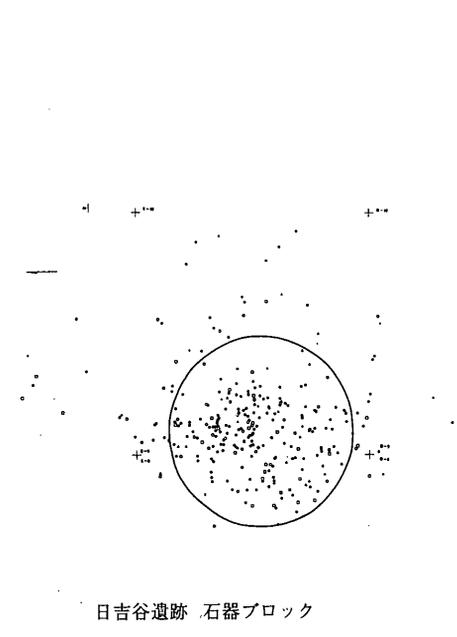
当遺跡の石器ブロックにおける石器分布は、他遺跡と比較した場合にどのような特徴が認められるか、数少ない五色台産サヌカイトを素材とし瀬戸内技法が認められる純粋な石



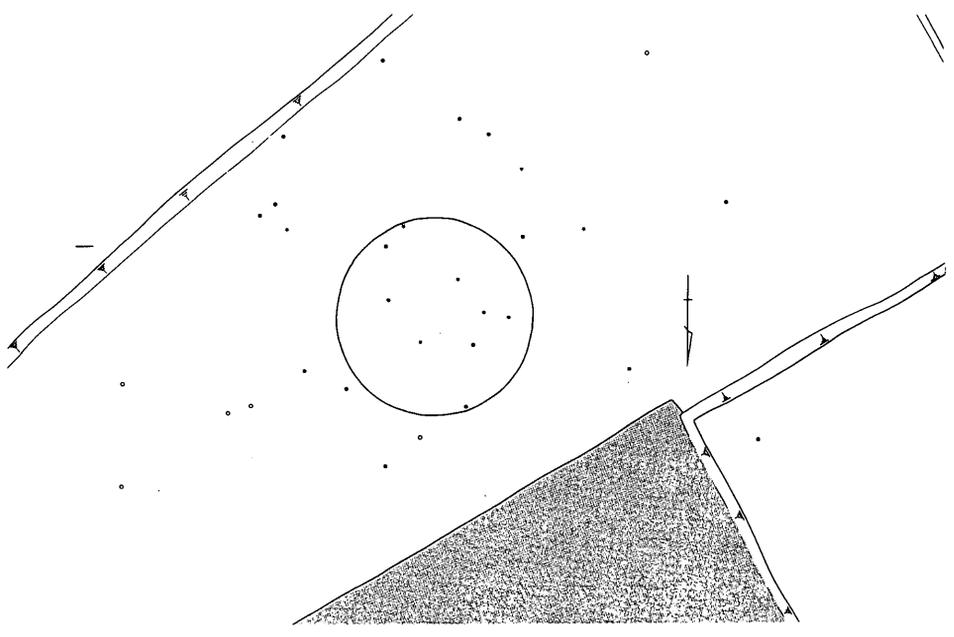
第187図 三条黒島遺跡における石器主要分布域と外柵域出土の石器



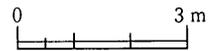
郡家田代遺跡 石器集中部 1



日吉谷遺跡 石器ブロック



郡家田代遺跡 石器集中部 2



第188図 他遺跡の石器ブロック

器ブロックの類例，2遺跡3ブロックと比較しよう。

郡家田代遺跡は当遺跡の約1.5km東方の丸亀平野中央部に所在する遺跡で，立地は当遺跡のように基底礫層の隆起帯上にある。40mほどの間隔で石器ブロックが2箇所検出され，合計100点弱の石器が出土した。内容は瀬戸内技法を反映する石器群に交互剥離などの横長剥片剥離技術が伴う。

日吉谷遺跡⁽⁶⁹⁾は徳島県阿波町の吉野川北岸河岸段丘上に立地する。標高は約60mで，段丘先端付近で石器ブロック1箇所が確認された。出土石器の総数は377点である。

先に当遺跡の石器分布について直径4mの範囲を主要分布域として把握した。これを基準として各ブロックの石器分布に4m円を重ねてみる。日吉谷では当ブロックとよく似て主要分布域と外郭域が比較的分離できる様子がみられるが，ただ主要分布域の大きさは当ブロックよりやや広めである。分布密度は当ブロックと比べて2倍ほどの密度をもつ。これに対して，郡家田代の2ブロックは石器集中部1が若干まとまりをもつものの，主要分布域は直径2m程度に限られる。また，石器集中部2は全体的に分布が散漫で主要分布域を形成せず，広範囲に等しく石片が散見される状況が読みとれる。郡家田代遺跡では石器包含層が表土からきわめて浅い位置で検出されたことから，少なからず攪乱を被っていることが予想される。しかし少なくとも石器集中部2では現状でほとんどまとまりが見られないことから，攪乱により滅失したものを加えても，三条黒島や日吉谷のような密度の高いブロックを形成したとは考えにくい。

また，三条黒島の石器ブロックでは主要石器である角錐状石器が主として外郭域やブロック外に分布することを指摘した。この観点で比較すると，郡家田代や日吉谷では主要石器（ナイフ形石器）の多くが分布密度の高い範囲から出土しており，三条黒島とは異なったあり方をみせる（第188図）。また，剥片の接合率を比較すると，郡家田代や日吉谷では数件の接合に留まるが，本文中で述べたように三条黒島で剥片の60%が接合する点は，前2者とは著しく異なる点である。

以上，三条黒島の石器ブロックは，石器の分布密度が高く，まとまりがよい分布状況に加え，剥片の接合率の高さや，主要石器（角錐状石器）が主として外郭域に分布する点について，他とは異なる特徴が抽出できる。このような石器分布の様相の違いは，石材保有量の差や剥片剥離作業の内容の違い，あるいはブロックが形成される時間幅（単時的利用かあるいは複数回の回帰的利用など）や作業者の人数等の多様な背景が反映されるものと思われる。上記のように分布密度が高く，また接合率も高い三条黒島の石器ブロックにつ

いては、他と比べて石材保有量が豊富な環境にあって、集中的な剥片生産を行った短時的利用の場と考えられるが、石器組成や剥片剥離作業の内容を踏まえて検討する必要がある。

なお上記の3遺跡のみならず、備讃瀬戸島嶼部やその他の五色台産サヌカイト分布圏内の遺跡では、いわゆる「礫群」の存在が確認されていない。郡家田代では石器ブロックの周辺で微細な炭化物が出土しており、火の使用は想定されるものの、被熱した礫は全く出土していない。また、備讃瀬戸島嶼部の遺跡群では若干の被熱礫が出土してはいるものの、出土した石器量に比べると、きわめて少量と考えざるを得ない。先の石器分布密度等からみた多様性に反して一様に礫群との関係が稀薄である点も今後留意する必要がある⁽⁶⁰⁾。

－石器組成と剥片剥離作業の内容－

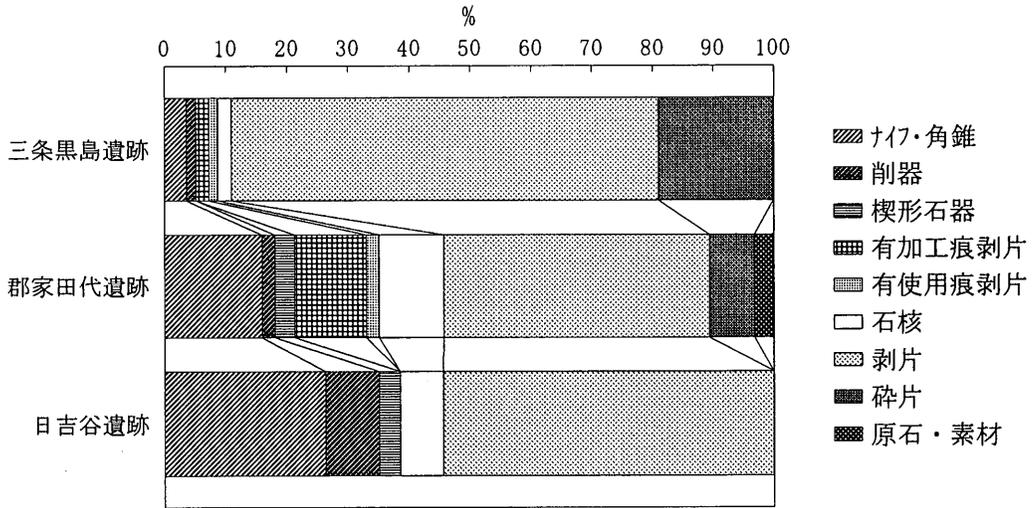
次に石器の組成について、先の遺跡出土資料で比較検討を行う。第67表は各遺跡ごとの資料を、器種別の数量と重量で対比させたものである。第189図にそれを棒グラフで示している。器種については、煩雑さを避けるために主要器種としてナイフ形石器・角錐状石器を一括して集計した。ただし、日吉谷は重量記載のある報告書掲載遺物に限ったため、実態に必ずしも則したものではない可能性がある⁽⁶¹⁾。

グラフから読みとれるように、三条黒島の剥片の組成は他の1.5～2倍を占め、重量で比較すると2～3倍の比率であることが判る。逆に、主要器種の組成は三条黒島が著しく少なく、他の1/4～1/5の比率に留まる点で対照的といえる。

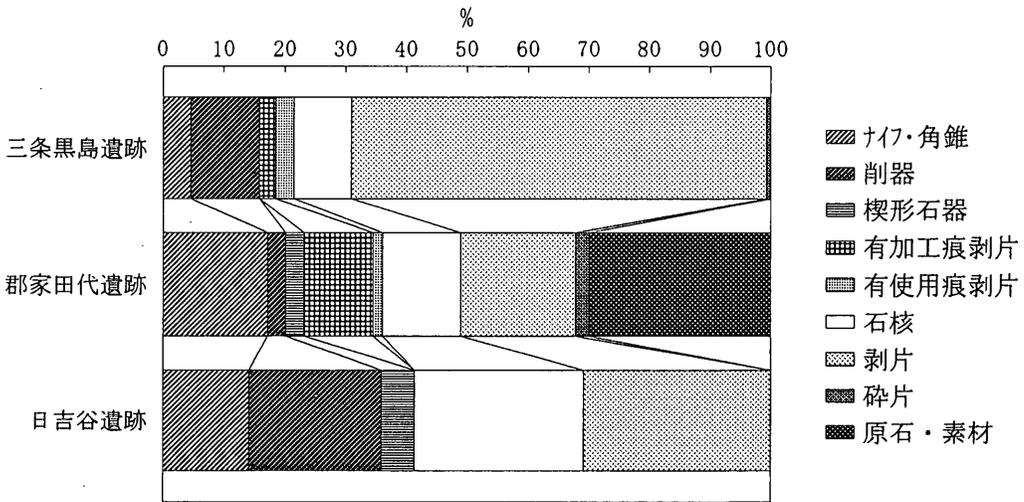
遺跡名 器種\区分	三条黒島遺跡		郡家田代遺跡		日吉谷遺跡	
	数量	重量	数量	重量	数量	重量
ナイフ・角錐	5	35.81	15	232.34	15	89.54
削器	2	87.34	2	39.19	5	137.08
楔形石器	0	0	3	42.03	2	34.37
有加工痕剥片	3	19.72	11	153.66	0	0
有使用痕剥片	2	23.99	2	21.69	0	0
石核	3	73.93	10	172.28	4	175.36
剥片	96	530.99	41	256.37	31	194.7
碎片	26	5.49	7	30.49	0	0
原石・素材	0	0	3	405.87	0	0
合計	137	777.27	94	1353.9	57	631.05

重量は(g)

第67表 石器組成の比較



石器組成比の比較



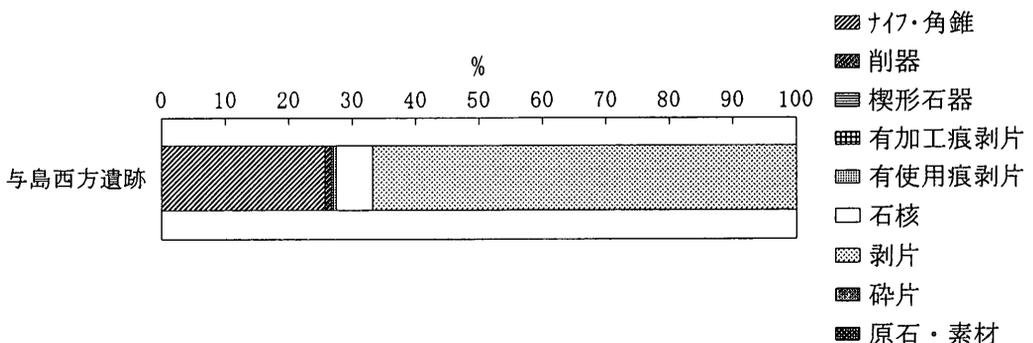
石器重量比の比較

第189図 石器組成グラフ

三条黒島の剥片は、その接合率の高さに反映されるように、主としてその場で行われた剥片剥離作業で生成された剥片から構成されるのに対して、郡家田代では石核の平均重量である17.2gを大きく越える、20g以上の翼状剥片が3点以上は含まれており、遺跡内で瀬戸内技法第2工程が全く行われなかったという訳ではないものの、他所で製作された翼状剥片を少なからず持ち込んでいることが推定される。したがって、遺跡内で行われた剥片剥離作業量は、三条黒島と比較すると数値に示した差以上にやや少なく見積もる必要がある。その他の剥片は5g程度の小形の横長剥片や調整剥片が多い。それを石核からみると、郡家田代の石核は総じて小形で、交互剥離や打面の転移が多い点は、接合資料は少ないものの、小形の横長剥片との対応が考えられる。また、ナイフ形石器製作時に生じたと考えられるブランディングチップ等も見られ、第3工程の比重が三条黒島と比べて高かったことが予想される。

日吉谷ではナイフ形石器の重量比は郡家田代と比べて低く、ナイフ形石器1点の平均重量では半分に満たないが、原産地から約35km離れた地理的背景を考慮すると、むしろナイフ形石器の組成比が高い点が注目される。また剥片については非カウントの資料を考慮すると、重量比がやや低めである点は検討項目としては不適當であり、むしろ石核の1点あたりの平均重量(約44g)が郡家田代の2倍以上に相当することから見ても、第2・3工程を偏重なく行っていたことが予想されるであろう。

第190図には島嶼部の与島西方⁽⁶²⁾の組成比を示している。これには碎片を含めていないので他とは単純に比較できないが、総体としてナイフ形石器・角錐状石器といった主要器種と剥片(翼状剥片を含む横長剥片)の比率が圧倒的に高いことから、第2工程の初期段階とそこで得られた剥片の製品製作に相当に比重が置かれていたことが予想される。同時に、石核の比率が低いことは第2工程後半段階の遺跡外への持ち出しも考慮される点である。



第190図 与島西方遺跡石器組成

このように剥片やナイフ形石器等主要石器の組成や重量比較すると、遺跡によって剥片剥離作業の内容とその様相にバラツキがあることがわかる。時期差を反映している可能性もあるが、大局的には第2工程のみを行う三条黒島、第2工程初期と第3工程を集中的に行う与島西方、第3工程が主体の郡家田代、第2工程と第3工程を行う日吉谷に区分できよう。

－出土石器の消耗度と石器製作からみた遺跡間関係について－

第2工程を主体的に行う三条黒島の石器ブロックでは、同時に消耗度の著しい角錐状石器や石核も出土している。本文中では、ブランディングチップ等の第3工程で生成される剥片類が認められない点と、石核に対応する白色風化サヌカイトの剥片類が認められない点から、ブロック内に搬入された後に廃棄されたものとしている。

再度説明すると、主要器種はすべて角錐状石器で、ブロック外含めて5点が出土している。ブロックの主要分布域には角錐状石器1点(第30図184)しか含まれない。石核は合計3点である。出土した石核のうち接合資料1に所属する石核(第32図168)は主要分布域から出土するが、他の2点は外榔域で出土している。

角錐状石器は普通サヌカイトを石材とするものが2点(第30図156・3002)、白色風化サヌカイトのものが3点(第30図103・184・3001)ある。形態的には、断面三角形状で稜上調整を施すものが1点(156)あるが、他は断面が台形状を呈し平面形が左右非対称で調整加工が雑な一群である。いずれも基部ないし先端を欠損しており、その内2点(156・3002)は折損面を加工して、器種の温存を図っている。

石核は接合資料1で末尾に接合する残核を除くと、白色風化サヌカイトの石核が2点(第32図153・1001)あるだけである。交互剥離や打面の転移が著しく、最終作業面の幅が3～4cmと小形で、ブロック内で行われた普通サヌカイトによる剥片剥離の内容とは様相が異なっている。これらが同一ブロックで共伴する要因として、普通サヌカイトと白色風化サヌカイトという石材の違いで採用する技法も異なり、石核をどこまで消耗するかにも影響を与えたという石材規制的要因も否定できないが、むしろ「サヌカイト」という同類の岩石を石器製作者がどこまで実質的に区分しうるか疑問であることや、郡家田代遺跡では小形の交互剥離石核が普通サヌカイトにおいても認められること等から、三条黒島の白色風化サヌカイトの小形の石核は、石材的に消耗した姿として把握するのが適当であろう。

このように三条黒島から出土した角錐状石器および石核は、器種や石材としての消耗の

度合いが著しく、その消耗（消費）自体が遺跡内で行われた痕跡が見られないという点が特徴として抽出できる。これらが偶発的に混在した可能性について、完全に否定できる材料を備えている訳ではないが、ブロックとしてのまとまりの良さと、接合資料から窺える一括性の高さから見て、共伴するものと考えてよい。ブロックを形成した集団（製作者）の石材環境を辿れば、普通サヌカイトの石核素材を数個体携帯し、併せて消耗が著しい状態の製品と石核も同時に持ち歩いたことが復元されることになる。

一方で、普通サヌカイトの石核素材はブロック内において第2工程に供されている。接合資料1は一つの盤状剥片を完全に消費しつくしているが、接合資料3は第2工程の初期の段階の資料であり、他も石核がブロック内に遺存しない点からみて、第2工程の前半段階の作業が主として行われたものと考えられる。そして、盤状剥片同志が接合する事例（第50図接合資料1+2）や普通サヌカイトの石材表面の特徴から同一母岩の可能性が高い点、そして第5章の石材分析（P291第61表）においても普通サヌカイトの原産地がすべて国分台遺跡内の白峰に求められる点は、当該ブロックを形成した集団（製作者）が盤状剥片を入手するに当たって、交換等によらず原産地である国分台遺跡に直接赴いて石材を補給した可能性が高いことを示すものであろう。さらに、盤状剥片同志の接合は石材補給後間もない段階に形成されたブロックであることをも想像させる。

ここで消耗した製品が石核と共伴する事情に立ち返ると、常識的にそれらが交換等によって入手されたものではないと考えられるから、ブロックを形成した集団（製作者）は、原産地で入手した盤状剥片とともにこれらを持ち歩いていたと推定できる。そして原産地で盤状剥片を補給した後、当ブロックを形成するまでの間に製品と石核を消耗したと考えると、盤状剥片同志の接合など石材補給後間もない段階に形成されたブロックとした上記の状況と矛盾することになる。したがって消耗した製品と石核は、集団が原産地へ赴く以前に保持していたものを、原産地で盤状剥片を補給した後もしくは温存させ、当該ブロックにたどり着いた段階で廃棄したという想定が、現段階ではもっとも妥当であろう。であれば、廃棄されたと考えられる角錐状石器と石核の一群は、石材欠乏状態における石器の組成および技法の一端を示すものと言える。

原産地の国分台遺跡では、大形のナイフ形石器や角錐状石器などが多数出土することが知られているが、長さ3cm程度で周縁の調整加工が著しく進んだ小形の側縁加工のナイフ形石器⁽⁶³⁾や、サヌカイト以外の石材を用いたナイフ形石器⁽⁶⁴⁾などが少量認められる。これらは、原産地へ赴く直前の段階の石器が新たな製品や素材を確保した段階でその場に

廃棄されたものである可能性も考慮する必要があり、原産地が集団の遊動生活の一部として取り込まれていたことを示すものと考えられる。

三条黒島に近接する郡家田代の石器群の様相と再度比較すると、ブロック内で行われた剥片剥離作業の内容については、三条黒島が第2工程を主体とし、それに対して郡家田代では第2工程の後半と第3工程が主体をなすという相違が見られることはすでに触れた。しかし上記の消耗した製品と石核については、むしろ両遺跡で共通する要素が多い。郡家田代ではナイフ形石器の再加工を示す接合資料が認められ、他にも折損部を加工したナイフ形石器もある。石核については繰り返しになるが、小形の交互剥離横長剥片石核が普遍的である。大形のナイフ形石器が廃棄(?)されている状況は検討を要するが、素材としての石核が決して豊富な状況になかったと推定される原産地へ赴く直前の三条黒島のブロック形成集団(製作者)の状況に類似するものと考えられる。近年、原産地に近い高松市中間町中間東井坪遺跡で出土した瀬戸内技法をほぼ純粋に組成する資料⁽⁶⁵⁾でも、出土数が微少にもかかわらず、調整加工が著しく進んだナイフ形石器が出土している(第194図)ことは、平野部の遺跡では原産地からの距離とは無関係にナイフ形石器の再加工が顕著である共通性が指摘できる。

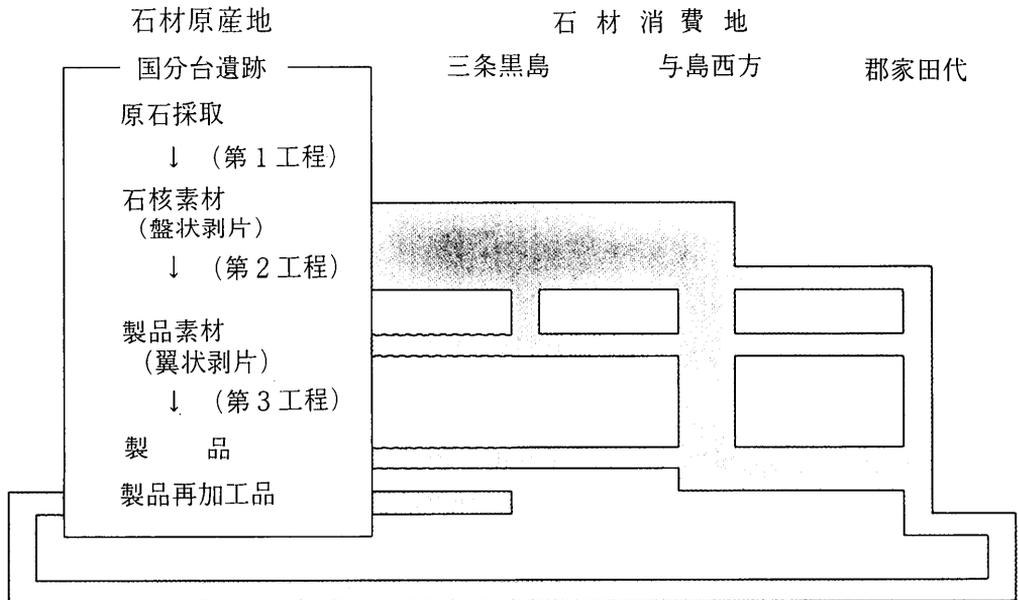
ナイフ形石器の再加工や小型化、あるいは石核の消耗が顕著に認められる点は、石材消費のサイクルを階梯的に理解する場合、石材の消費がより進んだ段階の特徴として抽出することが可能であろう。徳島県の日吉谷遺跡と椎ヶ丸グループの比較でも明らかのように、五色台産サヌカイトの分布圏ではチャートなどの他の石材への依存度が低く、原産地から30~40km離れた地域においてもサヌカイトを石材とする国府系石器群の石材消費サイクルが展開していたことが明らかにされている⁽⁶⁶⁾。原産地から5~15kmという至近距離の遺跡においても同様のサイクルを指摘できる点は、五色台産サヌカイトの分布が同質的集団の回帰的遊動生活によって形成された領域圏であったことを示すものと考えられる。

備讃瀬戸島嶼部に立地する羽佐島や与島西方などの国府系石器群を出土する遺跡では、石器組成中におけるナイフ形石器の比率が高く、剥片に対する石核の出土数が他の平野部の遺跡に比べて低い(第190図)。これは第2工程前半と第3工程に主力が注がれたことを示すものである。ナイフ形石器の中で折損したものが多いが、それらは第3工程の調整加工の途上で折損したもので大部分が占められており、平野部に多く見られたような折損部をさらに加工して小型化するナイフ形石器はほとんど見ることがない。すなわち、島嶼部の出土遺物の検討の結果明らかにされたように、特定の形態・法量を備えたナイフ形石器

を製作する指向が著しく、ナイフ形石器を狩猟具とする前提にするならば、眼下に控えた備讃瀬戸の平原を狩猟場とする見張り場としての立地環境上の推定^(補注2)と矛盾しない。そして石材消費サイクルの観点から、原産地での石材補給の段階により近いものと言えるであろう。このように島嶼部と原産地との関係は、その背景として道具の生産・入手と生業活動の連鎖が想定される。

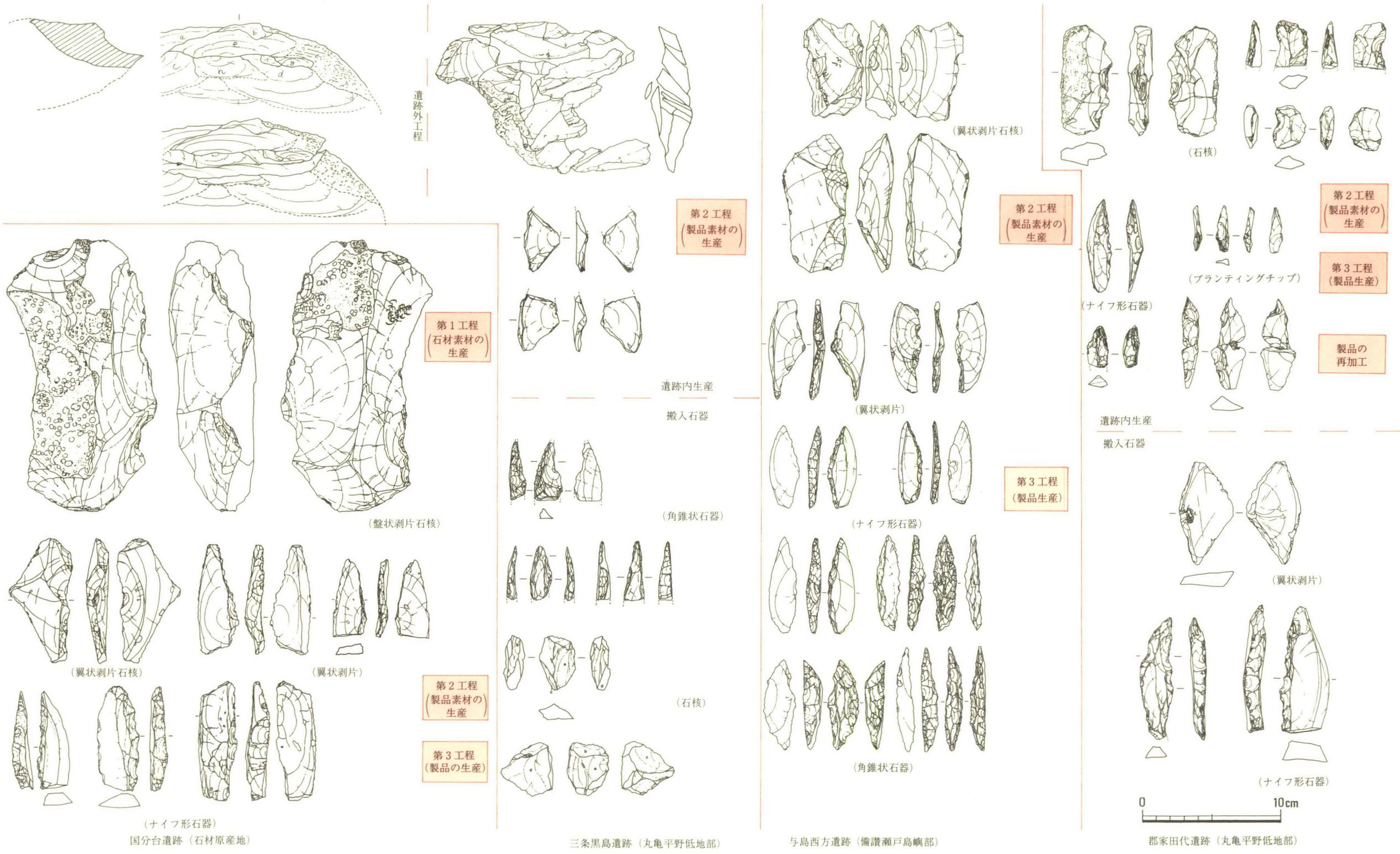
平野部の遺跡は島嶼部とは対照的に、消耗した石核や調整加工が進んだナイフ形石器が多く存在し、島嶼部ほどの一定形態・法量のナイフ形石器に依拠した生業活動を想定することは難しい。立地的に見て個々の生態環境に適応した多様な生業活動が背景として考えられる。礫群との関係が稀薄である点や石器分布のあり方や組成が遺跡によって異なるなど、検討すべき課題が残るものの、大別すると原産地・(ナイフ形石器の消費地としての)島嶼部・平野部を三極として、回帰的生業活動と関わる石材消費の階梯を理解することができる。

(補注2) 安川豊史「中四国地方の遺跡立地」『瀬戸内技法とその時代』中・四国旧石器文化談話会1994



※網線の太さは各工程毎の石器数量を概略的に示したものである

第191図 五色台産サヌカイトの石材消費模式図



第192図 石材消費各階梯の具体相

このようにみると、三条黒島のブロックが原産地で石材を補給して間もない段階で形成された状況は、階梯的には原産地と島嶼部との間に位置することになる。原産地と備讃瀬戸島嶼部の連鎖とは一見矛盾する状況であるが、一時的な停留地の様相を示す点では、遠隔のナイフ形石器消費地への移動途上である可能性も考慮する必要がある。徳島県吉野川流域や燧灘沿岸部等の30～50km離れたナイフ形石器消費地へ行き着く過程で、保有する石器や石材のスリム化を図るために第2工程前半のみを一部の石材に施したものと解釈するには、やや材料不足であり、今後の検討を要するが、石材消費の階梯的理解を模式的に示せば第191図のようになる。第192図では原産地・ナイフ形石器消費地・平野部の3極相に、中継地的様相をもつ三条黒島を仮に付け加えて石器様相の相違を示したものである。二上山産サヌカイト分布圏で指摘される石器製作の「異所展開」システム⁽⁶⁷⁾は、五色台産サヌカイト分布圏においても同様に、備讃瀬戸島嶼部を代表とするナイフ形石器消費地を介して、より強固に連鎖し、機能したものと考えられる⁽⁶⁸⁾。三条黒島遺跡における多数の接合資料と消耗した製品・石核との共伴は、このようなシステムの短時的な一断面と考えられる。

3 三条黒島遺跡接合資料にみる剥片剥離技術と編年的位置

－接合資料の類型－

主要分布域において盛んに行われた剥片剥離作業は、剥片および接合資料の観察により概ね次の2つのグループに分けることが可能である。

- 1) 盤状剥片を石核とし、作業面の補正や山形打面作出などの調整を適宜施しながら、底面を取り込んだ石核幅一杯の横長剥片を一定方向から連続あるいは断続的に剥離しようと指向する一群 (接合資料1・3)
- 2) 長さ7～9cmで断面三角形の棒状素材を石核として、平坦な素材面上を横方向に打点をずらせながら漸次厚みを減少させ、残核の利用を図ろうとする一群 (接合資料4・5)

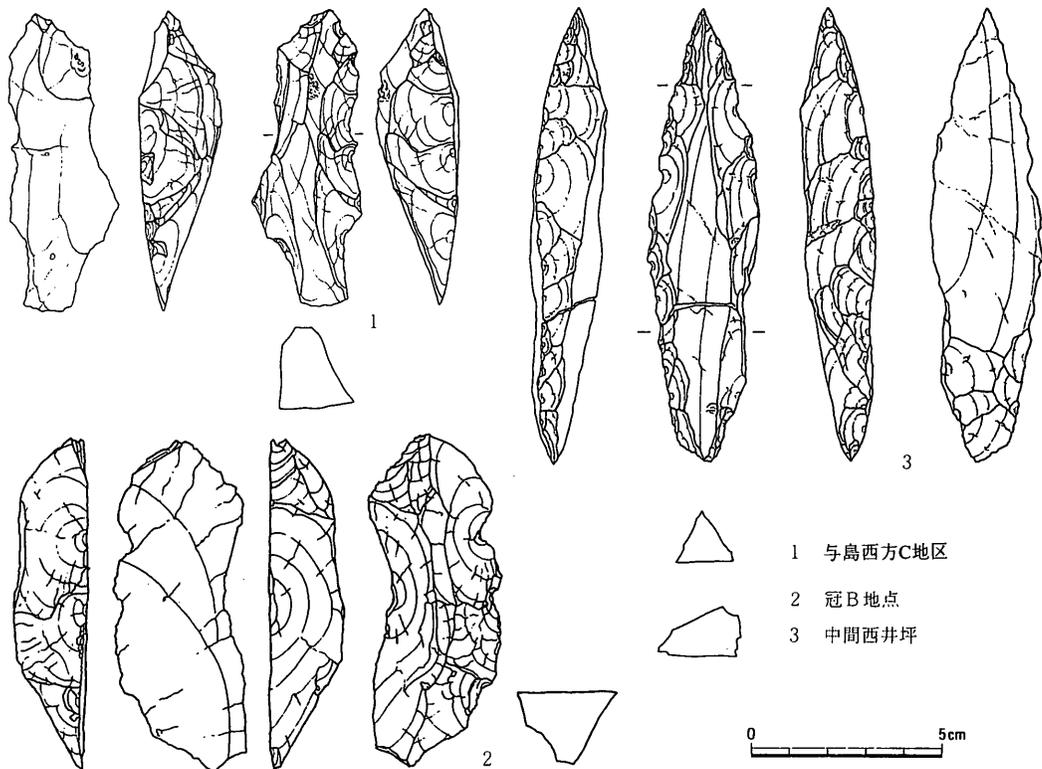
このうち類型1は広義の瀬戸内技法第2工程として位置づけられる。剥片は、調整剥片として1類、2類の一部、3類が、また目的剥片として4類が伴う。このグループの目的は翼状剥片の獲得にあったことは間違いなく、製品としての国府型ナイフ形石器の出土は

なかったが、指向の延長として当然製作者の意図に組み込まれていたものと考えてよい。ただ、明確なブランディングチップや二次加工に伴う碎片が少なく、翼状剥片から国府型ナイフ形石器を作る第3工程はブロック内では行われていない。

典型的な瀬戸内技法とは異なる点は、まず第1工程にある。第1工程はそれに伴う剥片類がないことから、石材原産地で行われた可能性が高いが、生産される盤状剥片は打面部が狭く、末尾に向かって扇状に開く平面形を有しており、近畿地方の二上山北麓遺跡群にみられる盤状剥片⁽⁶⁹⁾とは形態が異なっている。打点を左右に振れながら作業を進めることがその要因であろう。これは、石理が顕著な五色台産サヌカイトに対応した第1工程の具体的様相であり、第1工程の多様性を示すものと考えられる。一方で、素材形状が整っていないために第2工程で石核調整等にかなりの無駄が見られる点も事実で、典型的な瀬戸内技法に示される合理的な姿とは理論上は矛盾する。これをもって、瀬戸内技法とは認定しがたいとする見方もあろう。しかし二上山産サヌカイトの塊石を母岩とする大阪府翠鳥園遺跡の接合資料⁽⁷⁰⁾では瀬戸内技法第1工程の多様性が同様に顕著であり、広義の瀬戸内技法として位置づける点には問題ないとする。

第2工程においては、打面調整の緻密さにおいて典型的な瀬戸内技法とは異なっている。当遺跡例は作業面側から左右1回ずつラフに行うものが多く、微細な調整を行うものとは一線を画する必要がある。これを広義の瀬戸内技法とする理由は、打面調整と目的打撃が明確に区分できる点と、打面調整によって生じた剥片が一部の例外（接合資料3の打面調整剥片6など）を除いて原則的にブロック内に遺存する点である。とはいえ、打面と底面が固定されない交互・並列剥離による横長剥片剥離技術⁽⁷¹⁾と表面的にはきわめて近縁である。事実、伴出する消耗度の高い白色風化サヌカイトの石核は、最終的に交互剥離状となって廃棄されており、石材欠乏時には容易に技法を転換し得る柔軟性も同時に持ち合わせていることが想定される。また、これについては石材を補給して間もない段階に低地部で行われた剥片剥離であることを考慮し、ラフさを留め、無駄を生じながらも大型の製品素材を獲得したと予想される原産地的様相に近似するとみることが可能であるし、また瀬戸内技法自体が崩れた段階として、典型的な瀬戸内技法と区別して編年的に把握することも不可能ではない。しかしいずれも解釈的な部分であって、広義の瀬戸内技法としての位置づけに問題はないであろう。

類型2は瀬戸内技法とは明らかに異なる技術で、剥片2類を多産する。これ自体が石核調整にすぎず、技法として抽出するに相当しない可能性もあるが、瀬戸内技法とは異なる



第193図 剥片剥離技術類型2の類例

一群が存在する点は重要であろう。接合資料4の例は、断面三角形の器種を製作する初期工程と考えられ、ナイフ形石器の調整加工とは異質であり、別の器種を想定する必要がある。角錐状石器がもっとも有力な候補として考えられよう。

第193図に冠遺跡B地点⁽⁷²⁾、備讃瀬戸遺跡群、中間西井坪遺跡⁽⁷³⁾の資料を提示している。これらは、石核素材、剥片素材があり、断面三角形ないし菱形の素材の周縁部をラフに加工するものである。これらが3を除いて角錐状石器の初期工程であるかどうか、十分な検討が必要であるが、三条黒島の接合資料4から復元される石核は、このような形態のものに対比できるであろう。

以上の剥片剥離技術の2つの類型は、使用された石材、あるいは石器分布の上でも異なるところは認められない。類型2を角錐状石器の製品加工とすれば、当ブロック内で最終的な製品加工まで到達していない可能性が高いという意味においても、共通性がある。瀬戸内技法の第2工程と角錐状石器の可能性が高い製品製作の初期工程が、平行して同列的に単純ブロックで共存すると考えてよいであろう。

—編年的位置について—

火山灰分析の結果、当ブロックがAT降灰以後の所産であることは明かである。主要器種としてAT以後に出現したとされる角錐状石器で占められている点はそれを支持する。

角錐状石器は中四国・近畿地方では兵庫県板井寺ヶ谷遺跡上層で22,700~20,400BPという年代⁽⁷⁴⁾が与えられており、また、蒜山原遺跡群や南花田遺跡の出土例から約17,000年前ごろまでは存続していたものといわれる⁽⁷⁵⁾。また、瀬戸内技法を主体とする二上山北麓における国府石器群とは一部で重複することが指摘され⁽⁷⁶⁾、一方で、瀬戸内技法自体は恩原遺跡S文化層⁽⁷⁷⁾や蒜山原遺跡群笹畝遺跡で認められることから、同様に長期にわたって存続したと考えられる。したがって、当ブロックの形成時期は22,700~17,000年前までの5,700年間の内の一時期である。

上記期間のうち、どこに相当するかは、当ブロック接合資料の瀬戸内技法に関する技術的側面における評価以外に良好な材料はない。また角錐状石器については、出土した5点が多様な形態をもつことから、時期決定の材料にはなりにくい。したがってこの時間幅の中で編年的位置づけを行うことは、堆積条件的制約もあって困難と言わざるを得ない。

とはいえ、角錐状石器の西方からの「嵌入」が一時期を画す⁽⁷⁸⁾ことを前提とすれば、それ以前の石器群を純粋に把握することができるかどうか、西方からの「嵌入」がどれほどの技術体系で流入したものか、そして「嵌入」後に遺跡間関係を含めた技術体系がどのように変容するかについて、今後十分な追究を行うことで、当ブロックの剥片剥離技術の時間的位置も定まってくる可能性があるだろう。

絹川一徳氏は、中国四国地方のAT後の石器群を概括的に細分する中で、角錐状石器嵌入以前の瀬戸内技法を主体とする国府系石器群を1段階として日吉谷資料に求め、その後角錐状石器の「嵌入」を2段階として中間西井坪を挙げている。その後続く3段階の当該地域の資料提示はないが、瀬戸内技法が変容する段階として規定する⁽⁷⁹⁾。これからすると、三条黒島資料は2か3段階に位置づけられることになるだろう。

瀬戸内技法を主体とする国府系石器群は、島嶼部の遺跡群においては長期間の石器ブロックの累積である関係上、純粋なセットを抽出することが困難であるが、大局的に見ると羽佐島遺跡におけるナイフ形石器には典型的な国府型ナイフ形石器が多くみられるようである。また平野部の遺跡では、出土点数が少ないものの中間東井坪⁽⁸⁰⁾や金蔵寺下所⁽⁸¹⁾などに瀬戸内技法の比較的純粋な姿を見ることができ、これらは翼状剥片石核を交互剥離状に至るまで消耗せず、ある一定の大きさを剥片剥離が停止し、一部は削器に転用するなどの